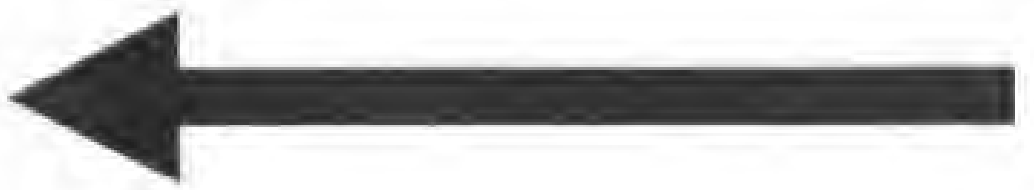
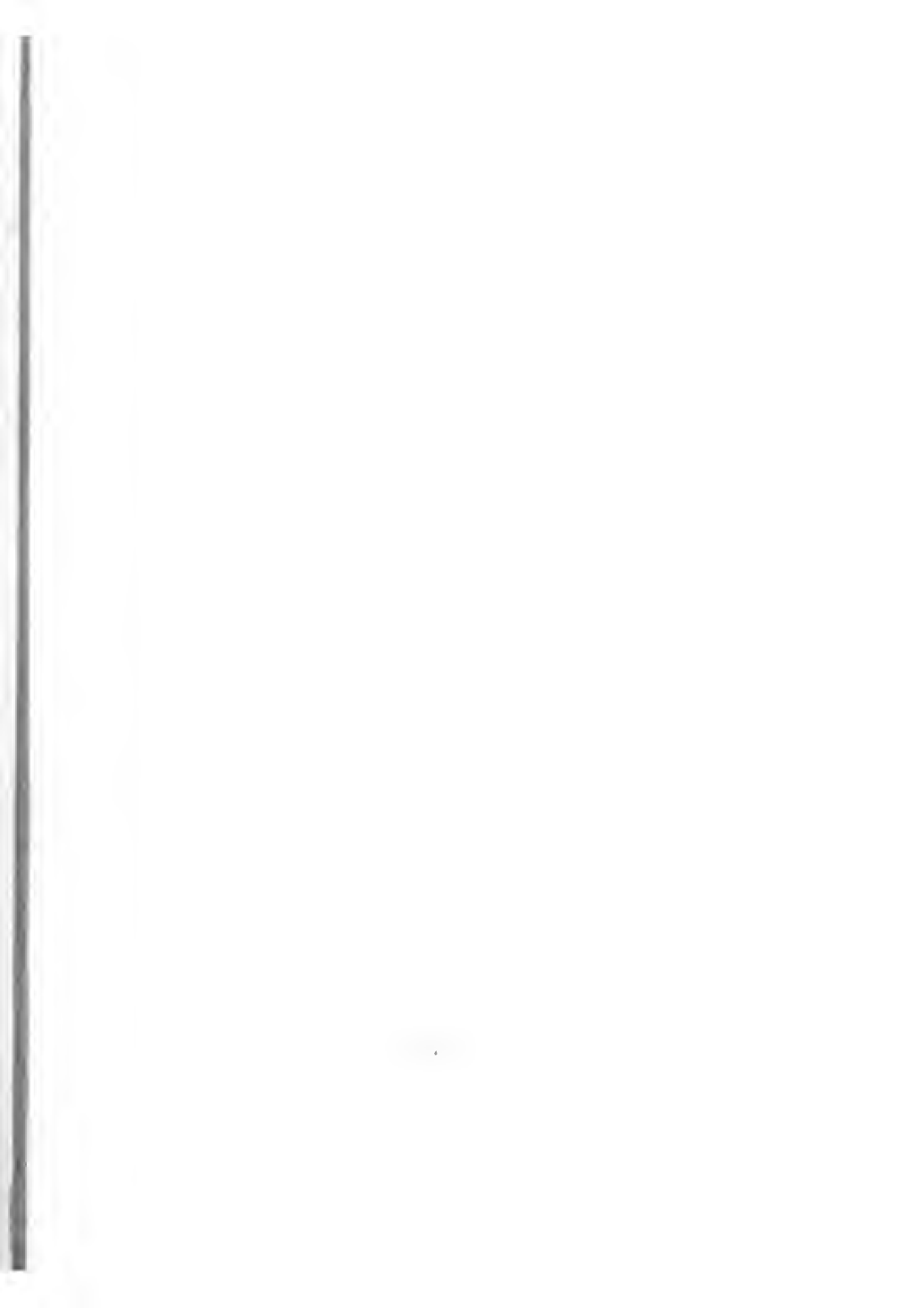


始





ΔΙΑΛΟΓΟΙ

文學博士 松本亦太郎
木村鷹太郎 合譯 卷一

プラトーン全集

東京

合資會社 富山房發兌





小川一眞製

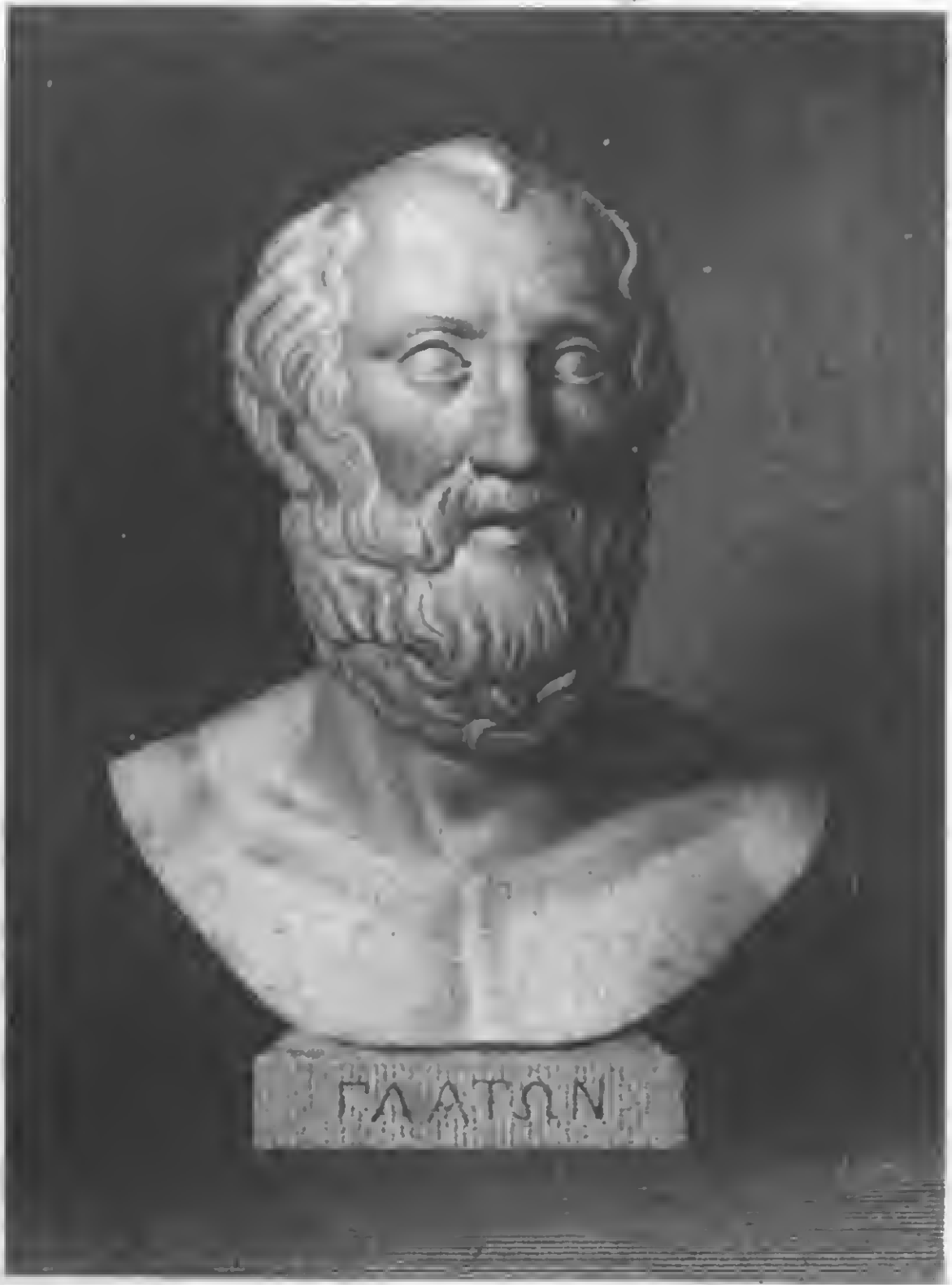
ス イ テ ラ ク ト ツ





若きアノトノ





小川一眞製

シ リ ト リ プ



序

「汝の乗車は之れを星に鈎繋せよ」とは之れエマーソンの言なり。『源泉滾々晝夜を舍かず科に盈ちて後に進み四海に至る、本あるものは此くの如し』とは之れ孟子の言なり。乃ち之れ理想の高遠なるべきを言ひ、又修養蘊蓄に對して源頭に立つ者の感に非ずや。我國今や精神界に物質界に大に興起せんことをせり。必ずや又た高遠なる理想を抱負を有せざる可からず。此に於てか人をして大なる理想を仰がしむる所の大言語を要し、又た思想及び感情の大源泉を要す。理想なくんば力なく源泉なくんば乾涸のみ。又た何等の思想も行爲も生ずることあらざるべし。

我國の思想界及び文學界に於いて高遠なる理想、雄大なる感

情なきや久しと云ふべし。之れを以つて日に月に刊行さるゝ所の所謂文學書なるものは、皆な之れ片々たる小冊子の徒らに體裁を作り表裝を美にして俗眼を瞞着し、眞理の如きは毫も之れを心とすするなく、たゞ淺薄なる小思想と小感情とを臚列せるのみにして、高揚せるものあるを見ず。或は然らざれば學を賣り識を銜ふ所の拔萃的の書物なるか、或は名もなく見識もなき外國の蜂蟻的文學書、哲學書等の翻譯等にして、其淺薄にして輕浮且つ外觀的なること、宛もグレシアに於けるソークラテース及びプラトーンの當時、一方には修辭家、文章家、吟誦家等の徒が、眞理及び哲學に無知にして、天地人事に對して皮想の觀に満足し、文章辭句を之れ事とし、又た一方には「ソフィスト」の徒が、たゞ金錢虛榮を目的と爲し、淺薄なる哲學を以つて、獨り自ら尊大にし、以つて思想界に跳梁せるが如きなり。此くの如くにして如

何でか大文學を生じ、大行爲を喚起するここを得んや。

此くの如き時に際し、吾人の想ふ所の人物は果して如何なる者なるべきぞ。曰く、ソークラテースなり、プラトーンなり。ソークラテース及びプラトーンは嘗にグレシアの徳義及び哲學に有功なりしのみならず、又た之れ世界の思想及び道義に至大なる勢力を有したる人物たるなり。

實にソークラテース及びプラトーンの思想が歐米諸國の偉人に、感化を及ぼしたるや甚だ大なるものにして、苟も精神界に偉大なりし人物は、一人としてプラトーンの思想の洗禮を受けざりし者なしと云ふべく、彼の世界を風靡する所の耶蘇教の如きすら、其經典の高尙なる部分及び美なる部分は、之れをプラトーンより得たりと云ふは、考證學者の一定せる説なりとす。プラトーンの感化力の大なる見るべきなり。宜なり、プラトー

序
ン以後茲に二千幾百年、其書は「學者」の「經典」の位置にあるや。若し宗教及び偉人等は世の光なりとせば、プラトーンは其等の光に光を與ふるものにして、夫れ、光の光と謂ふべきか。

それ然り。此くの如きの感化力を有せる所の大文字は、規模狭小、理想卑近なる我國今日の思想界及び文學界の規模を大にし、人間の理想を高遠ならしむる所の目的に向つては、其必要の急なるものとなす。特にソークラテース及びプラトーンが青年英才を得て之れを教育し、以つて國家有益の人才たらしめんさせしが如く、吾人は又た青年英才に望を屬し、青年を愛したる所のソークラテース及びプラトーンの教育法、思想、及び感情等を我國のものに爲すは國家百年の大計を爲すものと必ず力むべきこととなす。かの眞理を愛し、善を愛し、美を愛する所の「プラトーン」の愛なるものは、國民の品位を高め、青年を教育するに

於て、最も適當なるものに非ずや。

吾人は常に社會、道德の點のみより之れを云ふに非ずして、又た歐米の思想を研究するに當り、規模を宏大にし、根本的に本源の書に就いて之れを爲すの必要の點より之れを云ふ者なり。

實にプラトーンは一個の小世界にして、一切のもの殆どプラトーン中に存せざるなしと云ふも過言に非ず。エマーソンが言を極めてプラトーンを推薦したるが如く、後代の學者等の思考する所、著述する所、論究する所、皆な盡くプラトーン中に存し、彼等殆どプラトーン以外に出づることなく、プラトーンは人間の創見を獨占したるものと謂ふべく、人類の光榮たると同時に、又た人類の耻辱なりと謂ふべし。宜なり、マホメットの徒オーマルがアレキサンドリアを陥れし時、其書庫を焼き拂ふに當り、獨りプラトーンの書のみは之れを保存せしめて、一切の書は之れ

を焼き棄つべし、其等の價値は凡てプラトーンの書中に存す」と云ひしこの傳説あるや。

蓋國家は外國に隸屬すべからざるものなるが如く、學問(及び國民修學の方法)も亦永久外國語に隸屬すべきものに非ずして、苟も世界に於ける重要なる書籍、有益なるもの等は、盡く之れを我國語に翻譯し、之れを國家國民のものとなし、以つて研究を外國語より獨立せしめ、以て自國創出の資となさざる可からず。

今日我國の如き過渡の時代及び外國より學ぶ事多き時代に在つては、素より各自外國語は必要なり。雖國民の哲學力及び研究力は、必ずしも外國語と同一に非ずして、外國語を知らざる者と雖、哲學力を有せるものは別に之れ有るを以つて、此くの如きの人に向つては、外國語に依らずとも、自國語を以つてするのみにして、十分古來諸外國の大思想の書を読むを得るの道を開か

ざる可からざるなり。之れ、幸にして多少なりとも外國語を知り、後生に對して一日の長ある者の當に爲すべきの義務にして、又た我國の學問をして、外國語に隸屬せる憫然なる状態より、獨立せしむるの運動に貢獻するものと謂ふべし。而して歐米諸國に在つて古典として存在し、千古不朽の書物の如きは、之れ其不朽の價值あるものと謂ふべく、プラトーンの如きは古典中の最も重要なものにして、又た最も價值あるものとなす。而して此くの如きは我國民が我國語を以つて讀み得る所のものとするの要や急ならずとせず。

且つ吾人の希望する所は、我國民が單にかの『哲學史』或は諸家の『梗概』或は『大意』等の如き、規模狹小にして、片々たる姑息の書物に満足し、以つて研究し得たりとするが如きの精神を去り、此くの如きは土芥視し、以つて直に大思想の源頭より研究するの氣

慨を有せんこととなす。

故に見よ、歐洲諸國、苟も文明國たるものは、必ずプラトーンの翻譯あらざるなく、皆な之れを國民文學として有せり。然るに我國已に文明國を以つて居り、又た世界に於いて一頭地を抜き、んでずんば止まざらんことするの奮興を有せるに關せず、未だ此大思想を國民文學として有せざるは獨り何ぞや。實に之れ世界に對して國家の一大耻辱と謂はざる可からず。

此くて、直接に國民智徳進歩の點より、プラトーンの書の非常なる思想の價值あるの點より、國民の學問は外國語の隸屬より獨立せしめざる可からずことするの點より、諸外國の古典を我國、國語の有とするの要あるの點より、根本的に源頭より研究せしめんとするの點より、又た日本國家の體面より、本書翻譯の必要の感を深くし、敢て此事を企つるに至れり。

吾人の翻譯に使用したる原書はベンジャミン・ジョウエット (B. Jowett) 氏の英譯三版なり。素より重譯の嫌なきに非ず。雖、ジョウエット氏の英譯は諸翻譯中最も正確なりとの好評あるものにして、殊に諸外國及び英語諸翻譯の後に、出でたるものなるを以つて、最も新たなること、又た最も正確なることは十分之れを認むべく、且つ版を重ねること三度、其間氏自ら訂正を加へ、氏の友人及び門弟子は或はグレシア原書と讀み合はせを爲し、又た譯語等に注意を與へ、以つて今日第三版の完全なる翻譯を得たるものなり。(ジョウエット氏は一千八百十七年英京ロンドンに生る。有名なる古典學者にして、オックスフォード大學の勅任教授たり、兼ねて又たパリオル、カレッジ (Balliol) の校長たり。一千八百八十二年オックスフォード大學副總長に任ぜられ、一千八百六十年、耶蘇教々會に取つて異端なりとの非難を被むり、審問の末

大學を免ぜられ、一千八百八十三年十月一日卒す。此くて吾人は
シロウエット氏英譯第三版を本とし、第一版、第二版を参照し、此他
ケリー(Cary)及びバージス(Burges)等の英譯を参考せり。

而して吾人はこゝに一言プラトーンに對する世人の誤解を
正さぐる可からざるもの二ありとなす。乃ち一はプラトーン
は大哲學者なりこの理由を以つて、彼れの書は單に高遠にして、
難解の哲學のみ、抽象無形の言語のみを想像するを之れなり。
又た一は之れに反して、プラトーンの、美を謂ひ、愛を謂へる等よ
り想像して、彼れは詩人哲學者なり、其書は空想を逞うし、理想の、
夢の如く幻の如く、颯揚たるものあるべしとなすを之れなり。
此兩者は共に誤解に屬せるものにして、プラトーンは決して無
味乾燥の哲學者に非ずして、其方法は問答法を用ゐ、著書は大抵
演劇の脚本の如く仕組み、或は人物を描き、場所を寫し、具體的の

人物を生動せしめて種々の問題に就いて語る。其内快活なるあり、悲壯なるあり、滑稽なるあり、而して其精神や眞面目なり。以つて直ちに教育に施さすべく、以つて人物養成の寶典となすべく、又た以つて慰樂の書となすを得べし。然りと雖、其愉快なる點よりして、直に以つて愉快の書なりとし、所謂輕文學、軟文學の如き、淺薄空想の小説の如きものなりと思ふは、又た一層大なる誤解となす。プラトーンの書たこひ愉快なるものありと雖、又た之れ哲學、眞理を主旨とし、眞理の上に善美を建立せんとするものにして、決して世間の小説家文章家等の如き、單に娛樂を目的とせるものに非ざることを知らざる可からず。故に其思想の複雑なるに及びては、プラトーンは非常なる抽象の言語を用ゐ、彼れ其嚴重なる論理を使用するに當つては、十分なる注意なくしては決して之れを了解すること能はざるなり。又た彼

れ談話進行の途に於て、或は伏線を設けて、讀者をして始めは何の意たるやをも知るここ能はざらしむるここありと雖、勉強と忍耐とを以つて其終りに至るに及び、こゝに其意味を發見して、彼れの思想の周密なる妙味を感ずるここあり。故に此兩種の誤解は、先づ之れを正し置かざる可からざるなり。

プラトーンの書の性質此くの如し。故に此書は單に哲學者の階級のみの書に非ずして、又た文學、政治、教育、社會等に關する學問の書たるなり。又た啻に是等學者の階級に限らるべきに非ずして、普通一般老若男女に對しても利益と興味とあるの書とす。故に吾人の之れを翻譯するに當つても、之れを哲學者的の書物たらしめず、又た學者的の書物たらしめず、譯語は難解の術語風のもの避け、生硬なる『○○的』の如き文字は成らん限り之れを用ゐず、専ら通俗を旨とし、學問の書たると同時に、一般

國民の高潔なる「読み物」ごなさんこの方針を取りしなり。且つ
本書は對話に仕組みあるを以つて、單に議論學說を忠實に傳ふ
ご云ふのみを以つて足れりごせず、又た對話人物の性格風姿を
現はして、之れを活動せしめ、又た其場及び四邊の狀況をも寫さ
ざる可からざるなり。之れを以つて本書の翻譯は自ら又た他
の學術のみを記述せるものと翻譯ごは趣を異にせざる可から
ずして、之れ又た困難のごごにあらざごせず。而して吾人は之
れを能くせりご云はずご雖、只だ此精神を以つて此れに臨みた
りご云ふのみ。

故に吾人は、本書は單に哲學者の書なるのみごなすごごなく、
又た一般の教育家、文學者、政治家、宗教家等を始めごして、青年男
女の學生は勿論、又た家庭の高潔なる「読み物」ごして人々の手に
せんごごを希望す。

明治三十六年十月五日

東京に於て

譯

者

識

例言

○プラトーンの高潔なる理想、強大なる道義感、眞善美の愛——是等の大精神に於ては、天下何人かプラトーンに一致せざるものあらん。然りと雖、其學說及び主義に於ては、譯者必ずしも徹頭徹尾プラトーンと一致せるものに非ずして、こは別種の問題に屬せることとなす。

○本書諸篇の解題、總論及び鼈頭見出し等は、大體ジウエツト氏の其まゝを用ゐたりと雖、又た其繁を省き、譯者の意見に由つて必要とする所を加へ、或は改めし所少しとせす。

○プラトーンPlatonの書は非常に廣大なる範圍の知識を有し、歴史上の事、傳説、神話及び故事等の本書中に現はること夥しく、是等の事を明かにせざる時は或はプラトーンPlatonの意の存する所を解するに短なることあるべく、又た其妙味を減することあるべし。故に吾人は我國初學の讀者の爲め特に卷末に注釋を附加せり。又た多少グレシアGræciaに關する事物の知識に補ふ所あるべく、此點に於て本譯書は、我邦人に取つては英譯原書よりも遙かに便益なるものなりと信す。本文中右側に小き

星標・を附しある部分は卷末に注釋せるものなり。

○地名人名及び其他の固有名詞の讀み方は、盡くグレシア古代の者となせり。之れグレシア古代の發音の最も正確なるに近きものなりと信ず。(文部省委員等の取り調べたる地名人名稱呼の如きは極めて不完全なるのみに非ず、又た標準甚だ漠然、且つ誤謬少なからず、故に吾人は之れを採用すること能はざるなり。)

○ブラトーンの書を讀むに當つては先づ多少ソークラテースの傳を知るを要す、故に余は卷頭に『ソークラテースの小傳』を叙し、併せて『ブラトーンの小傳』及び『ブラトーンの著書』を附せり。

○索引は此くの如き書物には是非とも無かる可からざるものなりと雖、全部完成の上ならでは能はざるを以つて、假りに毎卷末に詳細目次を附し、以つて暫く索引に代ふ。

○『ファイドーン』、『宴會』諸篇に親密なる關係を有し、且つブラトーン諸篇中の最も美に富める所の『ファイドロス』篇は之れを第一卷中に收めんとせしと雖、分冊紙數の都合に由つて、第二卷に繰り下げざるを得ざりしは譯者の悲しむ所なり。

プラトーン全集第一卷目次



ソークラテース肖像

若きプラトーン肖像

プラトーン肖像

序文

ソークラテース及びプラトーン小傳及びプラトーンの著書

ハルミデース

解題

ハルミデース

リュシス

解題

リュシス

ラッヘース



三

九

七九

八五

解題……………一四七

ラッヘース……………一五三

プロータゴラス

解題……………二一七

プロータゴラス……………二二七

エウチュデーモス

解題……………三五九

エウチュデーモス……………三七一

イオーン

解題……………四七九

イオーン……………四八五

メノーレン

解題……………五二一

メノーレン……………五三一

エウチュフローン

解題……………六二一

エウチュフローン……………六二九

辯證

解題……………六七五

辯證……………六八九

クリトーン

解題……………七五五

クリトーン……………七六一

ファイドーン

解題……………七九五

ファイドーン……………八一五

宴會

解題……………九七七

宴會……………一〇〇三

附錄

注釋

固有名詞原字對照

第一卷詳細目次

第一卷各篇の大要

ハルミデース

ソークラテース美少年ハルミデース等と節制を論じ、精神と身體との關係を研究す。

リュシス

ソークラテース美少年リュシス等と友情を論じ、哲學的に其の基礎を研究す。

ラッヘース

若きソークラテース、當時の將軍ラッヘース、及び海軍に有功なりし將軍メレーシアス等と勇氣を論じ、兩將軍をして勇氣に關する智識の無きことを自白せしめ、尙ほ其の研究に進む。以上三篇はプラトーンの初期の作なるが如し、又何れも結論に達せざる對話篇なり。

プロロータゴラス

是れ當時第一等の「ソフィスト」の大家プロロータゴラス先生がアテーナイ市に巡回講義に來れるを、ソークラテース訪問して教育、徳義、政治等種々の事を論じ、若きソ

ソクラテース、遂に此大先生を論倒したるを記せるものなり。

エウナデーモス

エウナデーモス兄弟の詭辯學者アテーナイ市に來る、ソクラテース偶然相逢ひ、外部溫和尊敬の言語を以て内部に冷笑諷刺を含ませ、巧に兩兄弟の詭辯を擲漁し、又彼の武器たる詭辯を以て彼れの詭辯を突倒せる、其目的は眞面目にして滑稽に充ちたる對話篇なり。

イオーン

ソクラテース美衣を著飾れる史詩吟誦家イオーンに逢ひ、吟誦術を論じ、詩人を論じ、終りに詩入吟誦家の無智なることを指示せる、愉快にして趣味ある對話篇なり。

メノーン

貴公子メノーン、ソクラテースに問うて曰く「徳義は教へられ得べきものなるか」と、之れに答ふるは此篇の目的なり、又靈魂不死、前世記憶説も本篇中に存し、プラトンの著書中重要なるものの一なり。

エウナエフローン

ソークラテース不敬神罪を以て訴へられて法廷に至る、時に殺人罪を以て父を訴へたる所のエウチプローンなるものと會し、其時の至るを待つ間、敬神不敬神の性質を研究するものなり。

辯 證

ソークラテース不敬神罪と、青年を腐敗する者なりとの罪名を以て訴へられて、法廷に出でて自己の無罪を辯證するも、遂に投票多数決にて死刑を宣告せられ、而も尙ほ辯證演説及び死刑覺悟の演説を爲し、正義、德義、青年の教育、國家の愛、人格の威儀等を論せる崇高偉大の悲劇なり、ソークラテース一生の心事行事は實に本篇中に縮寫せられて存す。

クリトーン

ソークラテース獄に投せられ、死刑の前日となれり、老友クリトーン來りて脱獄を勸むるも、ソークラテース國民の義務、國法の重んずべきを論じて、脱獄の勸誘を拒絶す。

ファイドーン

死刑當日ソークラテース獄中に諸友人と靈魂不死を論じ、時來りて自己の妻子諸

友人等と訣別し、毒杯を仰ぎて死する臨終の光景を描ける嚴肅なるものなり。ブ
トーンの觀念論、未來世界の記事等本篇中に存す。ソークラテースの言行及びブラ
トーンの學說を知らんとするには重要なる篇なり。

宴會

是れアガトーンの美文競争一等の祝宴。酒は好むもの、隨意となしたる宴會の席
上、人々順次の廻はし藝として其題を「愛の神の讚美」演説となす。男女の愛、朋友の愛
美少年の愛に就いて各人其の形容を語り、其の哲學を論じ、最後にソークラテース
の順となりて、愛と名譽と生殖的永生との哲理より、進みて高尚なる美の愛、真理の
愛、理想の愛に及ぶ。當日の來會者には文章家あり、醫師あり、滑稽先生あり、又伶俐強
意決行的の美少年アルキピアデース等ありて、和樂にして且つ壯快、而も高尚優美
の趣を存す。實に是れ理想の宴會なり。

ソークラテース小傳

プラトーン小傳

プラトーンの著書



ソークラテース 及び

プラトーン 小傳 及び

プラトーンの 著書

一 ソークラテース小傳

人皆ソークラテースの聖哲たるを知る、然りと雖ソークラテースの如何なる人にして、如何なる事を爲し、如何なる事を教へ又如何なる死を遂げしやに至りては、知る者甚少しとなす。然るに世人はソークラテースを以て道德、知識と同一なりとして之を識れり。吾人は今茲にソークラテースの如何なる人にして、如何なる事を爲し、如何なることを教へ、又如何なる死を遂げしやを記し、以てソークラテースのソークラテースたる實を明にせんと欲す。されども余はソークラテースの學説と其性行とを分離して叙述すること能はざるなり、何となればソークラテースの一生は其哲學にて、其哲學は其一生たり、而して哲學に生き哲學に死せしを以てなり。

ソークラテースの事を知らんとするに當り、其の本原的の書はソークラテースの門人たるプラト

ーンの著なる『對話篇』と、キセノフオーンの著なる『メモラピリア』との二書あり。然りと雖此兩人各其趣を異にし、プラトーンはソークラテースを以て思想に偏したる理想的の人物となし、キセノフオーンは之を平民的の道德家の如くなせり。吾人の見る所を以てすれば、プラトーンのソークラテースは眞のソークラテースに非ずして、プラトーン自家の理想に其師の名稱を與へたるものにして、其眞を得たるの點に於てはキセノフオーンの方然るべしとなす。然りと雖吾人はプラトーンの書を以て盡く眞に非ずとする者に非ず。元來キセノフオーンは歴史家にして哲學家に非ざるを以て、或はソークラテースを解するに十分ならざるものあり、爲めにキセノフオーンの記せる所の外にもソークラテースあるは否む可からざるなり。されどもキセノフオーンは歴史家なり、眞實を記するを以て事となす、プラトーン假令哲學者なりと雖歴史家に非ず、事實よりも理想を重んず。是を以て吾人はソークラテースを論ずるに當り、キセノフオーンの著書を以て主となし、プラトーンの著書を以て客とせば、或は誤りなきに近からんか。余は此兩書及び其他の書物を參考して聊か此大聖の性行及び學問等を記さんと欲す。

ソークラテースは紀元前四百六十八年（或は四百七十年）グレシヤのアテーナイ（Athēnai）市に生まる、父は彫刻を業とせるソフロニスコス（Sophroniskos）と云ひ着實にして相當の名譽を有せし位置の人なるが如し。母はファイナレテー（Phainarete）とて産婆を業とせり、家貧なりと雖普通

の教育は之をソークラテースに授けたり。ソークラテース普通教育の他に父の業を學び多少其術を能くしたりと雖、好まずして早くより之を廢めたるが如し。ソークラテースの受けたる哲學上の教育に就ては諸説一定せず、或人はバルメニデースと云へる當時の學者に學びたりと云ふと雖、恐くは只其書物を讀みしのみにて、其講説は聽かざりしならん。バルメニデース (Parmenides) は萬物を説明するに轉變の理と云ふものを以てせし哲學者なり。其他當時の先輩にして有名なる「ソフィスト」と稱する學派の人なるプロタゴラス、ゴルギアス及びプロチコス等にも教を受けたることなく、ソークラテースのソークラテースたりしは、全くソークラテース自己にありと謂ふべし。然れども其若き時は自然哲學を學びたりと雖、之を以て不完全なりとし、直に其學を廢したるの一事は明なり。

ソークラテースの教へを初めたるは中年以後の事なるが、其時に至るまでに、吾人の大に注意すべきとはキサランチッペ (Xanthippe) と云へる強情婦人と結婚したる事となす。或時婦人怒りて水桶を覆へして、ソークラテースの頭上より全身に注ぐ、ソークラテース平然として曰く、「雷鳴の後には必ず急雨あり」と。婦人の性質此くの如し。或人ソークラテースに問ふに、何故此かる亂暴人に婚したるやを以てす。ソークラテース答へて曰く、「人若し馬を馭せんと欲せば始めに悍馬に由りて其馭馭の方法を學ばざる可からず、我れ人を御し人と共に生活せんと欲す、是を以て此かる婦人に婚

したるなり、我若し彼女の亂暴を忍び、且之を治御することを得ば、又以て世人に對して忍ぶことを得、又共に親睦して生活するを得べきなり」と。

ソークラテース教を爲すに先立ち兵役を勤む、三度戰場に赴き、大に武勇の名を揚げたり（ポチダヤ (Potidaea) 戦争記元前四三一年。デーリオン (Delion) 戦争四二四。アンフィポリス (Amphipolis) 戦争四二二)。其戰場に在る時のことに付きては種々の話しあり。ソークラテース元來身體堅固なり、饑渴寒暑の如きは其容易に堪ゆる所。又た其勞苦を忍ぶの強きことは、何人も能く之に及ぶ者なし。食物缺乏するは戦争中數々之れ有ることなりと雖ソークラテース之れに出つて毫も苦しむことなく、十分なる食料あるに至りて初めて己れも之を食す。且人其酒に酔へるを見しとなし（ソークラテース自ら飲酒することなしと雖其飲むに當つてや量なく、如何に大飲するも酩酊することなし）。時之れ嚴寒、烈霜地上に滿てるの時は、人皆「テント」外に出づることなく、若し外出する時は衣を厚うし毛皮を以て足を纏ふに非ざるはなし、然るにソークラテースは平常の服を以て寒風に面し、又素足を以て霜雪を踏むを恐れず、兵士等自ら省みて其勇氣なきを嘲けらるゝが如く思ふ者あり。時之れ夏の事なりき、一日早朝ソークラテース一所に立て沈思して動かす、宛も一疑念を氷解し得ざる者の如し。彼尙ほ立てり、心中自問自答せるものなり—此くて正午に至る。兵士等之を見て互に語りて曰く「ソークラテース早朝より彼處に立ちて思考せり」と、後又他の兵士等席を携へ來り

て樹蔭に往きて晝寢するものあり、尙ほソークラテースの沈思せるを見る。ソークラテース其思考を續け夜を徹して朝に至り、太陽昇りて初めて朝を祝して其所を去れり。此戦争中ソークラテースの若き友人アルキビアデース (Alcibiades) 負傷せしを以て、ソークラテース之を助く。アルキビアデース之れを思とし、又たソークラテースの功勞を上申して之れを賞譽せんことを求めたり。されどもソークラテースは功をアルキビアデースに譲りて之れを辭せり。

其後七年アテナイ軍デーリオンに敗軍して退くの時、ソークラテースの確乎たることは又一偉觀なりき。プラトーン、アルキビアデースの口を借りて其時の事を謂はしめて曰く、其時余(アルキビアデース)は騎兵にしてソークラテースは歩兵なり。退軍の時余會ふ彼に出會ひて挨拶す。時にソークラテースの態度を見るに、ポチデア戦争の時よりも一層雄壯にして、能く味方の軍に注意し、又能く敵を慮り、確乎たる精神を持し、苟も襲ひ來る者あらば、死を以て抗抵せんとの氣色面に表れたりと。(「宴會」篇を見よ)

ソークラテース戦争上の勇氣此くの如し、然りと雖其勇氣は管に軍事上のみに非ずして、評議官となり、司法官となりても亦一層の道德上の勇氣を表はし、徳義を身に任じ、堅く正義の上に立つを以て幸福となし、口に説く所の徳義は、如何ばかり實行的なるやを示めさんとするものゝ如し。時の暴政官の要求を拒絶し、堅く自己の正義と認むる所を守りて動かす、故に苟も正理に合せざるに

於ては政府假令強しと雖、不正を行はしめんとして豈我を動かし得んやとなし、嚴として動かざるなり。其元老院議長となりし時にも（紀元前四〇六年）又よく暴徒の不理の要求を拒絶し、全議會の決議に反對し、以て自己の理とする所を曲げず、巍然として正義の司法官として立ち、決して不正義の司法官として立たざりしなり（『辯證』篇を見よ）。

ソークラテース教へを初むるや忽ち全市の注目する所となれり、何となれば其容貌は鼻低くして上に向ひ、眼球突出して甚だ太く、唇厚く腹滿張し、全體實に笑ふべきの姿なり。又其相貌肉情的の人と見へたり。或時相者ありてソークラテースを以て最も肉情的の人なりと云へり、ソークラテース曰く「然り、余は最も強き肉情的の者なり、然りと雖只能く之を制するのみ」と。其容貌此くの如し、これ市人の注意を引く第一の理由なり、然るに其思想及び行爲は高尚且つ堅固なり、これ其注意を引く第二の理由なり、彼れ甚だ論理に長じ甚だ達辯にして、談話非常に引力あり、又た能く人を説得す、これ其注意を引く第三の理由なり、此三箇の理由を以てソークラテースは市人注目を中心となりしなり。

ソークラテース常に自己は無智無學なりと云ふ、故に若し人ありて或事を「知れり」と云ひ、又公衆より知者なりと稱せらるる者ある時は、ソークラテース忽ち其人を訪問し、辭を卑うして質問し、以て其事を教へんことを乞ふ。人其辭の巧みにして謙遜なるを喜び、知らず識らず自己の知れりと

する所を得々として語り初む。ソークラテース次第に問を出し、論を進め、遂に論者を導きて意外の點に至らしめ、以て議論の誤謬を示めし、結論の有害なることを語り、傍に其對話を聞き居る者をして、其人を笑はしむ。又た其議論の巧みなるより、人々往々ソークラテースを目するに「ソフィスト」を以てせり。

「ソフィスト」とは、初めは徳義を教へ、處世の道を授くるを目的となし、道徳、哲學、雄辯、及び修辭法等を講じたるものにして、グレシア人の便益を致し、又人智を増進せるや決して少しとせず。其有名なる者をプロータゴラス (Protagoras)、ホルギアス (Gorgias)、ヒッピアス (Hippias) 及びプロテコス (Prodikos) 等となす。然るにソークラテースの時に至り、彼等の末流は腐敗し來り、金錢虚榮を得るを以つて唯一の目的となし、所謂詭辯を以て其身を甲ひ、言語を弄して以て自ら智なりと誇り、多くは美衣を着、容姿を飾り、多數の稱賛者を随伴せしめ、傲然としてアテナイの市中を濶歩し居たり。之れに反してソークラテースは粗服を着け、素足にて市人職人をも厭はずして之と談話し、有益なる教へを施こし、一錢だに報酬を受くることなく、唯だ眞理及び道徳に其身を獻げ、青年を教へ、市人をして徳に進ましめ、以て有益なる人となさんとせり。「ソフィスト」等とソークラテースとの異なること此くの如し。其ソークラテースの餘りに平民的にして其衣服の粗惡なるより、「ソフィスト」等は之を卑しみたり。然りと雖人物は衣服に非ず、智徳の光輪は粗服の下より發射

するなり。又其報酬を要めざるより、反對家は之を嘲りて其教ふる所に價直なきを以てなりと評せり。

ソークラテースの職業は何なりしや如何にして衣食せしやは吾人之を知らざるなり。妻キサンチッペーに由て三子を生む。ソークラテースの大抵家に在らざると、又妻の權勢の強きとに由て考ふる時は、或は妻が衣食の資を作りしに非ずやとも思はる。兎に角にソークラテースの自任せる所の使命は「ソフィスト」の誤謬を破り、其弊を去り、アテーナイの道德を進め、青年を教導し、亦人をして智徳の道に歩ましむるにあり。一言せばアテーナイの道德改良にありしと謂ふ可し。

それ然り、ソークラテースの大目的は徳義の改良にありしと雖、徳義を以て善柔之れ足れりとなすに非ずして、徳義と共に材能を有せざる可からざるは、ソークラテースの人物養成の精神たりしなり。何となれば徳義貴しと雖、才能なき人は國家無用の人物なればなり。之れを以つてソークラテースは徳義を貴ぶと雖此くの如き無用の人物を作らんとは爲さず、有徳にして有益なる人物を作るは、これ其目的とする所たりしなり。且道德を行はんとするに當りても、亦知識なきこと能はず、知識なき時は道德をして其實あらじむること能はざるなり。ソークラテースの教育殊に道德に於ては大に知識を貴ぶものなり。之れを以つて實利主義の思想はソークラテース論談中に普く通せり。彼れ朋友の益を語るも實利主義を用ゆ（孔子も善良なる朋友は益友と云ふ、これ亦功利主義なり）。

功利主義は最大数の最大幸福を目的となす、何物か其精神の高尙遠大なるに若かん。道德に於て其結果を考ふるは道理力ある人間の素より爲すべき所なり。而して其善良なる結果に達せんには、十分精密なる知識を要す、知識なければ正行を誤る。故にソークラテースは知識を重んずるなり。かの實利主義に反せる者は、其言高尙なるが如しと雖實は之れ道德上の無知を獎勵するものたるなり。而してソークラテースの教育法は學者的に非ず、「ソフィスト」の如く傲慢ならず、謝金を要めず、談話通俗にして、其對手は青年たれ、老人たれ、婦女子たれ、職工たれ、其人に於て擇ぶ所なく、自家たれ市上たれ店頭たれ又その間ふ所に非ず。

ソークラテースの人を教ふるや常に問答法を用ゆ。而して教育の方法は自ら二種に別る、一は積極的にして他は消極的なり——大抵先づ消極法を用ゐ、次に積極法を用ゆ。其消極法とはソークラテース對話者に對し、全く無學の體を装ひ、一切の事を彼より學ぶが如くなし、疑問を出して彼れの自説を語らしむ。其人自説を語るやソークラテース其答語を導きて意外の點に持行き、對話者を自家撞着の坑に陥れ、其無學と誤謬とを自覺して、内心の攪亂と恥心を起さしめ、以て彼れの誤謬を破り彼れの所説を自滅せしむるの方法となす。これ對話者の傲慢我執の氣を撓き、彼をして自ら其學の不足を感せしめ、以て其無學の恥を救はるゝの方法を求めしむる準備たるなり。此方法を行ひたる後、ソークラテース積極的方法を以て積極的知識を得せしむ。人此法を産婆法と云ふ。これ外より思

想を注入するに非ずして、人心内部に成長發達し來る思想を整理開發せしむるものにして、思想を
出産せしむるの方法なること、宛も其母の業たる産婆が産婦を助けて出産せしむるに異ならざるを
以てなり。然りと雖ソークラテースは一種の實驗論主義の人なり。故に其方法には歸納法を用ゆ。
然りと雖ソークラテースの用ゐたる歸納法は、後世ペーコンの創始したる如き正確なる者には非ざ
るなり。且つソークラテースの實驗の範圍ごしたる所は専ら人事にして、自然界の事は之を輕視せ
り。ペーコンに至ては然らずして、觀察の範圍は廣く、方法又た組織を有せり。されども假令ソーク
ラテースの方法未だ完全ならずと雖、ソークラテースの研究せる範圍に於ては、厭くまでも實驗的
方法の精神を以てせしなり。此くて事物の性質を知り、又以て用語の明瞭なる意義を定め、而して
議論にすまむ。

ソークラテース此二法に由て巧みに他の傲慢を戒め、又以て敵論を破る。其消極法を用ゐたる最
も面白き例はエウチュデーモス (Euthydemos) 及びグラウコーン (Glaukon) 等の傲慢不遜の青年
を誡めたることとなす。

或時ソークラテース、エウチュデーモスと正、不正の行爲の判斷法を論じたる時、「正」「不」二字を
置き、彼をして行爲の正とせる所を「正」字の下に書き入れ、不正とする所を「不」字の下に書き入れ
しめ、以て其思想を明瞭ならしむ。其問答に曰く

ソ一「人は詐ることなきや」

エウ「然り數々詐るものなり」

ソ一「然らば詐欺は正、不、何れに屬すべきや」

エウ「不正に屬す」

ソ一「他人に惡を爲すは正、不、何れぞや」

エウ「素より不正なり」

ソ一「公民を奴隸に賣りし者は如何ん」

エウ「これ亦不正なり」

ソ一「然らば大將たる者敵國に攻め入り、其國都を奪掠し、其市民を虜にするは正か將た不正か」

エウ「正義の所爲なり」

ソ一「もし大將敵を欺きしときはこれ善なるか」

エウ「然り善行なり」

ソ一「もし敵國を蹂躪し、穀物家畜を奪ふ時は、これ善なりと謂ふべきか」

エウ「然り正行なり、然れども之を友人間に行ふときは惡となるなり」

ソ一「然らば以前に正なりとしたる行爲も、場合の異なるに由ては惡となり」正「不」所を變ずるは敵に

對すると、朋友に對するとの異なるに由ることを明知せざる可からず。されども大將が失望せる兵士を勵まさんが爲めに、詐はりて援兵の來るを告げ、以て兵士の勇氣を鼓舞するはこれ善行なるか」
エウ「然り」正」下に記入すべし」

ソ「若し小兒病に罹りて服藥を厭ふ時は、父母之を欺きて、肉汁甘味を與へんと云ひて服藥せしめ、以て其病癒たるときは父母の虚言は正、不、何れに記入すべきぞ」

エウ「正」字下に記入すべし」

ソ「今もし朋友落膽して自殺せんとする時、強て其短刀を奪ひ、彼をして死することを得ざらしむるは正、不、何れに屬すべきや」

エウ「これ亦正なり」

ソ「クラテース語を進めて曰く『君の言ひし所を考へ見よ、吾人は朋友に對しては常に正直なるを要せず、時に由りては不正詐欺を行ふとも可なりとの結論に達したるなり』」

此に於てエウ「チュデーモスの心中攪亂せられ、答辭一々危険を感ず。ソ「クラテース尙ほ問うて曰く『余は問はん、故意を以て人を欺くと、不注意に由りて欺くと、何れか最も不正なる』」

エウ「チュデーモス又々思はぬ結論を引き出されんことを恐れて曰く『余は答ふる能はず、又如何に信じて可なるやをも知らず。何となれば君は十分に余の意見を破りたればなり。余は以前に一光

明を見たりとすれば、忽焉として他の光明に接す、……我れ答へに迷ふ」

ソークラテース此くエウチュデーモスを困らせて曰く「實に君は數々意見を變へて自家撞着の説を爲せり、今もし人ありて眞理を教ふと稱し、常に其言を異にするあらば、君彼を何とか云ふ。又道を教ふと云ひて同一の道を、或時は東なりと云ひ、或時は西なりと云ふときは、君之を何と云ふか」

エウ「世人は此かる人を稱して何事をも知らざる人と云ふ」

此の「世人は此かる人を稱して何事をも知らざる人と云ふ」との語は、ソークラテースがエウチュデーモスをして自己の無學を自覺自白せしめたるものなり（『メモラピリア』を見よ）。

ソークラテースの此方法の最も有名なるはグラウコーンと云へる旨進的青年の野心を抑へたることにありとす。グラウコーン其齡未が丁年に達せずと雖、己れ一人の力を以てアテーナイ政府を左右せんと欲し、朋友親戚の忠告をも聞かず。或時は政治上の演説を爲して其生意氣なるより演壇より引き落されたることもありき。されどもソークラテースは此青年を見棄てず、親切に之を教導し、彼をして遂に其盲目的舉動を止めしめたり。或時ソークラテース彼を誡めんとして問答を始めて曰くソークラウコーンよ、君はアテーナイ共和國を統治せんとするの意あるか」

クラ「然りこれ有り」

ソ「君の希望や遠大にして之に勝らん事業は他にこれ有らざるべし、君もし之に成功せば榮名赫々
グレシヤ全土は言ふを要せず、遠く外國にまでも鳴轟すべし」

此の語は大にグラウコーンに高揚の心を與へたり。グラウコーン次第に挑撥されて自説を語り初
む、ソークラテース語を繼ぎて曰く「君もし人に尊敬せられんと欲せば先づ國家に有益ならざる可
からず、君が着手せんとする第一の事業は抑も何ぞや」

グラウコーン暫時考へ居たりしかば、ソークラテース又問うて曰く「アテーナイ共和國をして幸
福ならしめ、又之を富ますには非ざるか」

ソ「然り我れ國を富ますん」

ソ「然らば富國の方法如何ん、即歳入を増加するに非ずや」

ソ「然り」

ソ「然らばグラウコーンよ、歳入は如何にして成立し、又我國の歳入は幾何なるやを余に告げよ、
思ふに此事に付ては君は既に専門に調査せしならん、又物價變動救治法の如きも十分に研究せしな
らん」

ソ「余は此事に付きて考へたることなし」

ソ「君は出費を減少せんとせる人なれば、少なくとも歳出額の如きは能く之を知らん」

クラ「これ亦知らず」

ソ「君未だ歳出歳入を知らず、未だ以て富國を論ず可からず、これは他日に譲るべし」

クラウコーン曰く「他に又國を富ますの一法あり、君必ず之に氣付かざりしならん、即ち敵を亡ぼすことこれなり」

ソ「然り君の言ふ所や善、然りと雖能く之を爲さんには我國は敵國よりも強勢ならざる可からず、然らざればたゞに我れの勝たざるのみに非ずして、我有する所をも之を失ふべければなり。故に兵を出さんと欲する時は先づ兩國の勢力を比較し、我軍彼れに勝つべきを知らば、大膽に敵に向ふ可しと雖、敵軍の勢力我に勝るあらんには、我等力を極めて戦を止むるの方針を取らざる可からず、君は必ず彼我海陸軍の兵數を知らん願くは之を告げよ」

クラ「余は直に答ふる能はず」

ソ「君今之を記憶せざれば或はこれが表を有せん、然らば其れを讀み聞かせ」

クラ「余は其表を有せず」

ソ「然らば君未だ急に兵を以て敵に對すること能はざるべし。されども攻戦は能はずとも守戦は出來ざることなからん。君は今我國を守るに何れの堡壘は必要にして又何れは不必要なるや、又一壘に要する兵員及び其増加すべき所を知らん、之を語れ」

グラ「余は是等の堡壘より盡く其兵士を去らん、彼等徒らに國防の名を以て土地を荒撈すればなり」
ソー「されども若し盡く兵士を撤去せば敵軍随意に我國に來襲せん、豈妄りに兵を撤去して可ならんや。君今兵士等は土地を掠奪すと云へり、君は實地に之を目撃したりや否や」

グラ「余は實見したるに非ず、想像したるのみ」

ソー「想像は以て議論の根據となす可からず、一層精密に調査したる上、評議官に上奏するとも未だ
晩からざるべし」

ソー「クラーテース又問題を改めて曰く『余は思ひ出せり。君未だ銀鑛にありしこと無かるべし、故
に現今銀の産出額の減少したる理由を検したること無からん、然らずや』」

グラ「余未だ銀山に在りしことなし」

ソー「實に銀山は健康に害あるを以て、君其處に行き得ざりしならん、若し健康に害なくば、必ずや
銀鑛に入りて研究せしならん」

グラ「君は余を挑撥する勿れ」

ソー「銀鑛は君自ら實地に調査すること能はざれば十分之を知るに由なかるべし、されども穀物に至
りては君の知る所ならん、今我國に産出する穀物は全アターナイ人民に供給して幾何の時日を支へ
得るか。又麵麩を作るに不足なく、不時の需要に充たすべき一箇年間の必要の穀物は幾何ぞ」

「ソークラテース」此くの如きは注意するの必要あらば自然に知り得べし、今より論ずるの要なし」

「ソークラテース」我等よく其需要供給を知らざれば、一家をすらも之を齊ふること能はざるなり。我アテーナイ共和國は一萬有餘の家族より成れり、然るに此多數の家族を一時に注意するは決して容易の事業に非ず。今や君の叔父の家は衰運に向へるに非ずや、實にこれ君の深き注意を示めし、其技量を發表するの時と謂ふ可し。君若し一私人の事務を處理すること能はざらんには、如何でか一國の大事を處理するを得ん。然るに君はアテーナイ政府に入らんとす。百斤の重量に堪わざるものにして、百斤以上を擔はんとは何事ぞ」

「ソークラテース」叔父、我忠告を用ゐば十分家事を所理す可しと雖、彼れ我言を用ゐざるを如何せん」

「ソークラテース」一私人たる叔父にすら信用せられずして、焉んぞ能くアテーナイ人民の信用を得べき。愛するグラウコンよ、自己の能力を超過する希望を有する時は人汝を輕蔑せん。知らざることは之を口に出すことを謹しめ、古來盲進者の殘したる不名譽の跡を見よ。今君大にアテーナイの國家に盡くす所あらんとす、若實力を有せば其事成就し衆人より尊敬と名譽とを得ること余の敢て疑はざる所なり」(『メモラピリア』を見よ)。

此對話は十分ソークラテースの論法及び教戒法を明示せるものなり。ソークラテース此くして人の高慢を撻き、反對説を論破せり。而して當時の知者學者と稱せらるる者とは大抵議論を戦はし、

以て彼等を論破し、殆ど論辯敵なきの状となれり。デルフ・フォイの神託ソークラテースを以て至賢の人となしたるも其理由亦此邊にあるべし。

デルフ・フォイ神社はアポローンの神を祭れる所なり。神託ありてソークラテースは世上至賢の人なりと謂ふ。然るにソークラテースは無學なりと自白せるの人なり、是を以てデルフ・フォイ(Delphoi)の神託が至賢なりとしたる理由を解すること能はざるなり。然るに神言詐りある可からずと信じ心中大に迷へり。自ら其時の事を謂うて曰く『我れ當時の最も知者と稱せらるゝ人々に往きて對話せば、必ず神託の誤りなることを發明し得て「此に我よりも知者あり」と云ふことを得るならんと思ひ、其人に就て論駁せり。人彼を知者と謂ひ、彼又自ら知者なりと稱すと雖、我其然るを見ざるなり。之を以て去て獨り心に思へらく、我等兩人共に價值あることなし、然るに彼れは知らずして知れりと想へりと雖、我は實に我の無知なることを知れり。此くて又た其他の詩人、美術家、戯曲家等多くの知者を試みたりと雖、其結果又此くの如きのみ。我れ心に憂を懷き、又多くの人を論難に出で困まらせて敵を作りたるを悔めり。然るに萬事如何ならんとも神意は之を明にせざるを得ず。我れ終に謂へらく、最も評判高き人物は我に於て最も不完全の人物にして、これより少く名なき人は、稍や正しきが如し、此くて其結果たるや、一方には敵を増加し、一方には我名は至賢の人として擴まりたりと。』(『辯證』篇を見よ)。

單に激烈に反對者を攻撃するがソークラテースの主旨に非ず、又よく市人を教へ、職人等をも侮ることなく、職業に對しては、「人の爲すべき職業には卑しむべきものなし、卑しむべきは怠惰のみ」この主義を取れり。故に彼等と對話し或は通俗の事を例として説明するなどは毫も其耻とせざる所なり。又朋友に對しては親切なる愛情を有し、出来る限りの善意を盡くし、或は忠告し、或は慰め、或は勵ませり。故に其語る所は眞實にして人心を感動す。加之談話甚だ巧みなり、故に人々ソークラテースの談話を聞くを喜びたり。

一度ソークラテースの門弟にして、其若き時は活潑有爲の美少年たりしアルキピアデースは最も功名心に富み、後年スバルタ、アテーナイ間の一大事を引き起こして大にアテーナイの迷惑を生せしめたる人なり。嘗て宴會席上—此宴會にはソークラテースも在り—ソークラテースを讚美して曰く『我れソークラテースを彫刻に比較して其讚美を初めん。ソークラテース恐くは余を以つて諷刺嘲笑を爲さんが爲めに、此彫像の例を擧ぐるものなりと思はん。余は云ふ、ソークラテースは宛も店頭に据へある、セイレーノス (Seirenos) の像に似たりと。實にセイレーノスは滑稽の像なり。然りと雖其之を開く時は内部には神の本尊を有せるなり。余は又云ふ、ソークラテースはマルシヤス (Mar-syas) と云へる笛吹ける「サチュロス」 (Satyros) (半身人、半身獸の神) に似たりと、汝 (ソークラテース) 恐くは之を否まざるべし、若し否まば余は之を證明せん。汝は一層大なる笛吹きに非ずや。マ

ルシヤスは笛を以て妙音を發し天地を感せしむと雖、汝ソークラテースは之に異り、笛に由らず器械を用ゐず、單に言語のみに由て能く之を爲すを得るなり。吾等ペリクレーヌ (Pericles) 及び其他雄辯家の雄辯を聞くに雖、其之に感動すること甚だ微なり、然りと雖、何人も汝の言を聞くか、或は傳へ聞くか、又其傳ふる人は語法を知らずとも、苟も之れを聽く者は男子も、女子も、又た小兒も、一として感動せざる者なし。余は耳を塞ぎてソークラテースの前を去る、これ其談話の引力に由り、其側に座して老の將に至らんとするを忘るべければなり。又其談話は常に我内心を責め、余をして實に卑しきものなるを自覺せしむ。而して余はソークラテースの論を破る能はず全く其論の奴隸となれり。然るに一旦ソークラテースの前を去る時は直に世上の功名の念勃然として我心中に興起す。故に余は遁れてソークラテースの面前より隠る、何となれば彼れ、我れに命じて爲すべしと云ひし所を、我れ之を爲すこと能はずして、もし彼を見る時は我精神は屈伏せるを以てなり。之を以て余は時に此くの如き人の人間の中に在らざりしを望みたり。實にソークラテースは無雙の人なり、現在にも過去にも之に比すべき人なし。ブラシダス (Brasidas) はアヒレウス (Achilleus) の如きのみ、ペリクレーヌはネストール (Nestor) 及びアンテーノール (Antenor) に比すべきのみ、ソークラテースに至つては獨り比すべき者なく、只比すべきは店頭に列べあるセイレーノスとサチュロスとあるのみ。是等は我友よ、ソークラテースの讚美たるなり』と(『宴會』篇を見よ)。

ソークラテースと談話したる者には青年甚だ多し。單に青年のみに非ずして種々の人はソークラテースに來らざるを得ざること、宛も鐵片の磁石に吸引せらるゝが如きなり。其等の有名なるものには高慢なるクリチアスあり、決行的のアルキピアデースあり、辯論理想の大家プラトーンあり、徳義に誇れるアンチステテースあり、快樂主義のアリスチッポスあり、小兒の如く無邪氣なるヘルモゲテースあり、大史家キセノフォーンあり、大ベリクレースの子ベリクレースあり、熱心の青年ハイレオーンあり、冷淡なるカイレクラテースあり、正確なる論理家エウクレイデースあり、懐舊の情に堪わざる老人エウリピデースあり、議論を好めるシンミアス、ケーベスあり、老友クリトーンあり、愛する門弟子ファイドンあり、優美なるファイドロス、ハルミデース等あり、此くて美少年あり、成年あり、老人あり、又た美女テオドータもソークラテースに教育せられたることあり。其他市人あり、職工あり、軍人ありき。(Antisthenēs, Hermogenēs, Xenophōn, Chairephōn, Kairekratēs, Eukleides, Euripides, Simmias, Kēbes, Kritōn, Phaidōn, Phaidros, Charmidēs, Theodōta.)

其内、エウクレイデースはメガラ人にして最も哲學を好み、前代諸家の説を學びたるが、ソークラテースの出づるに當りて、深く之を慕ふに至れり。時會々アテーナイとメガラ (Megara) との間には不和あり、アテーナイ市は法令を出して、メガラ人にしてアテーナイ市にて發見せらるることあらんには、終身の罪科となせり。然るにエウクレイデース其禁を恐れず、身を婦人に扮して夜に於

てアテーナイに來りてソークラテースの談話を聽く。メガラよりアテーナイに至るの距離は殆二十
「マイル」なり、彼れ此遠路を來往し、其聞きし所は歸りて之を思考せり。ソークラテースの死刑後
プラトーン其他の諸弟子、難を避けてメガラに至るや、エウクレイデース善く彼等を待遇し、以て
友情を盡くしたり。メガラ學派はエウクレイデースの創する所なり。アリスチッポス (Aristippos) は
富人なり、性熱情的にして快樂を主義となす。然りと雖道徳を以て善く其度を制節し、決して過ご
さしむることなし。而して其學説は快樂を得るを以て善となす、之を「キュレーネー」(Κυρηναι) 學
派と云ふ、キュレーネー (エジプト) はアリスチッポスの生地なればなり。アンチステテースは初め
ゴルギアスに師事し、後、門弟を教へ居たる人なるが、ソークラテースの名聲を慕ひ、自ら人の師
となることを止め、來りてソークラテースに師事し、又自己の門弟をしてソークラテースを師とせ
しむ。宛も支那に於て張橫渠が卑比を撤して、伊川を師としたるが如し。其主義快樂を卑しみ貧乏、
克己を以て誇りとなせり。初めてソークラテースに面會するや、蔽衣を着し、自慢なる面色あり。
ソークラテース其消極的虚飾を看て、忽ち諷刺して曰く「アンチステテースよ、汝の衣服の破綻よ
り、汝の虚飾は見ゆるなり」と。アンチステテース、犬儒派を作る。其弟子にディオゲテース (Dio-
genes) あり、又奇人なり、奇聞甚だ多し、白晝人無しとして燈火を提へてアテーナイの市中を徘徊
せしことあり、桶中にありて傲然としてアレキサンドロス (Alexandros) 大王と談話したること

あり、或時海賊に捕へられ奴隷に賣らるゝの時、海賊彼に問ふに何の技に長せるやを以てす、彼れ答て曰く「我れ人を治むるに長す。故に汝若し我を賣らんと欲せば、主人を要する人に賣れ」と云へることあり。或時ブラトーンの宴會に招待せられざりしに、其席に亂入して美麗なる敷物を土足以て蹂躪して曰く、「此く我れブラトーンの高慢を踏み付く」と、ブラトーン曰く、「嗚呼ヂオゲチーヌよ、汝は一層の高慢を以て」と。ブラトーンは眞善美の合一を説きたる理想論の大家なり、「對話篇」あり。キセノフォーンはソークラテースの言行の紀念すべきものを即ち「メモラビリア」を著はしたる人なり、其他歴史の著書あり。

ソークラテース此く多くの朋友あり、稱賛者あり又門弟子あり。其ソークラテースの名聲徳望を慕ひて來れる者素より多しと雖、ソークラテース亦自ら求めて人を得、而して之を友となし又は門弟子となし、以て之を教育す。其ソークラテースの人を得て之に近づき親しむの方法たるや、亦甚だ奇なるものあり、キセノフォーンのことを以て之を例せん。初めキセノフォーンの未だソークラテースの門弟とならずして美少年なりし時、一日狭き市街にソークラテースに逢ふ、ソークラテース、キセノフォーンに問うて曰く「食物は何處に行かば買ふを得べきや」と、キセノフォーン答ふるに其處を以てす。ソークラテース又問うて曰く「人は善良ならんとするには何處に行かば之を得べきや」と。キセノフォーン答ふる能はずして躊躇せり、ソークラテース曰く「さらば余に従ひ來れ、

而して學ぶべし』と、キセノフォーン是よりソークラテースの門弟子となれりと云ふ。

實にソークラテースには種々の人來りたり。而して是等の人と語りたる所は宗教なり、教育なり、軍事なり、論辯法なり、倫理なり、國事なり、美術なり、勸告なり、其他一般處世法なり、攝生法なり、一言せば國民を國民としての教育なりと謂ふべし。今聊かソークラテースの説きたる所を見んと欲す。

ソークラテースの教育及び道德組織には、智力の必要なるは余既に之を言へり、而してソークラテースは道德も亦知識に由りて完きを得るとなし、知識は道德なりとす。ソークラテースの知徳同一論即是れなり。此説の基礎とする所は、人皆な自己の善を欲す、若し能ふ可くんば之を得べし、他語以て之を言はゞ、快樂は人必ず之を求め、苦痛は人必ず之れ避くと云へる心理作用に基づくものとなす。これ知徳同一論の大前提なり。故に人をして道德を實行せしめんと欲せば、道德は其人に取りて善なることを知らしむるにあり。人の不善を行ふは、眞に善の何たるやを知らざるに因るとなす。人ありてソークラテースに問ふに『人よく善惡を知ると雖、尙ほ其反對の行爲を爲すあり、これ知者に非ずや』と云はゞ、ソークラテース然らずとして云はん『彼等は眞に無知にして頑愚なり、人若し多くの事物中、最も自己の利益たるを爲し能ふの時、誰か自己に利益あることを行はざるものあらんや』と。正義たれ、他の徳義たれ、みな知なり。若し其善なるの知識を有する時は

誰か敢て其他を爲さん。怠惰遊蕩は無知なり、何となれば他に善良なる事あるを知らざるより來るものなればなりとす。故にソークラテースの説に由る時は、人若し善を知らば必然に徳行の人たるべし、之を以て吾人善の何たるやを知ることを勉めざる可からずとなす。之れ即ち知識の追求なり、然りと雖ソークラテースの大前提たる「人は自己に善なるものは必ず之れを行ふ」との語は兩義を含みて其一方の意味に由れば誤謬たるなり。何となれば道德上の善と一箇人の身に取ての善とは必しも同一なるに非ずして、人は必しも道德上の善を認めて之を好み、之を快樂とするものに非ず。故に道德上の善は之を知り得たりとも、必しも之が實行は望み得られざるなり。只道德上の善と、一箇人の善（快）との一致せし時にのみソークラテースの言の如きを得るのみ、（人往々ソークラテースの知徳同一論と、王陽明の知行合一論とを混同して同一意味のものとなす、されどもこれ言語の表面のみの似たるのみにして、其實は全く關係なき別物を言へるものなり。）

『己を知れ』とはソークラテースの重要な格言なり、ソークラテース之をエウチュデーモスに教ふ。エウチュデーモスはソークラテースに其高慢を撻がれたることは既にグラウコーンの條に之れを記せり、エウチュデーモス種々論談の末、ソークラテースに論破せられ、心中耻ぢらうの念を起して曰く、余は「實を語らん。余は從來哲學を知り、又徳義の實行上人間に必要な學識を有せりと自信し居たり、然るに今や君の間ふ所に答ふる能はず、赧顔に堪えざるなり、余は實に知らざる

可からざることを知らざりき。故に我等が必要なる事物を知るの良方法を教へよ」と。ソークラテース即ち「己を知れ」とのデルフフォイ神社の額書の語を擧げて曰く「これ十分なる忠告なり、他に之に優れる格言あることなし。君果して自己の何たるやを考へしことあるか」と。エウチュデーモス曰く「余は十分自己を知れりと信ず、自己を知らずして其他何物をか知ることを得ん」と。ソークラテース進みて曰く「自己を知るとは單に自己の姓名を知るを以て足れりとせず、能く自己の何事に適せるやを檢省するに非ざれば未だ以て自己を知りたるものと言ふ可からず。自己を知る時は自己の利益を知り、又自己を推して人に及ぼし、何物が他人に有益なるやをも知るを得べく、其他一切自他に利益ありて、又た事業に成功するを得べきなり、これ只一個人のみに非ず、一國の事亦然り、自國の力を知らざる時は失敗は免る可からざるべし」と。以て十分に自己を檢省し、自己の何に適し、何を要し、何を有し、又何を擇ぶべきやを知らしめたり。(『メモラピリア』を見よ)

ソークラテースは神を信ず、其存在の證明には意匠論を用ゆ。アリストデーモス (Aristodemos) と云へる者に語りて曰く「君は稱賛歎美せる人あらん、そは誰なりや、願くは之を告げよ」と、答へて曰く「叙事詩家にはホメーロス (Homeros) あり、彫刻家にはポリュクレイトス (Polykleitos) あり、畫工にはゼウキシス (Zeuxis) あり」と。ソークラテース曰く「君は如何なる技術を以て最高の價值ありとなすか、或は精神なく、運動なき彫刻を作る人なるか、或は精神及び理會力を有し、思

ふが如くに運動する動物を作る者なるか、孰れぞや。』答へて曰く『後者なるや明なり』。ソークラテース又問うて曰く『此處に目的の知れざるものと、又目的に合して便利なるものとある時は、此二物中何れを以て偶然の結果となし、何れを以て睿智の結果となすか。』かの目的に合ひ、善良有益なるものこそ道徳と判断力とを有したるものゝ作用なりと信ずるこそ合理なれ。ソークラテース此前提を進めて曰く『始て人を作りしものは之れに五官を授け、又之に應ずる目的物を豫備し、眼には視るべきの色あり、耳には聴くべきの音ある等、皆人間に對しての利益なり、これ人間の爲めに企圖し、意匠して作りしものなりと思はざるか』と。(『メモラビリア』を見よ)

又天地萬物の善美を云ひ、人間身體の構造を云ひ、其造物主あるを推論し、又其善と愛とを説く。されども此証明は素より不完全にして、事實の半面のみより立論したるものにして世上、事物の不完全、衝突、矛盾、害惡等の現象あるを忘れたる誤謬なる推論なり。此くの如きの論法を以てしては、未だ以て神の存在を證明するに足らざるなり

ソークラテースは不思議にも神秘なる「ダイモーン」(Daimon—鬼神)と云ふ一種の見る可からざる靈體の存在を謂へり。「ダイモーン」とはソークラテースの言行若し不良ならんとする時に、之れを制止するの聲なり。彼れ又靈魂不死を信ず。(『ファイドーン』篇を見よ)

ソークラテース此く宗教的なりと雖、事物の深奥に入りて宇宙の秘密を知らんとすることを爲さ

ざりしなり。其知識は甚だ實用的にして當時の理學者等の研究を笑ひ、自然現象を研究して雨を作り、氣候を制し得るやと罵れり。加之彼等と呼ぶに狂者を以てせり。而して自ら其研究の方向を人間及び道徳に定めたり。是を以て從來のグレシア哲學の外面に向ひたる研究の潮流はソークラテースに至りて内面的となり、プラトーン及びアリストテレース (Aristoteles) 等を引き起し、以て自らグレシア哲學の祖なりと稱せらるゝに至れり。キケロ (Cicero) 之を謂うて曰く「ソークラテースは哲學を天上より地上に引き降し、之を各人の家に紹介し、人をして是非とも道徳及び善惡を考へざるを得ざらしめたり」と。此くてソークラテースの主旨とする所は専ら道徳及び處世の事となす。長子ラムブロクレースに孝を教ふるが如きは、親切醇々たるものにして、出産の時母の苦勞より、其養育の心勞、父母の愛情及び心配を語り、子成長せば教育を授け又善良なるものを求むる等、両親の一方ならね心勞を語り、以て孝行を教へたり。

ソークラテースの友人中、兄弟不和なる者ある時は、兩人に兄弟の有益にして得難き重寶なるを語り、互に相和し、相助く可きを語り、其仲裁の勞を執りたり。或は朋友の利益を語りて人々をして友誼を全うせしめたることもあり。又友人の憂色ある時は或は慰め、或は勵ましたり。ソークラテースの朋友を愛するや最も厚きものたりしなり。

アリスチッポスはソークラテースの門弟子なり、ソークラテースの死後、快樂主義の學派を立て

「キュレチー」學派と稱せし人なり、ソークラテース、彼れの快樂に耽らんことを恐れ、之れに勤勉、節制、堅忍を語り、青年を教育するの精神を談話して曰く「我等青年を教育し、偉大なる事業を爲さしめんと欲せば、之に授くるに艱難辛苦を以てし其堅忍にして勞苦を避けざるの性質を養成せざる可からず。ヘシオドス (Hesiodos) 曰く「悪に行く道は近くして平垣なり、之を以て人多く之れを行くと雖、道德の道は高くして且遠し、額に汗して登らざる可からず、これ神の定めし所なり、山頂に登るに非ざれば其報を得ざるべし」と。エピハルモス (Epicharmos) も又た曰く「神は賞與を人の勞苦の度に由て定む」と。而して尙ほ有名なるヘーラクレース (Herakles) の撰擇に就ての話しを語りてアリスチッポスを勵ませり。此話はゾローヂコスと云へる「ソフィスト」の記せる所にして高尚有益なるものなり。其の大意は、古傳説なる神裔ヘーラクレースと云へる英雄が快樂安逸を避け、勤勉の途を撰びたることを云へるものなり。(『メモラピリア』を見よ)

ソークラテース又大に體育を貴び、快活なる精神は強壯なる身體に存すとなし、人々に運動の必要を説き、運動によりて身體を強壯にするは國家に對しての義務なりとし、自己も亦毎朝早くより家を出で、散歩し、或は運動場に行きて體操し、暫時にして人々多く集まるに至れば市に行きて老若を問はず貴賤を撰ばずして對話して處世法及び徳義を教ふ。性極めて快活なり、其五十歳の頃舞踏を爲して自ら樂しみ、又た、其頃コンノス (Konnos) なる者に就いて「リラ」琴を稽古せりと云

ふ。

ソークラテース此く教育を以て自任せり。而して躬行を以て模範となし、議論を以て知識を導く。其教化に由りて善良有爲の人物多く輩出す。或人ソークラテースの政府に入らざるの理由を問ふ。ソークラテース答へて曰く「余は十分我義務を盡くし、且政府に入るよりも一層大なる職分を成せるに非ずや。余は多くの青年を教化して以て力を政府に致さしむるに非ずや」と。教育家の自任と自重とは當に此くの如くなるべし。孔子の「書に孝を云ふか、惟孝は兄弟に友に、有政に施こす、是亦政を爲すなり、爰ぞそれ政を爲すを爲さん」と云ひしと同一の場合にして、又同一の精神たるなり。

然りと雖ソークラテースは政治上の思想なきに非ず。實にソークラテースの時は、アテーナイの衰弱を極めたるの時にして、古代の光榮は全く地に墮ち、又舊時の趣あらざりとなり。ソークラテース之を嘆き、再び之を回復せんとするの意あり。大ベリクレースの子ペリクレースと談話し、或は敵國の狀勢を語り、國境守備を云ひ、往昔を追想し、將來を望み、民心を興起する方法等を語りたることあり。

此他多くの教戒、勸告及び談話等は、プラトーンの「對話」篇及びキセノフォーンの「メモラビリヤ」中に存して、今も尙ソークラテースの生氣を存せり。

ソークラテースの一生此くの如く其思想此の如し、兵士としては武勇なり、議長となりては確固たり、平民と友たり、青年を誘導せり、詭辯者を論破せり、神を信せり、徳義を言行せり、又國家を愛せり。然るに當時アテーナイ政府は腐敗して奸人政權を恣にせり、ソークラテース之を攻撃したることありて大に其忌む所となり、其「ダイモーン」なる者は以て新神を唱道して、アテーナイの國教を覆へすものなりと誣ひられ、又青年を腐敗する者なりと誤解せられ、遂に法廷に呼び出されて死刑に宣告せらる。されども若し哀訴嘆願することあらんには、死を免るゝは容易たりしなり。然るにソークラテースは此くの如きことを爲す人とは夢にだも想はれざるなり。ソークラテース法廷に於て裁判官及び傍聽者の前に立ちて自己の潔白なるを辯證し、眞理に立ちて毫も其主義を改めず、自若として死刑の宣告を受く。其時のソークラテースの言に曰く「嗚呼アテーナイ人諸君、余は諸君を愛し又諸君を敬す。然りと雖人間の命に従はんより、神命に従ふを一層至當の事となし、我生命の有らん限り、勢力の盡きざる限り、哲學を教へ、之を實行し、余の教説することに反對する人に向つて確信する所を此く言はん「噫、我朋友、汝は光榮あり、又た知識の淵藪たるアテーナイの大都に住み而も唯金錢名譽にのみ懸念し、肯て知識、眞理及び精神の進歩を求めずして、之を不問に附す、汝は之れを恥ぢざるか」と。余は諸君に告げん、徳義は金錢より來る者に非ず、唯徳義こそは人民公私衆善の源泉なれど。これ余の教ふる所なり、若し此説にして人心を腐敗せしめたるも

のならんには嗚呼余の及ぼしたる害悪や實に大なるかな。嗚呼アテーナイの人諸君、諸君はアニ
トス(Anytos)等の欲するが儘に余を遇せよ、我れ幾回の死に遇ふとも決して我道を改めざるべし。
死何ぞ恐るゝに足らん。若し未來世界あらんには、我其世界に往きて古來の英雄と談話せん、何物
の愉快か之に若かん。現在たれ死後たれ、善人に來る惡ある可からず。神は決して善人を棄ざる可
し、余は今死の生に勝れるを確知す。されば「ダイモーン」も今余の死を止めざるなり。アテーナ
イ人諸君、余が諸君に願ふ所は、若し我子等成長の後に當り、徳義を求めずして金錢財寶のみを求
め、或は虚飾をこれ事とすることあらんには、余が諸君を惱ましたるが如く、又之を將せんことな
り。今や永別の時來れり。各其途に別れん、余は死に往き諸君は生に往く、然りと雖其何れの優れ
るやは、只神之を知れるのみ」と。高尚なり、偉大なり、靜平なる精神確乎として震ひだにせず、
凜として眞理に立てり。實に吾人はソークラテースの身邊知徳の光輪輝けるを見る。ソークラテ
ースの死刑は實にアテーナイの大悲劇なり。(『辯證』篇を見よ)

宣告の翌日、死刑に處せらるべきなりと雖、其日會ふデーロスの祭日の初日に當れり。此祭日は
三十日間續くものにして、其間は例に由て死刑を行はざるなり。之を以てソークラテースは鐵鎖に
縛せられて獄中、死を待つこと三十日、舉止平日と異なるなく、精神靜平にして友人に面接し、尙ほ
常の如く教戒を續けたり。

死刑の前々日門弟クリトーン來てソークラテースに脱獄を勧め、其容易なるを説く。クリトーンはソークラテースと同年輩の老人にして、甚だ親密なる好友人なり。されどもソークラテース之を聞かずして曰く「若し吾等脱獄せんとする時は、先づ脱獄の正理なるか將た不正なるかを考へざる可からず。余は昨日までも正理と認めたる所を歩みたり、然るに一朝從來の道を棄つるは余の爲すに忍びざる所なり。眞理は同一不變のものなり、今君の勧めにして至正至強の道理の之れが後楯となるあるに非ざるよりは、余は君の忠告を用ゆる能はざるなり。余は此機に當り、君等の面前に於て我眞理は果して余に向て以前と異なるの色を呈するや、或は確乎不變なるやを試みんと欲す。我等アテーナイ人の許可なくして脱獄するは正か將た不正か。若しこれ正義ならんには、力の限り之を成すべしと雖、若しこれ不正ならんには、此に止まり死するを可とす。君若し余が同意し得べき議論を有せば、余に答へよ、然らざれば余に脱獄を勧むる勿れ」と、酔々と其非を説き、國法を重んじ、國家の命を守るべきを語り、温然としてクリトーンの親切を謝し、遂にクリトーンをして得心せしめたり。而して曰く「靜肅且大膽に我爲すべきの義務を盡さん、神我を招き給へり」と。(「クリトーン」を見よ)

死刑の日は來れり。ソークラテースの門人朋友の多數は獄内に來り、ソークラテースの妻キサソチッペー其子を伴ひ來りて別を惜しむ。キサソチッペー、ソークラテースの友人及び門弟等を見て泣

き伏して曰く「ソークラテースよ、これ汝の友人諸子の汝を見るの終りなるよ」と。ソークラテース婦女子の常として悲嘆の醜態を現せんことを恐れ、人をして妻子を家に送り歸らしむ。此の日プラトンは病を以て來ること能はざりき。ソークラテース、今日死すべきの宣告を受け、今まで鐵鎖を以て足部を繫せられ居たるが、今や之を解かれて其痛み去りて快樂を感せり。即ち鐵鎖の跡を摩でて、快樂は苦痛を去りて後生する所の消極的のものなるの理を説けり。而してこれより談話種々哲學上の問題に移り、哲學は死を用意するの學たるを謂ひ、而して死の性質を語り、來世の狀に及び、以つて熱心に徳義を勸む。クリトーン、ソークラテースの死後、子女及び後事を如何に所理すれば可なるやを問ひ、以て力を盡くして、せめてもの報恩となさんと欲す。ソークラテース曰く「クリトーンよ、今君に語りたる所（道德正義）は、余が常に主義としたる所にして、若し之れを完うすることを得ば、これ君の余に盡くし又我家族に盡くすに勝れり、君若し徳義を怠り余が君等に示したる模範を嫌ひ、敢て徳義の道を踏まざるに於ては、君が余に盡くす所は、余に取て毫も益する所なし」と。

ソークラテース獄中に在りとも常の如きなり、獄吏之を敬愛す。ソークラテース又之に教戒を授けたるが如し、今や時來りて毒藥を飲むべきことを告げ來る、ソークラテース神色自若たり、法に従ひ欣然として人々を見渡し大膽に之を飲み盡くせり。此時まで人々忍びて涙を制し居たりしと雖、是に

於て彼等落涙を禁する能はず。ファイドーンは衣を以て面を蔽ひて泣き悲しみ、クリトーンは落涙を禁じ得ずして起立し、アポロドロスは以前より泣き居たるが、此に至りて聲を揚げて泣き出し、前後殆ど正體なく、他人も爲めに皆泣啼慟哭するに至れり。されどもソークラテースは確乎として靜かに彼等を戒めて曰く「我友何ぞ此くの如き、嗚呼德義は何處にかある。以前に婦女等を家に歸らしめたるは此くの如きことあらんことを恐れてなり、余は之を聞けり、人は神意に従ひて靜肅に死すべきことを。悲しむ勿れ、嗚呼男子らしき氣象を示めせ」と。

暫時にしてソークラテース足部次第に重くなりしかば、仰ぎて床上に横はり、猶談話し居たるが、下腹亦冷却し來りしかば、自ら面部を蔽へる布を取り去り（此時まで蔽はれ居たり）て曰く「クリトーンよ、余はアスクレービオス神社に一雄鶏を負へり。願くは余が爲めに此の負債を返へせ、忘るゝ勿れ」と、言ひ終りて冥す。クリトーン近づきてソークラテースの眼を閉ち口を結ばしめたり（「ファイドーン」篇を見よ）

ソークラテース年七十二、これ紀元前三百九十九年の或日の夕景斜陽樹梢を射り、今や西山に沒せんとせるの頃なりき。

キセノフォーン曰く「嗚呼誰かソークラテースの如く確乎たる精神を以て死に就きし者やある。願ふにソークラテースの死は人間の想像し能ふ限りの最も光輝あり榮譽なるものなり。若し之を榮

譽なりとせば、彼れは最も幸福たりしなり」と。又其著「メモラピリア」の終りに曰く「ソークラテースは實に余が記述せし如きの人なり、彼は最も神を敬し、神の教示の外何事をも之れを爲さず、最も能く正義を守り、惡を他人に被らしむることなく、多くの有益なる事を爲せり。彼又正直にして能く節制を守り、妄りに快樂に耽ることなく、善惡を明にし、毫も他人の判断を借ることなく、凡ての事務を處理して停滯するなく、能く人を知り、惡を戒め、又た徳を勵ましたり。余は是等の諸徳はソークラテースに全備せるを知る。余はソークラテースを以て最も徳義あり、又最も幸福の人なりと謂はん、若し我説に反對する人あらば、請ふソークラテースを以て他人に比較し果して我言の誤れるや否やを斷せよ」と。

余嘗て「メモラピリア」(「ソークラテース人物養成譚」)を譯したる時、博士井上哲次郎氏、余の爲めに漢詩を以つて題辭を作らる、曰く

西聖瑣克底。	吾最慕其人。	名聲傳絕域。	古來罕等倫。	元是貧家子。	及長性愈純。
譬濁蓮出水。	高潔不染塵。	况復富才識。	窮得造化真。	哲學變基礎。	更開生面新。
疑惑爲之故。	道義於是振。	業如耶與佛。	德似尼山仁。	唯惜過剛毅。	直言來怨曠。
小人結成黨。	毒殺衰殘身。	骨骸雖歸土。	千歲存精神。	東瀛有知己。	追想淚濕巾。

二 プラトーン小傳

プラトーンはアテーナイ人なり。父の名はアリストーン (Ariston) 母の名はペリクテオチー (Periktionē)。其祖先をたづぬれば母系に於てはかの有名なる立法家ソロンより溯りて子レウス (Neleus) 及びポセイドーンの神に至り、父系に在つてもコッドロス、メラントス (Melanthos) 等を経てポセイドーンに溯るものにして、プラトーンは實に名家の後裔なり。三十專制家の一人たるクリチアス及び其他の名族も亦プラトーンの一門なり。或傳記家の云ふ所に由れば母ペリクテオチーはアポローンの神に由つてプラトーンを妊みたり、故にプラトーンはアポローン神の子なりと云ふ。紀元前四百二十九年(或は四百二十七年)五月アイギナに生る。本名はアリストクレース (Aristokles) にしてプラトーン (Platon) は其綽名なり。(プラトーンの希臘語は「廣きこと」を意味し、彼れは廣額の人なりしか、肩巾廣き人なりしか、或は眼界見識の廣き人なりしか、其何れかを意味す) 其兄弟にアデイマントス及びグラウコーンあり、其姉妹にポトネー (Potone) あり。

プラトーンの教育は當時に於いて最も完全なるものにして、體術に在つてはピュチオス及び地峽の遊戯に競争するに足りしなり。彼れ真正のグレスシア人の如く、體育に重きを置き、其身體を鍛鍊すること、尙ほ論法を以つて智力を鍛鍊するが如くなせり。然りと雖又た真正なるグレスシア人の如く、

たゞ體操のみに其全心を奪はるゝ如きことを爲さずして、同時に詩歌、音樂及び修辭術等は充分に之れを研究して大に成功せし所なきに非ず。彼れ叙事詩を作り、又た戯曲、宴樂歌、叙情詩及び短歌等をも之れを作れり。然りと雖其叙事詩は之れをホメーロスに比較して劣れりと感じて之れを焼き拂ひ、其戯曲は、ソークラテースを識りてより、此くの如き者は用なしとして、デオニユソスの神社に詣りて焼き拂ひて曰く、

「來ませ、ヘーファイストスの御神。プラトーンは爾御神イマシユカを要するなり」(之れホメーロスの「イリアス」中十八卷第三百九十二行の句にして、「テーチス」と「プラトーン」とを入れ代へしものなり。又たヘーファイストスはローマの「ヴルカン」神のこと)

ど。之れ二十歳の時にして、是れよりソークラテースの門人となりしと云ふ。之れより後十年間はソークラテースに師事し、ソークラテースの審問の際には自ら起つて恩師の無罪を辯せんとせしも、裁判官其演説を許さずして之れを中斷せり。此に於て彼れ、ソークラテースをして、其の生命を購ふに足るの金額を罰金として出さんことに承諾せしめ、プラトーン及び其他の諸弟子其證人たるべしと云へり。

ソークラテースの死後、彼れヘーラクレイトス派の哲學者クラテュロス、バルメニデース派の哲學者ヘルモゲテースに就いて學ぶ所ありたり。其後、他のソークラテースの門人數名と共にメガラ

にエウクレイデースを訪ひ、其れよりアフリカのキュレーネー (Kyrene) に至りて數學家テオドーロスに學び、其れよりイタリアに至りてフィロオス (Philolaos) 及びエウリュトス (Eurytos) のピタゴラス學派の人に學び、其れよりエウリピデースと共にエジプトに至りて豫言者等に就いて學ぶ所ありしと云ふ。然りと雖プラトーンのエジプトに至りしこの事は甚だ不確實にして、其書中にもエジプト研究の形跡は甚だ少し。

是等の旅行に由り、プラトーン大に其見識と眼界とを廣め、ソークラテースの教學を發達せしめ又た異種の分子を混入するに至れり。然りと雖彼れの方法は尙ほ依然としてソークラテースの方法を守るものたりしなり。ブレリウス、マキシムス (Valerius Maximus) の云ふ所に由れば、此時熱心なる青年は四方より來りてプラトーンを師とせんとして、アテーナイ市に集まれり。然るに此哲學者は、或はナイルの蜿蜒たる河岸をたどり、或は異國の曠原にさまよひ、自らエジプトの古老の弟子となり居りしなりと。

プラトーンは又た「マーヂ」(東洋の「聖哲」の意味) 中に混じて、其の術を學ばんとの意ありしと雖、當時亞細亞に戦亂起り、其目的を果すこと能はずしてアテーナイに歸へりたりと云ふ。

彼れアテーナイに歸へるや、熱心なる學生は集まり來れり。彼れ外國旅行に由つて聚集蓄積したる豊富なる學識を以つて、之れに加ふるに不斷の沈思を以つてし、以つて恩師の徳に繼ぎ、其學に

競はんとし、身を青年の教育に委ね、ソークラテースの如く報酬なくして教育を施こし、彼の有名なるヘカデーモス（或はアカデーモス）の森に學校を起してアカデミア（Akademeia）と稱す。此森は、昔トロヤ戦争時代、ヘカデーモス（或はアカデーモス）なる英雄の所有地たりし所にして、此名稱あり。楓樹及び橄欖は鬱蒼として繁り、内に神社あり彫像ありて其美を爲し、静けき細流は樹間を流れ、沈々たる微音は五月の夜、寢れる樹間になつかしき節をかなづ。實にこれ静思默考の好適地、後代の人、皆想をこゝに飛ばせ、詩人は歌ひ、哲學者は景慕するの地なり。プラトーンここに其哲理を説く。

其アカデミアの幽邃なると、プラトーンの對話諸篇の美とを見て、人或は想はん—アカデミアの教科は、實に之れ哲學問題に關して滔々たる雄辯と、壯快なる空想の發表なるべしと。然りと雖之れ全然事實に非ず。かの思考力強き者に取つては、講義の如きは甚だ困難なる科業にして、不斷不休の抽象力の大なるものを要す。如何にプラトーンの記事は、美の女神に由つて飾らるゝと雖、其講義は文學的に非ずして、論理的たりしなり。其アカデミアの門に題して曰く「幾何學者に非ざる者は此に入るを許さず」と云へるに由つて見るも、其學科の如何なるものなりしやは以つて推知すべきなり。

プラトーンの學科は決して浮華修飾のものに非ず、上流社會の遊優閑漫のものに非ず。此くの如

きは淺薄皮相の「ソフィスト」の爲す所なり。報酬を貪り、美衣美食を之れ求むる徒の爲す所なり。プラトーンの學科は眞理なり、文飾に非ざるなり、研究なり娛樂に非ざるなり。徳義の進歩なり、情欲の放肆に非ざるなり。内に藏する所なくしてたゞ外面の虚飾を之れ事とし、無意味の文字言語を臚列して其内眞理の知識なき——これプラトーンのアカデミアの學科に非ず。

プラトーン三度シシリアに航海す。第一の航海は其四十歳の時にして、エトナ火山の噴火口を見んとして至りしなり。時にシュラクサイ (Syrakusai) の専制王ディオニシオス (Dionysios) 一世と相識る。ディオニシオスは當時グレシア諸國中最も有力なる王にして、アレキサンドロス前の最も強大なる王なり。問うて曰く「世上何人か最も幸福の人となす」と。其意プラトーン必ず阿諛して彼れを以つて其人なりと答ふべしとなす。然るにプラトーン曰く「ソークラテースなり」と。ディオニシオス又た問うて曰く「政治家の事とすべきは何ぞや」と。プラトーン答へて曰く「國民を善良ならしむるにあり」と。ディオニシオス二度問うて曰く「其次は何ぞや。正確に裁判するは、君は以つて小事となすか」と。蓋彼れ正確なる裁判を爲す人なりとの稱あるを以つてなり。プラトーン毫も其氣を下すことなく、誘々として謂うて曰く「然り之れ實に小事たるに過ぎず、政治家たるものは尙ほ他の大事ありて存す。かの正確に裁判を行ふが如きは、之れたゞ衣服を修理し、其破綻を再織するが如きのみ」と。ディオニシオス四度び問うて曰く「専制君主たる事如何ん。之れ勇氣あることに

非ずや』。プラトーン答へて曰く、『一切の怯懦なる輩中の最も怯懦なる者なり、何となれば、彼れ其生命を奪はるゝことを恐れて、理髮者の剃刀をだに恐るゝ者なればなり』と。且つ告ぐるに彼れ自家一身の利益のみを計るは善事に非ず、又た能く身を修め徳に進むに非ざれば不可なりとの旨を以つてす。デオニュシオス怒て曰く、『汝の言は老耄者の言なるのみ』。プラトーン曰く、『汝の言は暴君の言なるのみ』と。此に於てデオニュシオス、プラトーンを怨み、之れを殺さんごせり。されどもデオニュシオスの義弟デオーン(Dion)はプラトーンの弟子にして哲學者なり。デオニュシオスを諫めてプラトーンを免るじ、スバルタより來れる所の使節ポリス(Polis)なる者の手に渡す。ポリス之れを奴隸に賣らんとす。時にキュレーチー人アンニケリス(Anikeris)なるものあり、プラトーンを購ひて之れを解放してプラトーンの諸友人に渡せり。友人等直に金をアンニケリスに送りしも、アンニケリス之れを謝して曰く、『プラトーンを思ふは單に其友人諸子のみの事に非ず』と。一説に由ればポリスは、其の後海に溺死せりと、之れ此哲學者に對して禮を失せるの罰なりと謂ふ。デオニュシオス、プラトーンの無事にアテーナイに歸りたるを聞き、心私かに不安にして言をプラトーンに送りて自己に就いて悪言する勿らんとを請ふ。プラトーン冷然として答へて曰く、『汝デオニュシオス如きを意に留むるの閑時日は有らざるなり』と。

プラトーン再びシュラクサイに至る。之れデオニュシオス一世の死したる後にして、デオニュシオス

二世より、植民地を得て、此地に自己の立案せし所の政治法律を行はんが爲なり。植民地を興ふるの約は成立せしと雖、未だ其許可を得ざる内、デオーンの謀反に黨せりとの嫌疑を被りたり。されども許るされてアテーナイに歸ることを得たり。

三度プラトーン、シュラクサイに至れり。之れデオニュシオスをして、其叔父デオーンと和せしめんが爲めなりしなり。然るに其効なく却つて身は危難に陥らんとせしより、遂に断念して歸國せり。(デオーン、後、デオニュシオス二世を逐ひ、自ら位に即きしが、刺客の爲めに殺され、デオニュシオス二世位に復す)

プラトーン、アテーナイに歸へり、アカデミアの閑地に在つて或は講義し、或は著述す。プラトーンを慕ひ就遊する者甚だ多く、男子あり又た女子あり。女子は男子の服装を爲して聽講せりと云ふ。プラトーンの對話諸篇は實に其一生の懋業にして、特に老後の樂みとせし所なり。其八十三歳(或は云ふ八十一歳、八十二歳、或は八十四歳)の時或人の婚姻の宴席にて死せり。アテーナイ人最も鄭重に之れをアカデミアに葬る。之れマケドニアア王フィッポスの治世第十三年なり。碑銘種種あり、其一同く

『アスクレービオスとプラトーン、之れアポローンの神の生みし所。一は人の靈魂を救ひ、他は人の身體を救へり』

と。又た聊か後世のものに曰く

「如何なれば鷲よ、汝は此墓上に來れるか。こは何人の墓なるぞ。如何なれば汝は神々の坐
します所の星の輝く大空を仰ぐなるぞ。」我れはかのオリュンポスに飛揚したるプラト
ンの靈魂の姿なり。されども其遺骸はここにアッヂカの土地に存せり」

プラトーンの死後、アカデミヤの長となりしは、其甥にして又た門弟子たりし所のスベウシッポ
ス (Speusippos) なり。後、アリストテレースの學統を繼ぎし所のテオフラストス (Theophrastos)
及びグレシヤ第一の雄辯の大家デーモステネース (Dionosthenes) 等も、プラトーンの講義を聴き
しことありと云ふ。

而してソークラテースに高弟プラトーン有りし如く、プラトーンは又たアリストテレース (Aristo-
teles) なる高弟を有す。此アリストテレースは、後、マケドニア (Makedonia) 王フィリッポス
(Philippos) の眼識に由つて、其子アレキサンドロス (Alexandros) 大王をして師事せしめたる所の
大哲なり。

此傳記は専らデオゲネース・ラエルチオス (Diogenes Laertios) のプラトーン傳、及びオリュンピオドロス (Olympiodoros)
のプラトーン傳等を本とし其他の諸書に就て編したるものなり。(デオゲネース・ラエルチオスは紀元殆ど二百年頃のキリキヤ
(Kilikia) の歴史家にして、其著述中には、他書に存せざる所の多くの材料を有せるものなり、其著書中グレシヤの哲學者の傳
記あり。オリュンピオドロスは紀元六世紀後葉の、アレキサンドリアのプラトーン學派の哲學者にしてプラトーンの注釋等
を著しし人なり。

三。プラトーンの著書

プラトーンの書は、皆な演劇脚本の體裁を用ゐ、對話問答に由つて、其思想を述ぶるものにして、大抵其の恩愛なる師ソークラテースを以つて對話中の主要なる中心人物となし、ソークラテースの人物を描寫し、又た其哲理を記るせる如くなせり。茲に於て、プラトーンがソークラテースの名稱の下に描寫せる所のソークラテースは、果して眞のソークラテースなるか、或はプラトーン理想のソークラテースなるか、又た其ソークラテースの言説とせる所は果して眞にソークラテースの言説したる所なるか、或は單にソークラテースの名稱を借り來りて、プラトーン自家の意見を述べしものなるかとの疑問なきに非ざるなり。

門弟子たるものが、其師の教學を祖述するは素より自然にして、プラトーンの描寫せる所のソークラテース中には、眞のソークラテース在ることは否む可からざることにして、ソークラテースの他の門弟子キセノファーンの描寫せる所のソークラテースと一致せるものある點の如きは明かに然りとす。而して大哲プラトーンの如きが、其の師の世を辭するに至るまでも、其師に愛着し、ソークラテースの名に對しては、ソークラテースの死後と雖、尙ほ尊敬の念を以つて戀々たりしに由りて見るも、ソークラテースは十分プラトーンの銳利緻密なる論理力と哲學思想とに満足を與

へ、世間一般の想像する以上のものありしと云ふも誤りなきが如し。之れシュライエルマッヘル等の唱ふる所なり。然りと雖又たキセノフォーンのソークラテースを見る時は、プラトーンのソークラテースを以つて、全く眞のソークラテースと爲すべからざるものあるも否む可からざることにして、プラトーンはたゞにソークラテースの學説を布衍したるのみに非ずして、ソークラテースを超えて尙ほ一層進歩したる域に達し、所謂「出藍」せる所あるを知るなり。故に若し眞のソークラテースを知り、又たプラトーンの對話篇中のソークラテースと、プラトーン自身の教學との區別を明かにせんとするものは、プラトーンの「對話」諸篇と並行してキセノフォーンの「メモラビリア」を參考せざる可からざるなり。

其プラトーンの著書として今日に傳はれる者は、眞書、僞書、合計三十有餘種（或は四十有餘種）。其内明かにプラトーンの眞著なるや疑ふ可からざる者ありと雖、其眞僞判すべからざるもの、及び其明かに僞書なるもの亦少なじとせず、然りと雖其古より僞書なりとして明なるもの、外、近世の批評家は、前に眞著なりとしたる所のものをも、往々以つて僞書なりとするに至れり。而して此批評の標準に至つては、多くは外部確固たるものに非ずして、時に甚だ獨斷的のもの之れなじとせず。元來書物の内容のみに由りて考證、批評して、其眞僞を判せんとするは、實は甚だ大膽なることにして、論理堅固ならず、誤謬に陥ること甚だ多し。かの一種の考證家が、著者の諸著を比較して、一

は他より劣れりとの點より、其劣れりとなす方の書物に對して直に偽書なりとの判断を下すものゝ如きは、之れ基礎なき判断たるを免れざるなり。何となれば人には智力及び感情に於て、時に高潮なるあり、又た時に低潮なるありて、決して不斷一樣なるものに非ざるなり。故に如何に興奮性の人と雖、時には遲鈍なることあり、如何に文章雄健の人と雖、時には痿弱なることあり、如何に簡勁なる人と雖、時には散漫なることあり。同一問題と雖、必ずしも常に同様なる巧妙を以つて表はされ得べきに非ず。たと比較上の優劣を見て、其聊か劣れるものを以つて直に偽書なりとなすは決して當を得たるものと云ふ可からず。

或は時に未熟なりとして、偽書なりとなす者あり。されども之れ必ずしも其當を得ず。何となれば人には成熟せる時あり、未熟なる時あればなり。

或は思想上に衝突ありとして、其以つて自らプラトーンの精神なりと想像せる所を標準となし、他を以つて偽書となすあり。されども人の思想は數々變化するものなるを知らざる可からず。

或人はソークラテースを以つて標準となし、其ソークラテースの主義なりと見る所に比較して、相違せる所あるより、直に之れを以つてプラトーンの眞著に非ずとなす者ありと雖、プラトーンは必ずしも全體ソークラテースの哲學に限れるに非ずして、又た自家の哲學及び思想を有せる者なることは之れを知らざる可からざるなり。

又た或人はアリストテレース（プラトーンの門人）の書物中に言はざる所のプラトーンの書を以て偽作なりとするありと雖、之れ又た正常なる理由となすべからざるあり。

此くて書物の内容より、右の如き理由を以つて真偽を判せんとするは、決して穩當なることに非すと云ふべし。

素より古より偽作として傳はりしものは、別に云ふの要なしと雖、其確實なる基礎なくして真偽を判すべからざるものは、吾人之れを『プラトーンの』ものとして觀るも敢て不可なりとせず。又た其偽作なりとせる所と雖、多少參考に益なしとせざるなり。是故に吾人は薄弱なる考證の理由を以つて、輕々しく多くの書物を排斥して眞著に非すとする所の流儀には同意せざる者なり。然りと雖吾人は眞偽併せて之れをプラトーンの著なりと云はんとする者に非ず、成らん限りは精密に之れを明かにするは最も必要のこととなす。

プラトーンの書（及びプラトーンの書なりと稱するもの）三十有餘種（或は四十有餘種）に就いては、吾人は如何に之れを扱ふべきか。プラトーンは毫も其年月を記るさず、又た他の連結或は前後の順序を定め置かざりしなり。之れプラトーンに在つては、ソークラテースの如く、其學說の組織を成すの意に非ずして、或は眞理研究の精神なりしより、此くの如くなりしものなるやの疑なきに非ざるなり。此に於て後世種々の方法を立つる者ありて、或は之れを年代的に順列せんことを力めた

るあり、或は内容主題に由つて之れを分類せんとするあり、或は論題の種類或は範圍に由つて順序を定めんとするあり。或は破邪、顯正に別たんとする者もあり。或は眞、善、美に順列せんとする者あり、或は倫理的、政治的、及び形而上學或は學術的の三者に分類せんとするあり。或は又た研究的、説明的に分たんとする者もあり。然りと雖、單純なる是等の諸方法を以つてしては、到底満足なることは得難しとなす。

今ま其分類順列の二、三の例を挙げんに、デオゲネース・ラエルチオスの分類法は

自然に關したるもの

チャイオス

論理に關したるもの

政治家

クラチュロス

バルメニデース

ソフィスト

倫理に關したるもの

辯證

クリトーン

ファイドーン

ファイドロス

宴會

メネキセノス

クレイトフォーン

書狀

フィレーボス

ヒツバルホス

競争者

政治に關したるもの

理想國

法律

ミノース

エピノミス

クリチアス

啓發誘導的のもの

兩アルキピアデース テーアゲス

リュシス

ラッヘース

討究的のもの

エウチユフローン メノーン

イオーン

ハルミデース

チアイテートス

破邪的のもの

プロータゴラス

轉覆的のもの

エウチユデーモス 兩ヒッピアス

ゴルギアス

となす。シュライエルマツヘルは三種に分類し、

第一、初級の對話篇——之れ此後に來る對話篇の萌芽たるものなり、哲學の機關としての論理的のものなり、其正當なる目的としての觀念に關するものなり、知識の條件の可能なることに關するものなり。乃ち——

ファイドロス	リュシス	プロータゴラス	ラッヘース
ハルミデース	エウチュフローン	バルメニデース	辯證
クリトーン	イオーン	ヒツピアス(小)	ヒツバルホス
ミノース	アルキピアデース(二)		

第二、進歩的對話篇—哲學上の知識と普通の知識とを合併して倫理及び自然學に適用し、以つて之れを區別するものなり、乃ち—

ゴルギアス	テアイテートス	メノーン	エウチュデーモス
クラテュロス	ソフィスト	政治家	宴會
ファイドーン	フィレーポス	テアアゲス	エラストス
アルキピアデース(一)	メネキセノス	ヒツピアス(大)	クレイトフォーン

第三、構成的對話篇—之れ實行と理論との完全に一致せるものなり乃ち—

理想國	チャイオス	クリチアス	法律
書狀			

となす。然りと雖プラトーンの著書は、其内容、其方法、其調子、各篇夫れ々々のものありと雖、又た各篇相出入し、相交又せる所ありて、決して確然として分類すべからざるものありとなす。故

に對話諸篇の分類は甚だ困難なる問題たるなり。

一 プラトーンの對話諸篇は、素より各單獨に存し得べきものなりと雖、其内又た自然に諸篇間の關係存し、相提携せるものあるを以つて、吾人は如何なる順序を以つてプラトーンの書を研究し、如何なる順序に其書を配列すべきかは、又た之れ人々の意見を異にせる所なり。

若し著述年代の順序にして明かならんには、プラトーンを研究するには甚だ便利なりと雖、こは出來得べからざることを以て、吾人は此精神に近からんことを旨として、諸篇の配列を爲すことを要す。其之れを爲すには(一)プラトーンが、其師ソクラテースの説を奉じて、之れと一致せるが如く思はるゝ時代のものを前とし、次にソクラテースより離れてプラトーン自家の説を發表せるに至る程度に由りて、其順序を定むるを以つて第一となし、次に(二)思想成熟の程度を考へ、次に(三)其思想を發表する所の筆法の若きか老成せるかを考へ、(四)内容の論理上の前後に由り、(五)問題、或は對話の場の連續を考へ、(六)書物の性質、問題、調子等の同様なる者を相近接せしめて配列し、(七)又たソクラテースの傳記を知るに便利なる順序を考へ是等諸點を思考して諸篇に次序を立つる時は、其當を得るに庶幾かるべく、大要左の如くに爲さば可なるべしと信ず。

ハルミデース

リュシス

ラッヘース

プロクタゴラス

エウチュデーモス

イオーン

メノーン

エウチュフローン

辨證

クリトーン

フアイドーン

クラテュロス

宴會

フアイドロス

ゴルギアス

理想國

チマイオス

クリチアス

フィレーボス

パルメニデース

テアイテートス

ソフィスト

政治家

法律

以上諸篇は學者殆どプラトーンの眞著なりと一致せる所のものなり、然りと雖此他、偽書なりと雖、尙ほプラトーンの物的のものとして尙ほ取るに足るべきものとなり來れるは

ヒッピアス(小)

アルキビアデース(一) メ子キセノス

等にして、之れに次ぎて

ヒッピアス(大)

クレイトフォーン

等は又た稍可なるものとなし、

アルキビアデース(二)

ヒッバルホス

ミノース

エビノミス

テリアゲス

アキシオッホス

正義

徳義

デーモドーコス

シシユフォス

エリュキシアス

定義

書狀

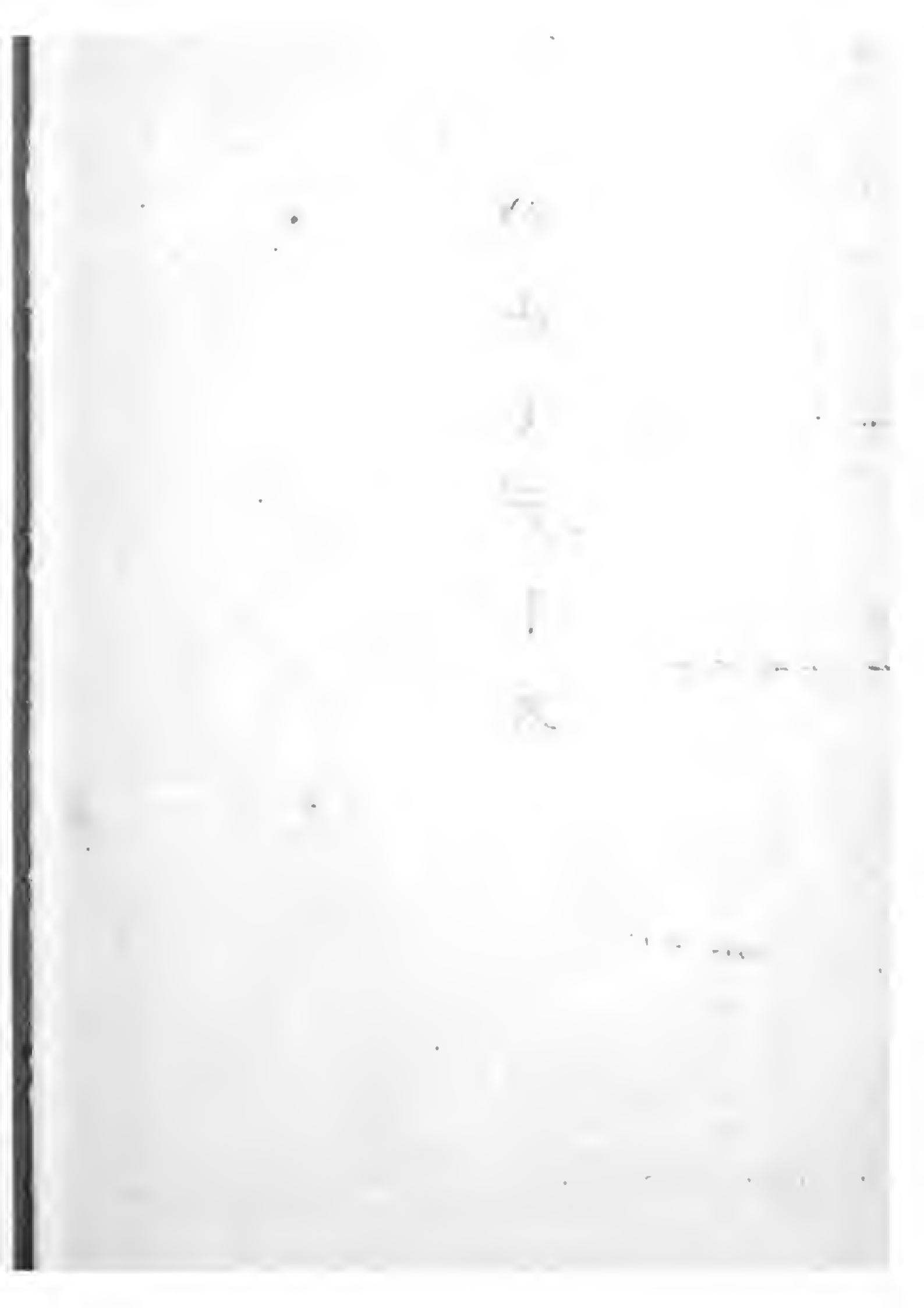
是等は學者の多數の一致して偽作となし、プラトーンの著書として取らざるものなりと雖、又たプラ

トーンの全集の完全なるものの中には、大抵存して以つて参考に供ふるなり。

譯

者

ハ
ル
ニ
デ
ー
ス



ハルミデース解題

本書の論題

節制のグレシヤ語の意義

本書は節制を論せるものなり。節制のグレシヤ原語を *sōphrosunē* と謂ふ、之れグレシヤ特有の言語にして適度、恭謙、思慮、智慧等の言語を以つてするも未だ十分其本原の意味を盡くす能はざるなり。故に此語を譯するに當つては、節制或は智慧の兩語を連用せり。プラトーンの他の著「共和國」中に定解せる所に由れば「健康なる精神は健康なる身體に存す」と云ふが如く、人性の高等分子と下等分子と最もよき比例を保ち、調和の状態に存して能く「人をして自己の主人たらしむる」所のものとなす。

プラトーンの哲學に在つては *sōphrosunē* は尙ほ智性の分子を有すること（キセノフォンの「メモラピリア」三卷九章四節に於て、ソークラテースが *sōphrosunē* と *sōphia* とを同一としたるが如く）未だ全く道徳上の徳の範圍に移さぶること、アリストテレスの「ニコマッホス倫理學」三卷十章に於けるが如きなり。

本書の筋は、美少年にハルミデースなるものあり、人間中最も節制なる

ものにして、ソークラテース彼に「節制の何たるや」を問ふ。彼れ始めに(一)「静穩なること」なりと答へ、次に又た(二)「恭謙」なりと答へ、之れ亦論破されて、次に(三)「節制とは自己の業務を爲すことなり」と答ふ、之れハルミデースの後見人たるクリチアスの入れ智慧なり。然りと雖ソークラテースは、他人の靴を作る手工者等と雖も尙ほ節制たるを得となして之れを辨駁し、尙ほ説明を求めたり。(歴史上にては此の節制なるハルミデースは後年アテーナイ史上に不評判の人となり、クリチアスは三十專制政治家の一人となりたる人なり。されどもプラトンは此點に關しては毫も云ふ所なし)

此に於てクリチアス、ハルミデースに代りて論じ、其自己の業務を爲すと云ふ爲すことに二様の意味ありとなし、ヘシオドスの句を引用して、牽強附會の解釋を下して自説を助けんとなし、節制とは自己の業務を爲すとは、(四)「善を爲すこと」なりとせり。

次にソークラテースの注意に由り、クリチアスは其の答辭中、知識分子の缺損あることを悟り、(五)節制とは「自識」なりとなす。然りと雖ソークラ

テース之れを批評して曰く、一切の學術は其内容たる目的物を有す、數は數學の目的とする所、健康は醫術の目的とする所、然らば節制或は智慧の主旨とする所は何ぞや。クリチアス答へて曰く(六)節制とは知れること、知らざることの知識なり、即ち知識、無知識の知識なりと。然りと雖ソークラテース曰く、視覺の視覺なるものあることなく、視らるべき物の視覺あるのみ、愛の愛なるものあることなく、美なるものゝ愛あるのみ、然らば知識の知識なるもの如何にして之れ有るを得るか。より老たり、より重し、より輕しと云ふは、之れ他のものに比較して云ふことにして、其れ自身に就いて云ふべきことに非ず、相關の觀念に對して始めて正當の言となるなり。故に關係の對象は自己以外のものにして、其れに關して關係なるもの存するを得るなり。而して此くの如き自己に反照的關係なるものありや否や、又た此節制なる語は此反照的性質のものなるやは、大形而上學者と雖未だ決定せざる所なり。假令知識は知識自身を識るとするも吾等の識る所の知識は如何にして、吾等の識らざる所の知識をも包含するを得るか。且つ其知識たるや、たゞ之れ抽象虚空のものにして、哲學

建築其他此くの如き特殊の知識を興ふることなし。其知識たるや、吾等及び人々がたゞ或事を知ることと言ひ得と雖、吾等果して如何なることを知れるやは毫も云ふこと能はざるなり。

されども若し此くの如き、知れること、知らざることを知るの知識なるものありて、萬事の規則を興へ標準となることを許容するも、果して其益する所は如何ん、節制は善なり、而して節制の興ふる所の知識は又た同じく吾等に善なるものたらざる可からず。然るに此知識は吾等に何の幸福をも興へず、又た善も爲さざるなり。たゞそれ善惡の知識のみは吾等に幸福と善とを興ふるなりと。クリチアス之れに答へて曰く善惡の學問、或は知識、及び其他一切の學問は、皆な、一層高尚なる學問即ち、知識の智識なるものに由つて制統さるゝなりと。ソークラテース具體と抽象との二種の區別を爲して答へて曰く、此くの如き知識は如何にして、醫學が人を健康ならしむると云ふが如き、明瞭なる方法を以つて人を幸福ならしむるを得るやと。

ソークラテース此く多くの讓歩を爲し、實際許容すべからざる所をも

許容するも、吾等尙ほ節制の性質を確知すること能はざるなりとなす。

○

此對話中(一)善と美とのグレスニア人の理想、即ち美麗なる精神は美麗なる身體に存すとの思想は、之れを美少年ハルミデースに表はせり。(二)醫學は一部分の學術たると同時に、又た全體の學術なり、身體のみに非ずして又た親密なる關係を精神に有することはトレイケー人の口を借りて之れを言へり。(三)節制は自己の業務を爲すことなりとの倫理上の觀念は「理想國」に於ては節制に非ず、正義の定解として用ゐられたるものなり。(四)學術の學術なるものあり得るや否や、知る所の知識は知らざる所の知識と同一なりや否や、且つ識る物と識ることの *epistēmē* 及び *technē* の區別如何との論理學形而上學の二問題の萌芽あり。又た絶對自足の學術の觀念起れり、(之れソークラテースの駁する所)。又た抽象、具體の觀念、主觀客觀及び知識には主觀的分子あり等の觀念も此に起生せり。而して此に注意すべきは、プラトーン殆どアリストテレスの如く、學術の學術なるものゝ存在を疑ひ、假令之れ有りとするも、此くの如きもの何の用あら

んやとせることとなす。(五)善惡の學術の思想もこゝに起り、「フィレーボス」^ス「理想國」其他後世の倫理學の前驅を爲せり。然りと雖此對話に於ては節制の何たるやは遂に未定に終れるなり。

ハルミデース

一名 節制論

對話人物

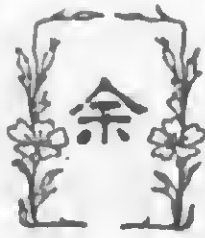
ソクラテース——談話者

ハイレフォン

ハルミデース

クリチアス

場——アルホーン王の宮殿の前廊に近きタウレアスの運動場



は昨夕ボチダヤの軍隊より歸りたるが、久しく彼地にありしを以て、余が常に行きて遊びたるタウレアスの運動場を見んごして行けり。運動場はアルホーン王の宮殿の前廊の近くなる神社に向へる所に在り。行き見るに已に數人其所に在つて遊べり、余は盡くは彼等を知らずと雖多くは余の知る所なり。而して余の其の所に至

るは全く彼等の期待せざりし所にして、彼等余の其所に入るを見るや否や、諸方より遙かに余に挨拶せり。時に狂人の如きハイレフォン起つて余の居る所に走り來り、余の手を握りて、曰く、ソークラテースよ、君は如何にして生命を全うして歸ることを得たりしやと。——（ボチダヤ戦争は余が彼地より歸る暫く前のことにして、其報道は漸く今まアテーナイ市に達したるものなり。此事に付いては余は別に語る所あるべし）。

余答へて曰く、君、余が此處に在るを見るなるべし。

彼れ曰く、報道に由る時は、戦争甚だ激烈にして、吾等の多くの知人は戦死せりと。

余答へて曰く、然り、其は事實に遠からざるなり。

彼れ曰く、思ふに、君も亦た其戦争に出でしならん。

然り、余も亦た此戦争に出でたり。

然らば願くは坐して吾等に詳細なる事を語り聞かせよ、吾等はたゞ不十分なる報道に接したるのみなればなり。

余は彼れが興へし座に、クライスフロスの子なるクリチアスの側に坐

し、而して彼れ及び其他此處に在りし人々に挨拶し、戦争の話しを爲し、又
た彼等の種々の質問に答へたり。

戦争の談話も已に十分に之れを爲したれば、余は戦役に出でたる不在
中、本國に於ける哲學及び青年の狀況等を聞かんとして質問を始めたなり。
余は彼等の中、美に於て最も有名なるは誰れ、知方に於て有名なるは誰れ、
或は又た兩者兼ねて有名なるは誰れなりやを問へり。時にクリチアス
戸の方を眺め、數多の青年が聲高く互に語り合ひ、又た多くの群衆の其後
に従ひつゝ此方に入り來るを見たりしかば、余の注意も亦其方に向けり。
時にクリチアス曰く、ソークラテースよ、思ふに美に就いては、君は今や直
に判断を形成することを得べしと信ず。何となれば今此處に入り來ら
んとせる彼等青年は、現代の最大美の前衛にして、美なる彼れ自身も亦近
くに在る可ければなりと。

余曰く、美なる彼れとは果して誰れぞ、又た其父は何人なるぞ。

クリチアス答へて曰く、彼れ、名はハルミデース、余の従弟にして、伯父グ
ラウコンの子なり。思ふに君が此地を出立する時は、彼れ未だ十分成長

せざりしと雖、恐くば君は彼れを知れるなるべし。

余曰く、然り余は彼れを知れり、何となれば彼れ尙ほ幼き時、既に著名なりしを以てなり。而して今や彼れ已に青年となりしならん。

彼れ曰く、君は暫時の間に彼れが如何に進歩し、又何の如くあるかを見るべしと。此く言ひ終りし時恰もハルミデース此の所に入り來れり。

扱友人よ。余は何事をも判断すること能はず、又た美をも見分け能はざる朴訥漢なることは君の知れる所にして、たゞ白線は白墨もて畫きしものなりと知る如きのみ。何となれば余の眼を以てする時は凡て若き人々は皆な一様に美と觀ゆるを以てなり。然りと雖彼れの入り來りし其瞬間には、余は實に其美と其體格の完全とに驚きたることは之れを自白せざるを得ざるなり。又た世間一切の人々も必ずや彼れを頌美するなるべし。彼れの入り來りし時は、滿場驚歎、動搖し、而して彼れの戀愛者の一群は彼れに従ひて入り來れり。吾等の如き成長したる者が、此くの如く感動さるゝは敢て異しむに足らずと雖、少年者の如きも、同じく其美に感動し、幼き小兒に至るまでも、彼れを顧て、彼れは宛も彫刻せる肖像な

ハルミデース入
る

イクラアース
天に驚く

貌のみに非ず
體も美なり

るかの如く思へるなり。

ハイレフォン余を呼びて曰く、ソークラテースよ、君は彼れに就いて如何に考ふるや。彼れは實に美麗なる容貌を有せるに非ずや。

余曰く、然り彼の容貌や實に美なり。

彼れ曰く、然りと雖君若し彼れの裸體を見るとあらんには、彼れの容貌の如きは考ふる所に非ざるべし。彼れの身體や實に完全無缺なりと謂ふべし。

人々皆然りと同意せり。

余曰く、ヘーラクレスの神かけて云はん、若し些々たる一點を加ふる時は、恐くば他に此の如き完全なる儀範はあらざるべし。

クリチアス曰く、其加ふべきものは何ぞや。

彼れ若し高尚なる精神を有せばと謂ふにあり。クリチアスよ、彼れは君の親戚なりとのことなれば、又た必ずや高尚なる精神を有することを得ん。

クリチアス曰く、彼れ其外貌の美なるが如く、内心亦美にして善なり。

尙なる精神を
れに加へば完
の美なるべし

余曰く、然らば余は彼れに願ひて、其肉體に非ず、其精神を裸體となじ隠さず飾らず、吾等に示めさんことを求めて可なるか。彼れは今や談話を好む年齢に達し居るなり。

クリチアス曰く、彼れ必ず君の言の如くなすべし。且つ余は君に告げんに、彼れは既に哲學者たるのみに非ず、又た詩人にして、彼れ自ら其の事を信せるのみに非ずして、人々も亦然りと許るせり。

余答へて曰く、親愛のクリチアスよ、實に其等の材能は長く君の一家の特に有名なる所にして、ソ^{*}ローンより君にまで遺傳し來れるなり。されども君は何故にハルミデースを此方に呼び、吾等に彼を見せしめざるや、彼れ其外貌よりも實齡若しとするも、其の後見人たり又た從兄たる君の前に於て、吾等と談話するとも、毫も禮儀に於て缺くる所あらざるべし。

彼れ曰く、然らば余は彼を呼ばんと云ひつゝ從者に命じて曰く、ハルミデースを呼び、余が此方に來れと云ひし由を告げ、又た幸に醫師此處に在るあり、來つて一昨日余に語りし所の疾病に就いて診察を願ふべしと告げよと。クリチアス又た余に謂うて曰く、彼れ此頃毎朝起床するに當り

クリチアス、ハ
ルミデースを此
方に呼ぶ

頭痛を覺ゆる由を訴ふるなり。君は頭痛を治療するの術を知れることを、彼をして信せしむることを爲さざるか。

余曰く彼れ若し此に來らば、此事敢て難きに非ず。

クリチアス答へて曰く、彼れ必ず來らん。

彼れ命せられたる如く、來りてクリチアスと余との間に坐せり。満場

大に喜び、各々自己の側に彼れの席を爲さしめんとして力の限りに押し合ひ、遂に列の兩端なる者、一は立ち上り、他は横に推し倒さるゝに至れり。而して友よ余は君に自白せんに、今や余は自ら談話に拙なりとの感を起こし來り、大膽に彼れと共に談話するの力ありとの從來の自信は、全く消散し去りしなり。此時クリチアス彼れに告ぐるに、余は疾病を治療する人なることを以てしたれば、彼れ余を見つめて余に質問する所あらんとせり。其余を見つめたる容貌の美、形容すべからず。而して運動場にある人々は我等の周圍に群集し來れり。時に余は圖らずも彼れの衣服の内部を見て情火熱し來り、殆ど堪ゆ可からざるに至れり。余心に謂へらく、キユチアスはよく戀愛の真相を知れる者なるかなど。彼れ美少年の事

を言へる時、或人を戒めて曰く、「獅子をして牝鹿を見せしむること勿れ、必ず獅子の咋ふ所とならん」と。實に余は此時一種の獸慾に打勝たれんとせり。されども能く自ら其慾情を制御せり。而して彼れ頭痛を治療する方法を知れるやを問ひし時、余は辛くも其を知れる由を答へたり。

彼れ曰く其方法如何ん。

余答ふらく、余の治療薬は樹葉の一種類にして、之れに加味するに符呪マシナヒなるものを以てせざる可からざるなり。人若し此薬種を使用すると同時に、屢々符呪を反覆行使する時は、彼れの疾病は平癒して完全なる人となることを得べしと雖、若し夫れ符呪を加味せざる時は、薬種たる樹葉は何の効能もあらざるなり。

彼れ曰く、君の言に従ひて余は君より符呪を學ぶべし。

余曰く、此事を爲すには、余の同意を以てすべきか、將た又た同意を要せずとなすか。

彼れ笑ひつゝ謂うて曰く、勿論、ソークラテースよ、君の同意を以つて。

余曰く、よし。君は確かに余の姓名を知れりや。

彼れ答へて曰く、余如何でか君の姓名を知らざらん。君の名は吾等同輩の中にも常に嘖々たるのみならず、余は尙ほ小兒なりし時、已に君は從兄クリチアスと與にありしことを記憶すればなり。

余曰く、余は君が能く余を記憶せるを喜ぶ者なり。何となれば今や余は一層よく君に親み、前に困難を感じたる所の符呪の性質の説明を、尙ほ善く爲すを得べければなり。且つハルミデースよ、符呪なる者は單に頭痛を治療するのみに非ずして、尙ほ一層大なる効能あるものなり。人若し眼を病みて大醫に至りて治療を請ふや、彼れ必ず云はん、單に眼のみ治療さるべきものに非ず、眼を治療せんと欲せば、必ずや同時に頭部全體を治療せざる可からずと。これ君の嘗て聞きし所なるべし。又たもし頭部を治療せんことを望むものにして、單に頭部のみを治療し、身體全部は之れを治療するを要せずと云ふものあらんには、彼れ實に愚の極たるは君の知る所ならん。大醫等此く論じて其治療法を人體の全部に施こし、一局部を治療すると同時に、又た全體を治療せんことを力むべし。君は此くの如きは大醫の方法として其云ふ所なるを知るか。

彼れ答へて曰く、然り。

若し彼等の方法にして當を得たるものなりとせば、君は彼等の方法に賛成するか。

彼れ曰く、然り余は之れに賛成せん。

彼れ賛成の答へを爲したるに由り、余は自己に反へり、漸く自信の感を回復し、同時に又た體温の回復したるを覺えたり。余曰く、ハルミデースよ、此くの如きは符呪の性質なり。余の兵役にありし時、トレイケー王ザモルキシスの侍醫の一人は、能く人をして不死ならしめ得る者の一人なりとの世評あり。余は此人より符呪の事を學びたり。此トレイケーの醫師余に語るに、今ま余が君に語りしグレシアの醫師の説は、此點までは素より正しと雖、未だ完全の説ならざること、を以てし、且つ謂うて曰く、吾等の王にして又た神なるザモルキシスの言に曰く、「汝若し眼を治療せんと欲せば、頭部を治療することなくして、單に眼のみを治療せんとすること勿れ、若し身體を治療せんと欲せば、精神を治療することなくして、單に身體のみを治療すること勿れ。然るにへラスの醫師は、此の理を知らざる

トレイケー王ザ
モルキシスの説

局部と全身、身
體と精神

へラスの醫師の
不完全

「は原因とな

「精神より治

に由つて精
治療されど
上は身體或
部を治療せ

が故に、ヘラスの醫師には、疾病治療法の未だ知られざるもの甚だ多し。實に彼等は部分と共に全體を研究せざる可からざることを知らざるなり。而して部分は全體の治療さるゝに非ざるよりは決して善きこと能はざるなり」と。何となれば、身體たれ性質たれ、一切の善も悪も、彼れの言へる如く、盡く之れ精神に本源するものにして、一切精神より流出すること、眼の作用は頭部より發生するが如し。故に若し頭部及び身體全部の健全ならんことを求めば、先づ精神の治療より始めて着手せざる可からず、之れ第一の事たるなり。是故に親愛なるハルミデースよ、治療は先づ符呪の使用に由つて爲さざる可からず。而して符呪は美しき言葉たるなり。此符呪に由つて節制の念は精神中に扶植さるべく、節制の在る所には健康速に生じ、單に頭部のみならず、身體全部健康なるを得べし。かの余に治療法及び符呪を教へたる醫師、尙ほ特殊の處方を附加して教へて曰く、「何人ぞ雖も、先づ符呪に由つて精神の治療されんことを求むるに至るまでは、決して單に頭部のみの治療を承諾すると勿れ。何となれば今日醫術上の最大なる誤謬は、醫師たる者が身體と精神とを分離せしめ

別物として之れを視るにあればなり」と。且つ彼れ力を込めて、又た余に誓はしめて曰く「何人たりとも、如何に富めりとも、貴しとも、又た美なりとも、符呪なくしては決して彼れに治療を施こすこと勿れ」と。余は彼に誓ひたり、此誓ひは嚴守せざるを得ざるなり。故にハルミデースよ、君若し余をして君の精神に、先づトレーケーの醫師の教へたる所の符呪を使用することを許さば、然らば次に君の頭痛の治療に進まん。然らずんば余は他に君を治療する方法を知らざるなり。

クリチアス此談話を聞きて、謂うて曰く、若し頭痛に因みて其精神の改良進歩をなすことを得ば、頭痛は實に我親戚の青年に取つては意外の利益たるべし。ソークラテースよ、余は君に云はん、ハルミデースは多くの青年中、單に身體の美に於て卓絶せるのみに非ず、又た符呪に由つて與へられたる性質に於ても卓絶せり。此くの如きは、之れ君の所謂節制なるものには非ざるか。

余曰く、然り。

然らば余は此く君に向つて云ふことを得んか、曰く、ハルミデースは人

ルミデースは
間中最も節制
者

ルミデースの
先は人に優り
人なりしこと

間中最も節制のものにして、如何なる性質に於ても、決して其同輩に劣る
ことあらざるなりと。

余曰く、然り、ハルミデースよ。思ふに、君は凡て善良なる性質に於て他
の人々に優れる者ならざる可からず。若し余の見る所にして誤らずと
せば、汝ハルミデースよりも、他に優りて且つ高尚なる男子を生み出すを
得べき父母兩家を指名し得る者、一人としてあらざるべしと信ず。君の
父の家はドロビダスの子なるクリチアスの後裔にして、ドロビダス家は
アナクレオン、ソロン及び其他多くの詩人等の謳歌頌徳したる所にし
て、其美、其徳、其富貴、共に皆な有名なる者なり。又た君の母の家は同じく
有名なる家系にして、君の母系の伯父たるピュランペスは其骨相及び其
美に於て、ベルシア大王の宮殿に於て、或は又使節として、到る所大陸諸國
一切の所に於て、實に比儔すべき者なく、全家族、一點として他に劣る所あ
らざるなり。此くの如き美やむべき祖先を有せる君は、又た一切に於て
第一等の人物たらざる可からざるなり。且つ余の見る所を以てすれば、
グラウコンの子よ、君の外貌も亦決して君の祖先等に恥づる所あらざる

ルミデースの
貌の美

べしと信ず。ハルミデースよ、今ま若しクリチアスの言へる如く、君にして
て節制と美と、兼ねて之れを有せるに於ては、母の子として君は誠に幸福
の人たるべし。而して問題はたゞ此の事なり、若し君にして已に節制を
有せるとクリチアスの言へる如く、又た十分に節制ならんには、君は已に
ザモルキシスの符呪も、又たヒュ^{*}ベルボレオス人アパリス^ウの符呪をも要せ
ざる人にして、余は直に君の頭痛の治療に着手するを得ん。然りと雖
若し君にして是等の性質に於て尙ほ缺損する所ありとせば、余は藥劑を
投與するの前、先づ符呪を使用せざるを得ざるなり。故に願くは、君はク
リチアスが言ひし如く、果して節制の性質を有せるか、或は之れを缺損せ
るかを余に告げよ。

ハルミデース微笑せり、微笑は双頬に紅を潮し、彼れの美は愈々増せり、
これ恭謙は青年には優美なるものなればなり。ハルミデース、余の間ひ
し所に對し、容易に其の然り然らずを答へ能はざる由を語りて曰く、何と
なれば、若し余にして自ら節制ならずと云はゞ、之れ自己を悪言するもの
にして、甚だ奇異の感あるのみならず、又たクリチアス其他の人々が、余を

ハルミデースは
何を有せるや
を共に研究
せん

以て節制なりとせる彼等の言を虚言となすものたるべく、又た若し余は節制なりと云ふに於ては、之れ自己を稱賛せるものと云ふべく、嘉みすべきことに非ざるなり、是故に余は君に答ふるの言を有せざるなり。

余彼れに云ふて曰く、ハルミデースよ、之れ當然の答へなり。思ふに、君が果して此性質を有せりや否やに就いては、こゝに今ま君と余と共に研究せば如何ん。然らば余は、君の答ふることを好まざる所を強ふるの必要なければなり。若し然らずして藥品を投與するに於ては、余は輕卒なる醫師たるを免れざるなり。故に君若し好まば、余は君と共に研究すべしと雖、若し好まざるに於ては余は敢て強ふることなかるべし。

彼れ曰く、余は他に好める良法あるに非ず、願くば君の最も良しとせる方法に従つて進行して可なり。

余曰く、思ふに節制の何たるかを君に問ふを以て始むるは宜しかるべしと信ず。君若し節制を有するならんには、君は必ず節制に就いて意見を有するなるべく、節制其物は必ず其性質に就いて或る知識を君に與へ、君をして節制の概念を作ることを得しむるならん。然らずや。

彼れ曰く、余は真に然りと思へり。

余曰く、君はグレンシア語を使用する以上は、君が心中に有する所の此節制なるものは、果して如何なるものなるかは、君之れを説明することを得ん。

彼れ曰く、然り。

余曰く、然らば余は君が果して節制を有せりや否やの豫想を形成し得んが爲めに、君の見解に於ては、節制とは如何なるものなるかを余に告げよ。

● 始め彼れ躊躇して容易に答へざりしが、遂に、節制とは秩序を以つて靜かに事物を所理することにして、例へば市街を歩行し、言行し、或は此種の事皆な此くなすことなりと思へる由を語り、而して曰く、一言以て之れを蔽へば、余の見を以てすれば、節制とは靜穩なることなりと。

余曰く、ハルミデースよ、君の意見果して正しきか。節制とは靜穩なることなりとの意見を有するものあるは事實なり。然りと雖も此説果して眞なるや否や、吾等之れを討驗せざる可からざるなり。君、先づ余に告

節とは如何なるものぞ

第一、節制は靜穩なり

げよ、節制とは尊敬すべき善良なる事物の階級に分類すべきものなることを君は承認せりや否やを。

然り。

然りと雖君若し習字の師匠の許にある時は、同一の文字は速かに之れを書くを善とするか、將た又た遅く書くを善とするか。

速かに書くを以て善しとなす。

讀書するに當りては、速かなるを善しとするか、或は遅きを善しとするか。

速かに讀むを善しとなす。

「リラ」琴を弾き、相撲を爲すに當り、敏捷、機慧なるは、靜穩、遲鈍なるよりも遙かに善なるには非ざるか。

然り。

跳躍し、奔走し、其他身體の運動を爲すに於ても、迅速、輕快なるは善にして、遲鈍、不活潑及び靜穩なるは惡には非ざるか。

其は明かに然り。

余曰く、然らば一切身體の運動に於ては靜穩に非ず、たゞ最も輕快敏捷なるは最も高尙にして最上なるには非ざるか。

實に然り。

而して節制は善なるか。

然り。

若し節制にして善なるものならんには、然らば身體に關しては、靜穩に非ずして敏捷なるは節制の高尙なるものに非ずや。

彼れ曰く、然り。

余曰く、學問するに當り、容易に之れを學び得ると、困難して之れを學ぶと、何れか果して善なる。

容易に學び得るは善なり。

余曰く、然り、而して容易に學ぶは敏捷に學ぶことにして、困難して學ぶは靜穩、且つ遅々たるに非ずや。

然り。

人を教ふるに當つて敏捷活潑なるは、靜穩にして遅々として教ふるよ

りも善きに非ずや。

然り。

過去の事件を回想し、或は之れを記憶するに當り、敏捷、容易に之れを爲し得るは、靜穩、遅々たるよりも善きに非ずや。

然り。伶俐とは精神の機敏、捷慧なることにして、靜穩には非ざるにあらずや。

然り。

或は習字の師匠の言ふ所、或は音樂の師匠の云ふ所、或は其他の場合に於ける言語等、成らん限り遅々として會得するよりも、成らん限り敏捷に會得するは善なるに非ずや。

然り。

若し人、心に考窮、熟慮するに當り、余の想像する如く、最も靜穩に且つ又た困難なる思考に由つて考へ出す人よりも、容易に又た敏捷に之れを爲し得る人こそ稱賛さるべき價值あるに非ずや。

彼れ曰く、誠に然り。

身體上又た精神上、凡て敏捷活潑なるは靜穩遲々たるよりも明かに善なるに非ずや。

彼れ曰く、之れ推論上然らざるを得ず。

然らば此見解に従ふ時は、節制は靜穩に非ず、節制の生活とは又た靜穩なることに非ざるなり。何となれば節制の生活とは善良なるものと前定され居るを以てなり。而して此兩者中何れか其の一眞なり——即ち人生に於て靜穩なる行爲は敏捷活潑なる行爲よりも一層善なりと云ふことは、決して之れなき所、よし之れ有りとするも、極めて稀なることとなす。今若し大に讓歩して、數多の靜穩なる高尚なる行爲あること、尙ほ敏捷活潑なる高尚なる行爲の如しとするも、其行歩に於て、其談話に於て、又た其他の事に於て、節制は敏捷活潑に行爲するよりも以上に、靜穩に行爲することには非ざるべし。又た若し節制なるものは、吾等之れを善及び名譽なることの階級中に分類し、敏捷なることも、亦靜穩なることと同じく善なりと證明さるゝに於ては、靜穩なる生活は又た必しも敏捷活潑なる生活よりも一層節制なりとは云ふべきに非ざるなり。

節制は敏捷より
靜穩なることに
非ず

彼れ曰く、ソークラテースよ、思ふに君の言是なるが如し。

余曰く、然らばハルミデースよ。余は今一度云はん、君の注意を一定し、君の内心を省み、節制の與へし所の結果、及び其結果は如何にして生じたるやを思考せよ。是等の事を思考し、而して大膽なる青年の如く、節制とは果して如何なるものなるやを余に告げよ。

暫時無言の間に彼れ大膽に思考して余に謂うて曰く、ソークラテースよ、余の見る所を以てすれば節制は人をして能く羞耻せしめ、又た恭謙ならしむ、故に節制は恭謙と同一物なり。

余曰く、君は今ま節制は名譽のものなるを許したるに非ずや。彼れ曰く、然り其如く言へり。

節制は又た善なるか。

然り。

人を善となし得ざるもの、果して善たるを得るか。

否な。

節制は單に名譽のものよみに非ずして、又た善なりと君は推論するこ

とを爲さざるか。

然りこれ實に余の意見なり。

余曰く善し。然りと雖、君は必ずやホメーロスの

「謙必しも善に
す」

「恭謙は足らぬ人には善ならず」

との言に同意するなるべし。

彼れ曰く、然り余は此言に同意す。

然らば恭謙は善たり、又た善たらずと假定せざる可からず。

明かに然り。

然りと雖も節制はたゞ人を善となすとも、決して惡となすことなく、常に善たるものなるや如何ん。

蓋し君の言へるが如くならん。

若し節制は善なりと雖も、恭謙は善たり又た惡たりとせば、節制は恭謙と同一物に非ざること推論し得るに非ずや。

ソークラテースよ。余に取つては凡ての事皆な正しき道理ありて眞理なりと見ゆ。然りと雖も余は或人が節制を定解して「節制とは吾等自

解第三、節制
は自己の業務
爲すこと

これクリチアス
入れ智慧なり

己の業務を成すことなり』と云へるを記憶せり。君は此説明に付いて如何に考ふるや、願くは余に教へよ。此言を爲せる彼れは果して正當なるや否や。

余曰く、あゝ若き怪物なる君よ、こは之れクリチアス或は他の哲學者が君に語りしものなるべし。

クリチアス曰く、何人が語りしなるべし、余は實に語りしことなし。

ハルミデース曰く、何人より是れを聞きたりとも、そは差支へなきに非ずや。

余答へて曰く、然り何の差支もあることなし。問ふ所は、何人が之れを言ひしやと云ふに非ずして、此言の眞なりや否やと云ふにあればなり。

彼れ曰く、ソークラテースよ、君の言へるが如し。

余曰く、それ然り、然りと雖余は是言の果して眞理なるや、將た又た誤謬なるやを發見し得るやを自ら疑ふものなり、何となれば此言實に一種の謎語たればなり。

彼れ曰く、君が是言を以て謎語なりと考へしは果して何の據る所ぞ。

言は謎語なり
に意味あるべ

余曰く、余に取つては、此言を爲せし人は、或る一事を言へる如く思はるゝと雖、その實他事を意味せる如くに思はるゝなり。例せば、書記なるものは、彼れ読み或は書ける時は、何事をも他に爲し居らずと云ふべきか。

余は寧ろ彼れは何事をか爲し居るものなりと信ず。

然らば書記は單に君の姓名のみを読み、或は書き、或は君等少年に之れを読み或は書くことを教ふるか。又た君は自己及び朋友の姓名を書くと同じく又た敵の姓名をも書きたるか。

然り、其一方を爲す如く他も亦之れを爲すなり。

而して此く爲すことに於て、何等かの障礙あり、又た不節制ありしと云ふべきか。

否な、決して此の事あるなし。

若し讀書寫字等は、爲すことと同一なりとせば、君は自己の職業に非ざるものを爲しつゝありと謂ふべきには非ざるか。

されども是等讀書寫字等は、爲すことと同一たるなり。

友よ。醫術、建築、織物術等其他技術に由つて爲す所のものは、何事も皆

眞なる國民は自ら織り自ら自己の器物等を作らざる可からざるか

節制とは自己の業務のみを爲すことには非ず

な稱して「爲すこと」と謂ふべきか。

然り。

君は一國若し法律を以て人々に命じて、皆な自己の衣服を織り、自ら之れを洗ひ、自己の靴、自己の小瓶、自己の垢刷り、其他一切自己の器物は自己之れを製造せざる可からざらしめ、人々皆此方針に由つて自己の分のみを盡くし、自己の分に非ざるものは、毫も之れに干渉することなとせば、此くの如き國家は、最も善く治まれる國家なりと謂ふべきか。

彼れ曰く、余は然りと考へざるなり。

余曰く、されども節制なる國家は最も善く治まれる國家なるべし。

彼れ答へて曰く、勿論なり。

余曰く、然らば節制とは自己の業務を爲すことには非ざるべし。少なくとも此くの如き状態に於て自己の業務を爲すことに非ず、又た此種の事を爲すことにも非ざるべし。

然り。

是れを以つて今ま余の言ひし如く、節制とは、自己の業務を爲すことな

りとの言中には、他の隠れたる意味の存せることを知るべし。余は是言を爲せる人を以て、單に言語の表面の意味を以て之れを言へるが如き愚人なりと思はざるなり。ハルミデースよ、是言を君に告げし人は或は愚人なりしか。

彼れ答へて曰く、否な、余は彼は實に智者なりと思へり。

然らば確かに之れ謎語として彼れの言へる所なるべく、而して自己の業務の何たるやを知るの困難なることを寓言せるものなるべし。

彼れ曰く、余は敢て然りと云はん。

然らば人は自己の業務を爲すとは果して何を意味せるや、君之れを余に告ぐることを得るか。

彼れ曰く、實に余は能はざるなり。且つ余は此言を爲せし人も、自己の言へる所の意味を了會せざる者なりとするも、余は別に驚かざるなりと。此く言ひつゝ、詭はりて笑ひながらクリチアスの方を向けり。

クリチアスはハルミデース及び其同輩の人々と共に名譽を維持せざる可からざるを感じ、ハルミデースの問答中、已に不安の状態にありしと

自己の業務をなすとは何を意味す

クリチアスの不平の状態

雖も、尙ほ暫く其情を壓して沈黙し居たるが、此に至つて禁する能はざるの態度を示めせり。其態度たるや、前にハルミデースが節制に就いて答へたる所は、實はクリチアスの教へたるものなりとの余の疑念を晴らす所のものたりしなり。ハルミデースは今や自ら答ふことを好まず、クリチアスを激して答へしめんとして自ら議論に破れたることを自白せしかば、クリチアス大に怒り、殆どハルミデースと喧嘩せんかと思はるゝ如き趣を呈せり。宛もこれ詩人が其作りし所を、舞臺に於て俳優之れを吟誦するに當つて、其美を壞りしを怒るが如くなりき。而してクリチアス色を變じてハルミデースに言うて曰く、――

ハルミデースよ、汝は節制の定解に就いて、自ら之れを了會せざるが故に、其定解者も亦自ら其言ふ所の意味を知らざる者なりと思へるか。

余曰く、敬するクリチアスよ。素より彼れの年齢に於ては未だ十分の理解は決して望むべからざるなり。然るに君は年長者にして又た學問ある人物なれば、かの節制の定解の意味は了知せるものと云ふべし。君若し此定解に於て、ハルミデースと同意なりとせば、余は寧ろ君と共に此

クリチアスとの
議論となる

定解の眞否を討論せんことを望む。

クリチアス曰く、余は全然ハルミデースと同意にして、此定解を承認する者なり。

余曰く、然らば余の間ふ所を繰り返へすことを許るせ—君は、余が今ま言ひしが如く、凡て職人等は或物を作し或は爲すと云ふことを承認するか。

然り。余は之れを承認す。

彼等は單に自己に關するものよみに非ずして、又た他人のものをも作し或は爲すか。

彼等他人のものも亦作し或は爲すなり。

彼等果して節制なりと云ふべきか。彼等は自己の爲めのみのことを爲さず、又た彼等自身の業務のみをも爲さざるに非ずや。

彼れ曰く、何を以て彼等節制ならずと云ふや。

余曰く、余に於ては何等の故障も存するなしと雖も、節制を定解して、自己の業務を爲すことなりとし、同時に又た、他人の業務を爲す者は節制な

職人等は自己の
事のみを爲すか
他人の事も爲
すか

作すと爲すとの
區別

らずとするの理由なしとせる人にとつては矛盾なるべしと信ずればなり。

彼れ曰く、否。余は他人の業務を爲す所の人は節制の人なりと承認したることあるか。余はかの之れを「作す」者は節制なりとは言ひしと雖も、之れを「爲す」者とは言はざるなり。

余は問うて曰く、君は「作すこと」と「爲すこと」とは同一に非ずとするか。

彼れ答へて曰く、「作すこと」と「働くこと」との同じき以上に同じからざるなり。余は之をヘシオドスに學べり、曰く、「職業は不名譽に非ず」と。今若し職業なるものにして、君が云へる如き、例へば靴を製造し、醋を賣り、或は悪名ある家に傭はれて其所にある等の如きものならしめば、ヘシオドス、尙ほ此等の職業をも不名譽に非ずと云ふべきか。ソークラテースよ、此くの如きは想像さるべきに非ざるなり、余思ふにヘシオドスも亦作すとは、之れを爲すと、及び働くこととは異なるものとして區別せるが如し。今若し不名譽なる職業に従事する時は、作すこととは、時に不名譽のことたるべしと雖も、職業其物は決して不名譽のものとしせしには非ざるなり。實

ヘシオドスの言

クリチアスのヘシオドスの言の
解釋

ソークラテース
用語を區別する
ことを好む人な
るプロイデコス
を想起す

にヘシオドスは、凡て高尚に有益に作したることを以つて職業なりとなせばなり。而して彼れ此くの如く作したることを呼びて「働くこと」及び「爲すこと」と云ひ、此くの如きを人間の正常の業務となし、有害なることは業務と云ふべからずと爲せるものなりと想像せざる可からず。此意味に於てヘシオドス及び其他の智者等は、能く自己の業務を爲す所の人を智者と云ふことと想はるゝなり。

余曰く、嗚呼クリチアスよ、君が口を開きしや否や、余は、君が人間に至當なるもの、及び各自々己のものを以つて善となし、善を「作すこと」(ποιεῖς)を以つて「爲すこと」(ποιεῖς)なりと稱するを知れり。プロイデコスも亦物の名稱に就いて無限に細密の區別を爲す人なるを聞けり。而して君が如何なる意味を以つて名稱を定むることも、そは君の好むがまゝにして、余に於ては何の異存もあることなし。たゞ君が其名稱は何を意味せるかを余に告ぐれば可なり。事甚だ枝葉に亘れり、今や本論に立ち歸へらん、願くは今少しく平易ならしめよ。君は此の善行を「爲すこと」、「作すこと」或は其他君の好む所の如何なる言語なりとも可なり——此の行爲は之

れを節制なりと稱するか。

彼れ曰く、然り節制なり。

然らば悪を爲すに非ず、善を爲す所の人は節制なるか。

彼れ曰く、然り、而して君之れに同意なるや。

余の同意なると不同意なるとは君心に之れを介する勿れ。余は尙ほ君の意味する所を問はんとせるものなればなり。

彼れ答へて曰く、余は凡て善に非ず、悪を爲す人は節制に非ず、節制なる人は善を爲す人にして、悪を爲す人に非ずと云はんと欲す。余は平易なる語を以て節制を定解せば、善行を爲すことなりと云ふにありとす。

余曰く、君の言甚だ正當を得たるものと如し。然りと雖余の尙ほ聞かんと欲する所は、節制なる人は自己の節制なるを知らざるものと君は想へるや否やにあり。

彼れ曰く、余は然りと想はざるなり。

職人等は自己の職業を爲すと共に、又た他人の職業を爲せりとも尙ほ節制たるを得とは少時以前に君の言ひし所に非ざるか。

定解第四、節制とは善行を爲すこと

節制なる人は自己の節制なるを知らざるか

彼れ答へて曰く、然り余はしか言へり。されども君何の爲めに是れを問ふや。

余は特殊の道理あるに非ず、たゞ余の君に聽かんとする所は、醫師が患者を治療することは、自己に善なると同時に、又た他人にも善なるや否やと云ふことなり。

余思ふに兩者共に善なるべし。

是れを爲す所の人は能く其義務を盡くせるものと云ふべきか。然り。

其義務を盡す人は、又た節制に且つ智慧ある行爲を爲すに非ずや。

然り彼れや智慧ある行爲をなすものなり。

然りと雖も醫師は必ず如何なる時は其治術は有益にして、如何なる時は有益ならざるやを知り、又た職人等の爲す所の業務は如何なる時は利益を得、如何なる時は利益を得ざるや、必ず先づ之れを知らざる可からざるか。

何ぞ必しも然らん。

自ら節制にして
其節制たるを知
らざることを得
るか

クリチアス前言
を撤回す

クリチアス自知
を貴ぶ

デルフォイ神社
の額書なる「己
を知れ」の語
のクリチアスの
解釋

余曰く、然らば彼れ、時に善を爲し、又た時に惡を爲し、而も彼れ自ら何を爲せるやを知らざるとあらん。されども君の言へるが如く、善を爲すに於ては、彼れ尙ほ節制に且つ智ある行爲を爲したりと云ふべしとは、君の意味せる所に非ずや。

然り。

然らば彼れ善を爲すに於て、思慮あり、且つ節制なる行爲を爲し、以て智あり、又た節制たるを得るが如しと雖も、而も彼れ自己に其の智慧を有し、又た自ら節制なる者たるを知らざることあるを得るか。

彼れ曰く、然りと雖、ソークラテースよ、此はあり得べきに事に非ず。故に若し君の言へる如く、是れ余の許容したる前言よりの推論なりとせば、余はかの自ら知らずとも、尙ほよく節制に、又智者たることを得べしとの結論を承認せんよりも、寧ろ前言を撤回し、敢て自己の誤謬なりしことを自白するを憚らざらん。何となれば余は實に自知を以て知識の眞髓なりとするの説を持せるものにして、此點に於てはデルフォイ神社に奉納せられたる「己を知れ」の額書の言と全然一致せるなり。若し余の見にし

「己を知れ」とは
節制なれと云ふ
ことを意味す

クリチアス人々
の此格言の解釋
を以て誤解とな
す

て誤らすとせば、此言たる、此神社に入り來る者に對して、神が爲す所の摺
 挨の一種なりと謂ふべく普通の挨摺に於て「御機嫌克く」と云はんよりも
 「節制なれ」と云ふは遙かに優れる挨摺なるが如しとなす。思ふに此額を
 献納したる人の眞意たるや、神は普通の人の言ふが如く言ふものに非ず
 して、參拜者此神殿に入るや、第一に聽く所の神語は「節制なれ」と云ふもの
 ならしめんとせしものなりと信ず。而して彼れ宛も豫言者の如く、謎語
 の如く之れを發言したるものなり。何となれば、「己を知れ」と云ふことは
 余の言ふ如く、又額書の意味の包含せる如く、「節制なれ」と云ふことと同一
 たればなり(αυθιμοσύνη, ὑποταγή)。然るに此言容易に誤解さるゝなり。而
 して此後の賢人等「過多なる勿れ」或は「誓を爲さば惡事近に在り」等の言を
 附加したるありと雖、皆なこれ額書の眞意を誤解せるものなり、何となれば
 彼等は「己を知れ」との言を以て、人が神社に入り來る時、神が其人に爲す
 所の摺挨なることを知らずして、神が人に與ふる忠告の一種なりと想へ
 るに由る。而して彼等誤りたる見解を以て彼等の言語を附記し、以て同
 じく有益なる忠告を與へんことを期せり。ゾークラテースよ、余が何故

に此く云ふかを君に語らんか。余の目的たるや、是れまで論じ來りたる所は君と余との是非判定すべからず、殆ど明瞭なる結果を得ざりしを以て、こゝに前來の談論を棄て、話頭を一轉して新問題に入り、節制は自知なりとなすことに就き、君若し反對の意見あらば、余は之れに對して證明する所あらんと欲するにあり。

余曰く、然りと雖クリチアスよ、君は余が問へる所の此問題に就いて、余を以て知れる所あるものなるかの如く、又た若し余にして許容するに於ては、余は君に同意し得る者の如く余に向つて論じ來ると雖、余は君と同じくたゞ君の提出したる論題に就いて考窮するものたるに過ぎざるなり。故に考窮し終らば、余は君に同意するや否やを告げん。願くは暫く余に思考の時間を與へよ。

彼れ曰く、然らば思考せよ。

余答へて曰く、余は思考し、而して節制或は智慧なるものは、何物かの知識を含むものなりとせば、是れ學術にして、何等か或る物の學術ならざる可からざることを發見せり。

節制は其物自身
の學術

彼れ曰く、然り其物自身の學術なり。

余曰く醫術は健康の學術に非ずや。

然り。

余曰く、假定して、君若し余に問ふに健康の學たる醫術の効能を以てせんか、余は醫術の健康増進に於ける大なる効能を言はふ、君は、醫術は大なる効能あるものなることを許容するならんか。

然り之れを許容せん。

君若し余に問ふに、建築術の効用或は結果を以てせんか、余は家屋なりと答へ、其他の技術に對して又た其種々の結果を答へん。而してクリチアスよ、余は君が節制或は智慧に就いて、同様なる疑問に答へんことを求めむ。而して君の説に由れば、節制或は智慧なるものは、其物自身の學術なりとせば、今其説を許容し置き、而し余の願ふ所は、一々指名すべき價值ある如何なる善事業は節制或は智慧の呈したる結果なるやを余に告げんことなり。

彼れ曰く、ソークラテースよ。此くの如きは、討究を進行せしむる眞の

其物自身の學術
は如何なる事を
爲すものなるか

方法と云ふ可からず、何となれば智慧なるものは、他の諸學術の相互相似たる如きものに非ざればなり。然るに君は、智慧も其他の諸學術も、互に相似たるものとなせるが如く論じ進めばなり。且つ余に告げよ、家屋は建築の結果なり、衣服は機杼の結果なり、其他種々の物は又た種々の技藝の結果なりと云ふが如く、算術及び幾何學等は如何なる結果あるやを。君は是等のものに、何等か此くの如き結果あることを證明し能ふか、或は能はざるか。

余曰く、君の言へる所や眞なり。然りと雖も是等の學術は皆な其學術とは異なる所の目的を有せるなり。余は君に告ぐることを得ん、算術は奇數偶數の、是等自身及び相互の數の關係を扱ふものたることを。然らずや。

彼れ曰く、然り。

されども奇數偶數は算術其物とは同一物に非ざらん。

然り、同一物に非ざるなり。

計量術は輕重を扱ふものなりと雖も、計量することは之れ一事、輕重は

別物なり。君之れを承認するか。

然り。

然らば、余の聞かんことを願ふは、智慧にあらざる所のものは何、又た智慧は學術なりと言ふ所の者は何たるやにあり。

彼れ曰く、ソークラテースよ、君は今ま將に古より爲し來りし所の誤謬に陥らんとせり。君は智慧と他の學術との異なる所は如何んと問ひ始めながら、今又た智慧と學術とは同様なる點あるを發見せんとせり。然りと雖是等は同様に非ず。何となれば凡て他の諸學術は皆な他の或る事の學術にして、其物自身の學術に非すと雖、たゞ智慧のみは諸他の學術の學術にして、又た其物自身の學術たればなり。此事に就いては君は十分善く悟れる者なりと信ず。且つ君は眞率に議論することを爲さずして、たゞ余の説を論破するを以つて目的となし、而も之れを否みつゝも現在尙ほ之れを爲せるなり。

余は果して君を論破せんと爲しつゝあるか。君は果して如何に思へるか。余の辯論中毫も他の意志あるに非ず、たゞ余が時々知らず識らず

學術と智慧との
相違

クリチアス、ソ
ークラテースは
人を論破せんこ
とを目的とせり
と詰る

ソークラテース
たゞ研究の意志
あるのみと答ふ

議論の勝負は目
的に非ず

智慧は其物自身
の學術にして又
た諸他の學術の
學術なり
又た無學術の學
術

自ら知らざる所を知れるが如く空想せんことを恐れ、以て自己を討驗せんとこの意志に外ならざるなり。此くの如き場合に於ては、主として余一身の爲めに研究を進むるものにして、多少又た余の朋友を益せんが爲めこの思想も存するなり。何となれば物の真相を發見するは、人間一般に善なることなればなり。然らずや。

彼れ曰く、實に然り、ソークラテース。

余曰く、然らば君願くば心を靜めて、余の問ひし所に答へよ。クリチアスが論駁さるゝかソークラテースが論駁さるゝかは吾等の問ふ所に非ずして、たゞ議論其物に注意し、而して論駁の結果を見ることを力めんのみ。

彼れ曰く、君の言正理なり、余は君の言へるが如くすべし。

余曰く、然らば君は智慧に就いて確言せんとする所を余に告げよ。

彼れ曰く、智慧は其物自身の學術にして、又た諸他の學術の學術たる唯一の學術なり。

余曰く、學術の學術は、又た無學術の學術なるべし。

彼れ曰く。真に然り。

然らば智者或は節制なる人たゞ此種の人のみ能く彼れ自身を知り、又た自己の知る所知らざる所を驗し、又た他人の知るを知り、又た彼等の知れる所は真に知れるものなりやを考へ、又た彼等真に知らずして、以て自ら知れりと想像することの、眞の知れるに非ざること、を判定するを得べし。其他の人は決して此くの如きことを爲すこと能はざるなり。實にこれ智慧或は節制、及び自識たるなり。而して自識とは能く自ら其知る所、知らざる所を知ることなりと謂ふべし。是くの如きは君の意味する所なるか。

彼れ曰く、然り。

余曰く、然らば此第三の議論即ち最終の議論を大神ゼウスに献納し置き、余をして再び始めて、左の間を爲すことを許るせ。第一、此知識は君の知れる所及び知らざる所を、知ることを得、又た知らざることを得るや否や。第二、若し此事有り得るとせば、此くの如き知識は果して如何なる用をか爲す。

彼れ曰く、是れ吾等の考究せざる可からざる所なりとす。

余曰く、余の今ま此に君に望む所は、君は、余が自ら陥りたる困難より出で得る道を開かんこと之れなり。余は其困難を語らんか。

彼れ曰く、之れを語れ。

君の、是れまで言ひし所は、要するに此くの如きには非ざるか、曰く、此に學術なるものあらざる可からず、而して其學術たるや、全然其もの自身の學術たり、又た諸他の學術の學術たり、而して同時に又た無學術の學術たらざるべからずと。

然り。

然りと雖、熟考せよ、君の言や眞に奇怪なりと云ふべし。故に之れと並行せる如何なる同様なる場合に於ても、此くの如きは不能のことたるは瞭然たるなり。

其意味如何ん、又た君の所謂場合とは如何なることぞ。

場合とは此くの如き事なり。今こゝに視覚ありと假定せよ、而して其視覚たるや普通の視覚に非ずして、視覚其物の視覚なるか、或は他の種類

アリチアスの位
の困難

ノクターテース
の學術なる
のありやを問
の視覚なる

の視覚の視覚なるか、或は又た其等の不完全なることの視覚たるなり。而して此視覚の視るに當てや、何の色をも見ることなく、たゞ視覚自身及び視覚の他の種類を視るのみ。君は此くの如き視覚なるものありと思ふか。

決してあることなし。

或は何の音響をも聴くことなく、たゞ聴くこと其物、及び聴くことその他種類、或は是等の缺點のみを聴くと云ふ聴覚ありとなすか。

否、あることなし。

或は一切の感覚に就いて云はんか。感覚は其目的物を知覚することなくして、單に感覚其物、及び他の諸感覚の感覚なるものありと君は想像するか。

余は然か想像せざるなり。

或はこゝに欲望なるものありて何の快樂の欲望にも非ず、たゞ欲望其物の欲望、及び其他一切の欲望の欲望と云ふものあるを得るか。

決してあることなし。

視覚の視覚

感覚と其対象

欲望の欲望なるもの

愛の愛

或は願望なるものありて、何の善を願望するにも非ず、たゞ願望其物、及び他の凡ての願望を願望すと云ふ願望なるものありと、君は思ふか。
余は否と答へん。

或はこゝに愛あり、其愛たるや美を愛するにも非ず、たゞ愛其物、及び他の諸愛を愛すと云ふ愛ありと、君は言ふか。

余は之れ有りと言はず。

或はこゝに恐懼あり、其恐懼たるや恐懼其物、及び其他諸恐懼の恐懼にして、恐懼の目的物なき恐懼なるものありと知るか。

余は此くの如きものあるを知らず。

或はこゝに意見なるものあり、其意見たるや意見其物、及び他の意見の意見にして、意見全體の主旨の意見なき意見なるものあるを得るか。
否な、決して之れなし。

然りと雖、吾等今ま内容なき此種の學術ありとなし、之れを稱して其物自身及び他の諸學術の學術となせり。之れ君の立言せる所なり。若し之れ眞理なりとせば、實に奇妙なるものと言はざる可からず。然りと雖

恐懼の恐懼

意見の意見

内容なき學術ありや否や

未だ以て全然此種の學術はあり得べからずとして否定すべからず、吾等
寧ろ之れを考究せんと欲す。

然り、君の言や正しと云ふべし。

然らば吾等の言へる所の此の學術は、或るものゝ學術にして、又た或も
のゝ學術たるべき性質のものなるか。

然り。

宛も之れより大なるものは或物よりも、より大なるべき性質のものな
るが如きか。

然り。

若し他物がより大なりとせらるゝ時は、其物はより小なるべきか。

然り。

爰に一物あり、其物は其物自身より大なると同時に、又た他の大なる物
よりも大なりと雖、之れを他の大なる諸物に比較する時は、其物却つて小
なりとせば、此物は其れ自身よりも大なると同時に、又た小なる性質を有
せりと爲すべきか。

大小の相関なる
こと

彼れ曰くソークラテースよ、之れ避くべからざる推論たるべし。

爰に二倍なるものあり、其物若し其れ自身の二倍及び他の二倍なるものゝ二倍なりとせば、是等は半なりと云ふべきか。何となれば二倍は半と相關のものなればなり。

然り。

其物自身よりも大なるものは、又た其物自身よりも小たるべく、其物自身よりも重きものは、又た其物自身よりも輕かるべく、其物自身よりも老たるものは、又た其物自身よりも若かるべし。其他の諸物亦然り。凡て自體其物に相關の性質を有せる所のものは、又た其對象の性質を保有すべし。例へば聽覺とは音響を聽くことなりと言ふが如し。此く言ふは眞理なるや如何ん。

然り。

然らば、聽覺が聽覺自身を聽くとは音聲を聽くことならざる可からず、何となれば他に聽くべきやうあらざればなり。

然り。

敬する友よ。視覚が視覚自身を視るとは、又た色を見ることなるべし、何となれば色なくして視覚は視ること能はざればなり。

君の言へるが如し。

クリチアスよ。然らば君は今ま吾等の擧げたる數例に由つて自體其物に關する概念は、全く許容すべからず、又た他の場合に於ては殆ど信すべからざることを知りしなるべし。其許容すべからざることは、大いさ、數、及び其他此種の場合に於て殊に其然るを知るべし。

甚だ眞なり。

然りと雖聽覺、視覺、自動力、燒燃力等の場合に於ては、自己との此關係は、或者は之れを信すべからずとなすと雖、他の者は必ずしも信すべからずとせざるなり。而して何物も自己に關係の固有の性質なるものを有するものあらざるか、又た或物のみは之れを有せるも其他は之れを有せざるか、若し自己關係の事物の階級なるものありとせば、此の階級の中に、智慧或は節制の學術は包含さるゝものなるやは、大人物出でゝ吾等の爲めに、満足に之れを決定せんことは、吾等の希望する所たるなり。余は自ら

此問題の解釋は大人物の出づるを待つ

ソークラテースの學術なるものも存在を信じ能はず

此學術の効用を
辨ふ

ソークラテース
(一) 學術の學術
なるもの成立
の可能及び(二)
其利益ありとの
ことの證明を要
求す

之れを決定するには、全く自己の力を信せざるものにして、余は此くの如
き學術の學術なるものありとの事に就ては全く確知し能はざるなり。
若し此くの如きものありとするとも、是等は吾等に何等かの善を爲すや
否やを見能ふに非ざるよりは、決して智慧或は節制たることを承認する
ことを欲せざるなり。何となれば、余は節制は有益にして善なりとの觀
念を有すればなり。是故に、クライスフロスの子よ、君は節制或は智慧は、
學術の學術たり、又た無學術の學術たるを主張せるを以て、余は前に言へ
るが如く、第一に此くの如き學術の成立の可能、第二に其利益あることの
證明を君に要む。若し能く之を證明せば節制の見解上、君の意見は正當
なりとの結論に達し、余を満足せしむることを得べし。

クリチアスは余が此く語るを聞き、余が困難の立場にあるを察したり。
時に彼れの前に在りし一人欠伸し、他の一人又た之れに感染して欠伸せ
り。而して彼れ余の困難の立場にあるに由つて益々困難に陥りたり。
されども彼れは名譽を維持せんことを力め、人々の前に於て、余の挑戦に
應ずる能はず、又た問題を論決する能はざるを自白することを耻ぢ、其混

ソークラテース
クリチアスに
條の活路を興へ
話頭を一轉す

其物自身の知識
を有せる者は自
己を知る

ソークラテース
知れる所知らざ
るものも効用を
問ふ

惑を隠蔽せんとして、無意味の辭柄を爲せり。然りと雖余は議論を進捗せしめんが爲めに、彼れに此く云へり。曰く、クリチアスよ、君若し好まば、吾等はこゝに此の學術の學術なるもの或は有り得べしと假定し、而して此假定は果して正しきものなるや、將た又た然らざるやの討窮は之れを後段に譲り假りに十分之れを許容したる後、君は吾等に告ぐるに、此くの如き學術、即ち吾等が言ひ來りし所の自識或は智慧なるものは、吾等をして知る所、知らざる所を區別するを得しむることを以てするか。之れ吾等が與に論じ居たる所たるなり。

彼れ曰く、然りソークラテースよ、其は眞に然るべしと余は思惟す。何となれば、かの、其物自身を知る所の學術或は知識を有せる人は、其有せる知識の如くなるものにして、之れと同じく迅速なることを有せる人は迅速なるべく、美を有せる人は美なるべく、知識を有せる人は能く知るべし。之れと同じく其物自身の知識たる知識を有せる人は、又た彼れ自己を知れりと謂ふべし。

余曰く、人若し自識なるものを有せる時は、彼れ自己を知るべきことは

敢て余の疑はざる所なり。然りと雖彼れ其知れる所、知らざる所を知る所の自識なるものを有することは果して如何なる必要かある。

何となればソークラテースよ、是等同一なればなり。

余曰く、或は然らん、然りと雖余は尙依然として頑冥固陋たるなり。何となれば余は尙ほ此の、君が知る所及び知らざる所を知ることとは、自識と同一なりとの理を了解せざればなり。

彼れ曰く、君の言何をか意味す。

余答へて曰く、余はこゝに、學術の學術なるものあるは之れを許容すべしと雖、此もの果して、兩者中、一は學術或は知識なりと雖、他は然らざることを決定する以上の事を爲すを得るか。

否な、たゞ其れに止まるのみ。

然らば健康の知識を有することゝ、其知識を有せざることゝは、正義の知識を有することゝ、其知識を有せざることゝ同一なるや如何ん。

確かに同じからず。

一は醫術上のことにして、他は政治上の事なり。然りと雖、吾等の論せ

る所は、純粹且つ簡單の知識に關したることなりとす。

眞に然り。

若し人、たゞ知るのみ、而してたゞ知識の知識を有し、其他衛生及び正義等の知識を有せざる時は、恐くは彼れたゞ或事を知り、又た彼れ自身に關し、或は他人に關したる或る知識を有せることを知るのみと云ふべし。

眞に然り。

されども此知識或は學術なるものは、其の知れる所の事を知らしむるやう、如何にして、彼れに教ふるや。例へば彼れ衛生を知るとせば、之れ智慧或は節制の教へたる所に非ずして、醫術が彼に教へたるなり。和聲は音樂術の教ふる所、建築は建築術の教ふる所。智慧或は節制之れを教へしに非ず、其他亦然り。

そは瞭然たり。

然りと雖、たゞ知識の知識、學術の學術と稱せらるゝ所の智慧は、如何にして衛生或は建築等を教ふるや。

教ふることを能はざるなり。

内空の知識

諸種の知識は、
或は智慧の教
へたるものに非
ず

學術の學術は、
衛生も何を教へ
能はず

學術の學術なるものは知る或は知らずと云ふことを知るのみ

學術の學術の實の試験

愚判別の川をアさず

師の用を爲さ

然らば此事を知らざる者は、たゞ知れりと云ふことを知れのみにして、彼れの知る所の物の何なるやは知らざるに非ずや、

然り。

然らば智慧或は智者たることは、吾等の知る所或は知らざる所の事物の知識に非ずして、たゞ吾等の知る、或は知らずと云ふことの知識たるに過ぎざるが如し。

そは推論上然る所。

然らば此知識を有せる者は、此に虚託者ありて之れを知れりと云ふこと雖、彼果して眞に之れを知れりや否やを吟味すること能はざるべく、彼れたゞ或種類の知識を有せることを知るのみ。されども知識の如何なるものなるやは、智慧の教へざる所に非ずや。

智慧の教へざる事なるは明瞭なり。

彼れ又た醫術上に於ても、眞の醫師と虚託者とを區別すること能はず、又た知識上に於ても、眞の教師と虚偽の教師とを區別すること能はざるべし。吾等此くの如き如き方法を以て、此事を考究するを要す—今ま若

し智者或は其他の人にして、眞の醫師と虚偽の醫師とを區別せんとするに當り、彼れ將た如何にせば可ならんか。彼れ必ず其人と語るに、醫術上の事を以てすることなかるべし、何となれば、之れたゞ醫師の理解する所のものたる可ければなり。

然り。

而して彼れ醫師は必ずかの學術に就いて知る所あらざるべし。何となれば此學術は智慧の範圍に屬すべきものと前定され居るを以てなり。眞に然り。

されども、若し醫學は此の所謂學術なりとせば、醫師は全く醫術に於て知る所あらざるべきなり。

確かに然り。

然らば此智者は、醫師は學術或は知識の或種類のものをも有せることを知ると雖、彼若し其學術の性質を知らんとするに當ては、其學術の目的物或は對象を知らんことを要す。何となれば凡て種々の學術は、學術として區別あるに非ずして、たゞ其目的物或は對象の性質の異なるに由るのみ

學術の區別あるは對象を異にせしむるに由る

なればなり。然らずや。

然り。君の言や眞なり。

醫學が他の諸學術と區別さるゝは、健康及び疾病を目的物とせるが故に非ずや。然り。

若し人醫學の性質を研究せんと思せば、之に關せざる他の事に非ず、必ずや健康及び疾病の研究に進まざる可からざるに非ずや。

眞に然り。

而して正しき判断を下し、以つて醫師の醫師たることを明かにする者は、是等に關したる事に於て判定すべきなり。

必ず然らん。

其の言ふ所の眞なるや否や、其爲す所の正當なるや否やは、是等に關したる事に於て判すべきに非ずや。

然り、彼れ然かすべし。

然りと雖醫學上の知識なき人は、如何にして醫師の言ふ所、行ふ所の眞否を判定することを得ん。

能はざるなり。

たゞ醫師のみよく之れを判定することを得ん。智者と雖之れが判定は能くせざる所なるべし。何となれば此判定を爲すに當つては、智者たると同時に又た醫師たることを要すべければなり。然らずや。

真に然り。

然らば智慧或は節制なるものは、たゞ學術の學術たり、又た無學術或は無知識の學術なりとするも、眞の醫師と、眞に醫術を知らずして之れを知れりと云ふ所の虚託の醫師とを區別し、又た其他種々の科に關する眞正の教師と、虚託の教師とを、鑑定判別すること能はざるべし。宛も之れ諸他の藝術家等が、たゞ其藝術或は智慧の仲間同志の範圍を知り得るのみにして、其れ以外は何人をも之れを知らざるが如きなり。

彼れ曰く、明かに然り。

余曰く、クリチアスよ、若し君の主張せる所の、智慧或は節制なるものは、此くの如きものたるに過ぎずとせば、智慧或は節制果して如何なる用を爲す。然りと雖若し余が始めに假定したる如く、智者なるものは、能く

學術の學術の効益なきを云ふ

此くの如くんば節制或は智慧は無用のものなり

他の解釋に新意
義を發見す

節制或は智慧を
新意益よりせば
大効益あり

其知れる所知らざる所、又た或物を知るも其他を知らざるを明かにし
又た他人にも此の判定力あることを認知することを得ることせば、智者た
るに於ては、必ず大なる利益あらん。何となれば此くて吾等過誤に陥る
ことなく、以て吾等及び吾等の下に立つ者の嚮導者となり、以て一生を送
るを得べし。又た吾等知らざる事を成さんと試むることなく、能く其事
に精通せる人を發見し、以て此の人を信任し、決して不適任の人には何事
をも爲さしむることなく、知識を有して、任に適せる人其の事に當りて、最
もよく其事を所理すべし。而して此くの如き智慧の指導の下には、一家
も一國も何れもよく治まり、一切の事に於て智慧は實に君主たるべし。
此くて真理の指導の下に在ては誤謬なるものは除外され、人々其爲す所
盡く正を得、又た幸福なるを得べし。クリチアスよ、是れ吾等が言ひし所
の知る所、及び知らざる所を知る所の智慧の大なる効益なるものに非ざ
るか。

彼れ曰く、眞に然り。

余曰く、而して此くの如きの學術は、何處にもあらざること、を君は悟り

しならん。

彼れ曰く、悟れり。

余曰く、然らば、此新なる光明に照らして之れを観るに、智慧は單に知れる所及び知らざる所を知る所のものなりとするも、尙ほ此利益あり—乃ち人若し此知識を有する時は其學ぶ所は一層容易に之れを學ぶことを得べしと謂ふべし。而して彼れ各科の知識に加ふるに、又た其の學術なるものを知れるを以て、萬事其人に取つては明瞭なることを得るのみならず、又た能く自ら知れる所に就いて他人の知識を檢查することを得ん。故に此知識なき研究者は薄弱なる思想の人なりと言ふべきに非ずや。友よ、是等は智慧なるものより得らるゝ所の眞の利益に非ざるか。而して吾等又た此智慧の中に發見し得らるゝよりも、尙ほ其以上に或物を希望し、又た求めつゝあるには非ざるか。

彼れ曰く、其は眞に然るが如し。

余曰く、其は眞に然るが如し。又た吾等の討究たるや決して他に目的を有せざること甚だ眞なるが如し。余は此の推論を爲さざるを得ざ

學ぶ所を容易に
學ぶことを得

他人の知識を驗
す

るに至れり、其理由たる若し之れ智慧なりとせば、一種不測の結果の繼起
することに心付きたればなり。吾等今ま此の學術の學術なるものゝ成
立し得ることを前定するを許容せん、尙ほ又た始めに暗示し置きたる如
く、智慧とは吾等の知ること及び知らざることの知識たることを許容せ
ん。是等凡てを許容するも、余は尙ほ一層思考を進めて考ふるに、クリチ
アスよ、智慧は此くの如きものなりとせば、果して吾等に如何なる善を興
ふるものなるやは余の疑ふ所なり、何となれば、余は殆ど今ま語りし如く、
一家或は一國を統治する此くの如き智慧は甚だ有益なるものなりと
想像するは誤謬なりと思ふものなればなり。

彼れ曰く、そは何故ぞや。

余曰く、人は種々に其知る所を爲し、而して其知らざる所のことは、他人
の之れを知れる者に依託して、果して大なる利益を得るものなるやに就
いては、吾等容易に承認し能はざるなり。

彼れ曰く、吾等此くの如き承認を爲すは正しきに非ざるか。

余曰く、余は然りと思はざるなり。

ソークラテースよ、それは甚だ不思議なり。

余曰く、エジプトの犬に誓つて云はん、其事に就いて余は君と意見を同
うせり。余が前に奇態なる結論繼ぎ來るべしと云ひし時、已に此の思想
余の心中に起り、吾等誤謬の進路にあることに氣付きたり。而して吾等
其物の智慧なることは如何に直ちに之れを許容すと雖ども、余は尙ほ此
物果して如何なる善を吾等に爲すやを了會し能はざるなり。

彼れ曰く、君の言何をか意味す、願くは余をして君の意思を理解する所
あらじめよ。

余答へて曰く、余は敢て云ふ、余の言ふ所は全く無意味のことなり。さ
れども人若し何等か自己に取つて當然なりとの感覺を有せば、彼れ其心
中に來る所の思想は、之れを注意せず、又た試験せずして通過せしめ能
ふものに非ず。

彼れ曰く、余は之れを好む。

余曰く、然らば聴け、余の夢を語らん。其夢角の門より來りしか、或は象
牙の門より來りしか、其何れより來りしかや、余之れを知らずと雖、我夢は

此智慧は絶對の
制治權を有せり
とするも尙ほ其
幸福を興ふるは
疑ふべし

是れなり——。吾等假定して、智慧なるものは吾等が今ま定解しつつある如き者にして、又た吾等に對して絶對の制治權を有する者とせんか、各行爲は技術或は學術に據つて行爲せられ、何人と雖、自己は水先案内者に非ずして水先案内者なりと稱し、醫師に非ずして醫師なりと稱し、將官に非ずして將官なりと稱し、其他知らざるとを知れりと虚偽し、以て吾等を欺き或は瞞着する等の事は決して爲さざるべく。吾等の健康は増進せらるべく、海上にも戰場にも其安全を得べく、吾等の衣服も靴も、善良に製造さるべきなり、之れ職人善良にして眞實なる可ければなり。然り、君若し好まば、未然の知識たる預言なるものも亦此の智慧の制御の下に在りとなすべく、而して智慧は詐欺者を警戒して眞正の預言者を立て、未然を啓示せしむべきなり——。若し此く設備せられたらんには、人は皆知識に従うて生活し、又た行爲すべし、何となれば智慧は能く警戒して無學不知の吾等の中に侵入するを防ぐべければなり。之れ全然同意する所なり。然りと雖余は尙ほ、知識に従つて行爲する時は、吾等善良に行爲し、又た幸福たるべしとの理由を、發見せざるなり。親愛なるクリチアスよ。

此智慧は何の知識か

幸福を興ふる知識は智慧の他にあり

彼れ答へて曰く、されども余思ふに、君若し知識を排斥せば、其他何事に於ても、君は幸福の冕冠を得ること難かるべきなり。

余曰く、然らば此知識とは果して何の知識なるや。願くは此小疑問に答へよ。君の所謂知識とは靴製造の知識なるか。

決して然らず。

或は眞鍮細工の知識なるか。

確かに然らず。

然らば絨布か、材木か、或は其他此種のものゝ知識なるか。

然らず。

余曰く、然らば余は、知識に従つて生活する者は幸福なりとの意見を放棄せんと欲す。何となれば上述是等の職業の者は、皆な知識に従つて生活せるものなりと雖、而も君は彼等の幸福なるを許容せざればなり。然りと雖、君は知識に従て生活する或特殊の階級の人のみを以て幸福なりとなすものなるが如し。例へば未然を知る所の預言者の如き之れなり。然り、余は此種の如き人を意味す。されども、尙ほ他にも之れ有るなり。

然り、或者は過去、現在及び將來を知り、一として知らざる所なき人あり。吾等今此くの如き人ありと想像して、若し此くの如き人ありとせば、君は彼を以て、一切現存の人々の中、最も多く知れる人たるを許容するや。

然り、彼れや最も多く知れる人なり。

余は尙ほ一事知らんことを欲す。即ち種々の知識中、其何れの知識が彼をして幸福ならしむるものなるや、或は凡ての知識は、等しく彼をして幸福ならしむるものなるや。

彼れ曰く、凡て皆一樣には非ず。

然りと雖、其内孰れか最も彼をして幸福ならしむるものとなす。過去の知識なるか、現在の知識なるか、將た將來の知識なるか。或は象棋の知識は其れなりと謂ふを得るか。

否、象棋の如きものに非ず。

然らば算術の知識なるか。

否。

或は衛生の知識なるか。

之れ稍々近し。

余曰く、然らば最も近きは果して何の知識なるぞ。

依つて以て善悪を判断する知識たるなり。

余曰く、嗚呼汝怪物。君は余を循環論に引き廻はせり。而して今度は、知識に従つて行ふ生活は、人をして正しく且つ幸福ならしむるものに非ず、又た一切の學術を含むに非ざることを余に隠し、以てたゞ善悪を判知する所のものとなせり。されども余は問はんクリチアスよ。君若し此學術を其他の學術より取り去るとも、醫術は尙健康を興へ、造靴術は尙靴を造り、機械術は尙衣服を織るにはあらざるか。或は水先案内の術は人の生命を救ひ、大將の術は戦争に於て人命を完うすることはあらざるか。

君の言へるが如し。

されども愛するクリチアスよ。若し善の學術なき時は此等の諸物も善良に且つ有益たること能はざるべし。

真に然り。

善、利の學術なり
り學術の學術に
非ず

學術の學術の無
用なること

善を興ふるは一
般の知識に非ず
各科の知識なり

然りと雖其學術は智慧に非ず、節制に非ずして、人間の利益の學術なり、或は諸他の學術の學術に非ず、無知の學術に非ずして、善惡の學術たるなり。而して若し此學術にして有用なりとせば、智慧或は節制は無用たるなり。

彼れ曰く、智慧は無用なりとは如何ん。吾等若し智慧は諸學術の學術にして、諸他の學術の上に權勢を有すとせば、夫の智慧は能く此特殊なる善の學術を制御すべく、以て吾等を益する所あるべし。

然らば智慧は人に健康を興ふるや。否な、是はこれ醫術の興ふ所に非ずや。智慧は又た諸技術の爲す所、及び其等が爲すべくして未だ爲さざる所の事を爲すか。夫の知識とは知識及び無知識の知識にして、其他何物にても非ざるは吾等の長き前確定したる所に非ずや。

明かに然り。

健康に關しては他の技術あり。

他とは何ぞや。

健康術は智慧と異れり。

然り、異れり。

友よ。智慧は利益を興ふるものに非ず。何となれば、利益を興ふることは他の技術の爲す所なるは今ま吾等の言へる所なり。

真に然り。

然らば利益を興ふることなき智慧は、如何でか有益なることを得んや。

ソークラテースよ、こは考ふ可からざるなり。

然らばクリチアスよ、余が君を以て、智慧に對して明瞭なる概念を有せ

ずとするも、或は誤らざるに近からんか。余は又た自ら拙劣なるを感ず

るなり。何となれば若し余にして研究上何等かの善なることありしな

らんには、余が許して、諸事物の中最も善なるものとしたる所のものは、或

は全く無用のものと見ゆるとなきを得たりしならん。然るに余は今ま

見事に論破され、而して節制或は智慧の名稱を興ふべきものゝ何物なる

やを發見すること能はず、誤つて其物に是等の名稱を附するの失敗を爲

せり。然るに我等尙ほ且つ、真に承認さるべき程度を超えて、多くの許容

を爲せり。何となれば吾等學術の學術なるものありと許容したればな

クリチアスは智慧に就いて明瞭なる概念を有せず

ソークラテースは從來の議論の結果當然なりしを語る

許容も假定も一切無用に終れり

り。されども之れ議論の否定する所、且つ反對する所たりしなり。吾等尙ほ其他の許容を爲し(議論は之れを否定するにも關はらず)此の學術は他の諸學術の爲す所を知るとなせり。之れ、吾等は、智者なるものゝ自己の知れりと云ふ所、及び知らずと云ふ所の知識を有せることを證明せんと欲したればなり。又た人は毫も其の知らざる所を、而も一種の方法を以て、知れりと云ふことは不能のことなるにも關はらず、吾等は寛大に之れを看過したるのみに止まらず、又た考ふることだも爲さざりき。何となれば吾等は、彼れが其の知らざる所を知ると前定して論じ來りしを以つてなり。思ふに、之れに優れる不合理なることは他にあらざるべきなり。されど吾等が此く自由に、又た善良なる心意を以てしたる研究も、尙ほ且つ眞理を發見するに能はずして、却て吾等を嘲笑し、吾等が節制或は智慧の眞の定解なりとして、たゞ想像或は方便として許容したる所のものは全く無用のものたりしを證明せり。吾等の考ふる所に由れば、結果は素より左程悲しむべきものに非ずと雖、ハルミデースよ、君の爲めには余は氣の毒に感ずるなり。何となれば君は此くの如きの美を有し、又た

議論の無結果は悲しまずと雖ハルミデースの爲めに氣の毒に感ず

トレーケーの醫
師の教へたる符
呪を用ゆる所な
きを悲しむ

研究法或は誤り
し

ハルミデース自
ら研究せよ

ハルミデース自
ら節制或は智慧
を有せるを知ら
ずと云ふ

精神の此くの如きの智慧と節制とを有して、而も其智慧及び節制より、生
活上、何の利益も、何の善も得る所あらざる可ければなり。余も亦勉強し
てトレーケーの醫師より學びたる符呪も、之を用ゆる所なく、何の價值だ
もなきに至りしことを悲まざるを得ざるなり。思ふに余は拙劣なる研
究者にして、恐くは其方法に於て誤謬ありしならん。故に余は實際に於
ては智慧或は節制の大なる善なるを感じ、若し君にして之れを有せば、君
は幸福の人たるべしとすものなり。是を以て、君は自ら考究して、果し
て節制の天賦を有し、符呪を要せざるや否やを明にせよ。君若し能く自
ら之れを爲さば、君は余を以て、單に一箇の愚物のみ、何事をも論出すると
能はざるものと見做し、君自ら以て智あり又た節制なりと自信せば、君は
一層幸福なるべし、之れ余の君に忠告する所なり。

ハルミデース曰く、ソークラテースよ、余は果して自ら智慧或は節制の
天賦を有せるや否やを知らざるなり。君の云へるが如く、君及びクリチ
アスすらも知り能はずとせる所のものを、如何でか、余が之れを有せるや
否やを知ることを得んや——(君の言を真に受けて此く云ふに非ず)。ソーク

ハルミデース愛
嬌を受けんことを
求む

ソークラテース
に従はんことを
約す

クラテースよ、且つ余は實に君の符呪を要す、此事に關する以上は、余は君が以て十分なりとなすに至るまで、日々喜んで君の符呪に魅せられんことを欲するものなり。

クリチアス曰く、よしハルミデースよ、若し君之れを爲し、ソークラテースの符呪を容受し、決してソークラテースより離叛せずと云ふに於ては、余は之れを以つて君が節制を有せることの證據となさん。

ハルミデース曰く、余がソークラテースに従ひ、決して彼に離反せざることを信せよ——若し余の後見人たる君にして余に命令すとせば其命令に従はざるは惡なるべし。

彼れ曰く、余は君に命令す。

然らば余は君の言に従ひ、今日より直に之れを始むべし。

余曰く、君等は何の盟約を爲し居るにや。

ハルミデース曰く、吾等盟約は爲し居らず、既に盟約は終れるなり。

君は正義の方式に依らずして、暴力を用ゐんとするか。

彼れ答へて曰く、然り、彼れ余に命令せば、余は暴力を用ゆべし。故に君

は熟考する所なかる可からず。

余曰く。然りと雖若し暴力を用ゐば熟考已に晩し。君若し何事か決定し、又た暴力の態度を取るに於ては、抵抗すべからざるなり。

彼れ曰く、然らば君は余に抵抗すること勿れ。

余答へて曰く、余は君に抵抗せざるべし。

リ

ュ

シ

ス

は熟考する所なかる可からず。

余曰く。然りと雖若し暴力を用ゐば熟考已に晩し。君若し何事か決定し、又た暴力の態度を取るに於ては、抵抗すべからざるなり。

彼れ曰く、然らば君は余に抵抗すること勿れ。

余答へて曰く、余は君に抵抗せざるべし。

リ

ユ

シ

ス

リュシス解題

本篇の論題

「リュシス」は友情の何たるやを論せる對話書なり。前篇「ハルミデース」は節制の何たるやを論じて未だ其結論に達せざりし如く、本篇も亦結論を興へざるものなり。「リュシス」「ハルミデース」兩書は同じく共に若やかなる氣に充ち、又た美の感に富み、何れもよくグレスシア人の生活の状態を表はせる點に於ては相似たり。「ハルミデース」及び「ラッヘース」中のソークラテースは年齢中年なるが如しと雖、本篇に於けるソークラテースは其れよりも稍や長せるものと如く、リュシス及びメチキセノス兩少年の年長の朋友として現はれ居るなり。場所は新設の運動場、時は教育の神ヘルメース神の祭日なり。

本篇の筋

本篇の對話は之れを二部に別つことを得べし、始めはソークラテースとリュシスとの對話なり。リュシスはハルミデースの如く門閥あり、身體美にして善良なる性質を有し、又た伶俐なるアテーナイ市の青年なり。其友メチキセノス用事の爲め彼方に至りて不在中、リュシス、ソークラテ

ースと對話す、ソークラテース曰く「兩親は君を愛せば、何事なりとも君の欲する所を爲さしむるや否や」と。リュシス曰く「否な、年齢未だ長せざるを以つて或事は之れを制止し、師傅等の嚴重なる監督の下に置けり」と。ソークラテース曰く「然らざるべし。君は未だ十分の知識なきを以つて、父母は君を自由に一任せざるならん。故に君若し十分の知識を得るに至らば、父母も隣人も君を信じて事を托すに至るべし。人若し他人に善を爲すことなき時は、何人も之れを愛することなかるべく。而して人に善を爲すは、たと知識に由つてのみ之れを得べし」と。リュシスを誨ふると同時に、リュシスを戀愛せる聊か愚なる青年ヒッポタレーヌなる者に、愛人と談話する方法を示せり。

メチキセノス此場に歸り來りたる後、リュシスの請ひに由つて新問題を以つてメチキセノスに問うて曰く「朋友とは何ぞや。汝メチキセノスは已に朋友ありと雖余は之れなし、故に余に告ぐるに其朋友の大なる幸福の性質を以つてせよ」と。

人若し他の人を愛せば、(一)愛する者が朋友なるか、或は愛さるゝものが

朋友なるかとの問題起り、二少年もソークラテースも、共に之れに答ふる
こと能はざるなり。

次にソークラテース、或る詩人の(二)同は同を好みて朋友たりと云へる
言を借り來りて朋友を論せんとせしと雖も、又た他の詩人へシオドスは
同業者は相猜み相嫉むの事實あるを云へるに由つて觀る時は、同は同の
朋友に非ずと爲さざる可からずとなす。然らば或人の云へるが如く、
(三)反對は反對の友にして、乾は濕を希ひ、寒は暑を希ふと爲すべきか。若
し然りとせば正直者は不正直者の友たり、善人は惡人の友たらざる可
からず、之れ不都合の事なりとなす。

此くて同は同の友に非ず、不同は不同の友に非ざるを以つて、善は善の
友に非ず、惡は惡の友に非ず、善は惡の友に非ず、惡は善の友に非ずとの結
論に達せり。さらば残れる命題は、(四)非善非惡は善の友なるかと云ふに
あり。例せば我が身體、之れ非善非惡なり、疾病の惡ありて之れを除かん
が爲めに醫藥を要す、而して醫藥は善なり。哲學者及び賢人なるものも
亦此中間のものにして、智に非ず、愚に非ず、無智なる惡を去らんが爲めに

善たる智を求むるものなり、友情亦此くて成立するかと云ふにあり。

此に於いて少年もソークラテースも、朋友に關して正確なる説明を得たりとて歡喜せしも、ソークラテースの胸中には、疑念忽ち起り、此の喜悅を消散せしむ。(五)其疑念とは、友情の第一原理なり、即ち、友情は何の爲めに存するか、或る他の善の爲めには非ざるか。而して善は惡を去る爲めの必要にして、惡なき時は善の要なく、従つて朋友の必要なきに非ずや。然りと雖朋友の情は尙ほ存するに由つて觀る時は、吾等他の説明を考案せざる可からざるなり。

(六)欲望は友情の原因には非ざるか。之れ自然にして同好性のものなり。然りと雖「同好性」(Congenial)と「同」とは同一に非ざるなり、何となれば同は同と友たること能はず、又た同好性は「善」と同一となすべからず、何となれば善は善の友に非ざるを以つてなり。

此くて「友情」の何なるやに關しては、ソークラテースも、リュシスも、メ子キセノスも三友何れも之れを説明すること能はざるなり。

『ハルミデース』、『リュシス』、『ラツヘース』其他多くのプラトーンの對話書(殊に『プロタゴラス』及び『テアイテトス』等参照)は皆な結論なきものにして寧ろ討究的のもの云ふべし。友情に關する議論は此後の對話書『ファイドロス』及び『宴會』篇等にも連絡を有し、アリストテレースの『ニコマッホス』倫理書の第八第九の兩卷にまでも至れり、之れ皆な『リュシス』篇に關係を有せるものとなす。

プラトーンの對話は、普通なる所より、次第に高尚なる所に進行すること、は、其他の對話書に於ても然ることなるが(例へば『理想國』篇の如き)、本篇に於ても又た其順序を有し、始めは無意識なる道德を二少年の友愛に表はし、次第に友情の複雑なる觀念に進み入れり。されども尙ほ未だ十分の明瞭を得ざるなり。察するに、ソークラテースの胸中には二種 of 思想相争ひ、相平均せるが如し。其第一は友情は人性の必要より起ると云ふにあり、其第二は友情の高尚なる理想は善の爲めと云ふにあるものと如し。

「ドラマ」上の興味

本篇に於ける議論上の興味は、之れに加味するに「ドラマ」上の趣向を以てせるは殊に吾等の注意を喚ぶに足れり。第一、場所を以つて運動場となし、時はヘルメース神(少年教育の神)の祭日にして、神に供物を奉納せる時とせる。第二、ソークラテースが例の無智を装ひて諷刺を爲し、身は何事をも知らずと雖戀愛の秘密は之れを知れりと云ふが如きを注意すべし。又た種々人物上の對照あり、第一乾燥過激の青年クラシッポスあり、ソークラテース戯れに彼れの爭論僻を恐るゝ真似を爲せるあり、愚痴なるヒッポタレースは其戀人の名を呼びて安眠を殺すと云ふが如きあり。ヒッポタレースのリユシスに對する虛妄誇大の戀愛あり、又た一方には二少年の單純無邪氣の友愛あるあり。又たメキセノスの聊か多言なると、リユシスの寡言なるとの對照も之れあり、種々の人物の描寫委曲を盡くせるは又た觀るべきなり。

人物描寫の技量

リュシス

一名 友愛論

對話人物

ソークラテース——談話者

リュシス

メ子キセノス

クテシッポス

ヒッポタレーヌ

場——アテーナイ市の壁外、新設の運動場



は市外の道路に依つてアカデーモス園より直ちにリュケイオン指して至らんと欲し、市壁の下に沿へる道を取れり。

而して余のバノッブス泉水の傍なる、市の裏門に至りし時に出逢ひたるは、

ヒポタレース
及びクアレフボ
ス

ヒエロニモスの子なるヒポタレース、バイアニア區の人クテシッポス及び
彼等と共に連れ立てる數多の青年なりき。時にヒポタレース余を見て
近づきて、余の何處より來り、何處に行かんとせるやを問へり。

余答へて曰く、余はアカデーモス園よりリュケイオン指して至らんとせ
り。

彼れ曰く、然らば君も亦た直に余等と共に來りて此處に入りては如何
ん。

余曰く、君等の仲間は何處に行くべきぞ。

彼れ壁に對せる、圍ひたる場所の開きたる門戸を指さして曰く、吾等の
會合する所は彼處の建物なり、又た其の所に吾等の心合ひたる仲間あり
ど。

余問うて曰く、此は如何なる建物なるぞ、又た如何なる會合を君等は爲
せるにや。

彼れ答へて曰く、此の建物は新設の運動場なり、而して會合は一般の談
話にして、此に君を歓迎するものなり。

余曰く、多謝す、されども教師の誰れか來會せる者ありや。

彼れ曰く、君の舊來の友人たり又た稱賛者たるミッユスあり。

余答へて曰く、彼れは秀出せる學者なり。

彼れ曰く、君は余と共に彼處に至り、又た彼等と會合せんとするの意あるか。

余曰く、然り。然りと雖、余の先づ聞かんと欲する所は、君等は余に就いて如何なる希望あるや、又た君等の中の愛人は誰なるやと云ふことなり。ソークラテースよ或人は或者を愛すと雖、或人は他の者を愛せり。

余問うて曰く、然らばヒッポタレースよ、君の愛人は誰なるやを余に告げよ。

此質問に對して彼れ顔を赤らめたり。余彼れに謂うて曰く、あゝ、汝ヒエロニユモスの子なるヒッポタレースよ、君は戀愛せり、或は戀愛せず等の言を爲すこと勿れ、自白は既に晚し。余は早くも、君がたゞに戀愛せるのみに止まらず、已に又た戀に深入りせることを知れり。余や素より扑訥の愚物なりと雖、神は愛情の此種のものゝを理會するの力を余に與へたるな

り。

此言に於て、彼れ益々顔を赤らめたり。

クテシッポス曰く、ヒッポタレーヌよ、余は君が顔を赤めて、ソークラテースに其愛者の姓名を告ぐるに躊躇せるを見るを愉快となす。若しソークラテースにして短時間なりとも君と共に在らんには、彼れ何事も他に聴くことなきに苦しみ、殆ど方に死すべきなり。ソークラテースよ。彼れ實に文字通りに吾等の耳を聳せしめ、リュシスの頌美を以て吾等の耳を塞げるなり。若し彼れ聊かにても心氣昂進し來る時には、リュシスを呼べる聲の爲めに、吾等の睡眠は殺さるゝと云ふとも不可なる無し。彼れリュシス讚頌の詩文を作れり、而して其散文や已に惡し、其詩に至つては又た一層甚しく、比較すべきものあるなし。彼れ其詩歌、文章を以て吾等を驚かしむるや、眞に拙悪極まれり。而して彼れ其詩文を愛人に吟誦するに於ては、拙の拙の最も拙を極む。彼れ眞に人を驚かす所の聲を以て之れを爲し、吾等聴くに堪えざるなり。見るべし、今彼れ君に質問されて赤面せるを。

余曰く、リユシスとは何人ぞ。余は他に思ひ出さず、必ずや青年なるべし。彼れ曰く、あゝリユシスの父は有名なる人物にして、彼れは父祖の諱より傳承したる名を有し、通常彼れ自己の本名に由つて稱呼されざるなり。思ふに、君は彼れの名を知らずと雖、彼れの容貌は必ず之を知らん、之れ十分彼れの他人と異なる所あるを示めす可ければなり。

余曰く、されども、彼れは果して誰の子なるやを余に告げよ。

彼れはアイキンチー區のデーモクラテースの長男なり。

余曰く、あゝヒッポタレーヌよ、君は實に高尚にして、又た眞に完全なる愛を發見したるものなるかな。余は君が他の人々に聽かせたる如き吟誦を、余にも亦た聽かさんことを希望するものなり。然らば余は、愛者が其の愛に關して、青年彼自身に對し、或は他の人々に對して言ふべき所を、果して君が知れるや否やを判定することを得ん。

彼れ曰く、否ソークラテースよ。君必ず彼れの言ふ所に何等の重きを置くこと無からん。

余曰く君は、クテシッポスの言に由れば、君の愛人なりと云ふ其の人の愛

を否定せんとするか。

否。然りと雖余が詩を作り或は文を作りて彼れを頌美したりと云ふは事實に非ず。

クテシッポス曰く、彼れ正氣に非ず、其言ふ所は無意味なり、彼は全然狂せるなり。

余曰く、あゝ、ヒッポタレースよ、君は、假令其愛人の爲めに、詩を作り、文を作りて其名を頌めしことありとするも、余は今ま必ずしも其れを聽かんとはせざるなり。然りと雖余は君の作りたる詩文の趣旨を知らんことを欲す、これ君が其戀愛せる所の美麗なる人に接近する方法の良否を判定するに資せんが爲めなり。

彼れ曰く、クテシッポス此事を君に告ぐることを得べし、何となれば余は彼れに何事をも語りしことなしと雖、彼れの言へるが如く、彼れは余の事に就いて甚だ精密に之れを知り、又た其記憶を有せる由なればなり。

クテシッポス曰く、然り、實に余は十分に能く之れを知れり。而して此の話したるや甚だ滑稽たるなり。何となれば彼れ假令戀愛者にして、甚だ

ヒッポタレース
の愛人を頌美す
るの方法

ソークラテース
曰く愛人を頌美
するは自己の名
譽を歌ふなり

其愛に熱中せるにも係はらず、其愛人に就いては特に何事も之を謂ふと
なきの状、宛も小兒が何事も十分話し能はざるが如し。之れ實に滑稽に
は非ざるか。彼れ只だデーモクラテースが全市に有名なる富有者なる
こと、祖父リュシス、其他彼れの祖先、及び彼等の馬群、彼等のピュテオス祭、地獄
祭、及びテメア祭等に於て、四馬或は一馬を以てしたる競走の勝利等を語
るのみにして、彼れ之れを詩として歌ひ、或は語り、尙ほ之れに足らずして
諷語せるなり。一昨日も彼れ詩を作り、ヘーラクレースはリュシス家の親
族にして、リュシスの祖先は彼れを接待したることあるを謂ひ、此祖先其人
は大神ゼウスと此の區の創建者の娘との間の子なることを謂へり。此
の如きは皆之れ老婆談の一種に過ぎずと雖、彼れ之れを吾等に吟誦し、吾
等は無理に之れを聴かしめらるゝなり。

此れを聴きし時余は曰く、嗚呼ヒッポタレーヌ、何ぞ滑稽なる。君は未だ
其愛人を我物となし得ざるの、前、如何なれば自己の名譽を歌として之れ
を歌ふや。

彼れ曰く、ソークラテースよ、余の詩歌は、決して余自身の名譽を歌へる

ものに非ざるなり。

余曰く、君は果して爾か思はざるか。

彼れ曰く、然らば是等は何ぞや。

余曰く、其れ等の詩歌は、慥かに皆な君自身の名譽の爲めのものたるべし。何となれば若し君にして君の美なる意中の人を獲たらんには、君の談話も君の詩歌も共に皆な君の光榮に歸し、君は能く勝利して、此くの如き愛を獲たりとの君の名譽の讚美歌となるべければなり。されども若し其愛人にして君の手より逸することあらんには、君の彼れを頌美すること大なれば大なるに従つて、君は此の最上最美の幸福を逸失したるものとして、却て滑稽となるべきなり。之れを以て賢き戀愛者は、意中の人の愛を獲るに至るまでは、決して愛人を頌美せざるなり、之れ時に失策の過然あるを恐るゝに由る。而して尙ほ他に一の危険ありとなす、即ち若し戀愛者にして愛人を頌讚して之れを大なるものとして増長せしむる時は、彼れ自負心と傲慢とを生ずべし。然らずや。

彼れ曰く、然り。

愛を得ざるまで
は愛人を頌美す
べきものに非ざ
るを教ふ

何となれば愛人
の自負と傲慢と
を長ぜしむるが
故に

故に愛人を得る
は困難となる

駭かしたる獸の
如く、

自己の時に由つ
て損す

ヒツポタレース
愛人を得るの方

其自負傲慢の増長したる後に當つて、之れを捕獲するは一層の困難を
増すには非ざるか。

余其の然るを信す。

若し獵夫にして、駭かして其獲物を遁がれしめ、以て其獵をして困難な
らしむる者ありとせば、君は彼を謂うて何とかなす。

彼れ甚だ拙劣なる獵夫たるや明かなり。

然り、若し彼れ愛者を慰和せずして、却つて言語を以て或は詩歌を以て
其氣を昂揚せしむることありとせば、彼れや最も機才なきものと謂はざ
るべからず。君、余に同意なりや否や。

然り、同意なり。

然らばヒツポタレースよ、君は果して詩歌を作りて此過誤の罪を犯した
るには非ざるかを一考せよ。君は自ら作りたる詩に由て、自己を害する
者を以て、善良なる詩人なりと謂ふべしとは、余は想像すること能はざる
なり。

彼れ曰く、然り、余は決して此かることを言はざるなり、若し此くの如き

法をソークラテ
ースに問ふ

試みに君の愛人
と談話せん

ヘルメース神社
の祭禮

メ子キセノス

ことを言ふとせば、余は甚しき愚物たるなり。之を以てソークラテースよ、余は君が尙ほ其他の事に付ても、余に忠告を興へんことは、最も願ふ所たるなり。果して如何なる言語、如何なる行爲を以てせば、意中の人をして余を愛せしむるやう爲すことを得べきや、願くば之れを教へざるか。

余曰く、是れを決定するは容易に非ず、されども君は試みに其愛せる所の人を余の許に連れ來り、余をして彼れと談話する所あらしめよ、然らば君は笑はるゝ如き態度を以て、詩歌を吟誦することなくして、彼れと談話する方法を、余或は君に示めすことを得んか。

彼れ曰く、彼を連れ來ることは困難に非ず。ソークラテースよ、君若しクテシッポスと共に此運動場に入り、坐して談話し居らば、彼れ直ちに自ら來るべし。彼れ君の談話を聴くを好めばなり。今日は恰もよし、ヘルメース神社の祭禮にして、青年小兒分離することなく、混合して集まれり。彼れ必ず來るべし。若し來らざる時はクテシッポスは彼れと親密にして、又た其親戚たるメ子キ子ノスは、リユシスとは最も親密の朋友なれば、必ず彼れを此に招くなるべし。

運動場に入る

祭禮將に終らん
とせる時

種々の遊戯

英と藝とのリュ
シス

リュシス來りて
ソークラテース
の側に坐す

余曰く、其は良法なりと。此くて余及びクテシッポスは運動場の方に行き、其の他の人々も後より續き來れり。

吾等の運動場に入りし時、小兒等恰も供物を奉納し居たるが、其祭禮も殆ど將に終らんとせり。彼等皆白裝束を着し居たり、而して遊戯及双陸は彼等の間に行はれ居たり。彼等の多くは外庭に在つて樂しめりと雖、又た或者等は衣裝室の一隅に在つて、小枝を以つて製したる小き籠の中より取り出したる骰子を弄して奇偶の遊びを爲し、傍觀者は其周圍に集まれり。而して其見物人の中にリュシスも在りき。彼れ青年及び小兒の群中に立ち、頭に冠を戴き、其狀宛も美しき幻象の如くなりき。然りと雖、其美に優りて其善良なることは、寧ろ少なからざる稱賛を價せり。吾等彼等の群を後にして、其所を過ぎて室の反對の側に至りしに、其處に靜かなる場所ありしを以て、坐して談話を始めたり。リュシス我等に注目し、絶へず我等の方を眺め、我等の方に來るを好むの趣あり。暫時、彼れ一人此方に來るの勇氣なくして躊躇し居たるが、第一に彼れの友なるメチキセノス、其の遊戯を止めて内庭より運動場に入り來り、クテシッポス及び余等

二少年と賭る

を見て、來つて吾等の側に坐せり。之れを見たるリユシス又た續いて、來つて彼れの側に坐し、其の他の小兒も亦た來れり。時にヒッポタレース群衆を見て人々の後方に廻はれり、之れリユシスを怒らしめざるやう、其視らるゝことを避けしものなり。而して立つて吾等の談話を聽き居たり。

余はメ子キセノスに向つて謂ふて曰く、デーモフオンの子よ、君等二青年中、年長なるは孰れぞや。

彼れ曰く、其は吾等の言ひ合へる所の問題なり。

然らば何れか高貴なる。之れ亦議論の争ふ所か。

然り。

然らば次の争論點は、何れか美なると云ふにあり。

二少年破笑せり。

余曰く、余は何れか富有なりやと云ふことに就いては問ふことなからん、何となれば君等兩人は友人なればなり、然らずや。

彼等答へて曰く、然り。

君等若し眞に朋友なりとせば、朋友なるものは事物を共通せるものな

メ子キセノス彼
方に至る

リュシスと父母
の愛を問答す

れば何れが富有なりや否やを明にするの要なかるべし。

彼等余の言を承認せり。次に余は彼等兩人の中、孰れか果して正直なるかを問はんと思はる時、一人來りてメ子キセノスを呼び、其體操教師彼れを呼べる由を告げたるを以て、彼れ彼方に行けるに由り、余はリュシスに向つて尙ほ其他の質問を試みたり。而して曰く、余は言ふ、リュシスよ、君の父母は甚だ君を愛せるなりと。

彼れ曰く、然り。

兩親は又た君の完全に幸福ならんことを希へり。

然り。

されども、奴隸の境界に在りて、自己の好む所を行ひ得ざる者を以て、君は果して幸福なりと思へるが。

彼れ曰く、否、余は然か思はざるなり。

若し兩親君を愛して君の幸福ならんことを欲せば、君の兩親は容易に君をして幸福ならしめ得べしとは何人も敢て疑はざる所なり。

彼れ曰く、眞に然り。

父母は其子を制限する所少なからず

然らば君の兩親は何事なりとも君の爲さんと欲する所を許容して、決して君の欲する所を制止する等の事は爲さざるか。

ソークラテースよ、父母は、余の爲さんと欲する所を制止すること甚だ少なからず。

余曰く、君の言へる所は何をか意味す。君の父母は君の幸福ならんことを欲して尙ほ且つ君の爲さんとする所を禁することありや。例へば君若し父の馬車に乗り、自ら手綱を執りて競争するが如き、之れ兩親の許さずして、禁する所なるか。

彼れ曰く、然り、兩親は之を爲すを許さざるなり。

然らば兩親は之れを誰にか許るせる。

・ 備ひたる御者には之れを許せり。

然らば君の兩親は、君よりも備人を信用し、彼れに其馬を自由にするを許るし、而して之れに向つて給金を拂へるか。

然り。

されども余は言はん、君若し好まば驟馬車を御することは之れを能く

すべし、兩親は之れを許るせるや否や。

許るせるやと。否、許さざるなり。

余曰く、然らば何人と雖驛馬を御すること能はざるか。

彼れ曰く、驛馬御者之れを爲すなり。

彼れは公民なりや或は又た奴隸なりや。

彼れ曰く、奴隸なり。

然らば君の兩親は其子なる君よりも奴隸を以て貴しとなすか。兩親は其財産を君に托さんよりも之れを奴隸に托し、君は意の如く爲すと能はずと雖、奴隸には思ふがまゝに其を爲すことを許るせるか。此事を答へよ、君は君自身の主人なるか、或は兩親は其の事をも許るざるか。

彼れ曰く、否な、勿論兩親之れを許さず。

然らば君は主人を有せるか。

然り、我傳あり。彼れ其處にあり。

而して彼れ奴隸なるか。

彼れ答へて曰く、然り、彼れ我が奴隸なり。

余曰く、公民が奴隷に由つて支配さるゝとは奇なりと謂ふべし、而して君の傳は君を如何にするか。

彼れ余を教師の許に連れ行くなり。

教師は又た君を支配すと、君は謂はざるが。

勿論然り。

然らば君の父は、君の上に多數の主人を置くことを好めりと謂はざる可からず。されども君は家に歸りて母の許に在るに於ては、母は君の欲する所を爲さしめ、又た君の幸福に干渉する所あらざるべし。母の毛糸母の織物等、盡く之れ君の意のまゝなるべく、或は梭或は箴、或は母の紡績器具に觸るゝとも母は決して之れを制止することあらざるべし。

彼れ笑ひつゝ答へて曰く、ソークラテースよ。否な、若し余にして是等のものに觸れんとせば、誓に制止さるゝのみに非ずして、或は撻たるゝこともあり。

余曰く、甚だ驚くべし。君は或は父母の意に違ふことを爲せしことありや。

ユレス曰く、
母の其子を制
するは相當の
齡に達せざる

彼れ曰く、否決して此かることなし。

然らば何故に、君の兩親は嚴重に君の爲さんとする所を制止し、幸福を妨ぐることを爲し、終日君をして他人の下に隸屬せしめ、君の好む所を爲さしめざるや。此くて君は父母の大なる財産上何の権利もあるなく、君の美しき身體は父母の財産上何の用もあるなく、是等は全く一牧羊者に一任し去りて、リュシスたる君は何人の主人にも非ず、又た何事をも爲すこと能はざるなり。之れ果して何故ぞ。

彼れ曰く、あゝソークラテースよ、こは余の未だ相當の年齢に達せざるを以てなり。

余曰く、其は果して眞の理由なるや、余の大に疑ふ所なり。思ふに君の父デーモクラテース、及び君の母は、已に多くの事を爲すことを君に許し、決して君が相當年齡に達するを待たざるべし。例へば父母若し何事か之れを讀み或は書くことを要するに當つては、君は兩親より其事を命ぜらるゝ第一の人たるべし。

眞に然り。

而して君は又た其好むがまゝに書物を読み或は書くことを得べく、又た琴を弾くに當ては好むがまゝに、時に或は指を以てし、時に或は彈琴器を以つてするを得べく、父も母も敢て之れに干涉することなかるべきなり。

彼れ曰く、そは然り。

余曰く、然らば君の兩親は、何故に一を許るして他を許るさざるか。

彼れ曰く、思ふにこれ余が一を知ると雖、他は之れを知らざるに由るならん。

余曰く、然り、我愛する青年よ。理由は實にたゞ君の年齢の不足と云ふことに非ずして、其の智識の不足にありと謂ふべし。故に君の父にして、若し君は父よりも智者となりたりと感ずるに至らば、直ちに萬事を君に任じ、又た其財産を自由にすることを許すべきなり。

余も亦然りと信ず。

余曰く、且つ君の鄰人との關係も亦之れに等しく、彼れ若し君が家事の整理を爲すこと鄰人よりも巧みなるを知る時は、彼れ自ら家事を爲すか

即ち非ず知識
不足にあり

或るらば人々
依頼する所と
らん

或は君に之れを依頼するか。

彼れ必ず余に依頼すべし。

又た若しアテーナイ市の人民にして、アテーナイを治むるに於て、君は十分の智力あることを知る時は、アテーナイ市の政務は之を君に依托するや否や。

然り彼等之れを爲さん。

余曰く、例を以て言はん、こゝに大王あり、其長男にアジアの太子あり、時に君と余と共に大王の許に至り、吾等兩人は太子よりも其料理法に於て熟練せりとの信用を得たらんには、吾等或はソップを製し、或は煮物中に何物なりとも吾等の意のまゝに之れを入れて調理するの権利を得ること、王子たるアジアの太子よりも自由なるに非ざるか。

明かに然り。

吾等は、太子が一と撮まみの鹽をだに入るとことを許るされざる時にも、一握りの鹽を其食物中に入るとも亦自由には非ざるか。

勿論自由なり。

又た若し假定して、其太子眼病なる時、王は太子の醫術上の知識なきことを思ふ時は、果して太子をして自ら自己の眼に觸るゝことを許すか、或は之を許さざるか。

王は之れを許るさざるべし。

若し吾等醫術を知るものならんには、王は吾等を以て最良の方法を知れるものとなし、吾等をして、太子の眼を張り廣げ、灰を眼中に振り撒くことありとも之れを許すべきか。

然り。

然らば王もし、吾等を以つて王よりも、亦太子よりも知識あるものなりと信せば、彼れ何事なりとも、之れを吾等に委任するや否や。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、其言の如し。

余曰く、愛する青年よ、然らば、吾等十分に知識ある時には、何人も吾等に信任するを知るなり。グレシア人なりとも野蠻人なりとも、男子たりとも女子たりとも通じて然り。而して吾等其好むがまゝに之れを行ひ、何人も干渉することなく、吾等全く自由に於て、又た他人の主人たるべし。

而して是等の諸事物は其實に於て皆な我物となるべきなり。何となれば、吾等之れを自己の利益に變せしむるを得べければなり、然りと雖吾等の知らざる事物に於ては、其事たとひ吾等の利益と思はるゝとも、何人も吾等を信任することあらずして、彼等の出來得る限り吾等を妨げ、單に外國人のみに止まらず、父と雖母と雖、朋友と雖、又た若し一層親密なるものと雖、尙ほ我等の思ふがまゝに爲さしめざるべく、吾等は全く人に從屬し是等諸事物は決して吾物たることあらざるべし、何となれば吾等之れを變じて吾等の利益となすこと能はざればなり。君此事を承認するか。

彼れ之れを承認せり。

吾等は常に他人に友たるべきか。而して吾等人々に何等の用をも爲さざるとも、人々尙ほ吾等を愛して友となすか。

決して然らず。

君若し父母其他の人々に取つて全く無用なるに當ても、彼等尙ほ君を愛するや否や。

否。

識の必要を感じむ

是故に君若し知識ある者ならんには、人々皆な君を以て朋友となし、親戚となすべし、之れ君が彼等に有用なればなり。されども君若し知識なき人ならんには、父も母も、親戚も、亦其他の人々も、盡く君の朋友たらざるべし。而して君尚ほ未だ知識に到達せずして、未だ何の思想もあらざる事に関し、高き思想を有することを得るか。

彼れ曰く、吾れ如何にして之れを有することを得ん。

君は今ま尚ほ教師を要せる人なるを以て、未だ以て知識なき者となすか。

然り。

君は未だ慢心すべきことなきを以て、慢心せる者に非ずとなすか。

ソークラテースよ、然り、余は慢心せりと思はざるなり。

余此言を聴きし時、ヒッポタレーヌの方を顧みたるに、彼れ殆ど狼狽せり、何となれば余は左の如く彼れに言はんと欲したればなり、即ちヒッポタレーヌよ、此くの如き方法を以て、君は其意中の人に語るべし。彼れを低くし、彼れを下だし、決して君が從來爲せし如くに彼れをして自負倨傲の

ら知識なき者るを悟らしむ

心すべからざるを悟らしむ

中の人を高めて、之れを低くし、之れを下し、自負心を起こすこと勿らしむ

心を起さしむること勿れど。されども余の言ひし所に由つて彼れ大に刺戟され又た錯亂されたるの狀あり、且つ彼れ余の次に坐せりと雖、リュシスに見られざらんとせるを記憶せるを以て、余は右の言を發することを控へたり。

暫時にしてメ子キセノス歸り來り、リュシスの傍に坐せり。リュシスは小兒らしき可愛き態度を以て、メ子キセノスには聽かれざるやう、余の耳に私語して曰く、ソークラテースよ、願くば君が余に語りし所を、再びメ子キセノスに告げ聽かせよと。

余答へて曰く、リュシスよ、君は之れを聽きたる人なれば、君自ら之れを語れ。

彼れ曰く、然り余は傾聽したり。

然らば余の語りし所を記憶し、成るべく精密に之れを彼れに繰り返へして告げよ、若し忘れたる所あらば、次回に再び余に尋ねよ。

ソークラテースよ、余は必ず其如くすべし。然りと雖彼れに新なることを語り聽かせよ、余も亦此處に留りて可なるの間、君の談話を傾聽すべ

ソークラテース
にメテキセ
スを恐れリユ
スの援を請ふ

し。

余曰く、余は君の請ふ所を否まざるべし。然りと雖君の知れる如く、メテキセノスは甚だ争論を好めり、故に彼若し余を破らんとすることあらんには、君は余の援助を爲さざる可からず。

彼れ曰く、然り、實に彼れは争論を好めり、之れ余が君に彼れと論せんことを願ふの理由なり。

余は自ら愚人とならんが爲めにか。

彼れ曰く、否な、君は彼れを論破せんが爲めに。

余曰く、こは決して容易の事に非ず、何となれば彼れは過激の青年にして、クテシッポスの弟子なればなり。又たクテシッポスは彼處にあり、君彼れを見るか。

ソークラテースよ、憂慮する勿れ、君は彼と議論せよ。

余答へて曰く、然り、余は彼と論せざる可からざるべし。

此にクテシッポスは吾等の私語し、吾等のみ樂しげなるに不平を鳴らせり。

メチキセノスと
同答す

金銀犬馬よりも
朋友を得んこと
を熱望す

ダレイオス大王
たらんよりも朋
友を得んことを
欲す

余曰く、君もこゝに吾等と共に談話せば吾等の喜ぶ所なり、リュシスは余の言へる所に對して未だ了會せざる所あり、メチキセノスは必ず其を答へ得べければ、余をしてメチキセノスに其事を問はしめんことをせらるなり。彼れ曰く、願くば彼れに問へ。

余曰く、然り余は彼れに問はん。メチキセノスよ、君は余の言ふ所に答ふるや否や。されども余は始めに言ひ置くことは、余は小兒の時より心を或る一定の事に向けたり。人々は皆な種々の想像を有し、或者は馬を欲し、或者は犬を愛し、或者は金銀を好み、又た或者は名譽を求む。されども余は此くの如きものは毫も求むる所なく、たゞ朋友を求むるの情に厚し。故に世界最上の家雞或は鶉等よりも、寧ろ善良なる朋友を好み、尙ほ又た馬よりも、犬よりも、優りて之れを得んことを欲す。實に余はダレイオスの黄金、否な尙ほ進みてダレイオス王彼自身たるを得んよりも、眞の朋友を得んことを好めり。余は實に此くの如きまでも朋友を好むものなり。而して余は、君及びリュシスが、君の如き若年に於て、已に此の貴き寶たる朋友を有し、彼は君の友たり、君は又た彼の友たるを見て、實に驚き又

メ子キセノスを
挑發して朋友と
は如何なるもの
なるやを問ふ

二人中一人のみ
愛せば二人朋友
なるか

愛し返へさせらる
時は如何ん

一方は愛すとも
一方は之れを嫌
ふ時は如何ん

た其樂しみを羨やむものなり。而して又た自ら願みるに、余の如きは已に年齢多しと雖君等の如き貴重なるものを有せることなく、又た如何にせば朋友を得べきやをも知らざるを悲しむ。こは余が君に問はんとする所のものなり。君は已に經驗あり、願くば余に教へよ、人若し他の人を愛せば彼れ朋友の愛者なるか將た又た愛されたるものなるか、或は兩者とも朋友なりと云ふべきか。

彼れ曰く、兩者共に朋友たるを得べし。

彼れ曰く、若し其内一人のみ他の一人を愛せば、彼れ等兩人互に朋友たりと云ふか。

彼れ曰く、然り、之れ余の意味する所なり。

然りと雖其愛する人にして、他の一方より愛し返へされざる時は如何ん、之れ有り得べきことなりとす。

然り。

或は若し一方は愛すと雖、一方之れを嫌惡する時は如何ん。此くの如きは愛者の間に往々あり得ることにして、彼等の愛情たるや、何物も其愛

孰れが孰れの友
なる

に優るものなすと雖、尙ほ彼等時に愛し返へされずと思ひ、或は嫌惡されたりと思ふことあり、之れ有り得べきことに非ずや。

彼れ曰く、實に然り。

此の場合に於ては一方は愛し、一方は愛されたるものなるか。
然り。

然らば孰れか孰れの朋友なる。愛する者は愛し返へさるゝとも又た嫌はるゝとも、尙 彼れ愛さらるゝ者の朋友なるか、或は愛さるゝ者は愛する者の朋友なるか、或は兩者相互に愛するに非ざるよりは、相方共に友情なるものあらずとなすか。

此くの如き時は友情なるもの無きが如し。

然らば之れ前言に反するに非ずや、前には何れか一方愛する時は、兩者共に朋友なりとし、今は兩者相愛するに非ずんば、相方共に朋友に非ずとなす。

君の言の如し。

然らば何人と雖愛し返へさざる朋友には、朋友たらざるか。

愛し返へさぬは
朋友に非ざるか

馬、鶴、犬、酒等
の愛

朋友たらずと信ず。

然らば馬を愛するとも、馬は愛し返へさざる時は、其人は馬の愛者に非ず。之れと同じく鶴、犬、酒、或は運動遊戯等凡て愛し返へさざるものゝ愛者は、是等諸物の愛者に非ざるか。又た彼れ智慧を愛すと雖智慧の彼れを愛し返へすに非ざるよりは、彼れ智慧の愛者に非ざるか。人は是等を愛すと雖、若し是等の諸物にして其愛する人々を愛し返へすことなじとせば詩人が歌うて

『善く其子女を愛し、其馬は無双の蹄を有し、其犬は能く獲物を逐

ひ、又た外國人と交際を有せる人は幸福なりと謂ふべし。』

と云へるは或は誤れりと謂ふべきか。

余は誤れりと思はず。

然らば詩人の詩は正當なりと思へるか。

然り。

然らばメキセノスよ、結論は此くなるべし、曰く、吾が愛する所の者は或は愛し返へすとも、或は却つて嫌ふことありとも、吾れに取つては可愛

吾が愛する者は
愛し返へさずと
も可愛

吾が愛する者可
愛く、吾れを愛
するものは必し
も可愛からず

其不合理

又する者は愛さ
れたる者の朋友
なるか

きなり。例へば極めて年少の小兒は、未だ兩親を愛し返へすの年齢に達せず、又た父母に叱呵せらるゝ時は、或は父母を嫌ふことありとも、父母たるものは其嫌はるゝ時ほど其兒の可愛きことはあらざるなり。

彼れ曰く、其は眞理なるべし。

此の見解に由る時は、吾れを愛する所の者必ずしも朋友たり又た可愛き人たるに非ずして、吾が愛する所の者は朋友たり又た可愛き人たるべく、吾れを嫌ふ者必しも敵なるに非ずして、吾が嫌ふ所のものは敵なりと謂ふべきか。

其は明かなることなり。

然らば多くの人は、敵に愛され、朋友に嫌はれ、敵の朋友たり朋友の敵たるが如し。之れ吾が愛するもの可愛くして、吾れを愛するもの必しも可愛からずとするより來る所の結論なり。されども此は不合理なり、否なたゞに不合理なるのみに非ず又た不能のことたるなり。

ソークラテースよ、余は君の言を眞なりと信ず。

然らば敵は朋友に非ずとせば、愛する者は愛されたる者の朋友なるか。

然り。

嫌ふ者は嫌はれたるものゝ敵なるか。

實に然り。

然りと雖亦前の如く、人若し己を愛せざる者を愛し、或は却つて己を嫌ふ者を愛する時は、人は其朋友に非ざるもの、或は其敵たる者を朋友とすることあるは、之れを許容せざる可からざるなり。又た人は其敵に非ざる者を敵とし、時には其朋友をだも敵とするとあり、例へば己を嫌はざるのみに非ず、却つて己を愛する人を嫌ふ時の如き然り。

其は眞理なるが如し。

されども若し愛するもの友たらず、愛されたる者も友たらず、又た兩者共に友たらずとせば、吾等之れを何とか云はん。孰れを以て相互の朋友と謂ふべきや。何物か朋友として残れるある。

實にソークラテースよ、余は何物も之れを發見すること能はざるなり。

あゝ、メテキセノスよ、吾等は全く結論に於て誤れるには非ざるか。

リュシス曰く、ソークラテースよ、吾等必ず其間に誤謬ありしことを確知

朋友及び敵人に對して愛惡の辨別することあり

然らば朋友とは如何なる者ぞ

其間何等か誤謬ありしなるべし

すと。此く語りて彼れ耻づかしげに顔を赤らめたり、之れ言はんとして言ひしに非ず、知らず識らず其熱心より出でし言語たるなり。而して彼れの傾聴せる間甚だ注意深き容貌を示めし居たり。

余は興味を以てリュシスが吾等の談話を聴き居るを喜びたり。而して余は暫くメテキセノスに休息を與へ、リュシスに向つて謂うて曰く、リュシスよ、思ふに君の言へる所真なるが如し。若し吾等の議論にして正當ならんには此くまで誤謬に深入りせざりしなるべし。吾等議論の此方向に進行することを止めん、何となれば此路は甚だ煩雜なればなり、而して詩人を以て吾等の嚮導者となし、以て他の路より進むべし。何となれば詩人等は智慧の父たり、創始者たるの態度を以て朋友に就いて語り、決して輕浮煩瑣の態度なく、神自ら人を引き寄せて以て彼等を朋友となすとせり。余にして若し誤ることなくんば、彼等の言は此くの如し、曰く、

『神は常に同を同に引き寄せて、以つて互に親密ならしむ』

と。君は必ず此言を聞きしならん。

彼れ曰く、然り、嘗て之れを聴けり。

君は又た哲學者等が、同は同を好むと論せることを知らん。哲學者は天地自然及び宇宙に就いて、或は語り或は著述するものなり。

彼れ曰く、然り之れを知れり。

君は彼等の言を正しとするか。

或は正しからん。

余曰く、若し正當に解釋されしならんには、恐くは半ば正しく、或は全く正しかるを得んか。何となれば悪人は悪人と與にするを好むと雖、益々接近するに従つて彼等互に相嫌ふに至らん。何となれば彼等互に相害すべければなり。而して加害者と被害者とは朋友たること、能はざるべし。此は眞理に非ざるか。

彼れ曰く、然り。

然らば、若し悪人互に同一ならんには、同は同を好むとの言の一半は眞理にあらざるにあらずや。

然り。

然りと雖、余思ふに人々の眞に意味する所は、善人は相同じく、互に朋友

半ば正しく或は全く正しからんか

「同は同を好む」の一半は眞理に非ず

善人と善人とは一致す

悪人と善人とは
一致せず

善人は善人の友
悪人は友なし

尙ほ疑念存す

たりと雖、悪人は相互の間に一致あるなく、互に情欲を以て相對し、決して
靜安なることなく、其他何事に關しても互に衝突して、怨恨を懷き決して一
致調和するとなしと云ふにあるが如し。君は余の言に一致せざるか。

然り、一致せん。

然らば友よ。かの同は同の友たりとなす人々の意思たるや、若し余の
見解にして誤らずとせば、善人は善人の友にしてたゞ善人のみの友なり
と雖、悪人は決して、善人とも又た悪人とも眞の朋友となること能はざる
べしと云ふにあるものゝ如し。君余の見解に同意なりや否や。

彼れ合點して承認せり。

然らば吾等「如何なる人か朋友たる」との疑問に答ふるの方を知り得た
り、何となれば吾等の議論は「善人は互に友たり」との答を與へたればなり。
彼れ曰く、然り其は眞理なり。

余曰く、それ然り、然りと雖余は尙ほ是れを以て満足すること能はざる
なり。余の疑念とせる所を云はんか。同は若し其同たるに於て同の友
として有益なりと假定し、換言して云はんに、自ら自己に何等の善も、何等

同は他の同に何の善をか爲す

の害をも爲し得ざる同は、果して他の同に對して、善或は害を爲すことを得るか。又た自己より何事をも受けざる所のものを、他の同より之れを受くることを爲すか。若し相互に何の用をも爲すことなしとせば、如何にして此等の同は互に相愛することを爲すや。彼等果して愛することを得るか。

否な愛し得ざるなり。

然らば愛されざる所の者は朋友たるを得るか。

決して然らず。

然らば同は同たる以上、同の朋友に非すと雖、善は其善たる以上尙ほ朋友たることを得るなり。

然り。

然らば再び問はん、善若し善たる以上は、自ら以て満足せるに非ずや。

満足せる者は、何物をも他に求めむる所なきは、満足と言へる言語中に含まれたる意味に非ずや。

然り勿論なり。

善は自己の善に満足す他の善を求めむるの要なし

何物をも求めざるものは、又た何物をも欲望せざるか。
然り、欲望せざるなり。

彼れ其の欲望せざる所のものを愛することを得るか。

否な愛し能はず。

愛せざる者は愛者たり、又た朋友たることなきか。

然り朋友に非ず。

然らば若し善人は朋友なくとも、自己の善に満足し、他の人々に對して欲する所なく、又た朋友ありとするも、相互に益することなきに於ては、友情の存する餘地果して何處にかある。此くの如き人々は、如何にして互に其價值を認めて相尊敬するの情を起すことを得るか。

彼等能はざるなり。

若し互に其價值を認むるに非ざる以上は、彼等朋友たること能はざるにあらずや。

眞に然り。

されどもリュシスよ、吾等又た凡て此點に於て欺かれたるを見ん。吾等

同は同の敵善は善の敵

商賈敵

異なる者の友情、
貧者は富者を、
病者は醫師を、
知者は未知者を
友とす

全く誤謬なるに非ずや。
彼れ曰く其は何故ぞ。

人あり余に言ひたることを余は今ま思ひ出だせり。即ち同は同の敵にして善は善の敵なりと。彼れヘシオドスの句を引用して之れを確かめんとす。其言の曰く「陶器商は陶器商と争ひ、作詩家は作詩家と争ひ、乞食は乞食と争ふ」と。尙ほ其他の事に就いて謂へる言に曰く「最も同じき者は其必要よりして互に嫉妬、競争、憎惡の情に充滿せり。友情は最も異なるものゝ間にあり。故に貧人は富者の友たらざるを得ず、弱者は强者の援助を要し、病者は醫師の親切を要し、凡て知らざる者は之れを知る者と親交せんことを欲す」と。而して彼の人、大言以つて云うて曰く「友情は同性質のものゝ間に存すとの觀念は眞理に非ざるのみに非ず、又た眞理に反せるなり。而して最も親密なる友情は最も反對したる性質のものゝ間に存するなり。故に萬物同を希はずして異を欲す、例へば乾燥は濕潤を、寒氣は暑氣を、苦味は甘味を、銳利なるものは鈍なるものを、虧乏は充滿せんことを、充滿は虧乏せんことを欲し、其他皆此くの如きなり。之れ反對

討論案批評して
云はん、友情は
愛のものにして
憎惡のものに非
ずと

敵は朋友の朋友
なるか

は反對の食物にして、同は同より何物をも受くる所あらざるなりと。余は、此言を爲したる所の彼の人は、甚だ愛嬌に富み、又た巧みに言へるものなりとなす。君等此言に對して如何の感かある。

メ子キセノス曰く、先づ之れを聽きたる所にては、余は之れを正當なりと云はん。

然らば最大親密なる友情は反對性の者の間にありと云ふべきか。確かに。

それ然り、然りと雖、メ子キセノスよ、此は奇怪なる答には非ざるか。而して博識なる討論者等勝ち誇りて手強く向ふて云はん、愛は憎惡の正反對に非ざるや否やと。吾等如何なる答へを彼等に爲さん。彼等の言語は眞理なることを認めざる可からざるに非ずや。

然り吾等其を認めざる可からず。

彼等問うて云はん、敵は朋友の朋友なるか。或は朋友は敵の朋友なるかと。

彼れ答へて曰く、否、何れにてもなし。

正直は不正直の
友なるか

されども正直なる人は不正直の人の友たり、節制の人は不節制の人の友たり、善人は悪人の友たるか。

余は其事あり得ずとなす。

余曰く、されども若し友情なるものは反對のものゝ間にありとせば、反對のものは朋友たらざるべからず。

然らざる可からず。

然らば同と同と、不同と不同と何れも朋友に非ざるなり。

然り、朋友に非ざるなり。

尙ほ考ふべきことあり、其は朋友に關する是等の思想は凡て誤謬にはあらざるか。或は又た善にも非ず悪にも非ざる者にして善の友たる場合あらざるか。

彼れ曰く、其の意味如何ん。

余曰く、余は眞に知らざるなり。然りと雖、余の頭腦は議論を考ふるに由つて眩暈せり、故に余は古の格言の言へるが如く、「美は朋友なり」と云ふ所の想像を敢てせん。美は實に柔和に、平らに、又滑かなるものなり、故に

善にも非ず悪にも非ざるも同の友情は如何

美は朋友、善は美なり

容易に吾等の精神中に透入す。余の此言を爲すは、余は善は美なりとなすものなればなり。君は之れに同意なりや如何ん。

然り。

余が此く言ふは、善にも非ず悪にも非ざるものは、美と善との友たりと云ふ所の思想よりせしものにして、何故に余が此く思考するに傾きしやを説明せん、余は善、悪及び非善非悪なる三原理あるを前定せるに由るなり。之れに關する君の意見や如何ん。

余は之れに同意す。

善は善の友たり、悪は悪の友たり、又た善は悪の友たることは、前論に由つて已に許すべからざることとなれり。故に若し友情或は愛情なるもの必ず之れありとせば、たゞ善にも非ず悪にも非ざるもの、善の朋友たるか、或は非善非悪の朋友たらざる可からず、何となれば何者も悪の友たること能はざればなり。

然り。

又た吾等の言ひし如く、同は同の友たること能はざるなり。

然り。

然らば非善非悪なるものは同じく非善非悪なるものを友とすること能はず。

明らかに然り。

善と非善非悪は友

然らばたゞ善のみ非善非悪なるものと友たるなり。

然りと假定して可なるべし。

健康人と醫師の例

此に於て吾等正常なる進路に來りしには非ざるか。故に見よ、健康體は醫藥或は其他の援助を要せずして健康なり。健康なる人は醫師に對する愛あることなし、之れ其人已に健康なればなり。

然り。

然りと雖病者は醫師を愛す、之れ其の病氣なるの故に非ずや。

確かに然り。

而して疾病は惡にして、醫術は善且つ有益なるものには非ざるか。

然り。

身體は非善非惡

されども人體は單に之れを身體として見る時は、善に非ず、又た惡に非

ざるにあらずや。

然り。

而して身體は疾病あるの理由を以つて醫術に親しみ友情を保つゝの止むを得ざるにあらざるか。

然り。

然らば之れ惡の存在するが爲めに善にも非ず惡にもあらざるものが善の友となりしにあらずや。

推論上然り。

而して之れ必ず善にも非ず惡にも非ざるものが惡の分子の爲めに、未だ全く腐敗されざる前に然りしものならざる可からず。然らざれば善を欲し之れを愛するとあらざる可ければなり。何となれば吾等前に言ひしが如く、惡は善の友たること能はざればなり。

然り惡は善の友たること能はず。

且つ余は注意せざる可からざるは或物は、他物と共に在りて、其物に同化するものありと雖、又た同化せざるものあること之れなり。例へば油

を他物の上に塗り、或は色彩を施こす時の如し。

善し。

此くの如き場合に於ては、其物は色彩或は膏油と同一なりと謂ふべきか。

彼れ曰く、君の言の意味や如何ん。

余曰く、余の意味する時は例へば君の褐色の毛髪に、塗抹するに白粉を以てする時は、毛髪は眞に白くなれりと謂ふべきか、或はたゞこれ白く見ゆると云ふべきかと謂ふにあり。

彼れ答へて曰く、これたゞ白く見ゆるのみなり。

されども其白きことは之れ無きに非ず。

然り。

毛髪に白きことは之れありと雖、尙ほ之れをして一層白からしむることとはあらずして、是等は白に非ず又た黒にもあらざるものたるべし。

然り。

されども老齡毛髪に白色を加ふるに至らば、之れ實に白化したるもの

にして、白ありて尙ほ眞に白たるなり。

實に然り。

是等の種々の場合に於て、其物は他物の存在の爲めに同化したるものと云ふべきか、或は又た其の他物の存在は、一種特別の状態の存在と謂ふべきか、之れ余の知らんと欲する所なり。

彼れ曰く、一種特別の状態の存在なり。

然らば悪分子存在せりと雖尙ほ善にも非ず悪にも非ざるもの存在して、未だ全く悪たらざるを得、而して其事今よりも前に起りたりと謂ふべきか。

然り。

而して悪分子存在するも、其物尙ほ悪たらざる時は、存在せる善は其物に於いて善の欲望を生起せしむと雖、惡の存在の爲めに其物惡となるに於ては、善の友たらんとするの欲望を消失せしむべし。之れ一度善と惡とを兼有したるものと雖、今やたゞ惡のみとなり、而して善は惡の友たらずと假定されたればなり。

善分子尙ほ存して善を求む

智慧を求むる者は賢者非賢者の中間者なり

友情とは非善非悪が善の存在よりして善を求むることなり

然り。

故に吾等は言はん、神たれ人たれ、已に智ある者は智慧の愛求者に非ず、又た自ら悪たることを知らざるものも智慧の愛求者に非ざるなり。之れ悪にして無智の人は智慧の愛求者たらざればなり。而して智慧の愛求者として残れる者は、不幸にして無智の人たりと雖、未だ無智に固執せず、或は知力に缺損せるありと雖、尙ほ自己の無智なることを知れりと思ふ人々なり。是故に智慧の愛求者たるものは、尙ほ未だ善にも非ず悪にも非ざる人々なり。されども悪人が智慧を愛せざるは、善人が智慧を愛せざるに同じ、何となれば吾等前に言ひし如く不同は不同の友たらず、又た同は同の友たらずるを以つてなり。之れ君の記憶せる所ならん。

然り、前に言へる所なり。

此くてリュシス及びメキセノスよ、吾等友情の性質を發見せり。之れ疑ふべきに非ざるなり。故に曰く友情とは善にも非ず悪にも非ざる者が其精神或は身體に悪分子の存在せる時、善を愛する之れなりと。

彼等兩人同意し、全く余の言を承認せり。余時に大に喜び宛も獵夫が

又々疑念起りて
結論陰影の如し

議論又々誤謬な
りき

朋友たるの精神
目的

獲物を發見して、將に之れを獲んとする時の如くに満足せり。然るに之れたゞ瞬間の喜悅にして、疑念の雲忽ち起りて余の心裏に浮び來り、余の結論は眞理に非ずとの感起り、余爲めに苦痛を感せり。而して余は曰く、あよりユシス及びメチキセノスよ、吾等或は陰影を擧へたる者に非ざるなきやを恐るると。

メチキセノス曰く、何故に君は此の言を爲すか。

余曰く、友情に關する議論は誤れるが如く、恰も虚託者等が數々爲す所の議論の如きを覺ゆ。

彼れ問うて曰く、何故に然るか。

余曰く、此く考へ見よ、朋友とは或者の朋友なるべし。

然り。

人若し朋友たらんとせば、彼れ必ず其朋友たらんとする所の精神と目的とを有すべきに非ずや。

然り、彼れ精神と目的とを有す。

而して其目的なるものは彼をして其朋友を貴重なりと思はしむるか、

或は貴重とも思はしめず又た有害とも思はしめざるか。

彼れ曰く、余は君の言を十分に解せざるなり。

余曰く或は然らん。余若し之れを言ひ換ふれば君は余の意味する所を了會することを得べく、余も亦自ら一層明瞭となるべし。而して今ま余が言ひし如く病者は醫師の友たるには非ざるか。

然り。

而して彼れの友たるや、疾病あるに由り、健康ならんが爲めなるか。

然り。

疾病は悪なるか。

確かに然り。

余曰く、健康とは如何なるものぞ、善なるか悪なるか、或は何れにも非ざるか。

彼れ曰く、善なり。

身體は善にも非ず悪にも非ざることば、余已に之れを言へりと信ず。

たゞ其疾病あるに由り、即ち疾病の悪在るに由りて醫術と友たり、而して

身體は悪あるに
由つて善を要す

病者醫師と友た
るの目的

醫術は善なり。此くて醫術は健康の爲めに友たり、而して健康は善たるなり。

然り。

然らば健康は朋友なるか或は朋友に非ざるか。

朋友なり。

而して疾病は敵なるか。

然り。

然らば善にも非ず惡にも非ざるものは、惡及び嫌惡すべきもの有るに由り善を欲し、友を求めて朋友たるか。

明かに然り。

然らば朋友とは朋友の爲めに朋友にして、敵あるに由りて然るものなるか。

推論上然り。

此に於て君等注意して議論に欺かるゝと勿れ。余は是より以後、朋友は朋友の朋友なり、同は同の朋友なりと云ふこと勿からん。之れ吾等の

醫術を貴重する
は健康の爲めな
り

已に不能の事としたる所なればなり。されども吾等此新意見に由つて欺かれざらんが爲めに注意して他の點を討檢せざる可からず。乃ち吾等の前に言ひし所の醫術なるものは之れ吾等の朋友なるか、或は健康の爲めに吾等に貴重なりと云ふべきか。

然り。

健康も亦貴重なるか。

然り。

若し貴重なりとせば何物かの爲めに貴重なりと謂ふべきか。

然り。

而して此目的も亦必ず貴重ならざる可からず、之れ吾等の前に許容したる所に含蓄せる意味なればなり。

然り。

或貴重なる物と云へる内には又た其他の貴重なる或物を含蓄せしとせ云ふべきか。

然り。

されども此く論じ進むに於ては吾等終に結局の所に至り、友情或は貴重なることの或第一原理に達すべし。即ち其第一原理たるや決して或る他物の爲めとなるべきものに非ずして、其物の爲めに他の諸物貴重なるものなることは吾等の主張する所なり。

然りし。

而して余の疑ふ所は、吾等の言へるが如く、其の一物の爲めに是等凡ての諸物を貴重なりと云ふは、たゞ吾等の錯覺或は誤想にして、只だ其の第一原理の在る所に眞の友情の理想あるにあらずやと云ふにあり。換言せば、こゝに大寶物ありと假定し、(此寶物は父の子にして、父は此の子を以て他の諸寶物よりも貴重なりとす)而して父は其子を以つて最も貴重なるものとして他の諸寶物の上に置き、其他の諸物の貴きは、たゞ之れ其子の爲めに貴重なるに過ぎずとなすには非ざるか。例へば、若し父其子の矢鳩答の毒を飲みしことを知り、而して酒は以て此毒を消すことを知らんには、父は又た酒を貴重なりとはなさざるか。

然り。

而して又た其の酒を盛れる所の器物も之れを貴重なりとはなさざる
か。

然り。

然りと雖、父は是故に酒三量或は酒を盛りたる陶器を以つて、之れを其
子と同一に貴重なりとすることなし。之れ寧ろ此場合の眞狀にあらず
や。而して父の此場合の憂慮なるものは、目的の爲めに準備されたる方
法に關するに非ずして、實に目的に關するものなり。而して此目的の爲
めに方法を備ふるなり。吾等又た屢金銀の貴重なることを言ふ、されど
も此は眞理に非ずして、其の是等を貴重するは、他に目的あるに由る。其
目的は何物なりとも可なり。たゞ之れ吾等の諸物中最も貴重なりとせ
る所の者にして、是物の爲めに吾等黄金及び其他の諸物を求むるなり。
余の言正しきや否や。

然り正當なり。

此論直に移して朋友を論すべきに非ずや。夫の或る他のものゝ爲め
に貴重なるものを、吾等誤つて其物眞に貴重なるが如くに謂ひ爲すと雖、

目的と方法

も銀は他の目的
の爲めに貴重な
るのみ

友情の終局する
所のもの

眞に貴重なるものは此に所謂友情なるものゝ終局する所のものたるなり。

彼れ曰く、君の言眞なるが如し。

而して眞に貴重なるもの即ち友情の最終原理なるものは、其他のものゝ爲め、或は尙ほ他の貴重なるものゝ爲めにするものに非ず。

眞に然り。

然らば友情とは要するに是の以外に他の目的を有せざるものなりと云ふにあり。然らば吾等善は朋友なりと云ふことを推論して可なるか。

余の見る所亦同じ。

然らば善は惡の爲めに吾等之れを愛するか。余は此く此場合の説明を爲さん、曰く、余は此く今ま若し假定して、善と惡と、非善非惡との——三者中、たゞ善と、非善非惡の中性のもののみ後に残り、惡は彼方に去りて、已に精神にも身體にも影響を及ぼすことなく、又た吾等の前に言ひしが如き、其物自身善にも非ず惡にも非ざる所の物の階級にあるものを害することなきとせば、善は何の用もあることなく、又た吾等に無用なるの外なき

悪なければ善の
要なし

にあらずや。若し已に吾等を害するもの存せざる時は、吾等は善を爲す所のものを要せざるべし。元來吾等の善を愛して之れを欲するは、惡の存在せるに由り、惡たる疾病を除かんが爲めにして、若し疾病なき時は之れを治するの必要なきは明かなることなり。之れ吾等善惡の中間に在る所の者が善を愛するの理由にして、吾等に惡在るを以てなり。されども善其物の爲めには善の用は有らざるなり。

思ふに其は眞なるべし。

友情の最終原理なるものは、吾等の思考するが如く、相待上の諸友情が、盡く其中に終局する所のものにして、是等諸友情とは全く異なる所の他の性質のものとなす。是等相待上の諸友情なるものは、他の貴重なるもの或は朋友の爲めにとて貴重なりと稱せらるゝと雖、眞の朋友或は眞の貴重なるものは、全く之れに反せるものにして、かの相待上の友情なるものは、憎惡あるに由つて貴重なりと雖、若し其の憎惡去るに於ては、愛も亦存留することあらざるなり。

彼れ答へて曰く、眞に然り、而して此事少なくとも議論中に含蓄せられ

存す。

余曰く、然りと雖、余に告げよ、若し惡にして消滅し了りたらんには、吾等餓ゆることなく渴くことなく、其他此くの如きことは今後あらずと云ふべきか。或は人間及び動物にして存在せる以上は、餓餓は今後尙ほ存すべしと雖、左程有害ならずと想像すべきか、渴及び其他の諸感情に於ても同じく存すべしと雖、惡の滅却したる以上は、是等は惡に非すと云ふべきか。或は寧ろ其然るか然らざるかを問ふことは意味なきことなり、何人か之れを答へ得んとすべきか。余はたゞ現在の事情に於ては、餓餓は時に吾等を害すと雖、又た時に益することあるを知るのみ。此は眞に然るに非ざるか。

然り。

之れと同じく渴及び其他の欲望も吾等に取りつて時に善たり、時に惡たり、又た時に善にも非ず惡にも非ざることあるか。

然り。

然りと雖、惡の滅却したるの故に、又た惡ならざるものゝ滅却するの理

由ありや否や。

あることなし。

然らば若し悪にして滅却するとも、尙ほ善にも非ず悪にも非ざる諸欲望は存留するか。

明かに然り。

愛も存す

人は其欲望し、又た愛する所の者は、之れを愛せざる可からざるにあらざるか。

彼れ之れを愛せざる可からず。

悪滅却せるとも
友情は存す

然らば假令悪は滅却したりと雖、尙ほ愛或は友情の或分子は存留するにあらずや。

然り。

若し悪は友情の
原因なりとせば
悪滅却せば友情
なし

然りと雖若し悪にして友情の原因なる時は然らず。何となれば此場合に於ては、悪の滅却したる後は、何物も如何なる他の物と朋友たることあらざるべし、之れ原因滅却したる後、たゞ其の結果のみ存留すること能はざる可ければなり。

眞に然り。

余は前に朋友は道理ありて或物を愛すと言ひしには非ざるか。而して其道理とは悪の存在に由り、善にも非ず悪にも非ざるものをして、善を愛せしむるに至らしむると云ふにはあらざりしか。

眞に然り。

然りと雖今や吾等の見解は以前と趣を變じたり。友情には他の原因を有せざる可からざるにあらずや。

余思ふに他に原因あらざる可からず。

眞理は、寧ろ吾等の今ま論じ居たるが如く、願望は友情の原因なりと云ふにはあらざるか。何となれば願望する者は、其願望の時に於て、願望する者を取つて可愛きに因るを以つてなり。而して其他の説は無意味冗漫の説話の如きものには非ざるか。

其は或は然るべし。

余曰く、然りと雖、人の願望するや必ず其要する所のものを願望するに

他の原因を要せざるか

願望は友情の原因

然り。

其要する所のものは、彼に取つては貴重なるには非ざるか。

然り。

人は其缺損せる所のものを要するにはあらざるか。

然り。

然らば愛情、願望、友情等は、自然、或は同好性のものなるが如し。リュシス

及びメチキセノスよ、此は推論上然るなり。

彼等之れを承認せり。

然らば若し君等朋友ならんには、君等は相互に其同好性たる所の性質を有せざる可からず。

彼等兩人曰く、確かに然り。

而して余は云はん、少年等よ、若し人他を愛し或は願望すと雖、若し彼れ其精神に於て、或は其性質に於て、或は其態度に於て、或は其形姿に於て、鬼に角に同好性を有せざるに於ては、彼れ未だ其人を愛し又た欲望したりと云ふべからざるなり。

同好性なくば眞の愛なし

及情は同好性或は自然なり

同好性は愛するべきもの

「同好性」と「同」の區別

メ子キセノスは曰く、然り然りと。されどもリュシスは無言なりき。

余曰く、結論せば、同好性のものは愛せられざる可からずと云ふにあり。

彼れ曰く、其は然るべき所なり。

然らば虚偽に非ずして、真情より愛するものは、又た其の愛人より愛せられざる可からざるなり。

リュシス及びメ子キセノスは此言に對して、甚だ輕き承認を與へたりと雖、ヒッポタレーヌは甚じく喜悅の顔色を呈したり。

茲に余は前論を再査せんとして謂うて曰く、吾等「同好性」と謂ふことと「同」と謂ふこととを區別するを得るか。若し之れを能くすとせば、リュシス及びメ子キセノスよ、余思ふに吾等の今まで爲したる友情論は意味あるものたるべしと雖、若し同好性と同とは同一なりとせば、曩きの同の同たる以上は同に取つて益なしとの議論は、如何にして之れを除去することを得ん。而して無用のものを貴重なりと謂ふは、甚だ不合理の事なるなり。然らば吾等同好性と同とは區別さるべきものなりとのことに

同意せりと假定せんに、恐くば議論に酔ひたる餘り、君等は之れを許容するならん。

眞に然り。

吾等、尙ほ進みて善は同好性なりと雖、悪は何人にも同好性に非すと謂ふべきか、或は悪は悪と同好性にして、善は善と同好性と謂ふべきか、或は又た善にも非ず悪にも非ざるものは、善にもあらず悪にも非ざるものと同好性なりと謂ふべきか。

彼等此最後のものを選びて同意せり。

愛する少年等よ、然らば吾等又た以前に論破したる所の誤謬に陥れるなり。何となれば不正直者は不正直者と友たり、悪人は悪人と友たること、善人は善人と友たる如きを以つてなり。

其は議論の結果なるが如し。

然りと雖吾等若し同好性は善と同一なりとせば、此場合に於ては善のみたゞ善の友たるべし。

然り。

善、悪、非善非
悪、何れが同好
性なる

前の誤謬に再歸す

余は辯論を得ず
たゞ前論を再説
總括するを得る
のみ

リュレス及びメ
ネキセノスを迎
ひに来る

然りと雖之れ吾等が前に論破したる所の位置なることは君等の記憶せる所ならん。

吾等記憶せり。

然らば如何にせば可ならん。或は寧ろ何事かせんすべありやと謂はん。吾等は知者が法廷にあつて議論する時の如く、たゞ此く前論を總括するを得るのみにして――愛さるゝ者も、愛する者も、同じき者も同じからざる者も、善き者も、同好性の者も、其他吾等の言ひし所の者――其數余の記憶せざる程多かりしなり――若し是等凡てのもの皆な朋友に非すとせば、其他余は何を以つて朋友となすべきやを知らずと言はん。

此くて余は尙ほ或る他の年長者の意見を聽かんと欲したるが、突然、リュシス及メネキセノスの傅等、彼等の兄弟と共に悪魔の如き狀貌にて來つて、怒聲以つて吾等の問答を中斷し、兩人の歸宅遅しとして歸宅せよと命じたり。始めは吾等及び傍在者は彼等を逐ひ退けしが、彼等遂に之れを意とせず蠻聲を發し、大に怒りて二少年の名を呼びて叫び廻はれり。彼等はヘルメース祭にて多量に飲酒したるものゝ如し、故に制御すること

朋友は如何なる
ものなるか遂に
結論に達せず

甚だ困難なりしと雖、吾等温和に讓歩して群衆を開散せり。

されども別るゝに臨み、余は數語を少年に語つて曰く、あゝメキセノ
ス及びリュシスよ——傍聴者等開散して此く云はん——げに之れ滑稽に非ず
や。君等二少年と、君等と共に一たらんことを欲する所の老少年たる余
とは、自ら朋友なりと想像せりと雖、吾等は尙ほ未だ朋友の如何なるもの
なるかを發見すること能はざるなりと。

ラ
ッ
ヘ
ー
ス

1900

1901

1902

1903

1904

1905

1906

1907

1908

ラッヘース解題

「正直」アリスタイデースの子なるリュシマッホス、及び大ツキヂデースの子なるメレーシアスの二老人は共に同一の家に居住せる人なるが、其子に善良なる教育を受けしめんとして苦心せり。

時に、重甲を着して劍術を行ふ一人の興行師ステシラオスなる者アテーナイ市に來れり、兩老人、ニキアス及びラッヘースなる二將軍に請ひて、共に往いて劍術師の興行を見物し、而して此の技術を青年に教ふるの可否を問へり。兩將軍喜んで其諮問に應ずる由を告げ、又た此場にあるソークラテースにも協議すべきことを告げたり。リュシマッホス老人は、ソークラテースの父なるソフロニスコスとは親交ありしと雖、ソークラテースをば未だ之れを識らず、たゞ其子等が、數々ソークラテースの名を口にせるを聴きしと雖、其はソフロニスコスの子なる、ソークラテースにして、今ま此處に在る人と同一人なることは之れを知らざりしなり。ニキアスは、嘗て其子の爲めに教師を求めし時、ソークラテースは、音樂者にして、當

時有名なるダモーンなるものを紹介したることあるを以つて之を知れり。ラッヘースは嘗てデリオン戦争の時、ソークラテースと同軍に在りて

其勇壯なる行爲を實見して、能くソークラテースを知れるなり。

ソークラテースは、ニキアス及びラッヘース等よりも後輩なるを以つて先づ兩將軍の意見を聽き、然る後補ふべきこと、正すべきことあらば言ふ所あるべしとなせり。軍畧家ニキアスは、劍術師ステシラオスの術、即ち劍術なるものは、平時、戦時、身體上、精神上、有効なるものとなせりと雖、武骨なるラッヘースは之れを否定して、此くの如きは學問と稱するに足らず、此の劍術師の爲す所は、無用にして滑稽なるものなり。故に武勇を貴ぶスパルタ人の如きすら之れを度外視せりとす。而してラッヘース自ら、實際此の劍術師の技術の拙劣にして滑稽なるものなることは、海上に於ける一事變ありし時に之れを目撃せりとて、大に此ステシラオスなるものと技術を排撃せり。

此に於いてリュシマッホス老人、兩人の意見の判定をソークラテースに乞ひ、其の孰れに加擔するかを問ふ。

ソクラテース此くの如き重要なる問題を多數決に付するを以つて不可となし、ソクラテースの多數決を不可とするは大に注意すべきこととなす。「プロトタゴラス」中にも「辯論」篇中にも、「クリトーン」篇中にも、此精神瞭然たり、十分能く教育に關して學修せるもの、或は此の術に明かなる者の意見に聽くべしとなし、兩將軍は自己よりも年長者なるを以つて必ず十分の意見あるべければ、リュシマッホス老人、宜しく兩將軍より聽くべしとなす。ラッヘースは前已にソクラテースの勇壯なる行爲の人なるを知り、又たソクラテースの言ふ所の價值あるを感じ、ソクラテースの身に於ては、言行相調和し、彼れ其人は一種「ドリア」式の音樂其物の如きの感あり、故に切にソクラテースの言を聽くことを望む、年齢の長少の如きは意に介するに足らずとせり。

ソクラテース問うて曰く、根本的研究の法たるや、先づ勇氣なるものは徳義の如何なる部分なりやと云ふより論じ始むべしとなし、而して「勇氣とは如何なるものなりや」と問ふ。ラッヘース之れ容易に答へ得べきことなりとして曰く、(一)勇氣とは自己の守るべき立場を守りて、決して之れ

を棄てて遁れざることなりと。ソークラテース問うて曰く、或る人民は遁れつゝ巧みに戦ふことホメーロスの云へる所のアイチアスの如き然り、又たプラタヤ戦争の時スバルタ人も一度遁れて又た逆撃せりと。而して單に軍事上のみの勇氣に非ずして、一般に通ずる所の勇氣をの定解を得んことを希望せり。ラッヘース答へて曰く、(一)勇氣は忍耐なりと。ソークラテース評して曰く、勇氣は善事なり、然るに單に忍耐なるのみは、或は却つて有害なることありと。此に於て(二)勇氣中には智性を加へざる可からざることとなれり。然りと雖智性なき忍耐は、時に或は智性ある忍耐よりも大膽勇敢なることあるに由つて見る時は、こゝに兩觀念衝突して、其説明の方を知らずたとひ行爲に於ては勇氣ありと雖、言語に於ては混亂不明にして、(三)ドリア式の調和又たあることなすとなす。

ニキアス、ソークラテースに聴きし所に基づき(四)勇氣は恐懼及び希望の基礎の知識なりとなせり。ラッヘース之れを嘲笑し、ソークラテース之れを質問して曰く、「知識とは何の知識なるぞ」と。ニキアス曰く、「恐るべきとの知識なり」と。ソークラテース論じて曰く、恐るべきことは之れ將來

に關することなり、されども將來の知識のみ、過去及び現在の知識より獨立して存し得べきものに非ずして、必ずや、過去、現在、將來に通せるものなるを以つて、勇氣は將來に關する知識なりと云ふと雖も、之れ實は、過去現在及び將來に通ずる凡ての善惡の知識たらざる可からず。而して全般の善惡の知識なるものは、たゞに勇氣なるのみに非ずして、又た節制、正義及び其他の諸徳を要することとなり、此くて一箇の徳は全諸徳と同一なるに至り、前に定義したる所と衝突し、遂に要領を得ざるなりとなす、而して二將軍も、デリオンの勇者たるソークラテースも、遂に勇氣の何たるやを解する能はず、小兒も、老人も、凡て皆な小學校に往きて學ばざる可からざることとなれり。

○

「ハルミデース」及び「リュシス」に在つては若かやかなる美は其中心たりしと雖、本篇は老人及び成人を以つて主となし、其内ソークラテースは最も若かき人たるなり——中年なるべし。

本篇に於て徳義と知識との關係の觀念ありと雖、未だ明瞭なる結果に

至らざるなり。勇氣の性質に關する種々の眞の思想此に存じ(一)勇氣なるものは道徳上のものに兼ぬるに身體上のものあること、(二)眞の勇氣は知識と分離すべきものに非ざること、(三)然りと雖又た天性に屬するものあること、—是等は注意するの價值あることとなす。而してラッヘースは勇氣の一側面を表はし、ニキアスは他面を示めし、兩者の調和したる完全なる肖像は、たゞソークラテースの一身に於いて見らるべきなり。

此篇に於てはソークラテースは年若き成年として表はしありと雖、デリオン戦争は紀元前四百二十四年、ラッヘース將軍のマンチチア戦争に斃れたるは四百十四年にして、本篇の事實の年代は、此兩年月の間なりとせば、ソークラテースの死せしは紀元前三百九十九年七十二歳の時なりしを以つて本篇に於けるソークラテースの年齢は決して若き成年に非ずして五十歳前後たるべき筈なり。然りと雖、本篇には若き成年の如くなしあるに由つて見る時は、プラトーンは事實に重きを置かざりしことを證するに足るなり。

プラトーンの事實に重きを置かずして理想を主とせしこと

ラッヘース

一名 勇氣論

對話人物

リュシマツホス—アリスステイデースの子

ニキアス

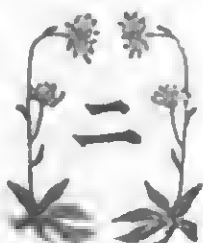
メレーシアス—ツキユヂデースの子

ラッヘース

彼等の子等

ソークラテース

リュシ



キアス及びラッヘースの兩君よ、君等は甲冑を着して劍術を行ふ人の技術を見物せり。されども吾が友メレーシ

アスと余とが、君等兩人に請ひて共に其の見物に行きし理由に就いては、其の時未だ語らざりしが、吾等今ま其の理由を打明けて語らんと欲す、何

兩將軍の勳書を乞ふ

となれば吾等は君等に對して何の包む所もあらざればなり。實は吾等は諸君より忠告を得んと欲する事あるなり。此く言はゞ人或は忠告の無効なることを笑ひ、忠告を願ふと雖も、真情を吐露して忠告を爲さず、先づ忠告を請ふ人の胸中を臆測して其人の欲する如く言ひ爲して、毫も自己が眞に思ふ如く、其人に忠告を與へざる者あり。然りと雖吾等は諸君の善良なる判斷を有せる人にして、諸君の思ふが如く、真情を語る人なるを知り、衷情諸君の忠告を希望するなり。而して吾等が此緒言を置きて扱て言はんと欲することは此事なり—メレーシアス及び余は二人の子を有せり、其れなるはメレーシアスの子にして、其祖父の名を繼ぎてツキュヂデースと云ひ、此れなるは余の子にして同じく祖父の名を繼ぎてアリステイデースと呼べり。而して吾等最大なる注意を以つて此少年等を教育し、已に小兒の域を脱して青年となりし時、往々にして放蕩に陥ることを禦ぎ、決して彼等の思ふがまゝに振舞はしむることなく、吾等の能ふ限りの力を盡くして完全なる教育を試みんと欲せり。君等も亦子を有せる人なれば最も其教育進歩に注意したるなるべし。若し諸君にして

子の教育の爲め

未だ是事に注意爲さずとせば、以後之れに注意し、共に我等を助けて國民たるの義務を盡くさんことを希望するなり。ニキアス及びブラッヘースよ諸君或は冗長と感ずるやも計られずと雖、今余が此思想を起したる所以に就いて一言する所あらしめよ。メレーシアスと余とは同一の家に居住して吾等の二兒も共にありて、始めに語りし如き事情たるなり。吾等兩人屢々子等に教ふるに、吾等の祖先が平時に於て又た戦時に於て、多くの高尚なる行爲を爲せしことを以てし、又た聯邦事務の整理、及び吾都市の事務を處辨したること等を語り聽かせり。されども吾等兩人、何れも人に誇るの行爲なく、祖先等に比較せば大に赧顔せざる可からざるなり。祖先等は他人の事にまで配慮し、盡力する所ありしと雖、吾等は青年の日に於て自ら暴棄し、今や以て吾等の祖先を辱かしむるに至りしことを歎せざるを得ざるなり。故に吾等此事を子等に語り、若し彼等にして、不軌の志を懷き、若しくは善く自己を修むることを力めざる時は、決して名譽の人として或長すること能はずと雖、若し善く自己を修むる時は、榮名を有することを得べき由を教へたり。子等は、十分、吾等の精神を體する由

少年に教ふるに
最も善良の科目
は何ぞや

駿劍術

次

を約したれば、吾等は今や如何なる科目は最も子等の進歩に有効なるかを知らんとするなり。或人は、此の武器使用術は、青年に取つて最も有益なることを語り、諸君と共に歩いて観たる所の彼の人を稱賛し、吾等に勸むるに行きて觀るとを以つてせり。因つて吾等試みに行き見んと欲し、諸君を誘ひ、若し諸君にして異存なくば、吾等の子等の教育に就いて吾等に忠告を與へんことを欲したるなり。之れ吾等が諸君を見て談話せんとしたる理由にして、吾等は、諸君が此の事に就いて十分其の意見を述べ若し他に學科あらば、其は青年の學ぶに適せりや否やに就いて指教せんことを切望す。諸君吾等の願ふ所に異議ありや否や、幸に告げよ。

ニキ リュシマッホス及びメレーシアスよ、余の感じたる所を以てせば、余は實に君の目的とせる所を稱賛し、喜びて君に助力を與ふべし。ラッヘースよ、君も亦同じく喜びて助力を與ふるならん。

ラッヘ　ニキアスよ、確かに然り。實にリュシマッホスが其父及びメレーシアスの父に就いて言ひし所は、たゞ之れリュシマッホス及びメレーシアス等のみの事に非ずして、又た何人と雖も、苟も公事に關せる人に適應すべき

兩人共に助力を
與ふ

子を教育するの
義務

ラッヘース、ソー
クラテースを推
薦す

ニキアスの子の
師匠とソークラ
テース

ことよなす。リュシマッホスの言へるが如く、多くの人は其子等、及び其個人に關すること、に就いては、多くは怠慢不注意にして、リュシマッホスよ、君の言へる所には實に眞理あつて存せりと謂ふべし。然るに君は青年の教育に關しては、之れを吾等に計らんよりも、何故に吾等の朋友ソークラテースに計らざるや。ソークラテースは君と同區の人にして、常に君等の目下考究し居る如き、青年の高尙なる學問或は事業に就いて教ふることを爲せる人なり。

リュシマッホスよ、あゝソークラテースは此くの如き事に關して注意せる人なりしか。

ラッヘ 然り、リュシマッホスよ。

ニキアス 此の事は余も亦ラッヘースと同じく之を知るの機ありしなり。

過日余は、子供等の爲めに音樂の教師を需めし時、ソークラテースはアガトクレースの門人ダモーンを紹介せり。ダモーンは諸科の藝術に精達せる人にして、又た音樂者なり。而して青年に取つては最も稱賛すべき伴侶たるなり。

リユシマツホス
老人とソークラ
テースの父との
親しき交際

クユシマツホス
の子等にソーク
ラテースの事
を問へり

ソークラテース
の父は秀出せる
人物なりき

リユシ ソークラテース、ニキアス及びラツペースよ、吾等の年齢に達したるものは一般に、年齢の爲めに家に在りて外に交はることなく、爲めに青年の人を知らざること多し。されども余は君に望む、ソフロニスコスの子よ、君と同區に住む吾等に、君の與へ得る忠告の利益を受けしめよ。且つ余は君の父の舊友として此事を願ふものなり。實に余と君の父とは常に親しき朋友にして、君の父の死する時まで、吾等の間に何事も異るとあらざりしが、今ま君の名を聽きて思ひ起したるは、我子等が家に在つて互に語り合ふ時、最も歎美したる言語を以つて、屢々ソークラテースに就いて語り居りしことなるが、其時余は子供等の言へる所のソークラテースは、ソフロニスコスの子なりや否やを問ふの考へ起らざりき。子供等よ、汝等の屢々言ひ居りし所のソークラテースとは此人の事なるか。子供 然り、父上よ、此人なり。

リユシ ソークラテースよ、余は君が能く其の父の名譽を維持せることを聽きて大に喜ぶものなり。君の父は最も秀出せる人なりき。且つ余は吾等の家族の關係の新たに興されたるを悦ぶものなり。

ソークリテリスは父の名譽のみならず國家の名譽をも維持す

デリオン戦争の時ソークラテースの勇氣

リュシマツホス今後ソークラテースと親密に交はることを求む

劍術の意見を問ふ

ラッヘ　リュシマツホスよ、君は必ずソークラテースを見棄つべからず。余は此事を君に言はん、彼はたゞに其父の名譽を維持せるのみに非ずして又た能く吾國の名譽をも維持せるなり。吾等デリオンより退軍する時、彼亦吾等と同軍中にありき。余は言ふ、若し他の人々にしてソークラテースの如くなりしならんには、吾國の名譽は維持せられ、而して彼時の如き大敗北はあらざりしものを。

リュシ　ソークラテースよ、此は正直なる實地の目撃者が君の功績に對して呈したる至高の讚美たるなり。余は實に君の名聲に就いて聽くことを得たるは、甚だ愉快に感ずる者なり。且つ余は希望す、今後君は余を以つて君の親友の一とせんことを。實は久しき以前に君は余を訪問し君の朋友中に余を算入せざる可からざりしなり。されども互に知り合ひたる上は、今後は余が言ひし如くに爲し、余の家にも來りて余及び是等少年と相識り、而して余が君の父と朋友たりし如く、又た君とも友情を續づけ得んことを希望す。然りと雖、余が談話し居たる夫の武器を使用して闘ふの術は、少年の學びて有益なるものなりや、否や之れに對する君の

意見は如何ん。

ソークラテース
年少を以て辭し
爾將軍に先づ言
し口む

ソー クニシマツホスよ、余は此事に關して能ふ限りは忠告を呈し、又た種々君の希望の如く行ふことを力めん。されども余は他の人々に比較せば年少にして従つて經驗も亦少し、故に先づ長者の言を聴き、之れを學び、然る後若し附加すべきことありと感せば之れを附加し、其後に於て諸君の言に對して余の意見を述ぶべし。先づ諸君の内ニキアス始めに語りては如何ん。

ニキアスは劍術
修練を有用とす

ニキ ソークラテースよ、余は別に異存なければ余より語り始めん。

余の思ふ所に由れば、此技術の學修は、青年に取つて種々の方面に有用にして、閑散時に之れを行へば、以つて身體を健康強壯にし、以つて青年の陷り易き種々の怠惰を防ぐの利あり。何れの運動術も之れに優りて困難且つ有益なるものあらず。殊に此運動及び乘馬の術は、吾々公民に取つては諸藝術中最も適當なるものにして、武器の使用に教練されたる人のみは、之れ吾等の軍事上の強力者にして、實に戰爭の中軸を爲せる所の技術を以つて教練されたるものなり。且つ實戰の場合に於て、戦列に在つ

て他衆と共に闘ふ時は、此種の學修は必ず其實効を示めずものにして、若し我が戦列敵の爲めに破られ、單身以つて闘はざる可からざる時は、至大の効用あるものとなす。或は敵を追うて之れを攻撃し、其能く防衛するものと闘ひ或は敵の攻撃に對して自ら防禦する時の如き、此術の必要なること亦大なりとす。人若し此術を知得せる時は、一人若しくは數人の手に由つて害を被ることなく、如何なる場合に於ても大なる利益あるべし。之れに加ふるに、此種の技術の練達は、能く人をして此他の高尙なる科業に向はしむるものとなす。何となれば人若し武器を以つて闘ふことを學ぶものは、又た軍隊の組織を學ばんことを欲すべし、之れ此術の學修より必ず續ぎ來る希望たるなり。彼れ若し之れを學び、一旦大望の火、胸中に燃ゆるに於ては、彼れ次に大將たる者に必要なる全般の技術を學ばんとするに至らん。此くて其の他の軍事上の技術に關する知識及び實行の、有用にして貴重なることは、實に見易き道理にして、此擊劍術は其他軍事上の諸技術の初歩たるなり。尙ほ此技術の利益を云はぶ、之れ決して輕少なるものに非ずして、此知識は能く人をして事に臨みて勇壯な

自信の念を生ぜしむ

威風を作る

らしめ又た自信の念を生せしむることとなす。或人は些事なりとして輕視することありと雖、余は然らずとなし、此に言はんとする所は、能く此技術を修めたる者は、其適當なる場合に臨み、最も適當なる容貌態度をなし、以て敵者の心中に恐怖の念を起さしめ得ることとなす。リュシマッホスよ、余は此理由を以つて青年をして此技術を學修せしむるは最も有益なることとなす。されども、ラッヘース若し他に意見あらば余は其を聽かんことを好むものなり。

ラッヘースは有用ならずとす

ラッヘ　ニキアスよ、余は如何なることなりとも、之れを學ぶの要なしと云ふものに非ず、何となれば凡ての知識は皆な一種の善たる如きを以つてなり。若し此の劍術にして、ニキアス及び、劍術師等の言ふが如く、眞に學問の一種ならんには、此は素より學修すべきものなりと雖、若し夫れ然らずして、其の劍術を唱道せる所の人々にして、其の實詐欺者たり、又た其の術の知識にして價值なきものなりとせば、之れを學修したればとて果して何の益あらんや。余が此の言を爲すや次の如き理由あるなり。今ま若し此の技術にして眞に價值あるものならんには、彼のラケダイモ

若し有川ならばラケダイモーン人は必ず先づ此術を發明せしならん

有用ならばラケ
ダイモーンにて
此劍術師尊敬せ
られしならん

此劍術師ラケダ
イモーンには入
込み能はず

戰爭中劍術師の
無用なるを實知
せり

ン人は、他國人に勝ることを得るの技術を發明せんが爲めに、其の一生を之れに費やせる人民なるを以つて、必ずや已に此の技術を發明したるなるべし。彼等假令之れを發明せざりしとするも、尙ほ此等劍術師は、必ずやラケダイモーン人は全グレンシア人中、最も此種の事を好める人民なるを知るべき筈にして、彼等必ずラケダイモーン人に尊敬され、其の國に於て已に十分其の財産を作りたるべき筈なり、宛も之れ悲劇作者は我等の間に尊敬されて富有たるが如きなるへし。之れを以て自ら能く悲劇を作し得ると信する者は、決して他國を遍歴することなく、直に此の地に來り、アテーナイ市に於て其の技を示めせり、之れ自然なり。思ふに此の劍術師等はラケダイモーンを以つて神聖にして犯すべからざる土地となし、一步だも足を踏み入るゝことなく、四鄰の諸國を巡回し、スパルタ人を除きて其の他の諸國人にのみ其の技を示めさんとせり。殊に自ら戰爭に於ては第一等國に非ずとせる所の國民に其の技を示めさんとす。日、つリニシマッホスよ、余は兵役にありし時多くの此の種の人に會ひたれば、十分彼等の人物の技量は之れを測定せるを以つて。余は直に之れを語る

此劍術師ステレン
ヲオス失敗の滑
稽實話

ことを得べし。而して是等劍術師は一人として戦争に功名を立てし者あることなし——之れ或は彼等の不運なりしにも由ることあらん。而して此他の一切の諸藝術に於いて著名なる人物は、皆な其の術に於て鍛練せる人なりと雖、是等劍術師等は、最も不幸なる除外例なるが如し。例せば君及び余等の實見したる所の此ステシラオスなるものは、大衆に向つて自己の技術を廣言して、之れを展覽せしむることなるが、余は曩日彼れが意外なる演藝を爲したることを見たり、之れ實に一層の奇觀なりき。之れ真面目の事實たるなり。彼れは一兵船の水兵なりき、而して槍と鎌とを兼ねたる一種奇妙なる武器を有せり。此の武器已に奇妙にして又た其の人物の奇妙なるを示めすものなり。或時其の兵船一の運送船に衝突せり。今ま若し詳細を語らば餘りに冗長ならんことを恐れ、要を摘みて此の著名なる發明たる鎌槍に關して如何なる事の起りしやを語るべし。彼れ闘へる時此の鎌槍の尖端他船の帆綱にからめられたるより、彼れ力を極めて之れを引き抜かんとすと雖、甚だ固くからまりて又た如何とも爲すべからず、此くする内兩船互に進行せるを以つて、始めは彼れ

此術無用なるか
然らざれば欺騙
に過ぎず

其の槍を以つて自己の乗れる船に沿ひて走り行きしも、他船進行するを以つて彼れ自己の船上を引き刷られ行き、遂に槍を滑べらして彼れ漸く其の^{イシヤ}鐵を保つに過ぎざるに至れり。此ここに於て運送船の人々手を拍つて其の滑稽なる状態を哄笑せり。時に運送船にある一人、石を投じたる者あり。其の石甲板上彼れの足下に落つ。彼れ驚きて其の鎌槍持てる手を離したるより、自己の乗れる船の水夫等亦大笑し、其鎌槍の、運送船の帆綱に懸垂せるを見ては、孰れも笑ひを禁ずること能はざりき。素よりニキアスの謂へるが如く、此の技術には何等かの利益ありて存するは余の否まざる所なりと雖、余は此ここに余の實見したる所を語り、始めに言ひしが如く、此の技術は、利益極めて少きものなるか、或は全然技術と稱するに足らずして、一種の欺騙たるに過ぎざるべし。兩者何れなりとするも兎にも角にも此の術は學修の功益あらざるものと謂ふべきなり。余の思ふ所に由れば、此の劍術の教師にして若し怯懦の者ならんには、彼れ胃進者となり其性質や一層有名となるのみならん。若し彼れ大膽にして其失敗する所常に小なるに於ては、他人は大に彼れに注目し、以つて彼を誹

謗すべし。之れ此くの如き虚託者に對しては常に嫉妬なるもの存すべければなり。故に彼れ非凡に勇氣あるに非ざるよりは、武器の使用に於て此くの如き熟練を有せりと云ふが如きことを廣言するの滑稽は之れを演ずること能はざるべし。リュシマッホスよ、之れ此の技術に對する余の判断なり。然りと雖余が始めに言ひしが如く、ソークラテースをして、此の事に關して其の意見を陳述するまでは、決して彼をして去らしむること勿れ。

リュシ　ソークラテースよ、余は君の意見を聽かんことを願ふや切なり。殊に兩大家其の説を異にせるに於ては、之れを判断するは甚だ必要のことなす。若し兩大家の意見にして相合する時は、其の是非を判断するの要なしと雖も、ワッヘースは是れと云ひ、ニキアスは彼れと云へるを以て君は兩友中何れに左袒するやは余の聽かんと欲する所なり。

ソー　リュシマッホスよ、君は多數決に由つて此くの如き事を決定せんと欲するか。

リュシ　然り、ソークラテースよ他に良法ありや否や。

ソークラテース
多數決を排す

教育ある人の意
見に従へ

知識なり、數に
非ざるなり

此事に關する知
識を有せる者の
み眞の判定者た
るべし

ソークラテースよ、君は之れに同意なりや。君、若し君の子息の運動に關する教育に就いて熱考せる時、君は吾等多數の言ふ所に従はんとするか、將た又た斯道に精達せる名人の教育を受けたる人の意見に従はんとするか。何れぞや。

メレソークラテースよ、余は斯道の教育を受けたる人の説に従ふべし。

ソークラテースよ、然らば彼れの一粟は吾等凡ての四粟よりも價值ありと謂ふべきか。

メレ然り。

ソークラテースよ、故に余は思ふに、眞正の判断は、知識に基づくものにして、決して數に由るに非ざるなりと。

メレ確かに然り。

ソークラテースよ、然らば吾等先づ問はざる可からざることば、吾等の内果して吾等の此所に熱議しつゝある事に關する知識を有せる者ありや否やと云ふことなす。若し其の人ありとせば、吾等其の人の指教を採用するを以

て至當となす、假令彼れ一人なりとも、其の他の數人は之れを願ふの要なかるべし。若し其の人なしとせば、吾等他の協議を求めざる可からず。

而して君及びリュシマッホス等の熟考せる此事たるや、決して輕々に語り去るべき些事に非ずして、實に君等の最大所有物の大損得に關する事たるなり。何となれば、子供は君の財産にして、其の善良なる者となると、其の不良の者となるとは、父の家の休戚に關する大事たればなり。

メレ 實に然り。

ソー 然らば此の事に關しては大に意を用ゐざる可からざるにあらずや。

メレ 然り。

ソー 余が今ま言ひし如く、子供の教師を撰ぶことを考ふる時、或は考へざる可からざる時は、最も其の術を究め、最も善き師を有せる人の意見に出つて之れを決するにはあらざるか。

メレ 余は然かすべしと思考す。

ソー 吾等名人を求めて、之れを子供の師となさんとするに就いては、

其術に達し善真なる師に就きし人の意見に出つて決すべし

殆づ技術の性質を知るを要す

先づ其の技術の性質を知らざる可からざるは先決問題にはあらざるか。

メレ 余は君の言を了解し能はず。

ソー 然らば余の言を明瞭にすべし。思ふに吾等の内何人か其の技術に熱達し、又た何人か其の技術の教師を有せざるやを問ふと雖、吾等の協議しつゝある所の事は果して何ぞやと云ふことは、未だ決定されざるなり。

ニキ 何ぞや。ソークラテースよ、此の問題たるや、武器を使用して闘ふの術を青年に教ふるは可なるか不可なるかと云ふにあらずや。

ソー ニキアスよ、されども亦た先決問題ありて存す。余は此く説明せん、此に人あり、眼病の薬品を考ふる時は、君は此の人を以つて、薬品を考へ居るとなすか、或は眼の爲めを考へ居るとなすか。

ニキ 眼なり。

ソー 若し人あり、馬に鞍を据えんとせる時、此の人鞍に非ずして馬を考へ居ると謂ふべきか。

ニキ 然り。

ソ一 換言せば彼れ或物の爲めに何事をか考へ居る時は、彼れ目的を考へ居ることにして、方法を考へ居るに非すと謂ふべきか。

ニキ 然り。

ソ一 君若し人に指教を乞ふ時は、彼れ單に其の方便のみならず、又た能く其目的を完うするを得るや否やを考へざる可からざるに非ずや。

ニキ 然り。

ソ一 吾等今ま或種類の知識に就いての思想を有す、而して其の目的は青年の精神にはあらざるか。

ニキ 然り。

ソ一 而して其の疑問たるや、吾等の内、誰か最も精神の處理に熟練し、或は成功し、又た熟達せる師を有したるは誰ぞやと謂ふには、あらざるか。

ラッヘ 夫れ然り、然りと雖、ソークラテースよ、或人は自ら師を有せずと雖、或事に於ては師を有せる人よりも熟練なる者あることは君の知れる所にあらずや。

ソ一 然り、ラッヘースよ、余は其事を知らざるに非すと雖、彼若し或一事

青年の精神を目的とす

此術に達し真教師に就きしは誰れぞ

師を云ふか事業
上の功績を示め
すか何れかなか
る可からず

或は數事に於て其の熟練せること、或は秀出せることを證明せるに非ざるよりは、彼れたゞ口に自ら其の術に長せることを公言すと雖、君等決して彼等を信用することを爲さざるべし。

ラッヘ 眞に然り。

ソー 故にラッヘース及びニキアスよ。リュシマッホス及びメレーシアス等が其子息の精神を進歩せしむるとに配慮して、其れ等の事に關して吾等の指教を求むる時は、吾等若し吾等の師を有したる時は、其の師は如何なる人物なりやを告げ、青年の精神を教導するに於て功勞あり、又た熟練の人たることを證し、又た眞に吾等の師たりしことを明かにせざる可からざるなり。又た若し吾等師を有したることなしとも、自己の事業の人に示めすに足るものありとせば、彼等に示めすに、アテーナイ人たれ、外國人たれ、奴隸たれ、公民たれ、果して其の如何なる人の進歩を致し、一般人々の承認する所の成績を呈したりや否やを示めさざる可からざるなり。されど若し彼れ教師も有せず、又た人に示めすに足るべき事業も之れ無き時は、吾等は此かる人を措きて、他に之れを求め、以つて友人の子等の前

人の子を隠らし
むる勿れ

途を謬る如き危険を避けざる可からざるなり。人の子の前途を謬らしむるは、其の近親々戚より其の人に加ふる所の最も恐るべき非難たるなり。リュシマッホス及びメレーシアスよ、余は先づ自白す、素より幼少の頃より、常に或教師を得んどの希望は之れありしと雖、遂に之れを有するを得ざりしことを。ソフィスト等は當時道義を進歩せしめんとせる唯一の學者なりしと雖、余や貧にして「ソフィスト」等に金錢を拂ふこと能はざりき。而して今日に至るも余は未だ其の技術を發見すること能はざるなり。然りと雖ニキアス及びラッヘース等は、或は學び或は之れを發明するを得たりしとするも余は敢て異しまざるなり。何となれば兩人は、余よりも富有の人なるを以つて、之れを他より學ぶことを得べければなり。且つ彼等兩人は余よりも年長者なるを以つて、又た其の發明を爲すの年月ありしと謂ふを得べし。故に余は眞に彼等兩人は人を教育するに足るの人なりと信ず。何となれば、若し彼等にして自己の知識を信せるに非ざるよりは、決して此くの如く、此の科目の青年に有益なり、又た有害なり等の斷言を下すことを得べからざる筈なればなり。余は信を此の兩人に

ソークラテース
兩將軍に向つて
言ふべきことを
リユシマツホス
に教ふ

兩將軍は此術を
實見したるか、
學びたるか、師
は何人ぞ

置くものなりと雖、如何なれば兩人此く其の意見を異にしたるならん。
故にリユシマツホスよ、ラッヘースの言へるが如く、余を捕へて余の意見を語る
までは、決して之れを解放すること勿れ。余は其の代りに、熱心君に願ひ
て、ラッヘース及びニキアスを捕へて彼等に質問せんことを勸む。余は君
が彼等兩人に此く言はんことを勸む！ソークラテースの言ふ所に由れば、
彼れは自ら此の事に關しては知る所なし、故に君等兩人の議論の何れか
眞なるやを判断すること能はざるなり。又た此種の事に關しては何の
發明せる所あるなく、又た師に就いて學びたることもなし。されどもラッ
ヘース及びニキアス兩君の内何れか、其の知れる所の最も熟練なる教師
は何人なるか、又たは諸君自ら此の術を發見したるか、或は之れを他より
學びたるか、若し他より學びたりとせば、其の尊敬する所の師は何人にし
て、其の技術上の兄弟は何人なりやを吾等に告げよ。又た若し諸君にし
て政事に多忙にして、爲めに自ら吾等に教へ能はずとせば、吾等をして其
の教師或は技術上の兄弟の許に至らしめ、禮を重うし、聘を厚ふし、以つて
吾等の全家族の指導をなし、青年をして、就いて傾聽せしめて陋劣のもの

として成長せしむることなく、祖先の名譽を汚がすことなきやう計らふことを爲せ。されども若し諸君は、此の事に關して創見者ならんには、幸に諸君が熟練を有せることの或證明を余に與へよ。始めは下等なる人物なりしが、諸君の教訓の下に在つて、善良にして高尚なる人物となりし者は誰そや、諸君之れを指名せよ。若し之れ諸君の教育上の手始めなりとせば、此は甚だ危険なることにして、諸君の試験は之れをカリアの奴隸の卑しき身體に於てするに非ずして、諸君自身の子、或は諸君の朋友の子等に試みんとするものなれば、大に熟考せざる可からざるなり。諺にも言へる如く、小盃を作ることを學ばんとして、大皿を破壊す」と云ふが如きことを爲すこと勿れ。諸君は如何なる性質を得んと欲するか、又た如何なる性質を得ざらんと欲するか、願くば之れを語れ」と。リュシマッホスよ、彼等をして以上の事を君に答へしめよ、決して彼等を解放して歸へらじむること勿れ。

リュシ 友人諸君、余はソークラテースの言を喜ぶ、されどもニキアス及びラッペースよ、君等は先づ此事に關して質問に應じ、又た説明を與ふるや

友人の子弟を試
験に供するは危
険なり

兩將軍も子あり
又た教育に心を
用ゆるの人なる
べし

ニキアス、ソー
クラテースの議
論に秀出の人な
るをリユシマツ
ホスに語る

ソークラテース
の知力上の大引
力

否やを決定せざる可からざるなり。余及びメレーシアスは、諸君がソークラテースの間ふ所に答ふるを聴くことを悦ぶものなり。何となれば、吾等が君に指教を請ひし所の理由たるや、君は此の事に關しては十分其の意を用ゆるの人なるべく、殊に君等も吾等と同じく教育さるべき年齢に達せる子息を有せる人なればなり。若し君に於いて異存なくんば願くば、ソークラテースと共に或は問ひ、或は答へよ、實にソークラテースが言ひし如く、吾等は一身上の重大なることを熟考せんとするものなればなり。余は諸君が余の願ふ所を成さんことを希望す。

ニキ リユシマツホスよ、余は知る君はソークラテースの父は之れを知れりと雖、ソークラテース彼れ自身は、未だ之れを知らざる人なることを。

或はソークラテースの尙は小兒なりし時、其の父等と共に祭禮に至りし時、又は其の他の會合ありし時、或は君はソークラテースを見しことあらんと雖、其の成人したるソークラテースは、未だ全く之れを知らざるべし。

リユシ ニキアスよ、此言を爲すは何故ぞ。

ニキ ソークラテースは智力上非常なる引力ある人にして、苟もソー

其議論力

クラテースに接したる者は、必ず彼と與に議論の仲間に引込まれ、種々の問題を提出され、其間答に由つて縦横左右に引廻はされ、遂には其の自己の過去の経歴も、現在の情狀も、盡く、之を吐露せざる可らざるに至る。

而して其人の思想一旦攪亂紛糾するに至る時は、ソークラテースは其の人の意見を簡に懸け、最終まで簡ひ終らざる以上は、決して其人を解放して行かじむることを爲さざるなり。余は今ま此運命に置かれたり。ソークラテースは必ず余が言ひし如くなさん。余は又た自ら此の犠牲に供せられたるものなるを知る。リュシマッホスよ、余はソークラテースと與に語るを好むものなり。然りと雖余は、余の現在の惡しきこと、或は過去に惡かりしこと等を、此に想ひ起こさしめらるゝことありとも、毫も彼れに害されたりとは思はざるなり。余、若し彼れの非難攻撃を避遁せずして、彼れに傾聽するときは、必ず自ら將來を警むる心を起すの利益あるなり。而してソローンの言へる如く、其の生命のあらん限りは、學ばんとを願望し、たゞに年齢を重ねるのみは、決して人に知識を與ふるものに非ずと考ふるに至るべし。余に取つては、ソークラテースに出りて精査さる

ソークラテース
と談話するの利
益

ふことは奇異の事に非ず、又た不快と感ずることもし。ソークラテースは始めは吾等の子供等と談話し居るも、議論は何時しか吾等に移り、吾等を議論の相手に引き入るゝなり。故に余は言ふ、余は彼れの流儀に従つて、ソークラテースと談話するは甚だ喜ぶ所なり。されども君は又た吾等の友人ラッヘースの感情如何は之れを問ふことを可とす。

ラッヘニキアスよ、余は議論に關しては一の感情を有す、或は寧ろ二箇の感情を有すと云ふべきか。即ち一方より言ふときは議論を好むものゝ如しと雖、又た一方より言ふ時は甚だ之れを好まざるものゝ如し。若し人徳義或は智慧を論ずるに當り、其の人眞誠の人にして又た其の論ずる所の問題に對して價值ある人ならんには、余は最も此の人の議論を好む者なり。而して余は其の人物と言論とを比較して、果して兩者一致調和せりや否やを見る。余は此かる人を目して眞正の音楽家となす、何となれば此の人其の身に於て調和を有せること、ソークラテース或は其他愉快なる樂器の調和よりも美なればなり。此くの如き人は眞に其の身に言行の一致調和備はれるなり。而して之れイオニア式に非ず、フリギア式に

非ず、或は又たソークラテース式にも非ずして、真正のヘラス式即ちドリテース式たり。其他に非ず此かる人は其聲音を以つて余を楽しましむ。余其談話を傾聴する時は、自ら以て談話を好むものなるかなと思ふに至り、熱心に其の言語を味ふなり。然るに反對の性質の人の論談を聴く時は、余は之れに苦惱し、彼れ愈々美言を爲すに従つて余は愈々之れを厭ふ。此の點よりする時は余は談論を嫌ふものと云ふべし。ソークラテースに關しては其の議論は余は未だ之れを知らずと雖、余が彼れの行爲を實知せるは久しきことにして、其の行爲に依つて觀る時は、自由にして且つ高尚なる感情を彼れに希望して可なるが如し。故に若し彼れの言語にして一致するものならんには、余は彼と同一の精神の者にして、喜んで彼れの如き人物に質問され、決して彼より學ばざる可からざること苦しむものに非ず。何となれば余はソローンの言へるが如く、「余は數多の事を學ぶを喜び、老の將に至らんとするを知らず」との語に賛成するものなればなり。然りと雖、余は之れに附加するにたゞ善と云ふことを以つてすることの許容を得ざる可からざるなり。而してソークラテースは、善良な

ラッヘース、ソ
ークラアースの
勇氣ある人なる
を認む

る教師にして余は愚鈍の一生徒たるとは彼れ喜びて之れを承諾せん。
若し其れ教師が生徒よりも年少にして、未だ聊か名聲を博せずと謂ふが
如き、是等は余の間ふ所に非ざるなり。故にソークラテースよ、君は思ふ
がまゝに余に教へ、又た余を論破せよ。若し幸にして余の知る所あらん
には余に學ぶ所あれ。此事一言君に注意し置かん。之れ、巖きに危難の
日、君は余の同僚たりし時、其の勇氣の疑ふ可からざる證據を與へし以來
余の君に對する意見たるなり。是故に君の好む所に従つて發言し、決し
て年齢の差異を心に介すること勿れ。

ソー 諸君の内一人として、余と共に互に其の意見を述べ、又た指教を
聽くことを厭ふ者なきは、余の大に喜ぶ所なり。

リュシ たゞ之れ吾等の當に爲すべき事にして、余は又た君を以つて同
一利害の感ある人となす。何となれば余は君を以つて、吾等の仲間の一
人に算すればなり。然らば願くば、余に代つて、青年の爲めに吾等の知ら
んと欲する所を、ニキアス及びラッヘースより聽き、彼等と共に余に告げ余
に指教せよ。何となれば余は年老ひて記憶不良となり、余の間はんとす

る所の問題をも之れを忘れ、又た答ふべき所をも之れを記憶せず、若し中途にして或種の障碍あらんには、全く途方に暮るゝ可ければなり。故に余の君に願ふは、君が提出したる所の論議を進行せんこと之れなり。而して余は之れを謹聴し、メレーシアスと余とは君の結論を履行すべし。

ソー ニキアス及びラッヘースよ、然らば吾等リュシマツホス及びメレーシアスの依頼せる如く爲さん。吾等始めに提出されたる問題たる、此の教育に關して吾等の師たりし者は誰ぞや、又吾等何人を教育して善良ならしめしやと云ふことに就きて、討議して不可無からんか。然りと雖若し他の方法に由つて此の考究を始むるとも、歸する所は又た同一なる此の點なる可きを以て、吾等第一原理より始むるを以つて可なりとなす。且つ若し吾等或物を増加する時は或他のものを進歩せしむることを知り、又た其れを増加することを得る時は、吾等は其の指教せんとする所の事は、如何にせば、最もよく、又た最も容易に了會さるゝやを明知せざる可からざるなり。諸君恐くば余の言ひし所を解せざりしなるべければ、余は意味を平易にして此く説明せん。假定せよ、吾等若し視力を増加する時

先づ其據ふ物の性質を知るを要す

精神に徳義を興
ふるを目的とす

先づ徳義を知る
を要す

は、視得る所の天賦ある眼をして、善良ならしむることを知り、又た視力を眼に興ふることを得るとせば、吾等先づ視覺の性質を熟知し、又た如何にせば、此視力なるものは最も善く又た最も容易に得らるべきやを知らざる可からず。然るに吾等若し視覺の何たるや、聽覺の何たるやを知らざる時は、吾等眼に關して、耳に關して、或は耳目に視聽を興ふる良法に關して、決して善良なる指教者たること能はざるべし。

ラッヘ ソークラテースよ、其は眞理なり。

ソー ラッヘースよ、吾等の兩友今ま吾等を招きて、其子の精神を進歩せしめんが爲めに、如何にせば、徳義を興ふるを得るやを思考せんことを依頼せるに非ずや。

ラッヘ 然リ。

ソー 然らば吾等先づ徳義の性質を知らざる可からず、若し吾等全然之れを知らざる時は、如何にして之れに達することを得べきやは、吾等これを指教すること能はざればなり。

ラッヘ ソークラテースよ、然り徳義の性質を知らずして、之れに達する

を得べしとは、余は思はざるなり。

ソ一 然らばラッヘーリスよ、吾等は徳義の性質を知れりと前定して可なるか。

ラッヘ 然り。

ソ一 然らば、吾等之を知らば、又た之れを語ることを得るか。

ラッヘ 然り。

ソ一 友よ、吾等は徳義全體の考究を以つて始めざるべし、何となれば此は吾等にとつては餘りに廣大なればなり。故に吾等先づ其一部分に就いて十分の知識を有せんことを欲す。蓋之れ饒論に進入するの容易なる方法たるべし。

ラッヘ ソークラテースよ、吾等君の言の如くになさん。

ソ一 然らば吾等徳義の如何なる部分を探すべきか。武器の使用に由つて到達さるべしと稱する所の徳義を撰擇しては如何ん。而して之れ一般に勇氣なりと稱する所のものに非ずや。

ラッヘ 然り。

徳義の一部たる
勇氣を講究せん

勇氣とは何ぞや

自己の立場を守る人

ソ一 然らばラッヘースよ、吾等先づ勇氣の性質の決定より出立し、次に若し勇氣は學問攻修の補助に由つて得らるべきものなりとせば、如何にせば青年が此の勇氣の性質を得べきやに論じ及ばん。先づ試みに君が果して勇氣の何たるやを余に告げ得るや否やを見ん。

ラッヘ ソークラテースよ、此は直に答へ得べきことなるのみ。夫の自己の立場を守りて之れを棄てず、以つて敵と戦ふ者の勇氣の人なるは君も亦承認する所なるべし。

ソ一 ラッヘースよ、其は善し、然りと雖余は明瞭に余の疑問を語らざりしを以つて、君は余が問はんとする所に答へずして他を答へたり。

ラッヘ ソークラテースよ、君の意味せる所は如何ん。

ソ一 余は説明することを力めん。君は夫の己れの立場に踏み止まり、以つて敵と戦ふ者を以て勇氣ある人となすか。

ラッヘ 確に然り。

ソ一 余も亦然りとなす。されども夫の踏止まらずして、遁れつゝ戦ふ者は君以つて如何んとなす。

遁走して勇氣な
るありアイチア
ス馬の例

ラッヘ 如何に遁走する人なるぞ。

ソー スキュチア人は追撃しつゝ又た遁走しつゝ戦ふ所の人種なりと稱せらる。而してホメーロスがアイチアスの馬を讚美して、是等の馬は速かに彼方此方に奔走して能く其追撃すべき時、遁走すべき時を知るを言へり。而して又たアイチアス其人を頌賛して、能く恐懼及び遁走を知れる者となし、彼を稱して恐懼、遁走の名人なりとせり。

ラッヘ 然り、ソークラテースよ。此こにホメーロスの言へる所は實に正當なる言となす。之れホメーロスは其兵車の事に關して言ひ、君も亦此戦法を使用せるスキュチア騎兵に就いて言へるものなればなり。然りと雖重甲を着せるグレシア兵は、余が言へる如く、其軍列に止まりて戦ふなり。

ソー されどもラッヘースよ、君はプラタヤ戦争に於けるラケダイモン人は、之れを除外せざる可からざるなり。彼等ベルシアの輕楯兵を攻撃せし時、踏み止まりて戦ふことを欲せずして遁走したりと雖も、ベルシア軍の隊列破れ亂るゝに及びて、彼等踵を轉じて歸り來り、騎兵の如くべ

一部の勇氣を問
ひしに非ず勇氣
全般を問ひしな
り

ロシア軍を攻撃し、以て勝利を得たりしなり。

ラッヘ 其は眞に然り。

ソー 之れ余の意味せる所なり——始め余の言ひし時質問を述ぶるに不完全なりしを以つて、君の答ふる所も亦宜しからざりしなり、之れ余の過ちなり。余は單に重甲兵のみの勇氣を問ひしに非ずして、又た輕甲兵、騎兵、其他の諸兵の勇氣、單に戰場に於けるのみに非ず、又た海上危難の場合に於ける勇氣、疾病、貧困、政治上の勇氣、單に恐怖及び苦痛に對するのみに非ず、又た欲望及び快樂に對して足るを知るの勇氣、自己の戦列に踏み止まるの勇氣或は敵を攻撃するの勇氣等をも問ひしなり。勇氣に此くの如きものありや、なきや。

ラッヘ 確に之れあり、ソークラテースよ。

ソー 是等凡て勇氣なり。されども或者は快樂に勇氣あるあり、或者は苦痛に勇氣あるあり。或者は欲望に勇氣あるあり。或者は恐怖に勇氣あるあり。而して或者は又た余が想像し得る如く、之れと同じく臆病なるあり。

勇氣の通用性

ラッヘ 真に然り。

ソー 余は今ま勇氣及び臆病全體に關して問はんと欲す。先づ勇氣より始めん、而して今一度問はん、是等凡ての場合に通じて勇氣と稱すべきものは如何なるものぞ。君余の意味せる所を了解せしや如何ん。

ラッヘ 未だ十分に了解せず。

ソー 余の意味せる所は此くの如し。例へば、余若し迅速とは如何なるものなりやと問はんには、迅速とは走行にも、彈琴にも、談話にも、勉學にも、其の他多くの同様なる行爲に通じてあり得る所のものにして、寧ろ手足、口、聲、心意等凡ての行爲に通じて之れありと謂ふべきなり。君は是等凡てに迅速なる言語を適用すべからずとなすか。

ラッヘ 適用して可なり。

ソー 今若し假定して、或人余に問ふて、ソークラテースよ、君が一切の迅速と稱する所の言語を、是等の事に適用する其の通用性とは如何なるものなりやと云はど、余は答へて云はん、僅少なる時間中に多くの事を爲すものにして、之れ走ることを、談話すること、及び其の他の行爲に於ける迅

迅速の定解

迅速の定解を以て例す

速と云ふことなりと。

ラッヘ 君の言正當なるべし。

ソー 然らばラッヘースよ、勇氣なるものゝ通有性とは如何なるものぞ。即ち快樂に於て、苦痛に於て、其の他余が前に言ひしが如き、凡ての場合に適用さるゝ所の勇氣なる語の通有性は如何ん、請ふ試に之れを語れ。

ラッヘ 余若し是等凡ての事に行き互れる普遍の性質を謂はんには、勇氣とは精神の耐忍力なりと謂ふべし。

ソー 之れ吾等が質問に答ふる時爲さざる可からざる所なり。然りと雖余の思ふ所に由れば一切の耐忍は必しも盡く勇氣なりと謂ふ可からざるが如し。余の理由を聽け。ラッヘースよ、余は信ず君は勇氣を以つて甚だ高尚なる性質のものと思惟せる人なるべし。

ラッヘ 然り、最も高尚なり。

ソー 君は又た思慮ある耐忍は、善にして高尚なりとなすか。

ラッヘ 甚だ高尚なり。

ソー されども無思慮の耐忍は如何ん。此くの如きは却つて惡にし

勇氣は耐忍力

一切の耐忍は盡く勇氣に非ざる如し

勇氣は高尚なるもの

思慮ある耐忍

て有害なりと謂ふべきには非ざるか。

ラッヘ 然り。

ソー 何物と雖惡にして有害なるものを高尙なりと言ひて可なるべきか。

ラッヘ 決して然りと言ふべからず、ソークラテースよ。

ソー 然らば此の種の耐忍は、以つて勇氣と稱すべからず、之れ高尙ならざるを以つてなり。然るに勇氣は高尙なるものたるなり。

ラッヘ 君の言や正し。

ソー されどもここに「智なり」と云ふ所の形容詞あらんには、こは果して何に關して智なることを言ふものなるぞ。大事小事何事にも之れを謂ふか。例へば人若し金錢を使用するに當り。後に至つて、始めに使用したるよりも一層多くを得べしと知りて之れを使用せば、君は此人を以つて勇氣ありとなすか。

ラッヘ 決して然らず。

ソー 又た一例せんに、醫師あり、其の子或は其の患者にして肺炎を病

戦争の例

めるあり、醫師に願ひて或物を飲食せんとすと雖、醫師之を許可せずとせば彼れ勇氣ありと謂ふべきか。

ラッヘ 之れ勇氣と稱するに足らず、たゞ其れを否みしのみ。

ソー こゝに人あり、戦場に在つて耐忍力を有し、戦鬪を厭はず、甚だ善く計慮し、而して他の者己を援助することを知り、敵兵は味方の兵より其の數少く、其の力亦劣れることを知り、之れに加ふるに味方は要害の位置にあり、此くて其の知慮と準備とを有して以つて能く耐忍せり。又た此に反對軍に人あり、其の事情は全然反對なりとも、尙ほよく耐忍して其の守るべき所を棄てざるありとせば、君は此の兩人中何れを以つて勇敢なりとなすか。

ラッヘ ソークラテースよ、余は後者を以つて一層勇敢なりと云はん。

ソー 然りと雖、此の人は他の一方の人に比する時は、實に愚昧なる耐忍を爲せるにはあらざるか。

ラッヘ 眞に然り。

ソー こゝに人あり、能く馬術を知り、而して騎兵の戦争に耐忍なる時

知識なきことに耐ゆるは勇氣なるか

は、君は此人を以つて、馬術を知らずして能く其の戦争に耐忍なるものに比較して勇氣なき人なりとなすか。

ラッヘ 其は余の意見とする所なり。

ソー 然らば又た投石術、射術、或は其他の技術を知りて耐忍なるものは、此くの如きことを知らずして耐忍なる人よりも勇氣少しとなすか。

ラッヘ 然り。

ソー 又たかの井に入るの術を知らずして井に入り、潜水の法を知らずして潜水し、此の他、其の知識なくして其の事を爲す者は、其の事を知りて其の事を爲すものよりも勇氣ありとなすか。

ラッヘ 然りとなす。若し然らずとせば他に云ふべきの名稱ありや如何ん。

ソー 然り、若し人然りと思惟せば其他に言ふべきやうあらざるべし。
ラッヘ 而して之れ余の此く考ふる所たるなり。

ソー 然りと雖、若し妄りに危難を冒して耐忍する人は、之れを夫の能く其の事を知り、熟練を有して耐忍する者に比較すれば甚だ愚たるなり。

馬鹿らしき耐忍
以下等なり

ラッヘ 然り。

ソ一 然りと雖愚昧なる大膽と耐忍とは、吾等は前に已に下等にして有害なりとしたるに非ずや。

ラッヘ 真に然り。

ソ一 又た勇氣は高尚なる性質として承認したるに非ずや。

ラッヘ 然り。

ソ一 然るに君は之れに反して、以前に不名譽としたる所の愚昧なる耐忍を以つて、今や之れを勇氣となせるに非ずや。

ラッヘ 然り。

ソ一 吾等其の如く云ふは果して正しと云ふべきか。

ラッヘ ソ一クラテースよ、實に此は正常なる言にあらざるなり。

ソ一 然らばラッヘースよ、君の言を借りて云ふ時は、君も余も共に之れ言語及び行爲の調和たる所のドリア式の調子に合せざるものたるなり。何となれば吾等の行爲は言語と一致せざればなり。人若し吾等の行爲を見し時は、吾等を以つて勇氣あるものと爲すべしと雖、今ま吾等の勇氣

ラッヘース論理
の矛盾

言行一致せず
リア式に非ず

に就いて語ることを聴きし時は、吾等を以つて勇氣なきものとせん、之れ余の想像する所なり。

ラッヘ 其は真に然り。

ソー 而して吾等の此の情態や、満足すべきものなりと謂ふべきか。

ラッヘ 全く反對なり。

ソー されども、假定して、吾等の第一原理を或程度まで許容すとせんか。

ラッヘ 如何なる原理なりや、又た吾等何をか許容すべき。

ソー 耐忍の原理なり。乃ち吾等又た此の研究に忍耐ならん、然らば勇氣は吾等の勇氣の攻究を以つて、無氣力なりとして笑ふことあらざるべし、畢竟するに之れ亦實に耐忍たるなり。

ラッヘ ソークラテースよ、余は素より此の攻究に進むべし、然りと雖此の種の攻究は余の甚だ不熟練とする所なり。而して今まで語りたる所より、反對の精神余の胸中に湧起し、遂に余の思ふ所を言ひ表はし得ざるは余の悲しむ所なり。余は自ら思ふらく、善く勇氣の性質を知れりと。

耐忍を以て此問
題を研究せん

ラッヘース自己
の思想の混亂を
自白す

然るに如何にしたりけん、此の思想は余より逸出して遂に余は此の思想を得ること能はず。従つて之れを語ることに能はざるに至れり。

ソー　されども友よ、善良なる獵夫はよく其の獸の遁逸したる路を踪跡し、決して懶惰にあらざるなり。

ラッヘ　然り、彼れ決して懶惰にあらざるべし。

ソー　然らば吾等ニキアスを吾等の議論中に引き入れんか、彼れは吾等よりも遊獵に於て達人たるなり、君の意如何ん。

ラッヘ　余は賛成す。

ソー　然らばニキアスも來りて吾等の議論に加入し、以つて君の朋友等が議論の激浪中に漂蕩して、今や殆ど其の末期にある者を援助せよ。

實に吾等其の窮極の状態にあり。願くば吾等を救ひ、又た君の意見を定め、勇氣に關して思考せる所を吾等に告げよ。

ニキ　ソークラテースよ、余は君及びラッヘース等は勇氣を定解するに其の正常を失せるものなりと考へ居たり。何となれば君等は有名なる言を忘れ居たればなり、其の言とは、余が君の口より聽きし所なり。

知識と勇氣

ソー 其は如何なる言なりや、ニキアスよ。

ニキ 「何人も其の知れる所の事に於て善にして、其の知らざる所の事に於て悪なり」とは余は數々君に聽きし所なり。

ソー ニキアスよ、此は實に眞なり。

ニキ 是故に若し大膽なる人は善なりとせば彼れ亦智者なるべし。

ソー ラッヘースよ、君はニキアスの言を聽きしや。

ラッヘ 然り余は之れを聽けり、然りと雖十分其の意を了解せざるなり。

ソー 余はニキアスの言を了會せりと信ず、余の思ふ所に由れば、彼れは勇氣を以つて智慧の一種となせるものと如し。

ラッヘ 智慧の如何なる種類なりや、ソークラテースよ。

ソー 此は君がニキアスに問はざる可からざるの問題なりとす。

ラッヘ 然り。

ソー 然らばニキアスよ、君の所謂此智慧とは果して如何なるものなるかをラッヘースに告げよ。恐くば笛を吹く所の智慧の謂には非ざるべし。

其智慧とは何の智慧か

ニキ 確かに然らず。

ソー 又た「ラ」琴を弾くの智慧にも非ざるべし。

ニキ 然らず。

ソー 然らば此の智慧とは如何なるものにして、又た何の智慧なりや。

ラッヘ ソークラテースよ、余は君の質問の言は甚だ善しと思へり。而して余はニキアスが此の智慧或は知識の性質の如何なるものなるやを吾等に告げんことを望むものなり。

ニキ ラッヘースよ、余は勇氣とは戦争に於ても亦其の他の事に於ても、能く人に恐懼及び自信の感を鼓吹する所の知識なりとなす。

ラッヘ ソークラテースよ、ニキアスの言や實に奇なりと謂ふべきに非ずや。

ソー ラッヘースよ、何を以つて君は此の言を爲すに至りしや。

ラッヘ 何故にとか。他なし、勇氣と智慧とは必ずや別物たるべし。

ソー 此れニキアスの否む所なり。

ラッヘ 然り彼れの愚之れを否めり。

ニキアスとラッ
ヘースと争ふ

ソー 吾等は彼れをして其愚に放任し去るべきか、或は彼れの業を啓くべきか。

ニキ ソークラテースよ、ラッヘースは余の業を啓かんとはせざるなり。然りと雖彼れ自己が無意味の言を爲せることの證明されしより、又た余を以つて同じく無意味の言を爲せる者なりと強ひんとせり。

ラッヘ 善し、ニキアスよ。實に君の無意味の言を爲せることは余之れを證明すべし。試みに君に一疑問を提出せんに、醫師は疾病の危険なることを知らざるものなるか、或は勇氣ある人之れを知るか、或は醫師も勇氣ある人と同じきや否や。

ニキ 決して然らず。

ラッヘ 農業の危険を知れる者は農夫の右に出づる者なく、或は其他手藝の技術上、能く恐懼及び自信の念を與ふる所の知識を有せる者は工匠の右に出づる者なし。然るに彼等夫れが爲めに毫も勇氣を増せることあらざるなり。

ソー ニキアスよ、ラッヘースの言へる所は何事ぞ。彼れ或事を言へる

恐懼及び自信の
知識は必しも人
を勇氣ならしめ
ず

醫師は恐懼及び
自信の知識を興
へ得ず

恐懼は人に由て
興る

ものゝ如し。

ニキ 然り、彼れ或事を言へるものなり。されども其或事は眞理にあ
らざるなり。

ソ一 其は何故ぞや。

ニキ 何となれば、ラッヘースは、醫師の知識はたゞ健康及び疾病の性質
以外に出づることなく、彼れたゞ病者に其事は之れを告げ得べしと雖、其
他何事をも告げ得ざるを知らざればなり。ラッヘースよ、君は醫師を以
つて、健康と疾病と何れか人間に恐ろしきものなるやを知れるものとな
すか。多くの人は疾病全快して病床より起き出でざるは却つて善なる
ことあるに非ずや。君は常に生命は必ず死よりも善しとするか、余は之
れを聽かんことを欲す。死は往々生に優ることはあらざるか。

ラッヘ 然り、余は確かに然りと信ず。

ニキ 君は、死を以つて善とせる人と、生を以つて善とせる人と、此の兩
種の人に對し、同一物は同じく恐るべきものなりと考ふるか。

ラッヘ 否な。

ニキ 夫の恐懼及び希望の基礎を知れる者は之れを除き、君は、醫師、藝術家或は其他何人たりとも能く此事を知れりと思ふか。此れを知る者を以つて余は勇氣ある人となす。

ソー ラッヘースよ、君は彼れの言を了解したるか。

ラッヘ 然り、余思ふに彼れの言へる所に由ればト筮者は勇氣あるものと謂ふべし。何となれば、生死孰れが可なるやに關しては、誰か能く之れを知らん、たゞ彼等の内の或者之れを知るのみなればなり。且つニキアスよ、君は自らト筮者なりとなすか、或はト筮者に非ず、又は勇氣ある者にも非ずとなすか。

ニキ 何ぞや。君はト筮者は當に恐懼と希望との基礎を知るべき筈のものなりと言へるなるか。

ラッヘ 然り、余は其事を意味す。彼ならずして誰か然らん。

ニキ 余は寧ろ言はん、余が謂ふ所の彼れは其人なりと。何となればト筮者はたゞ人の生死に就いて、得喪に就いて、戦争の勝負に就いて、或は其他種々の競争に就いて、將に然らんとする事物の微候を知るべしと雖、

ト筮者は勇者なるか

ニキアスは遁辭
を爲せりトラッ
ヘース云ふ

其人に取つては、是等の事物を堪受すべきや將た又た堪受せざるべきやの判定に至つては、ト筮者、毫もト筮者ならざるものに優ることあらざるなり。

ラッヘ ソークラテースよ、余はニキアスの言ふ所を了解せざるなり。

何となれば彼れ勇氣ある人はト筮者にも非ず、醫師にもあらず、又た其他の者にも非ずとなせる以上は、彼れは其人を以て神となさざる可からざればなり。余の思ふ所に由れば、彼れは自ら無意味の事を語れることを正直に自白するを好まずして、自己の陥りたる困難を隠さんとして、上下に遁辭を構ふるものと謂ふべし。ソークラテースよ、今若し吾等にしてたゞ矛盾の外觀を避けんとせしならんには、君も余も或は共に同様なる遁辭を爲せしなるべし。而して吾等若し法廷にて辯論しつゝある者ならんには、或は遁辭の必要あるべしと雖、此くの如き朋友間の議論に於いては、何ぞ無益の言語を弄して自説を飾るの要あらんや。

ソー ラッヘースよ、余は君の言へるが如く、ニキアスが此くの如きことを爲さざらんことを望む。然りと雖ニキアスも其實恐くは真面目にし

て、單に言談の爲めに言談せるには非ざるべし。故に吾等彼れの意味せる所の説明を求め、然る後、若し彼れ其言説に於て道理を有するに於ては、吾等彼れに賛成し、若し其れ然らざるに於ては、吾等彼れを教誨すべきなり。

ラッヘ　ソークラテースよ、君若し好まば彼れに質問せよ、余は己に十分質問したりと信ず。

ソー　然らば余は彼れに質問すべし。而して余の質問は吾等兩人の爲めにするものたるなり。

ラッヘ　善し。

ソー　然らばニキアスよ、余に告げよ、否な寧ろ吾等に告げよ、何となればラッヘースと余とは議論の味方たればなり。君は勇氣とは希望及び恐懼の基礎の知識なりと斷言せんとするか。

ニキ　然り。

ソー　實に之れ醫師或は預言者等の知らざる所の特殊の知識にして、彼等若し自家専門の知識に加ふるに、此特殊の知識を以つてするに非ず

専門の知識以外
恐懼希望の基礎
の知識を要す

んば勇氣ある人たらずとは、之れ君の意味せる所か。

ニキ 然り。

ソー 然らば格言の言へるが如く、豚は此知識を有せざるを以つて、勇氣なしと云ふか。

ニキ 然り、此知識は豚の有せざる所なり。

ソー ニキアスよ、豚が此知識を有せざるや明かなり、且つ夫のクロムミンの豚の如き大豚と雖、君は之れを勇氣なきものとなさん。余は之れを遊戯談として言ふに非ず。思ふに、人若し君の説たる、勇氣は恐懼及び希望の基礎の知識なりとの言に同意なる時は、獅子も、豹も、野猪も、其他如何なる動物も、此知識の或程度を有せることを許容するに非ざるよりは、如何なる猛獸と雖、勇氣ありと云ふこと能はざるべし。而も此知識は漸く少數なる人間が困難を以つて辛くも之れを得能ふ所のものたるなり。故に勇氣に關する君の見解を採用する人は、獅子も、牡鹿も、牡牛も、猿猴も皆な盡く勇氣あること能はずと斷言せざる可からざるべし。

ラッヘ ソークラテースよ、實にこれ至言なり、余はニキアスに望む。君

は吾等一般の人々が勇氣ありと認むる所の是等の諸動物は、眞に人間よりも勇氣に劣れりとするか、或は世間一般の所説に反對して、大膽に是等諸動物は勇氣なしと斷言するか、何れぞや。

ニキ　嗚呼ラッヘースよ、余は諸動物或は其他のものを勇氣ありと稱せざるなり、何となれば彼等知識なるもの有ることなく、たゞ恐るることなきと、無感覺なるとのみなればなり。君は小兒が其危険と云ふことを知らざるより、従つて恐れ念なきものを以て勇氣ありとなすか。余の思ふ所に由れば、恐れなきと云ふことゝ勇氣とは同一物に非ずとなす。余の見る所に由れば、思慮ある勇氣は甚だ少數人士の有する所の性質なりと雖、かの盲進、大膽、及び思慮なくして恐れなきことは、多數の男子、多數の女子、多數の小兒、多數の動物等の甚だ普通に有するものとなす。而して君及び其他の人々の勇氣ある行爲と稱する所のものは、之れ所謂盲進なるものにして、余の意味せる所の勇氣の行爲なるものは智慧ある行爲たるなり。

思慮ある勇氣

ラッヘ　見よ、ソークラテース。彼れの自ら思へるが如く、彼れ其の言辭

を以つて自説を飾るの巧みなることよ。此くて彼れ全世界が以つて勇氣なりとして認知せる所の名譽を彼等より剝奪せんとせり。

ニキ　ラッヘースよ、憂ふる勿れ、君及びラマッホス、及び其他數多のアテーナイ人に關しては余は實に此く言はんと欲するなり、曰く、諸君は勇氣あり、故に智者なりと。

ラッヘ　余は之れに答へ能はざるに非ず。然りと雖君は余を罵りて傲慢なるアイキンチー人と爲すこと勿らんことを望む。

ソー　ラッヘースよ、余は勸む君は彼れに答ふる勿らんことを。何となれば余の想像する所に由れば、彼れの知識は何處より來れるやは君未だ之れを發見せざるものゝ如きを以つてなり。實に彼れはその知識を我友ダモーンより得たりしなり。而してダモーンは常にプローヂコスと共に在りし人にして、プローヂコスは全ソフィスト中、此種の言語の片々を、活用するに最も長せる人たるなり。

ラッヘ　然り、ソークラテースよ。此くの如き細事の討究は、全都市を支配する所の大政治家よりも、寧ろソフィスト等に取つて一層適當せるの

事となす。

ソー 然りと雖親友よ。大政治家は大なる心意を有せるものたるべし。思ふにニキアスの下したる勇氣の定解中に含有せる所の見解は、或は討驗するの價值あるべし。

ラッヘ 然らばソークラテースよ、君自ら之れを討驗せよ。

ソー 友よ、此は余の將に爲さんとする所なり。然りと雖余は君を余の仲間より出だすものなりと思ふこと勿れ。余は君が心を用ゐ、而して此問題を思考するに於て、余と共に協力せんことを欲す。

ラッヘ 君は余を以つて常に然かすべきものなりと思ふに於ては、余は敢て異存あるなし。

ソー 然り。而して余は再び議論を始めんことをニキアスに請ふ。君は、吾等が始めに勇氣は徳義の一部なりとしたることは記憶せる所なるべし。

ニキ 然り。

ソー 而して君は自ら、此れを以つて一部分となし、其他にも尙ほ數部

分ありて、是等凡てを合併したるものを以つて徳義となすと言へり。

ニキ 然り。

ソー 然らば君は此部分説に同意なるか。余は云ふ正義、節制、及び此くの如きものは、勇氣と同じく徳義の一部分なり。君之れに同意なりや如何ん。

ニキ 然り。

ソー 然らば此點に於ては吾等の意見は一致せり。次に一步を進めて吾等恐るべきもの及び望ましきものに於て一致せりや否やを見ん。

先づ余の意見を語るべし、若し誤謬あらば幸に之れを矯正せよ。余の意見たるや、恐るべきもの及び望ましきものは、恐懼を造る者、或は之れを造らざるものたるなり。而して恐懼とは現在のものに非ず、又た過去のものにもあらずして、將來に關して、期待されたる惡たるなり。ラッヘースよ、君は此言に同意なりや否や。

ラッヘ 然り、ソークラテースよ、余は全然同意なり。

ソー ニキアスよ、之れ余の意見にして、恐るべき物とは、將來に於ける

惡にして、望まじき物とは將來に於ける善或は惡ならざる事物なりと云はざる可からず。君此れに同意なりや否や。

ニキ 同意なり。

ソ一 而して是等の知識を稱して君は勇氣なりと謂ふか。

ニキ 確かに然り。

ソ一 次に第三の論點に於て、君の意見はラッヘース及び余の意見と同一なりや否やを驗せん。

ニキ 第三の論點とは何ぞや。

ソ一 余は今ま語るべし。彼も余も同一の意見を有して、過去の學術、現在の學術、及び第三たる將來は如何なるべきか、或は如何にせば最も善きかと云ふ所の學術、別々に存せるものに非ずして、是等、現在、過去及び將來を一とせる學術は之れありと爲すものなり。例へばこゝに醫學と稱する一科の學ありとせんに、其健康の診察に於ては、現在、過去、及び將來、一様に何れの時にも關するものなり。農業も亦其他の生産に關して、凡ての時に通じて然るものたるなり。大將の職務に關しても現在及び將來

…所は過去現在
…來を一貫して
たり

に思慮を廻らすべきものなることは君自ら余の證人たるべきなり。而して大將たるものは、決してト筮者の從僕に非ずして、自ら其主人なりと思惟せりと、何なれば彼れ能く戰爭に於て如何なることありや、又た將來に於いて如何なること生起するやは、ト筮者よりも善く之れを知れるを以つてなり。故に國法もト筮者は之れを大將よりも下位に置き、決して大將をト筮者の下位に置かざるなり。ラッヘースよ、余の言正しきに非ざるか。

ラッヘ 全く正し。

ソー 而してニキアスよ、君も亦同一學術は將來、現在及び過去の何れの時に於ても同一事物の知識を有することを承認するや否や。

ニキ 然り、ソークラテースよ、實に其は余の説とする所なり。

ソー 而して友よ、勇氣とは君の言へるが如く、恐懼及び希望の知識なるか。

ニキ 然り。

ソー 而して恐懼及び希望とは將來の善及び將來の惡たることを許

容するか。

ニキ 真に然り。

ソ一 而して同一學術は將來及び其他如何なる時なりとも亦同一事物を事とするか。

ニキ 然り。

ソ一 然らば勇氣は恐懼及び希望に關する學術に非ざるなり。何きなれば是等は單に將來のものなればなり。而して勇氣は他の諸學術の如く、たゞに將來の善惡のみに關せるに非ずして、又た現在にも過去にも又た如何なる時にも關せるには非ざるか。

ニキ 思ふに真に然るべし。

ソ一 然らばニキアスよ。君の答へたる所は單に勇氣の三分の一たるに過ぎず。然るに吾等の問ふ所は勇氣全體の性質に關するものなり。而して君の見る所即ち君の現在の見解に由れば、勇氣とは單に希望及び恐懼の知識に止まらずして、尙ほ時の如何に係はらず、殆ど凡ての善惡を
含むものゝ如し。君の言を以つて言ひ換ふる時は、果して如何がなる。

ニキアスの議論
の矛盾

勇氣は單に將來
のみに非ずして

ニキアスは勇氣
全體に非ずして
三分の一を云へ

新定義に由れば
勇氣は徳義の一
部に非ず全體な
るが如し

ニキ ソークラテースよ、余は其れに同意なり。

ソー されども友よ、若し人一切の善惡を知り其物如何なるものなりや、如何なるものなりしや、又た如何にして生ずるものなりやを知る時は、彼れ正義も、節制も、神聖も如何なる徳義をも缺損する所あるなく、完全に迷せるものと謂ふべきに非ずや。此くて彼れ是等の諸徳を有し、又た如何なることは危険なりや、如何なることは危険ならざるやを知り、自然界の事、及び超自然界の事に對して、以つて自己を防衛すべく、又た諸神に對し、人々に對して其爲すべき所を知れるを以つて、又た彼等に善を爲すことを得べし。

ニキ ソークラテースよ、思ふに君の言へる所甚だ多くの眞理あるが如し。

ソー ニキアスよ、然らば若し君の此新定義に由る時は、勇氣は單に徳の一部分たるのみに非ずして、又た一切の徳義たりと謂ふべきか。

ニキ 余は然りと信ず。

ソー 然りと雖前には勇氣は徳義の一部分なりと言ひしには非ざる

ニキアスの矛盾

か。

ニキ 然り、吾等しか言ひたり。

ソー 然らば之れ今の君の見る所と衝突せるに非ずや。

ニキ 此場合に於ては然るが如し。

ソー 然らばニキアスよ。吾等未だ勇氣の何たるやは之れを發見せ

ざるにあらずや。

ニキ 然り未だ發見せざるなり。

ラッヘ 然りと雖吾が友ニキアスよ、思ふに君は勇氣に就いて發見する

所ありしならん、何となれば前に余がソークラテースに答へたる所に對して、君は輕侮の意を示めしたればなり。余は信ず、君は必ずやダモーンの智慧に由つて大に啓發を受けたる所あるべしと。

ニキ ラッヘースよ、君は自己の、全然勇氣の性質を知らざりしことを思はずして、たゞ余の同じく無智なりしことのみを見て、之れを嘲笑せんとせり。甚しと謂ふべし。若し吾等兩人、苟も何事か善き所ある人の、當に知るべき所を知らざりしとせば、共にこれ言ふに足らざるとたるのみ。

ニキアス、ラッヘース共に勇氣の何たるやを知らず

余より見る時は、君は、世人が他人の事のみを注目して、毫も自己を省ることなきが如し。思ふに此議論の問題に關しては余は已に十分言ひ盡くしたるものゝ如し。若し何事か言語に不十分の所あらんには、今後は君は未だ識あらずと雖、君が嘲笑したりと思ふ所のかのダモーン及び其他の人々に依頼して之れを正すことを爲さん。若し余にして自ら満足を得たらんには余は無代にて君に満足を分配すべし。何となれば余は實に君を以つて知識の缺乏甚しき者となせばなり。

ラッヘ ニキアスよ、君の哲學者なる事は余已に之れを知れり。然りと雖余は敢てリュシマッホス及びメレーシアス等に勸むるは、其小兒の教育に關して、決して君及び余を以つて指教者となすことなく、たゞ余が始めに一言せる如く、之れをソークラテースに願はんことなり。又た余の子等成長せば余は其教育の指導をソークラテースに依頼せんとせり。

ニキ 若しソークラテースにして承諾を興ふるならんには其は余の同感とする所なり。余は其他何人も、ニケイラトスの師となすことを欲せず。然りと雖余若し事情を語りてソークラテースに依頼するに當り

ては、彼れ必ず辭退して、他の師傅を紹介して推薦するや必せり。リュシマッホスよ、されども恐くは彼れ君の願ふ所は之れを聽かん。

リュシニキアスよ、彼れ必ず然らざる可からず。何となれば余は他の多くの人に爲さざりし所をも、彼れには之れを爲したればなり。ソークラテースよ、君の意果して如何ん、余の爲めに少年の進歩に助力を與ふるや否や。

ソークラテースも亦勇氣の何たるやを知らず

ソークラテース然り、リュシマッホスよ、余は何人の進歩の爲めと雖之れに助力を與ふるを否むは甚だ惡しき事となす。されども若し余にして、ニキアス及びソークラテース等の有せざる所の知識を有せることを、此對話中に表はしたる者ならんには、君は余を招きて余の義務を完ふせしむるに於て正當なるべしと雖、吾等三人同じく共に要領を得ざりしなり。然るに此中の一人のみ特に撰ばるゝの理由何處にかある。思ふに三人中、一人として其撰に當るべきなし。事情此の如くなるを以つて、余は忠告の一片を君に呈せんか(此は深入りするの要なし)友人諸君、余の主張する所は、吾等盡く良教師を發見して費用を厭はずして先づ吾等自身を教育し、而して後青年

眞教師の發見を力めん

老人小兒打ち違
れて學校に行き
て學ばん

を教育する方法を學ばんこと之れなり。吾等決して現在のまゝの無智に安んずべからず。若し人吾等の如き年齢に於て學校に行くことを笑ふとあらんには、余は彼等にホメーロスの句を引用して云はん、曰く、

「恭謙は足らはぬ人には宜しからず」

と。是を以つて世評の如何に關せず、青年の教育を以つて、吾等の教育となさん。

リュシ ソークラテースよ、余は大に君の言を好む。而して余は最も老年なるを以つて、又た小兒等と共に學校に通ふに最も熱心なるものなり。ソークラテースよ、願くは明朝余の家に来り、此事に關して協議する所あれ、今日の對話は此に止めん。

ソー リュシマッホスよ、余は君の言に従ひ、明朝貴家を訪問すべし。

フ
ロ
ー
タ
ゴ
ラ
ス

100-100-100

プロータゴラス解題

本書はカリアスなる人の家にて、ソークラテースとソフィスト「プロータゴラスとの爲したる問答を、ソークラテースが、其友に語れるなり。此對話は當時第一等の智者と稱せらるゝ所のプロータゴラスなる者、會々巡遊してアテーナイ市に来れるより、ヒッポクラテースなる者、プロータゴラスに面會して指教を受けんとを熱望し、ソークラテースに請ふに、自己をプロータゴラスに伴ひ行かんことを以つてするより始まるものにして、ヒッポクラテース、未明にソークラテースの家門をたゞきて其意を告げ、同道して直ちにカリアスの家に至り、プロータゴラスに面會せんとす。ソークラテース其性急を戒しめ反省する所あらしめ、夜明けて兩人談論しつゝカリアスの家に至る。カリアスの家に至り來意をプロータゴラスに告げヒッポクラテースの爲めに教ふる所あらんとを請ふ。カリアスの家には有名なる「ソフィスト」ヒッピアス、プロテュコス其他多數の諸弟子及びアルキピアデース、クリチアス等、有名なる當時の大家、熱心なる學者、青年

等ありて、ソークラテース此等名士の中に立つて當時最大一の學者プロークラテースと對話せんとす。プロークラテース、告ぐるに自己の能く人を進歩せしめ、前よりも善良に又た賢ならしめ得ることを以つてす。然るにソークラテース、其果して何事に於いて進歩し、善良となり、賢となすやを問ふ。プロークラテース答ふるに公私の事に關する慮智を興へ、人生の學を教ふることを以てせり。

ソークラテース、是れを稱して高尚なる事業なりとせり、されども、此果して教へられ傳授され得べきものなるやを問ふ、其論法たる(一)アテナイ人は其集會に於ては、技術等に關しては熟練不熟練は之れを區別すと雖、訓練されたる政治家或は訓練されざる政治家と云ふが如きの區別は之れを爲すことなく、又た(二)善良にして最も賢なるアテナイ人士も、決して其子に政治の徳を教へざるを以つて見れば、プロークラテースの謂へる所のものは、教へらる可きものに非すと云ふにあり。

プロークラテース之れに答ふるに教訓小話、或は神話を以つて、諸神は諸他の技術は或少數の人に興へしと雖、正義及び敬神等は一般の人々に興

へたるを以つて、技術には熟練不熟練ありと雖、政治上には熟練不熟練あるなし、此點アテライ人の思想正常なりとなす、其理由に曰く（一）萬人皆な其度は異りと雖、政治上の徳義を有するが故に、若し之れを有せずとするも、必ず之れを有すと公言せざる可からざるなり。若し人知らざる藝術を知れりといふ時は人稱して狂人と云ふと同じく、其人たとひ政治上の徳を有せずとも、其徳ありと云はざるは又た之れ狂人なりとす。（二）アテライ人が政治上の徳義を以つて教へ得べきものなりとするは、不良の行爲者を罰するに由つても之れを知るべし、之れ改め進ましむるを得べしと信せるに由る。（三）父母は其子の言語を解するに至るや直ちに之れが教育を始め、其教育終らば國家之れを教育す。（四）賢明善良なる父に、愚昧なる子あるは別に異とするに足らず、之れ第一青年たるものたゞ其父のみを學ばずして、全市民に學ぶに由り、又た天賦自然にも由るものなればなり。（五）ソークラテースの誤謬は、萬人盡く教師なる時は、之れ教師なきに等しと云ふにあり。而してプロータゴラス彼れ自身の如きは、他人よりも優れる者となす。

ソークラテース、此説明に満足したりと雖、尙ほ一疑問ありとなす。プロータゴラス徳義を説明す。而して多くの徳義は多數なるか一なるか、一全體の諸部分なるか、或は同一物の數名なるかとはソークラテースの質問する所なり。プロータゴラスは是等を以つて一物の諸部分なること、顔面の諸部分の如しとなし、各自別々の官能なりとせり、之れ早計の答なりき、而してソークラテース此答言を取つて討究の目的物となす。

而して正義、神聖、智、愚、節制等に就いて互に問答討論しつゝありしが、プロータゴラス、漸次にソークラテースの問答法に由つて追窮論破せられんとする趣あり、其問答法の不利なるを觀て、長演説を爲し、聽衆の拍手喝采を以て瞞着せんとせり。

然るにソークラテースは之れを好まず、記憶不良なりと稱して短く問答せんことを求む。プロータゴラス之れを好まず、ソークラテース爲めに起つて歸り去らんとせり。カリ阿斯切に之れを止ごめ、アルキピアデースは、プロータゴラスの態度を評し、クリチアス及びプローチコス等は兩人互に交讓して議論を繼續せんとを勧め、ヒッピアスは議論の裁決者を

置かんことを提議せしと雖、ソークラテース其無用なることを言ひ、遂にソークラテースの折中案に由つて、プロータゴラス先づ問ひ、ソークラテース答ふべしとなし、プロータゴラス澁りながら之れを承諾し、又た議論を始めたり。

プロータゴラス、疑問の題として詩學を論せんと云ひ、シモニデスの詩を引用し、之れを評して矛盾ありとなし、ソークラテースの意見を問ふ。

ソークラテース矛盾なしとし、シモニデスの詩は彼れの心事、國情、方言等に據つて解釋せざる可からずとなし、プロータゴラスの言語の注意に精密ならざるを咎め、顧みて、シモニデスと同國人たるヒッピアスの贊成を求む。素よりソークラテースの解釋眞に是なるには非ずして一時を糊塗せしものたるなり。然るに聽衆皆な之れを是認せり。

詩の解釋已に終りたれば、ソークラテース謂うて曰く詩を論ずる如きは凡俗者流の爲す所にして、藝妓を備ひ來りて其音聲を樂しむ如きのみ、眞の學問あり教育ある者は各自の談話に由り、各自の音聲を以つて慰樂、交際の媒介物となすが如く、詩歌を議論するが如きは、之れを廢し、始めの

問題たる徳義は一なりや多數なりやを論せんと。プロロータゴラス其言に従ひ之れを問答することよなせり。プロロータゴラス諸他の徳義は相近似せりと雖、獨り勇氣のみは大に他の諸徳と異れりとしたるより、ソークラテース此點に向つて激烈なる攻撃の論鋒を向け、是れより快樂は善なり、苦痛は惡なり等の善惡の標準、快樂善惡の比較計量取舍を論じ、最後に快樂苦痛の兩者を善惡となし、其れを知るを徳義となし、徳義は知識なりとして一に歸せしむ。

ソークラテース此對話の結果未だ十分なる満足を得ざる内、プロロータゴラス追窮せられ、疲勞して談話を好まざるに至りしを以つて、ソークラテースは自己の眞理を愛する由を述べ、其目的たる(一)徳義は如何なるものにして、又た、(二)徳義は教へられ得べきものなりや否やを研究せんとするにありしを語りて此對話の結末をなせり。

○

プロロータゴラス、ヒッピアス、プロローデコス等の如き當時の大家が、一時に此く一處に會合するは實際あり得べがらざるとなりと雖、プラトーンは

ソフィスト諸大
家の一家に會合
するは事實に非
ず

ソークラテース
の性質等は歴史
的のものに非ず
とするの理由も
なし

本篇中の學理

シモニデスの詩
に就いて

歴史上の事實の如きは之れを眼中に置かずして、たゞ其可能の點より此
仕組を成せしものゝ如し。

然りと雖此に描けるプロークラテースは、全然想像上の人なりとするの
理由なく、又た此に描けるソクラテースも、眞に歴史のものに非ずとす
るの理由もあらざるなり。

此對話の目的即ちソークラテースの目的は、徳義の一たることを證す
るにありて、此問題の解決中、徳義と知識とは同一なりとのことも含有せり。
而して若し徳義と知識と一なりとせば徳義は教へられ得べしと結論す。

書中プロークラテースの引用したるシモニデスの詩に就いて、滔々ソークラテースの論じたる所は、當時詩文の解釋上、流行したる冗漫、架空、捏造、
虚構の風を諷刺するにありしものゝ如し。又た當時の詩人等の無意味
なるを嘲笑し、詩人等を云々するは平凡無學の俗衆たるを謂へるものな
り。

「プロークラテース」篇は實に雄大なる「ドラマ」にして、其趣味及び人物の對
照等容易に盡すべからざるなり。其吾等に與へたる感動の印象や甚だ

莊大なる「ドラマ」仕組み

人物の描寫

深く、始めはプロローグとゴラス傲然たりしが、次第に其威を損じて、後にはソークラテース殿として「ドラマ」の中心となれり。アルキピアデースは反對の性質よりしてソークラテースに黨し、クリチアスは中立し、カリアスは「ソフィスト」に傾けるも尙ほ熱心に眞理を求めて之れを懋樂となせり。プロローグとゴラスは其長所たる言語の區別を語るの機會を發見せんとし、ヒッピアスは自然學の淺薄なる知識を誇らんとせり。されども彼等は尊敬されたる嘲弄の記事を以つて先づ以つて本書の始めの部分に攻撃し去られたり。

純ソークラテースの既

本書と他書との關係

本書はかの有名なる前世の「記憶説」の分子毫も之れなく、又他書中の「ソフィスト」に對する態度と異なるを以つて、純然たるソークラテースの説と見て可なりとする人あり。「ハルミデース」「リュシス」「ラッヘース」等、皆な知識と徳義との關係を論せるより見れば、是等は之れに緣故ある一層重大なる書物の序論の如きものと見て或は可なるが如きの感あり。「イオン」及び「ヒッピアス」中には又た詩人を論せり、之れ「プロローグとゴラス」中のシモニデスの詩の批評の精神と相似たり。「メノーン」中には「徳義は教へ

られ得るや』を論じ、又たメノーソンの『ソフィスト』に於けるや、ヒッポクラテースの關係の如しと雖、『メノーソンの』と、『プロタゴラス』との關係は疑はしとなす。而して『メノーソンの』中には觀念説ありて、眞のソークラテースは漸次ブラトーンたらんとせり。『ファイドーン』、『ゴルギアス』、『フィレーポス』等には『プロタゴラス』中の説を訂正し、徳義は快樂なり、或は快樂は主要なる、或は唯一の善なりとの説は明かに之れを棄て去れり。

プロータゴラス

對話者

ゾローヂコス

場

美なるアルキビ
アデイス

プロータゴラス

對話人物

ソークラテース——其知人に

此談話を爲せる人

ヒッポクラテース

アルキビアデース

クリチアス

場——カリアスの家

カリアス——富有のアテーナイ人

プロータゴラス

ヒッピアス

ゾローヂコス

「ソフィスト」

知人

君



は何處より來りしや、ソークラテースよ。こは問ふには及ばざるべし。余は知る、君は又かの美しきアルキビア

デイスを追索し居たりしなるべし。余は一昨日彼れに逢ひしが、彼れは

アルキピアデー
ス鬚毛を生ず

ソークラテース
今日もアルキピ
アデーヌに逢ひ
て來れり云ふ

鬚毛を蓄へて成人の如くなれり。——然り彼は成人となれることを君の耳に告げん。されども彼れ尙ほ可愛き愛嬌ありと信ず。

ソー 彼れ鬚毛を生じたりとて何事ぞや。君はホメーロスの意見と同一なるにはあらざるか、曰く

「青年初めて其鬚毛の生ずる時、之れ最も愛嬌あるの時」
と。アルキピアデーヌは實に此愛嬌あり。

知人——扱て事情は如何に進行せしや。君はアルキピアデーヌを訪問したるか。彼れ君に對して親切なりしや如何ん。

ソー 然り、余思ふに彼れ甚だ余に親切にして、殊に今日は然りしなり。余は今ま彼れの許より來れり、彼れ議論に於て余を助けつゝありき。然りと雖余は君に一奇聞を語らんか。彼れ實に余と共にありしと雖、余は殆ど彼を意に介することなく、彼れ數々余の念中より出で去りたり。

知人 其は何事ぞ。何事か君と彼れとの間に起りたるや。君は決して彼れに優れる美しき者を、此アテーナイ市中に見出すこと能はざるべし。

一層美しき人

ソ一 否な、一層美しき者を。

知人 何ぞや——其はアテーナイ人なるか、或は又た他國人なるか。

ソ一 他國人なり。

知人 何れの人なりや。

ソ一 アブデーラの人なり。

知人 此の他國人は、君の意見に由る時は、真にクレイニアスの子よりも美なりと云ふか。

大賢は大鈍

ソ一 親友よ。一層賢き者は、常に一層美麗なるにはあらざるか。

知人 されどもソークラテースよ、君は真に或賢者に逢ひたるか。

ソ一 然り、余は寧ろ、現在生ける人間中の至賢なる人に逢ひしと謂はん。若し君此名稱をプロータゴラスに附することに同意ならんには。

知人 何とか云ふ。プロータゴラス果して此アテーナイ市に來れりと云ふか。

ソ一 然り、彼れ二日前に來れり。

知人 而して君は今ま彼れに會見して來りしか。

プロータゴラス
アテーナイ市に
來る

至賢の人プロ
ータゴラス

ソー 然り、余は多くの事を聴き又た言へり。

知人 然らば、君若し差支なくば坐して時の状況を語れ、余の侍者君に其坐を譲るべし。

ソー 君の傾聴することを謝す。

知人 又た君の談話することを謝す。

ソー 余は又た君が謝することを謝す、然らば願くば傾聴せよ。

昨夜、否な寧ろ今朝未明、アポロドーロスの子にしてファソーンの兄弟なるヒッポクラテース來りて、杖を以つて我家の戸を打ち叩き、恐ろしき音を爲したるを以つて、或者内より戸を開きたるに、彼れ驅け込みて叫びて曰く、ソークラテースよ、君は目覺め居るか、或は寝れるかど。

余は彼れの聲を知れるを以つて答へて曰く、ヒッポクラテースよ、此は君なるか。何の奇聞かある。

彼れ曰く、善き奇聞なり、善き奇聞にあらずして何ぞや。

余曰く、快なる哉。然りと雖奇聞とは何ぞや。何を以つて此くも時ならざる早朝に來りしや。

フロタゴリス
と會見の順序を
語る
今朝未明ヒッポ
クラテース來る

ロウボクラター
ス、プロータゴ
ラスのアナーナ
イに來りしを聞
き込みしことを
語る

彼れ余に近く寄りそひて曰く、プロータゴラス來れり。

余曰く、然り、彼れ二日前に來れり、君は漸く今其來着を聞き込みしか。

彼れ曰く、余は昨夕之れを聞き込みたり。

彼れ此時余の小車付きの寢臺の、我が足許の方に腰打懸けて謂うて曰く、余は昨日遁走したる奴隸サチュロスを追てオイノイに至り、其處より歸りて夜晩く此事を聞きたり。奴隸遁走のことに就いては、他の事情の故障なくば、君に話さんと思ひ居たるなり。扱て余は歸宅して晚餐を終りて將に寢に就かんとせる時、余の兄弟余に謂うて曰く、プロータゴラス來れりと。其時余は直に君を訪問せんと思ひしと雖、夜已に深更なりしを以つて之れを止めたり。余は疲勞に由つて一睡し、目覺めしや否や、直ちに起きて此處に來りしなり。

余は彼れの勇氣ある狂熱を知ると雖も、殊更に問うて曰く、何事ぞや。プロータゴラス、或は君の所有物を盗みしか。

彼れ笑ひながら答へて曰く、然り、ソークラテース。彼れ知識を盗みて之れを隠せり。

ロツポクラテ
ス、ソークラテ
ースをしてプロ
ータゴラスに會
見して談話せし
む

余曰く、君若し彼れに金錢を與へ、以つて彼れと朋友となるに於ては彼れ必ず君を賢にし彼れの如くなすべし。

彼れ曰く、必ず然るべし。彼れ若し之れを爲すとせば彼れ余の一切の金錢及び余の朋友の金錢を受くるとも可なり。余が今ま君を訪問したるは此理由にして、余は未だ年若く、又た一度も彼れを見しことなく、聽きしこともなし、彼れ以前アテーナイ市に來りし時は、余は小兒なりき。之れを以つてソークラテースよ、余の爲めに彼れと談話せよ。人皆な彼れを稱贊して演説者中の最も優秀の人となせり。吾等如何でか直ちに行きて彼れを家に訪問せざるべき。余の聞く所に由れば彼れヒッポニコスの子カリアスの家に在りと。いざ行かん。

余答へて曰く、我友、急ぐ勿れ、時は尙ほ早きに過ぐ、余等起床し、暫時庭内を逍遙し、夜の明くるを待ちて而して往かん。プロロータゴラスは通常家に在るを以つて、吾等必ず會ふことを得べし、氣遣ふこと勿れ。

此くて吾等起床して暫時庭内を歩み居たるが、余、心に思へらく、先づヒッポクラテースの決心の力を試みんと。因つて疑問を提出して曰く、ヒッポ

夜の明くるを待
つ

フロートタゴラス
に由つて何者と
せられんとして
金錢を拂はんと
するぞ

醫師ヒッポクラ
アース

彫刻師フェイダ
アース

クラテースよ、君はフロートタゴラスの許に至り、彼れに金錢を拂はんとせり。されども君が而會せんとする所のフロートタゴラスとは果して何者ぞや、又た彼れが君の爲めに成さんとする所は何事ぞや、余に此事を告げよ。君若しコス人たる醫師ヒッポクラテースの許に至りて金錢を與へんとする時、人ありて君に謂うて曰く、あゝヒッポクラテースよ、君は彼を以つて何者として、君と同名なるヒッポクラテースに君の金錢を與ふるやど。之れに對する君の答や如何ん。

彼れ曰く、彼れは醫師なりとして余は彼れに金錢を與へん。

彼れは君をして如何なる者とならしむるぞ。

彼れ曰く、醫師とならしめん。

君若しアルゴス人ポリクレイトス或はアテーナイ人フェイデアスの許に至りて金錢を與へんとする時、人ありて君に問うて曰く、君は彼れを以つて何者として此金錢をポリクレイトス及びフェイデアスに與へんとするやど。君之れに對して何と答へんとするか。

余は答へん、彼等を彫刻師として。

而して彼等は君をして何者たらしめんとするか。

勿論彫刻師たらしめん。

余曰く、扱て君も余も共にプロークタゴラスの許に至り、吾等君の爲めにプロークタゴラスに金銭を拂はんとせり。若し吾等準備せる所十分に於て、是れに由つて彼れの心を得ることあらば、吾等大に之れを喜ぶものなりと雖、若し然ざるに於ては、吾等又た君の友人の金銭をも消費することとなるなり。今若し假に、吾等熱心に其の目的を達せんと試むるに際し、人ありて吾等に問うて、ソークラテース及びヒッポクラテースよ、吾等はプロークタゴラスを以つて何者となして、往きて彼れに金銭を拂はんとせりやと言ふものあらんには、吾等何と之れに答ふべきや。フェイダアスの彫刻家たることは余之れを知れり、ホメーロスの詩人たることも余亦た之れを知れり。然りと雖、プロークタゴラスの名稱に至つては余未だ之れを知らざるなり。彼れの稱呼さるゝ所は果して何ぞや。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、人々彼れを稱して「ソフィスト」と謂へり。

プロークタゴラス
は何者ぞ

ソフィストを

プロロータゴラス
は人をして「ソ
フィスト」た
らしむる者

「ソフィスト」た
るを耻ぢざるか

然らば吾等は「ソフィスト」の資格の者たる彼れに往いて、金錢を拂はんこ
するものなるか。

然り。

されども人若し尙ほ進みて問ふと假定せよ、曰く、君等自身は如何ん。
君等若し往いて彼れに面會せば、プロロータゴラス果して君等をして如何
なる者たらしむるかぞ。

彼れ聊か赤面して答へて曰く、此時夜漸く明け、彼れを見るを得るに至
れり、若し前の類例の如くんば、思ふに彼れ余を「ソフィスト」たらしむるなら
ん。

余曰く、然らば君は「ソフィスト」の資格を以つて、全グレシア人の前に立ち
て眞に耻づる所なしとするか。

ソークラテースよ、實を言はゞ余は之れを耻づるものなり。

ヒッポクラテースよ、何を以つてプロロータゴラスの教育は此性質のもの
たるを前定するや。君は文法學者、音樂者、或は體術家の技術等は、之れを
職業とすることなしとも、たゞ以つて教育の一部となし、普通一箇の紳士

公民の知らざる可らざるものなるの故を以て之を學ぶが如く、プロロータゴラスより教を受ること能はざるか。

彼れ曰く、全く然り、而して余の思ふ所に由れば、之れプロロータゴラスの教育の真相なりと。

余曰く、余は驚く、君は果して何を爲しつゝあるかを知れりや否やを。

余は何を爲しつゝありやと云ふか。

君は今ま其精神を「ソフィスト」なるものに委託せんとせり。されども君は「ソフィスト」の如何なるものなるやを知れりと考ふると能はざるなり。

君若し之れを知らずとせば、君は自己の精神を善に托さんとせるや、將た又た惡に托さんとせるやをも知らざるべきなり。

彼れ曰く、余は確に之れを知れりと思惟す。

然らば余に告げよ、彼れは果して如何なる者なりと君は考ふるやを。

彼れ答へて曰く、彼れの名稱の示めせる如く、余は彼れを以つて賢者知者となす。

余曰く、之れ亦畫工及び工匠等にも適用さるべきことに非ずや。彼等

精神を「ソフィスト」に托さんとするか

「ソフィスト」の
智慧は如何なる
ものぞ

人をして雄辯な
らしむ

何事に雄辯なら
しむるぞ

賢にして知なるに非ずや。されども假定して、人若し吾等に問うて、書工は如何なる點に於て賢なりやと云はゞ、吾等此く答へて云はん、曰く、彼等よく他物を模寫する事に於て賢なり、他の事物に就て云ふも亦之と同様なりと。尙ほ彼れ進みて、「ソフィスト」の智慧は如何なるものぞ、而して其指導の下に製造さるゝ所のものは何ぞやと問はんには、吾等何と之れに答ふべきや。

ソークラテースよ、吾等如何に答ふべきや。たゞ彼れの指導する所は人をして雄辯ならしむる術にありと云ふの外他に答ふべきなし。

余曰く、然り、恐くは真に然らん。然りと雖未だ以つて十分なる答となすべからず、何となれば尙ほ他の疑問を含めばなり。曰く、「ソフィスト」は何事に於て人を雄辯ならしむるや。「ソラ」琴の樂師は之れを彈ずることに關して人をして此の術を了會せしむるに付きて人をして雄辯ならしむ。之れ然らざるか。

然り。

然らば、「ソフィスト」は何事に於て人をして雄辯ならしむるや。彼れ其了

「ソフィスト」の
知れる所は何ぞ

未だ知らざる者
に一身及び精神
を托するは大危
険なり

會せる所の事に於て人をして雄辯ならしめざる可からざるに非ずや。

然り、然り、となさざる可からず。

然らば「ソフィスト」の知る所は何事にして、其門弟子をして知らしむる所は何事なりや。

彼れ曰く、余は答ふる能はず。

余は言を進めて此く言へり、曰く、扱て君は自己の遭遇せんとする所の危険を悟れりや否や。君若し自己の一身を或者に托さんとするに當り、此に其人より善を得るか、或は又た害を被るかの危殆ありとせば、君は友人及び親戚の意見を聞き、又た自ら數日の間其可否を熟慮するに非らずや。然るに今若し身體よりも貴重にして、君の一切の吉凶の盡く繋がる所の精神に關する問題に於ては、君は之れを君の父にも計らず、兄弟にも告げず、又た君の友人たる吾等の一人にも其意見を聞くことなく、此の外國人來るや否や、直に君は其精神を此外國人の管掌の中に置かんとし、君の言へるが如く、夜前に彼れの事を聞き、翌朝直に彼れの許に至らんとし、毫も熟慮することなく、又た其可否を何人にも問ふこともなく、心を決し

てプロロータゴラスの門弟子たらんとし、君の財産を蕩盡し、友人の財産を消費し、如何なる入費を要するも其決心を貫かんとせり。君の謂へるが如く例令君未だ彼れを知らざるにも係はらず、彼れと言語を交へざるにも係はらず、又た君は彼れを「ソフィスト」と云ひ、而も「ソフィスト」の如何なるものなるやをも知らざるに係はらず、而も君は往いて其身を彼れに托せんとせり。

彼れ余の此言を聽きて謂うて曰く、ソークラテースよ、思ふに此は君の言より引き出さざるべからざる結論なるべし。

余は尙ほ言を進めて曰く、ヒッポクラテースよ、「ソフィスト」とは精神の食物の卸賣或は小賣を爲す者に非ずや。余は「ソフィスト」を以つて此種の人なりと解す。

ソークラテースよ、然らば精神の食物とは如何なるものぞ。

余曰く知識は實に精神の食物なり。宛も卸商或は小賣商が身體の食物を賣るに當り、其物品を稱揚するが如く、「ソフィスト」等も亦其賣品を稱揚すべければ、吾等其甘言に欺かれざらんことを要す。彼れ商賈等は、其賣

「ソフィスト」は精神の食物の卸賣り小賣り商人

知識は精神の食物

先づ食物の有害無害を明かにせよ

精神上の醫師の
危険判断

行いて教を受くるは食物を購買するよりも危険

品の眞に有益なるか將た又た有害なるかを知らずして、無差別に之れを稱揚し、又た其估客も、適々體育家及び醫師を除くの外は、殆ど又た之れが有益なるか有害なるかを知ることなし。之れと同じくかの知識の賣品を擔ひて諸都市に行商するの輩は、其品質の良否に關せずして一様に之れを稱揚し、其の之れを買はんとするものに向つて、或は卸賣りし、又た小賣りせり。かの知識の行商等の多數は、其賣品が人心上果して如何なる結果を呈するやを知らず、又た其估客は、精神上の醫師たるものを除くの外は、其有益なるか、或は有害なるかを知らずとするも、余は別に驚かざるなり。故に君若し其善惡を知れるならんには、安心してプロクタゴラス及び其他の者の知識を購買するも可なりと雖、若し夫れ然らざるに於ては、須らく熟慮して君の一生の大事を賭戲の爲めに危うす可らず。何となれば知識を購買するには、飲食物を購買するよりも大なる危険在つて存するものなればなり。今若し卸し或は小賣に之れを購買し、其購買したる物品は之れを他の器物に容れて家に運搬し。食して之れを體內に容るゝに先き立ち、經驗ある人に依頼して、其飲食物は果して飲食して

年長者に議する
の必要

カリアスの家に
滞在せる大
「フイスト」

カリアスの家の
前に至る

可なるものなるか、或は其量其時等を明かにし、然る後之れを食せば、之れを購買するも大害なしと雖、今若し知識の買品を購ひたるも、君之れを他器に容れて家に持ち歸ること能はずとせば、君は直ちに之れを自己の精神中に容受し、大に害惡を被るか、或は大に利益を受けて其家に歸らざる可からず。此故に吾等も事に思ひ至りて、之れを吾等の年長者に議するの必要を感ずるものなり。何となれば、吾等尙ほ年若く、此くの如き事を決定するは、自ら其力の足らざることを知ればなり。されども吾等の企てたるが如く、試みにプロータゴラスの許を訪問せん。而して吾等の聴きし所は又た之れを他に語りて其可否を質すべし。何となればカリアスの家に滞在せるは、單にプロータゴラスのみに非ずして、エリス人ヒッピアスも在るべく、又た余の思ふ所にして誤らずば、ケオス人プローデコス及び其他數多の智者も在るべし。

吾等此く同意して出立し、カリアスの家の玄関前に至れり。されども道々議論しつゝ來りしも未だ其論終らざりしを以つて、暫くそこに立ちて議論して其結末をなし、互に相了會せり。余思ふに玄関番なる侍者は、

ソークラテース
等支關番にハリス
ソフィストとなり
と疑はる

ハ内に入る

プロロータゴラス
及び其門弟子

恐くば吾等が玄關前にて議論するを聴きしなるべく、又た彼れ甚だソフィスト等の侵入を困しむるものゝ如し。吾等玄關に訪なひし時、番人來りて戸を開き吾等を見てつぶやきて曰く、彼等ソフィストなりと。而して吾等に云うて曰く、主人は不在なりと。直ちに激しき音を立て、兩手を以つて戸を閉ぢて内に入れり。吾等之れを以つて再び戸を敲きたるも、今回は彼れ戸を開かずして内より答へて曰く、汝等何んするものぞ、余は曩に主人は不在なりと言ひしを聴かざりしかと。されども余は曰く、吾等はソフィストに非ず、又たカリアスに而會せんが爲めにも非ず、たゞプロロータゴラスに會はんが爲めに來れり。願くば此事を通せよと。遂に辛うして彼をして戸を開かしむることを得たり。

吾等入り見るにプロロータゴラスは廊下を散歩し居たり。而して彼れの傍に、一方にはヒッポニコスの子カリアス、ペリクレースの子にしてカリアスと同腹の兄弟なるバラロス及びグラウコンの子ハルミゲース歩み居り、他の一方にはペリクレースの他の子なるキサントッポス、フィロメロスの子フィリップデース、及びメンデ人アンチモイロス歩み居たり。其内ア

ンチモイロスとはプロータゴラス門中の最も有名なる者にして、詭辯を以つて本業と爲さんとせる者なり。而して聴衆の一群プロータゴラスに隨從せり。是等の多くは他國の人の如く思はれたり、之れ皆な常にプロータゴラスに従つて諸都市より諸都市に旅行して此に來れるなり。プロータゴラスは宛も樂師オルフェウスの如く、其音聲を以つて是等の人々の心を奪ひ、是等の人々は其引力に従へるなり。余は又た是等の人々の内アテーナイ人も在りしことを言ひ置かん。而して彼等の進退、周旋、折旋、規矩に當るを見て、余は嘆美の念禁する能はざりき。彼等は力めてプロータゴラスの路を遮ぎらざらんことを力め、若しプロータゴラス及び其隨伴者、歩を彼方に廻らす時は、彼等聴衆の一群はサット列を左右に別ち、絶えずプロータゴラスをして、群衆の先頭にあらしめ、右翼は左に廻はり、左翼は右に廻はり、順次に歩を移してプロータゴラスの後に美事に列を整へて従ひたり。

プロータゴラスを見たるの後、ホメーロスの言へるが如く、吾れ眼を上げて見たるに「エリス人ヒッピ阿斯、向ひの廊下に華麗なる椅子に坐し、其周

園にはアクローメノスの子エリュキシマッホス、ミユリスシア人ファイドロス、アンドロチオンの子アンドロン等腰架に坐し、其他、ヒッピアスの本國エリスより彼れと共に來りし數多の他國人、及び其他の人々あるを見たり。是等の人々はヒッピアスに向つて、或は自然界の事に關し、或は天文学に就いて質問する所あり。而してヒッピアスは傲然と人々を眼下に見て其質問を解答し、其等のことに就いて論じ居たり。

プロローグ

又た、我^{*}眼はタンタロスを見たり。ケオス人プロチコス^{*}は前にアテライナイ市に在りし人なり。彼れ、ヒッポニコス^{*}〔カリアスの父〕の時代には倉庫たりし一室に宿せり。此室は、家の狹隘を告げ來りしより、カリアスの代に至り、之れを取り片付けて客室となしたるものなり。此時プロチコス尙は臥床にありて羊の毛及び夜具のうづ高き内にくるまり居り、彼れに近き傍なる寢臺にはケラメイス區のパウサニアス坐し居たり、又パウサニアスと共に著るしく善き容貌のいと年若き一人の青年ありき、若し余の見にして誤ることなからんには、彼れ、必ず温雅の性質の者なるべし、其名をアガトーンと謂ふやう聞きたりと信ず、彼れ恐くばパウサニア

スの愛する所の少年なるべし。此青年の他に又た二人のアデイマントスありて、一はケピスの子にして、他はレウコロフィデースの子なり。其他にもなほ數名の人ありき。余はフローチコスの語れる所を聽かんとするや切なりき、何となれば、余は、彼れを以て至賢にして又た天來の人なりと思ひたればなり。然りと雖余は其室内なる人々の仲間に入ること能はざりしと、又たフローチコスの美麗にして深厚なる聲の室内に反響せるとに由りて、其言ふ所を明晰に聽くことを得ざりしなり。

吾等の此處に入るや、否や君が謂へる所の美麗なるアルキピアデースも吾等に續いて入り來り、又たカライスフロスの子なるクリチアスも入り來れり。

余其處に入りて暫く立ち止まりて四周の光景を觀、而してフロータゴラスの方に歩み行きて謂うて曰く、フロータゴラスよ、我友ヒッポクラテース及び余は、君に面會を求めんとして此に來れりと。

彼れ曰く、君は余一人と對話せんことを好むか、將た又た衆人の面前にて語ることを欲するか。

余曰く、たゞ君の好むがまゝに任せん。君は、吾等が君を訪問したる目的を聞き取りし上、何れになりとも君自ら之れを決定せよ。

彼れ曰く、君等の來りし目的とは何ぞや。

余曰く、余は先づ我友ヒッポクラテースはアテーナイの人なる事を説かざる可らず。彼れはデボロドロスの子にして、富豪の家に産れ、彼れ自身亦天賦の材能ありて、彼れと同年輩の如何なる人に比するも、毫も遜色あることなし。蓋し彼れは政治上に於て拔群ならん事を志望とし、其目的を達する最良の方法は、君と對話することにあるとせるものゝ如し。之れ吾等の來りし目的なり。是事に關して君の彼れの爲に教を説くや、たゞ一人のみの席上にてすべきか、將た又た衆人の前にてすべきかは之れたゞ君の便利に任せんのみ。

ソークラテースよ、君の厚意に對し余は感謝せざるを得ず、實に一箇の他國人が諸國の大都會に入りて、其都市の青年の花とも云ふ可き人々を説き勸め、其老若、親戚、知友を離れて、己れと起臥を共にせしめ、己が教訓により、其人々を進歩せしめんとするは、大に用心せざる可からざる事たる

フロートゴラス
ソークラテース
等の來りし目的
を問ふ

フロートゴラス
ソークラテースの
田來を語る

古來多くの名人は皆「ソフィスト」にして其技を隠れしもの

プロターゴラスは公然と「ソフィスト」たることを名乗る

なり。何となれば時に其の所作に對して、大なる嫉妬を招くことあり、或は又た人々の怨恨陰謀を其一身に集むる事あるを以つてなり。蓋し「ソフィスト」の術なるものは、其由來甚だ遠しと雖、古代に在つては、「ソフィスト」の教師なるものは、皆な此の怨恨を恐れて、種々の名稱の下に隠れて自らを晦まし居たり。而して或はホメーロス、ヘシオドス、及びシモニデス等の如く、詩人に假扮するあり、或はオルフェウスムサイウス等の如く祭司及び預言者に假扮するあり、或はタレンツム人イッコスイッコスの如きは體操教師の如き者に假扮するあり。又た近來に於ては、前にはメガラ人なりしが今はセリュムブリア人なるヘーローヂオスの如きも然り、而かもヘーローヂオスの如きは實に近代第一流の「ソフィスト」たるなり。君の國人なるアガトクレースは音樂者を装ひしと雖、其實は秀出せる「ソフィスト」なりき。ケオス人ピュトクレイデースも亦然りしなり。其他此種の人少なからず。而して皆な之れ余の言へるが如く、衆人より猜疑を受けん事を恐れて、種々に假扮せる者なり。然りと雖、余の爲す所は、彼等と趣を異にす、何となれば余は彼等決して其假扮の目的を完うすること能はずと信せばなり。彼等

の爲す所は政府を欺かんとするものなりと雖、政府は彼等に欺かるゝことなく民衆に至ては更に何の理解力も之れを有せず、たゞ政府の命する所に之れ従ふのみ。抑も危殆に臨みて遁走し、遁走して捕へらるゝ如きは、實にこれ愚の極にして却つて、大いに衆人の忿怒を挑撥するものなり。何となれば人々は彼れに對して種々の異議を有するのみならず、之れに加ふるに、遁走者を以つて惡漢なりと爲すべければなり。是故に余は全然反對の針路を取り、自ら其「ソフィスト」たること及び人間の教導者なる事を公言す。實に余に取つては、此くの如き公然なる告白は、隱蔽よりも勝れる警戒たるが如し、余は又た其他の警戒は敢て之れを怠らざるなり。是故に余は天の恵みに由り、余が自ら「ソフィスト」たることを告白するに由つて、何の災害をも被る事なきを期すと余は言ふことを得ん。余は此業に従事せること已に久し、余の年數を合計せば又た少しとせず。而して今ま此處に在る所の人々の中、余よりも年長の人あるなく、余は實に諸君等の父の如きなり。故に若し君等にして異存なくんば、余は衆人の前に於て、君等と談話せんことを擇ぶものなり。

ヒッピアス、ブ
ローデコス等も
一所に集まる

余時に憶測すらく、彼れ、ブローデコス及びヒッピアス等の面前に於て聊か其學を衍らはんとし、又た吾等を以つて其頌贊者なるが如く、彼等に見せんとするの心ありと。之れを以つて余は曰く、如何なれば吾等又たブローデコス、及びヒッピアス、及び其友人等を此處に招き、以つて吾等の談話を聽かしめざるやと。

彼れ曰く、大に善し。

カリアス曰く。吾等此處に會議を開くものと假定し、君此會議に與かり而して論じべきなりと。此事決定されたれば人々皆な此諸賢人の談論を聽くを得るを歡喜せり。吾等自ら椅子或は腰架を取り、既に前に椅子及び腰架の置き有りし所に運び、ヒッピアスの傍に並べたり。暫時にしてカリアス及びアルキビアデースは、ブローデコスを起こして、其仲間
の者をも、打揃うて此の處に來らしめたり。

吾等盡く坐に就きし時、ブロータゴラス曰く、扱て此く一同の者集まりたり、ソークラテースよ、先刻君が謂ひし所の青年に就いて語る所あれ。

余答へて曰く、ブロータゴラスよ、余は今ま再び前言を繰り返へし、君を

ソークラテース
ヒッピアス等の
志望を述べ

ブロータゴラス
能く人を進歩せ
しむることを語
る

ゼウキシッポ
スは繪畫を教ふ

訪問したる主旨を述ふべし。此は我が友ヒッポクラテースと謂ふ者にし
て、君の知遇を辱うせんことを欲し、又た若し君と交はるに至らば、彼れに
取つて如何なることあるべきやを知らんと欲せるなり。余の言はんと
する所は之れのみなり。

ブロータゴラス答へて曰く、若き君よ、君若し余と交はる時は、初對面の
其日より、君の來りし時よりも進歩したる人となりて家に歸るを得べく、
第二日は初日よりも亦一層進歩し、日々必ず其前日よりも進歩すべし。

此言を聽きし時、余は曰く、ブロータゴラスよ、君が此言を爲すは余の敢
て驚かざる所なり。而して假令君の如き高齡を以つてするも、又た君の
一切の知識を以つてするも、若し他に人ありて君の未だ知らざる所を教
ふる時は、君は此の人に由つて進歩するとあるは疑ふべきに非ざるなり。
然りと雖、願くば、異りたる方法に於て余に答へよ、而して余は例を以つて
之れを説明せん。今若し假定してヒッポクラテースは君の親交を求めず
して、此頃アテーナイ市に來れる所のヘーラクレア人ゼウキシッポスなる
青年に親交を求めんとして、君を訪問せし如く、彼れを訪問せし時、君が言

オルタゴラスは
吹笛術を教ふ

プロータゴラス
は何事に於て人
を教へ人を進歩
せしむるや

プロータゴラス
自らの「ソフィ
スト」と異なるを
云ふ

ひしが如く、彼れ又だヒッポクラテースに謂うて、若し彼れと交際する時は、ヒッポクラテースは日々善良となり、又た日々進歩すべしと云ふ時、ヒッポクラテース彼れに問うて曰く、余は何事に於て進歩し、何事に於て成長するや」と。ゼウキシッポス答へて云はん、「繪畫に於て」と。彼れ又たテーパー人オルタゴラスの許に至り、同様の言を聴き、同様の問ひを爲して曰く、「余は何事に於て日々進歩するや」と。彼れ答へて云はん、「吹笛の術に於て」と。余の今ま君に願ふ所は、同様なる答を此青年と、又た此青年の爲めに問答しつゝある所の余ごに與へんと之れなり。君は曰く、彼れ若し君と交はる時は、初會見の日は、來りし時よりも進歩して家に歸るを得べく、其後日々同様に進歩すべしと。プロータゴラスよ、何事に於て又た何事に關して彼れ進歩するならんか。

プロータゴラス余の言を聴きて曰く、君の問ふ所甚だ善し、余は此くも善く問ひたる所に答ふるは甚だ之れを好めり。若しヒッポクラテースにして余の許に來るとも、或他の「ソフィスト」等が其門弟子を薄待し、或は之れに勞役を爲さしむるが如きことは余は決して之れを爲さざるなり。或

一家一國を治む
るの知識を教へ
ん

政治の術は果し
て傳授さるべき
ものなりや否や

「ソフィスト」の門人の如きは「ソフィスト」の藝術を厭ひ、其師の許より遁走したるも、直に捕へられ、再び其師の許に逐ひ返へされ、數學、天文學、幾何學及び音樂等を學ばしめられたり（と言ひつゝヒッピアスの方を願み、ヒッピアス此事を言へる由を暗示せり）。然りと雖若し彼れ余の許に來らば其學ばんとする所を學ぶことを得ん。之れ公私の事に於ける慮智にして、彼れ最も善良なる方法に由つて一家を齊ふることを學ぶを得べく、又た國家の事に關して最も善く演説し又た行爲することを學ぶを得べし。

余曰く、君の言ふ所を解すれば、其教ふる所は政治の術にして、君は人をして善良なる國士たらしむることを約束すと云ふにあるか。

ソークラテースよ、其は正さしく、余の業務として従事せる所なり。

余曰く、若し此事に關して誤謬なしとせば、君は實に高尚なる藝術を有せる人と謂ふべし。プロータゴラスよ、實を以つて君に告げんに、余は此術は果して人に教へられ得べきものなるやを疑ふ者なりと雖、さればとて君の確言せる所を信ぜざらんとせば、如何なる理由を以つてすべきやは余の知らざる所なり。余が此術は人に傳授し、之れを教ふることに能は

ざるものとなすに就ては、一言君に告げざる可からざるなり。余は言ふ、アテーナイ人は他のグレスシア人の稱揚するが如く、理解力に富める人民たるなり。而して余の觀る所に由れば、アテーナイ人の其集會に會合するに當り、其時の問題若し建築に關するものなる時は、建築家を以つて其指教者となし、又若し問題、造船に關する時は、造船家を招きて其意見を敲く、其他の諸藝術にして、苟も教へらるべく、又た學ばるべきものは皆な此くの如くなせり。故に若し人ありて或事に關して指教を與へんご云ふことありとも、人々若し彼を以つて藝術に熟達せるものと爲さざる時は、彼れたどひ容貌善良ならんとも、富有ならんとも、又た高貴ならんとも、人々決して、彼れの言を聽かずして、却つて彼れを嘲笑し、叱斥し、以つて叫び倒すか、或は彼をして自ら其身を退かしむるに至らしむ。然るに彼れ尙ほ頑として止まざる時は、ブリュタニス議官等の命を奉じて警官之れを曳き擻り去るか、或は之れを拒斥すべし。師匠あるべき藝術に關する人々の態度此くの如し。然りと雖問題國家の事に關する時は、何人と雖發言自由にして、大工たれ鍛冶たれ、靴直したれ、水夫たれ、旅客たれ、富めるも、貧

大政治家も其子に之れを教へ能はざりき

例・リクレースの

しきも、高きも、卑きも、何人と雖起つて其言を爲すを得べく、何人も前に言ひたる如き、學修せず、師匠を有せず、而も人に指教する所あらんとする者を罵詈する如きことを爲さざるべし。之れ此種の知識は教へらるべきものに非ずとの思想よりして然るの明證なり。之れたゞ國家に關してのみ眞理なるに非ず、又た箇人に於ても然りとす。故に最も賢良なる我國の國士と雖、其政治上の知識は之れを他に傳授すること能はざりき。例せば夫のペリクレースの如き然り。ペリクレースは此席上に在る所の青年の父にして、苟も學修し得らるべき學科は、盡く諸名師に就いて之れを其子に學ばしめしと雖、自家の専門たる政治に關しては、一事も之れを教へしことなし。單に自ら之れを教へざりしのみならず、又た之れが師匠をも與へずして、其子等の自由の意志に一任し、或は彼等自己に適せる徳能に遭遇することもやあらんとすの希望を以つて、遍歴することを許るせり。又た他の一例を上げんか、我等の友人アルキピアデースの弟にクレイニアスなる者あり、其後見人は同じく夫のペリクレースなりしが、彼れをしてアルキピアデースと共に在らしむる時は、誘惑せらるゝの恐

ソークラテース
徳義の教へられ
得べきものなる
やを疑ふ

ソークラテース
徳義の教へられ
得べき證明を求
む

あるを見て、クレイニアスを離してアリフロンアリフロンの家に置きて教育を受けしめたり。されども未だ六箇月も経過せざるに、アリフロン特に彼れを教育する所を知らず、彼れを家に送り返へせり。此他尙ほ自己は善良なる人なりと雖、其友人をも、又た他國人をも、何人をも之れを善良ならしめざりし多くの例證なきに非ざるなり。プロータゴラスよ、是等の事を考ふる時は、或は徳義は教へられ得べきものに非ずとの感を起すに至りしなり。然りと雖、今君の言を聴くに至つては余の心又た動けり。而して思へらく、必ず君の言へる所には何物か無かる可からずと。何となれば余は君の大に經驗を有し、學問を有し、又た獨創の意見を有せる人たるを知ればなり。願くば若し成し得べくば、徳義の教へられ得べきものなることを、今少しく明瞭に余に教へんことなり。君幸に教ふるならんか。ソークラテースよ、余は教ふべし、喜びて教ふべし。されども君は何れを好むにや。余は自ら長者として、君を以つて若き人なりとし、以つて教訓小説或は神話を語らんか、或は又た問題に關して議論する所あらんか。聽衆の多くは、其何れなりと彼れ自ら擇ばんことを言へり。

プロメテウス
神話を以つて之
れを語る

諸動物を遣る

其天性の賦與、
生命維持及び防
禦法を與ふるこ
とをプロメテウ
ス、エピメー
テウスに命ず

プロメテウス曰く、然らば余は神話は甚だ興味あるものなりと思惟
すとして説き出して曰く、

昔、昔たゞ神々のみにして、諸動物のなき世ありけり。然るに此後、是等
の諸動物の創造さるゝ世となり、諸神は地球の内部より、土、火及び是等兩
分子の種々結合せるものを取りて諸動物を形成せり。而して諸動物形
成されて、白日に持ち出だされんとするに當り、諸神はプロメテウス及
びエピメテウスの二神に命じて諸動物を形装し、又た其固有性を彼等
に分配せしめたり。時にエピメテウス、プロメテウスに謂うて曰く
「余は其固有性分配に任せん、君は其監視を爲せ」と、兩人此に合意して、エピ
メテウス其分配を爲せり。而して之れを分配するに當り、或動物には
強力のみを與ふと雖、速力は之れを與へず、或は速力は之れを與ふと雖、強
力は之れを與へず、或者は之れを甲装し、或者は無甲とし、其無甲のものに
は生存上他の利益を賦與し、或は其體軀を大にしては以つて防禦の用を
爲さしめ、或は之れを小にしては空中を飛ばしめ、又は地中に穴掘らしむ、
之れ其害物より避遁する方法なり。此くて各々長所短所、互に相平均

せしめ、以つて其種族の絶滅を防げり。エビメーテウス此く彼等の賦性を平均して、諸動物相互の間の破滅を防ぐと同時に、又た天候に對して自己を防衛せしめんと欲し、或は密毛、厚皮を彼等に着せしめ、以つて嚴寒酷暑を防がしめ、又た彼等の休息寢眠するの自然の床たらしめ、又た其足には蹄爪、密毛、硬皮を與へたり。エビメーテウス次に彼等に種々の食物を供給し、或者には地の野草を與へ、或者には果實を與へ、或者には植物の根を與へ、又或者には他の動物を食として之れを與ふ。而して或者は其産兒の數を少くすと雖、其食物たる動物の生産は之れを冗多にし、以つて種族を保存せしむ。エビメーテウス此く其固有性の分配をなしたりと雖、彼れ甚だ賢ならずして、尙ほ人間は固有性未だ分配されずして、其順次の人間に來り時は、分配すべき固有性は已に諸動物に分配し盡くし、人間には分配すべきもの残り居らずなれり。此に於て彼れ大に困却せり。エビメーテウス此く困却せる時、プロメーテウス其の分配の監視に來り、諸動物は凡て形裝され、又た固有性を賦與されしと雖、獨り人間は裸體にして、靴なく、床なく、又たは防禦の武器もあることなきを見たり。然りと雖、

人間のみは裸體にして防禦なし

プロメーテウス
智慧を盗みて之
れを人に與ふ

人間を白日に持ち出だすの時日は切迫せり。プロメーテウス亦其救済の方を知らず、遂に一策を案出し、ヘーファイストス及びアテーチーの技術、及び是等と共に火を盗み、ヘーファイストス及びアテーチーの術は、火なき時は何の用をも爲さざればなり、之を人間に與へたり。此くて人間は生命維持の必要なる智慧は之れを得たりと雖、政治上の智慧は未だ之れを得ざりしなり。何となれば之れ大神ゼウスの藏する所にして、プロメーテウスの力と雖、能くゼウスの天の居域に入り込むこと能はず、又た其守衛甚だ嚴なればなり。然りと雖、彼れ竊かに、アテーチー及びヘーファイストス等が其技を施こす所の兩神共通の工場に忍び込み、ヘーファイストスの火力を使用するの術、及びアテーチーの術を盗みて之れを人間に與へたるより、人間始めて生活の諸方便を得たり。然りと雖、プロメーテウスは、エビメーテウスの失策に由り、此後盜賊なりとして捕縛されたりと謂ふ。

此くて人は神性の分賦を有し、諸動物中神を有する唯一のものなりき。而して人は神の親族なるを以つて諸神の祭壇を設くべきなり。此後久

社會形成

しからずして人間は言語及び諸名詞を發明し、又た家屋、衣服、履靴、臥床等を造り、食を地に取り。此く諸物人間に備はりしと雖、尙ほ分散して生活し、未だ村落都市等あらざりしなり。然りと雖其分散の生活の結果として、人間は諸動物の爲めに滅ぼさるゝに至れり。之れ人間の力は之れを野獸に比すれば甚だ弱きものにして、赤手諸動物と戦争を繼續すること能はず、たゞ漸く自己の生命を維持するの術を知れるのみなるを以つてなり。且つ衣食は已に之れを有すと雖、戦争の術をも含む所の、政府の術は未だ之れを有せざるなり。其後自己保存の欲望は人をして集まりて都市を作らしむ。彼等集合せりと雖、未だ政府の術を知らざるを以つて、人々互に相惡待し、人間再び分散破滅に及ばんとせり。此に於てゼウス人類の絶滅せんことを恐れ、ヘルメースの神を人界に下し、敬神と正義とを以つて都市統御の法則となし、又た友情及び調和の結繩となすことを教へしめたり。ヘルメース、大神ゼウスに問うて曰く、正義と敬神とを人間に教ふる方法如何ん、或は技術を分賦するが如く、天の鍾愛を受けし少數の者にのみ之れを分與すること醫師一人ありて多數之れにて足り、

社會維持の方法

正義と敬神

正義と敬神とは
諸藝術と共にし
て萬人普通なり

政治は正義と智
慧に由るもの故
に萬人普通の能
力なり

少數の技術家ありて多數其藝なしとも可なるが如く、余は此正義と敬神とは之れを此方法を以つて分與すべきか、或は又た萬人一様に之れを分與すべきかと。ゼウス答へて曰く、之れを萬人に分與せよ、吾れ萬人此分與を得んことを欲す、何となれば都市なるものは藝術と異にして、若したゞ少數のみ此諸徳を有する時は、決して存在するを得ざるなり。且つ吾が命令に従つて、苟も敬神と正義とを遵守せざる者は、國家の惡疫なりとして、之れを死刑に處すとの法律を作れと。

ソークテースよ、之れアテーナイ人及び人類一般、其工匠或は機械術等に關する時は、たゞ其少數者をして、撰擇を爲すを許るし、其他のもの之れに容喙するに當つては、君の言ひしが如く、其少數熱達の人に非ざる以上は、人々之れに反對し之れを拒斥す。之れ余の言へるが如く、自然たるなり。然るに政治上の徳能に至つては、たゞ之れ正義と智慧とに依るものにして、何人が之れに容喙すと雖、人々敢て異議することなきは又た自然たるなり。之れ各人皆な此徳能を有し、又た各人然らざるに於ては、國家存立すること能はずと人々の信せるに由ればなり。ソークラテース

人は正義或は政治
上の徳を有せ
りとする

よ、余が此現象の理由を君に説明すること此くの如し。

君は、人皆な各人は正義及び其他政治上の徳能を有せりとなすの思想を以つて、自ら欺かれたるものなりと想像すべからず。余は尙ほ他の證を擧ぐれば次の如し。君も已に知れるが如く、他の種々の場合に於て、若し人ありて眞に其技に熟達せるに非ずして自ら以つて熟達せる笛樂師なりと稱し、或は其他の技術に熟達せりと稱するが如きことあらんには、人皆な彼れを嘲笑するか、或は彼れを怒るべく、又た其親戚たる者は彼れを以つて狂人となし、往いて之れを教戒すべし。然りと雖、若し其人の正直なるや否やに就き、或は其他彼れの政治上の徳義の疑問に上りし時は、人々素より彼れの不正直なるを知ると雖、彼れ而も公衆の前に出で、自己の不正直なることを語ることあらんには、他の時に在つては人々の以つて明斷なりとせる事と雖、此くの如きことあるに於ては、彼れを以つて狂者となすべし。人々皆曰く、人は自ら正直なると然らざるとに關せず必ず正直を公言せざるべからずして、之れを爲さざるものは狂人なりと。此思想たるや、人は皆な正直の或る度量を有せざる可からず、若し一點の

正直たるなき時は、彼れ世界に存在すべからずと云ふにあり。

人々が、各人皆此種の徳に參與するを得べしとするは、之れ各人皆此徳を享有せるに由ると前定せるものにして、其主旨たるや正當なるものなることは余の以上説明したる所なり。余は尙ほ進みて、彼等人々は、此徳を以つて自然に賦與せられ、自由に自發するものとせずして、學習勉強に由つて得らるべきものなりとせることを證明せん。見よ、不正義は人之れを罰すと雖、自然或は偶然に來る所の不幸は、人々敢て之れを教訓せず、譴責せず、忿怒せず、又た之れを變改せんとなさずして、たゞ之れを憐れむなり。人若し容貌の醜、身體の倭少、虛弱なるを譴責し或は之れを教誨すとせば、愚も亦甚しと言はざる可からず。是故に此種の善惡は人々皆な自然偶然に來れるものなるを知ると雖、人若し學修勉強せば、得らるべき所の善良なる性質を缺損し、却つてたゞ不良なる性質を有すとせば、人々彼れを怒り、彼れを罰し、又た彼れを譴責す。而して不正義及び不敬神は是等の不良なる性質の一にして、政治上の徳義に反せるものとなす。此く人が他人の行爲に對し、或は忿怒し、或は之れを譴責するや、之れ學修勉

責罰は教訓の可
能を示めず

強に由つて自己に缺損せる徳義を修得し得べしとの思想よりするものなるや明かなり。ソークラテースよ、君若し不良なる行爲の人に加へたる責罰の結果を思ふ時は、人々が以つて徳義は教へられ得べしとなす所の説を解することを得ん。人が不良なる行爲の人を罰するや、たゞ彼れ惡を爲したる故に罰すとの觀念或は道理に由つて爲すものに非ず——之れ不道理の忿怒にして、動物等の爲す所に外ならざるなり。然りと雖夫の道理ある責罰を行はんとするものは、決して過去の惡を償はんとするに非らざるなり。何となれば、遂げられたる事は遂げられたることにして、又た如何んともなすこと能はざればなり。たゞ其主旨とする所は將來にして、所謂されたる者及び、其を見たる者をして、將來に於て再び同一惡を行はざらしめんが爲めなり。此く將來の惡の豫防の爲めに罰するは、之れ徳義は教へられ得べきことを含むものなり。之れ公私責罰の思想たるなり。而してアテライナイ人も亦他國人の如く、不良なる行爲の人に責罰を加ふ、之れ亦徳義は教へられ得べしと思惟する論者たるなり。ソークラテースよ、若し余にして認らずとせば、君の國人が、鍛冶或は靴直

し等にも政事上の意見を陳述するを許容し、又た徳義は教へられ、修得され得べきものなりとせる事の正當なるは、十分明瞭に論證せりと信す。

然りと雖尙ほ一の難問残れり、之れ君が提出したる所の、善良なる人の子の問題たるなり。乃ち善良なる人は、師匠より學ばれ得べき知識は之れを其子に教へ、其子をして其れ等に關して賢ならしむると雖、自己の秀出せる所の諸徳義に於ては、毫も之れを其子に教へて、之れを進歩せしめんとせざるは何故なりやと謂ふこと之れなり。余は此に至つては、教訓小話を止めて議論の態度を取らん。借問す、こゝに都市あり、而して其全都の人士一般、必ず普通に有せざる可からざる或一種の性質なるものありや否や。若し此問題にして解決されんには、君の提出せる難問も自然に其内に含まれて解決され、其他に解答の方あることなし。今若し此の如き性質なるものありとせば、此性質或は一致なるものは、決して大工の術に非ず、鍛冶の術に非ず、又た陶工の術にもあらずして、必ずや正義、節制及び神聖等なるべく、一言以つて之れを蔽へば人間の徳義と云ふべし。若し是れ萬人有せざる可からざるものたり。又た是れ其他の諸事物を

學修し、或は行爲するの眞の條件なりとせば、小兒と雖、成長したる男子と雖、女子と雖、若し是の徳を缺損せる時は、必ず之れを教へ、或は罰じ、罰じて以つて彼れ善良なる人となるまでは之れを力めざる可からざるなり。若し人此教訓及び責罰に反くに於ては、遂に彼れ治療すべからざるものとなし、或は國外に放逐し、或は之れを死刑に處す。余は言ふ、若し余の言にして眞なりとせば、かの善良なる人士にして、其子に教ふるに他事を以つてして此事を以てせずとせば、實に之れ意外の事と言はざるを得ざるなり。人皆な公に私に徳義は教へ得べきものなりと思惟せるにかゝはらず、而も夫の善良なる人士が其子に教ふるに、些事之れを知らずとも、死刑にまでは至らざるものを以つてして、其必要なるものは、之れを知らざる時は或は死刑に處せられ、或は追放せられ、官沒せられ、或は死刑に處せられ、一家の破滅を來らす所の事は、之れを學習せしむるに至極の注意を用ゐずとは、實に考ふ可からざることなり。ソークラテース。

教育及び訓戒は小兒の初生第一年より始まりて其死に至るまで續ぶべきものなり。小兒の事物を理會するに至るや、母及び乳母、父及び師

傳は小兒の教育と其進歩との方法に關して互に争ふて其意見を闘はせり。小兒若し父母師傅の教育なき時は、此事は正なり、彼の事は不正なり、此事は譽むべきなり、彼の事は譽むべからざるなり、此事は神聖なり、彼の事は神聖に非ざるなり、此事を爲すべし、彼の事は爲すべからず等は、之れを言行すること能はざるなり。小兒若し能く從順ならんには、善良幸福なりと雖、若し夫れ不從順なる時は、宛も曲木を矯正するが如く、或は恐喝、或は鞭撻、以つて之れを矯正す。年漸く長するに及びては、之れを師に托し、其讀書音樂を學修するのみに止らず、又た其品行を見習はしむ。而して師たるものは、又た其主旨を體して行爲す。小兒已に文字を學び以前に、談話を解したるが如く、又た書きたるものを解するに至らば、大詩人の著述を與へて、學校にて之を讀習せしむ。此の大詩人の著書中には、數多の教誨、談話、讚美及び古代有名なる人物の頌徳等あるを以つて、之れを暗誦せしめ、之れを做ひ、之れを競ひ、以つて彼等有名なる人物の如くならんことを欲せしむ。次に又た「リッラ」琴の教師も亦同様なる注意を以つて、其年若き門弟子の能く節制の人となり、惡に陥らざらんことを力む。教師已

善良なる琴曲

優美の品性

體操

國法を教ふ

に、リラ、琴の使用を教へ終らば、弟子をして他の秀絶なる琴曲詩人の詩を讀ましめ、又た之れを音樂に合はせて其調和及び韻律を小兒に熟知せしめ、以つて其言語動作を優美に、整和に、又た韻律の如くならしむ。次に小兒を體操教師に托し、其身體は最も善く徳義の心意に服役するものとならんことを力め、虛弱にして爲めに戰場或は其他の場合に於て怯懦なる行爲を爲さざるを得ざるが如きこと勿らしむ。之れ資産あるものゝ爲す所の方法にして、最も早く小兒の教育を始め、最も遅く之れを止むるなり。諸教師の教育已に終らば、次に國家は之れに國法を學ぶことを強制し、國法の制定する所に従つて行爲し、自己の想像に由つて行爲すること勿らしむ。宛も習字を學ぶに當り其師匠先づ初歩の者の爲めに其字形の線を畫き其手本を與へ以つて生徒をして其線に従はしむるが如く、都市たるものも亦た法律を制定す、之れ古代に在つて善良なる立法者の發明に由るものにして、是等は之れを青年に與へ、或は治者たり、又た被治者たるものゝ嚮導たらしむ。而して若し此法律を犯すものは矯正されざる可からざるなり、他語以つて之れを謂はぶ、即ちこれ譴責と云ふものに

善良なる父に不
良の子ある場合
の理由

互に相教へ相學
ぶ時は其人は學
ばざる者よりは
優れり

して此言語たるや單に君の國に使用さるゝのみに非ず、又た他の諸國にも行はるゝものとなす。此く公私の徳義に就いて注意至らざるなくして、ソークラテースよ、君は何故に徳義は教へられ得べきものなりや、否やを驚き且つ疑ふや。疑ふことを止めよ、此反對は却つて一層驚くべければなり。

然りと雖善良なる父の子にして、往々不良の徒となるは何故ぞ之れ余の説明せんとする所なり——而して余の言へるが如く、若し國家の存在なる意義の内には此徳義は或個人の一個の所有すべきものに非ざることを含むるに於ては、之れ別に驚くべきことに非ざるなり。若し之れ眞にして、——此他之れに優れる眞なることなしとせば——説明の爲めに余は君に請ふに、同じく國家存在の必要條件たるべきものと假定する所の或る他科の知識の學得なるものゝ想像を以つてせん。今若し國家なるものは、各人盡く吹笛者たるに非ずんば成立せずと假定し、各人又た吹笛の能力ありとせば、公に私に各人隨意に互に教ふるに其の術を以つてし、不良なる吹笛者は隨意に又た公然と之れを戒めしむること、宛も今日正義及

法律及び人道を
教へられたる者
と教へられざる
者との差異

び法律を教ふるに當り、他の技術の互に相隠くす如きことなく、之れを教ふる如くなすべし。之れ吾等各人の正義及び徳義は、相互に利害の關係を有するを以つてなり。之れ各人好みて正義及び法律を教ふる所以なり。又た假定して、吹笛術を教ふるに於ても、同じく人々喜びて好意を以つて之れを爲すとせば、ソークラテースよ、君は果して如何に思考するや。善良なる吹笛者の子は不良なる吹笛者の子よりは、善き吹笛者となるべしとなすや如何ん。余は然らずと思惟す。彼等の子は吹笛師として天赋の能力に従ひ、或は有名なるものとなり、或は有名ならざる者として成長し、善良なる吹笛師の子も悪吹笛者となり、悪吹笛者の子も、時に善吹笛者となることあるに非ずや。然りと雖如何なる吹笛者と雖、之れを吹笛の術を知らざるものに比する時は、必ず優れる所あるにはあらざるか。之れと同じく君の一考を煩はさざる可からざることば、君の眼よりする時は、夫の法律及び人道を教へられたる者の中の最も劣悪なりと見ゆる者と雖、之れを夫の教育なく、法廷の経験なく、法律を知らず、其他徳義を實踐せしむるに彼等を制御するものなきの輩——即ち例せば昨年のレーナ

イア祭の時詩人フエレクラタースが舞臺に演じたる如き野蠻人等に比較する時は、尙ほ正義の人たり又た正義を熟知せる人と見ゆべし。若し君此詩人の歌曲中の、人嫌ひの如き人間中に生活せりとせば、君は必ずエウリバテース及びフリユノーンダス等に逢ふことを以つて無上の喜びとなし、悲しむべくも君は世界上此地方の下等なる状態を欲するに至らん。ソークラテースよ、君は不平なるか、其は何故ぞ。各人皆其自己の能力に従ひて、一切の人皆徳義の教師なるが故に、君は茲に教師なるものなれしとするか。君は又た此く問はん。グレシヤ語の教師は誰ぞやと。グレシヤに在つては別にグレシヤ語の教師なるものあらざるべし。君又た問はん、種々の工匠は其父より學びたる所の工藝は、之れを其子に教ふるは誰か之れを爲すぞと。彼れ父たるもの及び其弟子等成らん限り能く之れを教ふるなり——然りと雖其技能をして今一層進歩せしめんと欲せば誰か之れを爲すべきぞ。ソークラテースよ、此に至らば必ず君は彼の良教師を得るに困難を感すべし。されども全く未だ學ばざる初歩のものゝ教師を得るは、毫も難きことあらざるなり。之れ亦徳義及び其他の事

プロクターゴラス
自ら進歩したる
者の教師なりと
し人に優れりと
なす

プロクターゴラス
の報酬支拂規則

に適用して誤らざるべし。若し人ありて吾等が徳義の進歩を爲さしむるに於て効果甚だ少きに比して優れる所ありとせば、之れ實に吾等の望む所なり。此種の教師たるは、余の自ら任ずる所にして、余は人をして高尚善良ならしむる知識を有するに於て、他人に優れる所ありと信ず。余は余の門弟子に授くるに其金額に應ずる知識を以てし、或は金額以上を與ふることは彼等自ら言へる所なり。故に余は左の報酬支拂の方法を設けたり、即ち——人若し余の門弟子たる時は、彼若し好まば余の價格を拂ふべきこと、されども之れ敢て強制するに非ず。彼若し此價額を拂ふことを好まざる時は、彼れたゞ神社に參詣して余の教授の價値の宣誓を爲し、其彼等の價値以上を拂ふことを要せず。

ソークラテースよ、以上は余の教訓小話なり。而して之れ徳義は教へられ得べしとなす所の余の議論にして、又た之れアテナイ人の意見たるなり。余は又た善良なる父にして不良なる子を有し、善良なる子にして不良なる父を有せることの別に驚くに足らざることを證明せり。之れポリュクレイトスの子等に見らるゝの例たるなり。ポリュクレイトスの

プロロータゴラスの演説の餘響に恍惚たり

フックラテース我に復へる

子等の年齢を以つてせば、吾等の友バラロス及びキサントッポス等と殆ど同じと雖、其父に劣れること甚し。其他の藝術家に於ても亦此くの如きこと少なからず、然りと雖、余はバラロス及びキサントッポスに就いて同日の論を爲さんとするに非ず、何となれば兩人年尚ほ若かくして前途に希望存せばなり。

プロロータゴラス語り終へたり。然りと雖、余の耳には、尚ほ

「彼れのまよはず計りの美しき聲は残り、暫しが程は、彼れ尚ほ語り居るかど、其を聴かんとして、いとも靜かに立ち居たり」。

然りと雖、遂に彼れ眞に語り終りしことを知り、余は漸くにして意識を回復し、ヒッポクラテースに向ひて謂うて曰く、あゝアポロドーロスの子なる君よ、君が余をして此處に來らしめしは余の大に謝する所なり、余はプロロータゴラスの談話は、大要之れを誤解せざりしことを信ず。而して余は從來心に思ふらく、人力以つて人を善良ならしむること能はずと、然るに今ま能く其の點の事を明かにするを得たり。されども余は尚ほ一個の小疑問あり、プロロータゴラス已に甚だ多く説明する所ありしより考ふ

多くの演説家を
嘲笑す

質問に對して無
言なること書物
の如し

眞鍮製の壺と長
演説家

ソークラテース
短き答語を望む

れば、此の疑問に關しても、必ずや亦説明を與ふべしと信ず。人若しペリクレース或は其他の雄辯の大家の許に至りて是等の事に關して其意見を問ふことあらんには、彼必ず其答へとして一種美麗なる演説を聽くことを得ん。然りと雖若し普通の演説家の許に至りて問ふことあらんには、彼等殆ど書物の如く無言にして、答ふことなく、又た問ふ所もなかるべく、若し人彼等の演説中の一小些事なりとも之れに對して挑戦することあらんには、彼等直に滔々と長演説を爲して大聲囂々たること宛も眞鍮製の壺の、一度打撃せられて鳴り始めたる時は、何人か手を之れに觸るゝまでは鳴り續づくるが如きなり。吾友プロータゴラスは、單に好妙なる演説を爲すのみに非ず、又た質問に應じて短き答へを與ふることは前己に吾等の知る所なり。而して彼れ若し人の意見を敲く時は必ず其人の答ふるを待ち、又た能く之れを聽き入るべし、之れ實に多とすべき所なり。扱てプロータゴラスよ、余は君に尋ねんとする一小疑問を有せり、君若し之れに答ふるあらんには余は甚だ満足なりとす。君は徳義の教へらるべきものなることを言へり、余は信じて君の言に従はん、君を措きて

徳義は一全體の
ものにして諸徳
は其部分なるか
或は一物の種々
の名稱なるか

一物の部分

部分の諸意味

他に信すべき人あらざればなり。されども一事余の心の安んぜざる所
のものあり。君之れを説明して幸に余の心を静めよ。即ち君は大神ゼ
ウスは正義及び敬神を人間界に送與したるを語り、又た正義、節制、神聖
等凡て是等の性質は、之れを總括して徳義を構成するものなるかの如く
言ひしは、君の談話中數次余の聽きたる所なり。されば幸に此事を余に
教べよ、乃ち徳義なるものは一全體のものにして、正義、節制及び神聖等は
其一部分なりと謂ふべきか、將た又た凡て是等は一物の數名にして、其實
同一物なりと謂ふべきか、之れ余の心中に残留する所の疑念なり。

ソークラテースよ、此れ別に難事に非ず、君の言へる所の諸性質は、徳義
と云へる一物の部分たるなり。

余曰く、其一物の部分たるや、恰も耳、目、口、鼻は顔面の一部なりと謂ふが
如き意味なるか、或は是等諸性質は黄金の一部分にして、其量の大小の差
異あるに由り、全體とは異り、又た各部分とも異ると云ふが如き意味なる
か、果して何れぞや。

余は言ふ、ソークラテースよ、前者の意味の如く、顔面の一部分として顔

人々同一徳義を有せるか

面全體に關せる如きなり。

或は人々は徳義の或る一部分を有し、又た他の部分は他人之れを有するか、或は人若し一部分を有せば、彼れ又た他の部分全體を有せざる可からざるか。

彼れ曰く、何ぞ然らん。多くの人勇氣なるありと雖必しも正義ならず、或は正義なるありと雖必しも賢ならず。

余曰く、然らば又た勇氣及び智慧も徳義の一部分なるか。

彼れ曰く、其は疑ふを要せず、且つ智慧は其中最も高尚なる部分なり。

余曰く、是等互に相異りや否や。

然り。

而して是等皆な顔面諸部分の如く、各々其官能を有すること、例へば目は耳と異にして其官能を同うせず、其他の諸部分皆な其官能及び其他の事に於て一として同一ならざる如きか。徳義の諸部分も、亦今ま余の擧げたる例の如く、互に其官能を異にせざるや如何ん、之れ余の知らんことを願ふ所なり。

諸徳の官能皆同一なりや否や

前編同じからず

然り、ゾークラテース、君の言やよし。

余曰く、然らば徳義の如何なる部分も、決して智慧の如き所なく、正義の如き所なく、勇氣の如き所なく、節制の如き所なく、又は神聖の如き所なしと謂ふべし。

彼れ曰く、然り。

余曰く、今ま假定して君と余と共に是等のものゝ性質を研究するものとせんに、先づ、正義とは或る物の性質なりと云ふことに於ては、君余に同意なりや否や。之れ余の意見なり、亦之れ君の意見にあらずや。

彼れ曰く、然り、又た余の意見なり。

又た假定せんに、或人吾等に問うて曰く、「あゝプロータゴラス及び汝ゾークラテースよ、君等が今ま正義と稱したる所のものは正しきものなりや、又た不正のものなりや」と。余之れに答へて正しきものなりと云はゞ、君は余に賛成するか、將た又た反對するか。

彼れ曰く、君に賛成す。

此に於て余は夫の質問したる人に答へて云はん、正義とは正しきもの

正義は正しきもの
の性質なり

と性質なりと。君之れに賛成するか。

彼れ曰く、然り。

其人尙ほ進みて此く言ふと假定せんか、曰く「神聖なるものありや否や」と。若し余にして誤りなしとせば、吾等答へて云はん「然り」と。

彼れ曰く、然り。

又た之れ一種の物なることを君は承認するか。吾等之れを前定して可ならんか。

彼れ承諾せり。

其人又た問うて曰く「此物神聖なる性質のものなるか、或は神聖ならざる性質のものなるか」と。其人此くの如き疑問を提出したるに就いて余は怒つて云はん「黙せ、若し神聖なることが神聖に非ずとせば、天下何物か神聖なるものあらん」と。君此れに就いて何とか言ふ、又た同様の答を爲すや如何ん。

彼れ曰く、然り。

然らば次に假定して、其人吾等に来りて問うとせん、曰く「君等は今何と

言ひしにや、吾れ或は正しく聴かざりしやも計られずと雖、君は余に對して、徳義の諸部分は、互に同一に非ずと言ひしが如く思ふなり」と。余は答へて云はん、「君必ずしか言ひしが如く聴きしならんと雖、君が信する如く、余がしか言ひしことは之れを聴かざりしなるべし。何となればプロータゴラス答へ、余は質問したるものなればなり」と。而して又た假定せんに、彼れ君の方に向ひて曰く、「プロータゴラスよ、此は眞なるか、君は徳義の一部は他の部分と異なることを主張するか。此は君の位置なりや」と。君は如何に彼れに答へんとするか。

ソークラテースよ、余は其人の言ふ所の正常なるを承認せざる能はざるなり。

然らばプロータゴラスよ、此事をしか定め置き、其人尙ほ進みて此く言ふと假定せん、曰く、「然らば神聖なることは正義の性質に非ず、正義は神聖なることの性質に非ずして神聖ならざることの性質のものなり。而して神聖なることは正に非らざるものゝ性質なるを以つて、不正の性質のものなるべく、不正なるものは不神聖なり」と云ふべし」と。吾等如何に之

諸徳は眞ると雖
其多く即ち正義
神聖等は殆ど相
似たり

れに答ふべき。若し余の爲めの點より其人に答へんとせば、余は云はん、正義は神聖なり、神聖なるものは正義なりと。若し又た君の爲めの點より云ふことを余に許るすとせば、正義は神聖と同一なるか、或は殆ど同一に近きかなり、余は断言す正義は神聖に似たり、神聖は正義に似たりと。君は余に許るして、君の爲めに此の答を爲さしむるか、或は君は余に同意なりや、之れ余の聽かんとする所なり。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、余は夫の正義は神聖なり、神聖は正義なりとの意見には簡單に一致すること能はざるなり。何となれば余は此兩者の間に差異ある如きを感じればなり。然りと雖何事ぞや。たと君の意のまゝなり、余異存あるなし、君若し好まば、正義は神聖なり、神聖は正義なりと云ふことを假定して可なるのみ。

余曰く、願くば容赦せよ、「若し君好まば」「若君欲せば」と云ふ如き議論は余は之れを論證せんと欲せざるなり。余の目的とせる所は、君及び余の論證されんことなり、之れ「若し」なき時は議論最もよく論證さるゝを以つてなり。

フロートゴラス
諸徳の相似たる
ことを許容する
も其同一なるこ
とに之れを否む

彼れ曰く、余は正義は神聖と相似れるを許容せん、何となれば或若眼點よりする時は、如何なるものも互に他のものと相似るの點を有するものにして、白も或方法に於ては黒の如く、剛も柔の如く、最も反對せるものも或普通の性質を有するなり。顔面諸部分の如き、前に吾等の言ひしが如く、各部皆な異にして、又た其官能も異りと雖、或見様に由る時は、同様なるものありて、彼等互に相似たる所なきに非ず。此くて萬物互に相似ると云ふ所の同一原理に由り、正義及び神聖たることの相似たるものなることを證すべきなり。然りと雖、事物若し或特殊の點に於て同一なりと雖、直に以て其物同一なりと謂ふ可からず、又た或る特殊の點に於て、如何に些少なりとも異なる點あればとて、直に以つて其物異れりと謂ふ可からざるなり。

余は驚愕の語調を以つて謂うて曰く、夫の正義及び神聖は、たゞ輕少の同似あるのみなるか。

彼れ曰く、否な。然りと雖余は君の見解なるべしと信する所に同意せざるものなり。

プロトタゴラス
物は唯だ一の反
對物を有せるも
のたることを許
容せしめらる

余曰く、此問題に就いては君は聊か困難を感せるものゝ如し、之れを以つて吾等他の例を取りて君に問はん、君は愚昧と稱するものは存在せりとなすか。

然り。

而して智慧は愚昧の正反對にはあらざるか。

彼れ曰く、然り。

人若し正しく且つ利益あるやう行爲する時は、君は是等の人を以つて節制の人なりとするか。

彼れ曰く、然り。

而して節制たることは、彼をして節制ならしむるか。

然り。

かの正しく行爲せずして却つて愚昧に行爲する時は、之れ節制にはあらざるべし。

彼れ曰く、然り。

然らば愚昧に行爲することは節制に行爲することの反對なるか。

彼れ之れに同意せり。

而して愚昧なる行爲は愚昧なることに由つて行ひ、節制なる行爲は節制に由つて爲したる行爲なるか。

彼れ同意せり。

かの強く爲したることは力に由つて爲し、弱く爲したることは弱きことに由つて爲したることなるか。

彼れ同意せり。

かの迅速を以つて爲したることは速かに爲し、遲鈍を以つて爲したることは又た遲鈍に爲したることなるか。

彼れ之れを承認せり。

事物若し同一の方法を以つて之れを爲したりとせば、之れ同一の物に由つて爲したるものたり、又た若し反對の方法を以つて爲したりとせば、此は反對のものに由つて爲したるものなるか。

彼れ同意せり。

余曰く、今一つの問ふことあり、美なるものありや。

然り。

其唯一の反對は醜なりや。

然り其他たること能はず。

善なるものありや。

之れあり。

其唯一の反對は惡なりや。

惡の他あらざるなり。

音響に鋭きものありや。

之れあり。

其反對は森嚴なるものに非ずや。

彼れ曰く其他あることなし。

然らば凡て反對なるものは、たゞ一の反對のみを有して其れ以上あらざるか。

彼れ然りとせり。

余曰く、然らば前言を再述せんに、第一吾等凡ての物は唯だ一の反對の

みを有し、其れ以上を有せざることを承認したるなるべし。

吾等之れに同意せり。

吾等又た凡て反對の方法に由つて爲したるものは、反對のものに由つて爲したるものなることを承認したるにあらずや。

然り。

かの愚昧に爲したる事は、吾等前に承認したる如く、節制に爲したる事と反對の方法に由つて爲したるものなるか。

然り。

夫の節制に爲したる事は節制に由つて爲したる事にして、愚昧に爲したることは愚昧に由つて爲したるものなるか。

彼れ同意せり。

かの反對の仕方に由つて爲したるものは、反對のものに由つて爲したるることなるか。

然り。

而して一物は節制に由つて之れを爲し、又た全く異なる所のものは愚昧

に由つて爲したるものなるか。

然り。

而して其等は全く反對の方法に由りしものなるか。

確かに然り。

故に又た反對のものに由つて之れを爲したりと云ふべきか。且つ愚昧は節制の反對なるか。

明かに然り。

愚昧は智慧の反對なることは、吾等已に承認したることを君記憶せるか。

彼れ承諾せり。

吾等又た凡ての物はたゞ一の反對を有せることを言ひたり。

然り。

然らばプロータゴラスよ、此兩断定中、吾等何れを取り何れを捨てん。

即ち、其の一は曰く、凡ての物は唯だ一の反對を有せりと、其の他は曰く、智慧と節制とは異れり、而して是等兩者共に徳義の部分なり、且つ是等は單

愚昧は智慧及び
節制の反對

愚味は智慧と節制との兩者の反對なりとせば節制と智慧とは同一なるべし

不正と節制と剛立するを得るか

に異なるのみに非ずして、又た其の物自身及び其の官能に於て相同じからざることを猶ほ顔面の諸部分の如しと。此兩断定中、吾等果して何れを舍つべきぞ。實に兩者共に調和せず、又た互に一致せざるなり。若し凡ての物にして、唯だ一の反對のみを有して其れ以上を有せずとせば、如何でか是等兩断定の相一致することを得んや。故に見よ、愚昧、之れ一物而して明かに、智慧と節制との二個の反對を有せるに非ずや。プロクタゴラスよ、此は眞理に非ざるか。他に言ありや否や。

彼れ澁々として余の言に同意せり。

余曰く、然らば節制と智慧とは、前に正義と神聖とが殆ど同一なりと思はれたるが如く、又た同一なるべし。プロクタゴラスよ、吾等薄志弱行なる可からず。尙ほ殘餘の問題を解決せざる可からず。君は、不正の人は其不正に居て節制なるを得べしと思考するか。

彼れ曰く、ソクタテリスよ、多くの之れに同意するものありと雖、余は之を承認することを辱づ。

余答へて曰く、然らば余は、之れに同意する彼等と論すべきか、將た又た

君と論すべきか。

彼れ曰く、余は寧ろ望む、君若し好まば、先づ彼等と論せんを。

若し君にして彼等と同一意見なりや否やを余に答ふるならんには、余の何れと論すべきやはたゞ君の好むがまゝに一任せん。余の目的たるや、論議の正否を試みんとするにあり、而して其結果たるや、互に問答せる余も君も、尙ほ審問中にあるものと謂ふべきなり。

プロロータゴラス始め討論は好まぬ由を謂ひて之れを拒むの趣ありしも、遂に余の問に答ふることに同意したり。

余曰く、然らば始めより始めん、而して余の問ふ所に答へよ。君は或人は節制なりと雖、又同時に不正なることありと思惟せるか。

彼れ曰く、然り、しか定め置くべし。

節制は明断なるか。

然り。

明断は不正を行ふに當り善良なる協議者なるか。

然りと許容すべし。

不正を行ふ爲め
の明断

余曰く、其は不正の成功したる時を謂ふか、或は成功せざりし時を謂ふか。

成功せし時なり。

君は諸善の存在を許容するか。

然り。

人間に有益なるものは善なりや。

彼れ曰く、然り、然りと雖有益ならざるものにして、吾等尙ほ善と稱することあり。

余意ふにプロータゴラス精神攪亂し、激昂し來れる如く、漸く戦争の態度を取るに至れるを見る。是故に余は余の此に來れる目的を思ひ温和に言うて曰く。

プロータゴラスよ、君が有益ならざる物をも善なりと云ふは、之れたゞ人間のみには有益ならざるものを云ふか。或は又た一切のものには有益ならざるものを云ふか。而して君は此後者をも善と云ふか。

彼れ曰く、後者は然らず。余は、肉類、飲料、藥劑及び其他數千の物の、人間

善なるもの

善は有益なるものなるか

善は所に由り人と物とに由つて異なるものなり

に取つては或部分は有益なるも、又た或部分は有益ならざるものあるを
知る。或物は馬に有益なりと雖、人間には然らざるあり。或物は牛にの
み、或物は犬にのみ、或物は一切動物には然らざるも植物に有益なるあり。
或物は植物の根には有益なるも其枝葉には然らざるあり、例せば肥料は
根に有益なりと雖、之れを其の若き條枝及び萌芽等に注ぐ時は甚だ有害
たるなり。橄欖油は一切の植物に有害にして、又た人間の髪を除き諸動
の毛髪には最も有害なるものなりと雖、人間の毛髪及び身體には甚だ有
益なりとす。此く善惡の性質の種々にして變化すべきものなるとは、此
數例に由つても之を知るべし。而して人體外部に有益なるも其内部に
は甚だ有害なるものあり。故に醫師は常に患者に油類の食用を禁じた
る肉類、漿類等の不快なる臭氣を消す爲めに、極めて少量を許るすに過ぎ
ず。

プロトタゴラス語り終へし時、人々皆歎稱せり。時に余は曰く、プロ
トゴラスよ、余は記憶甚だ不良なるを以つて、人若し長談話を爲す時は、殆
ど其何を語りしやを記憶すると能はざるなり。若し余にして聾者なら

んには、君余と語らんとせば、必ず其聲を大にするが如く、若し記憶惡しき余と語ることを承諾せば、願くば君の答言を短かくせよ。

彼れ曰く、君の言ふ所の意味如何ん。余の答言を短かく爲すべしとのことなるか。然らば余は短に過ぐるやうなすべきか。

余曰く然らず。

彼れ曰く、然らば短かく爲し得る限り短かく爲すべしと言ふか。

余曰く、然り。

然らば余に取つて短かきと見ゆる短かさに爲すべきか、或は君が見て短かきとする短かさに爲すべきか。

余曰く、余の聞く所に由れば、君は同一事物を人に教へ或は語るに當り、或は之れを長くして言語毫も誤ることなく、或は之れを短くして何人も此上縮め能はざるやうなすことを得べしと。然らば願くば後者に由つて適當の方法を用ゐんことを。

彼れ答へて曰く、余は言語の戦争は數々之れを戦ひたり、然りと雖論敵たる君が要求するが如く、討論の方法に従ふ時は、余は決して他に優れる

ソークラテース
起き言語を用ひ
て問答するを要
求す

ソークラテース
怒つて歸らんと
す

所あるなく、プロータゴラスのプロータゴラスたる名聲は何處にも之れ有ること無けん。

彼れ以前に爲したる答に満足せず、今後は成らん限り答辯者たらざらんとを求むるを余は見たり。而して思考すらく、已に對話を繼續するの望みなしと。因つて余はプロータゴラスに謂うて曰く、君若し欲せずんば余は強ひて君と對話することを欲せず。されども君若し余が君に附隨して了解し得る方法に於て余と論せんとせば、余は喜んで君と語らん。君は人も謂ひ、又た自らも謂へるが如く、談話は或は之れを長くし、又た之れを短かくし、其長短は自在なるべし、之れ君は知識の大家たればなり。然るに余は此くの如き長演説は之れを扱ふこと能はざるを以つて、たゞ余の能くし得る所を望むのみ。君は之れを長くし、又た短かくするは自在なるの人なれば、余の願ふが如く、之れを短かくして可なるに非ずや。然らば余は共に語るべし。然るに君は之れを好まざるが如し。余は君の談話を聴くは最も好む所なりと雖、用務あり、他に行かざる可からず、長く此處に止まりて聴くこと能はざるなり。

カリアス、ソークラテースを引
き止む

ソークラテース
プロクターアリス
が言語を短かく
すべきを主張す

此く余は言ひて椅子より起たんとせざる時、カリアス余の手を握り、左手に余の此の古びたる上衣を扣へて曰く、ソークラテースよ、吾等君を歸へざざるなり。君若し歸らば議論此に終る可ければなり。故に余は君に願ふに、此處に止まることを以つてせざる可からず。實に君とプロクターアリスとの兩人の談話を聴くは余の無上の樂しみとする所なり。君は此快樂を吾等の友人等に否むこと勿れ。

余は起立して殆ど歸らんとせり。而して答へて曰く、ヒッポニコスの子なる君、余は常に君の哲學の精神に富めるを稱賛し、又た今ま衷情より之れを稱揚し、又た之れを愛す。余若し能ふべくんば君の言に従ふべし。雖、實能はざるなり。而して君の余に請ふ所は余に取つては大なる不能の事にして、宛も之れヒメラのクリソンの血氣旺なるの時、彼れと競走するか、或は他の人と共に終日の長時競走を爲せと命する如きものたるなり。余は之れに答へて此く云はん、余は丁寧に余の兩脚に懇願したりと雖、兩脚應じ能はざるなりと。故に君若しクリソンと余とを同一競走場裡に見んと欲せば、君はクリソンに願ひて其速度を緩るめて余の速度に

下さしめざる可からず。何となれば余は速かに走り能はずと雖、彼れは徐々に走り能ふを以つてなり。之れと同じく、君若し余とプロータゴラスとの議論を聴かんことを欲せば、君は彼れに願ひて其の答言を短かくし、彼れの始めに爲したるまでとなさざる可からず、然らざれば如何でか議論たることを得んや。何となれば余の思ふ所に由れば、議論と演説とは全く別物たればなり。

カリ阿斯曰く、然りと雖ソークラテースよ、君は自己の流儀に由つて談話することを主張するが如く、プロータゴラスも亦其自己の流儀に由つて談話することを主張し得るに非ずや。

茲にアルキピアデース言を挿みて曰く、カリ阿斯よ、君の言は此場合の眞を寫さざるなり。吾等の友人ソークラテースは、演説を爲し能はざることを自白せり——此點に於ては彼れプロータゴラスに名譽の月桂冠を譲りし者なり。然りと雖ソークラテースが議論を横づけ、之れを捕ふるの力に於て、之れを現存せる人物に譲るとせば、實に之れ奇異の事とすべきなり。如何んぞ彼れ之れを譲らん。今ま若しプロータゴラスにして

アルキピアデースの行司

プロータゴラスは大演説家

ソークラテースは討論第一の人

ソークラテース
記憶不良と云ふ
は眞に非ず

不偏不黨の討論
傍題

同一の自白を爲し、議論の巧妙なることに於ては、到底ソークラテースに勝つこと能はずとせば、ソークラテースは此れに満足すべしと雖、プロータゴラス尙ほ議論に於ても優勝者なりと謂はゞ、プロータゴラスをして問答せしめよ。若し質問提出されし時は、決して詭計或は遁辭を爲すことなく、又は長演説を爲して、聴衆の多くをして始めの問題の意味を忘れしむる如きことを爲さざらんことを要す。(ソークラテースが記憶なく忘れ易しと云ひて、或は滑稽を行ふことあらんと雖、彼れの記憶不良と言ふとは信すべからず)。而して余の見る所に由れば、ソークラテースはプロータゴラスよりも正常なるが如し。余の意見此くの如し、諸君亦各思ふ所を言ふべきなり。

アルキピアデース語り終りし時、或人——余はクリチアスなるべしと信ず——謂うて曰く、あゝプロイチコス及びヒッピアスよ、カリアスはプロータゴラスに黨せるものゝ如し、是れが爲めに反對を好むアルキピアデースは其反對側に立ちしなり。されども吾等はソークラテースにもプロータゴラスにも、兩人何れにも不偏不黨なるを以つて、吾等一致して兩人の

議論を中止すること勿らんことを懇願せん。

プロローグコス之れに加へて曰く、クリチアスの言甚だ可なり、何人と雖此くの如き議論を聴く者は必ずや不偏不黨ならざる可からず。然りと雖、不偏不黨は平等の謂に非ずして、其聴くや素より不偏不黨なりと雖、兩論者に與ふる褒稱は必しも同一に非ずして、大賢には高き褒稱を與へ、小賢には低き褒稱を與ふべきなり。プロローグラス及びソークラテースよ、余もクリチアスも共に君等に願ふ所は、吾等の願ふ所を容れて兩人共に議論せんことなり、決して争論すべからず。何となれば朋友の朋友と共に論するや、好意を以つてすべきものにして、反對者及び敵者のみ争論するものなればなり。若し此くの如しとせば、吾等の此の會合は甚だ喜ぶべく、談話者たる君等は、單に聽衆たる吾等より贊美を受くるのみに非ずして、又た尊敬を受くべきなり。ことに余は尊敬と云へり、何となれば尊敬は聽衆の衷心より出づる確信なりと雖、贊美は時に自己の意志に反したる言語を用ひ眞率ならざることあるを以つてなり。而して吾等聽衆は快樂と云はんよりも満足なるべし。何となれば満足なるものは智

ロツピアス紳士
の態度の必要を
云ふ

慧及び知識を得たる時の心の状態なりと雖、快樂なるものは飲食或は其
他身體上の愉快を感じるものなればなり。プローチコス此く語り人々
其言を喝采せり。

次に聖人の目あるヒツピアス曰く、此席に列なる諸君は、意ふに皆な親類
なり、朋友なり、又た同一國人たるべし、之れ自然の性に由つて然るもの
にして法律に由るに非ざるなり。何となれば吾等天性に由つて同は同と
親しむと雖、法律は人間の専制君主にして往々にして吾等の性に逆ひて
事を爲さしむることあり。吾等能く物の性を知り、又たグレシア人中の
最賢なる者が、此智慧の首府に於て、又市内最大にして榮譽ある此家に會
合して、而も何事も其高尚なる品位に相應はしきとを爲すなく、却て、下等
人間の爲すが如く爭論するとは、豈之れ耻づべきの至ならずや。余は君
等に願ひ、又た忠告す、汝プロータゴラス、汝ソークラテース、各々讓歩和睦
するとに同意せよ、吾等君等の仲裁者たらん。而してソークラテースよ、
若しプロータゴラス異存あらんには議論の嚴重に極端に短かからんと
を目的とせず、君も自ら談話の手綱を弛るめて走らしむべし。之れ反つ

言語の長短を中庸にせよと云ふ

討論の議長及び我決者を置くべしと云ふ

ソークワテース討論裁決者を置くの都合なるを云ふ

て君の言語の莊大となり、君に取つて宜しきことたるなり。又た汝プロ
ータゴラスよ、君も亦順風に、一切の帆を巻き上げて陸地を離れて言語の
大海に快走するなく、兩人の見て以つて中庸とする所を守るべし。余の
言を實行せよ。且つ余は想ひ出せるは、君等の裁決者、監査人或は議長を
選び以つて君等の言語を注意し、其適當なる長さを得しむることを力め
しめんこと之れなり。

此提議は一同大に賛成する所となり、カリアスは決して余を歸らしめ
ずと言ひ余をして裁決者を選ばしめたり。然りと雖、余は議論の裁決者
を選ぶを不都合なりとして曰く、若し其裁決者にして吾等に劣れるもの
ならんには、劣者は以つて吾等の上に立つて裁決すべきに非ず、若し吾等
と同等の者を選ぶとせんか、果して何の善きことある、吾等と同等のもの
を爲す所は又た吾等の爲す所と異なるとなし、此くの如き者を選定するの
用何處にかある。諸君若し、吾等よりも「優等なる人を選べ」と云はんか、余
は答へて云はん、諸君はプロータゴラス以上の賢者あると能はずとなさ
ん。又た若し諸君にして、真に優れる者ならずと雖、たゞ優れりと爲して、

其人をプロータゴラスの上に置き、プロータゴラスを以つて其人よりも劣れるものゝ如くせんか、余に於ては何事もあらずと雖、プロータゴラスに對しては必ずや不快なる感覺を與ふべきなり。然らば如何にせば諸君の欲する如く、談話及び議論を進行せしむるを得るやを考ふるに、若しプロータゴラス答ふるを好まずとせば、彼れ問ひ、吾れ答へん。又た余が主張せるが如く、同時にプロータゴラスが如何に余に答ふ可きやの方法をも示めすことを力めん。而して彼れ好むがまゝに問ひて余之れに答へしならんには、次は彼れ余の問ふ所に答ふるやう爲さん。然るに彼れ若し正確なる疑問に答ふることを爲さざるに於ては、議論を毀損せざるやう、諸君が余に願ひたるが如く、余も諸君も一同一致して、吾等に答辯せんことをプロータゴラスに願ふことゝ爲さん。此くの如くせば、何ぞ特に裁決者を要せん、諸君一同裁決者たるべきなりと。一同之れに同意せり。然るにプロータゴラス意甚だ悦ばずと雖、止むを得ずして質問することゝ同意し、若干數の質問を試みし後は、又たソークラテースの質問に短かく答ふることゝなし、先づ次の質問を爲して曰く――

彼れ曰く、ソークラテースよ、余は此意見を有す、乃ち詩學に熟達するこ
とは教育の主要なる部分にして、詩學とは詩人の如何なる作は正しく、如
何なる作は正しからざるやを知り、之れを區別し、又た其理由を問はれた
る時は之れを説明する力なりと云ふにあり。而して吾等是れまで徳義
に關して談話し居たるが、今や題目を一轉して、詩人の作に關し、詩學の範
域に移りて議論する所あらんとす。詩人シモニデス、テッサリアのクレオ
ーンなる者の子スコバスに謂うて曰く――

「一方には、人は眞に善となることは難し。手にも足にも、又た精
神にも、瑕瑾なき事業たる、四角四面を建立するは、甚だ難事なり」
と。君は此詩を知れりや、或は全文を再讀せんか。

余曰く、其要なし、余は熱心に此詩を研究したるを以て之れを熟知せり。
彼れ曰く、然らば君は此詩は善良なる作にして又た眞なりとなすか。
余曰く、善にして眞なり。

然りと雖若し詩中矛盾する所ありとせば、此詩は善たり又た眞たるを
を得るか。

余答へて曰く、其時は然らず。

彼れ曰く、此詩中矛盾せる所はあらざるか、熟考すべし。

我友、余は之れを熟考せり。

詩人尙ほ進みて此く言はざるか、曰く、「假令賢人の言なりと雖、余はビツタ
コスの、人は善にてあり得ることは難し」との言に同意すること能はざる
なり」と。之れ同一詩人の言へる所なるは君の知る所なるべし。

余は之れを知れり。

彼れ曰く、君は此二個の言は果して矛盾なしとするか。

余曰く、然り、矛盾なしと信ず、此時余はプロータゴラスの言中何事か深
長の意味あらんかとの恐れを禁じ能はざりき。君は然らずとなすか。

彼れ曰く、彼れの此二個の言は果して能く矛盾なきを得るか。彼れ先

づ自己の思想として前提して曰く「人は真に善となるとは難し」と、而して

同一詩中に少しく進みたる場所には、自己の前に言ひたる事を忘却し、ビツ

タコスを非難し「人は善にてあり得ることは難し」と言ひて、自家の言へる

所と同一なるに關せず、之れに不同意を唱ふ。若し自己と同一なる言語

レモニデスの詩
の他の部分

フロータゴラス
此詩人の言に矛
盾なきやを問ふ

ソークラテース
言語學者プロ
ヂコスの援を求
む

スカマンデル河
の例

を非難せば、之れ彼れ自己を非難するものにして、彼れ其前に言へる所を
誤認とするか、或は其の後の言を惡しとするか、兩者何れかならざる可か
らず。

聽衆の多數此言を喝采せり。余は彼れの言語及び聽衆の喝采の音を
聽きし時、始めは宛も熱達せる拳闘者の手痛き打撃を被りたるが如く、眩
暈失神を感じたり。實を言はば余は此詩人の意味せる所は、果して真に
何事なるやを思考するの時間を要したりしなり。故に余はプロヂコ
スに向ひ呼びて曰く、プロヂコスよ、シモニデスは君と同國の人なり。

君は彼れの救助に來らざる可からざるなり。余は君を呼び出して余の
加勢となさざる可からずと信ず。宛も之れホメーロスの詩中スカマン
デル河、アヒレウスに攻め立てられし時、援をシモイスに求めし時の言に
「愛する兄弟、吾等與に力を協せて英雄の勢を防止せざる可から
ず」

と言へる時の如し。余は君を呼び出さん、何となればプロクテラスは
シモニデスの終焉を爲さしめんとすればなり。今や君が「意志す」「欲す」

『にてあること』
 『と』となること』
 『とは同一なるや
 如何ん』

等の意義を區別し、其他君の莊麗なる演說中に言ひたる如き同意義を區別して使用する所の、夫の愉快なる同義語の哲學を應用して、シモニデスを救ひて回復せざる可からざる時なり。余は、シモニデスの詩には矛盾なしとなすものなるが、君は余に同意なりや如何ん、之れ余の知らんと欲する所なり。第一プローデコスよ、君の意見に由れば、『存在』と『變化』とは同一なりとなすや否や、願くば之れを語れ。

プローデコス曰く、決して同一に非ざるなり。

シモニデスは始めに自己の意見として、『人は眞に善となることは難し』と言ひしに非ずや。

プローデコス曰く、眞に然り。

余曰く、而して彼れのピッタゴスを非難するや、プローデコスの想像せるが如く、自家と同一の言語を非難したるに非ずして、異りたる言語を非難したるなり。ピッタゴスはシモニデスの如く、『人は善となることは難し』と言はずして、『人は善にてあり得るとは難し』と云ひしなり。而してプローデコラスよ、吾等の友プローデコスは、『存在』と『變化』とは同一ならずとせ

り。若し此兩語同一ならずとせば、シモニデス敢て矛盾せりと云ふ可からざるなり。余は敢て言ふ、プローヂコス及び他の多くの人々はヘシオドスの言の如く、

「一方には、人は善となることは難事なり。何となれば神は徳義を勤勞の報酬となしたればなり。然りと雖一方には人若し頂上に登りし時は、之れを得るには困難なりしも之れを保つは容易たるなり」

と言はん。

プローヂコスは聽きて之れを嘉稱せりと雖、プローヂゴラスは之れを駁して曰く、ソークラテースよ、君の正誤したる所には、君が正さんとしたる所の文章中の誤謬よりも一層大なるものあるなり。

余曰く、あゝプローヂゴラスよ、然らば余は悲しむべき醫師にして、治療せんとして却つて疾病を重くしたるものと謂ふべし。

彼れ曰く、事實余が云へるが如し。

余問うて曰く、其事如何ん。

プロロータゴスは
古學を研究せる
人

プロロータゴラス
の門弟子なりと云ふ

彼れ答へて曰く、此詩人は、人々が一切の事物中至難なりとせる術義は、容易に之れを得べしと云ふが如き誤謬は、決して之を爲し能はざるなり。

余曰く、プロロータゴスの此處に在るは時に取つて吾等の幸運なり、何となればプロロータゴラスよ、プロロータゴスは余の想ふ所に由れば、人間以上にして、且つ甚だ古代シモニデス、或は其の以前にまで溯りたる古代の智慧を有せる人なればなり。君は多くの物を學知せりと雖、此事に就いては恐くは知らざるものゝ如し、されども余は之を知れり、何となれば余はプロロータゴスの門弟子なればなり。若し余にして誤ることなとせば、君はシモニデスが旨としたる「難し」(yaxetov)なる語を解せざるものゝ如し、故に余が嘗て稱贊の語として「恐るべき」(deudov)なる語を用ひし時、プロロータゴスが之れを正したるが如く、余は今ま君を正さざるを得ざるなり。今若し余にして、プロロータゴラス、或は其他何人なりとも、之を稱して「恐るべき賢人なり」と云はゞ、彼れ余に問うて云はん、余はかの善きものを呼ぶに「恐ろしき」なる言語を使用して耻ぢざるかど。而して「恐ろしき」なる言語は常に惡の意味に使用さるゝ者にして、恐るべき健康、恐るべき富、恐る

べき賢者とは云はずして、恐るべきなる語は之れを惡の意味に使用して、恐るべき戦争、恐るべき貧窮、恐るべき疾病と謂ふ事等を説明せん。意ふにシモニデス及び其國人たるケオス人等が「難し」なる語を使用するや、之れ「惡」或は一種未だ君の知らざる意味に使用するなり。吾等プロロヂコスに問はん、何となればプロロヂコスは能くシモニデスの方言に關する疑問に答へ得べき人なればなり。プロロヂコスよ、シモニデスの用ゐたる「難し」なる語は、彼れ果して如何なる意味にて使用したるものぞ。

プロロヂコス曰く、惡の意味なり。

余曰く、故にプロロヂコスよ、シモニデスが、ピッタコスを難せしは、其の「善は難し」との言は、之れ「善は惡なり」と云ふに等しきを以つてなり。

彼れ曰く、然り、之れ明かにシモニデスの意味なり。而してシモニデスはピッタコスの言語の使用を知らざるを嘲笑せり。されども之れ野蠻語を使用するに慣れたるレスボス人に取つては自然たるなり。

余問うて曰く、プロロヂコラスよ、君は吾等の友プロロヂコスの言ひし所を聽きしや。君は彼れに答ることを得るか。

プロロータゴラス曰く、プロローデコスよ、君は凡て誤れり。余は知る、シモニデスの「難し」なる語を使用するは、吾等人々が意味する所と同一にして、決して悪の意味には非ずして、容易ならずと云ふことを意味し大に煩勞せざる可からざるを意味せることを。余は此事に就いて斷言す。

余曰く、プロロータゴラスよ、余も亦、之れシモニデスの意味せる所なりと思惟す。吾等の友プロローデコスは十分此事を知盡せるも、君が果して其所説を主張するや否やを試みんとして、好讎を爲せるなり。其シモニデスが、右に言へる如き意味の外意味せざるとは、同じく其詩中に「たゞ神のみ此能力を有せり」との句あるに由つて證明するを得べし。故にシモニデスが後の句に「たゞ神のみ此能力を有し、之れ神の性質にして決して他のものゝ性質たらずと云ふは、決して「弊にてある」とは悪なり」と意味せざるや明かなり。若し夫れ然らずとせば、プロローデコスはシモニデスに負はしむるに無思慮の性質と云へる悪名を以つてする者ならざる可からず、されども此くの如きは其國人の性質になき所なり。故に君若し其の言へる所の方法に従つて、余が果して詩學に違せりや否やを試みんと

シモニデスの詩
の精神

ラケダイモーン
人の國民的秘密
の哲學

ラケダイモーン
人は武力に非ず
哲學にて世界を
支配す

せば、余はシモニデスの此詩の眞意なりと信せる所を語らんとす。然りと雖若し君語らば、余は寧ろ之れを謹聽せんことを欲す。

プロータゴラス余の言を聽きて曰く、君の好むが如く爲せと。而してヒッピアス、プロータゴラス及び其他の諸子皆な余が言ひたる如くすべしと言へり。

余曰く、然らば余は此詩に關する意見を語らんに。蓋クレテア及びラケダイモーンに於ては、他のグレンシア諸國よりも甚だ古代の哲學大に研究せられ、世界上、哲學者の多かりしも亦是等の國なり。然りと雖ラケダイモーン人は之れを秘密となし、決して是事なしと打消し、以つて自ら愚を裝へり。之れ前にプロータゴラスの話したる所の「ソフィスト」の如く、ラケダイモーン人等は武力を以つて世界を支配せるに非ずして、智慧によつて之れを爲すものなることを世間に覺られ、其優勝なる理由は世界の知る所となり、他の諸國亦之れに倣ひ、其智慧を實行せんことを恐るゝに由る。故に此秘密はラケダイモーンを摸擬せんとせる他の諸都市の人の知覺する所とならざるなり。而して他の諸都市の摸擬者は謂らく、ラ

哲學上の秘密會

女子も高尚なる教育を受く

ラケダイモーン人は名譽を爲すこと多し

ケダイモーン人が能く新を他のグレシア諸國に稱し得るは、必ず武力上の修練在つて存するに由ると。故に彼等打撃環を其の手に緊結し、常に武力を修練し、又た短衣を着して、以つてラケダイモーン人を學べりと思へり。若しラケダイモーン人にして、制限なく、自由に其國の智者賢者等と談話する時、秘密なる方法に由つて之れを爲すに不満足を感ずるに至らば、一切是等の模擬者、及び其國に來れる他國人は盡く之れを逐ひ出して、全く他國人には知る可からざる哲學上の會議を爲せり。而して又た青年の他國の都市に至ることを禁せり、之れ其教へたる所を他國人の學ばざらんが爲めなり、(此事に關してはクレター人も亦同じ)。而して是等の諸都市に在つては單に男子のみに非ず、女子も亦高尚なる教育を受け居るなり。余が此くラケダイモーン人の哲學上に秀出せることを稱賛するの虚言に非ざること、は、ラケダイモーン人と談話するに由つて之れを知るを得べし。今若し普通のラケダイモーン人と談話せんか、普通の談話に於いては、特に何等の善をも發見せずと雖、或要點に到らば、彼れ注意すべき、明晰にして深遠なる意味あり、且つ正鵠を失はざる名言を發射

七賢人

せん、而して其談話せる人は、手を引ける小兒の如きを見るべし。是に出つて之れを観るも、ラケダイモーン人の哲學に長せるを知るべし。而して吾等の當時の人も、亦前代の人も多く眞のラケダイモーン人の特性は、哲學の愛は體術の愛よりも強きことを注意し、此くの如き名言を爲し得る者は、必ずや完全なる教育を受けたる者ならざる可からざることを知れり。ミレートス人タレース、ミュチレ子人ピッタコス、ブリエ子人ピアス、又た我國のソローン、リュチア人クレオプロス、ヘニア人ミューン等皆な此くの如き人なり、而して七賢人の目錄中の第七はラケダイモーン人ヘイローンなりとす。是等の賢人は皆な之れラケダイモーンの學問の愛者たり、競争者たり、又た弟子にして、何人と雖、是等諸賢人の知慧は、皆なラケダイモーンの氣風を帯び、彼等一個人の發する如き、記憶すべき格言の文章より成るものとす。而して彼等集會して、彼等の智慧の效果として、有名なる格言をデルフオイのアポローンの神社に獻納す、之れ人口に膾炙せる『己れを知れ』及び『何事も過度なる勿れ』との格言なり。

余が此く凡ての事を言ふは、夫のラケダイモーン人の簡短主義は、古代

デルフオイ神社
の額

ラケダイモーン
人の簡短主義の
哲學

シモニデスの
野心

シモニデスの精神に據りて其詩を解すべし

哲學の流義たりしことを説明せんが爲めなり。而してピタゴスの『善に
て在ることは難し』との言は私かに流布して其賢者の稱賛する所となり
居たり。然るにシモニデス智慧の名譽を得んとの大望を起し、若しピタ
ゴスの此言を打破したらんには、宛も高名なる體力家に打勝ちたるに等
しく、名譽を一世に轟かすを得べしと考へたり。而して若し余の見る所
にして誤るとなしとせば、シモニデスは、ピタゴスの此の言を破壊せんが
爲めに、其詩全體を作りしものなりとす。

されば吾等一同一致してシモニデスの言を討檢し余の言の眞否を明
かにせざる可からず。若しシモニデスにして、たゞ善にてあることは難
しと言はんとするのみの爲めに、其詩の初めの言に『εὖ即ち一方には』の
語〔一方には善となることは難し〕を挿入したりとせば、彼れや狂人たらざ
る可からず。故にシモニデスはピタゴスの言に反對の精神ありとなす
に非ざれば、其の『εὖなる語を挿入し來るの理由を解する能はざるなり。
ピタゴスは曰く『善にてあることは難し』と。シモニデス之れに反對して
曰く、『否な、ピタゴスよ、眞に難き事は善となることなり』と。『眞に』は之れ

を『善』に結ばずして『難し』に結ぶべきなり。其の世上眞に善なる人あり、又た善なりと雖、眞に善ならざる人あるかの如く、難きは眞に善にてあることなりと云ふに非ざるなり。(之れ甚だ單純なる觀察にして、シモニデスには相應はしからざるなり)。故に今まシモニデスは『眞に』(Alone)なる語の轉置を行ひピッタコスの言を此く排列すと假定せんか(ピッタコス語り、シモニデス答ふるものと想像す)ピッタコス曰く、『あゝ吾友善にてあることは難し』と。シモニデス答へて曰く、『ピッタコスよ、汝は誤れり、難きは善にてあることにあらずして、一方に於て、缺點なく、善となり、手、足及び心意の四角となるとなり——之れ眞に難し』と。此句を此く讀まば、即ち『一方に於て』なる語の挿入の理由を解し、又た『眞に』なる語は此の處に置くの正常なるを知るべし。此くて此の詩の眞意義は余の言へる如きものなるを證するを得べし。若し詳細に此詩を稱賛せんとせば、甚だ多く言ふべき事あり。實に之れ興味ある名作にして、甚だ完きものなりと雖、詳細の稱賛は長きを厭ひて此に畧さん、然りと雖此詩全體の目的は、ピッタコスの言を打破せんが爲めに作れるものなるは之れを明示せんと欲す。

永久善にてある
ことは不能にし
て人の善悪は境
遇に由つて變ず

シモニデスはそれより少しく進みたる詩の部分に、假令善となることは
難しと雖、暫時たゞ暫時善たることは不能のことに非ざるを論ずるもの
ゝ如き言を爲せり。其意を推すに、ピタゴスよ汝の斷言せるが如く、善と
成り、善の状態に存し、善にてあることは、不能の事にして、此は人間に許る
されず、たゞ神のみ、之れを能くす。「人は境遇の勢力の爲めに制壓さるゝ
時は、惡たることを免れ能はざるなり」。今ま若し船を運轉するに當り、境
遇の勢力は果して何人を左右するものぞ。——私人に非ざるべし、何とな
れば、一私人は常に左右され居るを以てなり。夫の己に平伏せるものは
傾倒さるゝものに非ずして、必ずや直立せるものたるべく、平伏せるもの
は傾倒さるゝ能はざるなり。此くて境遇の勢力の人物を倒ほすや、必ず
頼む所あるものにして、頼む所なきものは決して然らざるなり。暴風一
度起るや運轉手も又た如何ともするなく、天候嚴烈なるに當つてや、農夫
も醫師も亦如何んともするなし。何となれば、他の詩人の

「善人は時に善たり時に惡たり」

と云へる如く、善は又た惡となればなり。されども惡人は惡となるとな

善は時に善とな
る

し之れ已に常に悪たればなり。此くて境遇の勢力が頼む所あり、熟練あり、徳義ある人を制壓するに當つてや、悪たらざらんと欲すと雖能はざるなり。而してピタコスよ、汝は「善にてあることは難し」と云へり。而して善となることは難しと雖尙ほ之れ可能のことなるなり。されども善にて在ることは寧ろ不能に屬す。

「何となれば善くなす者は善人にして、悪しく爲す者は悪人たればなり」

と。然りと雖文字に關する善とは如何なる行爲なるか。如何なる行爲は文字に關して人をして善ならしむるや。曰く、文字を知ることなるや明かなり。然らば如何なる種類の善行は、人をして良醫たらしむるや。

曰く、疾病を治療するの術を知ることなるや明かなり。「然りと雖悪しく爲す所の者は悪人なり」。然らば如何なる者が悪醫となるや。曰く、第一には醫師なり、第二には良醫なり、何となれば彼れ又た悪醫となり得るを以つてなり。然りと雖吾等熟練を有せざる人々は如何に多く悪しく行ひたればとて不良なる工匠或は此種のものとなるに止まり到底醫師た

人は永久善たる
こと能はず

不徳の事を求め
ず

ること能はず。而して如何に悪しく行爲するとも決して醫師となること能はざる者は、又た悪醫たることだも能はざるや明かなり。之れと同じく、善人も年月に由り、勞苦に由り、或は其他の理由の爲めに悪となることあり、たゞ眞の悪しき行爲は、知識の失喪なりとす。されども悪人は決して悪となることなし、何となれば彼れ已に悪たればなり。若し彼れ惡となるとせば、彼れ以前に善たらざる可からず。此くて此詩の言へる所は一方には人は永久善たること能はずと雖、時に善となり、時に又た惡となることあり、又た

『最も長く最も良き者は、之れ神々の愛する所』

たるを證せんとするものなり。

是等はピッタコスに關せることにして、尙ほ後文に由つて證することを得べし。彼れシモニデス尙ほ言を加へて謂うて曰く

「故に余は有り得べからざることを望み、完全無缺の人を徒らに、廣き胸なる土地の結果を分得せる者の中に求め、以つて一生を消費するが如きことを爲さざるべし。若し此種の人を發見せ

ば、余は之れを汝に告げん。」

(之れシモニデスの全詩を通じて、ピタコスを攻撃する激烈なる態度となす)。

「然りと雖、惡を爲さざる者は心より余は之れを稱賛し、之れを愛す、神と雖必然に對しては争ふことなかるべし」

と。凡て之れ同一主旨を有せるものなり。何となればシモニデスは、世上心より惡を爲すものあるより、心より惡を爲さざるものを稱揚するが如き、無智の人に非ざるなり。何となれば、余の信する所に由れば、如何なる賢者と雖、何人も心より誤るものあり、又た心より不善及び不名譽の行爲を爲すものありと云ふことなかるべく、夫の不善及び不名譽なる事を行ふ者は、皆な之れ自己の意志に逆つて之れを爲せるものなるを知る。而してシモニデスも決して心より不善を行はざるものを稱揚すと云はざるなり。之れ「心より」なる語は、彼れ自己に適用して其の胸中を云へるものなればなり。何となれば、善人は往々彼れを強めて他人を愛せしめ、又た稱揚せしむることあるを感ずるを以つて、時には心ならざる愛あ

有意無意の善惡に就いて

「心より」の語の用ゐる所

るべければなり。例へば拙劣なる父母に對し、國に對し、或は其他此種のものに對して往々人の感ずる所なりとす。而して悪人は其父母及び國家が或缺點を有する時は、之れを觀て喜び、之れを他人に曝露し、其過失を發見し、之れを惡言し、以つて人々をして與に彼等を事業に携はらざらしめ、又た之れを擯斥せしめんとせり。之れを以つて其缺點を誇大して語り、以つて人々をして、彼等を嫌惡するの感を引きしめんとせり。然りと雖善人は其感情を隠し、自ら制して人を稱美し、人々己を害して爲めに怒ることありと雖、能く其怒を鎮めて人と和睦し、以つて己を愛し、己れの血と肉とを稱贊することを力む。シモニデス、時に心ならずも専制君主及び其他の人を稱贊尊崇したりと思ふこと、蓋之れなきに非ざるべし。而して又たピタコスに對して、自己は批難の意なく、又たピタコスを批難せんとするものに非ざること、を諒承せんことを求むるものゝ如し。故にシモニデス曰く

『何となれば、人若し惡に非ず、或は非常に頑冥に非ず、能く正義を知り、之れ國家の健康なり、而して健康なる心意を有せるに於て

人の缺點を發見せんが爲めに生かさず

適度中庸に満足せん

完全無缺の人なし

は、余は之れに満足し、決して其缺點を發見せんとは爲さざるなり。何となれば、余は他人の缺點を發見せんが爲めに人生に在るに非ざればなり。世上愚味の者甚だ多し」

と。(其意味たる、若しシモニデスにして、他人の缺點を批難するを快とせば、彼れ其缺點を發見するの機會に置しからざるべしと云ふにあり)。又曰く

「若し惡の混入せざる以上は、萬物皆な善なり」

と。されども之れ惡の混入せざる時は萬物皆善なること「黒の混入せざるものは、萬物皆白し」と云ふが如きの意味に非ず、此くの如きは滑稽なりと云ふべし、今彼れの意味する所を考ふるに人若し適度中庸ならんには、彼れ之れに満足し、敢て其缺點を發見することを爲さざるべしと云ふにあり。彼れ曰く

「余は完全無缺の人を、廣き胸なる土地の結果を分得せる者の中に求めどんは爲さざるなり(若し此種の人を發見せば之れを汝に告げん)。此意味に於て余は何人をも稱賛せざるなり。然り

レスボスの方言
の解釋法

と雖かの適度にして、善良に、而して惡を爲さざる者は、余に取つては十分に於て、余は之れを愛し、皆な之れを嘉稱す」

と。(此に注意せよ、彼れレスボス語たる *ἐπιαινεῖν* (嘉稱す)なる語を使用せり、之れピタコスに對して言へるものなればなり——其の

「惡を爲さざる者は、心より余は之れを愛し、皆な之れを嘉稱す」

この「心より」の語は、シモニデス彼れ自身の心よりする意味の文章の位置に置かざる可からず。又曰く、然りと雖、余は又た心ならずも稱賛し、又た愛する者なきに非ず。汝ピタコスよ、若し適度に善にして真なることを語りしならんには、余は敢て咎むる所あらずと雖、たゞ汝が最大なる事に關して真理の外貌を裝ひ、以つて不真理を語れるが故に余は汝を非難する者なり」と。余曰く、プロローグコス及びプロローグゴラスよ、余は之れを以つてシモニデスの詩の真意義なりとなす。

ヒッピアス曰く、ソークラテースよ、君の此詩に對して下したる説明や甚だ善し、余も亦此詩に關して巧妙なる解釋を有す、君若し許可せば余は之れを語らんか。

ソークラテース
論題を始めに歸
へさんとする

詩人を論ずる如
きは常人凡俗の
爲す所

交際には藝妓或
り物を要せず自
己の言語を以つ
て楽しむ

紳士の宴會の理
想

アルキピアデース曰く、否なヒッピアスよ、此は今に非ずして他日に譲りて然るべきなり。今は吾等約に従ひソークラテースとプロータゴラスとの間の問答を進行せしめ、プロータゴラスにして問ふ以上は、ソークラテースをして答へしめ、彼れ若し答へんとせば、ソークラテースをして問はしめざる可からず。

余曰く、余はプロータゴラスが其好む所に従つて、或は問ひ或は答へんことを欲す。然りと雖余は詩歌に關しては已に十分問答したる可ければ、プロータゴラスよ、若し君にして異存なくんば、余が始めに君に質問し居たる問題に立ち歸り、君の助力に由つて其結末を爲さんことを欲す。かの詩人に關する談話の如きは、常人凡俗者流の慰樂なるのみ、彼等蒙昧愚鈍なるを以つて、其飲食するに當つても、彼等自己の音聲及び談話に由つて、互に談話し、互に楽しむことを能くせずして、徒らに吹笛藝妓の相場を高め、高額の金を拂ひて、自家の音聲に非ざる笛の音を備ひ來り、以つて交際の媒助となす。然るに眞に教育ある紳士の會合には、吹笛妓あるなく、舞妓あるなく、彈琴妓あるなく、一の無意味なるものあるなく、又た勝負

の遊戯等あるなく、皆能く自家の音聲を以つて媒介の具となし、相互の談話を以つて満足し、順次に談話し、飲酒は自由なりと雖宴席秩然たり。而して吾等の如き會合、及び吾等の如き身分を重んずる紳士たるものは如何ぞ他の音聲を借り、或は其意味さへも不明瞭なる詩人等を備ひ來るを要せん。而して是等の詩を引用する輩は、十分に其意義を明かにせず、或者は之れを解して是れなりとし、或者は彼れなりとし、而して爭論生じて其正否を證する能はざるなり。教育ある紳士は此の如き慰樂を舍き、互に談話して互に其眞理を試むることをなす。此くの如きは模範なり、君も余も與に之れに倣ひ、詩人等のことは之れを中止し、以つて吾等自家の談話を以つて、各自及び眞理の證明を試むべきなり。若し君問はんとせば余は直に答ふべし、若し君答へんとせば答へ、余をして以前の未完の問題を再び此に提出して、以つて之れを完結するの機會を得る所あらしめよ。

余は此くの如き談話を爲せり。然るにプロロータゴラス、明瞭に其何れを爲さんかを云はざりき。此に於てアルキピアデース、カリアスに向つ

アルキビアデ
ス、プロータゴ
ラスに迫る

ソークラテース
プロータゴラス
に談論を獻づけ
んことを求む

て謂うて曰く、カリアスよ、プロータゴラスが、其答ふるや否やを言ふことを否めるは穩當なりとなすか。余は此點に於てプロータゴラスは穩當ならずと信ず。彼れ進みて論ずるか、或は進みて論ずることを拒むか、當然其意志を吾等に明かにする所あるべきなり。然らばソークラテースは他の人と談話し、又た吾等一同は自由に互に相談話するを得べし。

余思ふに、アルキビアデースの此言に由つて、プロータゴラスは眞に赤面したるが如し。而してカリアス及び其他一同の勸誘に由り、彼れ遂に議論することとなり、余は問ひ、彼れ答ふべしと云へり。

此に於て余は謂うて曰く、プロータゴラスよ、余が君に質問するに就いては、他に目的ありと思ふこと勿れ。余はたゞ自己の難解とせる所を明かにせんとするにあるのみ。余はホメーロスの詩を以つて名言となす、曰く

「兩人與に行く時は、一人は先づ見るものなり」と。

と。之れ人皆な友を有する時は、其行爲、言語及び思想に於て敏捷なるものなればなり。然りと雖若し人

「一人なる時或物を見る」

時は、彼れ直に行いて或人を求め、之れに其發見したる所を告げ、而して其事を確實にせんとす。余は他人よりも、君と共に論せんことを欲す、何となれば、善人の知れるべき所の多くのもの、殊に徳義に關して知れること他に君に優れる人あらざればなり。夫の自ら以つて善人なり紳士なりとするのみに非ず、又た以つて他をして善良ならしむるの力ありとせる者は、君を舍いて將た何處にかある。君は實に、たゞ自己のみ善なるに非ずして、又た以つて他人の善の原因たる人なり。且つ他の「ソフィスト」等は、其自己の業務を隠蔽せりと雖、君は全グレシア人に而して自己は「ソフィスト」なり徳義及び教育の教師なりとの自任を有し、其報酬として金錢を要求せし最初の人なり。故に余は此等の問題に關し、君に依頼して之れを試験し、質問を提出して其指教を仰がずして可ならんや。余は實に之れを爲さざる可からざるなり。而して余は以前に問ひつゝありし問題に關し、君願くは再び余の記憶を新にし、以つて是等を思考することに於て君の助力を得んことを願ふものなり。若し余にして誤ることなしとせ

プロローグオラス
は自任の「ソフィ
スト」金錢の報
酬を求めし最初
の人

プロトタイプ
諸徳中四徳は相
近似せりと雖勇
氣は趣を異にす
となす

は、問題は此くの如くなりしか、曰く、智慧、節制、勇氣、正義、神聖たることは、同一物の五名なるか、或は是等諸名の裡面には、各別々に其名に相當せる固有の官能ありて、相互相同じからざる實體ありとなすべきか。君は前に謂ふて曰く、此五つの名稱は同一物の異名に非ずして、皆な別々の實體を有し、而して是等皆な徳義の部分たり、然りと雖、其關係たるや、黄金の諸部分は、互に相同じく、其全體に對しては其部分なりと云ふが如きに非ずして、顔面の諸部分は其全體の部分なりと雖、相互に同じからず、是等又た異りたる官能を有せる如きなりと。之れ君の前に言ひし所なるが、今も尙ほ此説なりや、余は之れを知らんことを欲す。若し之れ君の今の説に非すとせば、君其變更したる説明を與へよ、然らば余は君の前説を捕ふるの徒勞を爲さざるべし。余は敢へて云はん、君は余を試みんが爲めに或はかの前言を爲せしものならんと。

彼れ曰く、ソークラテースよ、余は答へて云はん、凡て是等の性質は徳義の一部分にして、五者中の四者は或範圍までは同様なりと雖、其第五者たる勇氣は、他の四者とは大に趣を異にせるなり、其證たる、吾等夫の多くの

勇氣とは如何なるものぞ

勇氣とは勇猛なり

知識と大膽と勇氣と

人の、全然不正直に、不神聖に、不節制に、又た無學なるに係はらず、尙ほ其勇氣に於て、著きものあるを見るを以てなり。

余曰く、暫く待て、此は一考を要することなり。君の所謂勇氣ある人とは大膽なることを意味せるか、或は他の種類の性質を謂ふか。

彼れ曰く、然り、勇猛にして、他人の近づくを恐るゝ所に猛進する所の性質を謂ふ。

次に、君は、徳義は善なるものとなし、而して君は其善なるものゝ教師なりと自ら確言するならん。

彼れ曰く、然り、余は云はん、徳義は萬物中の最も善きものなりと。若し然らずと云はゞ、之れ狂なりと謂ふべし。

余曰く、其物一部は善にして一部は悪なるか、或は又た全部善なるか。全部善にして且つ至高の席に於いて善なり。

然らば余に告げよ、井中に潜水するに當り、何人か最も大膽なるかを。余は云はん潜水者なりと。

其理由たる、彼等潜水に關せる知識あるに由るか。

然り、之れその理由なり。

馬上に在つて闘ふに大膽なる者は何人ぞや——乗馬に熟練せるものなるか、或は不熟練のものなるか。

熟練したる者なり。

輕盾を持つて闘ふ者は何人ぞ——輕盾兵なるか、或は否か。

彼れ曰く、輕盾兵なり。君の言ふ所此點なりとせば、其他皆此くの如くにして、其事に關して知識を有せる者は、知識を有せざるものよりも大膽なり、學びたる後は、學ばざる前よりも大膽なり。

余曰く、然りと雖、全然未だ是等を學ばざる人にして、尙ほ且つ是等の事に關して大膽なる人あるを君は見ざるか。

彼れ曰く、然り、此くの如き自信ある人あるを知れり。

是等の大膽なる人は常に勇氣ある人にあらずや。

彼れ答へて曰く、此くの如き場合に在つては勇氣は下等のものたるべし、何となれば吾等のこゝに言へるが如き人等は、必ず狂人たる可ければなり。

然らば勇氣ある人とは如何なる人ぞ。彼等大膽なる人には非ざるか。彼れ曰く、然り、余は尙ほ其意見を持せり。

余曰く、此くの如く知識なくして大膽なる人は眞に勇氣あるに非ずして、狂せるなり。此くの如き場合に於ては、最も知識ある人は亦最も大膽なる人にして、最も大膽なる人は、又た最も勇氣ありと謂ふべく、此見解よりする時は、再び知識は勇氣なりと謂はざる可からざるに至る。

プロクターゴラス答へて曰く、否なソークラテースよ、君は余の言ひし所を記憶するに誤れりとなす。君の余に問ひし時、余は確かに謂うて曰く、勇氣ある者は大膽なる者なりと。然りと雖、君は大膽なる人は勇氣ある人なりや否やは之れを余に問はざりき。若し君之れを問ひしならんには、余は答へて云はん、否な、彼等の凡ては然らずと。素より君は、知識を有せる者は、知識を有せざる前よりは、又た知識なきものよりは勇氣あるを證明したりと雖、余が答へたる所は、君未だ之れを誤謬なりと證明せざるなり。而して謂へらく、勇氣は知識と同一物なりと。然りと雖、此くの如き論法を以つてする時は、君は或は強力は知識なりと想像するに至ると

知識は勇氣なる
か否か

を得ん。君又た、強力は能力なりや否やとの間を起こさば、余は「然り」と答へん、然らば次に又た問ふて、相撲術を知る所の者は、相撲術を知らざる者よりも、角力するに於て一層能力あるに非ずや、又た其術を學びし後は學ばざる前よりも一層能力あるにあらずやと云はんには、余之れに同意すべし。而して余にして之れを許容せば、君は余の許容を利用して、余は知識は強力なりとの意見を有する者なりとの證となすべし。然りと雖、此場合に於ては、余は強力は能力なりとは許容すと雖、此以上、能力は強力なりとは許容せざるべきなり。何となれば能力と強力とは同一に非ず、前者は知識及び狂氣或は忿怒等より生ずるものなりと雖、強力は自然及び身體の健康なる状態より生ずるものなればなり。之れと同じく余は云はん、大膽と勇氣とは又た同一物に非ざるなりと。而して余は勇氣ある人は、大膽なる人なりと云ふと雖、大膽なる凡ての人は、勇氣ある人なりとは云はざるなり。何となれば大膽なることは技術に由つて人間に與へられ得べく、又た能力の如く、忿怒及び狂氣に由つて與へらるべきものなりと雖、勇氣は精神の自然及び健康なる状態より生ずるものなればな

善き生活 悪き生活

り。

余曰く、プロローグよ、君は或人は善く生活し、或人は悪く生活することあるを許容するか。

彼れ然りとせり。

君は、善く生活する人は苦痛悲哀に生活すと思考するや如何ん。

否な。

若し彼れ一生を終るまで楽しく生活したりとせば、此くの如き場合に於ては、君は之れを善く生活したりと思はざるか。

然り余は然りと思へり。

然らば楽しく生活するは善にして、楽しからず生活するのは悪なるか。彼れ曰く、然り、若し快樂なるものは、善且つ尊敬すべきものならんには、然り。

快樂は善

プロローグよ、君は世間一般の人々の言ふが如く、或る快樂なるものを悪と稱し、或る苦痛なるものを善と稱するとありや。——余は、物若し他の種類の結果來らずして、快樂なる以上は、其物を善と稱し、苦痛なる以上

は其物を悪と稱せんぞす。

彼れ曰く、ソークラテースよ、余は一概して快樂は善なり、苦痛は悪なりと斷言し得るや否やを知らざるなり。然りと雖、若し、快樂なるものに善ならざるあり、苦痛なるものに善なるあり、善ならざるあり、又た或ものは善にもあらず、惡にもあざるものありと言ひて之れに誤謬なしとせば、之れ單に余の目下の答へとして、又余の將來の爲めとして大に安全なるべしと信ず。

余曰く、君は快樂に關係し、又は快樂を生ずるものを樂しと云ふか。

彼曰く、然り。

然らば余の意味する所は、是等のものゝ快樂なる以上は是等のものは善なりと云ふにあり。而して余の問題中には、快樂は其物自身に於て善なりと云ふことをも含有すべし。

彼れ曰く、ソークラテースよ、君の得意なる語法に由りて、吾等此事に關して研究せん。而して研究の結果にして、快樂と善とは眞に同一なることを證明すとせば、吾等同意一致すべしと雖、若し夫れ然らざるに於ては、吾

等相論すべきなり。

余曰く、討究は君より之れを始めんか、或は余より之れを始めんか。

彼れ曰く、先づ君より始めよ、君は議論の發起人なればなり。

余曰く、余は説明の爲めに一例を使用して云はん。假定して今人ありて或他の人の健康或は其他の身體の性質を診察せんとするに當り、彼れ其人の顔面を見、指端を見、而して曰く、尙十分診察し得んが爲めに胸部及び背部を露出せよと。此くの如きは此研究に於て余の願ふ所たるなり。余は今ま君の善と快樂とに關する意見を知れり、而して君に謂うて曰はん、フロートゴラスよ、君の心を開きて、知識に關して君の意見を發表し、以つて余をして君の意見は一般の人々の意見と一致せりや否やを知らしめよと。今世上の人々の知識に關する意見を見るに、知識は之れを力、法則或は命令の原理となさずして、其之れに對する觀念たるや、人は知識を有し得ると雖、其の知識は、忿怒、快樂、苦痛、戀愛、或は恐くば又た恐怖の支配する所となりて、知識は宛も奴隸の如く、左右に曳き廻はさるよものなりとなす。之れ君の意見とする所なるか、或は君は知識を以つて、高尙

知識は命令者が
奴隸か

にして命令の力を有し、決して之れに勝つべからず、若し人善惡の區別を明かにする時は、決して知識に反して何事をも爲すことを許さず、而して彼れの方となりて彼をして智慧の命令を行はしむるものとなすか。プロークトラス曰く、ソークラテースよ、余は君に同意なり。單に同意なるのみに非ず、余は又た他人に優りて、智慧及び知識は人間の有するものと至高なるものなりと云はざる可からざるなり。

余曰く、善し、又た眞なり。然りと雖、世人の多數は此意見を有せず、彼等普通に最も善き所のものを知れりと想像し、而も彼等行ひ得る時にも之れを行はざるものなることは、君之れを知れりや否や。余は此理由を問ひし時、其の人等の多くは曰く、此くの如く行爲する者は、之れ苦痛、快樂、或は余が今述べし如き種々の感情の或ものゝ爲めに打勝たるゝなりと。彼れ答へて曰く、然り、ソークラテース、人間の誤り居るは單に此點のみに止まらざるなり。

然らば假定して、君と余と、かの人々の所謂快樂に打勝たるゝ所の感情なるものゝ性質は如何なるものなりや、又た彼等の言へる如く、彼等何故

「快樂に打勝たる」とは如何なることを意味するか

に善きものを知りて、而も尙ほ悪しきものを撰ぶやと云ふの理由を彼等に教ふることなく、而して彼等に告げて、友人、諸君、諸君は誤り、且つ眞ならざること語りよと云はんには、彼等答へて曰はん、ソークラテース及びプロローグラスよ、若し精神の此感情は、快樂の爲めに打勝たる」と謂はざる時は、此事如何んがなる、君は如何なる名稱を以つて之れを呼ばんとするか。吾等に其事を告げよと。

されどもソークラテースよ、吾等何ぞ衆人の説を心に介するのあらん。彼等はたゞ彼等自身に關して起りたる所は、何事も之れを言ふに過ぎざるなり。

余答へて曰く、余は、彼等の意見も亦、勇氣と徳義の他の諸部分との關係如何んを知るに就いて、吾等を補ふ所ありと信ず。君若し余の言ふ所に同意ならんには、余は最も善く眞理を發見するを得べしと思ふ方法に導かん。君同意なりや否や。君若し之れを好まざれば決して意に介すること勿れ。

彼れ曰く、君の言や正し、君の始めたる如く、其言を進行せよ。

余曰く、吾等又た假定して、彼等其質問を繰り返へして云ふとせんか、曰く、吾等の言語たる、快樂に打勝たると謂ふことは君等如何に之れを説明するかと。余は彼等に此く答へて云はん、曰く、然らば聽け、プロータゴラス及び余は之れを諸君に證明すべし。かの快樂の爲めに打勝たるとは、人若し飲食其他愉快なる肉體上の欲望が、其惡なるを知るも而も之れに放蕩して之れに打勝たるとことにはあらざるかと。彼等之れを承認せん。而して又た假定して君と余と進みて再び彼等に問うて、諸君が是等のものを惡と云ふは其の理由如何ん、或は是等は愉快なるものにして、其瞬間に快樂を與ふるが故に惡なるか、或は又た是等は疾病を引き起し、貧困に陥らしめ、其他又た此種の惡を生ずるが故に惡なるか。若し是等のものにして毫も惡しき結果を生せず、たと如何なる種類の性質なりとも、兎に角快樂の意識を與ふるのみなりとするも、尙ほ之れ惡と謂はざる可からざるかと云はんには、彼等は此く答ふるには非ざるか、曰く、是等のものは直に快樂を與ふるが故に惡しきに非ずして、たと其後に生ずる結果たる疾病或は此種の如きものあるに因つて惡たるなりと。

悪結果を生ずる
快樂は悪

プロローグ曰く、余は信ず、世人一般必ず此く答ふべしと。

若し疾病を惹き起すとせば是等のものは苦痛を生ずるに非ずや、若し
貧困に陥らしむるとせば、是等のものは又た苦痛を生ずるに非ずや、若し
余の見にして誤らずとせば、彼等人々亦此の言に反對せざるべし。

プロローグ然りとなす。

然らば余は余の名と君の名とを以つて彼等に答へて云はん、曰く、諸君
は是等のものは苦痛に終り、又た吾等の他の快樂を奪ひ去るの理由以外、
別に其の悪なるの理由ありと思ふかど。彼等人々又た之れを承認すべ
し。

吾等兩人亦彼等の承認すべきを信じたり。

次に余は反對の點より疑問を提出して云はん。友人諸君、諸君が善を
以つて苦痛なる者なりと云ひしは、之れ醫術上の善を謂へるものなるか、
體操の練習及び兵役に服することを謂へるものなるか、或は醫師が灼烙
し、切斷し、服藥せしめ、又た禁食する等のことを謂へるものなるか。是等
は善なりと雖苦痛なるものなるか。彼等人々之れを承認すべきや如何

苦痛にして善き
ものありとの意
義

結果の善

ん。

彼れ承認すべしとなす。

而して諸君が是等を善なりと謂ふは、直接なる最大苦痛を生ずるが故なるか、或は後に至つて是等は能く人を健康にし、身體を強壯にし、一國を救ひ、帝國を盛んにし、富強を致さしむるに由るか。若し余の見る所にして誤らずんば、彼等人々必ず之れに同意すべしと信ず。

彼れ同意せり。

而して是等のものを稱して善なりと云ふは、其能く快樂に終り、苦痛を除却する故に外ならずとするか、或は快樂苦痛以外、他に是等を稱して善と謂ふ所の標準ありとなすか。彼等人々は此他に標準なしとするに同意すべきや否や。

プロータゴラス曰く、意ふに彼等之れに同意なるべし。

諸君は快樂を以つて善なりとして之れを追求し、苦痛を以つて惡なりとして之れを避くるか。

彼れ然りとなす。

快樂苦痛の結果以外他に善惡の標準なし。

快樂苦痛の大小比較

然らば諸君は苦痛は悪なり、快樂は善なりとするものにして、而も或快樂にして、却て他の大なる快樂を失はせ、又は其快樂が與ふる快樂よりも一層大なる苦痛を與ふる時、諸君は此快樂をも悪となす。然りと雖若し諸君にして、或他の目的或は標準に關して、快樂を以つて悪となすには、必ず其標準を吾等に示めすことを得べしと雖、諸君は之れを示めすことはざるべし。

フロートゴラス曰く、然り、彼等其標準を有せりとも思はれず。

苦痛に關しても同じく又た此く云ひ得るには非ざるか、諸君は苦痛が其與ふる苦痛よりも他の一層大なる苦痛を去り、或は苦痛よりも一層大なる快樂を與ふる時は、此苦痛をも稱して善なりと云へり。而して諸君が此の現在の苦痛を稱して善なりと云ふに就いて、快樂、苦痛以外別に其標準ありとせば、諸君は其の如何なるものなりやを吾等に示めす所あるべきなり。然るに諸君は能はざるなり。

フロートゴラス曰く、然り、其は真なり。

余曰く、假定して、世界は余に向つて此く言ふとせんか、曰く如何なれば

快樂苦痛の名稱
に代へて善と惡
との二名稱を用
て説明せん

諸君は此問題に關して此く種々の方法を用ひ多言を費やすことを爲すやと。友人諸君、若し幸に許るさば余は答へん、然りと雖第一此に「快樂に打勝たる」との意味の困難有つて存し、全體の議論皆な此に歸するなり。而して若し諸君にして惡を説明するに苦痛を以つてせず、善を説明するに快樂を以つてせず、此他に説明することを得るとせば、今と雖諸君尙ほ前言を撤回するを得べし。然りと雖余は信ず、諸君は苦痛あらざる快樂の生活を得るを以つて満足せりと。諸君若し満足し、且つ如何なる善惡と雖、快樂苦痛に終らざるものあるを證明すること能はずんば、其結局する所を聽け——若し之れ真ならんには、然らば余は言はん、人が惡を避け得る時と雖、快樂の爲めに誘惑攪亂せられて、知りつゝも惡を爲すと云ひ、又は人は其時快樂に打勝たれて知りつゝも善を爲すことを好まざるありと斷言するが如きは、實に之れ不合理のことなりとす。吾等今若し快樂、苦痛、善、惡等の種々の名稱を廢すとせば、其の滑稽なるは甚だ明瞭となるべし。而して二つのもの存するを以つて、吾等之れを二個の名稱を以つて呼び、始めに善及び惡を以つて之れを言ひ次に快樂と苦痛とを以つ

然らば打ち勝た
るとは何に由つ
て

善に由つて打
勝たる

其滑稽

て之れを言はん。此く此事を前定し置き、而して余は進みて云はん、人は自ら悪を爲せることを知りつゝも悪を行ふことありと。然りと雖或者問ふて云はん、其故如何んど。曰く彼れ打ち勝たれたるが故なりとは第一の答へなるべし。質問者尙ほ進みて云はん、曰く、何に由つて彼れ打ち勝たれたりやと吾等今や、快樂に由つて「打ち勝たれたり」と言ふこと能はざるなり、何となれば、快樂なる名稱は前已に善と云へる名稱と交換されたるを以つてなり。之れを以つて吾等の答へ得る所は、たゞ彼れ打ち勝たれたりと云ふべきあるのみ。然るに彼の人之れを打ち消して問ふて云はん、「何に由つて「打ち勝たれたりやと。吾等善に由つて」と答ふるあるのみにして、吾等實に此く答へざるべからざるなり。然りと雖吾等の質問者若し大言壯語者ならんには、冷笑しつゝ謂うて云はん、「此は實に滑稽なり、人が善に打ち勝たれたるが爲めに、其の爲すべからざる時に於て、悪と知りつゝ之れを行ふが如きは實に滑稽なり」と、而して問うて云はん、「此は善は悪に勝つの價值あるに由るか、或は價值なきに由るか」と。吾等明瞭に之れに答へて云はん、此は價值なきに由つてなり、何となれば、若し之れ

價值あらんには、吾等の言へる如く、かの快樂に打勝たれたる者は惡に非ざりしなるべしと。彼れ答へて云はん、曰く「然りと雖、如何なれば善は惡に對して價值なく惡は善に對して價值なきや」と。眞の説明は是等は相方より見て其割合の正を得ず、大に過ぐるか小に過ぐるか、多に過ぐるか、少に過ぐるかの點にはあらざるか。之れ吾等の否む能はざる所。君若し打ち勝たれたりと云はんには、彼れ此く云はん「諸君の意味せる所如何ん。諸君は少善と交換して一層大なる惡を擇ばんとするか」と。此に於て吾等善惡の名稱と交換するに快樂、苦痛の名稱を以つてし、前の如く人は惡と知りつゝ之れを爲すと云はずして、人は苦痛と知りつゝ之れを行ふ、之れ、彼れ快樂に打ち勝たれたるに由るものにして、快樂は打ち勝つる價值なきものなればなりと言はんか。快樂と苦痛との關係たるや、たゞ之れ過不及にして、是等の大に過ぎ、小に過ぎ、多に過ぎ、少に過ぐる等、此程度の問題以外に尺度標準果してありや如何ん。若し人ありて、然り、ソークラテース、然りと雖、直接の快樂は將來の快樂苦痛とは大に異なるものなり」と云はんには。——余は之れに答へて云はん、曰く、是等は快樂苦痛の理由

尚ほ快樂苦痛の
み

快樂苦痛の大小
多少遠近の計量

以外、別に異なる標準ありや否や、決して他に標準あらざるべし。而して君は、熟練なる權衡使用者の如く、快樂、苦痛、近き、遠きを天秤に載せ、是等を秤り、而して何れか其量に過不及あるを言ふなるべし。君若し快樂と快樂とを秤る時は、勿論多にして大なる方を取らばべく、若し苦痛と苦痛とを秤る時は、勿論少にして小なる方を取らばべく、若し快樂と苦痛とを秤る時は、快樂が苦痛よりも、多き行爲を取らばべく、而して其快樂の、近きものは遙かなるものに勝り、遙かなるものは近きものに勝るとも、孰れなりと可なり、快樂多き方を取らばべく、而して快樂よりも苦痛多き行爲は之れを取らざるべし。友人諸君、此は眞理なりと許容するや否やと。余思ふに彼等人々之れを否み能はざるべし。

プロタゴラス余の言に一致せり。

然らば君若し之れを許容せば余は云はん、幸に余の問ふ所に答へよ。

今ま、同一大さの物も、近き時は大と見へ、遠き時は小と見ゆるに非ずやと云はゞ彼等之れを承認すべし。厚さ及び數に於ても同じく、音響に於ても、其の物同一なりと雖、近き時は大にして遠き時は小なりと云はゞ、彼等

又た之れを承認せん。假定して、幸福は大なる方を選び、又た之れを爲すに由つて成立すとせば、人間の生命を救助する原理たるべきものは何物ぞや。計量するの術は、生命救助の原理たるべきか、或は外観の力は夫れなるか。此後者は之れ詐欺の術にして、吾等をして彼方此方にさまよはせ、行爲に於て、事物に於て、大となく小となく、一を選び、他に悔むことを爲さしむるものにあらずや。然りと雖計量法なるものは、外観詐欺の術をして其力を失はしめ、真理を示めし、人を教へて其精神をして遂に真理中に安心を得しめ、以つて吾等の生命を救助すべし。人間一般此事を爲さしむる術を認めて計量法なりと謂ふには非ざるか。

彼れ曰く、然り、之れ計量の法なり。

又た假定せんに、若し人間生命の救助は奇數偶數の撰擇なるか、或は又た人間各自或は自他に關して、遠近大小を撰擇するにありとせば、人命救助の原理は果して、何物なるべきぞ。之れ知識にはあらざるか——若し之れ過不及の問題ならんには、此は計量の知識にして、若し之れ奇數偶數の問題ならんには、此は數の知識にあらずや。世人は、之れを承認するなら

んか、或は否定するならんか。

プロロータゴラス、世人の之れを承認することを許容せり。

然らば、友人諸君、余は彼等に云はん、人命救助なるものは、快樂苦痛の正當なる撰擇に因るものなるを發見せり。——其多少、大小、遠近等を撰擇するに當りて、此の計量なるものは、相互の關係上過不及及び均等の計慮ならざる可からざるにはあらざるか。

此は否むべからざる真理なり。

而して此計量法なるものは、技術と同時に又た學術たるは否むべからざるにあらずや。

彼等之れに同意すべし。

此技術或は學術の性質は、將來の考慮の問題たるべく、此くの如き學術の存在の證明は諸君が、余及びプロロータゴラスに問ひたる所の質問に對する十分の答辯たるなり。諸君が質問を爲せし時、諸君之れを記憶せるか——吾等兩人は知識より有力なる者他に之れなしと謂ふ意見に於て一致し、而して其の知識たるや、何物に關したる智識なりとも必ず快樂及び

快樂に打ち勝た
るとは無智のこ
となり

無智は選擇の誤

快樂に打ち勝た
るとの意義の決
解

其他一切の物に勝らざる可からずとせるとを。然るに其時諸君は曰く、快樂は往々にして知識ある人にも勝てりと。而して吾等之れを許容することをお否みし時、諸君は曰く、あふプロータゴラス及びソクラテース、若し之れ快樂に打ち勝たれたるものなりと云ふに非ずんば、然らば此は果して何ぞや、君等は之れを何とか謂ふと。若し吾等其時直ちに、之れ「無智なり」と云はんには、諸君は必ず吾等を笑ひたるなるべしと雖、今若し吾等を笑はゞ之れ諸君等自己を笑ふものに外ならざるなり。諸君等前きに許容して、人は快樂苦痛の選擇に誤ることありとせり、之れ知識の缺損より、彼等の善惡の選擇に誤りしなり。諸君等又た許容して、人は單に一般の知識の缺損のみに非ず、又た計量と稱する所の特殊の知識の缺損より其選擇を誤ることありとなせり。諸君等又た選擇を誤る所の行爲は、知識なきより之れを爲し、無智なるより之れを爲すものなることを覺知せり。之れ快樂に打ち勝たると云ふ言語の意味にして、――要するに之れ無智なり、之れ誤謬の最大原因たるなり。而して吾等のプロータゴラス、プローデコス及びヒッピアス等は皆な無智者を治療して智者たらしめん

「ソフィスト」は
無智を醫すと稱
するもの

とする醫師たることを宣言せり。然るに汝等無智は原因に非ずとの誤謬なる思想を有せるの輩は、是等のものゝ教師たる「ソフィスト」諸子に學ばんとして自ら行くこともなく、又た其子弟をして就いて學ばしめんとも爲さざるべし。諸君其金錢に注意し、一錢と雖之れを「ソフィスト」の人と與ふることを勿れ。而して其結果や諸君は公私の生活上劣悪の人として終らんのみ——と、之れ吾等の世界一般に對して答ふる所なりと想像せんと欲す。然りと雖余の「爾ヒツピアス、爾ブローヂコス及びブロータゴラス等に聽かんとする所は、議論は吾等のものたると共に、又た諸君のものなれば、諸君は余の言を以つて眞理なりと思考するか、或は眞理ならずと思考するかに就いてなり。

彼等一同余の言を以つて全然眞理なりと思考せり。

余曰く、然らば諸君は、快樂は善にして、苦痛は悪なることに一致せり。

然りと雖吾友ブローヂコスに願ふ所は、君は或は快樂、歡喜、喜悅等諸名詞を區別して論せんと意あるべしと雖、今ま此には此論を爲さざらんことなり。彼れ如何なる名稱を以つて是等と呼ぶとも其は隨意と爲し、余

人樂ならしむる
行爲は尊敬すべ
く、又た有益な
り

人は大善を爲し
得る時他の事を
爲すべきものに
非ず

は君に問はん、最も尊敬するブローヂコスよ、願くば余の意味にて之れに答へよ。

ブローヂコス笑ひつゝ承諾し、人々亦笑ひたり。

余曰く、然らば吾友、君は此れに就いて何と云はんとするや。凡て生活をして苦痛なく、快樂ならしむる傾向ある所の行爲は尊敬すべく、又た有用なりと謂ふべきか。尊敬すべき事業は又た有用にして善なりと謂ふべきか。

彼れ許容せり。

余曰く、若し快樂は善なりとせば、何人たりとも、其一層善きことを爲し得る時に當り他の或事は之れに優りて善なりとし、又た之れを得べしとの觀念或は確信を、以つて、何事をも之れを爲さざるなり。人の彼れに劣れるは、之れたゞ無智に由るものなると、猶ほ人の彼れに優れるは、之れたゞ智慧たるが如きなり。

彼等一同同意せり。

無知とは誤謬なる意見を有せるが爲めに、重要なる事件に於て欺かる

ふことにあらずや。

彼等一同全然同意せり。

余曰く、然らば何人と雖、心より惡、或は惡と思ふ所のものを求むるものなし。善よりも惡を擇ぶは之れ人性にあらざるなり。故に人若し兩惡中是非とも其一を取らざる可からざる時は、其小なる方を取り得る時、誰か其大なる方を取らんや。

一同余の一語一句盡く之れに同意せり。

余曰く、恐懼或は恐怖なるものあり、プロローグコスよ、余は此恐懼或は恐怖を定解して惡の豫想なりとなす、君は此定解に同意なりや否や、之れ特に余の聽かんとする所なり。

プロローグコス及びヒッピ阿斯之れに同意したりと雖、プロローグコスは曰く、是れ恐懼なり、恐怖に非ずと。

余曰く、プロローグコスよ、其區別は余の間ふ所に非ず、たゞ余の間はんとする所は、若し余の此の斷定にして眞ならんには、人は其必要な時、其恐るゝ所のものを求むるや否やと云ふにあり。若し之れを求むとせば是

心より惡を求む
とは人性に非ず

れ已に前定したる所の、其の恐るゝ所のものは悪なりとのことに矛盾せるには非ざるか。而して何人と雖、好んで其悪なりと思ふ所のものを求むるものはあらざるべし。

一同又た此言を然りとせり。

余曰く、然らばヒッピアス及びプローチコスよ、余は是等を以つて余の前提とせん、而して、プロータゴラスに願ふ所は、其初めに言ひし所は果して正當なりや否やを説明せんことなり。されども最も始めに言ひたる事には非ざるなり、其最も始めに言ひし所は、君も記憶せるが如く、徳義に五部分あり、是等皆な一として相同じきものなく、皆別々に其官能を有すと云ふにあり。然りと雖、余は今ま之れに就いて聽かんとするに非ずして、余の聽かんとする所は、其の後の断定たる是等の五徳中、四者は殆ど相近似せりと雖、獨り第五者たる勇氣は他の四徳とは大に異れりと云ふにあり。而して之に就きて彼れ論證して曰く、ソークラテースよ、君は人間中或最も不敬神なる、不正直なる、不節制なる、又た無智なる輩が最も勇氣ありと稱せらるゝ人々の中にあることを見ん。之れ勇氣は他の諸徳と大

に異なるの證なりと。其時余は彼れの此言に驚きたるが、今余は尙ほ一層驚けるは余が君と共に此事を論じたることとなす。之れを以つて余は彼れに問ふに勇氣とは大膽の事なりやを以つてせり。彼れ答へて然りとなし、又た勇猛直進の人なりとせり。(フロークタゴラスよ、之れ君の答へたる所なるは記憶せる所ならん)。

彼れ之れを承認せり。

余曰く、然らば勇氣ある人は何に向つて直進するやを余に教へよ——或は怯懦なる輩と同一なりや如何ん。

彼れ答へて曰く、否。

然らば其れと異りたるものに對してなるか。

彼れ曰く、然り。

然らば怯懦なる輩は安全なる所に進み、勇氣ある者は危険存する所に進むなるか。

然り、ソークラテース、之れ人々の云ふ所なり。

余曰く、夫れ然り、然りと雖勇氣ある人は果して何に對して直進するか

勇者は何に向つて直進するか

— 危難を危難と知りつゝ之れに向つて直進するか、或は危難ならざるものに對して直進するか。

彼れ曰く、否な、其の不能なることは君の前論に由つて已に證明されたり。

余答へて曰く、其は又た眞なり。而して若し此事の證明にして正當なりとせば、何人も其危難とせる所に向つて直進するものはあらざるべし。何となれば若し人自制力を缺損し、徒らに危難に面するが如きは、之れ無智の人たるべければなり。

彼れ之れを承認せり。

然りと雖勇氣ある者も怯懦なる者も、其の自信せる所の事に面して直進するや同じく、此の點より見る時は怯懦なるものも勇氣あるものも、同一なるものに面すと云ふも可なり。

プロクターゴラス曰く、然りと雖ソークラテースよ、夫の怯懦なる輩の行く所と、勇氣の人の行く所とは其趣を異にし、例せば、勇者は戰場に直進すと雖、懦者は直進せざるなり。

余曰く、戦場に直進することは敬すべきことなるか、或は敬すべからざることなるか。

彼れ曰く、敬すべきことなり。

若し之れ敬すべきことなりとせば、其の善なるは已に前定したる所なり、何となれば敬すべき行爲は、吾等已に善なりと許容したればなり。之れ眞理なり、之れ余の常に執れる所の説なり。

余曰く、然り、然りと雖是等兩者の中君の言へる如く、戦場に直進するを厭ふものは何れぞや、善にして敬すべきものなるか。

彼答へて曰く、怯懦の徒なり。

余曰く、然りと雖善にして敬すべきものも亦愉快なるにあらずや。

彼れ曰く、然り之れ確かに許容せしことなり。

然るに怯懦の輩は知りつゝも一層高尚なる、一層愉快なる、又た一層善良なる方に往くことを嫌ふものなるか。

彼れ曰く、其事の許容は、已に吾等の前の許容中に含有されて存す。

然りと雖勇者も又た一層善良なる、一層愉快なる、一層高尚なる方に面

善と愉快

懺者は愉快なる
ことを嫌ふか

して往くにあらざるか。

然り、此は許容されざる可からず。

勇者は卑劣なる恐懼、卑劣なる大膽を有せざるか。

彼れ答へて曰く、真に然り。

卑劣に非ざれば、尊敬すべきものなるか。

彼れ然りとなせり。

若し尊敬すべしとせば之れ善なるか。

然り。

されども之れに反して、懦者、愚勇者、狂者等の大膽は卑劣なるか。

彼れ然りとなせり。

而して是等卑しむべき恐懼及び大膽は、無智及び無教育に生ずるものなるか。

彼れ曰く、真に然り。

然らば懦者の行爲する心意は、君は臆病なりと稱するか、或は勇氣なりと稱するか。

彼れ答へて曰く、余は之れを臆病なりと云はん。

而して彼等の臆病なるは、其危難に關して無智なるに由るは明かなるにあらずや。

彼れ曰く、確かに然り。

故に彼等無智なるを以つて怯懦なるか。

彼れ同意せり。

而して彼等の怯懦なるは、其心意の臆病なるに由るものなるは君の許容する所なるか。

彼れ同意せり。

然らば何物は危難たり、又は何物は危難たらざるやを知らざるものは臆病なるか。

彼れ首肯せり。

余曰く、然りと雖勇氣と臆病との異なるは確實なり。

然り。

而して何物は危難たり、又は何物は危難たらざるやを知ることとは、其れ

等を知らざることと反對なるにあらざるか。

彼れ再び之れを首肯せり。

而して是等を知らざることとは臆病なるか。

彼れ澁りながら首肯せり。

而して何物が危難たるや危難たらざるやを知ることとは勇氣にして、是等に關して無智なるとは反對なるか。

問答此點に至つてプロータゴラス首肯せずたゞ無言なりき。

余曰く、プロータゴラスよ、如何なれば君は承諾も爲さず、又反對をも爲さざるや。

彼れ曰く、議論は君獨り自ら之れを終結すべし。

余曰く、余は今またゞ一事問はんとすることあり。——君は今まも尙ほ最も無智にして而も最も勇氣ある人ありと思ふや如何ん、之れ余の知らんと欲する所なり。

ソークラテースよ、君は余をして答へしめんとするに甚だ熱心なる人なるかな。余は爲めに君を満足せしめん、而して云はん、此は兩立するこ

無智にして勇氣ある人あるか

無智と勇氣とは兩立せず

ソークラテース
の此長論談の精
神

プロータゴラス
は徳義は教へら
るべきものとな
し、ソークラテ
ースは之れを否
む

徳義は教へられ
ずとするソーク
ラテースは徳義
を以つて知識と
なし

徳義は教へられ
得とせるプロ
ータゴラスは徳義
を以つて知識以
外のものとなす

議論の目的と論
證の進行とは兩
人互に行き違へ
り

と能はざるものなりと余は信ずと。

余曰く、余が此に議論を繼續したる唯一の目的は、徳義及び徳義の主要なる性質の關係を確知せんが爲めなり。今ま若し此問題にして明解されんには、兩人長時間を費やして、君は徳義は教へらるべきものとなじ、余は之れを否定したる討論も、亦自然に明瞭なることを得ん。然るに此の議論の結果を見て、余は實に奇異なりと感ずるものなり。今ま若し、議論なるものにして、人間の音聲を有するものならんには、吾等を嘲笑して此く云はん。曰く、プロータゴラス及びソークラテースよ。君等は奇妙の人なるかな一方には徳義は教へらるべき者に非ずとなじ、一方には之れに矛盾して凡ての者皆な知識なり、正義も節制も、勇氣も皆知識なりと云へり。其是等を知識なりとなすの説は、徳義は教へらるべきものなるを證明するものたるなり。今ま若しプロータゴラスの證明せんと力めたるが如く、徳義は知識よりも他のものなりとせば、此は徳義は教へられ能はざるものたるや明かなり。然るに若し汝ソークラテースの論證せんとしたる如く、徳義は全然知識なりとせば、余は徳義を以つて教へられ得べ

きものなりと想像せざる能はざるなり。プロロータゴラスは始め徳義は教へらるべきものとして出立したりと雖、今は却つて徳義は知識よりも他のものなりと證明せんことに勞せり。若し然りとせば、之れ徳義は全く教へられ得べからざるものたるなりと。扱てプロロータゴラスよ。余は思想の此の恐るべき混亂を見て之れを明瞭にせんとするの心切なり。故に余は徳義とは如何なるものなりや、徳義は教へられ得べきものなりや否やを論じ續け、以つて傳説中のエビメーテウスが、吾等人間を忘れたるが如く、又た議論に於て吾等を躓かせ又た吾等を欺くこと勿らじめんと欲せり。而して余は君の談話中なるエビメーテウスよりもプロメーテウスを好むものなり。何となれば余自身の處世上、プロメーテウスの管理の下にある所の是等の問題に關して多忙なる時は、何時なりとも彼れを使用すべければなり。若し君にして異議なしとせば余の始めに云ひしが如く、此研究に於て幸に余に助力する所あれ。

プロロータゴラス答へて曰く、ソークラテースよ、余は卑しむべき性質の者に非ず、而して世間より羨まるゝ有名なる人等の最も後に残れる者な

り。余は君が議論に熱心なると、又た其行爲を稱賛禁する能はざるなり。余の屢々言へるが如く、余は知れる人々の内、確かに君と同年齢の人々の内、最も高く君を稱揚す。而して余は信ず、君は哲學に於て最も卓絶の人となるべしと。吾等後日又た此問題に就いて論ずることあらん。今は吾等話頭を他事に轉せん。

余曰く、若し君の意然りとせば、其如く爲さんのみ。余も亦前に言へる如く、他に約束したる時を遅れたり。たゞ敬するカリアスの懇願を拒む能はずして留まりしなりと。此れにて對話を終り、吾等は歸途に就けり。

エウチュデーモス



エウチュデーモス解題

本篇の性質

本篇はプラトーンの著書中、プラトーンの最も滑稽詩人に近き趣あるものなり。全篇實に滑稽の氣に充ち、老齡に達せるソークラテースと二人の「ソフィスト」との對照の如き最も顯著なるものにして、其の反語諷刺を以つて「ソフィスト」を嘲弄せるや、假令直接露骨に非すと雖、寧ろ其切痛なるものありとなす。

本篇の筋

本書の立て者はデオニソドロロス(兄)及びエウチュデーモス(弟)兩兄弟の「ソフィスト」なり。此兩人はヒオス人にして、ソリイより放逐せられ、以前に一度アテーナイ市に出現し、修辭學と擊劍術とを教授すと公言し居たるとありしが、今回再びアテーナイ市に來り以前の學藝に加ふるに戰鬥の一新法即ち言語に出つて闘ふの術を以つてし、又た最も短少の時日に於て、最も巧妙なる方法に由りて徳義を教へ得るとを公言せり。此に於て常に徳義の教師を得んことを目的とせるソークラテースは、大アルキピアデーモスの孫なるクレイニアスと云へる少年、此兩兄弟の教へを受けん

とせるを機とし、兩兄弟と問答せり。而して本書は、ソークラテースが其問答の結果を友人クリトーンに語ることを記るせるものなり。

人々群集せり、其の中央にソークラテース、エウチユデーモス兄弟、少年クレイニアス及び其の愛者クテシッポス、及び其の他の人々あり。兩兄弟のクレイニアスに教ふるや、問答を以つてすとなし、クレイニアスに問ふに學問する人は智者なるか、否か、學ぶとは知れることを學ぶか、知らざることを學ぶか等を以つてし、クレイニアス數回其答ふべき所、當を失し、其時毎に、兩兄弟の頌贊者等の聲を揚げて笑ふ所となり、大に失望の趣あり。

ソークラテース之れを見て、クレイニアスの失望せんことを恐れ、クレイニアスに説明するに、此兩兄弟の今まで爲し來りし問答は、實は眞面目のものに非ず、一種の遊戯にして、ソフィストの儀式様のものと見て可なり、而して此儀式は以上の問答にて終りたれば、是よりは兩兄弟は眞面目にクレイニアスに教ふる所あるべきを以つてし、且つクレイニアスと問答するは此くの如くすべしと、例を兩兄弟に示めせり。

其問答の大要は人々の善を欲すること、善とは善物を有すること、徳義

及び知識の必要等を論じ、又た善き幸運は最も大なる善なりとし、されども已に知識を有せば之れ善き幸運にして其他の幸運を要せざるにあらずやとなし。又た單に諸善物を有するのみに非ず、之れを正用せざれば善も善たらず、其正用を得しむるは知識なり。所謂諸善物は其物自身に善にも非ず、惡にも非ず、知識及び智慧こそは眞の善にして、無知と愚昧とは眞の惡なりとなし、結論して吾等知識を得ざる可からず。人は哲學者乃ち知識を愛するものたらざる可からずとなし、クレイニアス、然り之れを事とせんと答ふ。

ソークラテース自家の使用せる問答法の例を興へし後、兩兄弟徳義の奨励なるものを始む。之れに前き立ち兩兄弟ソークラテースに謂うて曰く、君はクレイニアスの智者たらんことを欲するか、前に未だ智者たらざる者を、今ま智者たらしめんと欲するは論理上クレイニアスの滅亡を希ふものなり。クレイニアスの愛者も其他の人々も皆な之れを希ふものと云はざる可からずと。

クレイニアスの愛者クテシッポス此言を聽きて大に怒り、無禮なり不作

法なりとして大に論ず、然るに直に兩兄弟の詭辯に由つて攪亂されしと雖、彼れ尙ほ怒氣盛なり。此に於てソークラテース滑稽の言を以つて彼れをなだめたれば、クテシッポス敢て怒れるに非ず、たゞ衝突したるのみなりと言へり。此に於てデオニュンドーロス詭辯を弄して、世上衝突なるものあるなしと論じ、クテシッポス答ふる能はざりき。

世上衝突なるものなしとの言を聴きたるソークラテースは、進みて其説明を求め、又た誤謬、無智、虚偽なるものなしとするか、若し然らんに、兩兄弟は何を教へんとするやと問ふ。兩兄弟ソークラテースの言を以つて、毫も彼等自ら言ひし所に「加ふる所なし」となす。ソークラテース、其「加ふる所なし」なる言の意味を問ふ。彼等答へて曰く、言語は生けるものに非ず、生けるものに非ざるものは意思或は意味あることなしと。クテシッポス、彼等兩兄弟の詭辯を切齒し、再び怒を破裂せしめんとせしと雖、ソークラテース之れを制し、又た少年クレイニアスと談話を新にせり。而して曰く、此兩ソフィストはエジプトの妖術者プロテウステウスの自己の形状を變幻するが如きを以つて、ソークラテースはメテラオスの如く、彼等兩人

が其本體本性に反へらんことを希望せざるを得ざる由を謂ひて、此兩人の言論の一貫せざるを嘲弄せり。

ソークラテース、クレイニアスと論じて、遂に哲學は研究せざる可からずとの結論に達せり。而して哲學とは知識を得るとにして、知識は有益なるものたらざる可からず。而して知識と實用とは一致するものたるべしとなす。然らば此くの如き性質の知識は果して何處にかある。此知識や種々一偏の技術に在らず、又は演説を仕組み、之れを書くことを得るも、之れを演説すること能はざる所のものにも在らず、然りと雖此くの如き人物は野獸を魅する術を知れる者と同一なるは素より之れを許るさざる可からずとなす。而して又た吾等の求むる所の知識は大將たらんとするの知識に非ずとなす。此くてクレイニアス及びソークラテースの兩研究家は、處世の術及び幸福を求めて荒野にさまやう者の如しとなし、遂に帝王術は其求むる所の知識ならんと云ふに達せり。されども其興ふる所の知識は善にも非ず悪にもあらざるものにして、又た若し此帝王術は人をして賢ならしむるとせば、何事に於て人をして賢ならしむ

るか、若し善なりとせば、何事に於て善なるか、遂に兩人了解を得ずして援を兩兄弟に求む。

エウチユデーモス、ソークラテースに或物を知るやを問ひ、或物を知らば一切のものは之れを知れるなりとの詭辯を弄せり。ソークラテース問ひて、然らば靴直しの術も何も盡く知るかと云はゞ、彼れ之れを知るを答ふ。此に於てクテシッポス信せず、此兄弟互に各々其齒の數を云ひ當つべしと迫り、若し其れを言ひ當ることあらんには其他の言をも信せんとなす。ソークラテースも亦兩兄弟を冷笑する所なきに非ずと雖、尙ほ或は學ぶ所あらば幸なりとし、以つて嘲笑を制止せり。されども兩兄弟の、或ものを知るは即ち一切を知れるなりとの言を縮畏となし、善は不正なるものなり』とのことは知ることを得ずとなし、エウチユデーモスを沈黙せしめたり。兄デオニュソドーロス援助に來り、談話又々からまつて甥兄弟、父母等の論となり、クテシッポスは嘲笑して此兩兄弟の父母は犬の父母なり、海の妖怪の父母なり。而して此兩兄弟の父は甚だ多くの善を其子犬等の知識より得たりと嘲弄せり。

エウチテデーモス屈せず、何人も甚だ多くの善を要することなしと言ひ、其れより彼等善を謂ひ、黄金の善なることを論じ、スキュチア人の事を謂ひ、視覚云々のことを論じ、殆ど滑稽と嘲弄とを以つて始終せるより、クレイニアス大に笑ひ出だしたれば、ソークラテース戒むるに、此る嚴正にして美なることの笑ふ可からざるものなることを以つてせり。

然らば美なるものありや若し之れありとせば此は絶對美と同一なりや否やとの問答より、兩人は、論理上ソークラテースを以つて牛なりとし、尙ほ種々愚昧なる言語を爲せり。此に於てソークラテースもクテシッポスも餘りの馬鹿らしさに、全く兩兄弟を嘲弄して、兩人ともに、此の兄弟は實に敵すべからざる人なりとなすや否や、滿堂拍手喝采し、歡笑の聲堂の柱梁にひびき轟けり。而してソークラテース又た此兄弟を頌贊する嘲弄演説を爲せり。

ソークラテース以上の事をクリトーンに語るや、クリトーン、聴衆中の一人來りて彼等を嘲けり、哲學は空虚無用のものとなし、又たソークラテースが彼等と談話することをも笑ひ居たることをソークラテースに告

ぐ。ソークラテース此批評を爲せし者の從事せる所の哲學と政治との
兩岐なる由を聽き、彼れの如きは水陸兩棲動物となし、又た中間學問は甚
だ劣等のものなるを語れり。

クリトーン其二兒を教育する學科の撰定に迷へる由を語る。ソーク
ラテース告ぐるに、假令哲學の教師には兩兄弟の如き滑稽なる人物あり
と雖、哲學其ものは必しも然らざるべければ、哲學の討究は一概に排すべ
きに非ざることをも以つてせり。

○

當時前代の哲學は衰微し、而して次に來るべき哲學は未だ十分に其基
礎を固めず、所謂哲學者なるものは單に言語を圖はし、意味なき言語を以
つて討論し、詭辯を弄して論談するを以つて、最も學問ある人の爲す所と
なせり。此に於てプラトーン、「エウチデモス」中に之れを嘲笑諷刺せり。
而して彼等「ソフィスト」の爲せし言論の誤謬にして、こゝにプラトーンの諷
刺せる所は、今日の吾等より見る時は、實に些々たることなりと雖、其當時
に在つては、甚だ有力なる論辯にして、破るべからず敵すべからずと謂ふ

の勢を有し、以つて人心を混亂せしめ、困らしめ居たるものゝ如し。宛も支那戰國の時代に於て、堅白同異、白馬馬に非ず、卵に毛あり等の空言虚論の詭辯の流行したるが如きなり。而して此の如き詭辯を絶滅せんには、此くの如き滑稽嘲論を以つて祭り上げ、封じ込み、敬して遠ざくるの方法は、最も有力なる攻撃たるなり。殊に當時の哲學者等か、事實、或は事物に據らずして、單に言語の響に由つて論辯せるを攻撃し、遂に得る所なしとしたりは、今日の哲學に於ても最も注意すべき點なりとす。吾人は今日の哲學——純正哲學は勿論、心理學、倫理學、美學等に於ても、言語の争ひ、用語の冗長なる定解及び區別等を以つて事を複雑にし、宛も術語字彙然たるもの少なからざるを見る、之れ亦吾人の時代は、プラトーンの貶訂を受けざる可からざる所なるが如し。又たソークラテース(或はプラトーン)の教育の精神を見るに、被教育者に同情を表し、之れを獎勵誘掖するの趣や、實に愛情の温かなるものありて、ソフィスト等の、少年を打撃し斃はす流儀とは全く反對なるは、又た之れ觀るべきの事となす。而して本書に於ては哲學を論じて未だ其如何なるものなるやの結論に達せずと雖、尙ほ人

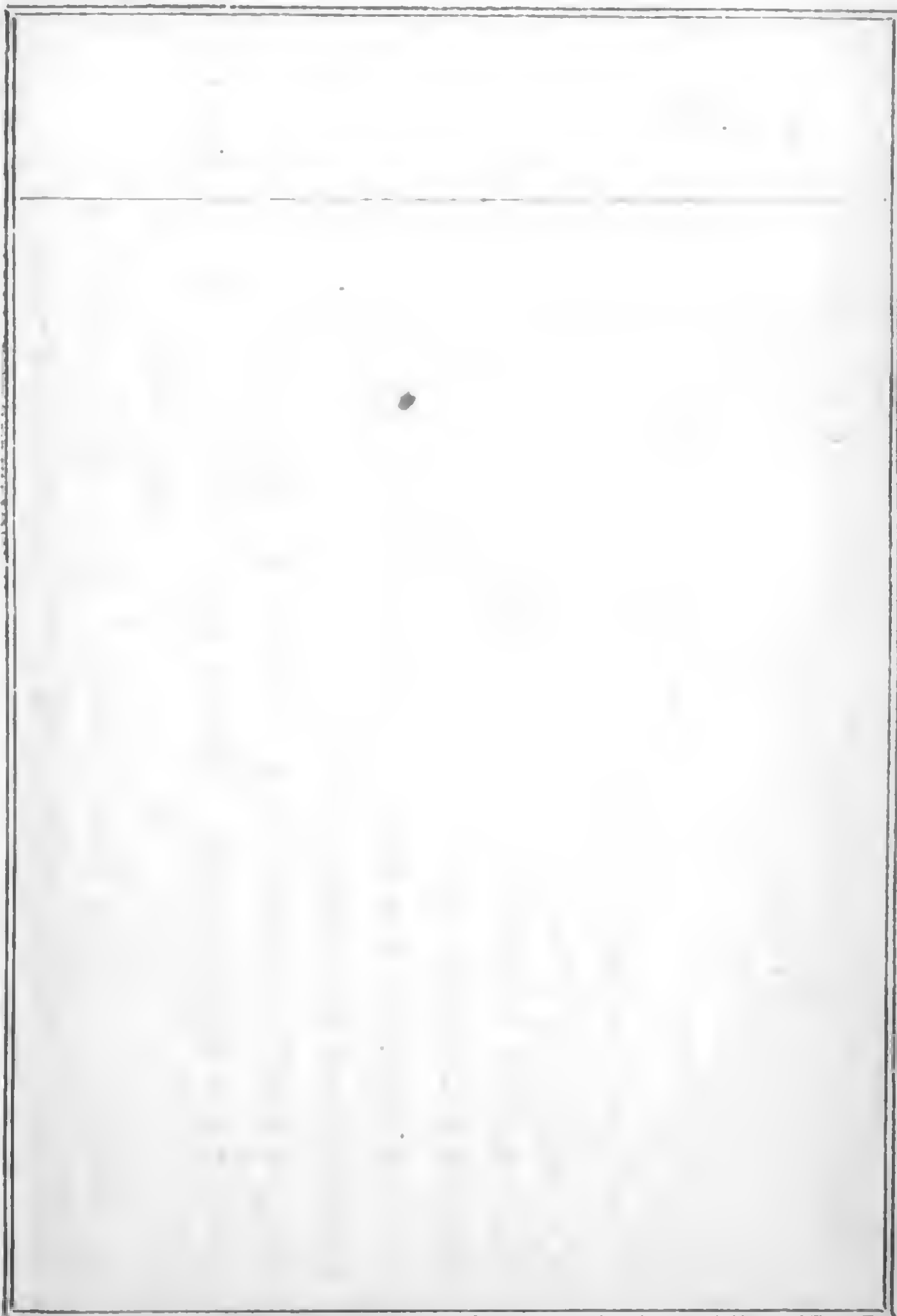
々を勵まし、兎にも角にも研究討檢すべしとなし、後に至り、「理想國」及び「政治論」の篇に至つて之れを解釋することよなせり。

○

此對話書に於けるソークラテースは老人として現はる。其對話を聽く所のクリトーンも亦ソークラテースと殆ど同年の老人にして、クリトプロスと云へる少年の父、ソークラテースと同區の住人にして、金儲けを事とせる人なり。ソークラテース對話中、時々金儲けの事を言ひて滑稽を試むるあり。少年クレイニアスはアルキピアデースの孫にして、宛もリュシス、ハルミデース、メチキセノス及び其他の伶俐なる少年の如く、ソークラテースは同情を以つて、彼れの口より其知識を引だすことを爲せり。クレイニアスの愛者クテシッポスは、已に「リュシス」中に出でたる人物にして、稍々物に激し易き性質の人なるは對話中に明かに觀るべし。されども此對話中の主要なるは兩兄弟の詭辯無頓着厚顏の人物にして、其詭辯と、無頓着と、厚顏なるには、流石のクテシッポスも敵すべからずと閉口して嘲弄的降參をなしたる程の人物たるなり。而して彼等兩兄弟中、弟エ

ウチデューモスは、其兄の黙したる後も尙ほ論辯を繼續せるより見れば、其程度に於て聊か優れる所あるより、こゝに弟の名を取りて此對話書の題號となせしものゝ如し。

此對話書の結末は、聊か全體の仕組と一致せずこの批評を試むるものありと雖、之れ對話書に許るす範圍を狹隘に見たるものゝ言ふ所にして、プラトーンの「ドラマ」を仕組む力の饒多なる、戯題中に戯題あるが如く、議論中に又た議論あるが如きなり。而して大體を論じて、序を以つて之れに附加して、又た當時一方の階級を作れる不良なる學黨即ち哲學と政治との中間に立ちて己れの位置を利せる者、而も其實兩者共に短なる輩を攻撃せるのみ。又たプラトーンの初期に書きし對話書中には、最も教育に、注意せるの精神あるは、クリトーンが其二兒の教育に心を碎けるの紀事に由つても之れを見ることを得るなり。



エウチユデーモ
ス

對話者

場

クリトーン

エウチユデーモス

對話者

ソークラテース——談話者

クリトーン

エウチユデーモス

ディオニソドロス

クレシッポス

クレイニアス

場——リュケイオン

クリ



ソー

クラテースよ、昨日リュケイオンにて君と與に語り居りし人は誰ぞや。君の周圍には多くの人々群集し爲めに余は君の談話を聴き得るまでの近くに至ること能はざりき。されども人々の頭越しに彼れを見たり。思ふに君と與に語り居りし人は他國人に

クレイニアスと
クリトブロス

エウチユデーモ
ス及びデオニユ
ソドローロス

はあらざりしか。彼れ何者ぞや。

ソー クリトーンよ、其所に二人ありしが、君の言ふ所は何れぞや。

クリ 君の右側の第二番に坐せし人なり。中央にアクシオッホスの子クレイニアスあり。彼れ甚だ成長せり、年齢は我子クリトブロスと殆ど同じかるべしと雖、性敏捷にして又た其容貌や甚だ美なり。我子は瘦せたる體格にしてクレイニアスに比すれば稍年少の如く見ゆるなり。

ソー クリトーンよ、君の言へる所はエウチユデーモスと云へるものにして、又た余の左側に在りしは、其兄弟デオニユソドローロスと云ふ者なり、之れ亦吾等と共に談話し居たる者なり。

クリ ソークラテース、余は是等兩人に就いては知る所なし。されども余の想像する所によれば、彼等は「ソフィスト」の新輸入なるべし。彼等の本國は如何ん、又た其學問の種類は如何ん。

ソー 其本國に關しては、余の思ふ所に由れば、同じくグレシアの人に於て、ヒオスよりツリイに移住し居たるが、事の爲めにツリイより放逐せられて數年此の地方に住居せるものゝ如し。君の問へる所の學問に關

ハらざる所なき

闘術家

法律上の格闘術

論必勝家

しては彼等實に驚くべきものにして、殆ど窮めざる所なし。余は此くの如き眞の格闘家は未だ曾て知らざる所なり。從來の格闘家は單に闘ふのみなりと雖、此兄弟は、アカルナニアの兄弟の、たゞ身體のみを以つて闘ふとは異にして、其身體の使用に於ては間然する所なく、其他一切の格闘術通せざる所なし。何となれば彼等甲冑を着して闘ふに名人たるのみならず、又た金錢を拂ふ者には、何人たりとも之れを教ふべければなり。彼等單に此種の劍術に長せるのみに非ずして、又た法律上の劍術に長じ法庭の戰爭に於て敵するものなし。而して彼等自ら演説法、辯護法及び演説を書くことを能くし、又た之れを人に教ふ。之れ彼等の學問の初段に過ぎずと雖、彼等は格闘術を其終局にまで發展せしめて、從來人々の棄てゝ顧みざりし所の競闘術を自得せり。之れが爲めに人々恐れて彼等に反對すること能はざるなり。此くの如きは實に彼等が言語戰爭に於て有せる所の大なる熟練にして、彼等は眞たれ偽たれ、如何なる問題なりとも苟も提出されたる所のものは、必ず之れを論破し得るなり。クソットーンよ、余は我身を彼等の手に委し、以つて教育を受けんとせり、何となれば

ば、彼等短時日を以つて其技術を何人にたりとも教ふべしと云へばなり。
クリトーン 然りと雖、ソークラテースよ、それに就いては君は餘りに老たる
にあらずや、余は之れを憂ふるものなり。

ソークラテース 然らず、余は之れを君に證せん。余は自ら老年と
云ひ得る此の年齢に至つて、切に欲する所の討論法なるものを彼等の開
始したるを知り、大に喜べり。昨年或は一昨年までは、彼等兩兄弟は此の
新學問を知らざりしなり。たゞ余の恐るゝ所は、吾等が就いて學ぶ時は
吾等の關係に由つて彼等を不評判ならしむることあらざるやと云ふこ
となり。余は藝きに此くの如き場合ありき、乃ちメトロピウスの子なる
コンノスは立琴の彈奏者にして、今も尙ほ余の琴の師匠なるが、小兒等の
行いて彼れに學ぶ者、余が此師匠の許に至るを見て、余を笑ひ、又た此師匠
を稱して老祖父の教師と謂ひ、爲めに此教師多少迷惑を感じたりしなら
ん。故に余は又た他國より來れる此兩兄弟に、前と同様なる迷惑を感ぜ
しむるを欲せず、彼等も亦此理由を以つて余の願を承諾することを好まざ
るべし。故に余は他の老人幾名かを勸誘して、余と共に彼等兄弟の許に

ソークラテース
此兩兄弟に會合
したる時のこと
を物語る

至ること、余が曩きにコンノスの許に至りし時の如くせんと欲す。而して君も亦其一人となり、又た君の子息等を伴ひて兩兄弟の好餌とせば、一層宜しかるべし、何となれば彼等は青年の門弟子を得んことを欲し、其青年の爲めに吾等老人をも亦彼等の門弟子として受くることある可ければなり。

クリ ソークラテースよ。余は別に異議なし。されども吾等至るに先き立ち、彼等兄弟の學問は如何なるものなるやを語り聽かせよ。

ソー 余は直に語るべし、余は彼等の言を聽きしことなしと言ふこと能はざればなり。實に余は彼等に對して大に注意したれば、能く其時の事を記憶し居るを以つて、今其全體の事を君に語らんに――余は時に運好くも、君が昨日吾等を見たる所のリュケイオンの衣裝室に獨り坐し居たり、余は將に歸らんとして起ち上りし時、例の神徴を見たるより、再び坐し居たりしに、暫時にしてエウチュデーモス及びデオニソドロス兄弟及其他數名の者入り來れり。此數名の者は彼等兄弟の門人なるべしと思はれたり。而して彼等蔽ひたる空地を彼方此方に散歩すること兩三回せり。

時にクレイニアス入り來れり。實に君の云へるが如く、彼れ甚だ進歩せり。而してクレイニアスの後方には多數の愛者附隨し來れり。パイアニア區の人クテシッポスも其一人なり。此クテシッポスは善く教育されたる青年なりと雖、亦聊か血氣にはやる所あり。クレイニアスは戸口より、余一人坐し居るを見て、直ちに來つて、君の言へるが如く、余の右側に坐せり。デオニュンドーロス及びエウテュデーモスの兩人、クレイニアスを見て、始めは暫時立ち止まり、又た歩み居たるが、余の熱心に彼等兄弟を眺め居たるを見て、エウテュデーモス先づ來つてクレイニアスの側に坐し、デオニュンドーロスは余の左側に坐し、其他の人々は講所に坐を取りたり。此兩兄弟は久しく見ざりし所にして、余は彼れに挨拶し、而してクレイニアスに謂うて曰く、クレイニアスよ、エウテュデーモス及びデオニュンドーロス此兩人は其知識決して小にあらずして甚だ大なり、何となれば此兩人は一切の軍事上の事は盡く之れを熟知せるを以つてなり——乃ち軍隊の隊伍を整へ、或は之れを命令する等、苟も將官たるものゝ知らざる可からざる所のものは勿論、甲冑を着して闘ふの術等も之れを知り、又た法律をも之

ソークラテース
此兩兄弟の格闘
名人なるを謂ふ

エウチユデーモ
ス格闘術は第二
段の事となす

エウチユデーモ
ス徳義の教育は
自己の第一の事
同となす

ソークラテース
彼等の學の達成
を疑ふ

れを知り、若し損害を被る時は法廷にて闘ふ武器の使用をも熟知せるを以つてなり。

彼等余が此く言ひしを聽きたる時、余は彼等に卑しめられたり。彼等互に相見て余を笑へり。而してエウチユデーモス曰く、ソークラテースよ、其等は余の眞に力を用ゆる所に非ずして、吾等に取つては第二段の事たるなり。

余曰く、若し此くの如き職業をも君は第二段とせば、其主要なる第一のものは何ぞや、願くは其高尚なる學問の何たるやを余に告げよ。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、徳義の教育は余の第一の職業とせる所にして、吾等は之れを人に教ふるに他の人々の爲すよりも善良に、又た速かにすることを得べしと信ず。

余曰く、あゝ君等は何處にて其法を學びしや。余は今まも言ひしが如く、君等の専門の學問は甲冑を着して闘ふの術なりと思ひ居たり。故に余が君等に就いて噂さする時は、常に此事を以てせり。而して君が前回此地に來りし時は、専ら是れを職業となせしを余は記憶せり。然るに今

や君等は眞に他の知識を有せりとせば、幸に余の前言を免るせ。余は人間以上の者に願ふが如く、君等に願ふに余の前言の不敬の罪を免るさんことを以つてす。されども君等は、果して其言ふが如きの實あることを斷言するか。君等の約束する所は甚だ大にして、爲めに疑念余の胸中に起れり。

ソークラテースよ、君は余の言を信じて可なり。

余曰く、思ふに君は此くの如き貴重なる寶貨を有するの幸福は、大王が其王國を有する幸福よりも一層幸福なるべし。而して君は其知識を發表せんとせるか、將た又た之れを如何にせんとするか、願くば余に告げよ。彼れ曰く、ソークラテースよ、余の此こに來れるは其事なり、余の目的たるや、單に之れを發表するのみに止まらずして、又た何人と雖、學ばんとする者に教へんとするなり。

余曰く、余は君に約せんに、凡ての徳行ならざる人は、必ずや來つて君に學ぶべきなり。余は其先登第一なり。而して此に青年クレイニアスあり、クテシッポスありと云ひつゝ、吾等の四周に集まり來れる愛人等を指し

つゝ謂うて曰く、彼方にも又た數名ありと。時にクテシッポスはクレイニアスより少しく隔たりたる所に坐し居たるが、エウチユデーモスの余と語らんとして其身を前方に傾けしより、吾等の中間にありしクレイニアスを遮りて見ることを得ざるに至りしより、其愛者を見んとするの情と、又た吾等の談話に興味を感ずるとより、躍起して吾等の反對の所に立ちしかば、クレイニアスの其他の稱揚者及びエウチユデーモス及びデオニユッドロスの門人等も亦た之れに倣ひたり。余は是等の人々は皆な熱心に學ばんとせるものなることをエウチユデーモスに語りたれば、クテシッポス及び其他一同は、異口同音熱心に之れに同意し、其知識の力を發表せんことを彼等に請へり。此に於て余は曰く、あゝエウチユデーモス及びデオニユッドロスよ、幸に余及び友人等に、君の知識の力を示めさんことを余は懇願に堪わざるなり。其全體を示めすには或は煩勞なるべければ、余にたゞ一事、乃ち——君は、君に就いて學ばざるべからずと確信せる人々のみを善人と爲すを得るか、將た又た徳義は決して教へらるべきものに非ずとなし、又或は君等兩人は其教師たるべき人物に非ずとするより、此確信

ソークラテース
兩兄弟は最も適
當の教師なりや
を問ふ

を起さざる人々をも善人となすことを得るか。君等の術は能く此くの如き人々をも説伏するに、徳義は教へられ得ることを以つてし、又た君等は、就いて學ぶべき最も適當なる人物なることを信せしむるを得るかを余に告げよ。

デオニュソドローロス曰く、ソークラテースよ、此は實に吾等の術たるなり、豈他あらんや。

余曰く、デオニュソドローロスよ、君は現存の人物中、最も善く人を勵まして哲學を求めしめ、又た徳義を修めしむる人物なるか。

然り、ソークラテースよ、吾等は其人なりと信ず。

然らば君の技能の他の部分の發表は、今ま此に暫く措き、たゞ試みに君の見る如く、此處に在る所の青年に説くに、哲學を學び、徳義を修むべきことを以つてせんとは余の願ふ所なり。君若し其能力を發表せば、實に之れ余及び此處に在る所の一同のものに取りては大なる恩惠なりとす。何となれば吾等一同は此青年が眞に善良なるものたらんことに、非常に配慮せるものなればなり。青年名をクレイニアスと謂ひ、アクシオッホス

の子、老アルキピアデースの孫にして、若きアルキピアデースの従兄弟なり。彼れの年齢甚だ若し、故に若し不良の徒ありて吾等の注目を避けて私かに、青年の心を悪に向はしめ、遂に其身を破滅に至らしむるをあらんかを憂慮するは吾等自然の情たるなり。是故に君等の此地に來りしは我等以つて好機會となし、君にして異存なくんば、此青年を試問し、吾等の面前に於て彼れと共に談話せんことは余の大に希望する所なり。

余は大要此くの如き調子を以つて談話せり。而してエウチユデーモスは高揚せると同時に樂しげなる語調を以つて答へて曰く、ソークラテースよ、若し此青年にして余の間ふ所に答ふことを好まば、余に於ては異存あるなし。

余は答へて曰く、彼れ此事には十分習熟し居るなり。何となれば其朋友は數々來りて彼れに問ひ、彼れと論ずるを以つて、彼れ此種の問ひに答ふることは容易たるなり。

クリトーンよ、之れより後如何なることありしやに就いては、余如何にして正確に語ることを得ん。無限の知識をこゝに再演するは容易の事

に非ず、故に余は詩人の如く、余の談話は之れを記憶と、ミューズの諸神とに祈禱して之れを始めんに、若し余の記憶にして正しとせば、エウチユデーモス、大要此くの如く問答を始めて曰く、クレイニアスよ、夫の學問するものは知者なるか、或は又た無學者なるかと。

クレイニアス此疑問に由つて顔を赤らめ、當惑して余を見て援助を求むるものゝ如し、而して余は彼れの混亂せるを知りしが故に、彼れに謂ふて曰く、クレイニアスよ何の恐るゝことかあらん、たゞ何れなりとも其思ふ所を答ふれば可なるのみ、思ふに君は此問答に由つて大なる利益を得べしと。

デオニュソドロスは身を余の耳の方に傾けて、笑ひつゝ謂うて曰く、ソークラテースよ、彼れ如何に答ふるとも、余は必ず之れを論破せんことを豫言すと。

彼れ余に語りし時、クレイニアス其答を爲せり。而して余は彼れの位置に就いて警戒を興ふるの機會あらざりしより、彼れ答ふるに、學問したるものは智者なることを以てせり。

エウチユデーモス進み問うて曰く、君等の所謂教師なるものありや否や。青年、ありと答ふ。

教師は學ぶものゝ教師にして、文法教師、彈琴教師等は、君及び其他の少年を教ふるものにして、君等は學ぶ者なるか。

然り。

君等生徒たる者は其學修する所のものに就いては、未だ之れを知らざるものなるか。

彼れ曰く、未だ知らず。

然らば君等は知者なるか。

彼れ曰く、否。

君若し知者に非すとせば未學者なるか。

然り。

然らば君は未だ知らざりし所を學ぶものにして、其學ぶに當つてや、未だ學ばざりしなり。

少年首肯せり。

然らばクレイニアスよ、君の想像するが如く、夫の學ぶ者は未だ學ばざりし者にして、知者は學ばざるなり。

此に於て、余が前に言ひたるエウテューデモスの門弟等は、其指令者の命令に従つて一時に合奏の如く笑聲を揚げたり。少年其心氣を回復するの前、テオニュンドロス、少年の手を執りて謂うて曰く、然りクレイニアスよ、若し文法教師、君に書取を教ふとせば、此少年は知者なるか或は未だ學ばざりしが故に書取を學びしか。

クレイニアス答へて曰く、知者なり。

然らば、要するに、學ぶ者は知者なり、未學者に非ざるなりとせば、君がエウテューデモスに爲したる最後の答は誤れりと謂はざる可からず。

此に於て笑ひの癖みは再び兩人の稱讚者等より起れり。彼等は實に兩人の知識に心酔せるものなり。然るに吾等は呆然として沈黙せるのみ。エウテューデモス之れを觀て、尙ほも此少年を追窮せんと決心し、他の同様なる疑問を以つて此少年を困まらせ、以つて又々笑を高めんとせり。此少年の此時の状態は、宛も之れ最も熟達せる舞者と共に、再度の舞蹈

再び笑ひ轟む

兩兄弟の門弟子
クレイニアスを
大笑す

の順に當れるに比すべし。彼れ問うて曰く、かの學修するものは、己れ知る所のものを學ぶか、將た又た其知らざる所のものを學ぶか。

ヂオニユソドーロス余にさゝやきて曰く、ソークラテースよ、彼れ又た前回の如く笑の種となるべしと。

余曰く、あゝ君の最後の問ひや實に善し。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、凡て吾等が爲したる其他の質問の如く、之れ避くべからざるなり。

余曰く、君等が此くも君の門弟子間に名望高き所以は今にして余は始めて之れを悟れり。

暫時にしてクレイニアスは、エウチュデーモスに答ふるに、夫の學修する者は、自己の知らざる所を學ぶ者なるを以つてせり。而してエウチュデーモスはクレイニアスに向つて數多の問題を出すと前の如くなせり。

エウチュデーモス問うて曰く、君は文字を知れりや。
彼れ然りと答ふ。

凡ての文字を知れりや。

尚ほクレイニアスを困らす

然り。

教師が君に書取りを教ふる時は、文字を書き取らしむるにあらずや。

彼れ然りとなす。

若し君凡ての文字を知れりとせば、教師は君の知れる所の文字を書き取らしむるに非ずや。

彼れ又た然りとなす。

エウチユデーモス曰く、然らば君は教師の書き取らしむる所は之れを學ぶにはあらずや。然るに學問するは、其未だ知らざる者の爲す所には非ざるか。

クレイニアス曰く、否。然りと雖余は學べり。

エウチユデーモス曰く、若し君凡ての文字を知れりとせば、君は其知れる所を學ぶものと謂ふべし。

彼れ然りとなす。

エウチユデーモス曰く、然らば君の答ふる所は誤れり。

此言未だ彼れの口より終らざるに、デオニユソドロス議論を引き繼ぎ

デオニユソドロス又ケクレイニアスを困らす

宛も球戯に於いて球を受け取るや否や、直に之れを投げ付くるが如く、瞬時の猶豫も興へずして、少年に向つて問うて曰く、クレイニアスよ、エウチュデーモスは君を欺けるなり。余に此事を告げよ、學問とは其學ぶ所の物の知識を得ることにあらずや。

クレイニアス然りとなす。

知ることは、其時知識を有することなるか。

彼れ同意せり。

知らざることとは、其時知識を有せざることなるか。

彼れ然りとなす。

凡て物を得んとする者は、之れを有せる者なるか、將た又た有せざるものなるか。

之れを有せざるものなり。

かの知らざる所の者は、かの有せざる者と同一階級のものたるは君の許容する所ならずや。

彼れ之れを首肯せり。

然らばかの學問する所のものは、かの得んとする所のものと同一階級のものにして、かの有せるものとは異なるべきか。

彼れ同意せり。

彼れ曰く、クレイニアスよ、然らばかの學問する者は知らざる所の者にして、知れる者は學ばざるなり。

少年大に窮す

エウチユデーモスここに第三回の打撃を少年に與へんとせり。然るに

少年を慰藉して
勵ます

余は少年の今や深水に陥りて將に溺没せんとするが如き状態なるを知れるが故に、暫時彼れに休息を與へ、又た失望せざらしめんが爲めに、余は之れを慰藉して謂うて曰く、クレイニアスよ、君は此兩人の奇妙なる言語に驚くこと勿れ。之れ此兩人が君に對して爲さんとする所を、君、或は未

コリバンテス宗
の入教式

だ了解せざることあらんを思ひて余はかく云ふなり。此兩人は神秘なるコリバンテス教に倣ひて新に君を入門させんとするものにして、彼等が君に對して爲したる所は、該教の玉座式なるものに相當せり、此式は、君も知れる如く、新に宗門に入りし時、舞踏遊戲の後に行はるゝものにして、今是の兩人及び其他の人々は、君の周圍に跳躍舞踏し、而して後君を宗門

學問と云へることの意義

に入れんとするなり。此時に於ては、君は之れプロローグコスが、入門を以つて始め、而して言語の正常なる使用に及ぶと言へる所の「ソフィスト」の儀式の始めの部分を通過せるものと思はざる可からず。此の兩紳士は、君は未だ知らざるを以つて、「學問す」と云ふ言語に二個の意味ありて、二様に用ゐらるゝ事を説明せんとするなり、其第一の意味は君の未だ知らざる事物の知識を得るとにして、第二は君若し知識を有する時、其言行したる所の事物を、此新得の知識の光に依つて復習するとなりとす。而して後者は一般に「學問」と云はんよりも、寧ろ「知る」と稱せらるゝものなりと雖尙ほ「學問」なる語を使用するとあり。今此兩人が説明せる如く、此語は知る所の人、知らざる所の人、兩方共に使用され居るも、君は之れを知らざりしなり。第二の問題たる、人は其の知る所を學ぶか、或は其の知らざる所を學ぶかとの言に於ても亦兩人の校計あり。されども此點眞面目に非ざるを以つて是等兩紳士はたゞ君と戲言せるのみなりとす。人假令從來存せし所の一切の知識を有したりと雖、其人必ずしも、賢者に非ずして、たゞ徒らに人を弄び、言語使用の區別を以つて人の小股を取り、之れを

言語の小股取り

倒ほして以つて喜びとせる者なるのみ。彼れの如きは、宛かも友人が椅子に腰を懸けんとせる時、尙かに其友人の背後に廻はりて椅子を取去り、友人の股を廣げて倒れて尻餅つくを見て手を拍つて喜び、哄然として笑ひを揚ぐる輩の如し。而して君は、今までの事は全く此くの如き遊戯なりと見て可なり。然りと雖、思ふに、今よりは兩人其本職に着手し、其約を守るべし。(余は如何に兩人が約したるやを證せん)。實に兩人は余に鼓舞獎勵の哲學の見本を與へんことを約したればなり。されども余の想像する所に由れば、兩人先づ君と遊戯を爲さんとせしものゝ如しと。

而して余は兩人に向つて謂うて曰く、エウチユデーモス及びデオニソドロースよ、余は此遊戯は已に十分之れを爲せり、願くば、君が青年をして徳義及び知識の研究に其身を委ねしむる方法を教ふるの趣を余に示めせ。而して余は先づ此事業の性質に對して如何なる觀念を有するか、又た、如何なることを君より聽かんとを欲するかを君に示めす所あらんとす。而して余の之れを爲すに當りて、或は修飾なく、或は滑稽なる態度を以つてすることあらんとも、願くば君等余を笑ふこと勿れ、何となれば余はた

ソークラテース
問答の方法の見
本を示めす

フークラアース
クレイニアスと
問答す
人は幸福を欲す
るか

如何にせば幸福
なるべきや
幸福と善

善とは何

君等の知識を聴くことを切望するの餘り、今まこゝに口に任せて君等の前に陳述するものなればなり。故に君願くば靜かに余の言を聴け、又た君の門弟子等をして靜かに傾聴する所あらしめよ。扱て、然らば、アキシオッホスの子よ、余は君に問はん。凡ての人は幸福を欲するものなりや否や。然りと雖、此くの如き問題は恐くは滑稽と思はるべく、余は寧ろ之れを問ふことを憚るものにして、多少思考力ある人の、決して問はざる所の簡單なる問題なりとす。何となれば如何なる人と雖幸福を欲せざる人あらざればなり。

クレイニアス曰く、何人と雖幸福を欲せざる者あらざるべし。

余曰く、然らば吾等皆な幸福を欲せざることなしとせば、如何にせば幸福なるを得べきやは、次に來る問題なりとす。吾等多くの善き物を有せば幸福なるには非ざるか。此は前の問題よりも簡單にして、其答へに疑ふべき所あらざるべし。

彼れ同意せり。

然らば吾等如何なるものを善となすや。之れ容易に答へらるべき事に

諸善

して、嚴正なる聖知の人を待つを要せざるべし、何となれば人皆な富を以つて善なりと謂へばなり。

彼れ曰く、然り。

又た健康及び美、及び其他身體上の天賦も亦善にあらざるか。

彼れ、同意せり。

門閥、權勢、及び其他に於ける名譽等も亦善にはあらざるか。

彼れ然りとす。

正義、節制、勇氣

余曰く、其他にも尙ほ善あるべし、そは何ぞや。正義、節制、勇氣等に關し

て君は之れを何と云ふか。クレイニアスよ、君は是等のものを善中に彙類せざるよりも、善中に彙類するは、眞に正常なりと思考せざるや。此點を決定し置かざる時は、或は爭論起ることあらん。君は何とか之れを云ふ。

クレイニアス曰く、是等は善なり。

余曰く、然らば智慧は如何なるものゝ中に彙類すべきや。善の中なり

や、否や。

智慧と善

善の中に。

余曰く、尙ほ此他諸善を枚擧するに遺漏なきや如何ん。

クレイニアス曰く、余は遺漏なしと考ふ。

余曰く、余思考せしに、諸善中最大なるものを遺れたるを知れり。

彼れ曰く、其は何ぞや。

余答へて曰く、クレイニアスよ、其は幸運なりとす。此幸運なるものは

最愚の人と雖尙ほ諸善中の最大なるものたるを許るすべし。

彼れ曰く、真に然り。

余又た言を加へて曰く、アキシオッホスの子よ、余は再考せしに、實に君も

余も、辛くも他國人の笑柄となることを免かれたるかな。

其は何事を言へるなるか。

吾等既に幸運の事は之れを言へり、而して今また吾等之れを繰り返

へして言へり。

君の意味する所如何。

再びこゝに幸運なるものを言ひ出し、同一事物を二度も繰り返へして

智慧は幸運なり

言ふが如きは、實に一種の滑稽なりとの謂ひなり。

彼れ、余の此言の何を意味せるやを問ふ。

余答へて曰く、眞の智慧なるものが、善良なる幸運なることは小兒と雖知れる所なり。

質朴なる少年は余の言に驚けり、之れを見て、余は彼れに謂うて曰く、クレイニアスよ、君は吹笛者は笛を吹きて樂を奏するに於ては、最も幸運にして成功したるものなりとは爲さざるか。

彼れ然りとせず。

書記は讀書、寫字に於ては最も幸運なるものにはあらざるか。然り。

海上に危難に遭遇するに當つてや、全體より云はゞ、賢明なる水先案内より幸運なるものありや否や。

なし。

戰場に在つては君は如何なる者と共に危難を冒かさんとするか—賢明なる將官か、將た又た愚昧なる將官か。

賢明なる將官と與にせん。

君若し疾病あるに當り、其生命の危急なる時の伴侶とするは、賢明なる醫師なるか、或は又た無學なる醫師なるか。

賢明なる醫師なり。

余曰く、君は賢明なる人と事を與にするは無學なる人と與にするよりも幸運なりと思ふか。

彼れ然りとせず。

余曰く、然らば智慧は常に人をして幸運ならしむるものにして、智慧に由つて人は決して誤ることあらざるべく、正常に行爲し、以つて成切すべきなり。若し夫れ然らざる時は、其智慧は已に智慧にあらざるなりと。

而して吾等遂に智慧を有するものは、此上別に幸運を求むる要なしとの總結論に同意せんとせり。此に於いて、余は以前の問題を彼れの心中に呼び返へして曰く、若し多くの善良なる物、吾等と共に在る時は、吾等は幸福幸運のものなることは、以前に吾等の許るしたる所なるは君の記憶せる所ならん。

彼れ同意せり。

然りと雖若し其等善良なる物にして、吾等を利益することなからんとも、又た吾等を利益することあらんとも、何れにするも、其の是等あることは吾等の幸福たるべきか。

彼れ曰く、若し是等の物吾等を利益すれば、吾等は幸福たるなり。

若し吾等單に之れを所有するのみにして、之れを使用することなしとするも、是等果して吾等を益するや如何ん。例せば、吾等多量の食品を有するとも食ふことなく、多量の飲料を有するとも飲むことなくんば、吾等之れに由つて利益を受けたりと謂ふべきか。

彼れ曰く、決して然らず。

若し人今ま言ひし如き財産及び其他の善き物を有して、而も之れを使用せざる時、其の人は單に之れを有せりとの理由を以つて幸福なるべきか。

ソークラテースよ、決して然らず。

余曰く、然らば人若し幸福ならんとせば、たゞに多くの善き物を有せる

善物の所有と其
使用

使用せざれば益
なし

のみに非ずして、又た之れを使用せざる可からず。單に是等のものを有するのみにしては、果して何の利益かあらん。

眞に然り。

然らばクレイニアスよ。君若し善き物を所有すると同時に又た之れを使用すとせば、以つて十分幸福なるを得るとなすか。

余の思ふ所に由れば然りとなす。

人は是等善き物を正しく使用すべきか、將た又た惡しく使用すべきか。彼れ正しく使用せざる可からず。

余曰く、眞に然り、是等のものゝ惡用は使用せざるよりも惡なり。之れ一は惡なりと雖、他は善にもあらず、惡にもあざらればなり。君之れを然りとなすか。

彼れ同意せり。

かの材木を使用して物を造るに當り、其正當なる用途を教ふるは、たゞ之れ大工に關する知識にあらずや。

彼れ曰く、然り。

正しき使用

惡用

知識と善物の正用

船舶を製造するに當り、知識は船舶製造の正當なる方法を與ふるは、確かなる事にはあらざるか。

彼れ同意せり。

然らば始めに言ひたる如き、財産、健康、及び美等の諸善を使用するに當り、其正當なる使用法を指教し、其實踐に於て吾等を導くものは知識にはあらざるか。

彼れ答へて曰く、知識なり。

然らば物の凡ての所有、凡ての使用に於て、たゞに人に善良なる幸運を與ふるのみに非ず、又た之れを成功せしむるものは知識にはあらざるか。彼れ同意せり。

余曰く、此事を余に告げよ、人若し理解力も智慧をも有せずとせば、物の所有果して何の利益かある。人は知識なくして多くの事物を所有し、又た之れを行ふと、知識を有して僅少を行ふと果して何れか可なる。此く觀察せば如何ん——人若し僅少の事を爲せば其過誤亦僅少なるにあらずや。若し過誤僅少なりとせば、其不幸も亦僅少なるにあらずや。若し不

幸僅少なりとせば、其艱難も亦僅少なるにあらずや。

彼れ曰く、然り。

然らば如何なる人は最も僅少なることを爲すか——貧人なるか富人なるか。

貧人なり。

弱き人か、強き人か。

弱き人なり。

高貴の人か卑賤の人か。

卑賤の人なり。

而して億病なる者は、勇氣ある人及び節制の人よりも僅少なる事を爲すか。

然り。

怠惰なる人は活潑なる人よりも僅少なる事を爲すか。

然り。

遲鈍の者は敏捷の者より、視聽の鈍なる者は鋭敏なる者よりもか。

知識の指導と善物

凡て是等吾等相互に許容せり。

余曰く、然らばクレイニアスよ、要するに前に吾等の謂ひし所の諸善は、其物自身は善なるにあらずして、其善悪の度の關する所は、是等の物が知識の指導の下にありや否やにあり。故に若し是等諸物にして無知の指導の下にあらんには、是等の反對のものよりも大なる惡たるべし、之れ其指導支配する所のものたる惡原理の用を爲すものなればなり。又た若し知識と徳義との指導の下にある時は、其物自身は何物にもあらずと雖、是等は、大なる善たるなり。

彼れ曰く、其は眞なる如し。

余曰く、然らば吾等の問答の結果は如何ん。曰く、是等諸物は凡て善にも非ず惡にもあらずして、智慧は唯一の善たり、無學は唯一の惡たるにはあらざるか。

彼れ同意せり。

余曰く、余は尙ほ此點に就いて進みて考究せん、人は幸福を欲し、幸福は前に云ひしが如く、人生諸事物の使用即ち正當なる使用に由つて之れ

智慧は眞の善無
智は眞の惡

無知の指導の善
惡

を得、而して是等を正當に使用し、其使用上の幸運なるを得るは、知識に由つて之れを得るものなるを知るに於ては、吾等は有らゆる方を盡くして、及ぶ限り知識ある人たることを力めざる可からずと結論するなり。

彼れ曰く、然り。

余曰く、クレイニアスよ、此財寶を得んとの願望は、金錢よりも遙かに貴重なる物なるを以つて、父たる者、後見人たる者、朋友たる者、愛者たるもの、國人たれ、他國人たれ、是等凡ての人々が、君に與ふるに知識を以つてせんことを此兩兄弟に依頼するも、決して辱ぶべきことに非ざるなり。又た若し其目的にして知識ならんには、其人は己れを愛する者なるも又た然らざるも、何人に對しても尊敬すべき勞役を爲すは、決して卑しむべきことに非ずとなす、君は之れに同意なりや如何ん。

彼れ曰く、余は全然君に同意す、又た君の言へる所は正當なりと信ず。

余曰く、然りクレイニアスよ、若し知識なるものは之を人に教へ得べきものにして、突然人に來るものに非ずとせば、君と余とは或は其意見一致せりと云ふべしと雖、此點尙ほ考究せざる可からざる所にして、君と余と

知識は教へられ
得べきものなる
か

の未だ一致せざる所なりとす。

彼れ曰く、然りと雖ソークラテースよ、余は、知識は教へらるべきものなりと思考す。

余曰く、人間中最良なる者よ、余は君の其言を聽くを喜び、又た知識は教へられ得べきものなりや否やに就いて、余の久しき困倦なる思考より余を救ひ出したるは、君に謝する所なり。而して君の思考するが如く、智慧は教へられ得べきものたり、又た智慧のみは能く人をして幸福且つ幸運ならしめ得るとせば、吾等皆な智慧を愛せざる可からず、又た君は殊に此心を以つて心となし、智慧を愛すること勗めざる可からざること、君は承認するや否や。

彼れ曰く、實にソークラテースよ、余は余の爲し得る限りを爲さん。

余は之れを聽きて大に喜び、デオニュドローロス及びエウチユデーモスに向ひて曰く、此くの如きは余の君に示めさんとせる獎勵誘掖の方法の一例なり、其緩漫冗長なるは自ら之れを知れり。而して余の願ふ所は、君等の内一人、余の言ひし所に就きて、一層巧みに之れを爲さんことなり。兎

智慧を愛せざる
可からず

ソークラテース
兩兄弟に願ふに
クレイニアスの
教育を以つてす

に角に、余の残したる所に就いて研究を進め、而して次に青年に教ふるに彼れ一切の知識を有せざるべからざるか、或は知識はたゞ一種にして、よく彼をして善たらしめ、又た幸福たらしむるや否や、而して又た其知識の何たるやを以つてせよ。實に余は始めに言ひしが如く、此の青年の知徳に於て進歩せんことは、吾等の心とする所たるなり。

クリトーンよ、余は此く語り、而して如何になり行くやを注意し居たり。余は彼等兄弟が如何にして問題に近づくや、又た青年をして智慧と徳義とを實行せしむる獎勵は如何なる點より始むるやを知らんとせり。兄なるデオニュッドーロス先づ語れり。人々皆目を彼れに注ぎ何事か驚くべき見事なること必ずあるべしと期待せり。而して人々の其期待せし所や甚しく誤らざりき、何となればクリトーンよ、彼れデオニュッドーロス甚だ見事にして十分傾聴するの價值ある談話を爲し、而して之れ徳義の獎勵として、實に驚くべき感動力あるものたりしを以つてなり。

彼れ曰く、ソークラテース及び其他、此青年は智者とならんことを要すとせる人々よ、諸君は眞面目に其事を言へるなるか、或は又た之れ一場の

戯言に過ぎざるか、之れ先づ余の知らんことを欲する所なり。

(是れに由つて之れを觀れば、彼等兄弟は、吾等が此兄弟に、此青年と談話せんことを依頼したるは、全く戯言なりと想像したるものにして、之れが爲めに彼等は戯言遊嬉を爲せしならん。此に於て余は益々、熱心眞面目なる者たるを言はんと決心せり。) チオニュソドーロス曰く、

ソークラテース省慮せよ、君は自ら其の言ふ所を否定せんとせり。

余曰く、余省慮せり、決して余の言を否定せることなし。

彼れ曰く、而して、君はクレイニアスは智者たらんことを欲すと言はんとするか。

疑ふまでもなし。

而して彼れ未だ智者には非ざるか。

少なくとも、彼れ謙讓して、自ら智者なりと云ふことは之れを爲さざるべし。

彼れ曰く、君は彼れの智者となることを希望し、無智者となることを願はざるか。

曰く青年を智者
となさんことを
欲するは其滅亡
を欲するなり

クレイニアスの
愛者クテシッポ
ス怒る

虚言論

然り。

君は、彼れの未だ然らざる所の者とならんことを欲するか、或は現在然るがまゝの者たらんことを欲するか。

此の言に於て、余は實に攪亂されたり。

彼れ余の攪亂されたるに乗じて謂うて曰く、君は彼れの現在然るがまゝの者たることを願はずとは、之れ、君は此青年の滅亡を欲することを意味せるに外ならざるなり。親愛なる愛者及び朋友等は其愛人の滅亡を欲するものたるなり。

クテシッポス此言を聴きて大に怒れり（之れ愛者に有り勝ちの事なり）。而して曰く、ツリイの他國人よ——若し禮義にして余に許るすとせば——汝は詐欺の言を爲す者なり、汝は何者なれば此に繰り返へすも忌まはしき言なる、余はクレイニアスの滅亡を欲すと云ふが如きことを以つて余及び其他の人々を誣ふるが如き虚言を爲すや。

エウチュデーモス答へて曰く、クテシッポスよ、君は虚言なるものは、有り得べき事なりと思へるか。

クテシッポス曰く、然り余若し之れを否定すとせば狂人たるべし。

若し虚言を語るごせば君は其の話す所のものを語るか、或は否らざる所のものを語るか。

君は其の話す所のものに就いて語れり。

かの語る所の人は、其語る所のものを語るなり、其他を語るに非ず。

クテシッポス曰く、然り。

而して其語るごとは、他の事物とは、全く別物なるに非ずや。

然り。

而して、かの、其物を謂ふ所の人は、有る所のものを謂へるなるか。

然り。

其の、有る所のものを謂へる人は真理を言へるなり。故に若しディオニッソーロスにして、其の有る所のものを謂ひしごせば、彼れ君に真理を言へるなり、虚言にあらず。

クテシッポス曰く、夫れ然り、エウチュデーモスよ、然りと雖其の之れを言ふに於いて、彼れは有らざる所のものを言へり。

虚言なるものあることなし

エウチュデーモス曰く、有らざる所のものは無なり。
然り。

有らざる所のものは何處にも無きにあらずや。

然り、何處にもあることなし。

誰れか存在せざるものを以つて何事をか爲し得ん、又た有りもせず、何處にもなき所のものを以つて、クレイニアスに對して何をか爲し得ん。

クテシッポス曰く、然り何事をも爲し得ざるべし。

然りと雖、修辭家等が會衆の前に演説する時、彼れ何事をも爲さざるか。

彼れ曰く、否、な彼等何事をか爲せり。

而して爲すことは又た作すことなるか。

彼れ同意せり。

然らば何人と雖、有らざる所のものは之を言ふことなし。何となれば、其を言ふとも、之れ何物にもあらざること、爲すことなればなり。而して君は、何人と雖、有らざる所のことを爲す能はざるは已に之れを許容せり。故に君自身の論證に由り、何人も虚言を言ふものなしとなす。然り

と雖若しデオニュンドーロスにして何事をか言ふとせば、彼れ眞なるもの及び有る所のものを言ふなり。

クテシッポス曰く、それ然り、エウチュデーモスよ、然りと雖、彼れの言ふや一種の方法及び態度を以つて之れを言ひ、其物眞に然るがまゝに之れを言はざるなり。

デオニュンドーロス曰く、何ぞやクテシッポスよ、君は何人か事物をありのまゝに言ふものありと言ふか。

彼れ曰く、然り、凡ての紳士及び眞理を語る者は皆な然り。

而して善き物は善にして悪しきものは悪にあらずや。

彼れ然りとなせり。

而して君は紳士なるものは事物をありのまゝに語ると云ふか。

然り。

然らば彼等若し事物をありのまゝに語るとせば、善人は、悪しき物は之れを悪しく言ふか。

彼れ曰く、實に然り、素より善人は悪人を悪しく謂ふなり。故に余は君

に一片の忠告を呈せんに、君等は彼等より悪しく云はれざるやう注意して可なり、何となれば善人は悪人を悪しく云ふものなればなり。

エウチユデーモス曰く、彼等又た大なるものを大なりと謂ひ、温暖なるものを温暖なりと謂ふか。

クテシッポス曰く、然り、彼等は乾燥無味にして冷淡なる論辯家を冷淡に言ひ去るなり。

無禮なり、クテシッポス。君は無禮なり。

彼れ答へて曰く、チオニユンドーロスよ、余は決して無禮を行ふものに非ず。君を愛すればこそ、友情より出でたる忠告を呈したるなれ。若し余にして能くし得べかりしならんには、君が余を目して、余が凡ての人よりも最も大事とせる愛人の滅亡せんことを希望せる者なりとなすが如き無禮なる言語は、決して之れを爲すこと勿らしめしものを。

兩人此く互に怒れるを見て、余は滑稽を以つてして謂うて曰く、あゝクテシッポスよ、他國人には彼等自國の言語を爲すことを許るし、言語に關して争ふことなく、彼等が吾等に盡くさんとせる所を謝すべきなり。彼等

ソークラテース
滑稽を以つて
人を和解す

兩兄弟の術は悪人を變じて善人となすもの

ソークラテース身を以つて實驗に供せんと云ふ

コルヒスのメーディア

クテシッポスも亦

若し悪人或は愚人より、善良有識の人を造り出さんが爲めに、此くの如きの方法を以つて人を滅ぼすの術を知れりとせば——又た此の術は彼等自ら發明したる所なるか、或は他より學びたる所なるか、其何れなりやは之れを問ふの要なく、此術は悪人を除き、善人を以つて之れに代うるを得るものなりとの由なれば——彼等にして若し此術を知れりとせば、彼等之れを知れり、——兎に角、彼等此術を以つて新發明の秘術なりとは今ま此に之れを言へり——彼等の言に従つて此青年を破滅して賢明の人たらしめ、彼れと共に吾等をも賢明の者となさんことは余の求むる所なり。然りと雖若し青年諸君にして、彼等兩兄弟を信することをおまざらんには、余は身を以つて試験の材料に供し、自ら彼等の手術を施すべき所のカリヤ人たらん。此くて余は此の老軀をデオニユソドロスに獻すべければ、彼れ若し余を善となさんには、コルヒスのメーディアの如く、余を壺中に入れ、余を殺し、余を鹽漬にし、又た余を食ふとも可なり。

クテシッポス曰く、ソークラテースよ、余も亦我身を他國人たる彼等に委せん。彼等若し欲せば活きながら余を皮剥ぐとも可なり、余は既に可な

り剥がれたり若し余の剥がれたる皮にして、終に、マルシヤスの皮の如く柔皮の壞となすことなく、徳義の一片と變化せしめらるゝならんには、彼等余の皮を剥ぐとも可なり。而してテオニュソドロス、余を以つて或は彼れに對して怒る所ある者と想像せん。されども其實余は毫も怒る所あらざるなり。而して余はたゞ彼れが余に對して穩當ならざる言語を爲せりと思ふ時に、余は彼れに反對するのみ。あゝ有名なるテオニュソドロスよ、君は無禮と反對とを混同すると勿れ、是等は全く別物たるなり。テオニュソドロス曰く、反對なりと云ふか。何事ぞや、此に反對なるもの無かりしにあらずや。

彼れ曰く、確かに之れ有り、疑ふ可からず。テオニュソドロスよ、君は之れなしと主張するか。

彼れ曰く、君は、何人が、何人に反對したることを聴きたるの證明をも、余に興ふることあらざるべし。

クテシッポス曰く、余がテオニュソドロスに反對することは、君の聴きし所ならん。

君は其れを證明するの覺悟あるか。

彼れ曰く、然り。

而して凡ての事物は其を表出するの言語を有せるものにあらずや。然り。

其は事物の存在に關してなるか、或は無在に關してなるか。

其存在に關してなり。何となればクテシッポスよ、君も記憶せるが如く、人は消極無在を確言すること能はざるべし、之れ何人と雖、有らざるものを確言すること能はざればなり。

クテシッポス曰く、其は何をか意味す。君と余とは其れに關して同じく反對たるべし。

テオニユソドーロス曰く、然りと雖吾等兩人同一物を言述する時、互に相反對なるを得るか。吾等必ず同一物を謂ひ居るに非ずや。

彼れ然りとせず。

或は吾等の内、何れも同一物を謂ひ居らざる時は如何ん。然らば吾等の中何れも、毫も其物に就いて謂ふ所なきにあらずや。

言談に反對なるものなし

彼れ亦之れを許容せり。

然りと雖余若し或物に就いて謂ひ、君は他の物に就いて謂ふか、或は余は或物に就いて謂ひ、君は何物に就いても謂ふ所なき時は、此に君と余との間に反對ありとなすか。言ふ所の者と、言はざる所のものとは如何にして反對たるを得るか。

こゝにクテシッポス緘黙せり。余は驚きて曰く、ヂオニユンドーロスよ、君の謂ふ所は何をか意味す。君の如きの言は余の屢々聽く所にして、又た驚く所なり。此くの如きの言はプロータゴラスの門弟、及び其の以前の人々の唱道し使用する所にして、余よりして見る時は、實に驚くべきの言なり、自殺の言なり、又た破滅の言なりと感せらる。而して今や余は此れに關したる眞理を君より聽かんことを欲す。抑も虚偽なるもの無じとは之れ君の断定せんとする所にして、人は眞を語るか、然らざれば言ふ所なきものなりと云ふにあり。之れ君の立場にあらずや。

彼れ承諾せり。

若し人虚偽を言ふこと能はずとせば、彼れ又た虚偽を考ふること能は

ざるにあらずや。

彼れ曰く、然り。考へ能はず。

世上虚偽誤謬なるものなし

然らば虚偽誤謬の意見なるものも之れ無きにあらずや。

彼れ曰く、有ることなし。

無智なるものなし

然らば世上無智と云ふもの、或は無智者なるものもなかるべし。何となれば、若し無智と云ふものありとせば、無智なるものは事實を誤りたるものにはあらざるか。

彼れ曰く、然り。

而して其事あり得べからざることなるか。

彼れ答へて曰く、あり得べからざる事なり。

ディオニソドロロスよ。君は之れを以つて奇怪なる逆説なりとなすか。

或は君は眞面目に何人も無智に非すと主張するか。

彼れ曰く、君は余を論破するか。

若し君の言ふが如く、虚偽なるものはあり得べからざるものなりとせば、余は如何にして君を論破することを得んや。

論破することもあり能はず

エウチユデーモス曰く、實に然り。

デオニユソドロロス曰く余は、今ま君に、余を論破せよと言ひしともなし、何となれば余は有らざる所の者を君に爲せと言ふと能はざればなり。

余曰く、あゝエウチユデーモスよ、余は此くの如き知識の巧妙卓絶なる發明を悟るに遅鈍にして、或は之れを了解すること能はざるを恐る。故に若し余にして甚だ頑冥不靈の質問を爲すことあらんとも、君願くば之れを寛假する所あれ。今ま若し虚偽、或は誤謬の憶説、或は無知と云ふもの有ることなしとせば、又た誤謬の行爲なるものもあらざるべし。何となれば人は其行爲する時、其行爲に誤ること能はざるべければなりとは、之れ君の意味する所か。

彼れ答へて曰く、然り。

余曰く、余は今ま頑冥なる質問を爲さんに、若し誤謬なるもの、行爲にも、言語にも、思想にもなきものなりとせば、善たることの名に於て、何事を教へんとして君は此地に來りしか。而して君は今ま、何人なりとも學び得る者には、凡ての人間中最も善く徳義を教へ得ることを言しにはあらず

誤謬の行爲もなし

誤謬もなしとせば善とは何ぞや

ソークラテース
を愚昧なる老人
なりと罵る

るか。

チオニユソドロロス曰く、ソークラテースよ、君は、余が始めに言ひし所を今ま此に繰り返へして言ふが如き、實に愚昧なる老人なるかな——若し余にして何事をか昨年言ひたりしとすることも、意ふに君は忘れずして其れをも再びこゝに持ち出だすならん——然りと雖余が今ま言ひし所に毫も加ふる所あらざるなり。

余曰く、あゝ是くの如きに答ふるは實に容易の事に非ず。何となれば是等は智者の言たればなり。而して余は君が最後に言ひたる「余が今ま言ひし所に毫も加ふる所なし」との言の意味の了會に苦しむ者なり。チオニユソドロロスよ、君のかの言何をか意味す。恐くは、余は君の議論を論破すること能はずとの意味なるべし。或は他に意味ありや。願くば之れを教へよ。

彼れ曰く、然り、之れ余の意味する所なり、而して余は君の答へんことを欲す。

余曰く、チオニユソドロロスよ、何ぞや、君の答ふる前、先づ余は答ふべきか。

彼れ曰く、答へよ。

其は穩當なりと謂ふべきか。

彼れ曰く、然り全く穩當なり。

余曰く、如何なる原理に由つて然るか。余は實に君を以つて、甚だ賢明なる人にして、大論理家の資格を以つて吾等に来り、善く其答ふべき時、又た答ふ可からざる時を知れる人なるを想像するを得るなり。而して今や遂に君は口を開かざるなり、之れ君は其發言すべからざる時なるを知れるに由るならん。

彼れ曰く、君は答へずして人を罵詈せり。然りと雖善良なる君よ、君若し余を以つて賢者なりとせば、余の言ふ所に答へよ。

余は君の言に従はざる可からずと想像す、君は先生なればなり。問ふ所あれ。

何かの意思を有せる所のものは生あるものなりや、或は生なきものなりや。

是等は生あるものなり。

デオニムソド
ロス自ら賢者な
りと云ふ

「意味」と「意思」
との別義ある語
の亂用

生ける言語

君は生ける言語なるものあることを知るか。

余は知らざるなり。

然らば君は何を以て余の言は如何なる意思を有せるやを問ひしか。

余は頑冥にして過誤を爲したればなり。然りと雖言語は意思を有せ

りと言ふも恐くば結局正常なるべし——賢人の君以つて如何となす。若

し余にして誤謬に陥るなしとせば君と雖余を論破するとなし、凡て君の

知識は毫も加ふる所あらざるべし。然るに若し余にして誤謬に陥ると

せば君が以て世上に誤謬なるものなしとせる所の言は誤謬と謂はざる

可からざるなり——之れ一年にも足らざる以前に君の發言せし所なり。

然りと雖テオニソドローロス及びエウクレイデスよ、思ふに此くの如き言

論は毫も進歩することあらざるべし。君の論法に於ける驚くべき巧妙

なることを以てするも、尙ほ且つ人を投げ倒ほし、而して自ら倒れざるの

法を發見すること能はざるなり。

此に於てクテシッポス曰く、ヒオス、ツリイ、或は君等自ら如何に、又た何と

稱呼せるかは余の關する所に非ずの人々よ。實に君等は無意味なるこ

兩兄弟の智慧は
人を倒すも亦自
己も倒さるるも
の

兩兄弟はプロ
テウスの如く數
々變態す

ソークラテース
とクレイニアム
と再び前論を總
攬す

とを談話して、何の目的をも有せざる人々なるかな。

余はクテシッポスの或は無禮なる言語を爲さんことを恐れ、クテシッポスを慰諭して曰く、クテシッポスよ、余は前にクレイニアスに言ひし所を、再び君に言はざる可からざるなり。其は君は此兩哲學者の特殊の點あることを了解せざることとなす。此兩人は實は眞面目に非ずして、宛もエジプトの妖術者プロテウスの如く、種々其形狀容姿を變じて、其妖術を以つて吾等を欺くなり。故に吾等メチラオスの如く、彼等が其本形本性を吾等に表はすまでは、彼等をして行かしむる勿らんことを要す。彼等若し熱心なるに至らば、其美の全體は發現すべく、其時吾等懇願要求して其美を輝かさしむることを力めん。而して余は、如何なる形姿に於ける彼等を見んことを願ふやに就いて、吾等の見んと欲する所の形姿を、今一度彼等に示めすは宜しかるべしと信ず。故に余は能ふ限り、歩を進めて、以前に立ち去りし所に至らば、以つて或は彼等の感情を動かさし、又た彼等をして吾等を憐れむの情を起さしむることの望みなきに非ず。此くして彼等若し吾等の深く眞面目なるを見れば、彼等も亦眞面目となるべし。汝

クレイニアスよ、余は如何なる點に於て以前の論點を措きしや。哲學は、研究さるべきものなることに、吾等一致したるに非ずや、又た之れ吾等の結論には非ざりしか。

彼れ曰く、然り。

而して哲學とは知識を得ることなるか。

彼れ曰く、然り。

然らば吾等は如何なる知識を得べき。此は簡單なる答へならずや、曰く、吾等に善を爲す知識ならずや。

彼れ曰く、然り。

若し多量の黄金の隠くしある所を知れりとせば、之れ甚だ宜しきことにあらずや。

彼れ曰く、甚だ宜しかるべし。

余曰く、假令勞苦なくして地中にある所の黄金を掘り出だし、而して凡て之れを吾等の有となし得るとも、吾等に何の益することもなきは余の既に證明せし所なり。又た若し吾等石を化して黄金となすの方法を知

物の正用と善

ると雖、吾等之れを使用するの方途を知らざるに於ては、其知識は吾等に何の價值だにあらざるなり。君之れを記憶せるか。

彼れ曰く、余は十分之れを記憶せり。

其他の知識たれ、金儲けたれ、醫學たれ、或は其他の技術たれ、たゞ其物を作すのみを知りて、其の作したる所のものを使用することを知らざる時は、之れ亦吾等に毫も價值なきものと云ふべし。然らずや。

彼れ同意せり。

今若しこゝに人をして不死ならしむる知識ありとするも、若し其不死を利用するの知識なき時は、前例と同論たりとせば、不死毫も用なきにあらずや。

凡て彼れ同意せり。

余曰く、然らば、愛する少年よ、吾等の要する所の知識は、其物を作すと同時に又た其結果を使用する所の知識たらざるべからず。

彼れ曰く、然り。

而して吾等の欲する所は熟練なる、リヲ翠の製造人或は此種の技藝家

不死も之れを正用せずは何の益もなし

使用の知識

製造者と使用者との幸不幸

たらんとするに非ずして、尙ほ他にありと爲す。何となれば彼等の技藝は、其の之れを製造するの術と其の之れを使用するの術とは全く別物たればなり。彼等同一物を作さんとして其術や別なり。之れ其「リラ」琴製造の術と、之れを弾くの術とは互に大に異ればなり。然らずすや。

彼れ同意せり。

吾等又た笛を製造するの術を學ばんとするものに非ず、之れ亦「リラ」琴と同様なる他のものなればなり。

彼れ同意せり。

余曰く、吾等若し演説を爲すの術を學ばんとせりと假定せんか、—此術は吾等をして幸福ならしむるものなりや如何ん。

クレイニ阿斯曰く、余は然りと思はず。

余問うて曰く、其れに就いて如何なる證據かある。

彼れ答へて曰く、演説に於ては、一方には演説の草稿作者なるものありて、彼れ其作りたる所を演説に用ゆる能はざること、宛も「リラ」琴製造者が其製したる「リラ」を使用し、彈奏すること能はざるが如きあり。又た一

には自ら演説を仕組むこと能はずと雖も、他人の作りたる仕組みを吾が物として演説することは之れを能くする者あり。之れ余の知る所なり、而して之れ演説を作ること、之を使用することとは全く別物なるを示めすものなり。

余曰く、然り、之れ實に演説を作る所の術と、人を幸福ならしむる術とは別物たるを示す十分の證據なりと謂ふべし。然りと雖も余は思ふに、吾等の今こゝに求めつゝある所の術は、其方向に於て發見さるべしと。何となれば、クレイニアスよ、余が此の種の演説を仕組む人々に會する毎に、常に其れ等の人々は實に異常の人の如く感ぜらる、而して驚く勿れ、其術や高尚、神聖なり。實に彼等の術たるや魔法なる大技術の一部にして、魔法と伯仲の間にあるとなす。而して魔術者の術を施こすや、宛も之れ魅惑する蛇、蜘蛛、蠍、及び其他の魔物及び疫病の如き趣を有じ、其術はヂカステースの諸法官及びエックレーシアの普通議會、及び其他人民の諸團體を動かし、能く之れを魅惑し又た之れを慰撫するなり。君は余の言に同意なりや如何ん。

彼れ曰く、然り、君の言ふ所盡く正常なり。

余曰く、然らば吾等何れに行き、又た如何なるものを探ふべきや。

彼れ曰く、余は其途を知らず。

余は答へて曰く、然りと雖も余は其途を知り得ざるに非すと信ず。

クレイニアス問うて曰く、君の思想や如何ん。

余思ふに將官の術は人をして幸福ならしむる所のものなりと。

彼れ曰く、余は然りと考へず。

余曰く、何故に然らずと爲すか。

將官の術は人を獵するの術たるや確實なり。

余曰く、何を以つて然るか。

彼れ曰く、何となれば、如何なる狩獵と雖も、之れを獵し、之れを捕ふる以上の事あらずして、其獲物を獲ると雖も、獵者之れを用ゆる能はず、獵者漁者必ず之れを調理人に致すなり。かの幾何學者、天文學者及び計算者等（是等皆な狩獵者の階級に屬するものにして、之れ彼等自ら圖式を作るに非ずして、前以つて圖式中に存在せる所のものを發見するものなればな

り。余は謂ふ、彼等はたゞ其獲物を獲ることを能くするのみにして、之れを使用すること能はず、其獲し所に或る意味存するに於ては、之れを論辯家に致して應用せしむるなり。

善し、最も美にして又た最も賢なるクレイニアスよ、之れ眞に然るか。

彼れ曰く、眞に之れ大將たる者都市或は陣營を陥れし時、其新に獲たる所は盡く之れを政治家の手に委し去るが如きなり。何となれば大將は戦勝は之れを爲すと雖も其獲たる所を使用する方を知らざればなり。

又た之れ、鶉を捕ふる者は之れを捕らへて鶉飼養者に渡すが如し。故に若し吾等をして幸福ならしめ、之れを作り、之れを獲て又た之れを利用せしむる所の術を得んとせば、大將たるの術は決して其目的に合せるものに非ずして、吾等之れを他に求めざる可からざるなり。

クリ ソークラテースよ、君の言ひし所は、之れ少年クレイニアスの言ひし所なるか。

ソークリトーンよ、君は之れを疑ふか。

クリ 余は之れを疑ふ者なり、若し彼れ此等の言を爲せしとせば、彼れ

や、其教師として已にエウチユデーモス或は其他何人をも要せざるべきなり。

ソー あゝ余は忘れたりしならん。眞の答辯者はクテシッポスなりき。クリ クテシッポスなりとか。あゝ何事ぞや。

ソー 兎に角余の知れる所は、余が是等の言を聴きしことにして、是等の言はエウチユデーモスの言ひし所にも非ず、又たデオニュンドーロスの言ひし所にも非ず。クリトーンよ、余は敢て言ふ、是等は或る優れる人間の言ひし所にして、余が之れを聴きしことは確かなり。

クリ 然り、ソークラテースよ、必ず或る大に優りたる人の言ひし所なるべしとは余も亦思ふ所なり。されども君は其研究を進め、其求めつゝありし所の術を發見したりや否や。

ソー 親愛なる君よ。余は其術を發見したりやとか。否な發見せざりしなり。吾等實に自ら滑稽なりと感せり。宛も小兒の雲雀を捕へんとするが如く、殆ど此術を得んとして常に之れを逸し去らしむるが如くなりき。されども余は此話しを盡く爲さざる可からざるか。吾等論じ

帝王の術は人を
幸福ならしむる
か

政治の術

論じて終に帝王の術に及べり。而して此術果して人をして幸福ならしむるものなりや否やを問ふや、吾等此所に迷路殿に入りしが如く、已に其終局の點に達したりと思ふや、忽然又た始めの所に出で來り、尙ほ其途をたざらざる可からざるなり。

クリ ソークラテースよ、其れより如何になりしか。

ソ一 余は君に語るべし。帝王の術は政治と同一なるものと謂ふことに歸着せり。

クリ 而して其れより、如何になりしか。

ソ一 此帝王の術或は政治の術なるものは、自ら造りし所のものを使用するものなりとし、大將たるの術も、其他諸種の術も其の最優權を之れに讓與せり。之れ吾等の求めつゝありし其術なるが如く思はれたり。此術や實に善政府の原因にして、アイスキュロスの言を以つて云ふ時は、彼れ一人、國家なる船の艦に立ちて一切の事物を運轉し、統御し、又た之れを利用しつゝありと謂ふべきなり。

クリ 而して其論正常なるに非ずや、ソークラテースよ。

ソー クリトーンよ、君若し此後如何なる議論ありしやを聴くを好まは君之れを判断すべし。吾等再び研究を進め、此くの如き質問は提出されたり、曰く、此の最優権を有せる帝王の術なるものは果して吾等に益する所ありやと。而して、確かに然りとば其答へなりき。クリトーンよ、君亦同様の答へを爲さざるか。

クリ 然り同じく余は答へん。

ソー 帝王術は何を爲すものなりと君は言はんとするか。若し醫術は其れに附隨する諸技術に對して最優権を有するものと假定して、同様なる質問を君に提出する時、君は醫術は健康を生ずるものなりと答ふるならん。

クリ 然り、余はしか答へん。

ソー 又た若し君の本職たる農業術は、其れに従屬する諸技術に對して最優権を有せる者と假定せば、農業術は果して何を爲すものなるか。土地の收穫を以つて吾等に供給するものにはあらざるか。

クリ 然り。

帝王術は何を爲すものか

ソ— 然らば最優權なるものは帝王術に附與されしとせば、此術果して何事をか爲す。恐くば君は即答すること能はざるべし。

クリ 然り、直に答ふる能はず。

ソ— クリトーンよ、吾等に於ても然りしなり。然りと雖、兎に角、若し此術にして吾等の求むる所のものなりとせば、其有益なるものたるべきは君の知れる所なるべし。

クリ 然り。

ソ— 必ずや吾等に、或善を爲すべきものたるべきにあらずや。

クリ 然り、ソークラテース。

ソ— 而してクレイニアスと余とは、知識は唯一の善なりとの結論に達したるにあらずや。

クリ 然り、此は君の言ひし所なり。

ソ— 政治の其他の一切の結果は、其數甚だ多く、例せば財産、自由、平安等の如きは、其物自身は善にもあらず、又た惡にもあらざるものなりと雖、若し政治の學術にして、眞に吾等に善を爲し、吾等を幸福ならしむるもの

知識は唯一の善なりとの結論

政治は知識を興ふるものなるか

帝王術は人を賢
ならしむるか

一切の技術を教
ふるか

帝王術の知識と
知識の知識に
過ぎず

内空の知識

なりとせば、此の學術は又た吾等をして賢ならしめ、又た吾等に知識を與ふるものたらざる可からず。

クリ 然り、君の報告に由れば、之れ君の達したる結論なり。

ソー 而して帝王術は人をして賢ならしめ、又た善ならしむるものなりや如何ん。

クリ 何故に然らざる。ソークラテース。

ソー 何ぞや。此帝王術は一切の人を、種々の關係に於いて然かなし、大工の術、靴直し及び其他一切の技術を教ふるものなりや如何ん。

クリ 余は其事を爲すと考へざるなり、ソークラテースよ。

ソー 然らば帝王術の知識なるものは如何なるものにして、吾等は是れを以つて何事を爲さんとするか。何となれば此術は善にも非ず惡にもあらずる所の如何なる職業の基礎にもあらず、又たは如何なる知識にもあらずして、たゞ知識其物の知識たるのみなればなり。果して然らば此物何たるを得るか。吾等又之れを以つて何を爲さんとするか。クリ トーシよ、或は吾等此術を以つて、他人を善ならしむる所のものなりと謂

はんか。

クリ 兎も角も。

ソー 然らば彼等何事に善にして有益の人たるべきか。而して其善とは果して何事に善なるべきやは之れを決定することなくして、吾等又た之れを反復して、彼等をして又た他の人々を善ならしめ、其人々は又た他の人々を善ならしむと謂ふ可きか。何となれば吾等は所謂政治の結果なるものは、措いて之れを顧みざりしを以つてなり。あゝ之れ昔し昔しの歌をこゝに繰り返へすものにして、吾等は幸福の技術或は學術の知識を去ること、以前よりもより遠しと云ふには非ずと雖、尙ほ依然として遠きにと云ふべし。

クリ ソークラテースよ、君は實に大なる困難に陥りし者なるかな。

ソー 此に於てクリトトンよ、余は自ら難船の位置にありと感じ、大聲を發して、熱心に呼び、此の議論の渦中より、余及びクレオニアスを救ひ出さんことを此他國ハたる兩兄弟に求めたり。而して余は彼等を以つて大神ゼウスの雙兒カストール及びポリュデウケースに比し、彼等が眞面目

ソークラテース
知識を興へんこ
とをエウチュデ
ーモスに乞ふ

エウチュデーモ
ス、ソークラテ
ース自ら知識を
有せることを言
ふ

或物を知らば一
切を知れりとの
エウチュデーモ
スの詭辯

に熱心に、今後吾等の生活をして幸福に送ることを得しむる所の知識を
吾等に興へんことを願へり。

クリ エウチュデーモスは君に其知識を示めしたるか。

ソークラテース、然り、彼れ高尚なる語調を以つて此く謂うて曰く、ソークラテ
ースよ、余は君が疑へる所の此の知識を君に教示すべきか、將た又た君は已
に自ら此知識を有せることを證明すべきか。

余曰く、君は又た此くの如き事をも爲し得る力を有せる所の幸福なる
人なるか。

然り余は此の力を有せるものなり。

然らば、寧ろ余は自ら此の知識を有せることを余に證明せんことを願
ふ、余の如き老年に在つては、今更ら學問するの勞あらんよりも、自ら已に
此知識を有せりとならば、以つて大に愉快なりとなす。

彼れ曰く、然らば余に告げよ、君は或物を知れりや。

余曰く、然り余は數多のものを知れり、然りと雖左程重要なるものを知
れるには非ざるなり。

彼れ曰くよし。而して何物たりとも有るものたると同時に、又た有らざるものたることを許容するか。

否な、決して。

君は又た或物を知れりと言ひしに非ずや。

然り余はしか云へり。

君若し知らば之れ知れるなり。

然り、余の有せる所の知識を知るなり。

其は差異を爲すことなし、君若し知れりとせば、又た之れ一切のものを知れるものたらざる可からざるにはあらざるか。

余曰く、決して然らず、何となれば、此他に余の知らざる所の數多のものあればなり。

君若し知らずとせば、君は知らざるなり。

余曰く、然り、友よ、余の知らざる所のは余の知らざる所なり。

君は知らざる所あり、而して今ま前に知れる所ありと云へるに由つて観る時は同一事物に就いて、同時に知り、又た知らざるものと云ふべし。

「エウチテデーモスよ、所謂適宜の多言とは君の事なり。されども尙ほ君に願はざる可からざる所は、余の求むる所の其の知識を余自己に之れを有せることの證明なりとす。君の意味せる所は—凡て物は同時に有たり又た無たること能はず、余若し一物を知らば又た一切の物を知る、何となれば、余は知ると同時に知らざること能はざればなり、而して若し余にして一切の物を知るとせば、余は又たその知識を有せざる可からずと云ふにあるか—、之れ君の巧妙なる思想なりとして可なるべきか。

彼れ曰く、然り、ソークラテースよ、君の口より自ら云へるが如きなり。余曰く、エウチテデーモスよ、然りと雖、此事又た君等に於ても然るにはあらざるか。若し余にして君及び親愛なるチオニソドロス等と同一なる場合にあらんには、余は不満なること能はざるなり。然らば君等兩人余に告げよ、君等は或物は之れを知り、或物は之れを知らざることなきやを。

チオニソドロス曰く、ソークラテースよ、決して其事なし。

余曰く、君の言ふ所の意味や如何ん、君は何物も知らずと云ふか。

一切のもの知らざるなしと云ふ

彼れ答へて曰く、否な、余は或物を知れり。

余曰く、然らば何物たれ之れを知らば、君は其他一切のものを知れりとなすか。

彼れ曰く、然り、一切のものを知る。之れ余等に於て然る如く、君に於ても亦然り。

余曰く、あゝ如何にも驚くべき事なるかな、又た如何にも大なる幸福なるかな。而して其他一切の人々、皆な一切の事物を知るか、或は然らざれば、何物をも知らざるものなるか。

彼れ答へて曰く、實に然り、人は或物を知ると同時に又た其他を知らざること能はず。知ると同時に知らざること能はざればなり。

余曰く、然らば其推論は如何んとなす。

彼れ答へて曰く、彼等一切の人若し或一物を知らば、又た一切の事物を知るなり。

余曰く、あゝチオニソンドーロスよ、余は今始めて君の熱心にして真面目なるを知れり、余は辛くも君を此點にまで致すことを得たり。而して君

デオニユソド
ロス一切知らざ
る所なきか、工
藝も、裁縫も、
靴直しも、果の
数も

クアシツボス
明を求め爾兄弟
の齒数を言ひ當
てしむ

は真に一切の事物を知るか—大工の事も獸皮を切斷するの術をも。

彼れ曰く、然り。

裁縫も君亦之れを知るか。

然り之れを知れり。

靴直しの術も亦。

然り。

天上星辰の數、地上砂石の數をも之れを知るか。

然り、君は、吾等を以つて、此くの如きことに對して、知らずと答ふるものなりと思ふか。

此ここにクテシツボスを介みて曰く、ゼウスの神かけて、余の願ふ所は、君は其の言へる所の果して真なりや否やを知るに足るべき或る證據を余に與へんことなり。

彼れ曰く、如何なる證據を君に與へんか。

此事を余に告げよ、君はエウチテモスの齒の數幾何なりやを、而してエウチテモスは又た君の齒の數幾何なりやを言ひ當ンべし。

舞踏も、刀劍の
間に跳躍するこ
とも、車輪の上
に可憐すること
と能くすと云ふ

君は、吾等が一切の事を知れりと云ふことを信せざるか。

クテシッポス曰く、確かに信せず。且つ君は此一事を余等に告げざる可からず。さすれば吾等君は眞理を語る人なりとせん。君若し齒の數を云はゞ、吾等之れを數へ、而して君等誤るとなしとせば、吾等又た君の其他の言をも信すべしと。而して兩人はクテシッポスを以つて戲言を爲せるものなりと想像し、クテシッポスの言ふ所を行ふことを爲さず、又た其質問に對して答ふることなく、たゞ彼等一切の事知らざるなしと言ふを以つて自ら満足せり。此に於てクテシッポス今や其氣質を制壓することを弛るめ始めたり。而して如何なる質問と雖、クテシッポスは之れに避易する者に非ず。彼れ兩人に向つて世上最愚の者を知るかを問ふや、兩人宛も野猪の突進するが如く、忌憚なく、知れりと答へたり。クリトーンよ。余も亦自ら兩人の言を信する能はずなり、遂にエウチュデーモスに問うて曰く、チオニゾドーロスは舞踏することを得るやと。

彼れ確かに能ふと答へぬ。

余は、又た問うて曰く彼れ其の年齢に於て、多くの刀劍の間に跳躍し、車

生れぬ前にも知
り居たりと云ふ

輪の上に回轉し、又た彼れ此くの如き至大の熟練に達したりやと。

彼れ曰く彼れ何事なりとも之れを爲し得べし。

君は以前より之れを知れるか。

彼れ曰く、以前より然り。

君の小兒なりし時、君の生れし時にも然るか。

彼等兩人共に答へて曰く、小兒なりし時にも生れし時にも知り居たり。

余は之れを信じ能はざりき。然るにエウチユデーモス曰く、ソークラテ
ースよ、君は實に疑ひ深き人なるかな。

余曰く、然り、若し余にして君の賢明の人たることを知らざりしならん
には、余或は疑ひ深きものたりしなるべし。

彼れ曰く、君若し余の言に答へば、余は君をして之れと同様なる驚くべ
き自白を爲さしめん。

余曰く、余は此事に關して自ら確信するを得ば、實に之れ余の最も幸と
する所なり。若し余は眞に賢明の人たりしと雖、前には自ら之れを知ら
ず、而して君は余が一切の事を知り、又た以前より之れを知り居たるを

證明せば、余の一生に於いて之れに勝れる嬉しきことあらざるなり。

彼れ曰く、然らば答へよ。

余曰く、問へ、然らば答へん。

或るものを知れるか

ソークラテースよ、君は或物を知れるか、或は又た何物をも知らざるか。

余曰く、或物を知れり。

君は君の知れる所のものにて知れるか、或は其他の或物にて知れるか。余の知れる所のものにて知れり、而して君の意味する所は余の精神にてと謂へるなるか。

ソークラテースよ、君は自己に問はれたる所を問ひ返へすことは耻辱なりと思はざるか。

余曰く、余はたゞ君の命する所に唯れ従はんごせり。今若し君の問ふ所の何たるやを知らず、而も君は答へよごして、其問題の意味を問ひ返へすこと勿れとせば、然らば余は何を爲さば可ならんか。

彼れ曰く、君は余の言ひし所に關して、何等か思想あるに相違なかるべし。

余答へて曰く、然り。

然らば君の解したる所に由つて、余の意味する所に、答へよ。

余曰く、夫れ然り、然りと雖、君の一方の意味にて問ひし所を、余は他の意味に解して之れに答へ、以つて其正鵠を得ざる時は、君は果して夫れを喜ぶか。

之れ甚だ余の喜ぶ所なり。されども想ふに此は等しく君を喜ばしめざるべし。

余曰く、君の言ふ所を了解するに非ざるよりは、余は決して答へざるべし。

彼れ曰く、君は空談家なり、又た老物なり、故に君の解したる所を以つて余に答へんとせざるなりと。

彼れ前に言語の係蹄に由つて余を捕へんとせし時、余之れを明断にせしより彼れ余に怒れるなり。余曩きにコンノスに反対したる時、コンノス常に余に怒る所あり、又た余を以つて頑冥不靈となし、以つて余を疎んじたるを記憶せり。而して余のエウチュデーモスを師とせんとするや、余

思へらく、彼れ余を以つて鈍物なりとし而して余を門弟子として容受するを拒むことあらんことを恐れ、彼れをして其好むがまゝに爲さしむるに若かずとせり。而して余は謂うて曰く、エウチユデーモスよ、君は余よりも一層上達せる辯論家なり。何となれば、余は此術を以つて余の専門とせざるを以つてなり。故に今一度び問ふ所あれ、余は答ふべし。

彼れ曰く、然らば今一度答へよ、君は、知れる所のものは或物にて之れを知るか、或は何物にてもなき物にて之れを知るか。

余曰く、然り余は余の精神にて之れを知れり。

彼れ曰く、人は質問以上の事を答ふるものかな。何となれば余の問ひしは君が何にて知れりやと問ひしに非ずして君は或物にて知れりやと問ひしものなればなり。

余曰く、余愚にして君の問ひし以上の事を答へたり、然りと雖君幸に之れを免るせ。而して今や余はたゞ答ふるに、余の知れる所の物は、或る物にて知れることを以つてせん。

彼れ曰く、其の或物は常に同一物なるか、或は、或時は一物たり、又た或時

は他物たりや如何ん。

余答へて曰く、余の知る時は余は常に是にて知れり。

君は尙ほ其答言に冗語を添加することを止めざるか。

恐くは「常に」なる語は、余をして困難に陥らしめしならん。

君に在つては蓋し然らん、然りと雖、吾等に在つては然らざるなり。又
た次に答へよ君は常に之れを知れるか。

常に知れりと云はん。何となれば余は「知る時」なる語を撤回せよと言
はれたるを以つてなり。

君は常に是れにて知るか、或は常に知るは、或物は是れにて知り、而して
或物は他の或物にて之れを知るか、或は君は凡てのもの皆な是れにて知
るか。

余答へて曰く、余の知れる所のものは、余は凡て是れにて知れり。

彼れ曰く、ソークラテースよ、君又た冗語をなせり。

余曰く、然らば「余の知れる所のもの」なる語を撤回せん。

否な何語をも撤回するの要なし、余は君に哀を乞はんとはせざるなり。

されども余は問はん、君は一切のものを知らずして一切のものを知らざることを得るとなすか。

之れ不能のことなり。

彼れ曰く、君は自ら一切の物を知れりと自白せる人なるを以つて、君の好む所の如何なる言語なりとも添加して可なり。

余曰く、若し『余の知る所のもの』なる言語中に含有せる余の條件にして成立することを許容されずとせば、君の言へる所や真にして、余は一切のものを知れりと言ふべし。

君は、是等を知る時なる言を加ふるも加へざるも、其の知れる所のものにて常に一切のものを知れることを許容せしに非ずや。何となれば君は常に又た一時に一切のものを知れることを承認せしを以つてなり、乃ち君は其小兒なりし時も、其誕生したる時も、其成長したる時も、其未だ生れざりし前も、又た天地の存在せざりし前にも、君は一切のものを知りしものなるべく、又た余若し君をして今も其知れることを繼續せしめんとするの心あらんには、又た其の如くなすを得るは余の誓つて言ふ所なり。

善は不正なりと
のことはソクラ
テース知らずと
なす

余曰く、敬すべきエウチュデーモスよ、君若し真に真理を語りつゝある者ならんには、其心にて有らんとは余の希望する所なり。然りと雖、君若し君の長兄デオニュソドロスの援助あるに非ざるよりは、君の之れを成すの力あることに付いては、余は尙ほ疑ひなきこと能はざるなり。君若し長兄の援助あらば、此の事を爲すを得ん。余は君等如き驚くべき知識ある人に然か教へられたるを以つて大體に於ては、真に一切の事物を知れることを疑ひ能はずと雖、エウチュデーモスよ、善は不正なりと云ふが如きことは、余は如何にして之れを知るを得べきや。余は之れを知れりや否や。

君の之れを知れるや確實なり。

余は何を知れりや。

善は不正に非すと云ふことなり。

余曰く、真に然り、余は此事は以前より知り居たりと雖、余の間ふ所は善は不正なりと云ふことは、何處にて之れを學びたりやと云ふにあり。

デオニュソドロス曰く、何處にても學ばざるなり。

余曰く、然らば余は此事を知らず。

此に於てエウチユデーモス、デオニユソドーロスに謂うて曰く、汝は自ら議論を破滅せしめつゝあり。之れが爲めにソークラテースの知らざることとは證明され、且つ又た、遂には、彼れ知れると同時に又た知らざることとなるなり。

デオニユソドーロス赤面せり。

此に於て余はエウチユデーモスに向つて謂うて曰く、君は如何に考ふるや。君の全知の長兄は誤謬を爲せしものゝ如きにあらずや。

デオニユソドーロス直に答へて曰く、何とか云ふ、余は果してエウチユデーモスの兄なるか。

此に於て余は曰く、善良なる友よ、願くば余とエウチユデーモスとの談話を中斷すること勿れ。又たエウチユデーモスは、余に不正の善たることを知れる由を證明せんとしつゝあれば、願くは其を妨ぐることを勿れ。君幸に余が此くの如き學科を學び得ることを許可せよ。

デオニユソドーロス曰く、ソークラテースよ、君は遁走せんとして答ふる

不正の善なること
を學ぶを得し
めよ

ことを否めるなり。

余曰く、敢て異しむを要せず、余は已に君等の中一人にだも敵すると能はざれば況や、二人に對しては遁れざるを得ざるは一層明瞭のとなす。余はヘーラクレスに非ず。ヘーラクレスの如き英雄を以つてするも、尙ほ且つヒュドラと戦ふこと能はざりき。ヒュドラは雌性の「ソフィスト」にして、一體にして數頭を有し、其中一頭を斬り去るとも、其斬り口より又々數頭を發芽するの能力を有せり。次にヘーラクレスは第二の怪物たる巨大なる海蟹に出會ひたり。此海蟹亦「ソフィスト」にして新に航海より到着したるものゝ如く見へたり。而して此怪物其巨口を開き、咳まんとして左側よりヘーラクレスに迫るや、流石のヘーラクレスも大に避易し、其甥イオラオスに援助を求めければ、イオラオス來りて彼れを救へり。然るに若し余のイオラオスたる彫刻師パトロクレース來るあらば、惡しき事を一層惡しく爲すの外あらざるべし。

テオニュンドーロス曰く、君今ま此言を爲せり。かのイオラオスは君の甥に非ずして、寧ろヘーラクレスの甥なりしか。

余曰く、チオニソドローロスよ、君は、余がエクテデーモスの知識を學ばんとするを嫉妬し、之れを妨げんが爲めに切りに問はんとせるは余之れを知る、故に余は寧ろ答ふるを以つて可となす。

彼れ曰く、然らば答へよ。

余曰く、然らば余はたゞ答へて云はん、イオラオスは決して我甥に非ずしてヘーラクレースの甥なり。而して其の父は我が兄弟パトロクレースに非ずしてイフィクレースなり。イフィクレースはヘーラクレースの兄弟にして、其名も亦近似せりと謂ふべし。

彼れ曰く、パトロクレースは君の兄弟なるか。

余曰く、然り、彼れ余の異父の兄弟なり、而して母の子にして父の子には非ず。

然らば彼れ君の兄弟たり、又た兄弟たらざるなり。

余曰く、愛する善人よ、父を同うせざるなり。彼れの父はハイレデーモスにして余の父はソフロニスコスなり。

然らばソフロニスコスもハイレデーモスも同じく父なるか。

石と人と同じき
かと云ふ

ソークラテース
は父なし子なり
との説辯

余曰く、然り、前者は余の父にして後者は彼れの父なり。

彼れ曰く、然らばハイレデーモスは父に非ず。

余曰く、彼れは余の父には非ざるなり。

然りと雖、父は父たらざるを得るか。或は君は石と同じきか。

余曰く、君假令余は石なりと論證し得ることあらんとも、余は自ら石な

りと思ふこと能はざるなり。

君は石とは別物にはあらざるか。

然り石とは別物なり。

石とは別物なりとせば君は石に非ざるなり。黄金とは別物なりとせ

ば君は黄金に非ざるなり。

真に然り。

彼れ曰く、此くてハイレデーモスは父と別物なりとせば父に非ざるな

り。

余答へて曰く、思ふに彼れ父に非ざるべし。

エウチュデーモス議論を繼承して曰く、何となれば今ま若しハイレデー

父は一切の人の
父なりと云ふ

モスを以つて父なりとせば、ソフロニスコスは父とは別物にして父には非ず。而してソークラテースよ、君は父なき人となる可ければなり。

クテシッポス議論を引き取りて曰く、君の父は余の父とは別物なりとせば、君の父に就いて云ふも亦同日の論にあらずや。

エウチユデーモス曰く、確かに父に非ず。

然らば彼れ同じきか。

彼れ同じ。

エウチユデーモスよ、余は親族たるを好むと言ふこと能はず。然りと雖彼れたと余の父たるのみなりや、或は又た其他一切の人々の父たるか。

彼れ答へて曰く、其他一切の人々の父なり。君は彼れを以つて父なり又た父に非ずと想へるか。

クテシッポス曰く、余は實に其の如く想へり。

君は黄金は黄金に非ず、人は人に非ずと想ふか。

クテシッポス曰く、エウチユデーモスよ、是等は同階級なる物に非ざるなり。

君は大に注意して可なり。實に君の父は萬人の父なりと謂ふが如きは、

エウチユデーモ
スの父は又た其
他の動物の父な
り

母も亦海膽等の
母なり

魚も小狗も豕も
皆エウチユデー
モスの兄弟

君の父は犬なり

奇怪なる論と云はざる可からず。

彼れ曰く、されども然るを如何にせん。

クテシッポス曰く、何とか云ふ。君の父は單に人間のみの父なるか。或は又た馬及び其他の動物の父なるか。

凡ての物の父なり。

君の母も亦凡てのものゝ母なるか。

母も亦た然り。

然り、而して君の母は又た海膽の子孫を有せるか。

彼れ曰く。君の母も亦然り。

白楊魚も、小狗も、豕も皆な之れ君の兄弟なり。

然り、又た君の兄弟なり。

君の父は犬なり。

彼れ曰く、君の父も然り。

デオニユンドーロス曰く、クテシッポスよ、君若し余の間ふ所に答ふるなら

んには、余は直に君をして同様なる承認を爲さしむべし。君は犬を有す

と云へり。

クテシッポス曰く、然り、一匹之れを有せり。

其犬兒狗を有せるか。

然り、而して彼等甚だ親犬に似たり。

其犬は兒狗等の父なるか。

彼れ曰く、然り、余は、此犬は慥かに兒狗等の父にして、又た其の母も共に來れるを見たり。

而して其犬は君の有にあらずや。

然り、確かに余の有なり。

然らば此犬は父にして、又た君の有なり、故に此犬は君の父なり、兒狗等は君の兄弟なり。

デオニユンドーロスはクテシッポスの未だ發言せざる内に、急ぎて兩人の問答中に割り込みて謂うて曰く、余は一小質問を爲さん、曰く、君は其犬を打つことありや。

クテシッポス笑ひながら謂うて曰く、然り、打つことあり、然りと雖余は犬

親犬はクテアレツ
ポスの父なり

其犬を打つは父
を打つなり

を打たんよりも寧ろ犬の代りに君を打たんことを欲す。

彼れ曰く、君の犬を打つは君の父を打つに外ならず。

クテシッポス曰く、余は寧ろ君の父を打つべき多くの理由を有す。君の父は君の如き此くも賢明なる子等を生むの時、果して何を考へ居たりしならん。君及び君の兄弟たる兒狗等の此父は、君の此知識より甚だ大なる善を得たりしならん。

然りと雖、クテシッポスよ、彼も君も多くの善を要せざるなり。

彼れ曰く、エウチユデーモスよ、君は又た之れを要せざるか。

余及び其他何人も之れを要せざるべし。扱て、クテシッポスよ、余に此事を告げよ、人若し病める時服藥するは善なるか、或は悪なるか、又た戦争に出づるに當り、武裝して行くは武裝せずして行くよりも善なるか、或は悪なるか。

余は曰はん善なりと。然りと雖余は君等の巧妙なる術に陥ることを知る。

彼れ答へて曰く、君若し余の言に答へなば發見する所あるべし。君は

藥劑は成るべく
多量に用ゆべき
か

出陣の時ほ成る
べく數多の武器
を携帯すべきか

ゲーリヲユオーン
及びブリアレオ
スの武裝

人若し其必要ある時は服藥するは善なりと言へり、然らば其藥劑は成ら
ん限り多量に之れを服用するは善なるか。ヘレボロスを一車載服用す
るも其人には過量にはあらざるか。

クテシッポス曰く、エウチヌデーモスよ、人若しデルフォイの神像の如き大多
量を服用すとせば、之れ決して善に非ず。

彼れ曰く、若し出陣する時は武器を携帯するが善なりとせば、槍も楯も
能ふ限り多數に之れを携帯すべきか。

クテシッポス曰く、然り、君は出陣する時はたゞ一楯、一槍の外携帯すべか
らずとなすか。

然り。

君はゲーリヲユオーン及びブリアレオス等を武裝するに一槍一楯を以つ
てせんとするか、君及び君の仲間の人々等は、武器を以つて闘ふの術に長
せる人なる可ければ、此事に關しては君等却つて熟知せる所なるべしと。
此にエウチヌデーモス緘黙し、デオニソドロス以前の答言に歸りて問う
て曰く。

黄金を有すること
多きは益々よ
し

スキュチア人の
黄金の頭蓋

観ることに就い
て

君は黄金を所有するは善なりと思ふや如何ん。

クテシッポス曰く、然り、而して多く所有するは益々善なり。

何れの處にも又た何時にても金銭を有するは善なるか。

彼れ曰く、實に之れ大善なり。

君は黄金は善なりとなすか。

彼れ答へて曰く、然り余は善なりとなす。

然らば人は何處にも、又た何時も、能ふ限り多くの黄金を所有すべく、其腹中には三タレント、其頭中には一タレント、又た其兩眼中には各一スタテールの金貨を藏するものは幸福の人なりと謂ひて可なるべきか。

クテシッポス曰く、然りエウチュデーモスよ。スキュチア人は其頭蓋中に黄金を有するものを以つて最も幸福にして又た最も勇敢なる人となせり。(之れ君が犬と父との事を言へる君の語法の一例たるに過ぎず)。而して尙ほ一層方外なるは、彼等は金箔にて塗飾せる自己の頭蓋より吞み、能く自己の頭中を觀、又た其手中に自己の頭を保持するなり。

エウチュデーモス曰く、スキュチア人及び其他の人々は、視覺の性質を有せる

ものを見るか、或は視覺の性質を有せざるものを視るか。

視覺の性質を有せるものなるや明かなり。

彼れ曰く、君も亦視覺の性質を有せる所のものを視るか。

然り。

然らば君は吾等の衣服を視るか。

然り。

然らば吾等の衣服は視覺の性質を有せり。

クテシッポス曰く、彼等は如何なる範圍と雖之れを視ることを得るなり。

彼等何を見ることを得るや。

何物をも見ると能はず。然りと雖も、善人たる君よ、君或は彼等を以つて視ざるものと想はん。されどもエウチュデーモスよ、若し言語すると同時に、又た何事をも言はざるを得るとせば、君は睡眠せざる時は、坐睡し居たる者なり。之れ君の爲せる所と余に見ゆるなり。

デオニュンドーロス曰く、談話する者にして無言なると有り能はざるか。クテシッポス曰く、能はず。

有言と同時に無言、無言と同時に有言

又た無言なる者にして言ふこと有り能はざるか。

彼れ曰く、此は一層あり得べからざることなり。

然りと雖も、木石鐵條等に就いて謂ふ時は、君は是等を以て無言のものなりと言ふあらずや。

否な、余が、鍛冶屋の前を通行せし時は然らざりしなり。鐵條は之れに觸れし時は恐ろしき音響を發し大聲以て叫びたり。是に由つて之れを觀れば、君の知識は不思議にも誤れるが如し。然りと雖、願くば、君が談話せる時無言たるを得るとの論を余に教へよと。(余思ふに愛人クレイニアス此場に在るを以つて、クレシッポスは此に其の性急なる氣質を制し居たるものゝ如し)

エウチテデーモス曰く、君の無言なる時は、一切の事物無言なるにはあらざるか。

彼れ曰く、然り。

然らば、若し吾等の語りつゝある所の事物は一切の事物中に含まれ居るものなりとせば、言語することは即ち無言たるなり。

クテシッポス曰く、何ぞや。然らば、一切の事物は無言なるにはあらざるか。

エウチユデーモス曰く、決して無言に非ず。

善良なる友よ、然らば是等一切の事物は言語するか。

然り。言語するものは言語するなり。

クテシッポス曰く、否な、余の間ふ所は、是等一切の事物は無言なるか、有言なるかと云ふにあり。

デオニソドロロス急に言語を介みて曰く、無言に非ず、有言に非ず、無言にして有言なり。されども此く言ふ時は君は此答言を以つて「益する所なし」と云はん。

此に於てクテシッポスは其性質の如く、大聲以つて破笑して曰く、君の兄弟なるエウチユデーモスは進退維れ谷まりたる二重體ダブルの危道に陥りたれば全く彼れの論や終結せるものなりと。此言大にクレイニアスを悦ばせ笑はせければ、クテシッポスは十倍の喧噪を増せり。されども余は彼れが兩兄弟より、必ず此の答言を拾ひ上ぐべしと思ふことを禁じ得ざりき。

エウチユデーモス
ス窮す

美なるもの

何となれば常今、他に彼等兩人の如き知識ある者あらざればなり。故に余は曰く、クレイニアスよ、君は何故に此く嚴格にして美なるものを笑ふやと。

デオニュソドロロス曰く、何ぞや、ソークラテース、君は世上美なるものを見たるか。

余答へて曰く、然りデオニュソドロロスよ、余は多くの美なるものを見たり。

美其物と俱存のもの

其等は美以外のものなるか、或は美と同一のものなるか。

余は此疑問に答へざる可からざるに付いて大に困却せり。而して謂へらく、之れ余が口を開きたる罪の報ひなるを如何にせんと。されども余は答へて曰く、是等は絶対の美とは同一に非すと雖、各々是等と共に存せる所の美を有せるなりと。

然らば牡牛若し君と共に在る時は君は牡牛なるか、デオニュソドロロス若し君と共に在る時は君はデオニュソドロロスなるか。

余答へて曰く、決して然らず。

牛と俱存せば君は牛なるか

彼れ曰く、然りと雖一物他のものと俱に存せるに由りて、其物は他のものたるの理由や如何ん。

之れ君の難解とせる所なるかと余は云へり。何となれば余は心を決して彼等兩人の熟達せる術の摸倣を始めたればなり。

彼れ答へて曰く、勿論、余を始めとして、全世界の人皆な存在せざる所のものに就いては難解とせり。

余曰く、テオニソドロスよ、君は何をか意味す。尊敬すべきことは尊敬すべきことなり、卑しきことは卑しきことにあらずや。

彼れ曰く、其は余の喜ぶ所なり。

君は其れを喜ぶか。

彼れ曰く、然り。

君は又た同は同にして、他は他なることを承認するか、之れ必ず他は同に非ざればなり。意ふに此事に關しては小兒と雖敢て解し難しとせざる所なるべし。然りと雖テオニソドロスよ、君は故意を以つて最後の問題を誤りたるものゝ如し。何となれば全體より見る時は、君及び君の

善真なる職工鍛
冶、陶工、料理人

兄弟は、其専門の業に於ける善良なる職人にして、辯論家の業を爲すには最も秀出したる人なるが如ければなり。

彼れ曰く、然らば善良なる職人の業とは何ぞや、先づ第一、鋸を使用するは何者の業なるぞ、之れを告げよ。

鍛冶の業なり。

壺を作るは何者の業なるぞ。

陶工の業なり。

或は殺し、或は皮剥ぎ、或は削り、或は煮、而して料理するは何者の業なるぞ。

余曰く、料理人の業なり。

人若し其業を爲す時は、之れ正しく行爲したるものと謂ふべきか。

然り。

而して料理人の業は或は削り、或は皮剥ぐことなるは君の許容せる所なるか。

然り、余は之れを承認す。然りと雖君は餘りに余を困らしむると勿れ。

右に就いての職

ソークラテース
彼れの智に驚く

ソークラテース
嘲弄的に頌美す

自己の所有と云
へる觀念

今若し人ありて料理人を殺し、之れを割り、之れを煮、之れを焼くとせば、彼れ其業を爲せし者と謂ふべきか。彼れ又た鍛冶を鋸打ち、陶工を壺にすとせば、彼れ其の業を爲せしものと謂ふべきか。

余曰く、ポセイドンの神かけて、あゝ此言や實に知識の寶冠と云ふべし。余は自己の有として、此くの如き知識を得んとは實に望外のことなりき。彼れ曰く、而してソークラテースよ、君は此の知識が君のものとなりし時其を認むることを得るか。

余曰く、然り、君若し其を許るさば我物たるを認むることを得るなり。彼れ曰く、如何にぞや。君は、自己の物とは如何なるものなるかを知れりと思へるか。

然り、君の訂正を得て、以つて我物たるを知れり。實に君は余の一切の知識の基礎にして、エウチデューモスは其頂上たるなり。

彼れ曰く、元來自己の有とは、自己の權力内にありて自己の使用せんとする時は自由に之れを使用し得る所のものにはあらざるか。例せば牛羊の如き、君若し其欲する時は、自由に之を人に賣り、人に與へ、或は神に奉

納することを得るものは、君の有にして、自由に之れを賣ると能はず、與ふると能はず、奉納すると能はざるものは、君の權力内にあらざるものと思はざるか。

余は然りと云へり(何となれば余が切に聽かんことを希望せる何事かの善事は、此問ひより來るべしと確信したればなり)。然り。此くの如きものゝみ自己の有たるなり。

彼れ曰く、然り。君は動物とは活けるものなりとなすか。

余曰く、然り。

然らば君は、余が今ま言ひし所の、凡ての事を行ふの權力ある所の動物のみは君の有なりとなすか。

然り。

此に彼れ暫く言語を中止し、其間に一種の大なることを考へ出だせるものゝ如し。乃ち曰く、君は祖宗のゼウスの神を有せるかど。之れ乃ち彼れが最後の手段を以つて余を一網にせんとの準備たるなり。之れを以つて余は之れを遁れんとして必死の力を以つて答へて曰く、否な、デオ

ゼウスは祖宗の
神に非ず

アポローンは祖
宗の神

ニュンドーロスよ、余は祖宗のゼウスの神を有せざるなり。

彼れ曰く、君は實に憐れむべき人なるかな、君若し祖宗の神も、神社も、又た家系の以つて記標するに足るものを有せざる時は、君はアテーナイ人には非ざるなり。

余曰く否な、デオニュンドーロスよ、願くば粗暴なるな、善言を以つてせよ、宗教に關しては、余は一家及び祖先の神壇も、神社も、又た其他アテーナイ人の有する所のものは又た盡く之れを有せり。

彼れ曰く、他のアテーナイ人は祖宗のゼウスの神を有せざるか。

余曰く、其の名稱は植民者たれ、又たアテーナイの市民たれ、イオーニア民族には無き所にして、イオーニア民族には祖宗の神アポローンあり、之れイオーシの父にして家族のゼウスたり、民族保護のゼウスたり、又た民族保護のアテーナイの神と云ふべきなり。然りと雖祖宗のゼウスの神なる名稱は吾等の知らざる所となす。

デオニュンドーロス曰く、此は余の關する所に非ず、鬼にも角にも、君はアポローン、ゼウス及びアテーナイの神あることは之れを承認せり。

神は君の有

余曰く然り。

彼れ曰く是等は君の神なり。

余曰く然り吾等の主なり又た祖先なり。

彼れ曰く兎に角是等の諸神は君の神たることは君之れを承認するか。

余曰く余之れを承認せり然らば何事か余の一身に起らんとするぞ。

是等諸神は動物にあらずや。何となれば君は一切生あるものは動物

なることを承認したればなり而して是等諸神は生命を有せざるか。

余曰く諸神は生命を有せり。

然らば諸神は動物にあらずや。

余曰く諸神は動物なり。

君は其等動物に就き其欲するまゝに之れを人に與へ人に賣り或は神

に献納し得る所のものは君の有なることを承認したるにあらずや。

エウチユデーモスよ余は其事を承認せり余は他に逃るべき途なし。

彼れ曰く然らば若し君ゼウス及び其他諸神は君の有たることを承認

せば他の動物を扱ふが如く君の欲する所に従ひ是等諸神も或は之れを

神はソークラテ
ス所有の動物
なり故に賣るこ
とを得ば云ふ

流石のクテシッ
ボスも閉口す

豪勢とヘーラク
レース

無敵の兄弟

會集一同の大拍
手大喝采

リキケイオンの
建築も振動す
ソークワテース
一場の演説を爲
す

賣り、或は之れを人に與へ、或は其他欲するまゝに爲すを得るか。

クリトーンよ、此言を聽きて余は全然沈黙して平伏せり。而してクテ
ジッボス、援助に來れり。

彼れ曰く、豪勢なり、ヘーラクレース、實に大膽の言語なり。

デオニユンドーロス曰く、豪勢なるヘーラクレースと云ふか、或はヘーラ
クースは、一箇の豪勢漢なりと云ふか。

クテシッボス曰く、ボセイドンの神かけて、あゝ恐ろしき區別なるかな。

余は今や彼等に對して言ふことなけん、此兄弟は實に敵すべからざる人
物と謂ふべし。

親愛なるクリトーンよ、此に於て會集一同は兩人及び其の言語を稱賛
し、拍手喝采歡喜の笑は轟きわたり、兩人殆ど其の聲に壓されたり。而し
て今までの拍手喝采は單に彼等の仲間の人々が其時々を爲したる者な
り、雖、今回は満堂の拍手喝采と大笑高叫にして、其音リキケイオンの四方
の柱にひびき、柱も爲めに彼等の歡喜に同情を表するものゝ如くなりき。
而して余は自然に神氣高揚して一場の演説を試み、此兄弟の知識の如き

兩兄弟を頌賛す

は未だ曾て見ざる所なるを承認し、余は彼等の従僕にして、平伏して彼等を頌賛せり。而して曰く、「如何なる巧妙なる才知ありて、君等兩人をして此かる短日月に於いて此かる完全なる術の熟練を得しめしならん。エウチユデーモス及びデオニソドロスよ、君等の言語に於ては素より稱賛すべきこと甚だ少なからずと雖、余の一層稱賛に堪えざる所は君等が、如何に多数の意見ならんとも、如何に嚴格なる人の意見ならんとも、如何に尊敬すべき人の意見ならんとも、苟も君等と同様なる人の意見に非ざるよりは、一切如何なる意見をも之れを不問に付する所の大度量あること之れなり。余は信ず、實に君等の如き人物は天下に稀なるべく、又た君等の議論を稱揚是認する者も亦少数なるべし。之れ人間の多数は愚にして、君等の議論の價值を知らず、爲めに君等の議論に由つて論破さるゝとも、寧ろ君等の議論を使用して、他人を論破することを耻辱となせばなり。余が尙ほ進みて君等を稱賛するの意を發表せんとするは、君等が善たれ惡たれ、白たれ黒たれ、其他何事たりとも一切の差別を一抔否定せんとする所の、親切にして且つ公共心に富めることにして、其結果たるや、實

に君等の言へるが如く、衆口を嚙ましむるとたるなり。而して君等自身に在つても、亦其例に洩るゝことなく、共に口を嚙み、以つて寛大にも他人の例に倣はんとし、因つて以つて一切の反對を取り去るなり。然りと雖以上是等の事よりも、一層深く余を感せしめたる所は、君等の此術の發明は、最も之れを巧妙に仕組み、僅少なる時日を以つて之れを人々に傳授するを得ることにありとなす。クテシッポスは日ならずして君等の術を模倣せんことを學ぶべし。實に傳習の速かなるを得るは、君等の技術の特長なりと雖、余は之れに付いて君等に忠告を呈せざ可からるとは、衆人稠坐の場合に於て其術を發表せざるやう爲すとなす。何となれば此くの如く容易に修め得るの點よりして、人々或は此術を輕視し、之れが價値を低落するの恐れあればなり。故に此術を發表するに最も善きは其議論はたゞ君等兩人間にのみ止めんことなり。されども若し他に傍聽者なかる可からずとせば、多額の報酬を拂ふ人のみに其席に出づることを許るせ—此事は君等最も注意せざる可からず—若し君等智者ならんには君等は其門弟子をして決して他人と論談せしむることなく、たゞ君等

ソークラテース
兩兄弟の門弟子
たらんと云ふ

ソークラテース
クリトーンを働
誘して兩兄弟に
學ばしめんとす

兩兄弟の論法を
以つて人を破ら
んより人に破ら
るゝは却つて名
譽なり

及び彼等の間にのみ論談せしむべきなり。何となればたゞ稀少なる物のみ高價なるものにして、ピンドダロスの言へる如く、水は萬物中最も有用のものなりと雖、其多きを以つて安價たるなり。而して余のたゞ願ふ所はクレイニアス及び余を君等の門弟子中に容受せんことたるなり。と。クリトーンよ、吾等の議論せし所大要此くの如し、尙ほ數語談話を交へて吾等立ち別れたり。余の希望する所は君が余と共に往いて彼等兩人に學ばんことなり、彼等は、如何に老たりとも頑冥不靈なりとも、何人と雖、苟も金錢を拂ふ者には教ふる所あるべしと言へるを以つてなり。特に一事君の爲めに有益なることは、金儲けを専一とせる君の如き者と雖、彼等の知識を學ぶには敢て妨げずとのことなりとなす。

クリトーンよ、ソークラテースよ、余は好奇心もあり、又た直に就いて學ぶべしと雖、余はエウヂュテモスと同心の者に非ずして、他の思想を有せるものなるより、君の言ひしが如く、此くの如きの議論を使用して人を論破せんよりも、寧ろ之れに由つて論破さるゝを望むに至らんことを恐る。且つ余は此かることを君に忠告するは聊か滑稽の嫌なきに非ずと雖、信すべ

人ありソークラ
テースが兩兄弟
と談論せしを笑
ふ

哲學を嘲る

き一人にして法律上の演説を専門とせる者、余が彼方此方に歩み居りし時、君等の群衆中より出で來りて余に語りし所の言を聽け。乃ち彼れ余に謂うて曰く、「クリトーンよ、君は是等の賢者の談話を聽き居たるか」。余答へて曰く、「否な、群衆多くして聽き得る所に入り込むこと能はざりき」。「君若し之れを聽きしならんには、必ずや有益なることを聽きしなるべし」。

余曰く、「其は何事ぞや」。「君は修辭術の最第一の大家等の談論を聽くことを得たりしならん」。余曰く、「彼等に對する君の意見如何ん」。「彼等に對する余の意見とか。彼等無意味の事を語り、何事にも非ざる事に騒き立つるが如きを見れば、何人と雖果して如何に思ふべき」——之れ彼れの言語の調子たるなり。余曰く、「必ずや哲學は愉快なるものなり」。彼れ曰く、「愉快なるものなりとか、何を愚なるや。哲學とは何物にても有らざる物なり。余思ふに君若し此席にありしならんには、必ずや君の友人の爲めに大に耻づる所ありしなるべし——彼れの舉動や實に奇態にして、彼等兩人は自己の言ふ所に全然無頓着無責任なるに關せず、彼れは自ら其身を卑下し、哀願する所あるが如く、彼等の無責任なる言語に一々應答せり。而して

是等兩人は、余が言ひしが如く、當時の大學者なりと想像され居るなり。然りと雖、クリトーンよ、實に其學も其人も兩者共に下等にして滑稽なり」と。ソークラテースよ、此學科に對する警告は、彼れの言なりとも亦他人の言なりとも、余の見を以つてする時は、不當の如く思はるゝと雖、此の如き人間と公衆の前に立つて議論するは宜しからずとの意見に至つては、余は彼れの言の正當なるを認むるものなり。

ソー　あゝクリトーンよ、實に彼等兄弟は驚くべき人物たるなり。されども余は何事を言はんとして在りしものなるか。第一余の知らんとする所は、かの君に來りて哲學を警告したるは如何なる趣の人なるか。彼れ自ら法廷にて其術を實施する人なるか。或は依つて以つて戰ふ所の演説を爲さんとする者に雄辯術を教ふる者なるか。

クリ　彼れ決して演説家に非ず、又た其法廷に出入するや否やは余の疑ふ所なり。然りと雖人々の言ふ所に由れば、彼れ能く自己の事業を知り、甚だ機敏の人にして、又た驚くべき演説を組み立つることを能くすと聞く。

水陸兩棲動物的
人種

哲學者と政治家
との中間者

彼れ談話より哲
學者を懸賞せる
なり

兩面美人主義

ソー クリトーンよ、此人は水陸兩棲動物の一にして、之れ方に余の謂はんとせし所—ブローヂコスの所謂哲學者と政治家との中間に在る者にして—彼等自ら人間中至賢の者なりと思ひ、世間も亦彼等を以て至賢の人となせり。而して唯哲學者等を除くの外、何人も彼等の反對に立つ者なし。之れを以つて彼等若し哲學の無用の物なるを證明せば、何人も彼等に對して知識の名譽の稱號を競争する者なしと思へり。彼等若し共に談話する時は、假令エウチュデーモス及び其友人等に打撃さるゝと雖、彼等實際に至賢の者なりと自任せるなり。彼等が此く自己の知識に關して自慢の心あるは素より其自然にして、彼等一方には哲學の一部を知り、又た一方には政治に關する一部の知識を有すればなり。而して彼等の謂ふ所一理なきに非ざるなり、何となれば彼等兩方面に適合する論を爲し、凡ての困難及び衝突を避け、以つて其果を收むるを以つてなり。

クリトーン クリテースよ、君は此種の人を何とか云ふ。彼等の思想中必ずや何事か似而非なるものあるべし。

ソー 然り、クリトーン。真理と云はんよりも寧ろ似而非なるもの有

りと謂ふべし。而して彼等中間事物の性質を解する能はざるの徒たるなり。實に兩事物の中間に在りて、兩者の性質を有する所の人間及び事物は——若し其の兩者の一方善にして他方惡なる時は、其一方のものよりは善にして他のものよりは惡たるなり。又た若し其目的を同うせざる所の二種の善事物の中間に在る時は、中間者は其目的を達するに於て、兩者の何れよりも劣れるものなり。たゞ若し兩者其目的の傾向を同うせずして惡なる時は、其之れを分有せる者は、兩者の何れよりも善なりとす。今ま若し哲學及び政治上の行爲にして兩者共に善なりと雖、其目的を同うせず、而も兩者を分有し、兩者の中間にありとせば、彼等の言ふ所や囁語たるなり。之れ兩者の何れよりも惡たればなり。又た若し一方のもの善にして他方のもの惡なる時は、其中間者は、一方のものよりは善にして、他方のものよりは惡たるなり。たゞ兩者惡なりとの假定に基き、如何にして彼等の言に眞理あるを得んや。余は、彼等の兩者の追求は、全部も一部も惡なるを彼等承認すべしと信せざるなり。然りと雖、是等の兩目的を有せる哲學者、政治家は、其兩目的何れをも之れを達するに於て甚だ

中間折中主義の
人物は第一流に
非ずして第三流
の人なり

クリトレンの二
子の教育と哲學

短にして、彼等第一流の人物たらんことを希ふと雖、其實第三流に位するに過ぎざるなり。然りと雖、彼等の此の野心は、別に之れを叱責するの要なく、寛過して可なり。之れ何人と雖、苟も知識に似たる事を語り、大膽に之れを求め、又た之れを實行するものは愛さるべきものにして、吾等は之れと同時に、彼等の真に何者たるやを見定むることを爲さざる可からざるなり。

クリトレン ソークラテースよ、余は常に余の二兒の爲めに思慮せることは數々君に語りたる所なり。余は如何に此二兒を教育せば可ならんかに迷へり。少なる方は尙ほ幼少なる小兒なれば急ぐとを要せずと雖、長男クリトプロスは何人か教導する者を要する年齢に達せり。余今ま君の談話を聴き、種々吾が小兒等の事に考へ及ぶ時は、余や或は狂することあるが如しと信ず。余は先づ良家の女を妻として彼等の母となし、次に小兒等の爲めに余錢を蓄積し、而も未だ彼等の教育に注意することあらざるなり。然りと雖、又たかの自ら人を教育せんと名乗る所の多くのもの等を見る時は、余は之れに驚かざるを得ざるなり。是等の人間は實を

云はゞ眞に法外なる亂暴者にして到底子弟を托するに足らざるなり。此くて余は小兒等に勸むるに哲學の研究を以つてする所以を知らざるなり。

ソ一 親愛のクリトーンよ、素より各種の職業中下等なるものは其數甚だ多しと雖、之れ何の用をも爲さざるなり。而して善良なる職業は其數少くして其價格や言ふべからざるなり。例へば體術、修辭學、金儲け法及び大將の術等、是等は高尚なるものには非ざるか。

クリ 余の判斷に由る時は、是等は實に高尚なる職業なり。

ソ一 然りと雖、是等の高尚なる技術に於ても、之れを業とせる者の多くは尙ほ且つ滑稽なる人物等にはあらざるか。

クリ 然り、眞に然り。

ソ一 然らば此くの如き事情なるの故を以つて、君は一切是等の専門は之れを排斥し、以つて君の子等をして、全然是等の修業を爲さしめずとなすか。

クリ ソークラテースよ、其は素より道理に合せざる所なり。

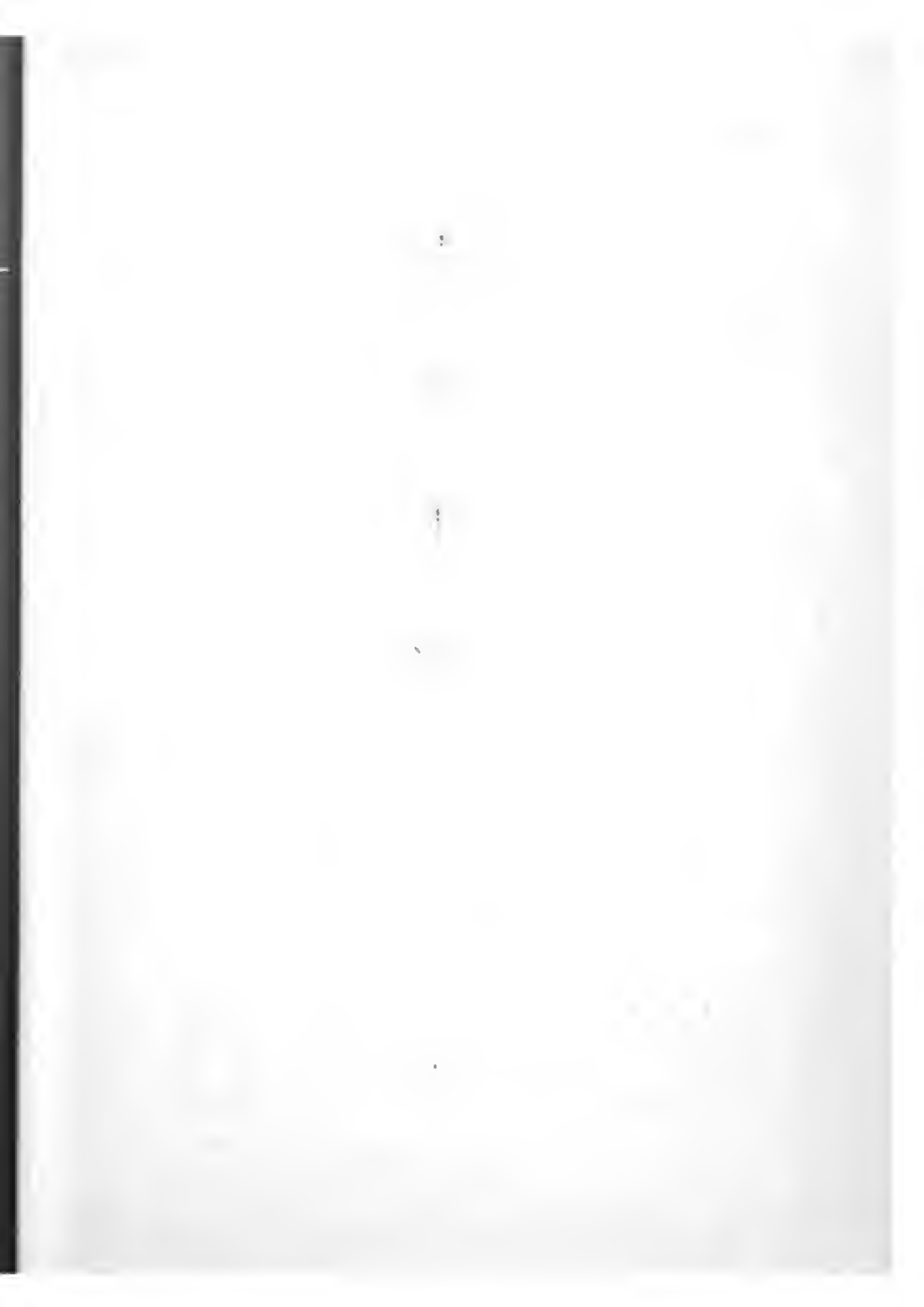
哲學教師不眞なりとも哲學其者は之れを研究せよ

ソークリトーンよ、然らば能く其道理に由り、哲學を教へんと公言せる教師等は或は善たり悪たりとも、此くの如きは心に介せず、ただ哲學其物のみを思はゞ可なり。能く精密に哲學の如何なるものなるやを討論し、若し哲學にして不良のものならんには、たゞに君の子等をして之れを修學せしめざるのみに非ず、又た以つて天下の人々をして之れを學ぶこと勿らしめんことを力めよ、又た若し哲學にして、余の思ふが如き高尚有益なるものなりとせば、格言の言へるが如く、君を始め、君の一家に至るまで、皆な善く、哲學の道に従ひ、又た哲學に仕ふることを爲し、決して落膽すること勿れ。

エ
ウ
チ
ユ
ア
ー
モ
ス

四
七
六

イ
・
オ
ー
ン



イオーン解題

「イオーン」はプラトーンの著書中最も短かきものなりと雖、其氣品と優美なることとは、優にプラトーンの書たるを證して餘ありとなす。仕組みは甚だ簡單なりと雖、其「ドラマ」としての味は、ソークラテースの反語諷刺と、史詩吟誦家イオーンなる者の小兒の如き隠蔽するなき虚飾との對照にありとなす。

イオーンなる史詩吟誦家、エビダウロスなるアスクレーピオスの祭禮に其技を演じ居たるが、今またアテーナイ市に來りパンアテーナイアなるアテーチー女神の祭禮に其の技を演せんとせり。吟誦家なるものは常に美衣を着美容を爲せり、又た彼れホメーロス流派の詩人等と上等の交際を爲せるより、ソークラテース之れを稱賛して羨やみたり。談話中イオーン、其の長せる所はホメーロスのみにして、其他の詩人等に關しては何の趣味もなく、たゞ睡眠を催すのみと云へり。然りと雖ソークラテースは論じて曰く、善を批判するものは又た惡をも批判するものなら

ざる可からず。詩は一の全體なり、技術の法則に由つて詩歌を批判するものは凡ての詩の批判を能くすべし、何ぞホメーロス一詩人のみの批判に止まらんやと、彫刻、繪畫、音樂等の例に由つて之れを證す。イオーン此問題を解くこと能はず、ソークラテース之れを解くこと左の如し。

吟誦家は、技術の法則に由るものに非ずして、詩人より得たる「インスピレーション」に由るものにして、詩人は又た溯りて神より「インスピレーション」を受けたるものとなし、其關係を磁石の鐵片鐵環を吸引するに比し、「インスピレーション」の連鎖は、神より詩人、詩人より吟誦家、吟誦家より聽衆に及ぶものにして、吟誦家は詩人の通辯者たり、而して或吟誦家は或詩人に關することを善くし、其他は之れを能くせざることあるは、全く「インスピレーション」に由るものなればなりとす。

イオーン大にソークラテースの「インスピレーション」説を喜び、其ホメーロスを誦吟する時は、或は涙を流し、或は怒髮逆か立つことありとなす。ソークラテース、此くの如きは狂氣なり、正氣の沙汰に非ずとなす。イオーン、ソークラテースに云ふに、若し其技を演ずるを見るならんには、ソークラテース

クラテース決して彼れを狂氣せりと考へざるべしのことを以つてせり。ソークラテース問うに、彼れ、ホメーロスに關する一切の事を知れりやを以つてす。彼れ一切の事解釋するを得べしとなす。ソークラテース問うて曰く、戦車の馭術、醫術、航海、及び預言等に關したることに於ては、吟誦家と、馭者、醫師、運轉手等と、熟れか善く之れを知れると。イオーン吟誦家よりも其専門の人々之れを能くすと答へざる可からざりしなり。然りと雖、イオーン尙ほ大將の術は吟誦家の知る所なりとし、善良なる吟誦家は善良なる大將なりと云へり。此に於てソークラテース問うて曰く、イオーンは大將たるの資を以つて、何故にたゞ吟誦家として諸方を遍歴せるのみなりやと。イオーン答ふるに、其自國は大將を要せず、アテーナイ及びスパルタは他國人たる彼れを大將となすことなきを以つてす。ソークラテース然らずとして曰く、イオーンは言論を弄せる者なり、プロテウスの怪物の如く、種々の變形を爲し、今や大將に假扮して余より脱れ去らんとせるものなり。故に此點より云はゞ彼れや不正直なり。若し然らずして、自己は無意識にして、たゞ「インスピレーション」に由つてホメー

ロスを讚美するものならんには、之れ「インスピレーション」なり。「イオーン」其何れの名稱を採らばやと。「イオーン」「インスピレーション」の名を採べり。

○

『イオーン』はプラトーンの他の初期の著書に等しく、滑稽と真面目との混合せるものにして、確定したる結論は之れなしと雖一種ソークラテース的、プラトーンの真理隠然として存するは之れを見るを得べし。詩人は「インスピレーション」に由るものなりとの説は、詩歌に關する真理なりとす。天才なるものは往々自己は無意識なることあり、又た天才と狂氣とは甚だ相近しとは近代世人の格言なり。プラトーン能く此點に注意し「辯證」(アポロギア)中に、詩人は自己の書物の最も惡しき批評家なるを言ひ、又た「羽翼ある神聖なる者」なりと云ふと雖、「フアイドロス」中には詩人の作中に狂氣の分子ありとなし、有らゆる種類の尊敬を以つて之れを待遇すべしと雖「理想國」中には秩序ある社會には住居せしむべからずとなせり。

本書の學術上の
思想

知識とインスピ
レーション

詩人

哲學と詩歌との
紛争

哲學と詩歌との紛争は、遂に「理想國」に於ては分離することとなるも

のなるが「イオーン」中已にプラトーンの頭脳中には此思想存在して、ソ
ークラテースとイオーンとの對照に之れを看るを得べし、されども「理想
國」中には、ソークラテースは尙ほ詩歌的性質には同情を表せるなり。

イオーン

對話人物

イオーン、エビ
ダウロスよりア
テーナイに来る

イオーン

對話人物

ソークラテース

イオーン



ソークラテース
イオーンよ、余は君を歓迎す。君はエフェソスなる君の本國より來りしか。

イオーン
否ソークラテースよ、余はアスクレーピオス神社の祭禮に至り、エビダウロスより來れり。

ソークラテース
祭禮にはエビダウロス人は詩吟の競技を行ひしか。

イオーン
然り、又た一切の音樂上の演藝もありき。

ソークラテース
君は競技者の一人なりしか、又た其競技には成功したるか。

イオ ソークラテースよ、余は實に一等賞を得たり。
 ソー 其は祝すべし。而して余は又た君がパンアテーナイアの祭禮
 にも其の如くあらんことを望む。

イオ 余は之れを力めん。

ソー イオーンよ、余は數々史詩吟誦家の術を羨やむものなり、何とな
 れば君は常に美麗なる衣裳を着し、又た成らん限り容儀を修するは君の
 術藝たればなり。又た君は不斷數多の善良なる詩人、殊に詩人中の最上
 にして最も神聖なるホメーロスの詩家の如き人と交はり、單に吟誦に由
 つて學ぶのみに非ずして、又た能くホメーロスを解せるが如き、實に羨や
 むべきことと謂ふべし。且つ人は其詩人の眞意を解するに非ざるより
 は、決して史詩吟誦家たること能はざるものにして、史詩吟誦家なるもの
 は、原詩人の精神を聽衆に通辯するものなるを以つて、能く其詩人の意味
 を知るに非ざれば決して爲し得ざる所なり。而して凡て是等は大に羨
 やましきこととなす。

イオ ソークラテースよ、其は實に然りとなす。而して之れ亦余の藝

イオーンはホメ
ーロス張りの吟
誦家

ソークラテース
史詩吟誦家を羨
やむ

術中の最も困難なる所たるなり。余は自ら信ずらく、ホメーロスに關しては余は如何なる人よりも最も精達せるものなりと。而してラムプサコス人メトロドーロスも、タソス人ステシムプロイトスも、又はグラウコンも、其他以前に在りし所の人々も、決してホメーロスに關して、余が有せる如き善良なる觀念を有せることなく、又た余が有せる如き多數の觀念を有せざるべし。

ソー イオーンよ、余は此事を聴くことを喜ぶ。且つ君はホメーロスに關して君の得たる所を余に示めすことを否まざるべし。

イオ 然り、ソークラテース。君は眞に余のホメーロスの修飾を聴かんことを欲すべきなり。意ふにホメーロス派の人々は余の此の修飾に對して金冠を與ふるならん。

ソー 余は他日君の其修飾を聴くの好機あらんことを希望す。然りと雖、目下余の間はんとする所は、君の技術は又たヘシオドス及びアルヒロップホス等にも及べるか將た又た單にホメーロスに止まるか。

イオ ホメーロスのみなり、而して余思ふにホメーロスのみにて十分

なりと。

ソ一 ホメーロスとヘシオドスとの間、何等か一致する所ありや如何ん。

イオ 余の意見を以つてすれば、一致する所少なからずとなす。

ソ一 而して此一致する點に就ては、君はホメーロスと、ヘシオドスと、何れか最もよく解釋し得るとなす。

イオ ソークラテースよ、其の彼等の一致せる點に於ては、余は兩者何れも同様に解釋し得るなり。

ソ一 然りと雖兩詩人の一致せざる所の事に關しては如何ん——例へば卜筮に關して、ホメーロスもヘシオドスも兩詩人共に謂へる所あるにあらずや。

イオ 然り。

ソ一 而して兩家の云へる所、一致せると一致せざるとに關せず、卜筮に關したることは、君と預言者とは何れか最も善き解釋者たるべきぞ。

イオ 預言者の方優れり。

ホメーロスとヘシオドスとの解釋

卜筮に關しての解釋は吟詠家の預言者か何れ優れる

何故にホメーロ
スのみに限りし
か

ソ一 然りと雖若し君預言者ならんには、兩詩人の意見一致することも、一致せざることも、何れにするも能く之れを解釋するを得るに非ずや。

イオ 然り明かに之れを解釋するを得べし。

ソ一 君がたゞホメーロスのみに精達して、ヘシオドス及び其他の詩人は之れを扱はざるに至りしは其理由果して如何ん。ホメーロスも、其他の詩人の歌ふ所の事物を歌へるには非ざるか。戦争はホメーロスの大主旨には非ざるか。彼れ又た人間社會、人間の交際、善人悪人、熟達せる者熟達せざるもの、諸神間の談話、諸神と人間との談話、天上の事變、地上の事變、諸神の誕生及び英雄の誕生等を歌へるには非ざるか。而して是等はホメーロスの歌の題とせる所には非ざるか。

イオ 然り、ソークラテース。

ソ一 而して其他の詩人も亦之れと同事物を歌ふにはあらざるか。

イオ 然り、然りと雖他の詩人等は、ホメーロスの歌ふと其方法を異にせり。

ソ一 何ぞや。然らば惡しき方法に由つて歌へるか。

ホメーロス優れり

善を判知する者は又た悪をも判知するを得べき者なり

イオ 然り、遂かに悪しき方法を以つて。

ソ一 而してホメーロスは優れるか。

イオ ホメロースの優れるや、他は以つて比較すべからざるなり。

ソ一 然りと雖親友イオーンよ、今若し算術を論ずるに當り、數多の人之れを語れる内、一人ありて其他の人々より巧妙に語るとありとせば、人は彼れを以つて善く語る人なりと謂ふか。

イオ 然り。

ソ一 其善く語る人を判断する者は、又た其惡しく語る人を判断する者なるか。

イオ 然り同じ人なり。

ソ一 而して其人は算術家なるか。

イオ 然り。

ソ一 今若し食物の衛生を論ずるに當り、多數の人々の内、最も善く語る者ありとせば、其善く語る者を認むる所の人は、其惡しく語る者を認むる所の人とは異なる人なるか、或は同一の人なるか。

イオ 明かに同一の人なり。

ソ一 其人如何なる人にして其名稱を何とか云ふ。

イオ 醫師なり。

ソ一 一切の議論に通じて云はんに、若し同一問題に關して多數の人の之れを論せる時、善論者を判知する所の人は、又た悪論者を判知するの人にはあらざるか。又た彼れ悪たることを知るに非れば、又た善をも知らざるには非ざるか。

イオ 然り。

ソ一 同一人は善も悪も兩者共に熟達せるにはあらざるか。

イオ 然り。

ソ一 而して君は、ホメーロス及び其他ヘシオドス及びアルヒーロッホス等の詩人は、其方法に於ては同一ならずと雖、其歌ふ所は同一なるものを歌ひ、而もホメーロスは善にして、其他は劣れりと云ふか。

イオ 然り、此く云ふも誤りなしと信ず。

ソ一 君若し善良なる言談者を知らば、又た以つて劣等なる言談者の

劣れることを知れるならん。

イオ 然り。

ソー 然らば親愛の友よ。余はイオーンを以つて、ホメーロス及び其他の詩人等に關して、同じく熱達せる者なりとして誤りなかるべきなり。何となれば同一人物は、同一事物に就いて言へる所ある一切の人々の善良なる審判者たることはイオーン自ら承認せるを以つてなり。

イオーンはホメーロスのみに興味を有し其他の詩人に對しては睡眠を催す

イオ 然らばソークラテースよ、人若し他の詩人に就いて語る時は、余は之れに對して注意を爲すことなくして睡眠を催し、全く其れに就いて何の觀念をも有せざるに至る、然りと雖、一旦ホメーロスの聲を聴くに於ては、余は忽ちにして覺醒し、全注意を喚起し、言はんとする所又た無量たるは何故ぞや。

技術知識は詩全體に通じて一たり

ソー 友よ、此は容易に説明さるべきことなり。而して君がホメーロスに就いて語るや、君は如何なる技術に由つて之れを爲すにも非ず、又た知識に由つて云ふにも非ざることとは、人之れを見誤ることあらざるべし。若し君にして、技術の規則に由つて語るものならんには、君は其他一切の

詩人に就いても同じく語ることを得ん、何となれば詩學なるものは一全體のものなればなり。

イオ 然り。

ソー 若し人或他の藝術を一全體のものとして之れを修め得るとせば、詩人等も亦之れに同じと謂ふべし。イオーンよ、余の言ふ所に説明を加へんか。

イオ 然り、ソークラテース、君は其言に説明を與へんことは余の願ふ所なり。實に余は君の如き賢人と談話するは甚だ好む所なればなり。

ソー イオーン、余は眞に賢人と稱せらるゝことを好むと雖、其實に於ては君等史詩吟誦家、俳優及び君が歌ふ所の詩人等は賢人にして、余の如きは常人のみ、單に眞理を語るものたるに過ぎざるなり。故に余の言ふ所を考へ見よ、實にこれ平凡且つ些小の事にして何人と雖言ひ得る所たるなり。若し人一全體の藝術を得たらんには善及び惡の研究は一にして同一なるものたるなり。吾等此點を考窮せんに、繪畫は一全體の術にはあらざるか。

イオ 然り。

ソ一 而して畫家の内には巧妙なるもの拙劣なるもの等多數の畫家あるに非ずや。

イオ 然り。

ソ一 此に人ありて能くアグラオフンの子ボリュグノートスの長所短所を指摘するには熟練なりと雖、其他の畫家の作は之れを批評すると能はず、他の畫家の作の成るに當つては睡眠して全く注意するとなく、又た何の觀念もあるなく、たゞボリュグノートスに關して其意見を述べんとする時、或は其畫家は何人たらんとも、たゞ此時にのみ覺醒し、注意を喚起し、又た其言ふ所多しと云ふが如き、君は此くの如き人ありと知るか。

イオ 否な余は此くの如き人あるを知らず。

ソ一 又た人ありて、メチオンの子ダイグロス、パノペーオスの子エーペイオス、サモス人テオドロス、其他同様の彫刻家の作のみを批評することを善くすと雖、其他の彫刻品の製作さるゝ時は、直ちに注意を失ひ、睡眠して、何事も言ふことなき——此くの如き人ありと君は知るか。

イオーンはホメ
ーロスに精通せ
ることのみを誇
る

インスピレー
ションと技術と
の相違

イオ 否な余は此くの如き人あるを知らず。

ソー 若し余の見にして誤らずとせば、吹笛師、立琴師、立琴に合はず唱
歌師、或は史詩誦吟家等の内、オリュンポス、タミュラス、オルフェウス、或はイタカ
の史詩誦吟家なるフュミウス等に關して談論し得る人ありとも君は是等
の内一人にも會合して談論することなく、彼れ若しエフソスのイオーン
と共に談論する所あらんとして來訪することあらんには、大に迷惑に感
じ、彼れの長所短所に就いて何の觀念もなかるべしと信ず。然らずや。

イオ ソークラテースよ、余は其れを否むこと能はず。然りと雖ホメ
ーロスに關しては他人よりは優りて談じ、又た言ふべき多くの事を有せ
るは余自ら之れを知り、又た人々も之れを許るせり。然りと雖余は他の
詩人に關しては等しく善く談すること能はざるなり、願くば君此理由を
教へよ。

ソー イオーンよ、余の知る所及び其理由に就いて想像する所に由つ
て説明を試みんに、君がホメーロスに就いて特に長せりと云ふ所の才能
は、之れ技術には非ずして余は之れを、インスピレーションと云はんと欲す。

例 インスピレー
ションと磁石の

ミューズのイン
スピレーション

インスピレー
ションは正氣の
沙汰に非ず

神憑り

デオニユソスの
神女の魔力

乃ち神力ありて君を感動することエウリピデースがマガチット(磁石)と稱し、普通にはヘーラクレイア石として知らるゝ所の石の如きものなりとなす、此石たゞに鐵環を吸引するのみに非ずして、又其環に他の鐵環を吸引するの力を與ふるなり。而して鐵片及び鐵環の數多吸引せられて、宛も長き連鎖を爲せる如きことあるは君の數々見る所なるべし。而して其吸引懸垂の力は、皆な之れ原始の一石より生ずるものたるなり。之れ宛も「ミューズ」が先づ「インスピレーション」を人々に與へ、此の「インスピレーション」を受けたる人々より又た他の人々に及ぼし、遂に「インスピレーション」の連鎖を爲すなり。故に叙事詩も叙情詩も、其秀絶なるものは、決して技術の製作として作らるゝに非ずして、皆な「インスピレーション」を受け、神憑りに由つて成る者なり。夫の「コリュバンテス」宗の歡樂者等の舞蹈するや、之れ其正氣よりするに非ざる如く、叙情詩人等が其美麗なる詩歌を作る時も、亦之れ其正氣に非ずして、音樂及び詩句の勢力の制を受け、「インスピレーション」を被り神憑りに由つて然るものとす。又た「デオニユソスの神女」が其「デオニユソスの感化力」を受け居る間は、乳と蜜とを諸川より取り出すこと

を得ると雖も其正氣なる時は、毫も此力なきが如し。而して叙情詩人の精神も亦之れと同じことを爲すなり、故に彼等は吾等に云うて曰く、彼等は其詩曲をミューズの花園及び谷間の蜜の流るゝ泉より聚集し、而して蜜蜂の如く此方に飛び返へるなりと。之れ實に眞なり。詩人は光明あり羽翼ある神聖なるものにして、其「インスピレーション」を受け自己の感覺を脱出し、自己の心を失するにあらざるよりは、何の創作もあらざるべく、此状態に達せざる時は、詩人は何の力もなく、又た其神託を發表すること能はざるなり。詩人等が種々の行爲に關して云ふ所の言語や、實に高尚なるもの多きは、君のホメーロスに關する言語の如きなり。然りと雖彼等の言ふ所は技術の法則に由るに非ずして、感興至りて其創作に「インスピレーション」を興へて生ずるものなり。而して或者は酒宴歌を作り、或者は讚美歌を作り、或者は合奏唱歌を作り、或者は叙事詩及び「イアンボス」律の詩を作る。されども其の一に長せるもの必しも其他を善くするに非ざるなり、何となれば詩人の歌ふや技術よりするに非ずして、神力に由るものなればなり。詩人若し技術の規法に依つて學びたるものなりせば、彼

預言者等は神の
使役する器械な
り、故に自ら云
ひし所の意味は
之れを知らず

れたゞ一のみには非ずして、其他一切の詩歌の種類に通じて之れを能くし
得べきなり。之れを以つて神は詩人の心情を取り去りて、以つて其用役
を爲さしむること、卜筮者及び神聖なる預言者を用ゐて、彼等自己は之れ
を意識することなくして、而も貴重なる言語を爲すは、彼等自己の言ふに
非ずして神が彼等を使用し、彼等を通して、吾等と言語するものなること
を知らしめんとするが如し。ハルキデケー人チンニホスは余が今ま言
ひし所の好適例を吾等に示せり。彼れ一も紀念すべきものを書きしこ
となしと雖、其有名なる神歌は人口に膾炙し、諸詩歌中の最も美麗なるも
のにして、實に彼れ自ら言へる如く、必ず、ミューズ等の作りしものなるべし。
此くて神は吾等に指示する所あり、又た是等の美麗なる詩は人間のもの、
或は人間の事業に非ずして、神聖にして神の言語たるを疑ふことを許る
さざるなり。而して詩人はたゞ諸神の種々に神かぶりすることに由り
て、神意を人間に通ずるものたるなり。而して神が此く下等なる詩人の
口を借りて詩歌の最上のものを歌ふは、神が教へんとする所の科業には
あらざるか。イオーンよ、余の言正しきものにあらざるや如何ん。

詩人は神の通辯
人の通辯家は詩
人の通辯人にし
て通辯人の通辯
人なり

詩を吟誦する時
は詩中の光景人
物と合體し我を
失ふ

イオ 然り、ソークテースよ、余は君の言の正しきを感じせり。實に君の言は余を感じせしめたり。ごにかくに善良なる詩人は諸神の「インスピレ
ーション」を受けたる通辯なりとの君の言に服す。

ソー 而して史詩吟誦家は諸詩人の通辯なるか。

イオ 其は又た眞なり。

ソー 然らば君は通辯人の通辯人なるか。

イオ 確かに然り。

ソー イオンよ、今ま余の間はんとする所に對し、君は心おきなく答へんことを希ふ。君が或る感動すべき一節を吟誦して、聴衆に非常なる感動を興ふる時、例へば——オヂョセウスの幻影出現して牀板上に跳躍し、戀愛者等之れを見てオヂョセウスの矢を其足目がけて投げ付くる一節の如き、或はアヒレウスがヘクトールを突撃する一節の如き、或はアンドロマッヘー、ヘカペー或はブリアマスの悲哀の一節の如き、此等の節を吟誦する時、君は果して自己の正氣に於て之れを爲すか、或は君は全く自己を失ひ、恍惚として詩中の人物と共にあり、或は詩中のイタカ、或はトロヤ、或は

其他の詩中の場所にあるが如き、情態に在らざるか。

イオ ソークラテースよ、其の證明は實に善く當れりと謂ふべし。余は自白す、余の、あわれなる詩を吟誦する時は、吾眼は涙を湛ゆるなり、其の恐ろしき一節を吟誦する時は、我毛髮は逆か立ち、我が心臓は動悸するなり。

ソー イオーンよ、若し人祭禮の犠牲を供するに當り、禮服を着し金冠を戴けるの時、何人も彼れを掠奪するなく、何人も彼れを害することなく、殆ど二萬人以上の友情ある容貌の人々の前に立ちて、或は滯泣或は驚愕の状態を呈する時、彼れ其正氣にありと云ふべきか、或は然らざるか。

イオ 否なソークラテース、精密に謂ふ時は彼れ正氣にあらずと云ふべし。

ソー 君は之れと同様なる感動を聴衆に與へ得べしと思へるか。

イオ 然り余は之れを爲し得るを知る。何となれば、余の吟誦せる時、舞臺より聴衆を見下すに、或は哀憫、或は驚愕、或は嚴肅なること等、其時に應じて聴衆の顔面に表はるゝを見ればなり。而して余は又た之れを注

涙流れ心は動悸す

正氣の沙汰に非ず

聴衆の感動と吟誦家の熱情

聽衆、吟詠家、俳優、音樂者、詩人、ミュージズ等のインスピレーションの磁石の如き連鎖

ホメーロスの憑移

意するの必要ありて存す。何となれば若し余にして聽衆を泣かしむるに非ずんば、余は笑ふ可からず、余若し聽衆を笑はしむる時は、余は給料日に於て自ら泣かざる可からざればなり。

ソ一 前に言ひしが如く、聽衆は第一磁石より、其吸引力を受けたる鐵環の最終のものにして、君の如き史詩吟詠家及び俳優等は中間の連環たり、詩人は其の第一環たることを君は知れるか。而して一切是等を通じて神は思ふがまゝに人の精神を支配して、一人は他人より懸垂せしむること鐵環の磁石に連なる如くなせり。此他又た舞踏者、師匠、助手等の連鎖ありて又た其傍に懸り「ミュージズ」より懸垂する連鎖の環を爲せるあり。而して何れの詩人も皆な或る「ミュージズ」を有し之れより懸垂し、「ミュージズ」の神かゝる所となり、殆ど「ミュージズ」其物と同一となれり。此くて詩人たる第一環より其他のものは懸垂し、或者はオルフェウスより「インスピレーション」を得、又た或者はムサイオスより之れを得るありと雖、其大多數はホメロースの憑移する所となれり。而して君は其最後に云ひし者の一人にして、ホメーロスの憑り移つる所となれるなり。而して人若し他の詩人の詩

イオーンのホメ
ーロスを營くす
るは神憑の時の
みならずと云ふ

を語る時は、君は睡眠を催し、何事も言ふ所なしと雖、若しホメーロスを吟誦する者あらんには、君は忽然として覺醒し、其精神は内に欣喜雀躍し、又た君は言ふ所甚だ多しと。之れ君のホメーロスに關して言ふ所は、技術或は知識に由つて言ふに非ずして、インスピレーション或は神がよりに依る者にして、宛もコリユパンテス敎の宴樂者等が、如何なる曲調か最もよく其憑移せる神に適せりやを察知するに機敏にして、夫れに關して多くの舞踏多くの言語を有するも、其他は毫も顧る所なきが如し。而して汝イオーンも亦ホメーロスの名を聽く時は、之れに就いて多く言ふ所ありと雖、其他の詩人に就いては何の言ふ所もなし。其理由たるや。之れ君のホメーロスを稱讚するや技術に由るに非ずして神聖なる、インスピレーションに由るものなればなり、之れ君の間ひに對する余の答へたるなり。

イオ ソークラテース、大に善し。然りと雖疑ふらくば君尙ほ雄辯に於て十分ならざるものありて、余のホメーロスを稱讚するは、たゞ余の狂氣せる時、神がよりせる時のみなるを感服せしむると能はざるが如し。而して君若し余のホメーロスに就いて語るを聽きしならんには、君は

ホメーロス自慢

ホメーロスに關して知らざるなしと云ふ

ホメーロス中の種々の技術に關して兩人の問答

取者の術

決してしか考ふることあらざるべきは余の確信する所なり。

ソ— 余は君のホメーロスに就いて語るを聽かんことを喜ぶ者なり。されども余は尙ほ問ふべきことあり。抑も君はホメーロスの如何なる部分なりとも皆な善く語ることを得るか。恐くは凡ての部分皆な之れを善くすることは能はざるべし。

イオ ソ— クラテース、余の善く語り得ざる部分あることなし、之れ余の保證する所なり。

ソ— 君は確かに、ホメーロスに關しては知らざる所なしと云ふか。

イオ ホメーロスの言へる所にして、余の知らざる所のものとは果して何ぞや。

ソ— 何ぞや。ホメーロスは、其詩中の諸所に、種々技藝に關して言へる所あらざるか。例へば取術の如き之れなり。若し余にして其詩の記憶を有せんには、こゝに誦すべきものを。

イオ 余は記憶せり、誦すべし。

ソ— 然らば、パトロクロスの紀念の爲めの競馬の時、子ストールが其

の子アンチロップホスに、馬車の方向轉曲の所作を教へたる時のことを余に告げよ。

イオ　ホメーロス曰く、

『光りかゞやく戰車に乘じ、徐々として他車の左方に方向を轉曲し、右側の馬に鞭をあて、聲をかけつゝ馬を勵まし、之れと同時に手綱を弛るめよ。汝決勝標に達したる時は、左側の馬を近く引き寄せ、製作巧妙なる車輪の轂は其端に觸るゝ如くも見へざらしめ、又た注意して石を避けよ。』

ソ　夫れにて十分なり。然らばイオーンよ、此詩の當否を判するに當りて、馭者と醫師と熟れか最も適當なる。

イオ　馭者たるや明かなり。

ソ　其理由たる彼れは馭者なるが故なるか、將た又た他に理由ありや如何ん。

イオ　否他に理由なし。

ソ　如何なる藝術も皆な或る智識を有すべきは神の指命せる所に

知識の對象の相
違に由つて技術
の相違を生ず

して、水先案内の術に由つて知る所の事は醫術に由つて之れを知るこ
となきにあらざるか。

イオ 然り知ることもなし。

ソ一 醫術に由つて知る所の事は工匠の術に由つて之れを知ること
あらざるべし。

イオ 然り知ることなし。

ソ一 之れ凡ての技術に通じて、然ることにして、吾等一の技術を以つ
て知る所は、他の技術を以てしては之れを知ることなしと謂ふべきか。
然りと雖先づ他の問題を問はん、君は諸技術に差違なるものありとな
すか。

イオ 然り。

ソ一 君も亦余の如く知識の問題異なる時は、其技術も亦異りと論ずる
か。

イオ 然り。

ソ一 然り。若し知識の主題同一にして、兩者共に同一の知識を與ふ

特殊の技術の知識なきものは其れに關する判断力なき者なり

取術に關しては劣者と吟誦家の優

とせば毫も其技術に差異ありと云ふの要なし。例せば余は此に五指あるを知り、君亦同じく之れを知る。而して余は、余及び君は同一なる算術の學問の助けを以つて此事實を知るに至りしやと問はば、君は吾等其れに由つて知るに至れりとなすか。

イオ 然り。

ソ一 然らば、今ま余が問はんとする所に答へよ乃ち——此事は天下一般に通じて然りや否や。同一技術は知識の同一なる主題を有し、他の技術は知識の他の主題を有せざる可からざるか。

イオ ソ一クラテースよ、此は余の意見とする所なり。

ソ一 然らば或特殊の技術の知識を有せざるものは、其技術に關する言行に對して正常なる判断を有せずとなすか。

イオ 然り。

ソ一 然らば君が今ま吟誦したるホメーロスの詩を判断するに正常なるものは、君なるか將た又た取者なるか、孰れぞや。

イオ 取者なり。

ソ一 然り、何となれば君は吟誦家にして取者に非ざればなり。

イオ 然り。

ソ一 吟誦の藝術は取者の術とは相違する所ありや如何ん。

イオ 然り。

ソ一 而して若し夫れ異なる知識なりとせば、然らば之れ異なる事件の知識なるか。

イオ 然り。

ソ一 君は、チストールの妾ヘカメーデが負傷せるマハオーンに凝固乳酒を與ふる時のことを記るせる句を知れるならん曰く――

「*Plumニア*の酒を以つて製し、而してヘカメーデは眞鍮の小刀を以つて山羊の乳の乾酪を研づりかけたり。又たマハオーンの傍には飲用に味あらしめんが爲めの葱もありき」

と。今若し此句の當否を判するに當てや、吟誦術と醫術と、何れか最も適せりと云ふべき。

イオ 醫術なり。

ソー ホメーロス又た曰く――

「宛も野邊に遊べる牡牛の角中につき込みて製りたる鉛錘の如く、彼女は海底深く突入し、死人を運びて餓えたる魚類の群中に闖入し以つて之れに食はしめんとせり」

と。今此詩の當否を判せんと思せば、吟詠家の術と漁者の術と孰れか最も適せりとなす。

イオ ソークラテースよ、明かに之れ漁者の術なり。

ソークラテースよ、然らば今ま君、余に向つて此く云ふと假定せんか、曰く、ソークラテースよ、君はホメーロス中の種々の句を取り來りて、能く夫れ々々の藝術に配當するに長せるを以つて、今ま余の願ふ所は、預言者或は預言術を以つて批判せば其美を發揮するに最も適當せるは何れの句なりやを余に問はんことなり。而して君は余が容易に又た眞に之れに答へ得ることを見るべし。此くの如き句は特に『オヂッセウス』の書中に少なからざるなり。例せばメランプスの家なるテオクリュメーノスが戀愛者に向つて云へる所に曰く――

「不幸なる人々よ。汝等の一身上に起らんとするは何事ぞ。あ
ら。汝等の頭も顔も又た四肢も、盡く夜の闇黒クワカに蔽はれ去り、悲
歎の聲は破裂して起り、汝等の頬には涙流る。玄關にも、廣間にも、
も、エレボスの陰府に降り行く。幽靈充滿し、太陽は天に消滅し不
祥の霧は四周に漲れり」

と。此くの如き句は又た「イリアス」中にも少なからず。例せば城塞近く
の戦争を記せる所に曰く――

「彼等塹を越えんとする時一異兆出現せり。即ち其軍の左側に
當りて一の大鷲鮮血に塗るゝも尙ほ生きて喘げる一大龍を、其
爪に引つ提げ握りて、空中高く翱翔せるあり。然りと雖龍尙ほ
未だ戦闘を息めず、頭を舉げて痛く鷲の胸を打撃せしかば、鷲は
痛みに堪えずして手より龍を放ちしかば、龍は地上の人々の群
衆中に墜落し、鷲は叫びて風に吹かれて彼方に去れり」

と。是等は余の以つて預言者が批判すべき場所なりとする所なり。

イオ 君の言へる所正しと謂ふべし。

ホメーロス中吟
誦術に關したる
句あるか

ソ— 然り、イオーンよ、君の言も亦正しきなり。而して余は「イリアス」及び「オヂッセウス」中より、預言者醫師及び漁夫等の事とする所を記るせる句を拔萃したり。而して君はホメーロスを熟知せるは、遙かに余等の及ばざる所なれば、願くば余の爲めに、吟誦家及び吟誦術に關したる句にして吟誦家の討窮批判は、他の人々の批判よりも宜しかるべきものを拔萃せんことを。

イオ— ソークラテースよ、余は言ふ、凡ての句皆な然らざるなしと。

ソ— イオーンよ、意ふに必ずや凡ての句然るに非ざるべし。君は早くも其の言ひし所を忘れたるか。吟誦家は善良なる記憶を有すべきにあらずや。

イオ— 何ぞや。余は何をか忘れたる。

ソ— 君は、吟誦家の術と馭者の術とは異なりと云ひしことを記憶せざるか。

イオ— 然り、余は記憶せり。

ソ— 然らば、君の論證に據つて云ふも、吟誦家及び吟誦術は一切の事

を知るものには非ざるなり。

イオ ソークラテースよ、余は言はん、除外すべきことありと。

ソ一 君の意味せる所は、彼れ吟誦家は他の諸技術の主旨とせる所を知らざるべしと言ふにあるか。又た彼れ是等の凡てを知らざるが故に、彼れは是等の内の何れをか知れりとなす。

イオ 彼れ男子の言ふべき所、女子の言ふべき所、公民の言ふべき所、奴隷の言ふべき所、支配者の言ふべき所、支配さるゝ者の言ふべき所の事を知るべし。

ソ一 然らば海上波浪の爲めに漂搖せる船舶の支配者の言ふべき所は運轉手よりも吟誦家は善く之れを知れりとなすか。

イオ 否な、運轉手の方善く之れを知れり。

ソ一 然らば病人の支配者の言ふべき所の事に關しては、醫師よりも吟誦家は善く之れを知れりとなすか。

イオ 否な。

ソ一 然らば彼れ奴隷の言ふべき所を知れるならんか。

運轉手と吟誦家

醫師と吟誦家

牧牛者と吟誦家

イオ 然り。

ソ一 今若し奴隸にして牧牛者なる時は、激怒せる牛を静めんが爲めに言ふべき所は、吟誦家は牧牛者よりも善く之れを知れりとなすか。

イオ 否な、彼れ及ばず。

ソ一 然らば毛糸を績ぐことに關して、吟誦家は紡績女工の言ふべき所を知れりとなすか。

イオ 否な。

ソ一 兵士を激勵するに當り、吟誦家は大將の言ふべき所を知れりとなすか。

イオ 然り、之れ吟誦家の知る所の一種の事なり。

ソ一 然らば、吟誦家の術は大將の術と同一なるか。

イオ 余は保證す、余は大將の言ふべき所を知らざる可からずと。

ソ一 夫れ然り、イオンよ、君は或は大將の知識を有し得るの點よりせば、又た、リラ琴を善くする如く馬術をも之れを善くするなるべく、而して馬を扱ふの良否は又た之れを知れるなるべし。然りと雖余は此く問

吟誦家は大將の事も知ると云ふ

大將と吟誦家

紡績女工と吟誦家

吟誦家の術は大
將の術と同一と
云ふ

ふと假定せんに、イオーンよ、馬の所理の良否を知らんには、君は何れの術の助けに由るとなすか。或は君の馬術者としての熟練なるか、將た又た「リラ琴の名人たること」に由るか、何れぞや。

イオ 余は馬術者としてなりと答へん。

ソ 君若し「リラ琴の樂師を批判せんとせば君は彼等を以つて樂師」として批判し、決して馬術師として批判することあらざるべし。

イオ 然り。

ソ 大將の術を批判するに當り、君は之れを大將として批判するか、將た又た吟誦家として批判するか。

イオ 余は凡て是等同一なるが如く信ず。

ソ 君の意味する所如何ん。君は吟誦家の術も大將の術も同一なりと云ふか。

イオ 然り、一にして同じ。

ソ 然らば善良なる大將は、又た善良なる吟誦家と云ふべきか。

イオ 否な、余は然りとは云はず。

吟誦家は大将なりと云ふ

イオーンは最第一の吟誦家なるを以つて又た最第一の大將なるか

何故に遍歴せるや

ソ一 然りと雖善良なる吟誦家は又た善良なる大将なりと云はざりしか。

イオ 然り、しか言へり。

ソ一 然らば君は全グレンシア中の最第一の吟誦家なるか。

イオ ソークラテースよ、實に遙かに最第一なり。

ソ一 イオーンよ、然らば君は最第一の大將なるか。

イオ 確かに然り、ソークラテースよ。而してホメーロスは我が師なり。

ソ一 イオーンよ、君は最第一の吟誦家たると共に、又た第一の大將たるに關はらず、如何なれば大将とはならずして、單に吟誦家となりて諸方に遍歴せるにや。グレンシア人は金冠を戴く吟誦家を要すと雖、大将は之れを要することなしと君は思ふか。

イオ 何ぞや、ソークラテースよ、其理由たるや、吾本國エフェソス人等はアテーナイ人の従僕たり兵卒たるを以つて大将を要せず、而して君の國もスバルタも、已に君の國人の大將に於て足れるを以つて、余を大将とな

すことなからん。

ソー 親愛のイオーンよ、君はキシコスのアポロドロスの事を聞かざるか。

イオ 彼れ如何なる人なるぞ。

ソー 彼れ假令他國人なりしと雖、アテーナイ人の大將に任擧されたり。又たアンドロース人、フノステチリス、クラゾメナイ人、ヘーラクレイデース等亦他國人なりと雖、其自家の能力を示めしたるを以つて、アテーナイ人の陸軍の指令官及び其他の官に任せられたり。之れを以つて君若し其能力を示めすことあらんには、アテーナイ人如何でか、エフェソス人たりともイオーンを其大將に任せざることあらんや。エフェソス人は元とはアテーナイ人にはあらざるか。而してエフェソスは決して卑しき都市に非ざるなり。然りと雖イオーンよ、若し君技術及び學術に由て、ホメリオスを讚美するを能くすと言ふ所にして正確なるものなりとせば、君は余に對して正直なりしものと云ふべからず。且つホメリオスに關したる多くの光榮なる事を知れりとの君の一切の廣言及び君が余に其知

ソークラテース
イオーンを擲論
す 辯弄し遂に叱責

實力技量と信任

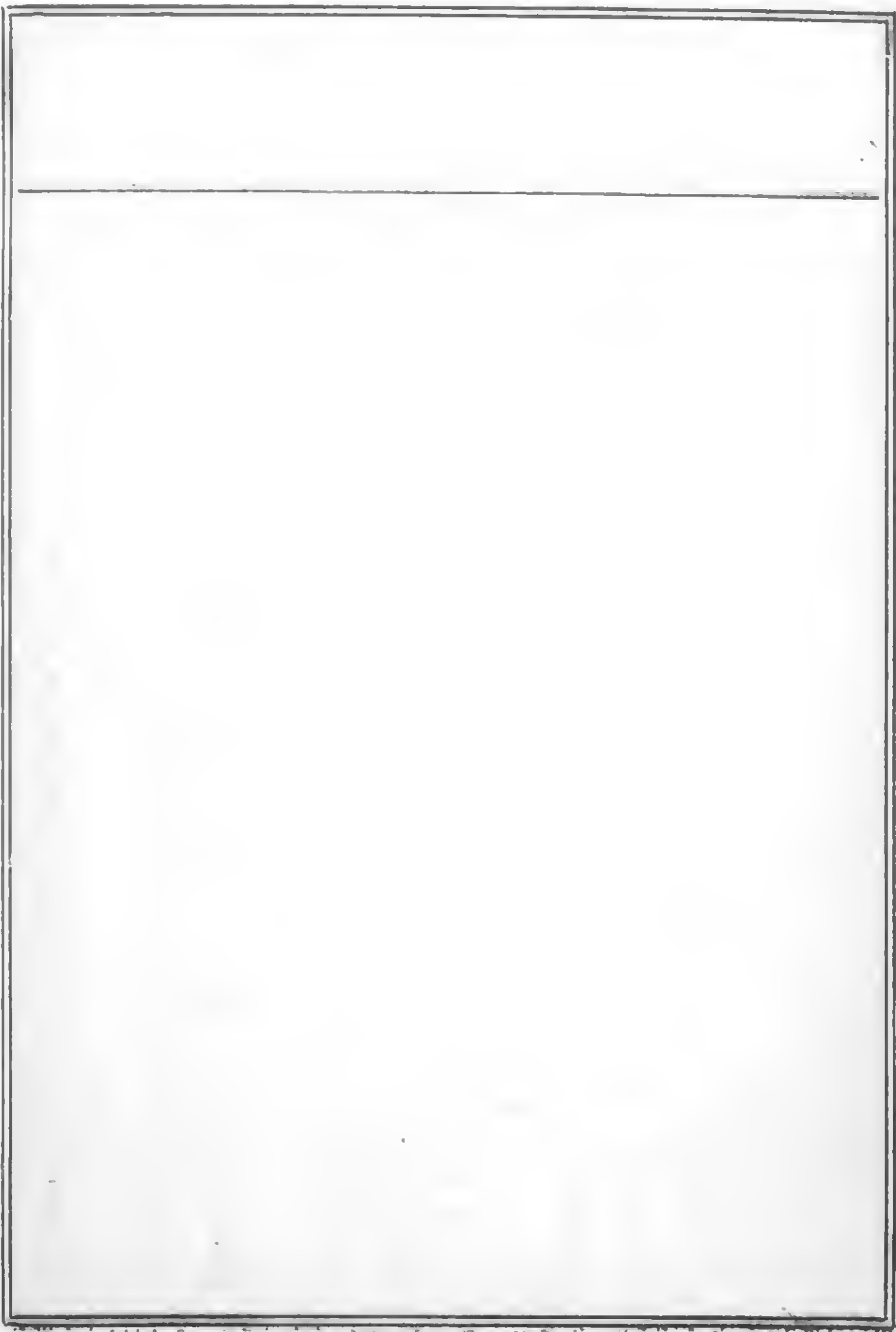
イオーンはプロ
ーナウスの如く
數々變態せり

ソークラテ
ス、インスピレ
ーションを冷
視す

識及び技術を示め、さんと言ひし約束も、實ばたゞ之れ余を欺きしものと云ふべく、余の熱心に願ひたるに關はらず、君の長せる所の術を余に説明することだに爲さざりしと云はざる可からざるなり。君は文字通りにプロータウスの如く數多の體形を有し、種々の状態を裝ひ、或は曲り、或は歪み、又はプロータウスの如く、一時に人の一切の状態を裝ひ、遂に大將の假扮を爲して余の誰何より脱出し、以つてホメーロスの知識を發表することを遁れんとせり。若し余が言ひし如く、君は技術を有せりとせば、君がホメーロスに關して其發表せんことを約したるは全く虚欺にして、君は余に正直ならざるものと謂ふべし。然りと雖、余が信せる如く、君若し其技術を有せずして、ホメーロスに關する所の美辭麗言は、君に於ては無意識に、たゞホメーロスの「インスピレーション」なるものに由つて之れを語るものなりとせば、余は君を以つて不正直なりと言はざるべしと雖、其の代りに君は「インスピレーション」を受けたるものと云はん。君は何れに考へらるゝを擇ばんとするぞ、不正直漢か或は「インスピレーション」されしものか。

イオ ソークラテースよ、兩者の間大なる差異あり。「インスピレーション」は比較上遙かに高尚なりとす。

ソー 然らばイオーンよ、余は其高尚なりとせる一方を取り、君のホメーロスを讚美することは、之れ「インスピレーション」に出づるものにして、技術に由るものに非すと謂はん。

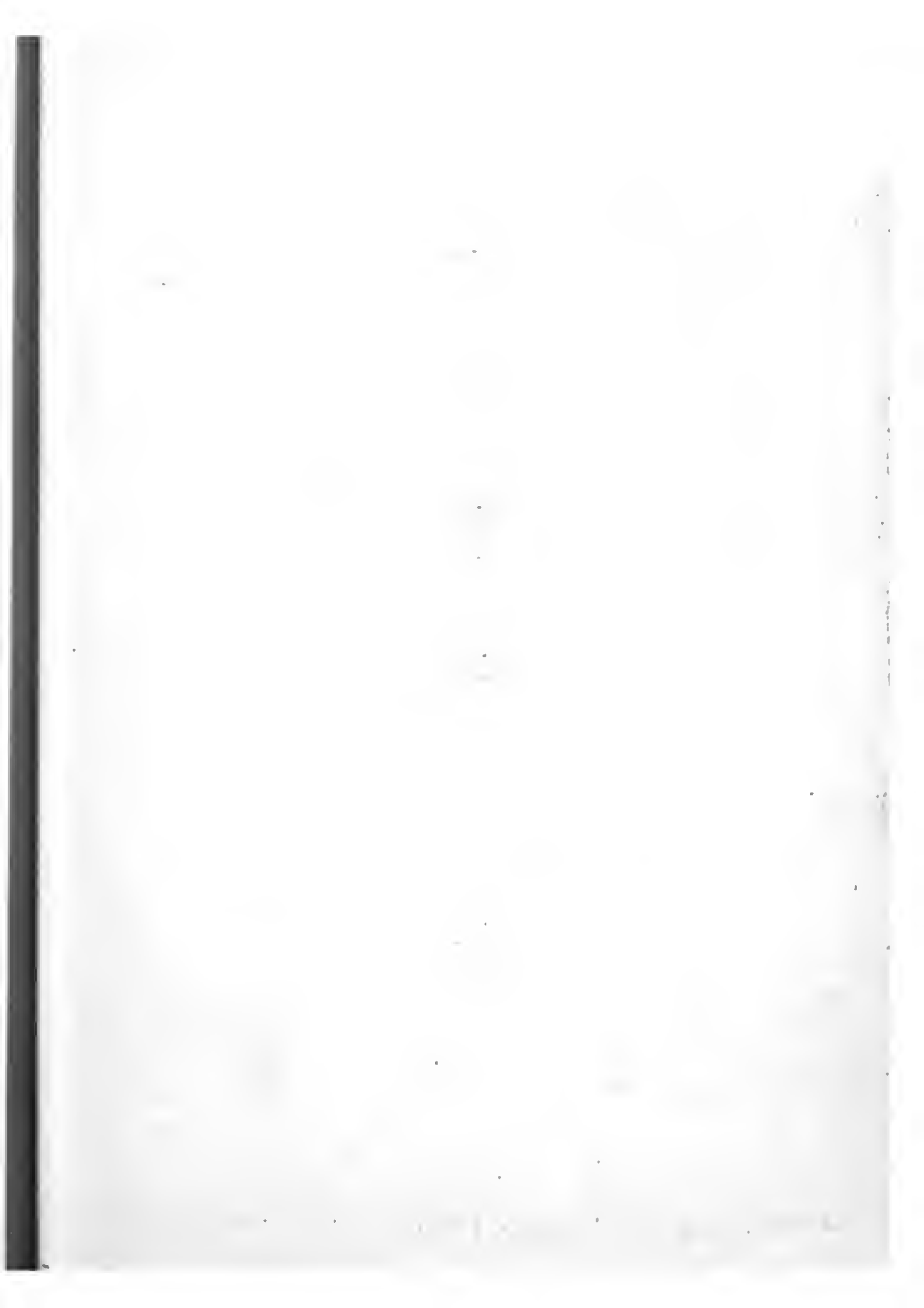


マ

ノ

ー

ン



メノーン解題

「徳義は教へらるべきものなりや」とのメノーンのソークラテースに對する問題を以つて本篇を開始す。ソークラテース答ふるに、其の自己の未だ徳義の如何なるものなりやを知らず、又た之れを知れる人を知らざる由を以てす。メノーン問ふ「ゴルギアスに逢ひしことなきや、彼れは智者なり」と。ソークラテース答へて曰く、然り逢ひしとありと雖、記憶不良なるを以つて彼れの言ひし所を忘れたり。君はゴルギアスの言ふ所は之れを熟知せる人なるを以つて、君の言ふ所はゴルギアスの言ふ所に遠からざるべしと。メノーン答へて曰く、其は容易なることなり、男子の徳義、女子の徳義、老人の徳義、小兒の徳義、其他年齢境遇に應ずる徳義なりと。ソークラテース、メノーンの言を以つて、只之れ諸徳の枚擧に過ぎずして、定解と云ふ可からずとなす。此に於てメノーン、徳義を以つて「命令力」と定解す。ソークラテース批評して子の父母に、僕の主人に従ふ如き服従の徳義あらざるやを問ひ、メノーンこゝに命令中にも除外の例ありとな

す。ソークラテース又た命令は正しき命令も正からざる命令も何れなりとも可なりやと問ひ、メノーオン正しき命令のみとなし次で正義は徳義なりと云へり。而して次に正義は徳義全體なるか或は「一の徳義」なるかの論となり、例を形象及び色に取りてメノーオンをして答へを爲さしむ。メノーオン其の能くせざるを自白し、尙ほ數回の問答の後、ソークラテース、物を定義する方法を教へ、「多數中の同様なる點を取る」ことなりとし、「形象」を定義し、色を定義し、之れを定義するにゴルギアス及びエンペドクレース流の言語を以つてし、メノーオンをして解ら易からしむ。之れメノーオンの親しく聴き慣れたる語風なればなり。

此くてメノーオン一般の定義法を知り、グレンシア紳士の精神を以つて徳義を定義して「徳義とは名譽なることを喜び、之れを得るの力を有すること」となす。ソークラテース論じて曰く、「名譽なるものは善きものなり」「善きものは人皆之れを欲せざるなし、故に論點は「之れを得るの力」と云ふにあり、而して之れを得るに當つては正しくとも又た不正なりとも可なりやと。此に於て定義は此くなれり、曰く「徳義とは正義を以つて善きもの

のを得ることなり」と、ソークラテース批評して曰く、正義は徳義の一部なりとせば徳義とは、徳義の一部分を以つて善きものを得ることとなると云ふべく、此の定義は定義さるべき言語を繰り返すものなりと。

メノー、ソークラテースの談話を謂うて、ソークラテース痲痺^{レヒレ}痲痺^{レヒレ}の激動の如きものありとなす。ソークラテース愚を装ひ、痲痺^{レヒレ}痲痺^{レヒレ}の如く人を攪亂するは、余自ら頭腦混亂せるを以つての故なりと答ふ。メノー、又た「ソフィスト」流の言語を以つてして曰く、吾等知れる所、知らざる所を如何にして討究するを得るか、知れる所は已に知れり、知らざる所は全く知らざるを以つて討究するに由なしと。ソークラテース此に知識の本原に論じ及び、彼の有名なるプラトーン獨創の前世の記憶説を説き、知らざる所の事と雖討究するを得るを言ふ。

ソークラテース種々の祭司及び女祭司及び詩人ピンドロス等より聞きたりとして曰く、靈魂は不滅のものにして、人は此世に現在の人とならざる前も、或は上界或は下界種々に存在を爲し、其時々種々のことを見、種々の事を知れり、且つ自然萬物は一親族にして、一事物より同伴聯想し

て一切のことを記憶回想するを得べし、而して人間各自は皆な知識の種子を有し、發達せしめて以つて全般の知識となすを得べしと。ソークラテース之れを證せんとしてメノーンの奴隸なる小供と談話し、ピタゴラスの發見したる所なりと傳ふる「正方形の對角線の自乗は邊の自乗の二倍なり」との有名なる定理——此定理は初期の數學上の大發見にして、之れが感謝の爲めにピタゴラスは神に百頭の牛を犠牲に供したりと云ふ——ソークラテースは此定理を奴隸の子供の智慧より引き出だせり。而して曰く、此小兒幾何學を學ばずして能く之れを知れるは、之れ前世に學びたるに原因せずんばあらずと。(『ファイドーン』參照)此くて凡の學ぶとは前世の知識を記憶し出すこととなす。

學ぶこと、教ふることの真相此くの如し、此に於てソークラテース徳義は教へらるべきものなりやの問題に歸へり。假定説を置きて之れを論じ始めんとし、先づ若し徳義は知識なりとせば教へらるべきものなりと暫定す之れ「プロータゴラス」の結論に於ける議論の段階なり)

ソークラテース、徳義の善なるものたるを證明するに敢て困難を感ず

る所なく、又た身體上及び精神上、善なるものは知識の指導の下にあらざる可からずとなせり。又た徳義は教へらるべきものなりとするも、次の問題は其の之れを教ふる所の教師ありやと云ふにあり。而して討究の結果教師なきことを知り、大に失望す。而して徳義は教へらるべきものたるを發見したるや否や、又た教ふべからずとの次の發見に接し、遂に徳義は教へらるべきもの、又た教へらる可からざるものとなるなり。

此岐路に於て、古風の趣あるアニュトスなる身分ある一紳士來り合はせり。ソークラテース、アニュトスに問うて曰く、「メノーンは『ソフィスト』に就いて學ぶべきや否や」と。アニュトスは大に「ソフィスト」を嫌ふの人なるを以つて、ソークラテースの言を以つて大に激し極言「ソフィスト」を罵倒す。ソークラテース尙ほ問ひて曰く、「然らば何人に就いて學ぶべきか」。アテーナイ國內の或政治家に就いて學ぶべきか。乃ちアテーナイ古代の大政治家に就いて學ぶべきか。ソークラテース答へて曰く、「ラッヘーリス」及び「プロタゴラス」等中にも云へる如く「テミストクレース、ベリクレース及び其他の大人物は、若し能くすべくんば、素より其子に政治上の智慧を與へ、

有爲の人物とせんと欲せざるとなかるべし、然るに此等の大人物は其子に授くるに價值ある科業を以つてすること能はざりしに由りて觀る時は、或は徳義は教へらる可からざるものゝ如しと。アニュトス此言を以つて自己の好める政治家を侮辱し、併せて、又た自己をも侮辱するものなりと解し、ソークラテースに對して脅迫の言を放てり。

ソークラテース又た前の「徳義は教へらるべきものなりや」との問題に歸へり、メノーオンに語るに教師なきを以つて徳義は教へらる可からずとなす、何となれば「ソフィスト」は教師となすに足らず他の人々は自ら教師を以つて業とせざるを以つてなり。次に、徳義は知識のみならず、又た「意見」なるものに由つて指導さるゝことあるを言ひ、正しき意見と知識との異なる所は、意見なる者は原因の結繩に由つて、繫留されざる者なるを以つて逸出し去るの恐れあるものとなす。かの世間の所謂徳義なるものは、之れ知識に基かず一種の「インスピレーション」に由りし者にして、神聖なりとなす、之れ嘲笑の意なり。而して知識と同一物たる高尚なる徳義は理想なりとす。又た若し政治家にして此知識を有せんには、彼れ其の知る所

本篇の學理

を人に教ふることを得べく、宛も黄泉に於けるチレージアスの如く「理解力を有せるものは只だ此チレージアスのみにして、其他は影の如く飛び行くもの」たるのみとなす。

○

本篇の終りの部分に於てプラトーン、超自然の事或は神力等の如き者は人間處世の眞の基礎と爲すに足らず、必ず知識の指導に依らざる可からずとなす。プラトーンにあつては知識は最も貴重なるものたるなり。而して眞の知識を有するものはたゞ哲學者のみにして、政治家及び詩人等は「インスピレーション」されたるものなり。而してプラトーンは「インスピレーション」或は天才等の如きは單に適然のものにして貴ぶに足らずとなすの意あり。

靈魂不死前世記憶

原因の知識

啓發主義の教育

靈魂不死及び前世記憶説は始めて本篇に現はる。此内(一)自然界の萬物は互に相關聯し、以つて一大全體を爲せると、之れよりして(二)知識の統一せること、及び觀念聯想の説、(三)眞の知識は原因の知識なること、(四)教育は單に人に物を教へ込むに非ずして、啓發し、引き出すべきものたること、

(之れ前世記憶説に基づくものなり)の學理ありて存す。近代の學術上亦價值あるの説となす。

本篇に於ける「觀念」の哲學は之れを「フアイドーン」及び「フアイドロス」等に比する時は未だ十分發達したる状態にあらずとなす。而して正義、節制及び其他の諸觀念の前世より存在せるとに言ひ及ぶことなし、又たソークラテースは何事も進みて云ふことなく、たゞ研究の義務ありとなすのみ。

○

人物描寫

本篇に於けるソークラテースは老人なり。メノーンの性格は彼れの實際の生活上の事情とは關係を有せざるものにして、キセノフオンはメノーンの「一萬のグレシヤ軍」に對して謀反の行爲ありしことを記るすと雖、プラトーンは此事を言ふことなきこと、又たクリチアスの罪行を言ふことなきが如し。メノーンは實にテッサリアのアルキビアデースとも云ふべき者にして、家富み、奢侈に長し、「大王の世襲の朋友」と稱せられたり。而して又たアルキビアデースの如く知識を好愛するの情に鼓吹されソークラテースは

クラテース及び「ソフィスト」より等しく學ばんとせり。其ゴルギアスに對する關係は「プロータゴラス」中ヒッポクラテースの「プロータゴラス」に於けるが如し。

アニュトスは最も狹量の人物にして何事も新奇なることを好まず、又た當時の教師なるもの及び眞の哲學者等を非難せり。彼れソークラテースたれ或は「ソフィスト」たれ、何れなりとも新説を爲すは、アテーナイ國の大を爲すに有害なりとせるものゝ如し。アニュトスはソークラテースを告發したる人なりと雖、此にはプラトーン極めて筆を和げて記るせり。且つ其告發は彼れの惡意よりするに非ずして人の心の傾向然らしめしと云はんとするものゝ如し。或は此くの如きはプラトーンの歴史上の事實には無頓着なりしに由ることあらん。

○

「ハルミデース」、「リュシス」及び「ラッヘース」等に在つては、其主題とせる所は「節制とは何ぞや」、「友情とは何ぞや」、「勇氣とは何ぞや」と云ふが如く、一個々々の徳に關する者なりしと雖、本篇に至りては「徳義」全體の性質の研

究に及び、其の概念を得んとするの程度に至れる階段を示めせり。

又た知識の本原を説明するに當つて、知識の前世に言ひ及ぶが如き、之れ亦プラトーンの思想の進境を示めし、此對話書の前緒篇よりも一段進みたる程度にあるを示めすものなり。

メノーン

對話人物

徳義は教へらるべきものなるか
或は自然に人に
來るものなるか

テッサリア人
メノーン

メノーン

對話人物

メノーン

ソークラテース

メノーンの奴僕

アニュトス



メノーン クラテースよ、徳義は教訓或は練修に由つて學び得るものなるか、若し教育にても練修にても得られずとせば、然らば徳義は自然に人に來るものなるか、或は又た他に如何なる方法かある、君之れを余に告ぐるを得るか。

ソークラテース あゝメノーン。テッサリア人は其富有と其騎馬を善くするを以つて、一時、他のグレシヤ人中に有名なるとありしが、若し余の見にして

知識の國テッサ
リアとゴルギア
ス先生

アテーナイ市の
貧窮と知識の貧
窮

誤らすとせば、當今テッサリア人は又た其知識を以つて有名にして、殊に君の友人アリスチッポスの郷里たるラリサに於いて然りとなす。之れ即ちゴルギアスに原因するものにして、彼れの其の處に到るや、アレウアダイ家の花にして君の戀愛者たるアリスチッポス、及び其他のテッサリアの名門等は、ゴルギアスの知識を戀愛するに至れり。而して彼れ君に教ふるに種々の疑問に對して宏莊大膽なる語調を以つて之れに答ふることを以つてせり。此語調たるや、之れを知る者盡く之れを行ひ、又た凡て來り問ふ所の者に對して彼れ自ら答ふる所の語調にして、グレシヤ人たる者は何人と雖、質問せんと欲するものは、何事なりとも之れを質問することを得るなり。親愛なるメノーシよ、如何に人の境遇は異なるものなるかな。今や此アテーナイ市には物品の匱乏ありて、一切の知識はアテーナイ市より君の本國の方に移住したるものゝ如し。君若しアテーナイ市に向つて徳義は自然なるか、或は修得さるべきものなるかを問ふが如きことあらんには、彼れ必ず君の顔を見詰めて笑うて云はん——他國人よ、君は余よりも遙かに善良なる意見を有せり。されども若し余にして、インスピ

ソークラテース
徳義は如何なる
ものなりやを
知らずと云ふ

一人として徳義
の何たるやを
知るものなし

レーションを受けしならんには、或は君の問ふ所に答へ得たりしなるべし。されども、余は文字通りに、實に徳義の何たるやを知らず、况や徳義は教修に由つて得らるべきものなりや否やに於てをやと。而してメノーンよ、余自身に在つても、此の窮乏の地に住し、他の市民と同じく甚だ貧なり。而して耻かしながら徳義に關しては何事も知る所なき由を答へざるを得ざるなり。余にして物の「何」たるやを知らざる時は如何にして其の「性質」を知ることを得んや。余若しメノーンに就きて何事をも知ることなき時は、如何にしてメノーンの美なるか美ならざるか、富貴なるか富貴ならざるかを謂ふことを得んや。君は余を以つて之れを能くし得る者なりと思へるか。

メノ 否な。然りと雖、ソークラテースよ、君が徳義の何たるやを知らずと云ふは、此は眞面目の言なるか。而して余は君に關する此報告をテッサリアにまで運びて可なりとするか。

ソー 愛する少年よ、單に余に就いてのみにあらず、余の判断に由れば、何人も徳義に就いて知りしものなきことを報道するとも可なり。

メノ 然らばゴルギアスのアテーナイ市にありし時、君はゴルギアスに會ひしことあらざりしかか。

ソー 余は會ひしことあり。

メノ 君はゴルギアスを以つて徳義の何たるやを知らざりしものど謂ふか。

ソー メノーンよ、余は記憶甚だ不良なるを以つて、ゴルギアスに關して其の時如何なる思想を有したりしやは、今まことに言ふことを得ざるなり。余は敢て云はん、彼れは徳義を知れり、又た君は彼れの言ひし所を知れりと。故に願くば君は彼れの言ひし所を繰り返へして、余をして想起する所あらしめよ、或は然せずとも、寧ろ君自己の意見を余に聽かせよ、何となれば君の意見はゴルギアスと殆ど同一なるべしと余は思へばなり。

メノ 眞に然り。

ソー ゴルギアス此處にあらざれば憚ることなく余に語れ。メノーンよ、願くば徳義の何たるやを余に教へよ。何となれば余は前に言ひた

徳義に關するゴ
ルギアスの説

る如く、何人も徳義を知るものなしとせる内に在つて、君及びゴルギアスの眞に徳義を知れるものあるを知り、以つて余の意見の誤謬なりしを正すことを得ば、實に満足に感ずるものなればなり。

メノ ソークラテースよ、此れに答ふるは難事に非ず。先づ男子の徳義を云はゞ、其徳義たる、能く國家を治むることを知り、朋友を益し、敵を害し、又た自己に損害を被らざらんことを注意すること之れなり。女子の徳義も敢て之れを言ふに困難あることなく、女子は善く其家を齊へ、家事に注意し、夫に従順なるにあり。凡ての年齢凡ての事情、老たるも若きも、男子も女子も、公民も奴隸も、皆各異る徳義ありて、徳義の數や無數と謂ふべく、又た之れが定解や敢て窮することあらざるなり。何となれば徳義なるものは其之れを行ふ所の吾等の行爲及び年齢と相關のものたればなり。而して惡も亦此くの如きなり、ソークラテースよ。

ソー メノーンよ、余は實に幸福なりと謂ふべし、余は一の徳義を問ひて君は余に示めず、蜂群の如く、無數の徳義を以てせり、此の答言は之れ從來君の貯蓄し居たる所なるべし。假定して、蜂群の形容を以つて例と

一の徳義を解ひ
て蜂群の如く徳
義を數へらる

して君に問はんには、蜂の性質とは如何なるものぞと。君は答へて云はん、蜂には多くの種類ありと。余は云はん、然りと雖多くの種類ありとの理由を以つて、蜂は蜂として異なる所あるか、寧ろ蜂は蜂なりと雖、彼等の區別さるゝは、或は他の性質例へば其美惡、其大小、其形狀等の如きものに由つて區別さるゝにはあらざるか。君如何に之れに答へんとするか。

メノ 余は答へん、蜂は蜂として互に異なるに非ざるなりと。

ソー 今ま此く言ふと假定せんに——メノーンよ、其點余の知らんとする所なり、願くば其彼等相互に異らずして、凡て同じと云ふ所の性質を余に教へよ、君は之れを答ふることを得ん。

メノ 余は答へん。

ソー 徳義に於ても亦然り。徳義は如何に其數多くして異なるものありと雖、是等をして皆な徳義たらしむる所の普通の性質を有すべきなり。夫の「徳義は何ぞや」との疑問に答へんとするものは、善く此點に着眼することを要す。君余の言を了會したるか。

メノ 余は漸く了會し來れり。然りと雖余が願ふが如く、未だ十分に

此の疑問を會得し能はざるなり。

ソ一 メノーンよ、君は曰ふ、男子の徳義あり、女子の徳義あり、小兒の徳義あり、餘は之れに準すと、而して之れたゞ徳義のみとなるか、或は健康、大小、強弱等にも之れを適用するを得べしとなすか。或は然らずして健康の性質は常に男子にも女子にも同一なりとなすか。

メノ 余は云はん、健康を健康として見る時は男子たりとも女子たりとも同一たるなり。

ソ一 之れ亦大小強弱にも通じて然らざるか。若し女子にして強力ならんか、之れ男子に於いて存すると同一なる形狀、及び同一なる力量の理由に由つて強力たるなり。即ち強力を強力として云ふ時は、男子も女子も同一なりと云ふなり。或は君は同一ならずとするか。

メノ 同一ならずと考へず。

ソ一 徳義を徳義として云ふ時は、小兒に於ても、成人に於ても、男子に於ても、女子に於ても皆な同一なるにあらざるか。

メノ ソークラテースよ、此場合は他と同一なりと感ずること能はざ

徳義を徳義として云ふ時は同一なり

るなり。

ソ一 其は何故ぞ。君は男子の徳義は國を齊ふるにあり、女子の徳義は家を齊ふるにありと云ひしに非ずや。

メノ 余は其事を云へり。

ソ一 而して國たれ家たれ節制なく正義なくして善く齊へらるゝことを得るとするか。

メノ 決して齊へられず。

ソ一 然らばかの國或は家を節制に、且つ正義に治むるものは、節制及び正義を以つて之れを治むと云ふべきか。

メノ 然り。

ソ一 然らば男子も女子も、若し善良なる男子たり女子たらんには、節制及び正義等、同一なる徳義を有せざる可からざるか。

メノ 然り。

ソ一 若し少年たれ老年たれ、不節制にして又た不正なる時は、彼等果して善人たることを得るか。

メノ 否な善人たること能はず。

ソ一 彼等節制且つ正義ならざる可からざるか。

メノ 然り。

ソ一 然らば人皆な同一なる方法に於て、又た同一なる徳義を有することに於て善なるか。

メノ 推論上然り。

ソ一 之れと同じく、人若し其徳義同一ならざる時は決して善に非ざるべきか。

メノ 然り善に非ず。

ソ一 此くて一切の徳義の同一なることは證明されたり。故に君及びゴルギアスが徳義の如何なるものなりやを云ひし所を記憶して試験せよ。

メノ 君は是等凡ての徳義の一定義を有せるか。

ソ一 之れ乃ち余の求めつゝある所なり。

メノ 徳義は人間を支配する力なりと云ふこと能はざるか。

メノーン曰く、
徳義は人を支配
すること

小兒及び奴隸は
大人及び主人を
支配するか

『正しく』支配す

一の徳義と徳義
全體の説明

ソ一 此の徳義の定義は一切の徳義を含有せるものなるか。メノ一
ンよ、小兒の徳義と奴隸の徳義と同一なるか。小兒は其父を支配し、奴隸
も亦其主人を支配し、從來支配され居る者は、今よりは奴隸たるを要せず
とすべきか。

メノ ソークラテースよ、余はしか考へざるなり。

ソ一 實に然らず。其内或は些少の理由は之れあらん。然りと雖愛
する友よ、今ま一度問はん、君の言に従つて、徳義は「支配する力」なりとす
るも、君は之れに『正しく』而して不正ならずにと云ふ言語を加ふることを
爲さざるか。

メノ 然り、ソークラテースよ、余は之れに同意す、何となれば正義は徳
義なればなり。

ソ一 メノーンよ、君はこゝに概言して『徳義』と云ふか、或は單に『一の
徳義』と云ふか。

メノ 君の意味や如何ん。

ソ一 余の意味する所は、何物に就いて云ふとも可なり、例へば圓形と

云はど「一の形象」にして單に「形象」と云ふ可からず、之れ圓形以外他の形象あるを以つてなり。

メノ 然り、之れ余が今ま徳義に就いて云はんとし居たる所にして乃ち正義と同じく他の徳義あることなり。

ソー 是等は何ぞや余に其名稱を告げよ、君若し余に問ふに他の形象の名稱を問はんには、余は之れを君に告ぐべし。

メノ 勇氣、節制、智慧、及び寛大等は徳義にして、其の他尙ほ多くあるなり。

ソー メノーン、夫れ然り、然りと雖吾等又た前と同様の場合にありと謂ふべきなり、乃ち、以前の場合とは同一なる方法に非すと雖、吾等一徳義を考究して數多の徳義を見出したたり。而して吾等は凡て是等の諸徳を貫通せる所の普通の成分を發見することは未だ能くせざるなり。

メノ 何ぞや、ソークラテースよ、余は今に至るも尙ほ君の言へる如く、諸物と同じく、徳義の一の普通の概念なるものを得んとする所の君に隨従すること能はざるなり。

形象を定義する
の方法

ツ一　こは驚くを要せず。されども若し余にして能くし得べくんば聊か其近きあたりに達することを力めん、何となれば君は、凡ての物皆な一の普通の概念を有せることを知れるを以つてなり。今人ありて前に余が問ひたる所の質問を君に試みると假定せんに、彼れ曰く、メノーンよ形象とは何ぞやと。而し君之れに答ふるに「圓きこと」なりとせば、彼れ余が言ひしと同じく彼の人君に向つて問うて云はん、圓きこととは之れ「形象」なるか、或は「一の形象」なるかと。而して君は「一の形象」なりと答へん。

メノ　然り。

ツ一　此理由に由つて見る時は——他に尙ほ形象ありとなすか。

メノ　然り。

ツ一　彼れ尙ほ進みて、其他の形象如何んと云はぶ、君之れに答ふるならん。

メノ　然り答ふべし。

ツ一　若し彼れ單に色は如何なるものなりやと問はん時、君之れに白なりと答ふとせば、彼れ云はん、君は白は色なりと云ふか、或は一の色なり

色を定義する方
法

と云ふかど。君は答へて云はん一の色なり、何となれば白以外他の諸色あるを以つてなりと。

メノ 然り。

ソ一 彼れ又た余と同様なる方法を以つて議論を進めて此く言ふと假定せんか、曰く——吾等往々にして特殊事物に深か入りせり、之れ余の望む所に非ず。君は是等諸形象を呼稱するに普通名詞を以つてし、是等を以つて盡く形象なりと云へり、而して其形状は互に同じからず、時には相反する如きものをも形象と云へり。君の形象と稱呼するものと普通の性質は如何なるものぞ。而して其形象中には直なるあり圓なるあり。而も一は他のものよりも以上のものなりと云ふには非ずと——之れ君の言ふ所なるか。

メノ 然り。

ソ一 凡て之れを形象と云ふと雖、圓形は、直形よりも以上に圓形なり、又た直形は圓形よりも以上に直形なりと云ふにはあらざるべし。

メノ 然り、其事を云ふに非ず。

ソ一 君の断定する所は、たゞ圓形の形象たるや、直形の形象たるよりも以上の形象に非ず、又た直形の形象たるや圓形の形象たるよりも以上の形象に非ず、其形象の形象たるや一なりと云ふにあるか。

メノ 然り。

ソ一 然らば形象なるものは如何なるものぞ、請ふ試みに之れを語れ。人若し君に問ふに形象及び色を以つてする時、君此く答ふると假定せんか、曰く、人よ、余は君の余に求むる所を知らず、又た君の言ふ所を解せざるなりと。然らば彼の人驚きて云はん、余は「多數中より同一なるもの」を求めつゝあることを君は解せざるかと。而して其の人他語以つて君に問うて云はん、曰く、メノーンよ、單に圓形直形のみならず、如何なるものをも包含して、君が以つて形象と稱する所のもの、多數中の同一なるものは如何なるものぞ。メノーンよ、君は之れに答へ能はざるか。余は君の之れを試みんことを希望す。又た之れ徳義に關する答を爲すの練修たるべしと。

メノ ソークラテースよ、余は寧ろ君が答へんことを望む。

多數に通じて同一點を求むること

形象の定義

ソ一 然らば余は君の意に従はざるべからざるか。

メノ 願くば是非。

ソ一 然らば君は徳義に就いて答ふるか。

メノ 余は答へん。

ソ一 然らば褒美あるべければ余の成し得る限り善く爲さん。

メノ 然り。

ソ一 然らば今や形象の如何なるものなるやを君に告げんか。君は此答に對して何とか云ふ、曰く——形象とは常に色に附隨する所の唯一のものなりと。君は此定解を以つて満足せりや否や。君若し徳義に付きて同様なる定解を爲したる時には、余も亦それを以つて必ず満足すべし。

メノ ソークテリスよ、此は餘りに簡單なる答へに非ずや。

ソ一 何故に簡單なる。

メノ 何となれば、形象は常に色に附隨するものなりと君は云へり。

(ソ一 承認す。)

メノ 然りと雖若し人、形象の何たるよりも、色の何たるやを知らずと

云ふ時は君は如何なる答へを此人は爲さんとするが爲るやと云ふ事なり。若し彼れ議論を好み、争論を喜ぶ種類の哲學者ならんには、余は彼れに答へて云はん、曰く、若し余に於て誤謬あらんには、君之れを批評し、以つて余の論を破れば可なり、之れ君の役目なりと。されども、今ま君の如き友人間の論に在つては、余は一層温和なる調子を以つて論理家の爲すが如き方法を以つて答へん、乃ち余はたゞ真理を語るのみに止まらず、尙ほ且つ其の質問したる所の者の喜びて許容すべき所の前提を使用することを爲さん。之れ余が君に接近するの方法となす。君は終止なるもの、極端なるもの、等あるは其認むる所なるべし、然らずや。——余は是等の語は同一意義に使用すと雖、ブローヂコスをして言はしむる時は、各々異なる字義ありとて議論あるべし。然りと雖君は物に就きて謂ふ時に、終止せり、或は終結せりと云はん、——之れ凡て余の云へる所にして——別に困難なる問題に非ざるなり。

メノ 然り、余は此事を言へり。而して余は君の意味する所を了會したりと信ず。

ソークラテース
形象の定義を下
す

色とは何

メノンの美少
年なることを云
ふ

ソ一 君は又た幾何學等に於ける如く、或は面或は立體等に就いて云ふことあらん。

メノ 然り。

ソ一 此に於て君は今や余の下したる形象の定義を理解する條件の下にありと謂ふべし。余は定解して、形象とは其内に立體の終止する所のものなり、換言せば形象とは立體の限界なりと謂はん。

メノ 然らばソークラテースよ、色とは何ぞや。

ソ一 君は自らゴルギアスの爲したる徳義の定義を記憶して、余に言ひ聴かすことを爲さずして、却つて余をして、答へしめんとして、此老人を困まらすが如き、何ぞ君の酷なるや。

メノ ソークラテースよ、君若し余の問ひし所に答へなば余も亦君に答ふべきなり。

ソ一 眼隠しせられたる人と雖、たゞ君の言語を聴くのみにして、直に君の美少年にして、又た數多の情人を有せることを知らん。

メノ 何故に其の如きことを言ふや。

ソ一 何となれば君の言語は命令の趣あるを以つてなり。之れ凡て美少年の其盛時には皆然るものにして、君は實に壓制なり。疑ふらくば君は余を以つて美に對して弱身あるものと見て取りしならん。故に余は君の意に適するやう君に答へざるを得ず。

メノ 願くば答へよ。

ソ一 然らば余は君の熟知せる所の、ゴルギアスの筆法に由つて君に答へんか。

メノ 余は大にそれを望む。

ソ一 ゴルギアス及びエンペドクレース等は、存在の流出なるものあるを謂はざるか。

メノ 然り之れを謂へり。

ソ一 而して又た通路ありて、此の内に入り、又た此れを通じて其流出なるもの通過すと謂はざるか。

メノ 然り。

ソ一 而して或流出は其通路に適合すと雖、或流出は過大過小なるこ

ゴルギアス及び
エンペドクレ
ースの「存在の流
出」

とありと謂ふか。

メノ 然り。

ソ一 視覚なるものあるか。

メノ 然り。

ソ一 而してピ^ンダ^グロスの言へる如く「余の意味を讀め」。―色とは形
狀の流出にして視覚を以つて計量して感覺さるべきものなり。

メノ ソークラテース、此は實に完全なる答の如し。

ソ一 何となれば之れ君が常に聽き慣れたる言語に似たるを以つて
なり。而して君の才智を以つてせば同一なる方法を以つて、音響、臭覺及
び其他同様なる現象の性質を説明することを得べし。

メノ 眞に然り。

ソ一 メノーンよ、此答へは實に正統嚴格なるものなりしを以つて、君
に取つては形狀に關する他の答へよりも、一層承認し易かりしなり。

メノ 然り。

ソ一 然りと雖アレキシデーモスの子よ、余は尙ほ他の答へは又た一

層善かりしと考へざるを得ざるなり。意ふに君若し暫く留まりて入門して、昨日君の云ひしが如く、不思議の前を避けざる可からざるやう強制せらるゝことなくんば、君も亦同一説たるや余の保證する所なり。

メノ ソークラテースよ、君若し余に多くの此くの如き答へを與へんには、余は喜びて留まるべし。

ソー 然らば、余自身の爲め及び君の爲めに、余は成らん限り善く爲すべし。然りと雖余は君に甚だ多くを與へ得ざることを恐る。而して今や君の順番なれば君は其約を守り、徳義の如何なるものなりやを總體遍通の語を以つて説明せざる可からず。而して物を破碎するが如く、單數なるものを複數と爲すことなく、完全に徳義を存し、決して之れを片々に破碎することなく、以つて之れを余に手渡すべし。余は其摸範は前に之れを與へたり。

メノ ソークラテースよ、余の解する所を以つてすれば、徳義とは名譽なることに違するにありて、余の説は詩人の言と同一たるなり、其詩に曰く

メノーンの徳義の定解を求む

破碎に非ず完全に

徳義は名譽に違すること

「徳義とは名譽なることに達せんとする所の欲望及び力なり」

と。

名譽と善

ソ一 名譽なることを願望する所の者は、又た善たることを願望する
か。

メノ 然り。

ソ一 然らば或者は悪を願望し、又た或者は善を願望するものありや。
愛する友よ、一切の人は善を願望せざるか。

メノ 否、余は然か考へず。

ソ一 然らば悪を願望する者あるか。

メノ 然り。

ソ一 其人は悪を以つて願ふべき善なりと誤解して之れを願ふか、或
は悪と知りつゝ之れを願望するか。

メノ 意ふに兩者なるべし。

ソ一 メノソ一よ、人は悪を悪と知りつゝ、其悪なるに係はらず尙ほ之
れを願望すと、君は真に思へるか。

悪を願望する者
あるか

悪を悪と知りて
之れを願ふもの
あるか

メノ 然り余は眞に其如く思へり。

ソー 而して願望とは之れを所有せんとすることなるか。

メノ 然り、所有することの願望なり。

ソー 而して悪は、之れを有せる其人に善を爲すと、其人考るなるか、或は害悪なるべしと考ふるか。

メノ 或人は悪も自己に善を爲すべしと考ふるあり、或人は害悪を爲すべしと考ふるもあり。

ソー かの悪が其人に善を爲すと思へる人は、果して是等は悪と知りて之れを求むる者と君は思ふか。

メノ 否、余は思はざるなり。

ソー かの、是等の悪たることを知らざる所のものは、悪として之れを願望するに非ずして、其實たとひ悪なりとも、善と信じて之れを求むるなり。故に彼等若し其判断を誤り、悪を以つて善なりと思ふことありとも、其實善を求むるものたるや、極めて明瞭なることにして、之れに優りて、明瞭なることあらざべし。

悪を善と誤解す、要するに善を求むるなり

惡と不幸

人は不幸不運を
願望するか

メノ 然り、其場合に於ては然り。

ソ一 然らば君の言へるが如く、惡を願望し、而して惡は其の所有者に有害なりと思ふ者は、又た自己は惡の爲めに害さるゝことを知るならんか。

メノ 彼等必ずや之れを知らん。

ソ一 彼等又た其害されたる度の多少に由つて、自己を以つて不幸なる者なりと思ふならんか。

メノ 必ずや亦しか思ふべし。

ソ一 不幸なる者は不運の人にあらずや。

メノ 實に然り。

ソ一 人は不幸且つ不運を願望するものなるか。

メノ ソークラテースよ、余は否と云はん。

ソ一 若し不幸たることを願望する者なしとせば、誰か又た惡を願望するものあらん。何となれば不幸とは惡を願望して之れを所有することたればなり。

人は悪を願望するものなし

メノ ソークラテースよ、君の言真なるが如し。而して何人も悪を願望するものなきことを許容せん。

ソークラテースよ、而して君は今ま、徳義とは善を得ることの願望と力となりと云ひしに非ずや。

メノ 然り余はしか云へり。

ソークラテースよ、其言を許容すとせば、然らば善を願望することは人間一般普通の事にして、此事に於ては、一人は他人よりも、特に優れる所あることなると謂ふべきか。

メノ 然り。

ソークラテースよ、若し人、善を願望するに於て他人よりも優れる所なしとせば、彼れ善を得るの力に於て、或は優れる所ありと謂ふべきか。

メノ 然り。

ソークラテースよ、然らば君の定義に由る時は、徳義とは善を得るの力なりと云ふものゝ如し。

メノ ソークラテースよ、君が此問題を観る所の方法に於ては、余は全

善を望願するは人間一般の事のみ

然らば徳義とは善を得るの力なるか

然之れを稱贊す。

ソ一 然らば次に余は此の觀察は果して眞なりや否やを、他の觀察點より見んと欲す。何となれば余は肯て君を以つて正理なりと言ふものなればなり。君の言ふ所は、徳義とは善を得るの力なりと謂ふにあるか。

メノ 然り。

ソ一 君の所謂善とは例へば健康、富有、金銀、及び國家の官職及び名譽等——是等は君の所謂善なるものなるか。

メノ 然り、是等凡て善なり。

ソ一 然らば大王の世襲の友たる汝メノーンの說に由る時は、徳義とは金銀を得るの力と謂ふべし。而して君は此金銀を得るに於ては、敬神に且つ正義に之れを得べしとなすか、或は此くの如きことを要せずして、之れを得るの方法は、或は不正義なりとも、又た不正直なりとも、兎にも角にも金銀を得るに於ては、之れ徳義なりと謂ふべきか。

メノ ソークラテース、此くの如きは之れ徳義に非ずして惡行なり。

ソ一 然らば金銀を得るに於ては、正義、節制、神聖、或は其他の徳義の一

善き物

徳義は金銀を得るの力なるか

正不正其方法は抑ばざるか

部分は必ず之れに附随せざる可からず、而して、是等なくして、單に金銀を得ることは徳義に非ざるが如し。

メノ 何ぞや。是等のものなくして、如何でか徳義たることを得んや。

ソ一 不名譽なる方法を以てして、金錢を得ることを背てせざるは、等しく之れ徳義なるか。

メノ 然り。

ソ一 然らば此くの如きの善を得ることは之れを得ざることに比して別に徳義たるに非ずして、正義、正直等の隨伴する所のものは善たり、正義を缺損せる所のものは悪たるか。

メノ 余の判断に由る時は、其事に就いては疑なきが如し。

ソ一 吾等今ま、正義、節制、及び其他是等のものは、皆な徳義の一部分なりと云ひしに非ずや。

メノ 然り。

ソ一 メノーンよ、此くて之れ君が余を嘲弄せる所以なり。

メノ ソークラテースよ、何を以つて此言を爲す。

正義節制等は徳義の一部分

メノーン未知を
定解するに未知
の一部を混用す

徳義を定解する
に其徳義の一部
を以つてするの
誤り

ソ一 何となれば余は君に願ふに、徳義を完全に存し、之れを破碎する
となく余の手に渡さんことを以つてし、而して余は君が答語を形成せん
が爲めに其模範を君に與へたり。然るに君は既に之れを忘れ、余に告ぐ
るに徳義とは正直に或は正義を以つて善を得ることなるを以つてし、此
くて正義を以つて徳義の一部分なることを承認せり。

メノ 然り。

ソ一 然らば徳義とは徳義の一部を以つて爲す所の行爲なりとは君
の前定したる所より繼ぎ來る所なり、何となれば正義及び其他是等のも
のは徳義の一部分なればなり。

メノ 然らば何ぞや。

ソ一 然らば何ぞやとか。余は全體としての徳義の性質を問ひしに
非ずや。而してたとひ君の言ふ所は、宛も已に徳義の全體を余に語り、余
は又た之れが細片に破碎されし時、徳義全體を知るものなるかの如く語
れりと雖、君の答ふる所は遠く徳義全體と云ふの點を離れ、徳義の一部
を以つて爲したる行爲は徳義なりと云へり。之れを以つて愛するメノ

ソ一よ、余は再び質問を始め、徳義とは何ぞやとの疑問を繰り返へさざるを得ざるなり。然らずんば余はたゞ徳義の一部を以つて爲したる行爲は徳義なりと云ふを得るのみ。而して、正義を以つて爲したる行爲は徳義なりとの言には、或は尙ほ他の意味ありや如何ん。君は質問は繰り返へすの要なしとなすか。誰れか徳義を知らざるものにして、徳義の一部分を知り得るものぞ。

メノ 否な、余は知り得るものなしと云はん。

ソ一 余は例を形象に取りし時、苟も未だ試験を経ず又た許容されざる所の言語を以つてしたる答語は、一切之れを拒絶したるは、君之れを記憶せりや如何ん。

メノ 然り、ソークラテース、而して吾等其如く爲したるは正しと云ふべし。

ソ一 然らば友よ、余が其時爲したる如く爲せ。而して全體としての徳義の性質を説明するに當り、未だ説明を経ざる所の徳義の一部分、或は其他此種類のものに依つてしては、徳義は之れを説明し得らるべしと思

ふこと勿れ。若し此くする時は、たゞ之れ徳義は何ぞやとの以前の問題を繰り返へすに過ぎざればなり。余の言正しからざるか。

メノ 余は信ず、君の言は正しと。

ソノ 然らば再び始むべければ余に答へよ。君及び君の友人等の意見に由る時は、徳義の定義は如何ん。

ソノクラテース
は麻痺顔なり

メノ
自己の
能力麻痺を自白す

メノ あゝソノクラテースよ、余の未だ君を知らざるの前、君は常に自己及び他人を攪亂する人なりとは余の聞きし所なり。而して今や君は其魔術を余に施こしつゝありて、余は爲めに攪亂されて、余の才知殆ど出づる所なし。若し余にして君に對して、戯言を試みんか、君の容貌及び人に對して有せる力は、宛も麻痺顔しびれの如く、苟も之れに近づくものは接觸を以つて之れを麻痺せしむること、今ま君が余を麻痺せしめたるが如しと謂ふべきなり。實に余の精神も余の舌も盡く麻痺し了りて、如何に君に答ふべきやを知らざるなり。余は是より前徳義に關じて種々無限に多數の人に演説したることあり。而して其聴衆は決して無學の人には非ざりき。然るに今や君に對しては、徳義の何たるやをだに言ふこと能は

ソークラテース
は妖術者とせら
れん

ざるなり。思ふに君が航海し旅行して他國に到らざるは大に賢きことなりとす、何となれば、君若し他國に到りてアテーナイに於て行ひたると同様の事を行ふことあらんには、他國人は君を以つて妖術者となし、直に牢獄に投すべければなり。

ソークラテースよ、君は惡ものなるかな、他の人々は或は之れを捕へ得べしと雖、余は捕へ得ざるべし。

メノ　ソークラテースよ、其は何をか意味す。

ソークラテース　君が余に就いて比喻を作りたる君の意中は、余は能く之れを知れり。

メノ　何を以つて君はしか思ふや。

ソークラテース　即ち君は余をして君に關する他の比喻をなさしめんが爲めなるべし。何となれば凡て青年紳士なるものは、自己に關する愛すべき比喻を好むものなればなり。之れ可なり。然りと雖、余は君に答禮として別に君の比喻を爲さざるべし。余の麻痺鱗たることに就いて云はゞ、麻痺鱗は他をして、麻痺せしむる原因たるに共に、又た自己も麻痺せりと云

麻痺鱗の比喻に
就いて

却らざることは
討究すること能
はずとの「ソフ
スト」流の言

ふならんには、余は麻痺鎮たるべく、其他何者にてもあらざるなり。余が他人を攪亂するは、余自ら明瞭なるの故に非ずして、余自ら全く攪亂され居るを以つての故なり。而して今ま余は徳義の如何なるものなるやを知らず、又た君は余に接觸せざる前は、能く之れを知れりと雖、今は余と同じく之れを知らざるが如し。然りと雖余は君と共に討究するに於ては異存あることなし。

ソノ ソークラテースよ、如何にして君は其の知らざる所のものゝ討究に進むの意なりや。又たを何討究の目的として進むの意なりや。又た若し其求めし所を發見したる時は、如何にして此物は君の知らざりし所のものたることを知るや。

ソー メノーンよ、余は君の言の意味を知る然りと雖、君は又た甚だ煩はしき議論を提出せるを 見るなり。今ま君の議論を謂はば、人は其知れる所及び其知らざる所、何れも之れを討究すること能はざるものなり、若し人已に知らば之れ已に討究の要あることなく、又た知らざるものに就いては其討究すべき所のものを知らざればなりと云ふにあるべし。

ソークラテース
之れに反す

神聖光榮の眞理

メノ ソークラテースよ、此論正當ならざるか。

ソー 余は正當なりと思はず。

メノ 何故に正當ならざる。

ソー 余は其理由を云はん。余は數多の賢人賢女に一種神聖なることを聽きたり。

メノ 彼等何とか云ひし。

ソー 余の解する所に由れば彼等の言ひし所は實に光榮ある眞理なり。

メノ 其の眞理とは如何なるものぞ、又た其の言ひし所の人は何人ぞや。

ソー 其内の或者は祭司或は女祭司にして、其自家の専門とせる事業に道理あらしめんことを學びたる人なり、又た其他には詩人ピンダロス及び其他「インスピレーション」を受けたる人もあり。其言ひし所は左の如し——君之れに注意せよ、其言果して眞なりやに。——彼等曰く、人の靈魂は不死にして、或時には終ることありて之れを死と稱し、或時には又た再び生

靈魂不死前世の
記憶説

一切のものを一
の記憶より引き
出す
一切の討究之れ
實は記憶なるの
み
故に「ソフィス
ト」流の研究は
不能なりとの實
は誤り

るゝことありと雖、決して滅亡し了るには非ざるなり。而して道德とは人は常に完全に神聖なる生活をなすべきものなりと云ふことなり。「何となれば女神ヘルセフチーは陰府に在りて、死者の過ぎにし罪の刑罰を受けしものゝ靈魂は、九年毎に再び之れを此世界の光明に送り返へすことを爲す。此くて送り返へされたる靈魂は、乃ち之れ此後尊貴なる帝王、偉大なる人物、大知識の人となるべきものにして、後代には神聖なる英雄と稱せらるゝなり」。此くて靈魂は不死にして幾度も生れ變り、現世界たれ、陰府たれ、其の處に存在せる一切の物を見、是等凡ての知識を有せり。之れを以つて此靈魂が以前に知りし所の徳義及び其他の諸物を記憶に喚び出すことを能するとも、敢て驚くを要せざるなり。且つ一切の自然萬物は同屬のものにして、靈魂は一切の事物を學知せるを以つて、人若し堅忍不拔ならんには、一切のものを一の記憶より引き出だし、或は人々の所謂學ぶことは敢て難しとせざるなり。何となれば一切の討究も一切の學修も皆な之れ記憶回想に外ならざればなり。故に吾等は此討究は不可能なりとの「ソフィスト」流の議論に同意すること能はざるなり。實に

記憶説は人をして
愉快ならしむるも
「ソフィスト」流の
説は人をして自棄せし
む

「學ぶ」とは「記
憶す」と云ふこと
と

君の議論の如きは吾等を怠惰ならしむるものにして、怠惰者流のみには愉快ならんと雖、今余が謂ひし所の説は、吾等をして活潑進取ならしむるものなり。余は此く信せり、之れを以つて徳義の性質に關し、喜んで君と共に研究せんと欲するなり。

メノ 夫れ然りソークラテース。然りと雖君の言たる、吾等學ぶに非ず、吾等の學ぶと稱するものは、たゞ之れ記憶の方法たるのみとは果して何をか意味す、君之れを余に教ふることを得るか。

ソー メノーンよ、君の惡ものなることは余は前に云ひたることなるが、余が一切の知識は單に記憶なるのみ、教授なるものなしと言へるに關はらず、君は余に問ふに、余が君に此事を教へ得るやを以つてす。意ふに之れ君の狡猾なる、余をして矛盾に陥らしめんとするものなるなからんか。

メノ ソークラテースよ、余は真に其の如きの意志なきことを證言す。余の問ひたるはたゞ余の習慣より然りしものにして、君若し其の言ひし所の真なることを證明し得るとせば、願くば之れを教へよ。

前世記憶を説
明す

ソークラテース
メノンの従者
たる小兒と幾何
學を論じ前世記
憶説を證明す

正方形

四等邊

ソ一 之れ容易の業に非ず。然りと雖余は成らん限りを盡くして君を歡ばすことを力めん。然らば君の數多の従者中の一人を此に呼べ、余は彼れに就いて語るべきなり。

メノ 諾。來れ子供。

ソ一 彼れグレシア人にして、グレシア語を語るべし、然らずや。

メノ 然り彼れ余の家に生れたり。

ソ一 余の彼れに疑問する所に注意し、而して彼れは果して余に學ぶか、將た又た單に記憶よりするかを見よ。

メノ 余は注意せん。

ソ一 子供よ、此くの如き形象は正方形なることを知るか、余に答へよ。

子供 然り余之れを知る。

ソ一 汝は正方形は四等邊を有することを知るか。

子供 然り。

ソ一 余が今ま正方形の中央を横ざりて引きたる所の線は同一なりと知るか。

子供 然り。

ソ一 正方形は或る大きさを有するか。

子供 然り。

ソ一 若し方形の一邊二尺にして、他の一邊亦二尺なる時は、全體幾何方尺ありとするか。換言して説明せんに、一の方向に於ては長さ二尺、他の方向に於ては一尺なる時は、其の全體は二尺を一度取らば可なるに非ずや。

子供 然り。

ソ一 されども此の一邊亦た二尺なる時は、二尺を二倍せば可ならずや。

子供 然り。

ソ一 然らば其方形は二尺の二倍なるか。

子供 然り。

ソ一 然らば二尺の二倍は幾何かある、數へて之れを余に告げよ。

子供 ソークラテースよ、四あり。

二倍大の平方

ソ一 然らば又た此方形の如く諸線を同じくして二倍の方形あるを得るか。

子供 然り。

ソ一 其方形は幾方尺かある。

子供 八方尺なり。

八方尺

ソ一 此二倍大の方形の邊を爲せる線の長さを算へて余に告げよ。

此一方の邊の長さは二尺なり、其の一方は幾尺ぞや。

子供 ソ一クラテースよ、二尺の二倍たるや明かなり。

ソ一 メノーンよ、余は何事も教ふることなくたゞ問へるのみなるを見ざるか。而して彼れ八方尺の圖を作るには、幾尺の線を要するやは、彼れ自ら知れりと思へるに非ずや。

メノ 然り。

ソ一 彼れ真に知れるか。

メノ 決して然らず。

ソ一 彼れ其方尺二倍なりとの故を以つて邊線亦二倍なるべしと想

小兒答に誤れり
と雖尙ほ内心知
れりと思へり

正當の順序にて
回想す

八方尺の正方形
の邊を求む

像したるなり。

メノ 然り。

ソ一 彼れ正當の順序を履みて回想せるを見よ。(子供に向つて)子供よ。二倍の面積は果して二倍の線に由つて生ずるものなりや。余は長方形に就いて謂へるに非ずして正方形を云へるものなり。而して正方形は前の正方形の二倍——即ち八方尺の正方形を求むるものなるを記憶せよ。而して汝は尙ほ二倍の正方形は二倍の線に由つて生ずると云ふか。

子供 然り。

ソ一 されども若し此に他の一線を引く時は此の線二倍とはならざるか。

子供 然り。

ソ一 此くの如き四線は八方尺を含有する所の面積を爲すが、

子供 然り。

ソ一 此くの如き圖を畫かん。之れ汝の所謂八方尺の圖には非ざるか。

十六方尺なり八
方尺を得ず

子供 然り。

ソ一 圖中四區畫あり、各其一は四方尺の形象に等しきに非ずや。
子供 然り。

ソ一 而して之れ四の四倍にはあらざるか。
子供 然り。

ソ一 四の四倍は二倍に非ざるにあらずや。
子供 然り、二倍に非ず。

ソ一 然らば幾何ぞ。
子供 四倍なり。

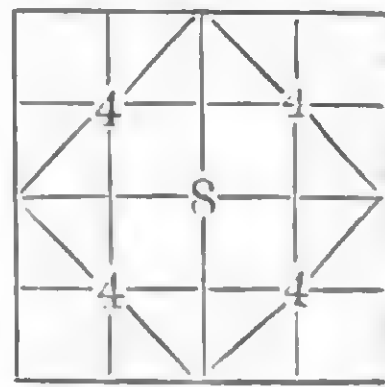
ソ一 故に子供よ、二倍長の線の形成したる廣さは二倍に非ずして四
倍なり。

子供 真に然り。

ソ一 四の四倍は十六なり、然らずや。

子供 然り。

ソ一 此くて吾等十六方尺の圖を得たりと雖、八方尺の圖を得んには



幾尺の線を以てすれば可ならんか。汝余の間ふ所を解したるか。

子供 然り解せり。

ソ一 善し。八方尺の面積は此大さの二倍にして今他の大なる方形の半なるに非すや。

子供 然り。

ソ一 然らば此の面積は此一方の線よりは長く、他の一方の線よりは短かきものに由つて作らるべし。

子供 然り、之れ余の考ふる所なり。

ソ一 大に善し。余は汝の考ふる所を聽くを得たるを喜ぶ。而して此れは之れ二尺と四尺との線より成れるには非ざるか。

子供 然り。

ソ一 然らば八方尺を作る所の邊の長さは、此一邊は二尺以上にして、他の一邊は四尺より少なかるべきに非すや。

子供 然るべきなり。

ソ一 試み、而して幾尺ありやを余に告げよ。

小兒三尺の邊を
以つて答ふ

子供 三尺なり。

ソ一 今ま若二尺の此線に其半を加ふる時は、此線三尺となるべく、此
くて此處に二尺彼處に一尺あり、又た一方には此處に二尺、彼處に一尺あ
り、而して汝の謂へる如き畫を作るを得るか。

子供 然り。

ソ一 然りと雖此一邊に三尺あり、他の一邊に又た三尺ありとせば、其
全面積は三尺の三倍にはあらざるか。

子供 之れ明瞭なることなり。

ソ一 三尺の三倍は幾何ぞ。

子供 九なり。

ソ一 四の二倍は幾何ぞ。

子供 八なり。

ソ一 然らば八方尺の圖は三尺の線に由つて作られざるにあらずや。

子供 作られず。

ソ一 然らば幾尺の線より作らるか、——精密に余に告げよ、汝若し寧

九方尺を得八方
尺を得ず

小兒の記憶力の
進歩

ろ數ふることを好まずんば、試み、而して其線を余に示めせ。

子供 ソークラテースよ、余は實に知らざるなり。

ソー メノンよ、君は彼れが此の記憶力に於いて如何に進歩したるやを見ざるか。彼れ初めは八方尺の圖の邊は幾尺なるかを知らざりき、而して今も尙之れを知らずと雖、其時彼れ之れを知れりと信じ、彼れ恰も知れるが如く信じて之れに答へ、毫も困難なきものゝ如くなりき。然るに今や彼れ困難を感じ、彼れ之れを知ると云ふことを知らず、又た知れりと想像することもなし。

メノ 然り。

ソー 彼れ其無智なることを知るに於て一段の進歩を爲せしには非ざるか。

メノ 然り、思ふに彼れや進歩したるなるべし。

ソー 吾等彼れをして疑念を起さしめ、彼れに「麻痺質の激動」を感せしめたりとせば、吾等は彼れに或種の害を加へたるものなるか。

メノ 余は然りと思はず。

無知を知れる一
段の進歩

「麻痺質の激動」
と人の進歩

ソ一 吾等は此事に關したる眞理を發見することに於て、確かに彼れに補益する所の或事を爲したり。今や彼れ其自己の無智を醫せんと欲するならん。然りと雖前には彼れ全世界に向つて、二倍の面積は二倍の邊を有するものなりと公言するを肯てせんとしたり。

メノ 然り。

ソ一 然りと雖彼れ未だ之れを知らず、而して之れを知らんことを欲するの觀念に由つて思想常惑するに至る時までには、彼れ自ら知れりと思像して而も未だ知らざりし所の此事は彼れ、之れより前に研究し或は學びたるべしと君は想像するや如何ん。

メノ ソークラテースよ、余は然か思はざるなり。

ソ一 然らば彼れが麻痺鱗に接觸したるは寧ろ宜しかりしと謂ふべきか。

メノ 然り宜しかりしと信ず。

ソ一 此他尙ほ彼れの發達せる所を見よ。余はたゞ彼れに問ふのみにして、教ふる所なかるべく、而して彼れ余と共に研究の勞を分つべし。

教へずたゞ引き出したるのみ

ソークラテース又ク畫きて小兒に問ふ

故に若し余にして單に彼れの説を引き出すに止めずして、或は指教し、或は説明することあらんには、君之れに注意して余を咎めて可なり。小供よ。余が此に畫きたる所は四方尺の方形には非ざるか。

子供 然り。

ソークラテース 余は前の方形に等しき他の一方形を之れに加へん。

子供 然り。

ソークラテース 而して此兩者に等しき第三のものを加へんか。

子供 然り。

ソークラテース 吾等又た空角を充たさん。

子供 善し。

ソークラテース 此くて四箇の等しき面積あり。

子供 然り。

ソークラテース 此面積は、此方形より幾倍大なるや。

子供 四倍なり。

ソークラテース 然りと雖汝の記憶せるが如く、求むる所はたゞ二倍大のものた

對角線

對角線の作りたる
平方面積

るべし。

子供 眞に然り。

ソ一 而して角より角に引く此の線は、是等の各面積を二分するには
あらざるか。

子供 然り。

ソ一 此に此面積を圍む所の四個の等しき線あるに非ずや。

子供 然り、之れあり。

ソ一 注意して見よ、其面積幾何あるかを。

子供 余は了解せず。

ソ一 此の内部の各線は、四個の面積を兩分せるに非ずや。

子供 然り。

ソ一 此の分畫中には其面積幾何がある。

子供 四なり。

ソ一 此分畫中には幾何。

子供 二なり。

八方尺を得たり

二倍の面積は對角線の二乗

小兒の頭腦中より出づ

ソ一 四は二の幾倍なりや。

子供 二倍なり。

ソ一 然らば此面積は幾方尺なりや。

子供 八方尺なり。

ソ一 如何なる線より汝は此圖を得たるか。

子供 此の線より。

ソ一 之れ即ち角より角に至るの線なるか。

子供 然り。

ソ一 此線は之れ學者の對角線と稱する所のものなり。メノーンの奴隸よ、若し之れ固有名稱ならんには、汝は、二倍の面積は對角線の二乗なることを斷定するを得るか。

子供 然り、ソークラテース。

ソ一 メノーンよ、君は彼れに就いて何とか云ふ。凡て是等の答へは盡く彼れの頭腦より出でたるに非ずや。

メノ 然り、凡て皆な彼れ自身より出でたり。

彼れ知識を自有せしなり

自有せる覺醒の觀念は記憶なり

ソ一 然りと雖吾等が今ま云ひしが如く、彼れ知らざりしに非ずや。
メノ 然り。

ソ一 然りと雖是等の思想を彼れ自身に有せしなり。
メノ 然り。

ソ一 然らばかの未だ其れを知らざる人と雖、尙ほ其の知らざる所のものゝ眞正の思想を有せるに非ずや。

メノ 然り、彼れ夫れを有せり。

ソ一 而して今や是等の觀念は夢の如く覺醒し來れり。若し彼れ數々種々の形狀を以つて同様なる疑問を問はるゝことあらんには、遂には彼れも何人も之れを知るに至るべし。

メノ 余は敢て然りと云はん。

ソ一 何人も彼れに教ふることあらずと雖、若し質問さるゝ時は、彼れ自ら其知識を自己に回復すべきなり。

メノ 然り。

ソ一 而して知識の此自發の回復なるものは即之れ記憶たるなり。

奴隷の小兒、何
學を知る、され
ども彼れ、世に
此知識を得たる
に非ず

メノ 然り。

ソ一 而して彼れ今ま此く有する所の此の知識は、彼れ之れを得たるか、或は以前より有したるものならざる可からず。

メノ 然り。

ソ一 然りと雖彼れ若し以前より常に此知識を有せしものならんには、彼れ以前より常に之れを知り居るならん、又た若し彼れ此知識を得たるものならんには、彼れ幾何學を教へられたるに非る以上は、此現世に於て決して之れを得たるにも非ざるべし。何となれば彼れ一切の幾何學及び其他諸科の知識に關しても亦た同一の結果を得るものとなされ得べければなり。或は何人か彼れに教へたる事ありや。メノ一ンよ、君は之れを知れるなるべし、何となれば君の言へる如く、彼れは君の家に生れ、君の家に成長したるものなればなり。

メノ 何人も彼れに教へしことなきは余之れを保證す。

ソ一 然るに彼れ知識を有せるに非ずや。

メノ ソ一クラテースよ、實に然るなり。

前世の習むるべし

ソ一 若し彼れ現世に於て此知識を得たるものに非すとせば、彼れ必ずや他の時に於て之れを得たるものならざる可からず。

メノ 之れ明かに然り。

ソ一 而して其時は之れ、彼れの未だ人と生れざりし時なるべし。

メノ 然り。

ソ一 若し彼れ人と生れたる時も未だ人と生れざる時も、以前より常に眞正の思想を有し、たとひ質問を試むるに由つて其知識は覺醒さるゝのみなりとせば、彼れの靈魂は常に此知識を有せざる可がらざるの理なり、何となれば彼れは常に人たるか、或は人に非ざりしを以つてなり。

メノ 明かに然り。

ソ一 而して若し一切事物の眞理、靈魂中に存するものなりとせば、靈魂は不死なり。故に勵みて其知らざる所、或は寧ろ、忘れたる所を記憶回想することを力めよ。

メノ 兎に角に余は君の所説を喜ぶの感あり。

ソ一 メノーンよ、余も亦此く云ふ所の言を喜ぶものなり。時に余は

ソ一タラアース
靈魂不死を云ふ

ソ一タラアース
(プラトーン)の
確信斷言するは
此説なるを云ふ

此問題の爲めに
は全心全力を盡
くすの決心

知らざる所をも
得研究することを

徳義教養論に立
歸り先づ徳義の
何たるやを明か
にせよとなす

確信することなくして言ふことありと雖、たゞ此事に關しては、堅固なる確信を有せり。故にかの、吾等知る所あるなく、又た知らざることは之れを研究するの途なしとして、怠惰安逸に居らんよりも、余は寧ろ之れを研究すべき筈のものとなして進むは大に優り、且つ大膽に又た頼もしきこととなす。余は此の題目の爲めとし云はゞ、全身全力を盡くし、言語に、行爲に戰はんとする所たるなり。

メノ ソークラテースよ、之れ亦名言なるが如し。

ソー 然らば人は其知らざる所の事なりとも之れを研究せざる可からずとの點に吾等一致せり。此に於て吾等共に徳義の性質の攷究に力を用ゐざる可からざるに非ずや。

メノ 然り、ソークラテース、必ず然かせざる可からざるなり。然りと雖余は寧ろ始めの疑問に立ち歸へり、徳義は教養に由つて來るものなるか、自然に來るものなるか、將た又た他の方法に由つて得らるべきものなるかを尋ねんと欲す。

ソー メノーンよ、余若し君を命令すること、猶ほ余自身を制御するを

假定説に由つて
説明せん

幾何學の假定説

〔此假定説は幾
何學上價値なき
ものなり。卷尾
の註釋を參照せ
よ〕

得るが如くならんには、余は先づ「徳義の何たるや」を確定せざる以上は徳義は教養に由つて得らるゝものなるか、將た又た他に方法ありやを論ずること勿るべきなり。然りと雖君はたゞ君の奴隸たる余を制御せんとするのみにして、自己を制御せんことは毫も之れを思はざるなり。之れ君の自由の觀念にして、抵抗すべからず、余は君に従はざるを得ざるなり。故に余は未だ其の本性を知らざる所の徳義の特質を研究せざる可からざるなり。是れを以つて兎も角も君は聊か讓歩する所ありて、徳義は教訓に由つて來るものなるか、或は他の方法に由るものなるかの論は、之れを假定説に由つて論ずることを許すや否や。人若し幾何學者に問ふに、一定の圓形中に一定の三角形を畫くを得るやを以つてする時は、彼れ此く答へて云はん、曰く、余は直に答ふること能はずと雖、こゝに一個の假定説を提出して、以つて結論を得るの助けたらしめんに、若しこゝに一の平面形あり、其既定の邊に沿ひて他の形象を畫き、其の初めの平面形の面積は新に畫き加へたる所の平面形の面積に等しき丈けを不足すとせば、然らば一の結果を得べく、若し之れ不可能ならんには、又た他のものを得

徳義は教へられ
得べきやの間に
對して第一の假
定説即ち徳義は
知識なりや知識
は教へられ得べ
きや

知識ならば教へ
らる

べし。故に余は其圓形中に此三角形を畫き得るや否やを答ふるに前き
立ち、此の假定説を提供せんと欲するなり」と。之れ幾何學上の假定説な
り。吾等又た未だ徳義の性質を知らざるを以つて、若し徳義は精神上の
諸善中に分類さるべきものなりとせば、此は教へらるべきものなりや否
やと云ふが如き假定説を以つて、先づ徳義の教へらるべきものなりや否
やを問はざる可からざるなり。而して第一の假定として、若し徳義は知
識なりや、否やとせば、然らば徳義は教へられ得べきものなりや否や、或は
今ま余の言ひし如く、「記憶」され得べきものなりや否や、名稱は争ふの要
なく、何れにても可なり、たと徳義は教へらるべきものなりや否や、或は寧
ろ人皆なたゞ知識のみは教へらるべきものなるを知れるには非ざるか。

メノ 然り余は同意なり。

ソ一 若し徳義は知識なりとせば、徳義は教へらるべきか。

メノ 然り。

ソ一 吾等此問題に關しては甚だ速かなる終結を得たり。若し徳義
にして此くの如き性質のものならんには、徳義は教へらるべく、若し夫れ

徳義は知識なるか

然らざるに於ては、教へられざるか。

メノ 然り。

ソ一 次の問題は徳義は知識なりや將た又た他の種類のものなりやと謂ふにあり。

メノ 然り、之れ順序として次に來るべき問題なるが如し。

ソ一 吾等徳義は一の善なりと云へるに非ずや、之れ廢棄されざる假定説なり。

メノ 然り。

ソ一 若し或る善にして、知識より分離せしめらるるものありとせば、徳義は即ち其善なるべし。然りと雖若し知識は一切の善を含蓄するものなりとせば、吾等知識を以つて善の一種なりと思考するも可なるべし。

メノ 然り。

ソ一 徳義は吾等を善となすか。

メノ 然り。

ソ一 吾等若し善ならんには、吾等は有益の者たるべきか、何となれば

善と有益

善と知識

善と徳義

一切善良なるものは有益なるものなればなり。

メノ 然り。

ソ一 然らば徳義は有益なるか。

メノ 其は推論上然らざるを得ず。

ソ一 然らば吾等種々の有益なるものを見んに、健康、強力、美及富有—

是等は吾等に有益なるものなるか。

メノ 然り。

ソ一 然りと雖是等諸物は時に吾等に有害なることあり、君之れを許

容するか。

メノ 然り。

ソ一 而して其の是等をして或は有益たらしめ、又た有害たらしむる

に當つて、其の之れを指導する所の原理は何ぞや。是等の指導原理にし

て、若し正用さるゝ時は有益にして、正用されざる時は有害なるにあらず

や。

メノ 然り。

ソ一 次に精神の諸善を思考せんに、是等は即ち節制、正義、勇氣、理解、機敏、記憶、寛大、其他のもの等に非ずや。

メノ 確かに然り。

ソ一 然りと雖、此くの如きは知識に非ず、他の種類のものにして時には有益なりと雖、又た時には、有害なることあり、例せば、智慮を缺損せる勇氣の如き、之れたゞ大膽なるのみに過ぎざるなり。人若し智力なき時は却つて勇氣に由つて害を被ると雖、智力ある時は益を受くることあるに非ずや。

メノ 真に然り。

ソ一 節制及び理會の機敏等に就いて云ふも亦同じ。何事も智力を以つて學び或は行爲したることは、有益なりと雖、知力なくして爲したることは有害なるか。

メノ 然り。

ソ一 而して、凡て精神の企圖する所、堪受する所、若し知慧の指導の下にある時は、其事幸福に終ると雖、若し夫れ愚痴の指導の下にある時は全

徳義は智慧の一種なるか

智慧の指導

く其反對なるべきか。

メノ 然るが如し。

ソ一 若し徳義は精神の善にして、又た有益なるものなりとせば、其は智慧或は慮智ならざる可からざるなり。何となれば精神の諸善中の或物は、智慧或は愚昧を加ふるに由りて、或は有益となり、或は有害となるものなるを以つてなり。故に若し徳義は有益なるものなりとせば、徳義は智慧或は慮智の一種ならざる可からず。

メノ 之れ實に余の意見とする所なり。

ソ一 而して余が今ま語り居たる如く、時には善となり、時には惡となる所の富有及び其他此くの如き諸善は、精神が是等諸物を指導し、使用するに當つて、善くなすか悪しくなすかに由つて、或は有益となり、或は有害となるに非ずや——其精神一般に就いて云はゞ、智慧は有益なる指導者にして、愚昧は有害なる指導者には非ざるか。

メノ 然り。

ソ一 而して賢智の精神は能く是等諸善を正用し、愚昧の精神は是等

を悪用するか。

メノ 然り。

ソ一 之れ人性一般に通じて然るには非ざるか。實に一切の事物は盡く懸つて精神にあり、而して精神上の諸事物の善なるものは又た盡く懸つて智慧にありとなす。而して此見解に由る時は有益なることを爲すものは智慧にして——徳義は、吾等が云へる如く、有益なるものには非ざるか。

メノ 然り。

ソ一 此くて吾等、徳義は全部智慧なるか、或は一部智慧なるかの何れかなりとの結論に達したり。

メノ ソークラテースよ、思ふに君の言へる所は真に正しきが如し。

ソ一 然りと雖、若し之れ真ならんには善とは自然に善に非ざるにはあらずや。

メノ 自然に善なりと思考せず。

ソ一 若し善は自然のものなりとせば、必ず此に人物の性質識別者な

萬事懸つて智慧
にあり

善は自然に來る
に非ず

るものを生じ、將來大人物たるべき人を識別することを爲すに至らん。而して吾等其の人の言に由つて、將來大人物たるべき人物を得て、能く此人物を保護し、城寨中に置きて決して何物よりも害を被ること勿らしめ、又た金貨よりも寧ろ此種の人物に檢印を施こし、以つて其人物の擬造を避けん。而して彼等成長せば、國家に有益の人たるべきにあらずや。

メノ 然り、必ず其如くなるべきなり。

ソー 然りと雖若し善は自然に來るものに非ずとせば、教訓に由つて善となるや如何ん。

メノ 然りソークラテース、其他に道あること能はざるなり。徳義は知識なりとの想像に基づく時は、徳義の教へらるべきものなるや疑ふ可からざるなり。

ソー 實に然り、然りと雖若し此想像にして誤れりとせば如何ん。

メノ 余は實に今此想像は正しと思考す。

ソー 然りと雖メノンよ、真正堅固の原理なるものは、時に由つて眞なるに非ずして、常に永久に真正堅固に確立せるものならざる可からず。

ソークラテース
徳義は智慧たる
を疑ふ

其理由

教師と弟子

徳義の教師を索
めて得ず

メノ 如何なれば君は知識は徳義たることを信するに躊躇するか。

ソー メノーンよ、余は試みに其の理由を君に告げん。若し徳義は知識ならんには、余は素より、徳義は教へらるべきものなりとの断定は之れを撤回するに非ずと雖、余は徳義は果して知識なりやを疑ふの理由なきに非ざるなり。何となれば思ひ見よ、而して余に答へよ、凡て徳義或は其他教へられ得べきものは、教師及び弟子を要するには非ざるかを。

メノ 確かに然り。

ソー 且つ又た、教師なく、弟子なき所の術は、決して之れを教へられ得べからざるにあらずや。

メノ 真に然り、然りと雖君は徳義の教師なるものは之れ無しとするか。

ソー 余は是れまで徳義の教師ありや否やを講究し、之れを發見せんとして大に勞したることありしと雖、遂に其効あらざりき。而して多くの人は余の此の探索に助力せり、其助力せし人々は、多くは、此の徳義の教師あるを知れるなるべしと余の考へたる人々なりき。折こそ善けれ、ア

ニュトス余の傍の座にあり、彼れは吾等の間はんとする人なり。アニュトスは富有にして賢明なる父アンテミオンの子なり。アンテミオンなる人はテーバイ人イスメニアス(此人近頃ポリクラテースの如き富有者となり)の如く、偶然或は贈物に出つて富みしには非ずして、自己の熱練と勤勉とに山りしものなり。而して彼れ善良鄭重なる人にして、或は壓制し、或は人を困しむることなく、且つ其子に善良なる教育を授けたり。之れアテーナイ人の善しとする所のものゝ如し、何となればアテーナイ人は彼れを政府の最高官に任選したればなり。此くの如き人々よりこそ諸君は、徳義の教師なるものありや否や、若し之れありとせば、其人の誰々なりやを學ぶべきなれ。願くばアニュトスよ、何人が徳義の教師なりやとの吾等の疑問に答ふる爲め、余及び君の友なるメノーオンに助力を與へよ。余は此く問題を提出せん。——吾等若しメノーオンをして良醫たらしめんと欲せば、何人の許に彼れを遣るべきか。吾等彼を醫師の許に遣るには非ざるか。

アニ 然り。

ソ一 若し善良なる靴直したらしめんとせば、我等彼れを靴直しの許に遣るにはあらざるか。

ア二 然り。

ソ一 其他之れに準じて然るか。

ア二 然り。

ソ一 今一問君を煩はさんに。若し彼れをして醫師たらしめんとする時、彼れを醫師の許に遣るを以つて善しとするは、即ち之れ其技術を専門とせざる者よりも、寧ろ之れを専門となし、其技術を教ふるに報酬を求め、何人なりとも來つて學ぶ者には教へんと云ふ所の者の許に遣るは善しと云ふことなるべし。吾等彼れを遣るを善しとするは、此理由にあらずや。

ア二 然り。

ソ一 吹笛術或は其他の藝術に關しても亦然るに非ざるか。何人と雖、人をして吹笛者たらしめんとする者は、之れを吹笛を以つて業となし報酬を得て之れを教ふる者の許に遣ることを拒み、却つて人を教ふるを

以つて業とせず、又た其教育せんとする所の學科に於て弟子取りを爲さざる人を煩はすものはあらざるべし。然るに若し此くの如き者ありとせば、之れ實に愚の極なり。

アニ 然り、ゼウスの神かけて、余は又た彼れを無智と云はん。

ソ 大に善し。而して君は今や我友メノーンの一身に關して余に指教を與ふるの位置にあり。アニュトスよ、メノーンは依つて以つて國を治め家を齊へ、父母を敬し、又た善人の知らざる可からざる所たる、市人及び他國人は如何なる時に之れを迎へ、如何なる時に之れ送遣すべきや等を知る所の知識及び徳義を得んと欲する旨を余に語れり。今や此の知識を學ばんが爲めに何人の許に、メノーンを遣らば可ならん。前説に由つて見る時は、彼の自ら専門の業を廣告し、グレシア人一般の教師たることを名乗り、一定の報酬を得て、何人にも之れを教へんと云ふ所の人の許に遣るべきは明かなること非ずや。

アニ ソークラテースよ、其は何人の事なるぞ。

ソ アニュトスよ、君必ず知らん、之れ世間より「ソフィトス」と稱せらるる

メノーンの教育と専門の教師

「専門自稱教師」「ソフィトス」

「アニユトス大ヤ
的に「ソフィスト
ト」を排斥す

「ソフィスト」は
人を腐敗せしむ
るものなるか

「ソフィスト」の
大先生プロタ
ゴラスの大名望
は如何ん

所の人々なり、君之れを知らざるか。

アニ　ソークラテースよ、ヘーラクレースの神かけて、余は御免を被ら
ん。たゞ望む所は、余の朋友も、親戚も、知人も、又た市人たれ、他國人たれ、何
人と雖、自ら許るして「ソフィスト」等に由つて腐敗さるゝまでに狂せざらん
ことなり。彼等は實に惡疫にして、苟も之れに接したるものは、盡く其腐
敗を傳染するものなり。

ソー　アニユトスよ、君は何をか言へる。一切の人間中、自ら以つて諸人
を善とならしむる方法を知れりと云ふ是等の人々は、實は、單に人を善と
ならしめざるのみに非ず、又た從て之れに依托したる人々を腐敗する者
なりと云ふか。是は實に異しむべきなり。しかのみならず、彼等は又た
其報酬として公然として金錢を要求す。余は實に之れを信すること能
はざるなり。何となれば一人のプロータゴラスは、其器量を以つて、夫の
有名なるフェイヂアス或は其他の十彫刻家等よりも多くの金錢を作りた
るは余之れを知ればなり。彼れ如何にして此くの如きを得たるか。若
し古靴直し及び衣服繕ひ等を爲す者にして、其補修を依托されし時より

若し惡ならば何
故に看破されざ
りしが

も、惡しくなして之れを依托者に返附するとあらんには、彼れ三十日を出
でずして、其惡行を看破され、直ちに衣食の資を得ること能はずして、遂に
餓餓に瀕するを免れざるべし。然るにプロータゴラス、四十年間其門人
等を腐敗せしめ、始めに其門人として容受せし時よりも不良なる者とし
て彼等を送り歸へすことを爲しつつも、而もグレシア全國の人々は、彼れ
の惡行を看破すること能はざりしと謂はざる可からざるなり。若し余
にして誤ることなしとせば、プロータゴラスの死せしは其七十歳の時に
して、其内四十年は其専門の業の實行の爲めに之れを費やし、生存中は大
に人々の聲望を博し、其名譽や今に至るも尙ほ噴々たり。之れたゞプロ
ータゴラス一人のみに止まらず、其他多くの人々も、亦名望を有し、或者は
プロータゴラスの前の人あり、又た或者は其後にして今も尙ほ生存せる
人もあり。然るに君は今ま彼等を目して青年を欺き、之れを腐敗せしむ
るものなりとせり。而して彼等が青年を腐敗せしむるや、之れ故意を以
てすることなるか、將た又た故意に爲すことに非ざるか、グレシア全國中
にて最も賢明の稱ある是等の人々が如何にか其心を失喪するが如きこ

「ソフィスト」を
尊敬する者は精
神失喪者

とあらんや。

ア二 其心を失喪せりとか。否なソークラテースよ。夫の、金銭を彼等に與へし所の青年等は其心を失喪せる者なり、青年子弟を彼等に托したる所の親戚及び後見人等は、一層其の心を失喪せる者なり。多くの都市は彼等の入り來ることを許るし、又た之れを放逐することを爲さざりしを以つて、アテーナイ市人も他國人も、皆な之れ其の心を失喪せるものたるなり。

ソー アニュトスよ、ソフィスト中の何人かは或は君を害したる者あるか。何ぞ彼等に對して怒れるの甚しきや。

ア二 否、余を始め余に屬せるものは、一切彼等に關係したることなく、余は又た彼等と關係するを許るさざるなり。

ソー 然らば君は全然彼等を知らざるものなるか。

ア二 余は彼等を知るの意志なし。

ソー 親愛なる友よ、然らば、君は全然知らざる所のものゝ善惡は如何にして之れを知りしぞ。

アニ 眞に然り、余は直接彼等を知ると知らざるとに關せず、是等の人間の如何なる種類のものなるかは之れを知れり。

ソ一 アニトスよ、君は卜筮者なるが如し。余は君の言に由りて判断するも、君の識らざる人物を、如何にして君は之れを知れるかを解する能はざるなり。然りと雖余はメノーンを腐敗せしむる所の教師(君若し是等を以つて「ソフィスト」なりとせば「ソフィスト」にて可なり)を君に尋ねつゝあるに非ずして、余の間へる所は、たゞ余が今ま述べたる如き徳義に秀出するやう教育を行ふ所の人物は、此大都市に於いて何人なりやと云ふにあり。メノーンは君の親戚なれば君は彼れの爲めに盡くす所あらざるべからず。

アニ 何故に君は自ら彼れに告げざるや。

ソ一 余は是等の事物の教師たるべしと思ひたる人を彼れに告げたり。されども君に由つて余の見の誤謬なりしことを知り、君の言へる所の正しきを認む。故に今や余の君に願ふ所は、君に於ては何人は最も良き教師にして、メノーンの就いて學ぶに適せる人と思へるかを余に教へ

たゞ徳義を教ふる人を求む

何人か善教師

何人と雖、ソフィ
ストに授けり

先輩の指教

徳義は教へらる
べきものか、は徳
論の問題

んことなり。君は何人を指名せんとするか。

アニ 何故に一個人を指名せんとするぞ。如何なるアテーナイ人と雖手に任せて撰び出だしたればとて、若し其人にして意あらんには、ソフィスト等よりも一層善く彼れを教ふべきなり。

ソ一 而して是等の紳士は獨り自ら紳士となりしか。何人にも學ぶことなくして、而も其自ら學ばざる所の事を他に教ふことを得るか。

アニ 思ふに是等の紳士は先輩の紳士に學ひたるならんか。又た此アテーナイ市に於て多くの善良なる紳士は從來之れあらざりしか。

ソ一 然り、アニトスよ。且つ此アテーナイ市に於ては、多くの善良なる政治家も嘗て之れあり、又た現在に於ても決して少なからずと雖、余の疑問とする所は、是等の人々は、又た彼等自身の有せる徳義の良教師なりやと云ふにありとす。嘗て善良なる人々ありき、又た現在之れ有りやと云ふに非ずして、徳義は教へらるべきものなりやとは之れ吾等の議論しつゝありし所なり。吾等は、現在及び過去の是等の善良なる人々は、其の自ら有せる所の徳義を他に傳授する方法を知れるものなりとすべき

か、將た又た此徳義なるものは人に傳授することを得ざるものとすべきか。之れ余とメノーンと論じ居たる所なり。君は自己の見を以つて此問題に對すべし。君はかのテミストクレースは善人たることを承認するか。

アニ 然り、何人が彼れに優らん。

ソー 若し何人と雖、皆善良なる教師なりとせば、彼れ亦自己の有せる徳義の良教師たらざる可からざりしに非ずや。

アニ 然り、若し彼れ良教師たらんとせば。

ソー 彼れ果して良教師たることを欲せざりしか。其は如何ならんとも彼れ其子をして善人たらしめ、又た紳士たらしめんとなし、敢て自己の有せる徳義を其子に傳授することを惜しみしに非ず、又た故意に之れを爲さざりしにも非ざりき。然るに彼れ其子クレオファントスをして遂に有名なる乗馬師たらしめしに非ずや。クレオファントス馬術を善くし馬上に直立して能く投槍を擲つことをなし、又た其父の學ばしめたる所の種々巧妙の技を善くし、其師の教ふる所の事何事と雖熟達せざること

なし。君は年長の人より此事を聴きしことあらざるか。

アニ 余は聴きたり。

ソー 何人も此子を稱して能力なしとするものあらざるべし。

アニ 恐くはあらざるべし。

ソー 然りと雖、老たる人、若き人、何人たりとも君の聴き得る範圍にて、
テミストクレースの子クレオフアントスは、其父の如く賢明善良の士なり
と云ひし者やある。

アニ 余は決して其を聴きしことなし。

ソー 若し徳義にして教へられ得べきものなりとせば、彼れ好んで其
子をして此くの如き藝術を習練せしめ、自己は最も秀出せる性質を有せ
るに關せず、其子は之れを近隣の人々に比して何等の優れる所なき藝人
の状態にあるに一任すべきや。

アニ 實に、實に余はしか思はざるなり。

ソー ことに又た徳義の教師あり、之れ君の以つて過去の最良の人物
となす所の人なり。余は今ま他の一人を指名せん——リュシマッホスの子

徳義の教へらる
べきものなるや
を疑ふ

過去の善なる
人物の子に就い
て

アリスティデース之れなり。君は彼れを以つて善人なりと承認せざるか。

ア二 確に善人なるを承認す。

ソ一 彼れ其子リュシマッホスを教育するに當り、種々の教師を依頼して、成らん限りの力を盡くし、他の如何なるアテーナイ人も及ばざるまでに注意せり。然るに其結果や如何ん。彼れ毫毛なりとも、果して他人に優れる所あるや。彼れは君の知人なり、君果して彼れを何者に比せんぞするぞ。又たペリクレースを見よ、其智や實に廣大なりと雖、君の知れるが如く、バラロス及びキサントッホスの二子あるを見よ。

ア二 然り余は之れを知れり。

ソ一 彼れ此二子を教育して無雙の馬術師となじ、又た音楽、體操及び其他一切の藝術を之れに教へ、是等の藝術の範圍に在つては第一流の藝人たらしめしは、又た君の知れる所なり——然りと雖ペリクレースは其二子をして善良なる人士となすことを欲せざりしものなるか。否な、必ずや彼れ、之れを欲せしなり。こゝに於いて余は、徳義は教へられ得べきも

ツキユヂデース
其の子に徳義を
教へ能はざりき

のなるやを疑ふ。然りと雖君は是等無能力なる教師を以つてアテーナイ人中の下等なるものとなし、又た其數少しと想像すると勿れ。又たツキユヂデースにメレーシアス及びステファノスの二子ありて専ら相撲を修練せしは君の記憶せる所ならん。而して彼等又た卓絶なる教育を受け、而してアテーナイ市中第一の力士にして、一はキサソチアスに托して教育せしめ、他はエウドロスに托して教育せしむ。而してキサソチアス及びエウドロスは當時第一等の有名なる力士なり、君は此の事を記憶するか。

アニ 余は其事は聽きし所なり。

ソー かのツキユヂデースは非常なる入費を以つて其二子に相撲を學ばしめしと雖、若し徳義にして教へらるべきものならんには、彼れ必ずや徳義を教へしなるべし、而も之れ毫も費用を要せざる所たるなり。君或はツキユヂデースを以つて下等なる人物となし、或はアテーナイ國中及び奧國中に多くの朋友を有せざる人なりと云はんか。其實全く之れに反し、彼れの親戚や非常に多く、又たアテーナイ市及び全グレシアに於て極

めて有力の人たりしなり。故に若し徳義は教へられ得べきものなるも、身は國家の政務の爲めに、他に時間を使用すること能はずとせば、必ずやグレシア國內より或は國外より有爲の人物を發見して、其二子を教育して善良なる人物とならしむることを力めしならん。友なるアニュトスよ、余は再びここに徳義の教へらるべからざるものなること念なき能はざるなり。

アニュトス、ソークラテースに怒る所あり

アニ　ソークラテースよ、思ふに君は容易に人を悪言するものゝ如し。君若し余の忠告を聽く人ならんには、宜しく聊か注意する所ありて可なり。且つ世上恐くば、人に善を爲すよりも、人に惡を爲すの、却つて容易ならざる都市あることなかるべし、殊にアテーナイ市の然るは君の知れる所なるべしと信ず。

アニュトスの説

ソークラテース　あゝメノーンよ、思ふにアニュトスは怒れる所あるが如し。其理由たる、第一には恐くば、彼れは余を以つて是等の紳士を悪言せるものなりと思ふに由り、第二には彼れ自身も亦其紳士の一人なりと思へるに由るならん。然りと雖、彼れ今ま誹謗の眞味を解せざるなり、若し之れを解

徳義は教へらる
とや否やに決て
は人々の意見一
ならず

彼等紳士先輩を
教師と見ること
能はず

「ソフィスト」は
教師に非ず

せば必ず余を免るすなるべし。メノーオンよ、余は暫く君の順番に歸へり、君と談話すべし。何となれば君の地方にも亦多くの紳士あるべしと思へばなり。

メノ 然り之れ有り。

ソー 是等の紳士は好んで青年を教ふるか。又た其の教師たることを業とするか、或は皆な徳義は教へらるべきものなりとの説に一致せるか。

メノ 否な、ソークラテースよ。彼等決して一致することなく、或時は徳義は教へらるべきものなりと言ひ、又た或時は其反對の言を爲せることを君は聞かん。

ソー 吾等はかの自家の専門の業の可能なることを認知せざる所の人々を、教師と呼ぶことを得るか。

メノ ソークラテースよ、余は非なりと信ず。

ソー 君はかの唯一の教師たる所の「ソフィスト」等に就いては如何に思考するか。君の眼には彼等は徳義の教師と見ゆるや如何ん。

「ゴルギアス」は
徳義を人に教へ
んと約束しこと
なしと云ふ

徳義は教へらる
るを云ふ詩人あ
り

メノ　ソークラテースよ、余の數々驚くことは、ゴルギアスは、決して人
に徳義を教へんと約束せしことを、聞かざることゝなす。彼れ若し他人
の此事を約束するものあるを聽く時は、彼れたゞ是等の人々を笑ふのみ
なり。されども彼れ謂へらく人には談話することゝを教へざる可からず
と。

ソー　然らば、「ソフィスト」は教師なりと君は思はざるか。

メノ　ソークラテース、余は君に答へ能はざるなり。世間一般の人々
の如く、余は疑念中に在る者にして、時に余は彼等は教師なりと思ふこと
ありと雖時には然らずと思ふことあり。

ソー　單に之れ君及び其他の政治家等が、徳義は教へらるべきものな
りや否やを疑へるのみならず、又た詩人テオグニス同様の事を言へるを
君は知るか。

メノ　何れの詩に其事を含蓄せりや。

ソー　彼れの哀歌中に曰く――

「權威の人々と同席し、飲食し、以つて彼等に歡ばれんことを求む。

善人よりは汝、善事を學び得ると雖、惡人に交はる時は、汝は以前に有したる所の知識をも之れを失喪すべし」

と。彼れこゝには徳義の教へらるべきものなることを言へり、君之れを
知るか。

メノ 然り。

ソ— 然りと雖彼れの詩に於て彼れ尙ほ言を移して曰く—

「今ま若し悟性なるもの人間中に造られ又た置かるゝものならんには、彼等(此れを爲し得る者)は大なる報酬を受けしなるべし」
と。

其矛盾の詩

又た曰く—

「教訓の聲を聽きしが故に、不良なる子は善良なる父より生れ出でしに非ず。教訓に出つて汝能く惡人をして善人たらしむることあらざるべし」

と。而して之れ前の詩とは矛盾せるを君は知るべし。

メノ 明かに然り。

自ら徳茂の教師なりと云ふものは無學なるか悪教師なり

紳士なるものは自ら教師と云はず意見も一ならず

然らば他に徳義の教師なし

教師なくば門弟子なし

然らば物を教ふべきやうなし

ソ一 而して教師及び専門の人々等は、自ら人の教師に非ざることを斷言したるのみに止まらず、尙ほ且つ其教へんと公言せる所の科目に自ら無學にして、又た其宣傳する所の知識は不良なるの外、他に何事かある。且つ人々の認めて「紳士」なりとせる所の人々は、時としては「此物は教へらるべきものなり」と云ひ、時としては然らずと云へり。此くて、此の思想の混亂せる人々を稱して信憑すべき教師と呼ぶを得るか。

メノ 余は言はん、決して呼ぶことを得ずと。

ソ一 然りと雖、若し「ソフィスト」も、紳士も已に教師に非すとせば、こゝに他に教師なるものなきは明かならずや。

メノ 然り、他に教師なし。

ソ一 若し教師なくんば門弟子もあることなきか。

メノ なし。

ソ一 吾等、教師なく門弟子なき時は、物は教へらるゝものに非ざることは前に承認せざりしか。

メノ 然り。

徳義の教師なくば徳義は教へられず

吾等指導者を求めん

知識は指導者

ソ一 而して徳義の教師は何處にも發見されざるに非ずや。

メノ 然り有るとなし。

ソ一 若し教師なしとせば學ぶものもなきに非ずや。

メノ 眞に然り。

ソ一 然らば徳義は教へらるべからざるものにあらずや。

メノ 若し吾等の見にして正しとせば、徳義は教へられざるなり。然りと雖ソ一クラテースよ、國家に善人なるものあることなしとは余は信じ能はざるなり。若し之れ有りとせば、彼等は如何にして成來したりしならん。

ソ一 メノーンよ、余は恐る、君も余も決して大に善きものと謂ふべからず、而してゴルギアスが君の教育者として不十分なりしは、猶ほプローヂコスが余の教育者として不十分なりしが如きことを。吾等自から能く探索し、以つて吾等の進歩を助くる者を見出だすことを力めん。余の此く言ふの理由たるや、余は前の議論に於て、正しく且つ善良なる行爲は知識 (*epistēmē*) 以外の示導に由りて之れを行ひ得べしとのことは、吾等兩

人何れも之れを認めざりしを以つてなり。若し此事否定さるゝとせば、善人の有り得ざるは、之れに優りて明白なることなきに非ずや。

メノ ソークラテースよ、君の言ふ所は何をか意味す。

ソー 余の意味する所は、善人は必ず有用有益ならざる可からずと云ふにあり。吾等之れを許容するは誤れるか。

メノ 可なり。

ソー 彼等若し眞に行爲の指導者ならんには、其時のみは彼等有用の者たるべしと假定せんに、之れ亦正常と云ふべきか。

メノ 然り。

ソー 然りと雖人若し知識 (*gnômosis*) を有せるに非ざるよりは、善良なる指導者たること能はずと云ふに於ては、吾等正常ならざるなり。

メノ 『正しき』とは君の意味する所如何ん。

ソー 余は説明せん。人若しラリサ或は其他何處へなりとも至るの路を知り、而して實地に其路を行き、又た他人を其の處に導くとせば、彼れ正しき善良なる指導者にはあらざるか。

正しき意見も知識の如き指導者となる

メノ 然り。

ソ一 人若し其路に就いて正しき意見を有すれども、未だ其路を行かず、又た知らずとせば、彼れ尙ほ善良なる指導者たるを得るか。

メノ 然り。

ソ一 若し人他人の知れる所に關して真正の意見を有し、宛も彼れ其眞理を知れるが如く、其眞理を思ふとせば、彼れ亦善良なる指導者と云ふべきか。

メノ 然り。

ソ一 然らば正しき意見は有用なる點に於て知識に劣ることなきか。
メノ ソ一クラテースよ、其差異たる、たゞ知識を有せる人は常に正常なるを得ると雖、正しき意見を有する人は、時に正常なるを得ると雖、又た時に正常なるを得ざることあるに過ぎず。

ソ一 君の意味する所如何ん。かの正しき意見を有する人にして、正しき意見を有し居る間は誤謬なることあるを得るか。

メノ 余は君の説を以つて確實なるものとなす。而してソ一クラテ

知識が正しき意見より貴き理由を説明するにダイダロスの比喩を以つてす

真正の意見とダイダロスの作品

リスよ、余の不思議に感ずる所は、知識は正しき意見よりも貴ばるることとなす——何故に此兩者此く異なるならん。

ソ— 余は此不思議を君に説明せんか。

メノ 願くば語れ。

ソ— 君若し常にダイダロスの彫刻したる像を見る時は、敢て之れに驚くことなかるべし。然りと雖君は是等の像を君の本國に得ざりしなるべし。

メノ 何を以つて君は此の事に言ひ及ぶや。

ソ— 何となれば若し是等の像は之れを保留せんと欲せば繩を以つて繋かざる可からず。然らざれば彼等遁走すべければなり。

メノ 然らばそれに就いて何事かある。

ソ— 余の意味する所は、若し彼等を自由に放任する時は、彼等を有したればとて何の用をも爲さざるなり、何となれば、彼等遁走奴隸の如く脱走し去るを以つてなり、されども若し之れを繋留する時は、是等は眞の美術品なるを以つて大なる價值ありと云ふにあり。之れ眞正なる意見の

原因の結繩に由
つて意見を知識
に變ず

ソークラテース
此事は知れりと
斷言す

性質の説明なり。真正の意見なるものにして吾等に存する間は、甚だ美にして有益なりと雖も、此物人心より脱出し、遁走して永久に留まるものに非ず、故に原因の結繩に由つて之れを繫留するに非ざる以上は、價値なきものたるなり。メノーンよ、是等を繫留することは前已に吾等の同意一致したる所の記憶なるものなり。若し是等にして繫縛されたる時は、第一、是等のものは知識の性質を得有し、第二、永住のものとなるなり。之れ即ち知識は真正の意見よりも尊重さるゝの理由にして、たゞ其結繩に由つて繫留さるゝに由るなり。

メノ ソークラテースよ、余は君の言を眞なりと想像す。

ソークラテースは知者の如く語るものに非ず。然りと雖知識と眞の意見との異なることは、余に於ては想像上の事件に非ず。余は自ら知れりと斷言する所のもの甚だ少し、たゞ此一事のみは確實に自ら知れりと斷言する所のものたるなり。

メノ ソークラテースよ、君の言正しと謂ふべし。

ソークラテースは、又た知識の如き行爲を爲す所の善良なる指導なり

と云ふは正常にはあらざるか。

メノ 之れ亦真なるが如し。

ソ一 然らば正しき意見は真理に比して毫も劣る所あるなく、又た行爲上實用少きにも非ず、又た正しき意見を有せる人は知識を有せる人に劣れるにも非ざるか。

メノ 真に然り。

ソ一 而して善人は人々より有用なる人と認めらるるか。

メノ 然り。

ソ一 人の國家に有用の者たるは、單に智識を有するのみの故に非ずして、又た正しき意見を有せるにも由るなり。而して知識も正しき意見も、自然に人に興へられしに非ず、又た人が學得したるにも非ず、——君は此兩者中の何れか自然に由つて興へられしと思ふか。

メノ 余は思はず。

ソ一 然らば若し是等のものにして、自然に由つて興へられしに非ずとせば、是等のものゝ善なるは自然に善なるに非らずと云ふべきか。

正しき意見を有せる人も有用なり

是等は自然に人に興へられしに非ざるか

教育に由つて得
らるるものなる
か

徳義は智慧なる
か

教師なき時は如
何ん

メノ 然り自然に非ず。

ソ一 自然は此く排斥されたる以上は、次の疑問は、徳義は教育に由つて得らるべきものなりやと云ふにあり。

メノ 然り。

ソ一 若し徳義は智慧（或は知識）ならんには、吾等の考へし如く、教へられ得べきものと謂ふべきか。

メノ 然り。

ソ一 若し之れ教へらるべきものなりとせば、之れ智慧なるか。

メノ 然り。

ソ一 若し教師あらば教へられ得べしと雖、教師なき時は教へられ得ずとするか。

メノ 真に然り。

ソ一 然りと雖徳義の教師なるものなきことは吾等の已に認めたる所に非ずや。

メノ 然り。

徳義は教へられ
得べきものに非
ず又た智慧にも
非ざるか

正しき指導者は
知識と眞正の意
見

徳義は知識に非
るか

ソ一 然らば吾等徳義は教へられ得べきものに非ず、而して又た智慧にも非ざることを認むべきか。

メノ 然り。

ソ一 然るに吾等之れを善なりと許るしたるに非ずや。

メノ 然り。

ソ一 而して正しき指導者は又た有用にして善なりや。

メノ 確かに然り。

ソ一 而して唯一の正しき指導者は知識及び眞正の意見にして、是等は人間の指導者なり。何となれば、偶然の事物は、人間の指導の下にあらざればなり。たゞ人間の指導者は眞正の意見と知識となりとす。

メノ 余も亦然りと思考す。

ソ一 然りと雖若し徳義は教へられ得べからずとせば、徳義は知識に非ず。

メノ 確かに知識に非ず。

ソ一 然らば此の有用なる二物中、其一たる知識は排斥せられて、知識

政治の指導は知識に非ずして正しき意見なり

政治家等は自己の言行の意味を知らざるもの

は政治上に於ける吾等の指導者なりと假定すること能はざるか。

メノ 能はずと信ず。

ソー 是故にテミストクレース及び其他アニトスの言ひし所の人々は、其の智慧及び賢明なることに由つて國家を支配したるに非ざるなり。之れ彼等が他の人々をして、又た彼等自身の如くならしむること能はざるの理由となす——何となれば彼等の徳義は知識の基礎の上にあらざりしを以つてなり。

メノ ソークラテースよ、蓋し之れ眞理なるべし。

ソー 然りと雖若し知識に基づかずとせば、之れに代ふるに政治家たる者は、正しき意見に由つて國家を指導せざる可からず、之れ宗教に於ける卜筮の如きなり、何となれば卜筮者及び預言者等は多くのことを眞正に語ると雖、其言ふ所の如何なるものなるやは彼等自身は之れを知らざるなり。

メノ 眞に然り。

ソー メノーンよ、是等の人々は毫も自己の爲す所を了會することな

くして、而も偉大なる言行に成功せるを以つて、吾等は此種の人を稱して神聖なりと云ふは常らざるか。

メノ 然り神聖と稱すべし。

ソ 然らば吾等が今ま云ひし所の是等の人々は、卜筮者、預言者及び詩人等の如く、神聖と云ひて可なるべきか。殊に政治家は是等種々の人に優りて神の「インスピレーション」を受け神に憑られたる、神聖に、且光照されたる者なり。故に是等政治家は、自己は何を言へるやは、自ら之れを知らずと雖、而も多くの壯大なる言語を爲すことを得るなり。

メノ 然り。

ソ 而してメノーンよ、婦女子も善良なる人を稱して神聖なりと謂ひ、スパルタ人も亦善良なる人を稱賛するに「彼れは神聖なる人なり」の言を爲すなり。

メノ ソークラテースよ、意ふに彼等の使用せる稱呼は正常なるべし。然りと雖、我友アニュトスは勿論此名稱を好まざるが如し。

ソ アニュトスに關しては、意に介するを用せず、余は他日彼れと語る

政治家等は卜筮者詩人等の如くインスピレーションのみ

政治家を輕視す

政治家等は神聖なる人として敬して遠ざく

德義はインスピ
レーションに由
つて人に來る

政治家に道理を
存するものなし

德義はインスピ
レーションにて
來る

實は先づ德義の
性質を知るを要
す

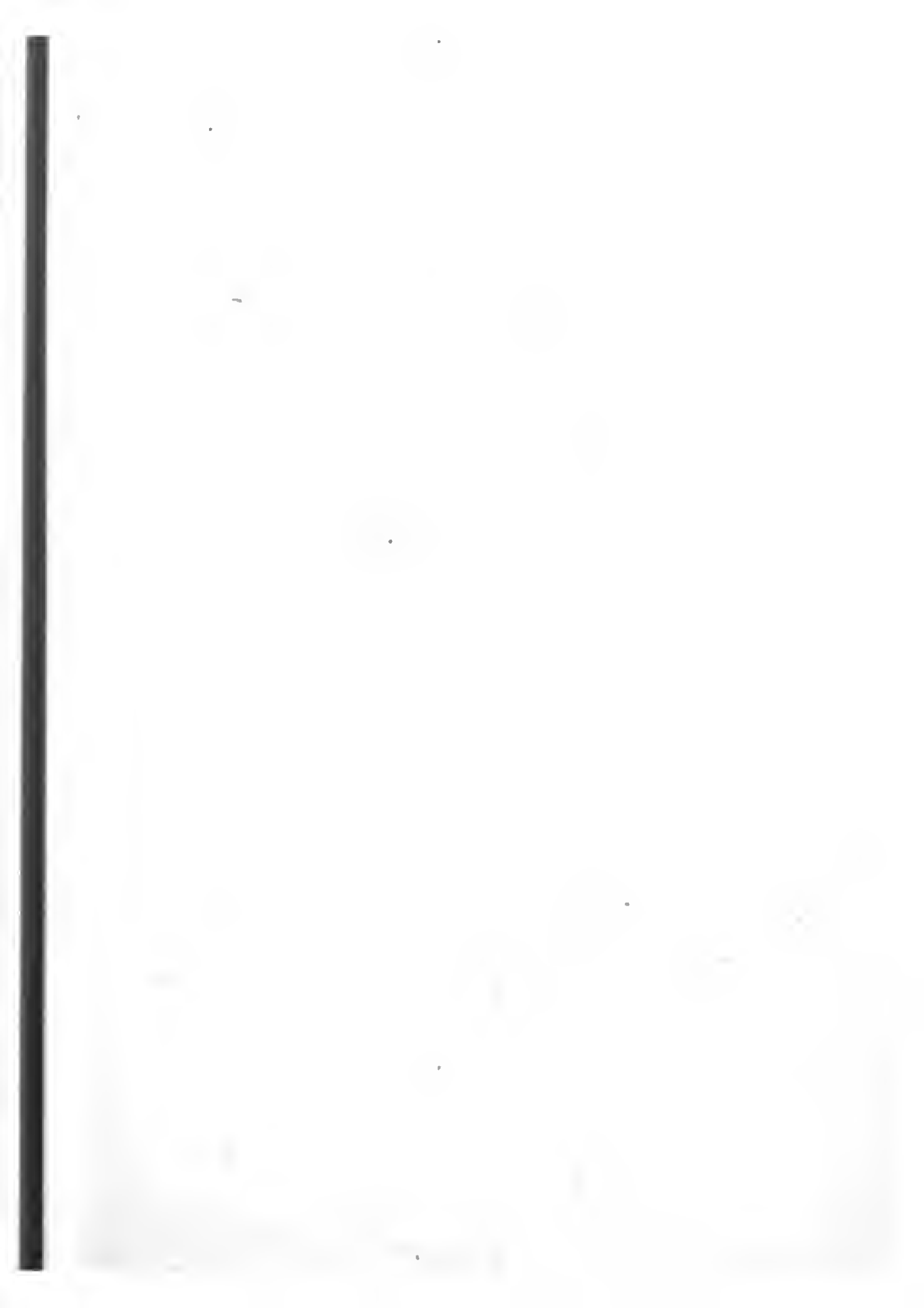
の機會あるべきなり。吾等の討究したる結果を總括せば——若し吾等の見る所にして凡て正しとせば、德義は自然に來るものにも非ず、又た學得さるるものにも非ずして、たゞ有徳の人に神の與へたる所の天性なりと謂ふべし。而して多くの政治家中、何人かは又た政治家の教育者たるものありと假定するに非ざるよりは、天性には又た道理附隨することあるなし。而して若し道理を有するものありとせば、此人の生者中に於けるは、宛もチレーシアスの死者の中に於けるが如し。ホメーロスの詩に據る時は、黄泉に在つて理解力を有せる者は、たゞ此のチレーシアス一人のみにして其他は影の如く飛び行く者のみと云ふ。

メノ ソークラテースよ、君の言や味ありと云ふべし。

ソークラテースよ、前言を總括せば、德義は有徳の者に神の與へし所のものなりと謂ふべし。然りと雖、吾等德義は如何にして人に來るやとの疑問を考究するに前き立ち、先づ德義の實際の性質を考究するに非ずんば未だ確定したる真理を知ること能はざるべし。余は今ま歸らんとす、君は自ら能く自己を説服したり、又た能く吾等の友なるアニュトス

を説服することを得るや如何ん。決してアニトユスを激せしむること勿れ、君若し能く彼れを説服せば、君はアテーナイ人に一種の功益を成したる者と謂ふべし。

エ
ウ
チ_ユ
フ
ロ
ー
ン



エウテュフローン解題

本篇の主旨

『メノーシオン』中に、アニュトス、ソークラテースと別るゝの時「如何なる都市に於ても、殊にアテーナイ市に於て人々に害を加ふることは、善を爲すよりも容易なり」との脅喝の言を残し、ソークラテースは、又た他日彼れに語る機會あるべしと言ひて其場は終りたるが、此に『エウテュフローン』に於ては、ソークラテース早も已に不敬神を以つて訴へられ、アルホーン王宮の前廊に其審問を待てるを見る。然りと雖プラトーン、其審問に進むの前先づ世間なるものを審問し、世間なるものは、其ソークラテースを罪せんとする所の事件に關して、如何に無知なるやを確證せんとするものゝ如し。

本篇の筋

エウテュフローンは學問あるアテーナイ市の卜筮者なり、預言者なり、一日アルホーン王宮の前廊にソークラテースと會す、兩人共に法律上の事の爲めにこゝに来れる者にして、ソークラテースは不敬神の罪名を以つてメレイトスなる者の訴ふる所となりて此に来れるなり（ソークラテース）

スは人を訴ふる如きことを爲す人に非ざれば、而してエウチュフローンは殺人罪を以つて其父を訴へんとして此に來れるなり。其父の殺人罪とは、ナキソスにて家僕の一人酔ゐて奴隸の一人を殺したるより、父其家僕を縛り、塹溝中に棄て置き、人をアテーナイに遣はし、此家僕を如何に所置すべきやの神慮を問はしむ、使者歸るの前、家僕は饑渴及び寒氣の爲めに死せり。之れエウチュフローンが其父を以つて殺人者と謂ふ所以なり。

ソークラテース以謂らく、彼れ此くの如き訴訟を起す以上は、必ずや責任を有すべく、敬神不敬神の性質は熟知せるなるべし、而して自己は今ま不敬神の審問を受けんとせる身なれば、敬神不敬神に就いてエウチュフローンに學ぶに如かずと。(エウチュフローンは此等の問題に關して、最も學問ありて信を置くに足る人なりと、裁判官を始めとして人々之れを許るせるものゝ如し)。

ソークラテース問うて曰く、「敬神とは如何ん」と。エウチュフローン自ら此事に關して甚だ知識に富み、責任を以つて答へんとして曰く、「今余が爲すが如く、父若し有罪ならんには、彼れを訴ふるに殺人罪を以つてするこ

と之れ敬神なり。宛も之れゼウスの神が其父クロノスに對し、クロノスの神が其父ウラノスに對して爲したる如きなり」と。

ソークラテース神話を好まず、其之れを好まざるは又た之れ不敬神と謂はるゝの一原因ならんとせり。而して最も念を入れて、其神話の眞實のことなるやを問ふ。エウチュフローン眞實なりとなし、尙ほ其他の神話を語り聽かさんと云へり。されどもソークラテース此事よりも敬神の性質を知らんことを希望する旨を語り、今まエウチュフローンの言へるが如く、父を訴ふることが敬神なりと云ふが如きは、敬神一般の定義と謂ふに足らずとなす。

エウチュフローン答へて曰く、「敬神とは神の好む所のものなり、不敬神とは神の好まざる所のものなり」と。ソークラテース曰く、然りと雖諸神の意見必しも一定せず、一の好む所、他之れを好まざるあり。君の父を訴ふ行爲はゼウスは或は喜ばんと雖、クロノス及びウラノス等は喜ばざる所なるべしと。尙ほ兩人間問答數回の末、ソークラテース定義を修正して「一切の神々の愛する所のものは敬神にして、一切の神々の嫌ふ所のもの

は不敬神なり」となす。

ソークラテース此定義の分析に進みて論じて曰く、種々他の場合に於ては行爲は状態よりも前なることありて、運搬され或は愛さるゝ所の行爲は運搬され、或は愛さるゝ所の状態より前なるものにして、諸神の好む所のものは、諸神先づ之れを愛するより其物を好むものにして、諸神之れを好むが故に之れを愛するに非ざるなり。謂ゆる敬神或は神聖なるものは敬神神聖なるを以つて諸神に愛さるゝなりと言はゞ、之れ諸神の好むを以つて、諸神之れを愛すと云ふに等しく、こゝに矛盾ありとなす。而してエウチュフローンは敬神の實質を教へずして、單に其屬性のみを教へたりと。エウチュフローン自ら自己の言の動搖せるをダイダロスの作品に比せり。ダイダロスは彫刻家の祖先にして、又たソークラテースの祖先なりと云ふ。彼れ其術を後代に傳へたるなり。其作品は之れを繋留するに非ざれば彼方を向きて歩み去ると言ひ傳ふ。

ソークラテース尙ほエウチュフローンの懶惰なる智力を刺戟せんとして、敬神は正しきものなりや、一切の正しきものは敬神なりや、正しきこと

は敬神より廣き領分ありや、敬神は正義の如何なる部分なりやを問ひ、エウチュフローン答ふるに敬神とは神に注意することなりとの言を以つてするや、ソークラテース「注意」なる語の意味を問ひ、神に注意するとは如何なることなるやを問ふ。注意なる語は、之れを人間牛馬犬等に適用する時は、是等の諸物の善を計る所のものとなす。然らば神は人の敬神或は神聖なることに由つて何事か善くせられたる所ありやと。エウチュフローン又た敬神とは服役することなりとなす。ソークラテース批評して曰く、農夫、醫師、建築家等の服役するや皆目的あり、然るに吾等が神に服役し之れに事ふるは、依つて以つて諸神に何事を爲さしめんとするものなりやと。エウチュフローン答へて曰く、一々此くの如きことを枚擧するの時間なし、たゞ敬神とは祈禱及び犠牲等を以つて言語に行爲に神意を喜ばすことを學ぶにありと。ソークラテース批評して曰く、他語以つて之れを言はゞ、願ふことと與ふることとなり、吾等の欲する所を神に祈願し、神の欲する所を神に與ふるとなり。然りと雖神は一切のものを吾等に與へたり、吾等何をか神に與ふることを得んやと。エウチュフローン曰く、

「吾等たゞ尊敬を興ふるのみ」と。ソークラテース曰く、然らば之れ神を利益するに非ずして、單に喜ばすのみ、好む所を興ふるのみ、之れ吾等の前に不可としたる所なりと。

ソークラテース尙ほ厭くまでも敬神に就いて問ふ所あらんとすと雖、エウテュフローン今は急げりとして他日を約して去り、ソークラテースが、審問さるゝ前に敬神の性質を學び置かんと希望は空しくなれり。

○

「エウテュフローン」は、世間が敬神の何ものなるやに就いて全く無知なるを示めさんが爲めの者なるや明かなり。然りと雖、プラトーン敢て敬神に就いて其意見を述ぶることなき、猶ほ「ラッヘース」「リシユス」等の如きなり。

エウテュフローンは宗教家にして、又た「クラテュロス」中には物名哲學の創始者として現はる。甚だ「ソフィスト」の臭味ありと雖、惡人に非ずして能くソークラテースに友情を有し、又たソークラテースを訴へたるメレトスとは敵たるの人なり、度量極めて狭少の人なりと雖、性質正直の人

にして、たとひ父なりとも、其有罪なるに於ては、子と雖之れを訴へざるは義務を守らざるものなりとせるが如き、寧ろ愚と雖正直を示めせるなり。

○

本篇の「辯解」篇と隠微の關係を有せると、宗教界の透視力と、其「ドラマ」構成の力と、人物氣質の表はし方及び模倣すべからざる反語の嘲弄諷刺等は吾等の本篇を以つてプラトーンの眞著なるを信するの理由となす。



Vertical text on the right margin, possibly a page number or reference code.

エウチュムフロ
ー

對話者

場

アルホーン王宮
の前廊にソーク
ラテースとエウ
チュムフローンと
會合す

彈劾

エウチュムフローン

對話人物

ソークラテース

エウチュムフローン

場—アルホーン王の宮殿の前廊



エウ。クラテースよ、君は何故にリュケイオンより來りしや。又たアルホーン王の宮殿の前廊にて何を爲さんとするか。

余の如く訴訟に關して王の前に出でんとするには非ざるべし。

ソー。エウチュムフローンよ、訴訟には非ずアターナイ人の所謂彈劾なるものなり。

エウ。何事ぞや。思ふに何人が君を訴へしなるべし。何となれば君

は人を訴ふる如きことを爲す人に非すと信ずればなり。

ソ一 決して人を訴へしに非ず。

エウ 然らば、何人か君を訴へしなるか。

ソ一 然り。

エウ 其人は誰ぞ。

ソ一 エウチフロロニスよ、彼れ甚だ人に知られざる青年にして、余は殆

ど彼れを知らざるなり。彼れ、名はメレイトス、ピツチス區の者なり。恐く

は君は彼れの容貌を記憶せるならん。彼れ、鬚狀の鼻を有し、長き直毛あ

り、又た兎生の鬚毛を有せり。

エウ ソ一クラテースよ、余は彼れを記憶せざるなり。而して君に對

する彼れの訴訟の事件は何ぞや。

ソ一 事件は何ぞやと。然り、其事件や甚だ重大なるものにして、大

に此青年の性格を表はせり、而して其れが爲めに彼れや決して輕侮すべ

きに非ざるなり。彼れの云ふ所に由れば、近時、青年の多くは腐敗され、又

た其腐敗せしむる者の誰々なるやを熟知せりと。思ふに彼れは賢人な

事件

原告メレイトス

らざる可からず、而して彼れ余の賢人に非ざる者なることを知り、余を見出して、以つて彼れの若き友人等を腐敗せしむるものなりと告發せんとせり。而して我等の母たる國家は此事を裁判すべし。實に一切の政治家中、青年子弟の徳義の培養には、彼れは最も正常なる方法を取り始めし者なるが如し。彼れは善良なる農夫なり、故に第一に植物の萌芽を注意し、其萌芽を傷害すなる吾等を除き去らんとせり。之れ先づ第一に爲すべきの事なり。彼れ尙ほ進みて成長したる條枝を注意し、尙ほ又た進みて注意を用ゆるに於ては、彼れ實に公共事業上最も有功の人たるべし。

エウ 余は然らんことを望む。然りと雖ソークラテースよ、余は其の結果の反對ならんことを恐る。余の思ふ所を以つてすれば、彼れが君を攻撃するは、單に國家の基礎に打撃を加へんとするを目的とせるものゝ如し。然りと雖彼れは如何なる點より君を以つて青年の腐敗者なりとなすか。

ソー 彼れ實に驚くべき非難を余に加へたり、余の始めて之れを聴きし時は余は驚愕せり。彼れは余を以つて詩人なり、新神を創作するもの

なり、而して舊來の神々の存在を否むものなりとなす、之れ其告發の理由なり。

エウ ソークラテースよ、余は解せり。君は自ら云へる如く、時々異教ありて君に示現することありと。彼れ恐くは之れに關して君を攻撃せんとするものゝ如し。彼れは君を以つて新宗教を開始するものなりとし、之れが爲めに君をして法廷に出でしめんとせるなり。彼れ亦此くの如き告發は容易に受理さるゝことを知れり、何となれば世間は常に宗教に關して新奇なることを嫉妬するを以つてなり。余に於ても集會等に於て、神聖なることを語り、又た將來の事變を前言する事ある時は、彼等人は皆な余を以つて狂人なりとし嘲笑せり。然るに余の言ふ所は眞理にして一々應驗あるなり。而して彼等凡て吾等を猜めり。故に吾等大膽なるべく、決して彼等人々の如きは意に介するを要せざるなり。

ソー 友なるエウチュフローンよ、彼等の嘲笑は言ふに足らず。何となれば、人は智者なりと思はるゝことを得べければなり。然りと雖余の思ふ所を以つてすれば、アテーナイ人は、人が自己の有せる智慧を他人に教

ふるに至るまでは、決して此人を意に介することなしと雖、其人一旦人を教ふるに至るや、君の言へるが如く、嫉妬よりして、或理由或は其他の理由を以つて、能く人を怒ることを爲すなり。

エウ 余は此くの如きの方法を以つて彼等の性僻を試むることを欲せざるなり。

ソー 余は敢て言はん、君は能く慎重の態度を取り、又た其知識を彼等に與ふること甚だ稀なり。然るに余は寛大の習慣ありて、何人にも自己の思ふ所を吐露し、或は余より聴衆に向つて、其の聴かせ料を拂ふこともあり。而してアテーナイ人は余を以つて多辯の者と爲さん。故に余が今ま言ひしが如く、若しアテーナイ人にして余を笑ふこと、今ま君が言ひし如く、彼等が君を笑ふが如しとせば、吾等は法庭にて時を費やすは却つて愉快ならん。されども彼等恐くは熱心なるべし、然らば結果、果して如何ならん、君は前知者なれば願くは之れを預言せよ。

エウ ソークラテースよ、余は敢て言はん、此事何事もなくして終るべし。而して君は勝訴なるべく、余も亦勝訴なるべし。

エウチユフロロ
ンの事件

ソ一 エウチユフロロよ、君の訴訟事件は何事ぞや。又た君は原告な
るか將た又た被告なるか。

エウ 余は原告なり。

ソ一 誰を訴へしぞ。

エウ 余の訴へんとする人の誰なるやを言はど、君必ず、余を以つて狂
人なりとせん。

ソ一 罪人翼を有せるか。

エウ 否な、彼れ其生命ある間は決して飛遁することなし。

ソ一 誰ぞや。

エウ 余の父なり。

ソ一 君の父なりとか。

エウ 然り。

ソ一 何の爲めに告訴したりや。

エウ ソ一 クラテースよ、殺人罪なり。

ソ一 神々かけて、エウチユフロロよ、一般の人々は、正理及び真理の性

父を訴ふ

殺人罪

實を知るもの甚だ少し、而して能く之れを知るに至らんには、彼れ非常なる人物にして且つ智慧に於て大闊歩を爲したる人ならざる可からず。
エウ ソークラテースよ、實に彼れ大闊歩を爲したる人ならざる可からず。

ソー 思ふに君の父の殺したる所の人は、君の親戚の人なるべし、若し彼れ他國人ならんには、君は父を告訴せんとは思はざりしなるべし。

エウ ソークラテースよ、余は君が親戚たると然らざるこの區別を爲すを奇異に感ずるものなり。君若し此くの如き罪人に對して其手續を爲し、以つて其身を潔うせんとするに當り、自ら識りつゝ尙ほ此殺人者と與なるに於ては、其身を汚がす點に於ては、被害者の親戚たると然らざることには關せざるなり。而して眞の問題は被害者は正理を以つて殺されたりや否やにあり。若し之れ正理ならんには、此事實は之れを放置するも可なりと雖、若し夫れ不正の理由による者なりとせば、殺害者は余と同一家屋の下に住居し、同一食卓に食するとも、余は彼れに反對するの手續は之れを取らざる可からざるなり。殺されたる者は實は我家の従僕に

してナキソヌなる我が家の田畝の耕作に従事せる者なるが、一日大酒して家僕の一人と争ひて彼れを殺したるものなり。而して我父彼れの手足を縛し、之れを塹溝中に役じ置き、使をアテーナイに遣はし、如何に處置すべきやを卜筮者に問はしめたり。然るに我父彼れを放棄して顧みずして以謂らく、彼れ殺人者なるのみ、假令死したりとも何かあらんと。果して父の思ひし如くに彼れ死せり。之れ即ち寒氣と饑渴と鎖鎖の苦痛とに由るものにして、使者のアテーナイより歸るの前彼れ死せしなり。父及び家族等は、余が殺人者に與みし、父を訴ふるを怒り、而して曰く、父は彼れを殺したるに非ず、よし殺したりとするも、彼れ已に殺人者たるのみと。而して余は、彼等が以つて、父を訴ふる所の子は不敬神の者なりとするの言には意を介するの要なきなり。實にソークラテースよ、彼等が敬神不敬神に關して、諸神の意見を知らざるも、亦甚しからずや。

ソー　あゝエウチュフローンよ、君は敬神、不敬神、及び神聖なること全般に亘りて精密なる思想を有せるにや。又た今ま君の言へるが如き事情なりとせば、君が父を訴ふるは、却つて之れ不敬神を行へるには非ざるか。

エウチユフロ
ン敬神に就いて
知れる所を語る

ソークラテース
エウチユフロ
ンの門弟子とな
らんと云ふ

メレイトスに對
する辯解とエウ
チユフロンの
後編

エウ ソークラテースよ、余がエウチユフロンのエウチユフロンたり、
又た人々より特に有名なるは、凡て此くの如き事に關する精確なる知識
を有せるにあり。若し余にして此知識を有せざるに於ては、余は何者に
も非ざるべし。

ソー 貴とき友よ、余はメレイトスと共に審問さるゝ時刻の來るまで、
君の門弟子となることを得ば幸甚なりとす。然らば余は彼れに挑戦し、
余の平常より宗教問題に熱心せる者なることを彼れに告げん。又た彼
れが余を非難して、余が大膽なる想像を有し、宗教に關して新奇を好む者
なりと云ふが如く、余は又た君の弟子となりしをも告げん、而して云は
ん——汝メレイトスよ、君はエウチユフロンの大神學者たり、又た其意見の
健全なることを承認せざる可からず。而して君若しエウチユフロンを
爾か考ふる以上は又た余をも爾か考へ、而して余を法廷に呼び出たすと
を爲さず、先づエウチユフロンを告發せざる可からず。何となれば彼れ
は余の師にして眞の腐敗者たればなり。而して其腐敗せしむるや青年
に非ずして老人を腐敗せしむるものたるなり。例へば彼れの教育した

ソークラテース
エウチユフロ
ンに敬神不敬神
を敬へんことを
乞ふ

る余の如き、又た彼れの教戒責罰する所の彼れの老父の如き、之れ皆なエウチユフロンの腐敗せしめし所たるなりと。若しメレイトス余の言を聴くことを肯んせずして、余に向けたる告發を君に移すことを爲さざる時は、余は法廷に於て彼れに挑戦するに此くの如く爲すの外、他に良法あらざるなり。

エウ 然り、ソークラテースよ、彼れ若し罪を余に歸せんとせば、余は必ず彼れの瑕瑾を發見すべし、而して法廷は余よりも寧ろ彼れに對して論ずる所多かるべきなり。

ソークラテース 愛する友よ、余は其事を知る、又た之れ余が君の弟子たらんとする所以なり。余の觀る所に由るに、何人も、君に注目せる者あらざるが如く、メレイトスの如きすらも君に就いて注意する所なきが如し、然るに彼れの慧眼直に余を發見して、余に罪を歸して不敬神罪なりとせり。故に余の願ふ所は、君の熟知せる所の敬神及び不敬神の性質、及び殺人及び其他の事を余に教へんことなり。是等の性質如何ん。敬神と云へることとは、如何なる行爲に於いても常に同一にはあらざるか。不敬神とは常に

敬神とは殺人罪を以つて父を訴ふることを

敬神と反對のことにして、凡て不敬神たる所のことを包含せる一概念を有して、其不敬神たるに於ては常に同一なるものなるか。

エウ 然り、ソークラテースよ。

ソー 敬神とは如何なるものにして、不敬神とは如何なるものなるぞ。

エウ 敬神とは今ま余が爲せる如きことを爲すことにして、何人たりとも殺人罪を犯し、或は褻瀆罪を犯し、或は其他此くの如きの罪を犯したるものを訴訟することなり。而して其人は父たれ、母たれ、又は其の他の人たれ、其は問ふ所に非ずして、若し之れを訴へざる時は、之れ不敬神たるなり。ソークラテースよ、余が今ま言ひつゝある所の事の真理の顯著なる證據を提供すべければ、君願くば之れを考慮せよ。而して此證據は余の已に他の人々に提供したる所たるなり。——其真理とは、不敬神者は何人と雖割せられざる可からずとの正義たるなり。見よ、人はゼウスを以つて諸神中最第一にして、又た最も主義の神なりとなすに非ずや——然るに父クロノス、其諸子を殺すを以つて、ゼウスは父を縛せり。而してクロノスも亦同様の理由を以つて、名状すべからざる作法に由り、父ウラノスを

クロノス神、ゼウス神父子の關係とエウチユフローン

ソークラテース
神話を好まず

神話は眞の事實
なるやを問ふ

諸神間の戦争

罰したるは人々の許容せる事實に非ずや。然るに余が父に對して手續を爲すに當てや、彼等余を怒れり。彼等實に諸神に關して云へる所と、余に關する所と、其の言矛盾せりと謂ふべし。

ソー エウチフローンよ、余が不敬神の罪名を被らされたる理由は、余の是等諸神に關する談話を信じ能はざるが故に非ずや。此故に人々余を惡しく考ふならんと信ず。然るに君は此等の談話を熟知し、又た之れを稱賛するを以つて、余は君の優等なる知識に同意するの外あらざるなり。此他余は言ふ所を知らざるなり、何となれば余は已に自白せるが如く、是事に關しては何事も知る所あらざればなり。君は果して是等の談話は眞實のものなりと信せるか、願くば余に告げよ。

エウ 然り、ソークラテース。此は眞實なり。世人が此の事を知らざるは、實に驚くべきことと云はざる可からず。

ソー 君は詩人の云へるが如く、又た大美術家が之れを其作品に表はすが如く、諸神互に相戦ひ、或は争闘し、或は戦争し、或は其他此くの如き事を爲すと云ふは、此は眞實の事なりと信するか。諸所の神社には此くの

如き作品充滿し、パンアターナイア大祭の時、アクロボリスに持ち行く所のアターチーの神衣は、是等の繪を繡宿せるは顯著なることなり。エウチュフローンよ、是等諸神に關する話しは眞實のことなるか。

エウ 然りソークラテースよ、而して余の今ま云へる如く、君若し諸神に關することを聽かんことを欲せば、君の驚くべき諸神のはなしをなして可なり。

ソー 願くば他日余の閑暇ある時語り聽かせよ。されども友よ、目下余の聽かんと欲する所は、「敬神とは如何なるものぞ」と云ふことに關する詳細の解答なりとす。之れ君の未だ余に教へざる所なり。たゞ君の言へる所は君の爲すが如く爲して、殺人罪を以つて君の父を訴ふることなりと云ふに過ぎざりしなり。

エウ ソークラテースよ、之れ眞なり。

ソー エウチュフローンよ、余は云はん、尙ほ他にも敬神の行爲あるべし。

エウ 然り、尙ほ之れあり。

ソー 余の願ふ所は二三の敬神の例を列擧することに非ずして、一切

敬神の定義を得んと欲す

の敬神の事物を敬神たらしむる所の總念を説明せんことなり。君はこゝに一觀念ありて能く不敬神をして不敬神たらしめ、敬神をして敬神たらしむるものあるを記憶せざるか。

エウ 余は記憶せり。

ソー 願くば其は何なるやを余に教へよ、然らば余は標準を得、此標準に由りて君及び其他人々の諸行爲の性質を測定し、而して此行爲は敬神なり、彼の行爲は不敬神なりと云ふことを定めん。

エウ 君若し好まど余は之れを教へん。

ソー 余は大に之れを望む。

エウ 敬神とは諸神の好む所のものなり、不敬神とは諸神の好まざる所のものなり。

ソー 大に善し、エウチコローンよ、君は殆ど余の願ひし所の種類の答解を與へたり。余素より君が其の言ひし所の真理なることを證明するならんことは敢て之れを疑はずと雖、其證明を聴くまでは未だ真否を云ふこと能はざるなり。

敬神とは諸神の好むもの

定義と標準

エウ 其は勿論なり。

ソー 然らば吾等の言ひし所を試験すべし。君は神の好む所の事物及び人間は敬神にして、神の嫌ふ所の事物及び人間は不敬神なり、而して此兩者は正反對のものなりとの説なるか。

エウ 然り、余はしか言へり。

ソー 又た之れ正當に言ひたるものなりとなすか。

エウ 然り、ソークラテース、余は然りと思へり。確かに其の如く言へり。

ソー 且つ、エウチュフローンよ、諸神は怨恨、憎悪、及び差別の心ありと云ふか。

エウ 然り、しか言へり。

ソー 然らば如何なる種類の差別は、怨恨及び忿怒を起すものなるぞ。善良なる友よ、例へば君と余と數に關して意見を異にせる時、此種の相違は吾等をして怨恨を懐かしめ、以つて相争ふに至らしむるか。否な、吾等十分に精算して其計算を求めて其局を結ぶには非ざるか。

意見の相違と怨
恨及び忿怒消散
法

エウ 然り。

ソ一 若し又た物の大小に就いて意見を異にする時は、直ちに之れを計量して其局を結ぶるは非ざるか。

エウ 眞に然り。

ソ一 物の輕重に就いて意見を異にする時は權衡以つて之れを計り、以つて其衝突意見を止むるには非ざるか。

エウ 慥かに然り。

ソ一 然りと雖此く明瞭に決定され能はざるが故に、吾等をして怒らしめ、互に相敵視するに至らしむる所のものと、前の如き場合との異なる所は如何ん。君恐くは即坐に思ひ當らざる可ければ、一言以つて君に思ひ起さしめんに、此の敵視怨恨等の起るは、正義、不正義、善、不善、名譽、不名譽等に關して意見を異にする時たるなり。是等の諸點に異存ありて、其異存を決定すること能はざる時に、吾等争ふものなることは、君も余も凡ての人も皆實驗せる所にあらずや。

エウ 然り、ソ一クラテース、吾等の争ふは、實に是等に就いて意見を異

正不正、善不善等の意見の相違と怨恨敵視

諸神間にも正義
不正義の意見の
相違あるか

にせるに由るなり。

ソ一 貴きエウチヌフローンよ、諸神間に争闘あるは、又た同様の性質のものなるか。

エウ 然り。

ソ一 然らば君の言へるが如く、諸神も善不善、正不正、名譽及び不名譽等に關して意見を異にすることありと謂ふべく、若し互に異存なき時は諸神間に争闘あるべきやうなかるべし、然らずや。

エウ 君の言正しと謂ふべし。

ソ一 人は皆な自ら高尚、正義、善良なりとする所のものを愛し、其反對のものを惡むには非ざるか。

エウ 眞に然り。

ソ一 然るに、君の言へるが如く、人は同一物に對して、或者は之れを正と云ひ、或者は之れを不正と謂ひ、以つて互に争論し、遂には其間に戦争起るに至ることあり。

エウ 然り、其は眞なり。

同一物に對して
諸神に好惡あり
とせば同一物に
して敬神不敬神
あり

殺人の惡なるは
諸神一致す

ソ一 然らば同一物と雖、諸神に愛され又た憎まるゝことあるが如き
に由つて觀る時は、同一物と雖、諸神の憎む所又た好む所あるか。

エウ 然り。

ソ一 然らばエウチユフローンよ、此見解に由る時は、同一物は敬神たり
又た不敬神たるべきか。

エウ 思ふに其の事あるが如し。

ソ一 友よ、然らば君は余の問ひし所に答へざりしと謂はざる可から
ざるなり。余は敬神たると同時に不敬神たるもの、即ち諸神に愛せらる
ゝものにして、又た同時に其嫌はるゝ所のものを問ひしに非ざるなり。

故にエウチユフローンよ、君が自己の父を刑罰に處せんとするは、ゼウスの
神に取つては好ましきことなりと雖、クロノス及びウラノス諸神に取つ
ては甚だ不愉快なるとたるなり。而してヘーファイストスの喜ぶ所はヘ
ーラの喜ばざる所、其他諸神の意見を異にせるもの少なからざるべし。

エウ 然りと雖、ソークラテースよ、余は信ず、諸神は殺人を罰するの正
當なることには一致すべく、此の事に就いては意見の相違あらざるべし

と。

ソ一 然りと雖エウチユフローンよ、人間界の事を以つて云はんに、君は誰か殺人或は其他の犯罪者は之れを放免すべきものなりと論ずるものあるを聴きしことあるか。

エウ 余は寧ろ言はん、人々は常に之れを論せりと。殊に法廷に於ては然り。人々種々の犯罪を爲し、而も其刑罰を免れんとしてあらゆる言行を盡くさざるなし。

ソ一 然りと雖、エウチユフローンよ、彼等其罪行たることを認め、而も尙ほ彼等罰せらるゝを要せずと云ふか。

エウ 否な。

ソ一 然らば彼等敢て言ひ又た行はざる所の或物あるなり。彼等決して、有罪者は罰するを要せずと論せざるなり、然りと雖彼等の力むる所は其罪に非ざることを辯明せんとすることなり。彼等之れを爲さざるか。

エウ 然り之れを爲せり。

ソ一 然らば人々決して犯罪者は罰すべからずと論せずと雖、彼等は犯罪者の誰なりや、彼れは何を爲せしや、又た其時は如何んどの事實を論ずることを爲すなり。

エウ 真に然り。

ソ一 諸神に於ても亦然り。若し君の言へるが如く、諸神は正不正に關して争ふの時、神々の或者は曰く、之れ不正義なりと、又た神々の或者は曰く、否と。然りと雖神も人も、犯罪者は之れを罰するを要せずと言ふものに至つては、決して之れあらざるべし。君は此事を余に云はんとしたるには非ざるか。

エウ ソークラテースよ、大體に於て其は真なり。

ソ一 然りと雖彼等諸神は尙ほ種々の事を争ふものなり。而して之れたゞ人間のみの事に非ずして、又た諸神にも適用すべきなり。故に彼等若し兎に角に争ふことありとせば、之れ或行爲に關する問題に對して争ふものにして、或者は以つて正なりとし、他の者は以つて不正なりと爲すに由るなり。之れ眞理ならざるか。

諸神はエウチユ
フロロンの行爲
を審みするに一
致せりとの證を
求む

エウ 眞に然り。

ソー 然らば愛する友なるエウチユフロロンよ、余を教訓し余を諭すの心を以つて、余に此事を赦へよ、乃ち——こゝに一僕あり、彼れ殺人を行ひたる者なり、而して殺害されたる者の主人、彼れを鐵鎖に縛し、如何に所置すべきやに關して人を遣はして卜筮して神意を伺はしむ、然るに使者未だ歸らざるに、鐵鎖に縛されたることに由つて彼れ死せり。而して之れ不正の死なり。故に彼れの爲めに主人の子は、殺人罪を以つて父を訴ふべき筈なりとは諸神の意見なりとの證據、之れ余の君より聽かんとする所なり。君は、如何にして凡ての諸神盡く此子の行爲を是認するに一致せることを證するや。願くば之れを證明せよ、然らば、余は終生君の智慧を稱賛すべし。

エウ 余は此事を明瞭にするは敢て能くせざるに非ずと雖、其證明は決して容易の業に非ず。

ソー 余は解せり。思ふに君は、余を以つて、裁判官の如く敏捷なる理解力を有せざる者なりと云はんとするものゝ如し。而して君は必ず裁

判官に向つては、かの行爲は不正にして、諸神の嫌ふ所なるを證明するならん。

エウ 然り、ソークラテース、若し彼等にして余に傾聴するならんには。

ソー 彼等若し君の善良なる演説家なることを知らんには、彼等必ずや傾聴すべし。今ま吾等語り居る内、一思想起り、余は自ら心中に謂へら

エウチユフロロンの説明は無用たるのみ

敬神の定義の改正

く『エウチユフロロン若し余に證明するに、諸神はかの奴僕之死を以つて不正の死となすことを以つてするも、余は之れが爲めに敬神不敬神の性質に就いて、別に何事も知ることを加へざるなり。若し此行爲は諸神の惡む所なるを許容することも、是等の區別は、敬神不敬神の定義に何の益する所あるなし。何となれば諸神の惡む所は、一方に又た其好む所なればなり』と。故にエウチユフロロンよ、余は此事の證明は敢て之れを願はざるなり。若し君の意なりとせば、此行爲は一切諸神の罪とし、嫌ふ所のものと假定せん。然りと雖余は定義を改良して此く言はん、曰く、一切の神々の嫌ふ所のものは不敬神にして、其好む所は敬神或は神聖なり、而して諸神中の或者は之れを好み、或者は之れを好まざるものは敬神不敬神兩者た

るか、或は敬神にも非ず、又た不敬神にもあらざるなりと。之れ敬神不敬神の吾等の定義なるべきか。

エウ ソークラテースよ、何故に然らざるか。

ソー 何故に然らざるかと云ふか。エウチュフローンよ、余の考ふる所に由れば必ず然るべし。然りと雖、此假定は君が余に約して、余を教訓すと云へることに於て大に君を助くるや否やは、君の考ふべき所となす。

エウ 然り、余は云はん、一切の神々の愛する所のものは敬神にして神聖なり、而して之れに反して其嫌ふ所のものは不敬神なりと。

ソー エウチュフローンよ、吾等は尙ほ進みて是れに關する眞理を討究すべきか、將た又た單に吾等自己の定むる所及び他人の定むる所の意見を承認すべきか、孰れぞや。

エウ 吾等進みて討究すべきなり、而して余は信ず、吾等の述べたる所は討究の試験として立つべしと。

ソー 善良なる友よ、其事に就いては吾等やがて一層善く知ることを得ん。余が第一に知らんと欲するの點は、敬神及び神聖なるものゝ諸神

神聖なるを以つて神之れを喜ぶか、神之れを喜ぶに由つて神聖なるか

に喜ばるゝは、其物神聖なるに由るか、或は神に喜ばるゝを以つて神聖なるに由るか。

エウ ソークラテースよ、余は君の言ふ所を解せざるなり。

ソー 余は説明せん。吾等運搬すと云ひ、又た運搬さると云ひ、導くと云ひ、導かると云ひ、視ると云ひ、視らると云ふ。此に差別あり、君其性質を知らん。

エウ 余は了解したりと信ず。

ソー 而して愛さるゝことと、愛することとは異なるに非ずや。

エウ 然り。

ソー 然らば余に告げよ、かの運搬さるゝ所の物は、運搬さるゝが故に、運搬の此状態にて運搬さるゝか、或は他に理由あるに由るか。

エウ 否な、其れ其理由なり。

ソー 導かるゝもの及び視らるゝもの亦同様の理由なるか。

エウ 然り。

ソー 物は視らるべきものなるが故に視らるゝに非ずして、之に反し

状態は行爲より後なるか、行爲は状態の後なるか

て視らるゝが故に視らるべきものたるなり。又た物は導かるゝの状態にあるが故に導かるゝに非ず、又た運搬さるゝ状態にあるが故に運搬さるゝに非ずして其反對たるなり。エウチュフローンよ、思ふに余の意味せる所此くて明瞭となりしなるべし。而して余の意味する所は、如何なる行動の状態も受動の状態も、皆な其の前に行動受動あることを含蓄するものなりと云ふにあり。故に物の轉化するや、其の轉化するものなるが故に非ずして、轉化するが故に轉化する状態にあるなり。物の受動となるや、受動となるの状态にあるが故に非ずして、受動するが故に受動の状態にあるなり。君は之れを承認するか。

エウ 然り。

ソ 愛さるゝものは轉化か、或は受動の或状態にあるにあらずや。

エウ 然り。

ソ 而して前の場合に於けると等しく、愛さるゝ状態は愛さるゝ行為に随伴し來るものにして、其の行為は其の状态に随伴するに非ざるなり。

敬神とは神に愛
さるゝことなる
か

神聖なるが故に
愛さるゝか

神聖なることと
神に愛さるゝこ
ととは別物なり

エウ 確かに然り。

ソ一 エウチユフローンよ、敬神に關しては如何ん。君の定義に由る時
は敬神とは一切の神々に愛さるゝことにあらずや。

エウ 然り。

ソ一 其は敬虔たり或は神聖たるに由るか、或は他の理由に由るか。

エウ 否な其の理由に由つてなり。

ソ一 之れ神聖なるが故に愛さるゝものにして、愛さるゝが故に神聖
なるに非ずとするか。

エウ 然り。

ソ一 而して諸神の好む所のものは、諸神に愛さるゝが故に、諸神に愛
され、又た諸神に愛さるゝの状態にありと謂ふべきか。

エウ 確かに然り。

ソ一 エウチユフローンよ、然らば君の斷言せるが如く、諸神の好む所の
ものは、神聖なるに非ず、又た神聖なる所のものは諸神の愛する所に非ず、
兩者全く別物たるなり。

神聖なる故神之
れを愛す

諸神の好むもの
は諸神之れを愛
する故

神聖なるもの神
の好むもの及び
神の愛するもの

エウ ソークラテースよ、君の言の意味や如何ん。

ソー 余の意味する所は、神聖なることは其神聖なるが故に神の愛する所なるは吾等の認むる所にして、神の愛する所なるが故に、神聖なるに非すと云ふにあり。

エウ 然り。

ソー 然りと雖諸神の好む所のものは、諸神之れを愛するが故に諸神之れを好むものにして、決して諸神之れを好むが故に之れを愛するには非ざるなり。

エウ 真に然り。

ソー 然りと雖我友エウチュフローンよ、若しかの神聖なる所のものは、諸神の好む所のものと同一にして、而してかの神聖なる所のものは神聖なるが爲めに愛さるゝとせば、諸神の好む所のものは、諸神の好むが故に愛さるものたりしなるべし。然りと雖かの諸神の好む所のものは、諸神之れを愛するが故に諸神之れを好むとせば、かの神聖なる所のものは諸神之れを愛するが故に神聖たりしなるべし。されども此の事の反對な

るは君の解する所なるべく又た此兩者全く別物なるを知らん。何となれば一 (Deophrén) は愛さるゝ故に愛さるゝ種類のものにして、他 (Borion) は愛さるゝ種類のものなるが故に愛さるゝものなればなり。エウチュフロ
 ーンよ、余が神聖なるものゝ實質の何たるやを問ひし時、君は其實質を答へずして、たゞ其屬性乃ち一切の神々に愛さるゝことゝの屬性を答へたるものゝ如し。而して君尙ほ敬神の性質を余に説明することを拒めり。願くば君の智慧の寶貨を隠くすことなく、敬神及び神聖の真に如何なるものなりや、之れ神の好む所なりや否や、何となれば之れ吾等の争ふべき所の問題に非ざればなり、又た不敬神とは果して如何なるものなりやを今一度余に教へよ。

エウ ソークラテースよ、余は如何に余の意味する所を云ひて可なるやを真に知らざるものなり。何となれば、吾等の議論は如何なる基礎に之れを据え置くとも、彼方を向きて歩み去るの趣あればなり。

ソー エウチュフローンよ、君の言は實に吾が祖先ダイダロスの作品の如きかな。若し余にして此言を爲せしならんには、君或は、余が、ダイダロ

エウチュフロ
 ーン自己の議論は
 歩み去るを厭ず

エウチュフロ
 ーンの言はダイダ
 ロスの作品の如
 し

ソークラテース
をダイダロスに
比す

議論の要旨

スの後裔なるを以つて、余の作品たる議論は、固く其据え置きたる所に存留せずして歩み去るなりと言ひしならん。然るに是は之れ君自家の思想なるを以つて、君は或る他の嘲弄の語を發明せざる可らざるなり。何となれば君の言へるが如く、是等の言は動き去るの傾向を示すものなればなり。

エウ　否な、ソークラテースよ、余は尙ほ云はん、君は眞にダイダロスにして、能く議論をして動かさむることを爲すの人なりと。實に議論をして動搖せしむる所のものは、余に非ざるなり、何となれば、余の力を以つてしては、是等の議論は毫も動搖せざるを以つてなり。

ソー　然らば余はダイダロスにも優れるものならざる可からず。何となればダイダロスはたゞ自己の作品のみを動かさむる可なりと雖、余は他人のものをも動かさむるを以つてなり。而してダイダロスの作品の美とする所は、寧ろ余の美とせざる所なり。何となれば余はダイダロスの智とタンタロスの富とに代へて、能く議論を繋留し、以つて動搖すると勿らしめんとを欲すればなり。然りと雖此事に關する談話は是に止めん。

余の見る所を以つてすれば、君は聊か懶惰なるが如し、故に余は、君が敬神の性質に關して如何に余に教ふべきやを示めすべし。君願くば勞力を惜しむこと勿れ。此事を余に教へよ、敬神なる所のものは必ず、正しきことにあらずや。

エウ 然り。

ソー 然らば一切の正しきものは敬神なるか。或は敬神なるものは一切正しと雖、其正しき所のものはたゞ一部敬神にして、全部は敬神にあらざるか。

エウ ソークラテースよ、余は君の言ふ所を解する能はず。

ソー されども君は余よりも若きを以つて、余よりも賢明なるは余の知る所なり。然りと雖崇敬する友よ、余が言しが如く、君は智慧に富めるを以つて遂に懶惰に陥りたるなり。聊か力むる所あらんには、余の言を理解するは易々たらんのみ。余の意味する所は、余の意味せざる所のものを以つて之れを説明せん。詩人(スタシノス)歌ひて曰く

「是等一切の諸物の創造主たるゼウスに關して、汝は語ること勿

正しきことと敬神

恐懼と崇敬

るべし。何となれば恐懼の存する所又た之れ崇敬の存する所
たればなり。」

と。余は此詩人の言に同意せざるものなり。其不同意に關して君に語
る所あらんか。

エウ 願くば是非とも之れを語れ。

ソ一 余は恐懼の存する所又た崇敬の存する所なりと云はざるべし。
何となれば多くの人貧困、疾病及び其他の害惡を恐ると雖、余は彼等が其
の恐懼の目的物を崇敬するを知らざればなり。

エウ 眞に然り。

ソ一 然りと雖、崇敬の存する所には恐懼あり。何となれば人若し或
行爲に關し、崇敬及び羞耻の感を有する時は、不名譽を恐るゝものなれば
なり。

エウ 疑ふべきなし。

ソ一 然らば恐懼の存する所は崇敬の存する所なりと云ふが如きは
誤謬にして、吾等は崇敬の存する所は、恐懼の存する所なりと云はざるを

得ざるなり。然りと雖恐懼の存する所必しも常に崇敬存せざるなり。何となれば恐懼は崇敬よりも廣き觀念にして、崇敬は恐懼の一部なること、宛も奇數は數の一部にして、數は奇數よりも廣き觀念なるが如きを以つてなり。思ふに此く説明せば君は余の言ふ所を了解し得るならん。

エウ 然り。

ソー 之れ余が正しきことは敬神なるか或は敬神は正しきことなるか、又た常に敬神の存せざる所には正義あるを得ざるかに就いて問はんとする時、提出せんとしたる疑問なりき。何となれば正義は敬神よりも廣き觀念にして、敬神は其一部分たればなり。君は之れに同意なるか。

エウ 然り正しき論なりと思考す。

ソー 若し敬神は正義の一部分ならんには、然らば吾等如何なる部分を研究せば可ならんか。君若し前の如き場合に討究を進めて、例へば、偶數とは如何なるものなりや、偶數とは數の如何なる部分なりやと問はんには、余は答へて、二等分さるゝ數字を代表する所の數なりと云ふは敢て難事に非ざるなり。君は之れに同意なりや。

敬神は正義の部
分

エウ 然り。

ソー 之れと同じく余の君に願ふ所は、敬神及び神聖なるものは正義の如何なる部分なるやを教へんことなり。今ま若し君に就いて敬神或は神聖及び其反對のものゝ性質を善く學び置かんには、メレートスと會合する時、彼に忠告して、余に對して正義ならざることを行はざるやう、又た不敬神罪を以つて余を訴ふることを爲さざるやう力むべし。

エウ ソークラテースよ、敬神及び神聖は諸神に注意する所の正義の一部なるが如し。此他又た人に注意する所の正義の一部あり。

ソー エウチュフローンよ、其は甚だ善し。然りと雖余は尙ほ一小疑問ありて、君の教を乞はんとする所は「注意」なる語は何を意味せりやと云ふにあり。何となれば注意なるものは、諸神に適用する時と其他の諸物に適用する時とは、同一の意味に使用すること難ければなり。例へば馬に注意することは必要なりと云ふと雖、何人も之れに注意することを能くするに非ずして、たゞ馬術に熟練なる人之れを能くするあるのみ。之れ真に然らずや。

敬神とは諸神に注意すること

「注意」の意義

犬馬に注意す

エウ 真に然り。

ソ一 馬術なるものは馬を注意するの術にあらずや。

エウ 然り。

ソ一 善く犬を注意するを得るものは、獵夫にして、何人も之れを能するに非ざるなり。

エウ 然り。

ソ一 獵夫の術は、犬を注意するの術なるか。

エウ 然り。

ソ一 牧牛者の術は牛に注意するの術なるか。

エウ 然り。

ソ一 神聖及び敬神は諸神に注意する所の術なるか——エウチユフロ
ンよ、之れ君の意味せる所か。

エウ 然り。

ソ一 注意なるものは常に注意を興へらるゝ者の善或は利益を計るものなるか。馬を以つて例せんに、養馬の術を以つて注意を加ふる時は

諸神に注意す

注意とは其物を
利益し進歩せし
めんことを意とす

馬は利益を得、改良せられたりと謂ふべきか。然らずや。

エウ 然り。

ソー 犬は獵夫の術に由つて利益を得、牛は牧牛者の術に由つて利益を得、其他一切の諸物皆な善を興ふるが爲めに注意さるゝものにして、其害を興ふるが爲めにするにはあらざるか。

エウ 確かに、害を興へんが爲めには非ず。

ソー たゞ其の善の爲めなるか。

エウ 勿論なり。

ソー 諸神に注意するの術なりと定義したる所の敬神及び神聖なることは、諸神を利益し、諸神を進歩せしむることを爲すか。君が神聖なる行爲を爲す時は、何れかの神を進歩せしめたりと云ふか。

エウ 否々。之れ余の意味せる所に非ず。

ソー エウチュフローンよ、實に之れ君の意味せし所なりと余も亦思はざりき。君の意味は遙かに他にあるべし。余が注意の意味を問ひしは實に之れが爲めなり、何となれば之れ君の意味せし所にあらずと思ひた

敬神とは諸神を
利益進歩せしむ
ることなるか

ればなり。

エウ ソークラテースよ、君は余に寛假する所あれ、之れ余の意味せし所に非ざるなり。

ソ一 善し。然りと雖所謂敬神即ち神に注意することとは如何なることぞ、之れ尙ほ余の間はざるを得ざる所なり。

敬神とは神に奉事すること

エウ ソークラテースよ、之れ家僕が其主人に盡くすが如きなり。

ソ一 余は解せり、—之れ諸神に事ふることなり。

エウ 確かに然り。

ソ一 醫藥も亦之れ一種の事ふること或は服役にして、或目的を得んが爲めに注意を用ゆることなり。其目的とは即ち健康ならずや。

或目的を爲さんとする靈力

エウ 然り。

ソ一 又た或結果を得んとして造船者に事ふることあるか。

エウ 然り。ソークラテースよ、船舶を製造せんと目的を以つて。

ソ一 家を建築せんと目的を以つて建築者に事ふることあるか。

エウ 然り。

神に事ふるとは
神の如何なる事
業に助力するこ
ととなるか

吾等の助力に由
つて成したる神
の事業は何ぞや

ソ一 而して善良なる友よ、此の神に事ふる所の術に就いて余に教へよ。此の事ふると云ふとは、如何なる事業を成すに助力を與ふことなるか。君は自ら云へる如く、現存の人間中、君は宗教に關しては最も善く教育されたる人なれば、必ず此事を知らん。

エウ ソークラテースよ、眞に然り。

ソ一 然らば、神が其助手として吾等の助力に由つて爲したる所の善美の事業は何々ぞや。

エウ ソークラテースよ、諸神の爲したる美なる事業は甚だ少なからず。

ソ一 友よ。大將の爲したる事業も亦此くの如し。然りと雖其多數の中主要なるものは容易に語ることを得べし。戦争の勝利は其の多くの事業中の主要なるものなりと君は云はざるか。

エウ 然り。

ソ一 若し余にして誤らずとせば、農夫の事業の美なるもの亦少なからずと雖、土地より食物を産出せしむることは其の主要なるものに非ず

や。

エウ 確かに然り。

ソー 神の爲したる事業の多くの美なるものゝ中、其主要なるものは果して何ぞや。

エウ ソークラテースよ、余が前にも言ひし如く、一々精密に此事を知らんとするは甚だ勞多きことなるを以つて、余はたゞ敬神とは祈禱及び犠牲を奉獻して、言語及び行爲に於て神々を悦ばすことを學ぶにありと云はん。之れ實に敬神にして、以つて一國一家を救ふべきこと、不敬神は神々の悦ばざる所にして一國一家の滅亡を來すが如きなり。

ソー エウテュクロンよ、思ふに君にして其意あらんには、余が問ひし所の主要なる質問に對し、今一層簡單なる解答を與へたりしなるべし。然るに君は余を教訓せんとするの意志なきものゝ如し。然らずんば如何でか其點に達したるの時、君は他を言ふことあらんや。君若し、今たゞ一度余に答ふるならんには、今度こそは余は敬神の性質に就いて君より學ぶことを得ん。凡て質問者なるものは解答者に依頼するものなるを

敬神とは祈禱、
供儀及び祠を悦
びず言行

敬神とは神に興
ふることと願ふ
こととなる

以つて解答者の導く所何處へなりとも余は従はんとせり。今たゞ一問のみを余に許るせ。敬神とは何ぞや、敬神なることとは何ぞや。君は是等を以つて祈禱及び犠牲を供する一種の學術なりと言はんとするか。

エウ 然り、余は然りと云はん。

ソ一 而して犠牲を供することは神々に贈與することにして、祈禱は神々に願ふことなるか。

エウ 然りソークラテース。

ソ一 此見解を以つてする時は、敬神とは願ふこと及び興ふることとの學なりと云ふべきか。

エウ ソークラテースよ、君は最もよく余を解せり。

ソ一 然り、其理由たる、余は君の學術の歸依者にして、余の全心を之に注げるを以つてなり。故に君の言へる所は、何事と雖誤ることなし、故に願くば神に仕ふることの性質の如何なるものなりやを余に教へよ。君は、諸神に祈願し又た供物を捧ぐることなりとなすか。

エウ 然り。

祈願は求め

供物は興ふ

敬神とは人と神
と有無を通ずる
商賣なるか

吾等何物をも神
に興へ得ず

ソ一 祈願の正常なる方法は、諸神に願ふに吾等の要する所のものを以つてするにあるか。

エウ 然り。

ソ一 而して供物を捧ぐる正常なる方法は、諸神が吾等に要むる所のものを捧納するにあり。何となれば要むる所なき者に贈與すと云はゞ之れ全く無意味たればなり。

エウ ソ一クラテースよ、真に然り。

ソ一 然らばエウチュフローンよ、敬神とは諸神と人々どが互に有無を通ずる商賣を行ふことなりと謂ふべきか。

エウ 此くの如き言語、君若し好まゞ之れを使用することも可なり。

ソ一 余は別に何事も好む所なく、たゞ真理を云へるのみ。然りと雖、余の願ふ所は、吾等の奉納する所に由つて、諸神は果して如何なる利益を増加するやを教へんことなり。諸神は一切の善を吾等に興ふるものなるは明瞭なることにして、吾等が其の報謝として如何なる善をも諸神に興ふること能はざるも、亦、一層明瞭なることとなす。諸神若し一切のも

尊敬の供物のみ
之れ神の悦ぶ所

誠敬齋戒して本
に歸へる

のを吾等に與ふとせば、吾等は何物をも諸神に與へざるなり。故に吾等若し大に利益する所ありとせば、此は一種の商賣たらざる可からざるべし。

エウ ソークラテースよ、諸神は吾等より受けたる所の物に由つて何等かの利益を増加するものなりと君は想像するか。

ソー エウチュフローンよ、若し毫も利益することなしとせば、吾等如何なる奉納を諸神になさん。

エウ 吾等の諸神に奉獻する所のものは、たゞ尊敬の供物あるのみ、豈他あらんや。之れ余の已に言ひし所して、諸神の喜ぶ所のものなり。

ソー 然らば敬神とは諸神を喜ばすものなりと雖、諸神を利益し又は諸神の好む所のものには非ざるなり。

エウ 余は云はん、之れに優りて諸神の好むものはあらずと。

ソー 然らば敬神とは諸神の好む所のものなりと今一度反復して斷言するか。

エウ 然り疑ふべきに非ず。

ダイダロスはソ
クワテースに
非ずして、寧ろ
循環論を爲すエ
ウチエフローン

ソ— 君は此言を爲すに於ては、余は、君の言ふ所の確として定立する
ことなく、而して歩み去るものなるに驚かざるを得ざるなり。君は余を
目してダイダロスとなし、能く議論をして歩み去らしむる者となすと雖、
君は未だ他にダイダロスよりも一層大なる美術家ありて、よく議論をし
て循環して行かじむる者あるを知らざるなり。而して其の人は君自身
たるなり。何となれば君の見るが如く、議論循環して又た元の所に歸り
來ればなり。君は、前に吾等が、神聖及び敬神は、諸神に愛さるゝ所のもの
と同一に非すと云ひしことを記憶せるならん。君之れを記憶せりや否
や。

エウ 記憶せり。

ソ— 然るに今や君は、諸神の愛する所のものは神聖なりと云へるに
非ずや。然りと雖、此く言ふは諸神の好む所のものは神聖なりと云ふと
同一なり—君は此點を了會したりや如何ん。

エウ 然り。

ソ— 然らば吾等が前に其事を許容したるは誤謬なるか、或は若し其

時正常なりとせば、今は誤認たるなり。

エウ 其場合然るが如し。

ソー 然らば吾等又た、始めに返りて敬神とは何ぞやとの質問を提出せざるを得ざるなり。其疑問にして余の心中に存せる以上は、余は其討究に於て決して倦怠することなからん。君、願くば余を輕蔑することなく、全心を盡くして余に眞理を告げよ。何となれば若し何人か其眞理を知れる者ありとせば、君は即ち其人たればなり。此故に君の之れを語るまでは、余は君を抑留することブローテウスを抑留するが如く爲すべし。若し君にして敬神不敬神の性質を知らざらんには、君の家の奴隸の故を以つて君の老年の父を訴ふるに殺人罪を以つてすることなかるべく、又た諸神の眼前に於て、此くの如き惡を爲すが如き危險を冒し、人々の意見を過信するが如きことを爲さざりしなるべしと余は信ず。故に余は確信す、君は敬神不敬神の性質を熟知せるものなりと。故に愛するエウテュフロインよ、願くば余に教へよ、而して君の知識を隠くすこと勿れ。

エウ ソークラテースよ、他日又。余は心急げり、余は行かざる可から

エウテュフロ
インをブローテウ
スに比す

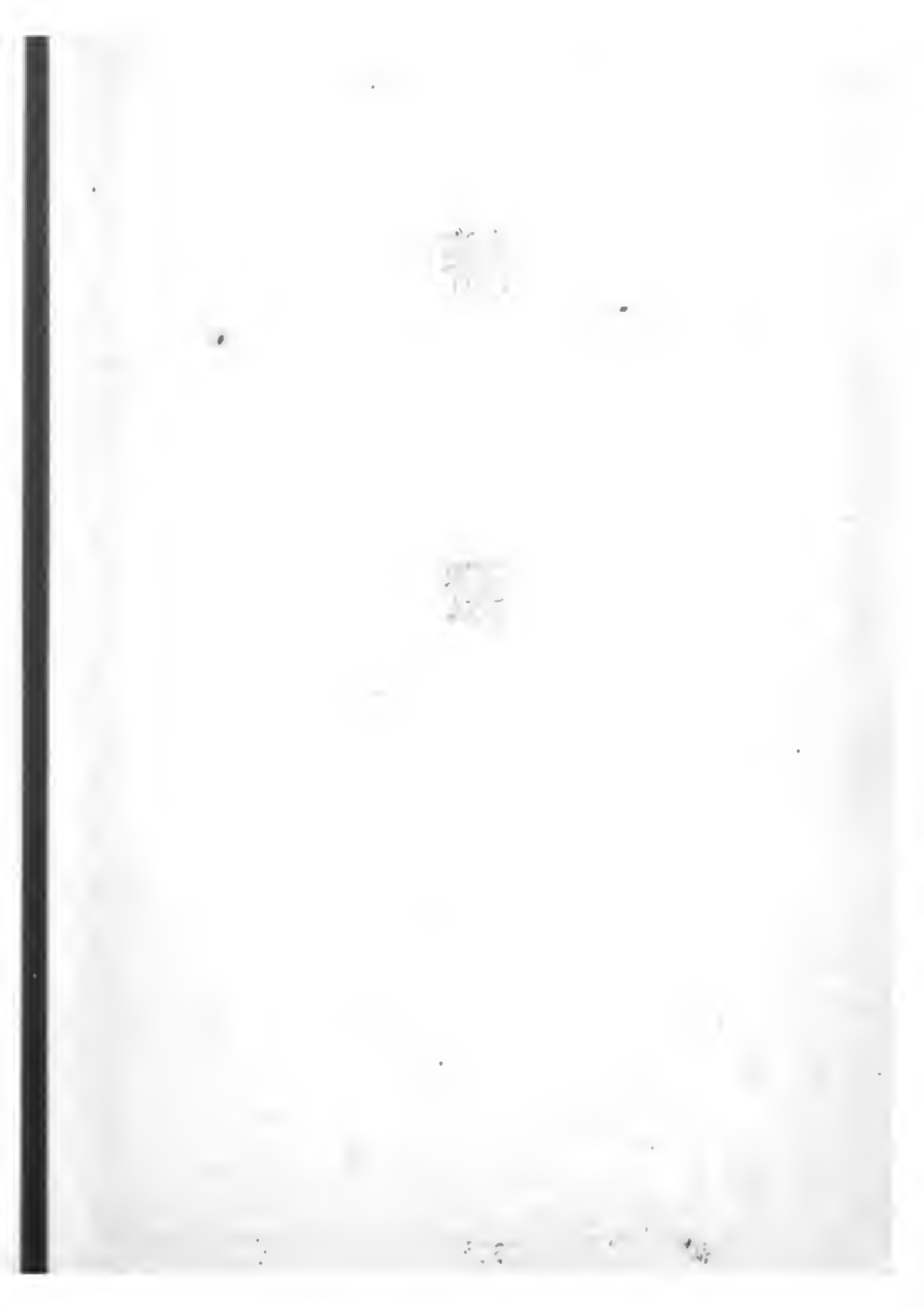
敬神遂に答解を
得ずソークラテ
ース失望す

ざるなり。

ソークラテ　あゝ我友よ、君は余を失望せしめて置き去らんとするか。君は必ず余に敬神不敬神の性質を教へ、以つてメレートス及び其訴訟に對して我身の公明なることを辯解するを得しむるならんと希望し居たりしなり。又た余は輕跳にして新奇を好むこと、及び無智の爲めに空想に耽りたるも、今やエウチュフローンの厚意に由つて改心して、今後は善良なる生活を爲すべきことを、メレートスに證明するを得んことを希望し居たりしなり。

辯

證



辯證解題

本篇の事實と理想

プラトーンの「辯證」篇と、ソークラテースの眞の辯證とは如何なる關係なるやは之れを決定する方法なしと雖、キセノフオンの「メモラピリア」中に言へる所と、殆ど相一致せるに由つて見る時は、此篇は事實に基づけるものなるを知るに足る。然りと雖其大體に於てはプラトーンの理想のソークラテースにして、ソークラテースの生活の最も高尚に、又最も公共の光景中に見はれたるものにして、其最も弱かるべき時に於て、勝利の頂上に達し、而も尙ほ人類に對して卓越なる威權を有し、而して其慣用せる所の諷刺は一種新たな意味を帯び來りて死の面前に悲哀の情趣を添えたるものなり。ソークラテースの一生の事實は此に縮密せられて表現し、其人格の概要は其辯解の言論中偶然出で來りたるものゝ如きの觀あり。其文體の放肆なる、其論題の順序なき、是等は却つてソークラテースの性質を表はす點に於て、美術の完全なる作品として結果せり。然りと雖此篇中の或論題は、必ずや實際ソークラテースの論じたるも

理想上の事實

のあるべく、其言論は諸弟子の耳には後までも尙ほ響き居たりしなるべし。勿論此辯證篇は理想のものにして、言ふべくして言はずありし所の事を言ひしものあるべく、文字通りに真なりと云はんより、理想上に真なるものにして、プラトーンの此位置の觀たるなり。されども吾等又た想像して、ソークラテースの眞の辯證は、或はプラトーンの此篇よりも一層大なるものありしなるべしと云ふを得ざるにしも非ざるが如し、何となれば師は弟子よりも大なればなり。されども兎に角にソークラテースが實際用ゐたる言語は後にまで保存記憶されたるは蓋し眞なるべく、且つプラトーンは辯證の法庭に在つて傍聽せしことを記せりと雖、ソークラテースの臨終の時(『ファイドーン』篇)は、病氣を以つて其場に在らざりし由を記るせり。之れ或は此篇に信を置かしめ、臨終の卷には其意なきものゝ如しと解するも、決して想像に過ぎたりと云ふべからず。殊にプラトーンの全對話中、自己の名を記せるは、此『辯證篇』と、ソークラテースの臨終篇『ファイドーン』との二あるのみなるより推すも、此篇の大に事實上に眞なるものあるを察知するに足る。又此篇はキセノフォーンのソークラテ

ースとプラトーンのソークラテースとの結合せるものにして、『ファイド
ーン』篇は、ソークラテース的と云はんよりも、寧ろプラトーンの時代の
移れるものと謂ふべし。ソークラテースの審問及び死に關しては、キセ
ノフアインの記るせる所と、プラトーンの記るせる所と、大要相同じ、然りと
雖前者はソークラテース流儀の諷刺の趣味は全然之れを有せざるなり。

○

プラトーンのソークラテースの辯證は之れを三部に別つことを得べ
し。第一は辯證の本領、第二は刑罰輕減の短演説、第三は預言的譴責之れ
なり。

ソークラテース先づ自己の雄辯修辭等を能くせざること云ひ、自己
を告發責罪するものを分類して二種となし、其一種は輿論と稱する無名
の責罪者なりとし、第二種は自ら名乗り出でたる責罪者なりとす。而し
て其罪とする所は、第一ソークラテースは悪行者にして、又た天上地下を
探知するなる奇態の人物なり、又た惡をして善良なる道理あるが如く見
せしむることを爲し、之れを人に教ふる者なりと謂ふにあり、第二には、ソ

ソークラテースは悪行者なり、青年を腐敗せしむる者なり、國定の神々を信せずして、新神を輸入せるものなりと謂ふにあり。此後者は告發書中に實に記載せし所のものにして前者の如きは單に附加したる滑稽的のものたるなり。

ソークラテース之れに答へて其誤謬を一掃せんとす、而して先づ自己の「ソフィスト」と異なることを云ひ、又た自然哲學は其知らざる所なるを明かにし、決して是等の事を人々に教へしことなきを言へり。

次に何故に此くの如き惡名を被りたるかを説明せんとして、其原因は一種奇妙なる神命、即ちソークラテースは、世上第一の賢人なりとのとに基づくものなりとなせり。又たハイレフォンなるもの、デルファイ神社に至り、此神託の誤りなきやを質したることあるも、神託尙ほソークラテース以上の人他になしと答へたり。ソークラテース自身に在つても、亦た自己は果して眞に世上第一の賢人なるかを疑ひ、自己よりも賢明の人を發見して、往いて神託の誤謬なるを論破せんとして、種々の人々を訪問し、始めに政治家を訪問し、次に美術家、次に工藝家等を訪問したるも、皆な何

事も知る所なく、而じて彼等自らは知る者なりとせり、然るにソークラテ
ースは自己は何事をも知らざる者なりと雖、其何事をも知らざることを
知る點に於て彼等よりも賢なりと思はざる可からずとなし、此くて其一
生を、自ら以つて智者なりと稱する者を論破するに費やし、徒に人々の嫌
惡を買ふに至れり。又た富有の子弟等、ソークラテースが人々と議論す
るを傍聽して愉快を感じ、其論法を模倣して、往々、自ら智者なりと稱する
輩を論破することあるより、其論破されし人は、其論破したる青年を怨み
ずして、之れソークラテースの爲す所となし、以つて怨をソークラテース
に歸するに至り、愈々ソークラテースを惡むの情を増長せり。又た知識
教授を專業とせる人々は、ソークラテースを呼ぶに、或は青年を腐敗せし
むるものなり、無神論者なり、唯物論者なり、詭辯家なりとし、以つてソーク
ラテースに復讐せんとせり。之れソークラテースが其惡名を被るに至
りし第一の理由とせる所なり。

第二の非難に對しては、メレイトスと論辯しメレイトスに問うて曰く
「若し彼れ市民を腐敗する者なりとせば、市民を教育進歩せしむるものは

何人ぞや」と。メレトリス答へて曰く、「人間全體なり」と。ソークラテース
之れを以つて全然道理に合はず、又た全然反對の事なりとせり。

然りと雖メレトリスの告發書中の他の部分に於て、ソークラテースが
國定の神々を信せずして、新神を唱道することを云へり。ソークラテ
ース問うて曰く、「余は新なる神を云ふものなるか、或は全然神なしと云ふ者
なるか」と。メレトリス答へて、ソークラテースは全く神なしとするもの
なりとなし、又た異説を爲すものなりとなす。ソークラテース答へて曰
く之れ演劇にて、ソークラテースなる名稱の者が種々異説を爲すことを
仕組めるものありて、メレトリスは其演劇中のソークラテースなるもの
を取つて余と混同せるものなり、且つメレトリスの言語には矛盾ありと
なせり。

右の辯論を以つてメレトリスに對しては十分なりとし、本始の責罪者
に向ふべしとなして曰く、人或は云はん、ソークラテースは何故に身を死
に致さしむる所の業を務むることを主張するやと。ソークラテース之
れに答へて曰く、之れ神命に従ふものにして、宛もボチダヤ、アンフィポリス

及びテリウムの戦争に於て、將官か命に従ひ、其守るべき所を守りたるが如きなり、故に人の言に従はんよりも、寧ろ神の命に従ひ、徳義を説くことを止めざるべし、故に幾度の死に遭はんとも神命は之れを守ること力めん。

ソークラテース、人々か己れを死に處せざることを望む由を述べ、之れ自己一身の爲めより云ふに非ずして、彼等アテナイ人の爲めなり、何となれば自己は神命に由つてアテナイ人を刺撃奮勵せしむる天職を有せるものなること、宛も遅緩なる馬を活潑ならしめんが爲めに、之れと刺撃する所の虻の如きものなりとなし、自己を以つて神が國家に與へたる虻なりとなせり。而して今若し人々ソークラテースを殺す時は容易に他の此種の人を得ること能はざるべく、要するに彼等の爲めに不利なるべしとなす。人若しソークラテースに問ふに何故に政府に入らざるやを以てするものあらんには、彼れ答ふるに、若し政府に入る時は必ず正理の爲めに數多の人と戦ひ、必ず久しき以前に殺されしなるべく、毫も人々に利益することなくして終りしなるべく、又た神託も、政府に立つことを

制止せる由を以てせり。且つ彼れ二度公事に於て、正義の爲めに其生命を危うせしことあり——一度は將官を審問する時の不法に反對し、次に又た三十人政治の壓制なる不法命令に反抗したることありしを言へり。

官事に其身を委せざりしと雖、私人として其一生を費やし、人々を救へて而も報酬は之れを受くることなし。之れ彼れの天職なり。其門弟子中或は惡しき者となるものあらんとも、毫もソークラテースの罪に非ず、何となれば彼れ人を教へんと約束したることあらざればなり。人々がソークラテースに來るも去るも彼等の意のまゝなり。若し彼れ、青年を腐敗せしものなりとせば、青年自身に非ずとも、其父兄或は親戚來つて彼れの反對の位置に立ちて證人たるべき筈なりと雖、決して其事なく、却つて彼れの無罪の證人たらんとせり、之れ彼れは眞理を語ると雖、メレートの虚言を語るを以つてなりとなす。

之れ彼れの云はんとする所にして、決して裁判官に、其生命を助けんことを乞ふが如きことを爲さず、又た小供等を法庭に連れ來りて、人々の哀憐の同情を喚起し、以つて、死を免るされんことを哀願するの助けとなさ

んとするが如きは、其耻づる所なりとし、又た裁判官なるものは、人に正義を贈與すべきものに非ずして、法律に遵つて裁判すべきものなりとなす。ソークラテース素より死を覺悟し、寧ろ之れを望み居たりしなるべし。故に今や言語は決して調和の方針を取つて柔和とならずして、一層高峻且つ命令の趣を加へ來れり。アニュトスはソークラテースを死刑に處すべしとなせり。されども他に罪を購ふの提案はあらざるか。アテーナイ人の恩人たる彼れ、一生を善の爲めに費やしたる彼れは、必ずオリュンピア祭の競馬に勝ちし人よりも一層の尊敬を受けて、ブリュタチイオンの公會堂に公給さるゝを以つて當然となす。彼れアニュトスの提唱せし死なるものは果して善なるか悪なるかを知らざるを以つて、何ぞ之れに代ふるの代償を提出せんや。死に代ふるに入獄を以つてせんか、之れ惡なり、追放を以つてせんか、之れ亦惡なり。金錢を拂ふとは惡に非ずと雖、之れ彼れの有せざる所。或は一「ミナ」の金は之れを拂ふことを能くせん、若し之れ代償たるを得ば代償たらしめよ。然りと雖、彼れの友人等は、彼れに勘むるに三十「ミナ」の金を拂ふべし、而して彼等其贖人たらんと云へり。

辯論の後、投票に由つてソークラテースを死刑に處することに決定す。ソークラテース此事始めより期せし所なることを語り、且つ、彼れ已に老齡なるを以つて、アテーナイ人、彼れの數年の餘命を奪ふに於ては、不名譽の外、何物をも得る所あらざるべし。若し彼れ武器を投じ哀を乞ふに於ては死を遁れ得ざるに非すと雖、彼れ決して其喙々たる辯證を後悔することなく、寧ろ自己の方法に従つて辯論して死するとも、彼等の意に阿りて生きんことを欲せず。死は恐るゝ所に非すと雖、不正は之れを恐るゝなりと語れり。

今や死せんとするものは預言の力を授かるものなりとして言うて曰く、彼等告發人等は、ソークラテースを除く時は、以つて自己等の安全を得べしとなさん。然りと雖、今後彼れの門人等は、起つて大に彼等に反對を加ふるや、一層激烈なるべし、何となれば彼れ等青年客氣の者なればなりと。

死刑は素より決定せり。然りと雖、獄に入るの前尙ほ聊か時間ある可ければ、時間ある限りは、余の無罪を願ひし友人諸君と語り合はんとして、

其今回の死を撰びしは全く神託に由るものなるを告げ、又た死とは夢に由つて妨げらるゝことすらもあらざる安眠なるか、或は他界に行くことなるべしとなし、若し完全なる安眠の状態なりとせば、之れ最も願はじきことと云ふべく、又た若し他界に行くことなりとせば、古來の英雄及び大人物に面會して語り得るの樂しみありとなせり。

且つ曰く、生前死後善人に來るべき惡あるなし、故に彼等は余を殺すとも余は害されたりと思はず、敢て深く怨む所なしと。

最後にソークラテースが人々に依頼する所は、若しソークラテースの子等、成長して徳義を思ふことなく、たゞ金錢其他の事のみを念とする如きことあらんには、諸君願くば吾が子を罰すること、尙ほ余が諸君を罰したる如くせよと。

○

ソークラテースの辯證は、或は往々にして詭辯を弄せる所あり、又た裁判官を刺撃して之れを笑ふが如き趣なきに非ざるなり。然りと雖、ソークラテースは生死の如きは敢て之れを心に介せず、之れを以つて告發人

ソークラテース
の人物の偉大に
して權威を有せ
しこと

等を輕視し殆ど之れを嘲弄せんとするが如きものあるが如しとなす。且つ彼れ權威の人と雖、眼中敢て異ることなく、其偉大なる人格は一切の人々の上に在りて、宛然人間の王と云ふが如き有様なり。之れを以つて敢て裁判官を輕視嘲笑するに非ずと雖、又た其眼中何者にてもあらざりしなり。

ソークラテース、自ら無神論者に非ざる由を語り、又た神托なるものを語れりと雖、神の存在に關しては、此篇に於ては其思想十分明かならず、又た未來世界の觀念の如きも、靈魂不死を斷言せざるなり。(此點「フアイドロン」篇と趣を異にせり。) 此等の點に於てはソークラテースは大に自由思想家の如き觀ありとなす。

ソークラテースの嘲弄諷刺は、故意に之れを裝ふに非ずして、其性質より流出するものと云ふべく、此最後の紀念すべき大なる時に於てすら、決して減少することなくして、却つて自然の素朴なる状態を以つて大に其度を高めて發現せり。

短言以つて此篇のソークラテースを謂はど「最も弱かるべき時に勝利

ソークラテースの宗教に關する自由思想

ソークラテースの此場合の諷刺

悲壯なる偉觀

の頂上に達し、而も優に凡ての人類に卓越し、其慣用せる所の嘲弄諷刺は一種新なる意味を帯び來りて死の面前に悲哀の情趣を添えたるもの」と云ふべく、此場の光景全體は實に悲莊なる偉觀と謂ふべきなり。

告發人は眞理を
語らず

余は辯者に非ず

辯 証



呼アテ一ナイ人諸君、諸君が余の告發人等の演説を聴きて、果して如何なる感を有せしやに就いては、余のこゝに言ひ得ざる所なりと雖、彼等の、人を説服する所の辯舌は、殆ど余をして、余の何者たるやを忘れしむるの方ありて、其結果亦實に此くの如くなりしを知る。然りと雖、彼等は一語たりとも眞理を語らざりしことも亦余の知る所なり。其虚構の事の數多なる内、一事余をして非常に驚愕せしめたる所のものは、彼等が諸君に語る時、諸君を警戒し、余の雄辯に左右さるゝこと勿れと言ひしことなりとす。彼等は此の言を爲すに於いて、自ら耻辱と爲さずと雖、余にして一と度、口を開きて余の拙劣なる言語を爲すに於いて

雄辯の力に非ず
真理の力なり

凡理は雄辯なり
とせば余は雄辯
なり

美辭麗句を用
す

平常の會話を
用ゐん

は、彼等直に其の言ひし所の誤謬なりしことを看破さるべく、彼等若し雄辯の力なる語は、真理の力なることを意味するに非ざるよりは、彼等の行為は最も耻づべきものと云はざるべからざるなり。而して若し雄辯の力とは真理の力なることを意味するものならんには、余は自ら其雄辯なるを許容するものなり。然りと雖其雄辯の性質の、彼等の所謂雄辯とは如何に異なるものなるかを見よ。實に余の言ひし如く、彼等真理に關して一語たりとも之れを語るることなきに反して、諸君は余の口より全般の真理を聽くとを得ん。されども余の之れを語るに當つてや、決して彼等の爲すが如く、美辭麗句を以つて其言を裝飾し、以つて雄辯の演舌として之れを語るに非ざるなり。たゞ余は其瞬間に想ひ起こせし言語と議論とを以つてせんとせり、何となれば之れ最も正當なることなりと信じ、且つ余の如き年齢の者にして、嗚呼アテナイ人諸君、余は青年演舌家として諸君の前に現はるべきに非ざればなり、諸君幸に余に望むに演舌家を以つてすること勿れ。又た一事余の諸君に願はざる可からざることとは、余は從來、或は市場に於て、或は兩換店に於て、或は其他に於て使用するが如

余七十歳を越ゆ
法廷は初経験

き言語を使用するの習慣あるものなるが、今まこゝに余の辯證を爲すに當つても、亦數々之れと同様なる言語を用ゆることあるべければ、諸君は之れを聽きて之れに驚くことなく、余の辯證を妨害することなからんこと之れなり。余の齡今や七十を超えたり、而して法廷に出でたるは始めてなるを以つて、法廷に出で、言行するの作法を知らざるなり。故に諸君は余を見るに、外國人が自國の言語を使用するも、諸君は之れを寛假するが如くせんことを願ふものなり。而して之れ無理の願に非ざるべしと信ず。決して余の作法の弊惡を問ふこと勿く、たゞ余の辯論の正義のみを旨とし、此點に注意し、裁判官は正しく裁判し、辯論者は眞實を語ることを爲すべきなり。

告發人の種々

アニムトス其他

余は先づ以前より余を罪し咎めたる者、及び第一種の告發人等に答へ、以つて漸次に其後の者に及ばんと欲す。實に余は數多の誣告者ありて、久しき以前より余の罪を云ひ、其誣告は數年に互れるなり。余はアニムトス及び其徒を以つて、危険なる者なりとすと雖、彼等は又た其一種の手段を有せるを以つて、アニムトス等よりも又た一層恐るべき者となす。然り

ソークラテース
は不思議の人、
一種の投機者と
譯ひらる

ソークラテース
滑稽詩人

と雖尙ほ一層危険なる輩は、諸君等の尙ほ小兒なりし時、其虚欺を以つて諸君の心を奪ひ、此一箇のソークラテースを目して賢人なりとし、上は天を伺ひ下は地を探り、悪をして善良なる道理あるが如く見せしむること、を爲すものなりと言ひ挿むる者なりとす。是等の誣告者は余の最も恐るゝ所なり、何となれば彼等は此虚説の傳播者にして、之れを聞く者をして、此種の投機者は諸神を信せざる者ならんと想像せしむるに至るものなればなり。此虚説傳播者は其數甚だ少なからず。而して其余を罪するや久しき昔よりの事にして——諸君等尙ほ青年たり、小兒たり、而して彼等の言は諸君の心意に印象し易き時、——或は何者も答辯するものなく、訴訟は闕席裁判を以つて進行するを得る時に、彼等は余を罪し始めたり。而して其内最も強硬なるものは、意外なる滑稽詩人の事件の他、余は彼等の名を知らず又た語ることも能はざるなり。然りと雖是等誣告者の大部分は嫉妬及び悪意よりして諸君の感情に訴ふるものにして、其内或者は自ら信する所ありて、其所信を他人に傳ふることを爲せり。余は云ふ是等の人々は最も所置に苦しむものなりと。何となれば余は是等の人を

是種の誣告者と
戦ふは影と戦ふ
が如し

二種の反對者

余は辯解せん

誣告の趣原

メレイトスの口
供

盡く此に呼び出して之れを吟味すること能はず、余は余の自衛の爲めに、たゞ影と戦ひ、何人も答ふる者なくして之れを吟味せざる可からざればなり。諸君は、余を以つて二種の反對者を有せるものと見んことを願ふものなり、——即ち一は近來のものにして、他は昔よりのものたるなり。而して余が先づ、昔よりの反對者に答ふるは、正常なる順序なりと、諸君の承認せんとは余の希望する所なり。何となれば是等の誣告に就いては、諸君は他の者よりも長き以前に、且つ一層數々聽きし所なるべければなり。扱て余は今ま短少なる時間を以つて、諸君が余に對して爲したる長年月間の讒誣を一掃せんが爲めに辯證を試みんと欲す。而して若し此の事諸君及び余に宜しくして、余の言ふ所若し諸君の愛を受くるに足るとせば余の辯證の成功せんことを希望す。然りと雖之れを爲すは容易の事に非ず、——余は能く此事の性質を熟知せり、故に余はたゞ之れを神意に任せ、法律に従ひて辯證する所あらんのみ。

余は事の始めより論じ、而して余に對する誣告を起こすに至りたるは何事ぞや、又た何事かメレイトスを激勵して余に反對するに至らしめし

アリストテレスの滑稽劇とソークラテースの奇譚

ソークラテースも自然哲學に關せず

や、曰はん。彼等は余の告發人なり、而して口供に於ける彼等の言を約述せんに、曰く「ソークラテースは悪事を爲す人なり、又た奇怪なる人にして、地下地を探り、土は天を伺ひ、能く悪をして善たる如く見せしむること、を爲し、又た此教理を他人に教ふる所の人なり」と、之れ實に告發の性質にして、又た諸君等が實にアリストテレスの滑稽劇に觀たりし所のものなり。此滑稽劇はソークラテースなる一人、諸所に徘徊し、自ら空中を歩み、其ことを言ひ、又た余の毫も知らざる所の事に關して、無意味の事を語るやう仕組めるものなり。——實に余は自然哲學の學者中、何人をも之れを嘲謗したるに非ざるなり。然りと雖若し、メレトスにして此點に關して我を罪せんとするものならんには、余は實に之れを悲しむものなり。然りと雖、あくアテーナイ人諸君、單純なる眞理を云はんには、是等の學問は毫も余の關せざる所たるなり、今日此に傍聽せる多數の諸君は余の此言の眞理なるを證明するの人たるべく、之れ又余の諸君に訴へんとすべし。所たるなり。余の此言を聽きし者は、諸君の鄰人知人に就いて、余が思ふに多少なりとも此種の事に關して説を爲せしことを知る者ありや否

余は金銭を食りし
しこのことは基礎なき言

多くの「ソフィスト」等は報酬の多額を要む

パロス島の哲學者のエピノス

やを問へ。……諸君は彼等の答ふる所を聴き、而して此事に關して、彼等の答ふる所に據り、諸君は其他の事の眞理なるを判断するを得べし。余が自ら以つて教師なりとして、金銭を食りしこの報道に關しては、毫も基礎あることなく、他の事と同じく、決して眞理に非ざるなり。素より能く人を教へ得る人は余は之れを敬し報酬を取るを不可とせざるなり。乃ち彼のレオンテオン人ゴルギアス、ケオーース人プローヂコス、エリス人ヒッピアス等は等諸大家は諸都市を巡回し、青年を説きて、其都市の人物等は到底何事をも彼等青年に教へ能はざる者となし、彼等青年をして自己の都市を見棄て、而して彼等に隨從せしむ。而して彼等青年は多額の金銭を彼等に拂ひ、又た之れを拂ふことの承諾を得るを以つて大なる名譽として之れを感謝すること爲せり、現にパロス島の哲學者來つてアテナイ市に住せるあり、余は彼れに關して聞きたることあり、而して此の哲學者に關して聞きたるは此くの如き場合なりき——一日余は「ソフィスト」の爲めに巨額の金銭を消費したる一人即ちヒツポニコスの子なるカリッアスなるものに會へり。余はカリッアスは子息ある人なるを知れるを以

巨額の報酬

ソークラテース
告發されたる原因

つて問うて曰く「ガリアスよ、若し君の子息にして馬の子或は牛の子ならんには、是等を制御し、是等を飼養するのを得るには、毫も困難なることあらずして、吾等牧馬者或は農夫を備はぶ十分にして、彼等能く是等を飼育し、其の固有性に従つて是等を善良にし、又た完全ならしむべし」と雖、君の子息は人間なるを以つて其如くなすべからざるなり。君は何人を以つて子息の教訓者となさんとするか。何人か人間及び政治上の徳義を知られる者やある」と。彼れ答へて曰く「有り」と。余曰く「其人誰をや。何れの人にして、又た其報酬は幾何を要するや」と。彼れ答へて曰く「エエノスと云ひパロス島の人なり。而して其報酬は五^{ミナ}なり」と。余は自ら謂らく、若し彼れ真に此知識を有し、而して此くの如き丁重なる報酬を受くるとせば、幸福なるはエエノスなるかな。若し余にして同様ならんには、余は極めて之れを自慢して傲然たりしものをと。然りと雖、あゝアテナイ人諸君、余は此種の知識を有せざるなり。

余は敢て云はん、或者は此く疑問するならんと。曰く「ソークラテースよ、元來こは何故ぞや。君の告發せられたる其原因は何事ぞや。君の言

ソークラテース
賢人の名聲の原
因

ソークラテース
の一種の智慧

行中必ずや一種人と異なるものありしなるべし。若し君にして世人と同様なりしならんには凡て此の高名なること、及び君に關する喧しき世評は起らざりしなるべし。此事に就いて語る所あれ。吾等君に關して速断を下すことを好まざるなり」と。余は此言を以つて一種の挑戦なりとなす。而して余は今ま此の「賢人」と云へる名稱と、好ましからざる高名との起りたる理由を諸君に説明すべければ願くば傾聽する所あれ。諸君の内或は余を以つて戲言を爲せるものなりと思ふ者あらんと雖、余は全く眞理を諸君に語ることを宣言する者なり。アテライナイ人諸君、余の此名聲は余の有せる所の一種の智慧より來りしものたるなり。而して諸君若し此智慧の如何なるものなるやを問ふことあらんには、余は答へん、此くの如きの智慧は人間の得能ふ所のものにして、此智慧の範圍を以つて云ふ時は、余は賢人たるを信するの傾向を有せるなり。然るに余の就いて與に語りし所の人々は人間以上の智慧を有せる人にして、余自身は、此智慧を有せざるを以つて、余は之れを説述すること能はざるべし。然るにかの、余を目して此智慧を有せりとなす者は、彼れ虚言せるなり。

ソークラテース
の言の證人はデ
ルフオイの神

ハイレフオンと
デルフオイ神託

ソークラテース
の神託
世上賢の人と

又た余の性質を毀損せんとせるなり。嗚呼アテイナー人諸君、今ま若し余にして聊か方外の事を言ふが如きことありとも、諸君は余の言を妨害せずして靜聽せんことを請ふ。何となれば、余の語らんとする所の言は余の言に非ざればなり。余は十分信するに足る所の證人を諸君に立て、而して余の智慧なるものに關して、—余は果して何等かの智慧を有せるか、又た其智慧は如何なる種類のものなるかを諸君に語るべし—而して其證人はデルフオイの神たるなり。諸君はハイレフオンなる者を知らん。彼れ初め余の友たり又た諸君の友たりき、何となれば彼れ人々と共に追放の身となり又た諸君と共に歸り來れる人なればなり。此ハイレフオンは諸君の知れる如く、其一切の行爲に於て急激なる性質の人なり—而してここに余が言ひしが如く、諸君は余の言を妨害するとなき余の言を聽かんを諸君に請はざるを得ざるなり—彼れ自らデルフオイ神社に參詣して、神託を請ひ、余よりも賢明なる人果して世上に有るとなきや否やを彼れに明かさんとを願へり。然るにピュテオスの女預言者答て曰く、ソークラテースに優れる賢人他に有る無しと。ハイレフオンは既に死せ

ソークラテース
至賢の意味

神託の眞偽を試
験するの一方方法

政治家を訪問す

る人なりと雖、其弟今ま此法庭にあり、彼れ此話の眞實なるを證明せん。余が此話しを此に述ぶるの理由たる、何故に余が此くの如き惡高名を得たるやを説明せんとするにあるを以てなり。余がデルファイ神女の答言を聽きし時、余心に謂へらく、神の意味せる所果して如何ん、又た此の隱語は如何に解釋すべきやと。何となれば余は大となく、小となく、此くの如きの智慧なるものを有せざることを知ればなり。かのデルファイの神が余を謂うて世上最賢の人と言ひし其意味果して何處にかある。而して彼れは神なり詐りある可からず、詐るは神性に反す。而して余沈思熟考之れを久うして此疑問を試験するの一法を考案せり。余心に謂へらく、若し一人なりとも余よりも賢明なる人を發見することを得ば、余は手に攻撃を持して神社に參詣して神に向つて此く云はん、「余よりも賢き人此ここにあり、然るに爾御神は余を以つて至賢の者と乃玉へり」と。是に於て余は知識を以つて有名なる或人を訪問せり、其の人の名は此に云ふの要なし。而して余がこゝに試験せんとして撰擇したる人は政治家なりしが、其の結果は要するに此くの如くなりき。——彼れ多數の人々より智

其人實際智者に非ず

ソークラテースが其人に優れるは自己の無知を知るにあり

他數人を訪問して皆怨恨を買へり

者なりと思はれ、又た彼れ自身は、人々が智者なりと思ふよりも一層自ら智者なりと思へりと雖も、余彼れと談話を始むるに於ては、余は彼れを以つて、實際智者に非ずと考へざるを得ざりしなり。此に於て余は彼れに説明するに、彼れは自ら以つて智者なりと思ふと雖、其實智者に非ざることを以つてせり。而して其結果たるや彼れは余を嫌ふに至り、又た彼れと共にありて吾等の談話を聴き居たる數多の者も亦彼れと共に余を怨むとなれり。而して此く思ひつゝ彼れの許を辭し去れり——余は吾等兩人共、善美に關して眞に何事も之れを知れりと想像せずと雖、余は彼れよりは優れるの點を有せり。何となれば彼れ何物をも知る、ことなくして自ら之れを知れりと信じ、余は何物をも知らず、又た知れりとも考へざればなり。故に此點に於て余は聊か彼れよりも優れる所あるが如し。此くて余は又た他の一層高尚なる哲學を有せりと云ふ所の人物を訪問せり、然るに其結論は全く前の如くにして、余は又た彼れ及び彼れと共に人々を敵として持たざるを得ざるに至れり。

此後余は尙ほ一人より他に及び順次に有名なる人物を歴訪せり、而し

ソークラテース
神の使會

最も有名なる人
は最も愚昧のもの

ソークラテース
の「ヘーラクレス
」的勞苦

政治家、詩人、悲
劇家、宴樂詩家、
及び其他を訪問
す

て彼等に怨恨を喚び起こしたるは之れを知らざるに非ず、又た之れを悲しみ之れを恐れたり。然りと雖余は必然の下にあり——謂へらく神の言語は先づ之れを心とせざる可からずと。而して自ら云うて曰く、余はかの知れる所あるが如き一切の人々を訪問し、以つて神託の意味を見出さざる可からずと、アテーナイ人諸君、余は諸君に誓はん、余は犬なる神かけて誓はん、——何となれば余は眞理を語らざる可からざればなり——余の使命の結果は正に此くの如くなりき、——最も有名なる人々は最も愚昧なるものにして、所謂劣れる所の人々は、寧ろ眞に賢にして優れることを余は發見せり。余は自己の此の苦心慘憺たる東奔西走の歴訪を稱して「ヘーラクレス」的勞苦と謂ふ、勞苦に堪わて遂に神託の詐らざるを發見せり。余は今ま此歴訪の談話を試みんか。余は諸政治家を訪問したる後、詩人を訪問し、悲劇詩家、宴樂詩家、其他一切の種類の詩人を訪問せり。時に余は自ら自己に謂うて曰く、ソークラテースよ、汝は必ず論破さるゝならん、此の度こそ汝は彼等よりも感なることを曉るべしと。是に於て余は彼等の作る所の、秀逸中の一篇を選びて、其の詩は果して何を意味せるやを

詩に就いて問答す

詩人は自ら自己の作を説明し得ず

彼等に問へり。余の彼等に問ふは彼等必ず何事か余に教ふる所あらんと信じたるを以つてなり。諸君余の言を信するか。余は殆ど此事を言ふを耻づ、然りと雖余の言はざる可からざることば、今ま此の處に在る人々にして、彼等詩人の詩に關し、作者たる詩人其人よりも、優りて善く言説し得ざる人は殆ど有らざるとなり。之れ詩人なるものは、自己の智慧を以つて詩を作るに非ずして、一種の天才及びインスピレーションに由るものたるを示めすものなり。詩人なるものは、卜筮者及び預言者が、又た多くの美麗なる言語を爲し、而も其の言ふ所は自己は之れを解せざるが如きなり。詩人は此くの如きことの其多大なるものゝ如し。而して余の尙ほ進みて觀察したる所は、彼等他の事に於ては、賢ならずと雖、詩の勢力に於ては、彼等は人間中最も賢なるものなりと自ら信せるととなす。此くて余は彼等の許を辭じ、余が曩に政治家等と談話して、自己は彼等よりも優れるものなりと思ひたると同一の理由を以つて、余は是等詩人よりも賢なりと思ひつゝ歸へれり。

終に余は工藝家を訪問せり。何となれば余は常に言ふが如く、自ら何

工藝家も然り

事をも知らざることを知り、且つ彼等は多くの美なる事物を知れることを確知すればなり。果して誤らず、彼等は余の知らざる所の多くの事を知れり、而して此點に於て彼等は余よりも賢人たりしなり。然りと雖余は最も巧妙なる工藝家と雖、又た詩人と同一なる缺點を有せることを觀る。何となれば彼等は善良なる工藝家にして、又た自ら一切の高尙なる事を知れりと思へるを以つてなり。而して彼等の此缺點は彼等の智慧を遮ざり蔽へり。—故に余は神托の爲めに自ら心に問うて曰く、余は從來ありしまゝに、彼等の知識も有することなく、又た彼等の無智をも有することなかるべきか、或は彼等の如く知識と無智と兼ねて之れを有すべきかと。而して余は自己及び神託に答へて曰く、余は從來のまゝなるに若かずと。

此の穿鑿は余をして最も不良なる又た最も危険なる多くの敵を作らしめ、又た多くの讒構をして起らしむるに至れり。而して余は賢人なりと稱せらる、之れ余の談話を聽く者は、余が他人より求め出さんとせる所の知識を、余自ら之れを有せる者なりと想像せるに由る。然りと雖アテ

神託はソークラテースのみならず、自己の無智を知るもの、凡てに應用するものなり。

余の摸倣者人を論破し、怨は余に歸せり。

「ナイ人諸君、真理は、たゞ神のみ賢なりと云ふにあり。而して其神託に於て神の意味せる所は、人間の智慧なるものは、微少謂ふに足らず、或は殆ど無の如きを云へるものなり。神は特にソークラテースに就いて云へるに非ずして、神はたゞ説明の爲めに余の名を使用し、此く言ひしが如きなり、曰く、——あゝ人間よ、ソークラテースの如く、自己の智慧は眞に何物にてもあらざるとを知る所の者は、最も賢明の人なりと。此くて余は神命に従つて余の爲すべき所を爲し、アテーナイ人たれ、或は他國人たれ、苟も智者らしく見ゆる所のものは何人たりとも、一々其智慧の討究を爲し、若し彼れ智者に非ざる時は、神託を保護せんが爲めに余は彼れの智者に非ざること證明せり。而して余は之れを爲さんが爲めに全身を之れに投じ、爲めに公私の事一切之れを爲すの時間なく、全く我身を神に捧げ、爲めに余は赤貧洗ふが如きの状態に在り。」

尙ほ他のものゝあるあり——即ち富有社會の青年之れなり。是等は別に何事もあらずして、たゞ自ら好みて、余が、かの自ら智者なりと稱する者を試問するを傍聴し、余の爲す所を摸倣して、彼等自ら之れを他人に試み

敗北者の醜態

ることを爲せり。素より自ら或事を知れりと思へるも、實は知る所甚だ少きか、或は全く知る所なきかの人寡なからずして、其無知なることは容易に看破されしなり。而して彼等青年に試問論破されたる所の人々等は彼等青年を怨みずして、余を怨み、而して曰く、此の攪亂者ソークラテース、青年を認る所の不良なる指導者と。——若し人ありて彼等に問うて、何ぞや、彼れ果して如何なる悪を實行したりやと云ふ時は、彼等之れを知らず、之れに答ふると能はざるなり。然るに彼れ敗北と見られざらんが爲めに、彼等一切の哲學者に加へし所の即製の攻撃を直ちに吾等に加へ、吾等を以つて、雲上の事及び地下の事を教ふる者なり、無神論を爲す者なり、悪をして善と見せしむる者なりとせり。實に彼等は其知識ありとの虚託の看破されしを自白するを好まざるを以つて此くの如きの舉に出づるなり——之れ眞實の事なり。而して彼等は其數甚だ多く、且つ野心あり又た氣力に富み、殆ど戦闘の準備を爲し、又た人を説伏するの辯舌を有し、遂に其高聲且つ撒揚なる譏搆を以つて諸君の耳を充たせり。而して之れメレートス、アニュトス、及びリユコーン等の三告發者が余を攻撃するの理由

メレートス、ア
ニュトス、リユ
コーン

たるなり。メレートスは詩人の事に關し、アニュトスは工匠の事に關し、リュ
 コーンは修辭家の事に關して余と争ひし人なり。而して余は始めに云
 ひし如く、一時に此の讒搆の一大塊團を除き去ることは之れを望み得ざ
 るなり。嗚呼アテーナイ人諸君、之れ眞理なり、全眞理なり。余は何事を
 も隠蔽するなく、又は何事をも虚飾するなし。然るに此く飾りなき言語
 は彼等をして余を嫌はしめしことを知る。されども彼等が余を嫌ふは
 却つて余の眞理を語るの證たるに非ずして何ぞや。之れ彼等が余を誣
 ひし所の原因及び理由にして、諸君は此吟味或は將來の吟味に於て此事
 を發見すべし。

第二の告發人等

余は此く第一の階級の告發人等に對する辯證は十分之れを爲せり、今
 や次に第二の階級の告發人乃ち善良なる愛國者なりと自稱せる所のメ
 レートスの引率せる人々に對して辯證する所あらんとす。彼等の口供
 を讀め、大要此くの如きことを含めり、曰く、ソークラテースは惡行者なり、
 青年を腐敗せしむる者なり、國神を信せずして自家の新なる神を唱道す
 る者なりと。之れ彼等の余に擬したる所の罪名なり。余は今ま逐條其

眞否を討究すべし。彼れ余を以つて悪行者なり、青年を腐敗せしむるものなりとせり。然りと雖あゝアテーナイ人諸君、メレートスこそは眞の悪行者たるなれ。其悪行たる、彼れ嚴肅なる事物を遊戯の如く所理し、自己は實際何の熱心も、毫毛の利害の感をも有せざる事に關し、さも熱心と利害を感ずる心ある者なるかの如き偽善よりして、輕々しく他人を訴へて審問を受けしむるなり。此事に關する眞理に就いては余は其證明を力むべし。

來れ、メレートス、余は君に關して問ふ所あらん。君は青年の教育及び進歩に就いて大に心を用ゆる所あるか。

然り、余は大に注意せり。

然らば其教育者は何者なるやを裁判官に告げよ。君は必ず知る所なるべし。何となれば君は其の腐敗せしむる者を發見せんが爲めに苦心し、而して彼等の面前に余を呼び出だし、余を責問せんとすればなり。青年を教育進歩せしむる所の者は果して誰ぞや、之れを裁判官に告げよ。メレートスよ、君は無言にして、言ふ所なし。寧ろ之れ耻辱にして、余が君

ソークラテースを除きて他一切の人は青年を進歩せしむるもの

を謂うて此事に關して毫も利害を感ずる心なしと云ひし有力なる證據には非ざるか。友よ、語れ。余に其の青年を進歩せしむる人の姓名を告げよ。

法律なり。

然りと雖善良なる君よ、此は余の間ひし所の意味に非ず。余の間ふ所は其人は何人なりやと云ふにあり。先づ法律を知れる者は誰れぞ。

ソークラテースよ、現在法庭にある所の裁判官諸子之れなり。

メレートスよ、何とか云ふ、君は是等裁判官は能く青年を教育し、進歩せしむることを爲すと云ふか。

然り彼等之れを能くす。

何とか云ふ。一切の裁判官之れを能くするか、或はたゞ或者は之れを能くすと雖、他は之れを能くせずと云ふか。

彼等凡て之れを能くす。

ヘーラの女神に神かけて、あゝ善き奇聞なるかな。扱ても教育者の饒多なることよ。君又た傍聴者に就て如何に云はんとするか。此等の

扱ても教育者の饒多なることよ

々も亦青年を進歩せしむるものなるか。

然り進歩せしむ。

而して元老院議員も亦然るか。

然り元老院議員も亦青年を進歩せしむ。

然りと雖公民議會議員は或は青年を敗腐せしむるを爲さざるか—

或は彼等も亦た青年を進歩せしむるか。

彼等も亦進歩せしむ。

ソークラテース
一人のみ人を腐
敗せしむ

然らばたゞ余一人を除くの外一切のアテライ人は盡く青年を高尙
にし、進歩せしむるものにして、たゞ余一人は青年を腐敗せしむるものな
るか。之れ君の斷言せんとする所なるか。

之れ余が力を込めて斷言する所なり。

若し之れ眞なりとせば、余は甚だ不幸の者なるかな。然りと雖今ま假
定して余は此く問ふとせんか、曰く君は馬の場合に於ても此事眞なりと
するか。たゞ一人のみ是等の馬に害を加へ其他一切の人々は善を爲す
か。寧ろ其正反對は眞理には非ざるか。乃ち、一人或は少なくとも少數

諸動物の場合に
ては正反對

の人善く馬を扱ふと雖、他の者にして馬を扱ふに於ては、却て之れを害するとはあらざるか。メレートスよ、之れたゞ馬のみに止まらず、又た他の動物に就いても然らざるか。余は云はん、君及びアニトス、たゞひ然りと云ひ又た否と謂はんとも之れ余の關する所に非ず、余は以つて確かに然りと爲す。若し青年にして單に一人のみの腐敗者を有し、其他一切の人々は皆な之れを教育進歩せしむるものならんには、實に之れ至幸と謂ふべきなり。而してメレートスよ、君は決して青年に就いて何の考ふることもなきは十分此くて證明されたり。君の輕忽なることは此の告發書中に云へる所の事に關し、毫も注意なきことに由つて十分之れを知るを得べし。

メレートスよ、余は今ま他に質問すべきことあり——乃ち不良なる人士中に生活すると、善良なる人士中に生活すると、果して何れか善なりや、余は云ふ友よ、答へよ。之れ容易に答へ得べきことたるなり。善人は其隣人を善良にし、不善人は其隣人を不善とするに非ずや。

然り。

隣人に害を爲す
は自己に害を爲す
すものなり故に
余は故意に人を
害せず

人は共に生活する多くの人に由つて利益さるゝよりも寧ろ害さるゝを好むものなるか。法律は君の答へんことを要求す。——何人か害さるゝことを好むものやある。

決してなし。

而して君が余を以つて青年を腐敗せしめ、又た不良ならしむるものとなすや、余は故意に之れをなすものなりと斷言するか。

然り、余は云はん、故意になすものなりと。

然りと雖君は今ま許容すらく、善人は其隣人を善ならしめ、不善人は其隣人を不善ならしむと。而して此真理たるや、之れ君の優秀なる智力が、其年齢の若きにも係はらずして能く之れを認知し、余は此の老齡を以つてするも、尙ほ此くも暗愚にして、之れを知る能はず、乃ち若し余の與に生活せんとする所の人は、余の爲めに腐敗されたりとせば、余は素より彼れに害さるべき者なるに、却つて余は彼れを腐敗せしめ、而も又た故意を以つて之れを爲すものなりとするか。之れ君の言へる所にして此事に關しては君は未だ余及び其他何人をも説伏せざる所のものなり。然りと

告発の前何故に
庭は教育の場所
に非ず刑罰の場
所なり

雖余が彼等人々を腐敗せしめずとするも、又た意志なくして腐敗せしめたりとするも、何れにするも君は虚欺せることを免れざるなり。若し余の犯罪にして無意志なる時は、法律は無意志の犯罪を認めざるなり。若し余過つ時は君は先つ一箇人として余に警戒し、忠告する所あるは當然たりしなり、何となれば若し余にして意志なくして爲し居りしことならんには、君の忠告を受くる時は、直に之れを改め以つて君の忠告に従ふべければなり。然るに君は余と談話すること及び教ふることを嫌ひて余を法庭に告發せり。而して法庭は教育の場所に非ずして刑罰の場所たるなり。

アテーナイ人諸君、余が今ま言ひし如く、メレイトスは、此事に關して、たとなく、小となく、一切の事全然不注意なるは此くて十分に知るべきなり。然りと雖、メレイトスよ、君は余を以つて青年を腐敗せしむるものなりと断定するに至りたるの理由は余の知らんと欲する所なり。君の告發書に由りて推論する時は、余は青年に教ふるに國家の認定せる諸神を信せずして、之れに代ふるに新神或は靈體を信せんことを以てするものなり

新神を唱進する
の證據を求む

とせるが如し。是等は君の言へるが如く青年を腐敗せしむる科目なりと謂ふものゝ如し。

然り余は力を込めて然りと云はん。

然らばメレイトスよ、吾等が今語れる所の神かけて、今一層平易なる言語を以つて、君は果して何を意味せるやを、余及び法庭に告げよ。何となれば君は余を以つて、人に教ふるに他の或神々を信すべきを以つてする者なり、故に全くは無神論者に非ず——此點に就て君は余を罪するに非ずして、余の云ふ所の神々は、アテーナイ市の認定せる所のものと同一なるものに非ずとするにあるべく——罪する所は異なる神々を謂ふにありとするものなるべし。若し夫れ然らずとせば、君は余を以つて單に無神論者となし、無神論の宣傳者となすにあるか。

余は後者を意味す——君は全然無神論者なりと云ふにあり。

メレイトスよ、此は之れ方外の言なるかな。君は何を以つて之れを言ふか。君は余を以つて萬人の信する所の太陽或は月の神性を信せざるものなりと云ふか。

余を以て無神論者とするか

メレートのスはソ
ークラテースと
アナキサゴラス
の説とを混同す

裁判官諸君、余は確言す、ソークラテースは是等を信せざるものなりと。何となれば彼れは曰く、太陽は石なるのみ、月は土塊なるのみと。

友なるメレートのスよ、思ふに君はアナキサゴラスを責むるものなるが如し。且つ君は此くの如き學説は、クラゾメナイ人アナキサゴラスの書中に散見する所にして、裁判官は此の事を知らざるものなりと想像する時は、君は裁判官より不評判を得べきなり。而して此の學説たる、數々興行さるゝ所の演劇中、ソークラテースなる名稱の人より、青年の學ぶ所のものなりと仕組めるものにして、(入場料最も高く見て「ドラフマ」なり)。而して此くの如き極端説をソークラテースに嫁せんと欲する者は、錢を拂ひて其演劇を見物し、又たソークラテースを笑ふことを得べし。而してメレートのスよ、君は眞に余を以つて如何なる神をも信せざるものなりとなすか。

ゼウスの神に誓つて云はん、君は全然如何なる神をも信せざる者なりと。

メレートのスよ、君は實に詐欺者にして、何人も君を信する者なく、君自己

神の事蹟を信ず
る者にして神を
信せざるを得る
か

にすらも信用されざるものなり。あゝアテーナイ人諸君、余は、メレイトスは無思慮破廉耻なるものにして、其告發書なるものは、たゞ之れ青年の血氣に驅られて草せしものなりと考へざるを得ざるなり。彼れ或は余を試みんとして一種の謎語を調合したるには非ざるか。彼れ或は心中に云はん、余は此の賢なるソークラテースは果して能く余の巧妙なる矛盾を發見するを得るか、或は余は彼れソークラテース及び其他の人々をも欺くことを得るかと。何となれば余の見る所を以つてする時は、其告發書中、ソークラテースは諸神を信せざるの罪科あるも、又た彼れ神を信せるものなりと言ひしが如き矛盾あるが如きを以つてなり。——然りと雖此は必ず一種の戲謔に過ぎざるべし。

あゝアテーナイ人諸君、余の諸君に願ふ所は、諸君は余と與に、余の以つてメレイトスの矛盾とせる所を吟味し、而して汝メレイトスは之れに答へんとなり。又た諸君に一言爲し置かざる可からざることば、余が常に慣用する方法に由つて談話する時、余の談話を妨害せざることとなす。メレイトスよ人事の存在を信する者にして、人間の存在を信せざる者

ありや如何ん。アテーナイ人諸君、余は彼れが答辯を興へ、而して常に余の言語を妨害せんことを力むるなきは余の願ふ所なり。何人か馬術の存在を信すと雖、馬の存在を信せざる者あるか。吹笛術は之れが存在を信するも吹笛者の存在は之れを信せざるものあるか。否。我友よ君は自ら答辯するを嫌ふを以つて余は君及び法庭に向つて答へん。何人も此くの如き信仰を有せる者なしと。然りと雖願くは次の疑問に答へよ、曰く、人は精靈及び神の事業は之れを信すと雖精靈或は神人は之れを信せざるものあるを得るか。

否な。

余は法庭の助力に由つて此答辯を引き出だし得たるとを喜ぶ。然りと雖君は其告發書中、余が神或は精靈の事業(其古きと新なるとは問ふ所に非ず)あるを教へ、又之れを信するものなることは、之れを誓へるものにして、鬼にも角にも余は精靈の事業を信せると、君の口供に誓ひたるが如きなり。然りと雖若し余にして神聖なる諸存在者を信すとせば、又た精靈或は神人を信せざるを得ざるなり——余果して信せざるを得るか。

神一人を信する
ものは其父たる
神あるを信せざ
るを得ず

然り信せざるを得ず。而して君の静黙は之れに承認を與へたるものなりと解することを得るなり。然らば精靈或は神人とは如何なるものぞ。是等は神々或は神裔には非ざるか。之れ真に非ざるか。然り其は真なり。

然りと雖之れ余が前に言ひし所の謎語なるものたるなり。乃ち神人或は精靈なるものは又た同じく神にして君は始めに余を以つて諸神を信せざる者となし、今また諸神を信するものとなせり——即ち之れ余が神人を信すればと云ふに由るなり。何となれば若し神人なるものは諸神の正統ならずして、或はニムフ或は其他の母より生れたる者なりとするも、必ず其兩親の存在に考へ及ぶことは萬人の然りとする所なり。君は或は騾馬なるもの、存在を確知して而も其兩親たる馬及び驢馬の存在を否むものなり。メレイトスよ、此くの如きの愚は、余を審問せんとして、たゞ君の如き人のみ能く之れを爲す者なり。君が此くの如きことを告發書中に書き入れしは、真に余を責むべき罪なきが故なるのみ。然りと雖尙も理解力の一分子なりとも有せる者は、神聖且つ人間以上の事あり。

るを信ずると雖、而も諸神、神人及び英傑等の存在を信せずと云ふが如き君の論には、何人も服することあらざるべし。

メレートスの以つて余を罪せんとする所に對しては已に十分に論じたり、此他精密なる答辯の要あるとなじ。然りと雖余は前に云ひしが如く、甚だ多くの敵を有せり、若し余にして、彼等の余を破滅せしむるに任せば、余は彼等の破滅する所となるや必せり。メレートスに非ず、アニュトスに非ず、世間一般の嫉妬と讒構とは、從來多くの善人を殺したる所のものにして、今後も尙ほ多數を殺すことを爲すべく、余は其最後の者たるの危難は之れ有らざるなり。

或者必ず言はん。ソークラテースよ、汝は此く時ならざる死を遂ぐることを耻ぢざるかと。余は此く答へん、曰く君は犬に誤れり、何事にか善良なる人は、決して生死の偶然なるものを計算すべきに非ずして、たゞ自己の爲したる事は、正なるか、邪なるか——善人の爲すべき所を爲したるか、悪人の爲すべき所を爲したるかを考慮すべきあるのみ。若し君の見解に従ふ時はトロヤ戦争に死したる諸英雄の如きは毫も善きことなすと謂

嫉妬と讒構とは
多くの善人を殺
したり

死何ぞ恐れん、
たゞ不名譽を恐
る。

はざる可からず。殊にテーチスの子の如きは、不名譽に比する時は、危難の如きは恐るゝ所に非ずとせり。而して彼れヘクトールを殺さんと熱中せる時、母なる女神彼れに謂うに、若し彼れ、其友バトロクロスの爲めに、ヘクトールに復讐せんとせば、自己も亦死せざる可からざるを以つてして曰く、「今若しヘクトールを殺すに於ては、運命は次に又た汝を殺さん」として待てるなり」と。彼れ此言を聴きしと雖、危難も死も毫も之れを恐れず、たゞに之れを恐れざるのみに非ず、其友の爲めに復讐するとなくして、不名譽にて生存せんことは寧ろ其恐るゝ所たりしなり。故に彼答へて曰く、「然らば余は、直に、敵に復讐されて死せん。徒らに此鬭角ある船の傍に生存するは、之れ世人の笑柄なり、又た之れ此地上の卑しむべき重荷たるなり」と。アヒレウス果して死及び危難を思ひしとやある。苟も人の居るべき所——自ら撰びたる所たれ、或は命令者に由つて置かれたる所たれ、一旦危急に際しては、必ず當に此に留まるべきなり。此くの如きの人物は死或は危難等は決して之れを心に介せず、たゞ不名譽を之れ恐るゝなり。あゝアテーナイ人諸君、之れ實に真正の言たるなり。

戰場に死を恐れ
ざりしソークラ
ブリス瑪んが其
他を恐れん

死は最大善たる
やも知れず

嗚呼アテーナイ人諸君、若余にして、ポチダヤ、アムノイポリス及びデーリオン等の戦争の時、余等を命令する爲めに諸君の任撰せる大將に指令されし時、余は其守衛地を守り、人々の如く死に面して恐れざりし余にして——若し、今ま余の思想するが如く、神は余に命じて哲學者の任務を守らしめ、自己及び他人を討撿せしむるに當り、死或は其他の恐懼の念に由りて余の守衛地を棄つる如きことあらんには、實に余の行爲は奇異なりと云はざる可からざるべし。而して若し余にして死を恐るゝより神託に従はず、自ら賢者に非ずして賢者なりと想像するに於ては、余の行爲は實に奇異と謂ふべく、又た余は神の存在を信せざる者なりとして當然法庭に召喚さるべきなり。實に此の死を恐るゝの念は、智慧の虚託にして、眞の智慧に非ず、知らざることを知れるが如く思ふなるのみ。人は其恐懼の念よりして、死を以つて最大の惡なりと思ふと雖、其或は最大善たることなきやに至ては知る者絶わてあることなし。之れ知識の一種の自慢心にして、無智無學の最も不名譽なるものに非ずや。思ふに此點は余が一般の人間に優れる所にして、此點に於て恐くば余は自ら他人よりも賢なり

と想像し得る所以なりとす。——然るに未來界のことに至つては余は殆ど知る所なく、又た知れりと思ふことなしと雖、自己に優れる者——其者神たりとも人たりとも——之れに不正義を行ひ、又た従順ならざるは、之れ不善たり、又た不名譽の事にして、余は確實の惡よりも、寧ろ有り得べきの善を恐れ、或は避くるとは決して之れを爲さざるなり。故に諸君若し今回は余を放免し、又たアニュトスの言たる、余は訴へられし上は、死刑に處せられざるべからず、(又た若し余にして死刑に處せらるべきものに非ずとせば、余は當より訴へらるべき筈のものに非ず)且つ若し今回余にして放免さるゝ時は、君等の子弟は盡く余の言を聴くに由つて淪落に至るべきなりとのアニュトスの是等の言に説破さるゝことなく、又た余に向つて此く云はんか、曰く、ソークラテースよ、今回は、吾等アニュトスの言を採用せずして君を放免せんと欲す、然りと雖一の條件の下に君を放免するものなり。乃ち君は今後決して此くの如き方法を以て討究を行ひ、或は思辯すること勿れ、若し再び是れを爲して捕へらるゝ時は、君は死刑に處せらるべしと。若し之れ余を放免するの條件なりとせば、余は此く答へん、曰く、アテ

一 ナイ人諸君余は諸君を敬し、諸君を愛す。然りと雖余は諸君の命に従はんよりも寧ろ神の命に従はざるべからざるなり。而して余にして生命あり又た力のあらん限りは、余は決して此の哲學を教へ、之れを實行することを廢棄せず、又た余の遭遇する所の人々を勸勵して、以て余の例に倣はしめんことを力め、其人に向つて確言して云はん、曰く、あゝ我友、君は此偉大にして知識の淵叢たるアテーナイ市の市人たるに關せず、如何なればたゞ黄金を蓄積し、虚榮を誇ることに仔々汲々たるのみにして、知識、真理及び精神の至大なる進歩に關しては毫も之れを心とすることなきや。君は之れを耻ぢざるか。若し余と共に論せる其人にして、然り、余は之れに心を用ゐざるに非すと言はんには、余は決して彼れより辭し歸らず。又たは彼れを放ち歸へさず、彼れに質問し、彼れを試問し、彼れを對詰し、而して若し彼れ徳義を有せざるにも係はらず、而も自ら之れを有せりと云ふが如きことある時は、余は彼れを罵り、其大なるものを下だし、其小なるものを高むなり。而して余は此の事を青年たれ、老人たれ、國人たれ、他國人たれ、余の遭遇する所の一切の人々に語らん。而して我國人は吾等の

金銭費ふに足ら
ず

同胞なるを以つて殊に然りとなす。何となれば之れ神の命令たればなり。余は諸君が此事を知らんことを欲す。而して余の信する所に由れば、今日に至るまで國家に起りたる事變中、余が神に事へたるよりも大なる善は他にあらざるべしとなす。何となれば余の爲したる所は老若一般共に其自己一身或は金銭財貨の爲めに心を奪はるゝことなく、たゞ先づ主として精神の至大なる進歩を心とせんことを勸告したるの他あらざればなり。余は諸君に告げん、徳義は金銭に由つて得らるべきものには非すと雖、徳義よりこそは、金銭も、人間に關する公私一切の衆善も得らるゝなりと。之れ余の教ふる所なり。若し此教理にして青年を腐敗せしむるものなりとせば、嗚呼余の感化の及ばず所は甚だ有害なるかな。若し人ありて、之れ余の教ふる所に非すとせば、彼れ虚言を語れる者なり。此故に、あゝアターナイ人諸君、余は諸君に言はん、諸君はたゞアニトスの命するがまゝに、或は余を免訴し、或は免訴せざれ。されども諸君如何に余を爲さんと雖、又た若し余は幾度の死に遭遇せんとも、余は決して余の主義を變せざることは、諸君預め知らんことを要す。

アテーナイ人諸君、余の言を妨害することなくして之れを聴け。諸君は余の言を聴き了らんと約束ありしにあらずや。思ふに余の云はんとする所は必ず諸君に善なるべし。又た尙ほ言はんとする所に就いては、諸君或は叫び出たす性質のものなりと雖、諸君願くは此くの如くあること勿れ。余が諸君の知らんことを願ふ所は、今若し諸君にして、余の如き者を殺したればとて、之れ余を害するよりも寧ろ一層諸君を害するものたる之れなり。メレイトス及びアニュトス等は余を害するものに非ず、又た害し能はざるなり——何となれば凡て物の性質として、悪人は自己を害するの外、決して善人を害し得べきものに非ざればなり。悪人或は善人を殺し、或は國外に放逐し、或は其民權を奪ふこと蓋し之れあらん、之れ余の否まざる所なり。而して彼れ及び其他の人々謂へらく、能く大に彼れに害を加ふるを得たりと。然りと雖余は之れに同意するものに非ず。何となればアニュトスの爲すが如き——不正義を以つて人命を奪ふが如き——害悪は、之れ一層遙かの大悪たればなり。

アテーナイ人諸君、今余の言はんとする所は、諸君或は想像せんが如く、

悪人は善人を害し得るものに非ず

余は神が國家に
與へし一種の虵
にして諸君を刺
撃せしめん爲め
のものなり

余の如きものを
他に待ること理
し

神の遣はしたる
ものたるの證

余一身の爲めにするに非ずして、寧ろ諸君の爲めにするのみ。乃ち諸君が神に逆ひて罪を犯すことなく、又余を死刑に處して神の恩恵を拒絶する勿らんが爲めなり。諸君若し余を殺す時は、再び余の如き者を得るとは決して容易の業に非ざるべし。今若し聊か笑ふべき比喻を以てせば、余は神より國家に與へられたる一種の虵の如きものにして、國家は宛も大なる氣高き馬の如く、其體軀の大なるより、自然に運漫となるを以つて之れを刺撃して活潑ならしめざる可からざるなり。此くて余は神が國家に與へたる虵にして、終日何れの處に至ても、常に諸君に密着して離るることなく、或は刺撃し、或は奨勵し、或は譴責するなり。而して諸君は余を措いて他に余の如き者を發見するは容易ならざるが故にて、余は諸君に忠告するに余を愛惜せんを以つてす。余は敢て言はん、諸君若し坐睡せる時、突然之れを目覺す者あらんには必ず痲癩を起こして怒る所あるべきなり。諸君はアニュトスの勸告するが如く、余を殺し去るは實に容易のことたるなり、而して若し余を斃し去る時は、神が他の虵を諸君に與ふるまでは、諸君は餘年安らかに寢ることを得べし。而して余は神より諸君に

ソークラテース
金錢を求めず

與へられたるものと證たるや——若し余にして一般他人と同様のものならんには、如何でか自家の用務を放棄し、又た忍耐して幾星霜の久しき、自己の用務の曠廢を看過し、而して宛も諸君の父兄たるかの如く、一個人として來りて諸君の用務を爲し、諸君に道義を説き之れを勵ますことを爲さんや。余は云はん、之れ決して人性に似ざるなり。而して若し余にして報酬を得、或は余の勸勵は、金錢等の報酬を得たりしならんには、余の爲す所は爲めにする所ありしなるべし。然りと雖諸君の知れる如く、余の無思慮なる告發者等の如きすら、余が報酬を求めたりと敢て云ふものあらざるなり。彼等決して之れを證せざるなり。而して余は余の言の眞理なるの證明者を有せり、乃ち余の貧乏なることは之れ十分なる證明者たるなり。

政治に關係せず

或者は余が何故に一個人として諸方に至り、或は忠告を與へ、或は自ら他人の事を爲し、而も公衆の前に出づることなく、又たは國家に忠告を與へんごもせざるやを驚き、其理由を問ふものあらん。此事に就いて余は其理由を諸君に語るべし。諸君は、余が數々神託或は異徴なるもの余に

神之れを制止す

政治に關係せし
ならんには久し
ま前に殺されし
なるべし

ソークラテース
の死を恐れず正
を踏みし實歴

來りしと云ふことを聞きしなるべし、之れメレートスが其告發書中に嘲
笑せる所のものなり。此奇徴は余の幼少の時より之れ有りしものにし
て、一種の聲ありて、余の爲さんとする所にして、爲すべからざる事は、常に
之れを制止す、然りと雖余に何事を爲せと命令することはあらざるなり。
而して之れ余をして政治家たらしめざりしものたるなり。而して余は
又た之れを以つて正常なりと思惟す。何となれば、あつアテリナイ人諸
君、余は何事も確知すればなり、乃ち余にして若し政治に關係したりしな
らんには、余は久しき以前に殺され、諸君にも又た自身にも何の善をも爲
すことあらざりしなるべし。余が今ま眞理を語ることに於て、諸君余を
怒ること勿れ、眞理を云はぶ——人若し諸君或は他の人々と争ひ國家に於
ける不正不善の行爲に對して正直に戦ふに當つては、一人として其生命
を保つものあらざるなり。故に若し眞に正理の爲めに戦はんとするも
のは、若し彼れ生命を有せる以上は、暫時なりとも個人の位置に在り、決し
て公位置に立つべきに非ざるなり。

余は此證明を諸君に爲さんに、單に言語のみに非ずして、言語よりも一

ソークラテース
元老院議員

ソークラテース
不法に反對す

死を決して正義
に立つ

屑價值ある所の行爲を以つてすべし。余は諸君に語るに余の經歷の一部を以つてせん、之れ余が死の畏れよりして、如何なる不正にも屈伏せず、若し屈伏せざりしならんには、余は殺さる可かりし時、而も不正に屈伏せざりしことを諸君に證明するに足らん。余の今ま語らんとする所の話は、恐くは興味なく、又た平凡ならん、雖眞實の事たるなり。あゝアテ、ソークラテース諸君、余が官職に就きしは實に唯一度にして、其官職は元老院議官たりしなり。時にアルギヌサイ戦争の後死者の屍骸を所理せざりし所の數將官を審問する事件ありし時、余の一族たるアンチオヒス族議長席を占め居たり。而して諸君は是等數將軍は皆な一時に共に審問すべしとの案を提出したりと雖、之れ不法の所爲にして、其不法なることは後に至りて諸君は之れを悟りしなり。然りと雖其時ブリュタチス中、不法に反對するものは唯余一人ありしのみにして、余は諸君に反對の投票を爲せり。此に於て演説者等は余を彈劾し、余を捕縛せんと脅迫するや、諸君は大聲以つて叫びわめけり。然るに余は決心すらく、余は國法と正義とを守り以つて危険を冒し、假令諸君等が余を獄に投じ、余を死に處すると

のこゝを以つて威迫することも、決して諸君の不正に黨すること勿らんと。之れ民主政治の時の事なり。然るに三十人政治の權勢の時に至り、彼等政府者、余及び他に四人のものを圓形堂に召喚して、吾等に命ずるにサラミス人レオーンをサラミスより呼び出すことを以つてせり。之れレオーンを死刑に處せんとするなり。實に此くの如きは彼等の罪科に關し、成らん限りの多數の人を連累せしめんとの方針より、常に下す所の命令の標本たるなり。時に、余は、若し此くの如きの形様を用ゐて可なりとせば、已に死を決せる以上は一縷條の如き何かあらん、たと余の恐るゝ所は不正なること或は神聖ならざることを行ふにありとなし、其決心の態度は、單に之れを言語に表はすのみに非ずして、又た之れを行爲に示めせり。此くて如何に壓制の強手腕と雖、毫も余を威迫して惡を行はしむること能はざりき。而して吾等圓形堂より出づるや、他の四人のものはサラミスに至りてレオーンを捕へたりと雖、余は靜かに家に歸へれり。此くて若し三十人專制政治にして其の後暫時にして權勢を失墜するに非ざりせば、必ずや余は生命を失ひたりじならん。此の事に關しては數多の人

は余の言の證明者たるべし。

今若し余にして公生活を爲し、善良なる人の如く余は常に正理を助け、
 又た當然の事として正義を以つて余の第一の事となして、而も余は此幾
 星霜の生命を保ち得べしと諸君は真に想像するか。否アテナイ人諸
 君余は決して然りと思はず、又た何人も然りと思はざるべし。然りと雖、
 余は常に公私共に余の行爲に於ては同一にして、誣ゐて余の門弟なりと
 稱せらるゝ者及び其他の人々に對して、余は決して卑しむべき聽従を爲
 せしことあらざるなり。實を云はんには、余は正規の門弟子なるものを有
 せざりしなり。故に余にして、余の天職を行へる時は、何人と雖來りて余
 に聽かんとする者あらば、其人青年と雖、老人と雖、隨意に來聽するを得る
 なり。而して余は報酬を拂ふ者とは談話すと雖、然らざる者とは談話せ
 すと云ふが如きとを爲さず。何人と雖、富人と雖、貧人と雖、來りて余に問
 ひ余に答へ、余の言語に耳を傾くることを得べきなり。故に其人或は善
 人とならんとも又た惡人とならんとも、其は余の罪せらるべきことに非ざ
 るべし。何となれば、余は何事も此人に教へざればなり。若し人ありて、

ソークラテース
 人と談話すと雖
 人を教へしこと
 なし

報酬も受けず、
 秘密もなし

世間は知らずと雖、私かに彼れ余より何事をか學び、或は聽きし所ありと云はゞ、彼れ虚言を語れるものなりと諸君の知らんことを希望す。

然りと雖人必ず問はん、如何なれば人皆な君と談話することを喜ぶやと。アテロナイ人諸君、此事に關しては余は已に諸君に全眞理を語りたり。乃ち人々は、余と、かの自稱賢人なるものとの問答對話を聽くを好み、之れ愉快なればなり。而して之れ神が余に命じたる義務にして、神託、幻像、及び其他神意が人々に表明さるゝ方法に由つて保證する所なり。アテロナイ人諸君、此は眞實のことなり、若し然らずとせば、余は直に論破さるべきなり。若し夫れ余にして青年を腐敗しつゝあり、又た已に其或者を腐敗し了りたりとせば、彼等成長するに及びて、其青年たりし時、余が悪教訓を與へたることを感知し、今や進みて自ら告發者となり、余に復讐を爲すべきなり。彼等若し自ら之れを爲すことを好まずんば、其親戚、父兄或は其近親の者は、余の手に由つて、其親縁者が如何なる害を被りたるかを言ひ出だすべく、今は即ち其時なり。是等の人々の多くは今ま現に此の法庭にあり。クリートンも此處に在り、彼れ余と同年輩にして又た

ソークラテースが腐敗せしめたりと稱せらるゝ青年の父兄ソークラテースに反對の證明を爲さず

同區の人なり。其の子クリトプロスも亦此に見ゆ。又たアイスヒ子
 スの父なるスフェットス人リサニアスも又此處に在り。ケフィソス人アン
 チンオーンも亦見ゆ、之れエビゲネーリスの父なり。其他余と交際したる人
 人の兄弟の此の法庭にある者少なからず。テオスドチデーヌの子ニコ
 ストラトス及びテオドートスの兄弟もあり(テオドートスは已に死せり、
 故に彼れ其の兄弟を制止することなかるべし)。又たデーモドローコス
 子バラロスも此處にあり、彼れ其兄弟にテーアゲスあり、アデイマントス
 はアリストーンの子にして、其兄弟なるブラトーンも亦此處にあり。ア
 イアントドロースはアボドロースの兄弟にして、又た此處に余の見る
 所なり。此他尙ほ一々其姓名を枚舉し得ざるに非ず、而してメレートス
 は、其辯論中、此内の或者は之れを自己の證人として出ださんと思せば出だ
 すことを得たりしなるべし、されども、彼れ若し之れを忘れたりと思せば、今
 と雖、彼れ尙ほ之を證人として出だすとも可なり、余は讓歩する所あるべ
 し。此くして果して彼れ其の欲するが如き證明を得べきや如何ん。彼
 れ答ふる所ありて可なり。否、アテーナイ人諸君、然りと雖、眞理は其の反

對たるなり。何となれば凡て是等の人々は皆な、寧ろメレートス及び
ニュトス等が目して、彼等の親近の腐敗者、及び破壊者となしたる余の爲め
に証人たらんとするものにして、單に腐敗されたる青年のみにあらず—
若し腐敗されたる青年のみなりとせば、或は他に爲めにする所ありしと
云ふこともあらん—然りと雖、其未だ腐敗されざる年長親縁の人々も余
の証人たるなり。如何なれば彼等は其の證據を以つて又た余を助くる
か。之れ眞理と正義との爲めに非ずして何ぞや。何となれば彼等皆な
余は眞理を語るものにして、メレートスは虚言するものたることを知れ
ばなり。

アテイナーナイ人諸君、以上は殆ど余の言ふべき所の辯護なり。されども
尙ほ一言云ふべきことあり。恐くは、此に人ありて余に怒れる所ありて
心に此く思ふことあらん—若し彼れ自身ならんには、此くの如き場合、或
は之れよりも一層重大ならざる場合に於ける時と雖、涙を流して或は哀
訴し或は歎願せん、彼れ又た法庭に其の子女等を連れ來らしめ、以つて人
々の心を動かさんとし、又た親戚朋友の多數をも此處に來らしむべしと。

余も肉あり血あ
り、體裁判官の
憐憫に訴へんこ
とほ之れを爲さ
ず

然るに余は生命危きに瀕せるに關せず、此くの如きことを爲さざるより、其の人心に、自己の思ふ所と余の所爲とを對照し、余に對して忿怒の情を激成し、之れを嫌ふの情よりして、余に反對の投票を爲すことあらん。余は素より諸君の内、此くの如き人ありとは容易に斷言せずと雖、若し之れ有りとせば、余は彼れに向つて此く云はん、曰く、友よ、余も亦他の人々の如く同じく人間にして、肉あり血ある動物にして、ホメーロスの言の如く、決して木石には非ざるなり。余は又た家族を有せり、然り我が子三人あり、あゝアーテナイ人諸君。其内の一人は稍成長せりと雖他の二人は尙ほ幼稚なり。然りと雖、余は一人たりとも此處に之を連れ來りて、諸君の心を動かして、以つて無罪放免を得るの哀願を爲さざるなり。其理由たる決して余の私心に出づるに非ず、又た敢へて諸君を度外視せるに出るにも非ざるなり。余が死を恐るゝや否やは別問題にして、今此に之れに就いて語らざるべし。然りと雖も余の理由とする所は極めて簡單にして、余は此くの如きの行爲は余自身及び諸君及び國家全體に侮辱を興ふるものなりと感せばなり。苟も余の如き年齢に達したる者、及び又た賢人

死を免れんとし
て法廷にて耻づ
べき行爲を爲す
ことを耻づ

有名なる人物の
死に臨みて卑怯
の態度を笑ふ

生死の觀念の誤

の名聲は果して之れを受くるに足る者なりや否やは兎に角、決して自ら
自己を卑しむべきに非ざるなり。兎にも角にも世間はソークラテース
を以つて一種の點に於て他人に優れるものなることを決定せしなり。
今ま若し諸君の内、智慧及び勇氣及び其他何等かの徳義に於て大に優れ
りと稱されたる人にして、此くの如くして自ら卑しむことありとせば、其
の行爲は實に耻づべきものと云はざる可からず。余は、有名なる人物等
が死刑の宣告を受けし時、最も奇態の舉動をなしたることを見たり。彼
等若し死する時は一種恐るべきことに遭遇するものなりと空想し、又た
若し諸君にして生くることを彼等に許可する時は、彼等永久に不死なり
と思へるものゝ如し。余思ふに彼等の如きは國家に取つては大なる不
名譽にして、若し他國人來りて此事を知ることあらんには彼等に就いて
必ず此く云はん、曰く、彼等はアテーナイ市の最も秀出せる人物にしてア
テーナイ人等は自ら彼等に名譽及び命令權を與へしと雖、其の状態や婦
女子にだも若かざるなりと。余は云はん、此くの如き舉動は、苟も名聲を
有せる吾等の決して爲すべからざる所なり、若し此くの如き舉動を爲す

ものあらんには、諸君は決して之れを容赦すべからず。静肅なる人は此限りに非ずと雖、彼の女々しき光景を呈して、アテーナイ市をして一種笑ふべきものたらしむる人々等に對しては、諸君は寧ろ之れを貶し去るの傾向を有せることを示すべきなり。

裁判官は感情に動かさる可からず道理に従つて判せよ

裁判官は法律に従つて判決するのみ

然りと雖、不名譽問題は此に之れを措くとするも、裁判官に對して其事實を陳述し、其確信を明かにすることなく、却つて哀願して放免を得んとするが如きは一種の惡たるなり。何となれば裁判官の職務は正義の贈與を爲すに非ずして、判決を與ふるにあればなり。裁判官は又た、法律に由つて裁判することを宣誓せしと雖、自己の氣隨を以つてすることは之れを誓はざりしなり。又た裁判官も吾等も共に決して虚偽の宣誓の習慣に従ふべからず——此くの如きものには憐憫あるべからざるなり。然らば諸君、幸に余に求むるに、余の以つて不名譽となし、不敬神となし、惡となす所のものを以つてすること勿れ、殊に今やメレートスの告發に由つて、不敬神者として、審問さるゝ時に於て然り。あゝアテーナイ人諸君、若し言説及び懇願等の力に由つて、余は諸君の誓ひたる所を打破し得たりし

一層高尚なる意味にて神を信す

ソークラテース多數決にて死刑に決す

ならんには、余は諸君に教ふるに、諸神の存在せざることを以つてし、又た余の辯解は、却つて余が諸神を信せざることを自ら確證するに止まりならん。然りと雖其實然らず。余は諸神の存在を信するものにして、其の之れを信するや、余の告發人等の中の何人よりも遙かに高尚なる意味に於てするものなり。而して余は此の訴訟事件は、之れを諸君と神とに一任す。諸君は、諸君及び余に取つて、共に宜しき之れを處理せよ。

嗚呼アテイナー人諸君、余が死刑の投票を以て敢て悲しまざるに就いては多くの理由在つて存せり。余は始めより此事は預期せしなり、而して寧ろ投票の兩者殆ど同一なりしに驚く者なり、何となれば余に反對する方は今一層遙かに多數なるべしと思ひ居たればなり。今若し三十票一方に行きしならんには、余は無罪たりしなるべく、余はメレートスより通れたりしと云ふことを得ん。余は又た言はん、若しアニュトス及びリュクオン等の助勢なき時は、彼れメレートス決して現票數の五分の一だも得ること能はざりしなるべく。若し然らんには、法律の要求するが如く、彼

れ千、ドラフマの罰金を科せらるゝも明瞭たりしなり。

此くて彼れ刑罰として死を提出せり。アテーナイ人諸君、余よりは又何をか提出すべき。之れ余の當然の事たるや明らかなり。而して余が當然拂ふべき所受くべき所のは果して何ぞや。決して其の一生を怠惰に過ごせしことなく、人々が心を専にする所の富有、家事、軍事、集會に演説し、官吏となり、計略し、徒黨を結ぶ等の事に關しては、全く其意志なかりし人には、果して如何なる報酬かあるべき。自ら謂へらく、余は政治家として生活するには餘りに正直に過きたりと。之れを以つて余は諸君及び余自身に善を爲し能はざる所には行くことなく、たゞ一個人として諸君等凡てに最大の善を爲し得る所に行けり。余は此處に至り、諸君の内の各人に説くに、彼れ先づ自己を省見し、一身の利害を見るの前、先づ徳義及び智慧を求め、國家の利害を見るの前、先づ國家を見るべきことを以つてせり。之れ其一切の行爲に於て爲すべきの順序たるなり。此くの如き人には如何なることか爲さるべき。彼れ若し其報酬を受くべきものなりとせば、あゝアテーナイ人諸君。彼れ必ず或る善なるものを得ざ

彼れ人々に善を爲せり

彼れはブリユタ
子イオン公會堂
に公給さるべき
なり

ソータラアース
無罪の自信

る可からず、其善たるや、又た彼れに相應したるものなるべし。而して諸君の此の貧窮なる恩人の求むる所は、諸君を教訓するの時間を得んことたるなり。此の人に適せる報酬は何なるべきぞ。あゝアテーナイ人諸君、ブリユタ子イオンの公會堂に公給するに優れる報酬はあらざるなり。彼れは實にオリュンピア祭に、二頭或は數頭を以つてせる所の競馬或は馬車競争に於て賞與を得たる者よりも、遙かに大なる名譽を價するものなり。何となれば余は未だ之れを得ずして之れを要するものなりと雖、彼れは已に十分之れを得たればなり。而して彼れの與ふる所は幸福の外見のみなりと雖、余は其の實を與ふるものなり。若し余の罪科を正當に考ふる時は、ブリユタ子イオンに公給することは、最も正當なる報酬たるべきなり。

諸君は余の言を聽きて、或は余が前きに或種の人々の涙と哀願とを以つて、死を免れんとするを評したるが如く、今又た此くも大膽に敢て諸君を輕んずることをなすものなりと思はん。されども決して然らざるなり。余が此の言を爲すや、余は故意を以つて決して諸君を害せざりし

死は感しきもの
なりや否やは未
知なり

禁獄さるべきに
非ず

ことは、或は諸君に説明して之れを確信せしむること能はずと雖も、余は
 自ら之れを確信せるを以つてなり。實に此くの如き、法庭の短少時間中
 の談話を以つてしては、諸君に説明するは蓋し難事に屬す。然りと雖、若
 しアテーナイ市にして、他の諸都市に於けるが如く、重大なる訴訟は之れ
 を一日間に判決することなきの法律あらんには、余は諸君に説明するこ
 とは之れを得べしと信ず。されども今は此くの如く時間短少なり。余
 は一瞬間に此くの如き大証告を論破すること能はず。而して自ら他
 人を害したることなきの確信あるを以つて、余は又た自己を害すること
 なきは確實たるなり。余は自己は如何なる悪をも相當せりと云はず、又
 た自ら如何なる刑に相當せりとこの意見をも提出せざるべし。之れ何故
 ぞ。或は之れメレトスが提出したる所の死の刑罰を恐るゝに由るか。
 否な、余は未だ死の善なるか悪なるかをも知らざるに、如何でか、必ずや悪
 なるべき刑を自ら言ひ出づるを爲さん。余若し自ら禁獄の刑に處せ
 よと云はんか。如何なれば余は監獄中、其年の行政官——十一人の奴隸と
 して生活せざる可からざるか。或は罰金に處せよとなし、其罰金の完納

罰金を科せよと云はんか余は錢なし

國外放逐をも擇ばず

何處に至るも青年は余に來らん

に至るまで禁獄さるべしとせんか。余は同一の異存有つて存せり。何となれば余は金錢は之れを所持せざるを以つて、従つて之を拂ふと能はず、爲めに獄中に起臥せざる可からざるなり。若し國外放逐に處せよと云はんか(恐くば之れ諸君の決定せんとする所の刑なるべし)然らば、余は生命の愛に旨せるものならざる可からず。而して思へらく、若し我同國人たる諸君にして、已に余の言論談話に堪ゆること能はず、是等の談話言語は悲しむべくも、忌むべきものたりとせば、他國人の感ずる所も亦必ず同様なるべし。アテナイ人諸君、余は此くの如きとを爲さざるべし。余の如き老年を以つてして都市より都市に遍歴し、常に變化せる逐放の生活をなし、常に何處に行くも放逐さるゝが如き生活は、あゝ何たる不幸ぞや。余は確知す余は何處に行かんと、此處に於ける如く彼處に於いても、青年の人々は余の許に來るべし。而して若し余にして是等青年を謝絶して逐ひ歸へす時は、彼等の年長者等は又た同じく其意に従つて余を逐ひ出だすべく、若し彼等を容受する時は其父兄及び朋友等は、其子弟及び朋友の爲めに又た余を放逐すべきなり。

余は舌を制して
徳義を語らざる
こと能はず

余は科料とすべ
き金錢を有せず

人或は云はん、然りソークラテースよ、然りと雖も君は自己の舌を制御
 すること能はざるか、若し舌をだに制御することを得ば、君は他國に至る
 と雖何人も咎むる者あらざるべしと。此の事に關して十分の了解を諸
 君に與ふることは甚だ難し。何となれば若し余にして、此く爲す時は之
 れ神命に従はざる所行たるを以つて、余は舌を制御すること能はざるな
 りと云はゞ、諸君は余の言を以つて眞面目に非すと云はん。又た若し、人
 間の最大善は日々徳義に就いて語ることにして、又た此事に關して、余が
 自己及び他人を討驗せるは諸君の聞ける所、又た此の討驗を経ざる所の
 生活なるものは、生活の價値なきものなりと云はゞ、諸君は尙ほ余の言に
 信を置くことを爲さざるべし。而して余は假令諸君を説伏することは
 難しと雖、余の言ふ所は盡く眞なり。且つ余は如何なる罰なりとも身に
 之れを受くべきものなりと思考すること能はざるなり。若し余にして
 金錢を有せるものならんには、余の拂ひ得る程度に於て科料として申し
 出でしなるべく、之れ別に甚しき惡にあらざるなり。然りと雖諸君の知
 れる如く、余は金錢を有せざるを以つて、たゞ願ひ得るは、科料をして余の

友人等三十ミナ
の金を科料とし
て申し出でよと
云ひ證人たらん
と云ふ

アテーナイ人は
賢人を殺したる
ものなりと非難
さるべし

彼等暫く待たば
余は老齡にて死
せんものを

能ふ所に適せしめんこと之れなり。然りと雖余は「ミナ」の金は之れを
拂ふことを得べしと思へり、故に余は「ミナ」の罰金の刑を提出せんとす。
然るにプラトーン、クリトーン、クリトブロス、アポドロロス及び其他現
在此にある所の友人諸子は、余に勸むるに三十「ミナ」の罰金を拂ふ由を申
出でよ、彼等自ら證人たるべしと云へり。然らば三十「ミナ」の罰金とし、而
して彼等は其證人として十分なるべし。

然りと雖、あゝアテーナイ人諸君、諸君が余を殺したる應報として、アテ
ーナイ市を誹謗する所の人々より、惡名を以つて呼ばれ、諸君は哲人ソー
ラテースを殺したるものなりと稱せらるゝは不日なるべし。何とな
れば彼等が諸君を咎めんとするに當つてや、賢人ならざる余をも、賢人な
りと稱すべければなり。若し諸君にして今暫く待ちしならんには、諸君
の希望は自然に之れを満たすを得しものを。何となれば諸君の知れる
如く、余は己に老齡にして、死も甚だ遠からざるを以つてなり。余は今ま
余を死刑に宣告したる人々にのみ言はん。余は他の一事彼等に云はん

死に臨みて卑怯
の舉動を爲さず

余の辯論を以つ
て毫も悔ゆるな
し

と欲することあるなり。何ぞや、曰く、諸君は余を以つて言語の不十分なるより、此の死の決心を爲したるものなり——即ち、若し余にして何事も爲さざるなく、何事も言はざるなく、爲し残したる事、言ひ残こしたることなき時は、余は無罪放免たるを得べしと思ふものなりとせん。されども全く然らざるなり。余が死の決心を爲したるは決して言語の不十分なるに由るものに非ざるは確實なり。たゞ余は諸君の望むが如く、或は泣き或は悲しむ、或は歎き、或は種々の事を爲し、種々の事を言ふこと、諸君が多くの死刑の人の場合に實知せるが如きことは、余は之れを爲すの勇氣と大膽と、又た其意志とを有せざるなり。此くの如きは余の卑しとなす所なり。思ふに、危難の時に際し、余は決して他人の爲すが如き卑しむべき一般の動作を爲すべきに非ずと。且つ余は今ま爲したる所の辯解の方法に就いて、毫も後悔せる所なく、寧ろ自己の方法を以つて辯論して死することあるとも、諸君等の方法に従つて辯論して生きんことを欲せざるなり。凡そ人は或は戦場に在つて、或は法庭に在つて、有らゆる方法を盡くしても死を遁れんことを唯一の目的とすべきものに非ず。人戦場に

困難なるは死を
避くるに非ず不
正を避くること
なり

彼等眞理より利
に宣告せらる

於て其の武器を投棄し、其敵人の膝下に平伏して哀を請ふに於ては、彼れ
或は死を通るゝことを得べし、又た其の危難の場合に於ても人若し何事
なりとも之れを言行することを得んせば、又た之れを通るゝの方法なき
に非ざるなり。友人諸君、たゞ其困難なるは死を避くることに非ずして、
不正を避くることたるなり。何となれば不正は、死よりも大速力を以つ
て追走し來るものなればなり。余は年老ひて歩むこと亦遅く、甚だ走行
の遅き人と雖能く余に追及するを得るなり。而して余の告發人等は之
れに反して甚だ英敏々捷なりと雖、不正と稱する所の疾足者は能く彼等
を追ひ越せり。而して余は今ま諸君に死刑を宣告せられて死の途に行
くも雖、彼等も亦眞理に宣告せられて不正悪行罪の途に行かん。而して
余は自己の裁決を待たざるべからずと雖、彼等も亦其裁決を待たざるを
得ざるなり。余思ふに是等の事は定數の避くべからざることにして、固
より當然の事なりと。

余を死刑に處せし人々よ、余は今ま諸君に預言せんと欲す。何となれば
余は今ま將に死せんとし、又た人が預言力を授かるも此時なればなり。

彼等がソレヲラ
テースを殺した
るは、彼等の告
發人を除くの意
なり

彼等に對する一
層多くの激烈な
る告發人起こら
ん

彼等の告發を過
るゝ改良法は智
徳を修するにあ
り

余は、余の殺人者たる所の諸君に預言せんに、余の死後、諸君が余に加へたる所の刑罰よりも、一層重き罰ありて、諸君を待てることは確實たるなり。諸君が余を殺したるは、諸君の告發人を遁れんと欲し、又た諸君の生命の辯解を爲さざらんが爲めなり。然りと雖其の事諸君の想へる如くならずして、遙かに反對の趣を呈せん。何となれば、余は言はん、實に諸君に對しては、現在よりも一層多くの告發人ありて出づべしと。何となれば是等告發人は從來余の抑制し置きたる所なればなり。而して彼等は年齢若きを以つて、諸君に對して一層激烈なるべく、諸君は彼等より大なる攻撃を受くべきなり。諸君若し人を殺さば、諸君の惡生命を危くする所の告發人を遁れ得ると思はゞ、之れ大なる誤謬なり。之れ決して遁れ得べきことに非ず、又た名譽なることにも非ずして、其の最も簡易にして高尙なる方法は、他を除き去るに非ずして、たゞ諸君自ら智徳を修め、其進歩を計るにあるのみ。之れ余の死するの前、余に死刑を宣告したる所の裁判官等に言ひ置く所の預言たるなり。

余を無罪たらしめんと欲したる友人諸君、今ま役人等甚だ煩忙なり、又

今回の死はソ
クラテースに取
つては善なり故
に神託之れに反
對するなし

た余の死すべき場所に至るの前、暫く、諸君と共に此事に就いて談話せんことを欲す。故に願くば暫くここに留まりて、時間の許るす限り、互に談話すべし。諸君は余の友人なり、故に余の一身に起りたる此事件の真相を語らん。あゝ裁判官諸君——諸君は眞に裁判官なりと稱するを得べし——余は驚くべき事を諸君に語らん。余は今日に至るまで何事をか之を言行するに當り、若し過失或は誤謬等に傾くに當つてや、如何なる些細の事なりと雖、かの余が數々言へる所の神託なるもの余の内心に示現して、其れに反對するを例となす。而して今や余の一身に取つては最後の最悪なるものなりと思はるゝ所のものにして、又た世間よりも然りと信せらるゝ所の事件生ぜり。然りと雖神託は何の示現をも爲すことなく、今朝余の家を出づる時にも、余の法廷に至る時にも、又た余の言はんとせる所の事に就いて論ずる時にも、神託毫も反對することあらざりき。余は又た辯論中、數回の間斷を爲したりと雖、此事に關する言行に於て、神託何事にも反對することあらざりき。余は如何に此神託の無言なりしを説明すべきか。余は之れを諸君に告げん。是れ實に余の一身に起りたる

今回の事件は、余に取つては善なることを暗示するものにして、吾等の中、死を以つて悪なりと思へるものありとせば、彼れ誤謬たるなり。何となれば若し余にして悪に行かんとし、善に行かざらんとするや、例の異徴は必ず反對すべければなり。

死は無意識か他
界に移轉すること
なかるべし

死は深き安眠な
りとせば之れ大
なる幸なり

吾等又た他の方法に於て思考するに、吾等が死を以つて善なりとなすに大なる理由あるを知るなり。何となれば死は兩者中の一ならざる可からず。即ち死は虚無、或は全然無意識の状態のものなるか、或は人々の言ふが如く、靈魂は此の世界より他の世界に移轉することなるべし。今若し死は全然意識なく、眞の眠りにして、其眠りたるや夢にすらも妨げられざる如きものなりとせば、死は實に形容すべからざる利得なり。何となれば、若し人夜を撰擇するに當り、其安眠は夢にすらも妨害されざる夜を以つて、之れを彼の平常の晝夜に比較する時は、生涯中、此一夜に優りて樂しく、心地よかりし晝夜ありしことあらずと云はん。思ふに、何人と雖——私人と云はず——或は大王と雖、此くの如き晝夜は多く之れを得ること難かるべきなり。若し死は此の如きものなりとせば、余は死を以つて

永遠とは唯も一
夜なり

死は他界に旅行
することとせん
か正義の裁判官其
所にある

ホメーロス、ヘ
シオドス等に會
はん

トロヤ戦争の勇
將に會ふことを
得ん

未來界に於ても
加害の知識の討
究を繼續せん

大なる利得なりと云はん。何となれば永遠とはたゞ一夜たればなり。然りと雖若し死は他界に旅行することにして、人々の言ふが如く、其所には一切の死せし人在りとせば、あゝ裁判官及び友人諸君、何ものゝ善か之れに優らん。若し死せし旅行者黄泉の他界に到達せば、彼れ現世の正義専門家より救はれて、他界に於て裁判を司る所の真正の裁判官を發見することを得べし。即ちミノース、ラダマントス、アイアコス、トリプトレモス及び其他の神の子等、其一身已に正理なりし人々は裁判官たるべく、此旅行や實に價值ありと謂ふべし。人若しオルフェウス、ムサイウス、ヘシオドス及びホメーロス等と談話することを得るとせば、何物を盡くすとも、之れを得んとせざるものやある。否な、若し之れ真ならば余は再三、三四死せんことを希ふ。余は又た他界の何れかに於て、パラメーデリス、及びテラモーンの子アイアス、及び其他古代の英雄にして冤罪の爲めに死せし人々と談話し、彼等の加へられたる害悪と、余の加へられたる害悪とを比較し、以つて語り合ふの楽しみや決して少なからずと思惟せり。而して是等に優りて余の楽しみとなせる所は現世に於けるが如く、未來に於

ても余は尙ほ眞偽の知識の討究を繼續し、何人は眞に賢人たり、又た何人は智慧ありと虚託せりと雖其實賢人に非ざるやを發見するを得ることとなす。若しトロヤ大戦争の大將或はオヂュッセウス、或はシシユフォス或は其他無數の男女を試験することを得るとせば、何人か、何物を盡くすとも之を爲さざるあらん。是等の英雄或は大人物と談話し、或は問答を試むることは、實に無限の樂しみにして、何物の樂しみか之れに若かん。何となれば、彼の他界に在つては、談話問答を爲したればとて、之れが爲めに人を死刑に處すること決して之れあるなし。且つ他界に在つては、現世よりも幸福なるのみに非ず、又た若し人々の言へる所にして眞なりとせば、又た永生不死たるべきなり。

是れを以つて、ある裁判官諸君、死に關して心強かれ、而して此事の眞理なるを知れ——生前死後、善人には惡の來るものに非ざること。善人及び其の關係の人々は、決して神の見棄つるものに非ず、又た余の死に近づきたるは、決して單に偶然に由つて然りしには非ざるなり。然りと雖、余は死して現世の羈絆を脱するを得るは却つて喜ぶ所なり。故に神託は

生前死後善人には惡來ることなし

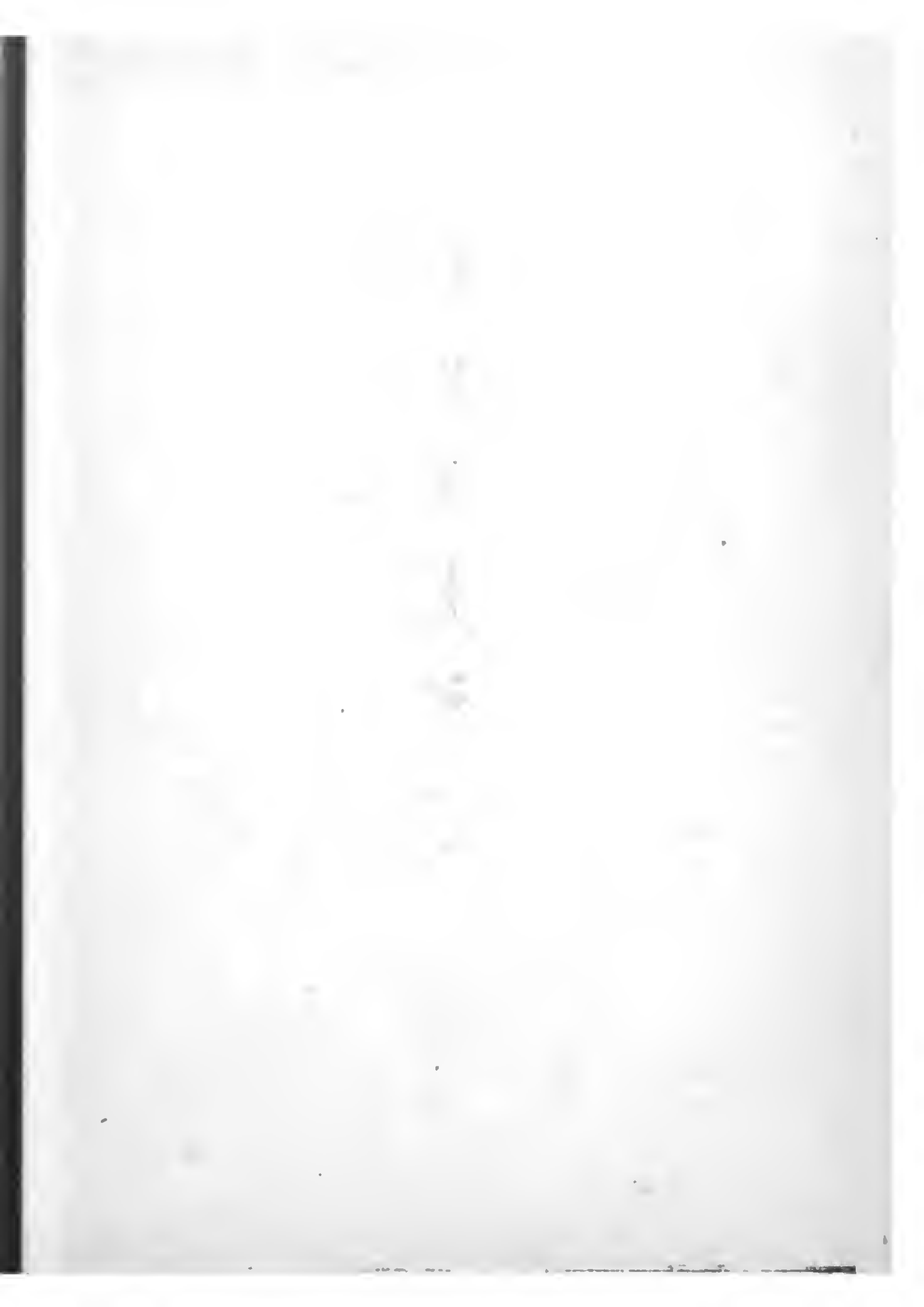
余が諸君に爲せし如く、諸君は又た吾が子にも之れを爲せ

何の異徴をも與へざりしなり。是故に余は又た余の告發人及び余を死刑に宣告したる者を怨むこともあるなし。彼等素より余に善を爲さんとの意志は毫も之れ無しと雖、敢て余を害したるにも非ず。而して此事に關しては、余はたゞ寛大に彼等を難せば可なり。

されども余は尙ほ彼等に願ふことあり。願くば友人諸君、吾が子等の成長したる時は、又た同じく彼等をも罰せんことなり。若し吾が子等徳義を外にし、單に金錢或は其他の事を以つて心となすことあらんには、余が諸君を惱ませし如く、諸君は又た吾が子等を惱ませよ。又た彼等何者にても非ずして、或者なるかの如き虚託を爲す時は、諸君が注意すべき所の事を注意せず、又た何者にも非ずして或者なるかの如く考へし時、余が諸君を譴責したる如く、又た吾が子等を譴責せよ。諸君若し幸に之れを爲さば、余及び吾が子等は諸君の手より正義を受けしものと謂ふべし。

今や訣別の時は來れり。吾等各々其途に行かん、——余は死に行き、諸君は生に行く。其何れの優れるやはたゞ神之れを知れるのみ。

クリトリーン



クリトーン解題

本篇の目的

「クリトーン」はソークラテースを哲學者として現はさんとするものに非ずして、善良なる國民として、國家を愛し國法を尊重し、以つて國民たる義務を完ふしたるの點を顯はさんとするにあり。

ソークラテースの終りの日は近づきたり。ソークラテースと殆ど同年の老人たる友人クリトーン、早朝來りてソークラテースを獄中に訪問しソークラテースに、運命の日を定むる船スニオンを出發したれば、やがて其の船歸着すべく、然らば死刑は明日なるべきを語り。時は貴重なり、機は逸すべからずとなし、ソークラテースに脱獄せんことを勧め、生命助かり得べき時に死するは善に非ず、今若しソークラテース死する時は、子女の養育及び教育は之れを如何にすべき、故に脱獄すべし、金錢其他の準備はクリトーン自己及びシンミアス等之れを爲せる由を語れり。

クリトーンは、衆人の意見をソークラテースに勸むるものなりと雖、ソークラテースは愚衆俗人の意見は之れを眼中に置かず、道理と智慧ある

人の意見にのみ従はんとせり。故に多数の意見は往々「吾等を殺すことを能くす」と雖、ソークラテースに在つては、之れ吾等の闘する所に非ず、たと人^とは善良なる生活、即ち正直にして尊敬すべき生活を爲してこそ生命の價値ありとなせり。故に名聲の失墜子女の不運の如きは問ふ所に非ず、たと思考すべきは、脱走するは正事なりや否やにありとなし、クリトーンは目下死の畏れなき局外の位置の人なれば、此事に關して靜平なる判断を下し得べければ、之れに答へざる可からずとして問うて曰く、余の死刑に宣告されざるの前、人に害惡を被らしめ、或は惡に報ふるに惡を以つてするは惡なることは數々論談せし所なり。然るに今ま余の事情變化したるを以つて其德義上の主義も亦變化したるかど。クリトーン其不變なるを許容せり。ソークラテース問うて曰く、然らば脱獄と德義とは兩立するを得るや否やど。クリトーン答ふる能はず。

ソークラテース尙ほ進みて曰く、今ま假定せんに、アテーナイの諸法律、人間の形體を取りてソークラテースの前に現れて問うて曰く、「汝は我等を蹂躪せんとするか」と、若しソークラテース答へて「法律等余を害したる

故に』と云はんか、法律又た云はん『されども之れ約束したることなるか。法律を蹂躪して可なりとの理由ありや否や。汝を此世に生れ出でしめ、汝を教育したるは我等なり、我等法律は汝の父母に等し。汝若しアターナイ市を好まずは何れに行くとも可なりしなり。然るに七十年の長年月の間此所に留まりて何處にも行かざりしは、之れアターナイを愛したるの證據に非ずや。汝の罪の審問の時死刑に代ふるに國外放逐を以つてするとは之れを得たりしなり、然るに汝は死刑を選びたるに非ずや。汝若し脱走すとせば果して何れに到らんとするか。或は善く治まれる國に至らんか。其國の政府も人民も汝を以つて國法を破るものとして惡視を放つべきなり。若しテッサリアの如き治まらざる國に到るとせんか。彼等始めは汝を歓迎し、汝の脱獄の奇聞を聴くを喜ぶべしと雖、一旦彼等の不興を被るに於ては、彼等好遇することなきに至らん。而して汝は尙ほ其地に在つて道徳及び法律の重んずべきことを講話せんとするか。あゝ之れ相應はじからざるなり。汝若し子女をテッサリアに連れ行き、子女をしてアターナイ人たるの資格を失はしむるは、果して利益なり

とせるか。又た若し子女は之れをアテーナイに残し置くも身はテッサリアに生存する時は、汝の友人等は、一層よく子女を注意すると思へるか。眞の朋友は、朋友の死生に關せず、必ず常に朋友の子女は之れを注意するものなるよ」と。

法律又た勸めて曰く「先づ正義を思ひ、生命或は子女の事は之れを後段とすべし。汝若し國法を破る時は之れ惡を以つて惡に報ふるものにして、吾等法律は汝の生存中汝に對して怒るべく、又た吾等の兄弟たる法律の未來界にある所のものも汝の敵たるべし」と。之れ余の耳にひびく所の神秘教者の聽くが如きの音聲なり、クリトーン若し異存あらば云へ、若し無ければ神命に従つて死せんと、之れ本篇の大要なり。

○

ソークラテースは善良なる國民に非ずとは、其生存中より數々彼れに向けられたる攻撃の聲なりしなり。何となれば一度其門人たりじアルキピアデース、クリチアス、及びハルミデース等の非行の記憶は、再興民主政界に尙ほ新たに於て、之れに關連して其友たり、師たりしソークラテース

ソークラテース
は善良なる國民
なり

スは、人民の興望と調和すること能はざりしものと如し。之れを以つて
 プラトーンは本篇に於て後代及び全世界に向つて、師たり友たるソーク
 ラテースの不良の國民に非ざりしことを訴へんとするものと如し。

○
 クリトーンが實際に獄を訪問し、ソークラテースに脱獄を勧めたりや
 否やは今得て知る可からなり。然りと雖、プラトーンは事實以上の事を
 創造するの人なり。而してソークラテースの脱獄を勧誘せしむるに當
 り、ソークラテースと同輩たる老齡の友人クリトーンを以つてしたるは
 甚だ當を得たりと云ふべく、此點に於て吾人はプラトーンの技術上の手
 腕を見るに足るなり。又た法律及び未來他界の法律なるものを擬人し
 たるが如きは、プラトーンの書中の最も高尙なる且つ大膽なる形容の言
 と云ふべきなり。

○
 本篇中注意すべき思想は、ソークラテースの愛國の熱心なることなり。
 國家至上主義の觀念なり、國法を尊重することなり。衆愚の多數決を排

斥することなり。殊に其國家を尊重するや、殆ど國民の絶対服従を承認し、或は吾等自己の意見を變じて國家が認めて正理とせし所の見解に従はざる可からざることあり」と云へるが如き、自己の思想をも國家權の下に置き、思想の自由(或は良心の自由、信仰の自由)等の觀念に反對せるが如き、最も吾人の注意すべき所なりとす。

クリトーン

對話人物

場

クリトーン早朝
獄を訪問す

クリトーン

對話人物

ソークラテース

クリトーン

場——ソークラテースの獄中



ソー
クリトーン、此時刻に來りしは何故ぞ、甚だ早きにあらずや。
クリ 然り甚だ早し。

ソー 正確に何時ならん。

クリ 未明なり。

ソー 監獄の門番、よくも君の入ることを許るしたるかな。

クリ ソークラテースよ、余は屢々來りしを以つて、彼れ能く余を知れ

り。且つ余は彼れを親切に爲したればなり。

ソー 君は今ま來りしばかりなるか。

クリ 否な、暫時以前に來れり。

ソー 何故に直に余を目覺ますことなく、坐して何事も云ふことなかりしや。

クリ ソークラテースよ、實に余自身にしても、目覺めて君の現在の如き大なる憂慮と不安とに在るは好まざる所なり。然るに余は來つて君の熱睡せるを見て、驚歎して眺め居たるなり。之れ余が君を覺まさりし理由にして、暫時なりとも君をして苦痛を忘れしめんと欲せしなり。

余は常に君の氣質の靜穩なるを見て、君は幸福の人なりと思ひしに、今や此くの如き悲歎の境界に在りと雖も、而も尙ほ靜平にして快活なる態度を保てるを見るは實に他に比すべき者あらざるなり。

ソー 何ぞや。クリトーンよ、老年余の如き者には、死近づきたればとて、別に悲み怨むの要なきなり。

クリ 然りと雖、他の老人にして同様なる不幸に遭遇する時は、たとひ

ソークラテース
の安眠精神の靜
平

死を悲しむの要
なし

老年たりとも尙ほ死を怨むを制する能はざるもの少なからず。

ソー 或は然らん。されども君が今朝此くも早く此こに來りし理由は何ぞや、其事君未だ余に語らざるなり。

クリ 余は悲しむべき痛むべき報道を君に齎らせり。素より君に於いては悲しむべきことにも非ず、又た何事にも非ずとなさん。然りと雖吾等君の友人たる者、特に余に取つては最も悲しむべき痛むべき事たるなり。

ソー 何ぞや。思ふにデーロス島よりの船歸帆せば余は死せざる可からざるなり、君の齎らす所は、其船の歸帆したる報道なるか。

クリ 否な其船未だ歸帆せずと雖、今日中には必ず歸帆すべし。スニオンより來りし人々、其の處にて船を後にして來りしと云へり。さらばソークラテースよ、明日は君の最後の日なるべし。

ソー クリトーンよ、若し之れ神意ならんには、余は喜びて死すべきのみ。されども余の信する所に由れば、今一日の猶豫あるべし。

クリ 何故に君はしか思ふにや。

ソークラテース
の幻夢死の日を
知る

ソ一 君に告げんに、余は其船の歸帆したる翌日死すべきなり。

クリ 然り、之れ役人等の云ふ所なり。

ソ一 然りと雖、余の思ふ所に由れば、其船明日までは歸帆せざるべし。之れ余が昨夜幻に見たる所より判断するなり。否な昨夜と云はんよりも、只今君が幸に余を覺まさずして眠らしめたる其間に見たる所の幻なり。

クリ 其幻の性質は如何なるものなりしぞ。

ソ一 優美爛雅にして、白衣を着せる女の如き者余に現はれて余を呼びて曰く、あゝ汝ソークラテースよ

「今より三日にして、汝は豊饒なるフチアに至らんとぞ。」

クリ ソークラテースよ、實に不思議の夢なるかな。

ソ一 クリトーンよ、思ふに此意味に關しては別に疑ふべきことなかるべし。

クリ 然り、其意味甚だ明瞭なり。然りと雖、あゝ我が愛するソークラ

クリトーン脱獄
を勤む

(一) 友を失ふ故

(二) 人々自己を
吝嗇と評せんこ
とを恐るゝ故

(三) 之れ不名譽
故

ソークラテース
世間多數の評は
意に介するの要
なしとなす

クリトーン世間
多數の意見に従
ふの要ありとす

テースよ、願くは今一度余の忠告を聴きて脱獄せよ。若し君死せば、余はたゞに再び得難き友を失ふのみにあらず、又た他の惡ありて君と余とを知らざる人々は必ず余を謂うて吝嗇となし、若し余にして金錢を出だすことだになす時はソークラテースは救はる可かりしに、余が金錢を借しみしが故にソークラテースは殺されたりと云はん。若し此くの如しとせば、何の不名譽か之れに若かん。人々は余を以つて友人の生命よりも金錢を貴重するものと思はん。何となれば多くの人々は、余が君に脱獄を勧めたるも、君は之れに應せざりし事實を承認せざる可ければなり。

ソー 然りと雖親愛なるクリトーンよ、吾等何故に世間一般の多數の人の意見を心に介せざる可からざるか。吾等の注意するに價值ある所の者はたゞ善人なるのみにして、善人は此事に關して其實情を知るべきなり。

クリ 然りと雖、ソークラテースよ、多數の意見も亦願みざる可からざるなり、之れ君の現在の場合に於て證するに足る。何となれば、彼等多數の好評を失ひたる者に對しては、彼等實に最大の害惡を加ふることを得

るを以つてなり。

ソー クリトーンよ、余は、彼等が其事を爲し得ることを望む。何となれば、若し之れを善くすとせば、又最大善をも爲すことを得べければなり、之れ善き事なり。然りと雖實を云はゞ、彼等多數は善も爲し能はず、又惡をも爲し能はず、即ち彼等は人をして賢たらしむること能はず、又た愚たらしむると能はずして、彼等の爲す所は、たゞ偶然の結果に過ぎざるなり。

クリ 余は此の事に就いて争ふこと勿からん。然りと雖ソークラテースよ、君は余及び君の諸友人の爲めを思ひて、其身を所置せんとせるには非ざるか。即ち若し君にして脱獄せば、余は君を盗み出だしたるものなりと密告するものありて、爲めに吾等の財産の全部或は大部分を失ふことあらざるやを考へ、或は其他今一層大なる害惡吾等の身の上に来ることなきやを憂慮し、以つて脱獄を躊躇せるには非ざるか。君の恐るゝ所、若し此くの如きものなりとせば、願くば此くの如きは憂ふること勿れ、君を救はんが爲めには吾等此くの如き害惡は勿論、今一層大なる危険をも之れに而せん。故に余の言に従ひ余の言の如く爲せ。

クリトーン後
を憂ふるに足ら
ずとなす

クリトーン獄人
及び密告せんと
するものに賄賂
せんと云ふ

多くの金銀準備
しあり

他國人も亦君を
愛せん

ソ一 然りクリトーンよ、之れ素より、一種余の憂慮する所なりと雖、唯
一の憂慮とする所に非ず。

クリ 恐るゝ勿れ。巨額の金を要せずして、喜びて君を救ひ、君を獄中
より出さんとを欲する者は、其數甚だ多し。又密告者を禦ぐに付いては
彼等方外の要求を爲さず、僅少の金額を以つて彼等を満足せしむること
を得べく、余の所有する所を以つてするも、此の目的の爲めには十分足る
べきなり。然るに君若し余の金銀を消費することを躊躇せば、他國人に
して又た君の用に充てんことを欲するものあり、其内、テーパイ人シンミ
アスは、此の目的の爲めに金銀を準備し居れり、又たケーベス其他の人
々も喜びて其金を以つて君の用に供せんとせるなり。故に余は云ふ、此
の事の爲めに脱獄することを躊躇すること勿れ。而して君が法^ホ庭にて
言ひし如く、若し脱走する時は他國に至りて如何に其の身を處して可な
るやを知らずと言ふが如き言を爲すこと勿れ。何となれば、君の至る所
の人々は君を愛すべく、たゞにアテーナイ人のみ君を愛するに非ざれば
なり。テッサリアにも余の友人數名あり、君若し其の處に至らんとせば、彼

生き得る時に死
するは不可

死せば子女の教
養は如何にせん
とす

子女の不幸

吾等勇氣をさそ
む

等は君を尊敬し君を保護すべく、テッサリテ人は一人として君に迷惑を感
せしむる者あらざるべし。ソークラテースよ、尙ほ自己の生命を助け得
べき時に於て、強て之れを助けんとせざるは、余は其の可なるを知らざる
なり。之れ自ら好みて、自己を滅ぼさんとせる所の敵に一身を投與する
ものなり。且つ君は自己の子女を見捨つるものと謂はざる可からず。
何となれば君は子女を養育し、之れを教育せざる可からざればなり。然
るに之れを爲さずして、子女を見棄てて死に去る時は、君の子女の運命は、
全く不幸なる偶然の弄する所となり、たとひ孤兒の普通の運命に遭遇す
ることなしとするも、尙ほ父たる君に謝する所は少なかるべし。苟も之
れを養育し之れを教育して、其終まで之れを完うして保護するの意志な
き者は、何人と雖子を持つ可からざるなり。然るに君は其の善にして勇
氣ある所行を取らずして、寧ろ其の容易なる方を撰びたるものゝ如し。
思ふに之れ一切の行爲をして徳義たらしめんことを旨とせる所の君の
如き人には不似合の事と謂ふべし。而して余は、君に關したる此の事件
は全く吾等の勇氣の缺損に基づくものなることを思ふ毎に、余はたゞに

吾等の怠慢と怯懦との結果

熱考の時は過ぎたり

ソークラテース
は爲すべき
ことなりや否や
を熱考せんとす

君を以つて耻辱とするのみならず、又た君の友人たる吾等を以つて、自ら耻辱と感ずるものなり。而してかの審問の如きは決して之れ有らざりしなるべく、又た若し之れ有りとするも、他に處分する方法ありしなるべし。而して此の最後の行爲或は見事なる愚行は、全く吾等の怠慢と怯懦とより生じたるものと如し。故に若し君は自ら生命を助けんとなし、吾等も亦た何事か善き所あらんには、吾等は君を救ふことを得たりしなり。實に之れ何の難事にもあらざりしを以つてなり。然るにソークラテースよ、あゝ其結果や如何ん、君に取つても、吾等に取つても、實に悲しむべく、又た不名譽の事となり了れり。故に君決心せよ、否な熱考の時は既に過ぎたり、必ずや其の決心あるべきなり。今や爲すべき事はたゞ一あるのみ。此は是非とも今夜中に爲さざる可からず。若し躊躇する時は、萬事盡く空に歸せん。故にソークラテースよ、余は君に願ふ、余の言を聽き、余の言ふ如く行へ。

ソー　愛するクリトーンよ、若し之れ正しきものならんには、君の熱心や其價值計る可からずと雖、若し夫れ不善なるに於ては、其熱心の大なる

道理の指導を要す

に従つて其惡亦大なり。故に吾等先づ此事は爲すべきことなるか、將た又た爲すべからざることなるかを熟考せざる可からざるなり。何となれば余は常に道理に導かれざる可からざる性質の者なるを以つて、其道理はよし如何ならんども、必ず思考したる上、善とするに非ざるよりは、何事も之れを爲すことを得ざるなり。故に今や運命我上に來れりども、余は此道理を棄つること能はず。而して此主義たるや之れ余が今まで尊敬し、今も尙ほ尊敬する所にして、今若し、他の一層善良なる主義を發見するに非ざるよりは、決して君に同意すること能はざるなり。然り、假令多數の力が、余に加ふるに尙ほ一層多くの禁獄を以つてし、財産沒收を以つてし、死を以つてし、或は妖怪談を以つて小兒を威すが如く吾等を威すことありとするも、余は君の言に同意すること能はざるなり。然らば此問題に就いて思考する最良の方法如何ん。或は君の前論に歸へり、一般多數の人々の意見に従ふとせんか、——其或者の意見は之れを採用すべしと雖、或者の意見は之れを度外視せざる可からざるは余の已に言へる所なり。而して余は今や將に死刑に處せられんとするに當り、果して此事を

主義を變じて可
ならんや

多数の意見採る
に足らず

主張して可なりや如何ん。而して前には善良なりとしたる所の主義も、今や單に之れを一箇の談柄となし、全く無意味の兒戯となすべきか。クリトーンよ、余が君の助力に由つて討究せんとする所は、余の現在の事情の下に在つて、此主義は何等か以前と異なる趣を呈するか、或は不變の者なるか、余は又た之れを許容すべきか、將た又た許容すべからざるかと云ふにあり。此議論たるや、余の信ずる所に由れば、彼の信ずるに足るべき多数の人々の主張せる所にして、之れを要するに、余の前に言へる如く、或者の議論は採用すべしと雖も、或者の議論は採るに足らずと云ふにあり。而してクリトーンよ、君は明日死せんとする人に非ず、少くとも人間の想像以内在に在つては、此事有るべからざる人なれば、此事に就いては關係なく、人間の陥り易き境遇の爲めに欺かるよと云ふが如き事はあらざるべし。故に余に告げよ、余は或意見、即ち或人のみの意見は之れを尊重するも、其他の意見は之れを度外視して可なりと言ふも、誤謬にあらざるか。余が此説を主張したるは正しかりしや否や。

クリトーン
然り。

多数に非ず善と
智者の人の意見
に従はん

ソ一 然らば其善きは之れを取り、悪しきは之れを棄つべきか。

クリ 然り。

ソ一 智者の意見は善にして、愚者の意見は悪なるか。

クリ 然り。

ソ一 他の事に關しては如何ん、體育家の門弟子は、世間一切の人の毀譽褒貶を意とすべきか、將た又た唯だ一人——教師たれ、醫師たれ、其は孰れならんとも可なり、其一人に聽くべきや如何ん

クリ たゞ其一人に聽くべきなり。

ソ一 而して此人、たゞ其一人の褒貶は之れを恐ると雖、世間一般の褒貶は恐るべきに非ずとすべきか。

クリ 之れ明瞭なることなり。

ソ一 然らば彼れ一切他人の意見を合計したるものに従はんよりも、寧ろ、其一人の師たる人の善しと見る所の方法に従つて行動し、操練し、飲食するが當然なるか。

クリ 然り。

ソ一 若し彼れ一人の指導に従はず、其褒貶を尊重せず、濫も其事を解せざる所の衆人の意見を意とする時は、彼れ害悪を被ること有らざるべきか。

クリ 然り必ず之れを被らん。

ソ一 其の害悪は如何なるものなるべき。其不従順なる人は、如何なる傾向に、又た如何なる影響を被るべき。

クリ 其身體に影響を及ぼすや明かにして、乃ち之れ惡に由つて損害さるゝなり。

ソ一 然り、大に善し。クリトーンよ、此事又た他の事物に通じても然るべく、一々枚舉するの要なかるべし。正不正、美不美、善不善、是等は吾等の今ま思考せんごする所にして、吾等は衆人の意見に従ひ、彼等の批評を恐るべきか、將た又た善く道理を理解せる人の意見に従ひ、衆人の意見よりも、此人の意見を敬畏すべきか。而して吾等智者に背き、吾等の内に在つて、正義に由つて進歩し、不正に由つて壞頽する所の原理を破壊し、傷害すべきか、或は智者の指教に従ふべきか。此くの如き原理なるものは果

善惡正邪の判断
は多數か智者か
何れにか従はん

して之れあらざるや否や。

クリ 必ず之れあり、ソークラテースよ。

ソークラテース 同様の例を挙げんに、若し事理を解せざる人の指導に由つて行爲する時は、吾等健康に由つて善良となり、疾病に由つて壊類する所のものを破壊するものにして、其破壊したる後に於て、吾等は尙ほ生活するの價值ありと云ふべきか。此くて其破壊されたる所のものは身體なるか。

クリ 然り。

ソークラテース 吾等不良なる腐敗したる身體を有して尙ほ生活するを得るか。

クリ 決して能はず。

ソークラテース 今若し正義に由つて進歩し、不正に由つて壊類する所の、人間の高尚なる部分を失喪し、而も尙ほ生活するの價值ありとなすべきか。此く人間に於いて正義不正義に關する所の其原理なるものは、其は何物にても可なり、此物は身體よりも下等なるものなりとなすべきか。

クリ 決して然らず。

ソークラテース 然らば身體よりも尊重さるべきものなるか。

クリ 然り大に尊重さるべし。

ソ一 然らば友よ、吾等一般多數の言ふ所を意に介すべからず。たゞ正不正を知れる人の云ふ所、及び眞理の言ふ所を聴くべきのみ。故に君が、正不正、善不善、尊敬すべきこと及び尊敬すべからざることに関して、衆人の意見を心に介すべきものとしたるは、之れ誤謬に始まれるものたるなり。實に或者は云はん、然りと雖多數のものはよく吾等を殺すことを得るなり」と。

クリ 然り、ソ一クラテース、之れ必ず其答へなるべし。

ソ一 夫れ然り、然りと雖、余の見る所を以つてすれば、余の以前より主張せる所の議論は、尙ほ依然として確固不動なるに驚かざるを得ざるなり。而して余の知らんと欲する所は、他の問題に關しても亦同様の言を爲し得るや、即ち——單に生活と云ふのみに非ず、善良なる生活は主として貴重さるべきものなりとすべきやと云ふにあり。

クリ 然り、亦其言の如し。

ソ一 而して善良なる生活は、正しく且つ尊敬さるべき生活と同一な

るか。

クリ 然り同一なり。

ソ 是等の前提より余は本論に進みて問はん、吾等はアテーナイ人の承諾なくして脱獄を試むべきものなるか、或は此は爲す可からざるものなるか。若し之れ明かに正理なることなりとせば、吾等脱獄を試むべしと雖、若し夫れ正理ならざるに於ては、こは思ひ止まるべき事たるなり。又た君の云へる所の、金銭に關し、性格を失ふとに關し、小兒の教育に關したる事等は、之れたゞ衆人の言ふ所にして、其意に隨つて人を生かし、或は些少の理由を以つて人を死に處する所の俗衆の言ふ所たるのみ。此く論じ來る時は、たゞ残れる所の疑問は、吾等脱獄し、他人をして吾等の脱獄に助力を興ふるを許るし、金銭を拂はせ、之れに謝するは果して正理なるか、將た又た不正なるかと云ふにあり。若し夫れ不正なりとせば、余が此に留まることの爲めに、或は死、或は其他の不幸降り來ると雖、是等は計算以外に置かざる可からざるなり。

クリ ソークラテースよ、君の言ふ所や正し。然らば吾等如何にせば

クリトーンの説
は衆人の意見の
み

脱獄すべき理由
ありや余に答へ
余を説き伏せよ

可ならん。

ソ一 此事に關して吾等與に思考する所あらざる可からず。而して若し君にして余を論伏することを得ば、余は君に従ふべしと雖、若それ然らざるに於ては、友よ、願くば、アテ一ナイ人の希望に反して、余をして脱獄せしめんと説くことを止めよ。余は素より君の論伏する所となるは非常に願ふ所なりと雖、余の一層勝れる所の判断に反對することは能はざるなり。故に余の最初に論じたる所を熟考し、而して君の能ふ限りの善良なる答へを爲せ。

クリ 余は答へん。

ソ一 吾等は決して故意に惡を爲すべきものに非すと云ふべきか、或は一方には惡を爲すべきものなりと雖、又た一方には惡は爲すべからずと云ふべきか、或は吾等の今ま語り居りし如く、又た吾等の已に承認したる如く、惡を爲すは必ず如何なる時も惡にして耻づべきとなりと云ふべきか、吾等が僅々數日前に許容承認したる所のごときは、今や全く之れを放棄すべきか。吾等終生、熱心に互に相論辯討究したる所のごときは、一朝に

主義は一朝にし
て棄つべきか

して之れを放棄して、余等の如き老齡に於て、自ら小兒にも優る所なき状態に在るを可とすべきか。或は衆人の意見は如何ならんとも、結果の利害は如何ならんとも、吾等は以前より主張したる所の、不正は常に惡にして不正を行ふ人は耻づべきなりとの確信を固持すべきか。吾等此く言ふべきか否か。

クリ 然り。

ソ 然らば吾等決して惡を行ふべからざるに非ずや。

クリ 然り行ふべからず。

ソ 或は又た衆人の想像するが如く、損害されたることに復讐して、他人に損害を被らしむることも亦不可なるべし、何となれば吾等は何人をも害すべからざればなり。

クリ 然り、復讐して惡を興ふべからず。

ソ クリトーンよ、再び問はんに、吾等惡を爲すことを得るか。

クリ ソークラテースよ、決して爲すことを得ず。

ソ 惡に報ふるに惡を以つてするは如何ん。之れ衆人の道徳なり

惡を以つて惡に
報ふべからず

感を以つて惡に
報ふるは正理に
非ず、之れ第一
原理

—之れ正しきことなるか否か。

クリ 正しきことにあらず。

ソ— 何となれば惡を他人に行ふは、之れ其人を害するに等しき故なるか。

クリ 真に然り。

ソ— 然らば吾等復讐すべからず、又た吾等他人より如何なる害惡を加へらるゝことありとも、吾等は何人にも、惡に對して惡を行ふべきに非ざるなり。然りと雖クリトーンよ、余の君に一考を煩はさんとするは、君は真に口に言へるが如く、心にも亦しか思や否やにあり、何となれば此説たるや、多くの人々の取らざりし所にして、又た將來も取らざる所の者なるべければなり。而して此點に同意せざる者と同意せる者とは議論上全く共通の基礎なく、大に意見の異なるを見る時は、互に相輕侮するのみ。故に君は余の第一原理とせる所の、惡に對するに惡を以つて人を害し、復讐し、防禦するは決して正理に非ずとするの説に同意し、又た吾等の議論の前提となすとを承認するか。或は然らざれば之れに反對し、同意する

ことを否むか。何となれば此説たるや、之れ余の古より主義とせる所にして、今も尙ほ然る所たればなり。然りと雖君若し他に意見あらんには願くば、其言はんとする所を余に聽かせよ。若し君の意にして前と同一ならんには、余は尙ほ言論を進めん。

クリ 願くば論を進め、余は意見を變せざるなり。

ソー 余は論を進みて問はん。人は正理と認めたる所の事は之れを爲すべきものなるか、或は又た其正理に背きて可なるべきか。

クリ 人は正理とせし所を行ふべき筈のものなり。

ソー 若し之れ眞理なりとせば、其の之れが應用は如何ん。今ま若しアテーナイ人の意志に反きて脱獄せんとするは、余は何人にか害悪を加へたるものには非ざるか、或は寧ろ決して害す可からざる者を害せしに非ざるか。或は之れ吾等が以つて正理と認めたる所の主義を棄てたるものには非ざるか。君の意や如何ん。

クリ ソークラテースよ、余は答へ能はず。何となれば知らざればなり。

脱獄は人を害するもの

ソークラテース
國法及び政府を
擬人す

國法を破りて尙
は國家の存在を
望み得るか

國法は個人と對
等の約束を爲さ
ず

ソー 然らば此事を此くの如く考へん——假定して今ま余にして脱走
(名稱は何なりとも可なり、君の好むが如くに之れを云へ)せんとするに當
り、國法及び政府は余に來つて問うて曰く、「ソークラテースよ、汝は何を爲
さんとせるやを吾等に告げよ。汝は其の行爲を以つて吾等即ち法律及
び國家を、汝の力の及ぶ範圍に於て打破せんとせるか、汝は、國家なるもの
は、法律の決斷せし所に威力なく、各個人之れを侮蔑し、之れを蹂躪して、而
も尙ほよく存立して滅亡せざることを得ると想像せるや」と。グリトーン
よ。吾等是等の言語に對して、果して何と答ふべきぞ。何人と雖、殊に熟達
せる修辭家は、國法の宣告したる所は之れを遵守せざる可からざる所に
して、之れを無視するの惡なるを論ずるに於て、甚だ多くの言説あるべき
なり。而して吾等之れに答へて、「然り、然りと雖國家已に吾等に不正の宣
告を下して、吾等を害したり」と云ふとせんか。

クリ ソークラテースよ、大に善し。

ソー 國法必ず此く答へん、曰く、「之れ吾等が汝と約束したる所なる
か。或は汝は國法の命に従はんとするか」と。而して若し余にして國法

の此言に驚かんか。國法尙ほ附加して此く云はん、曰く「ソークラテースよ、汝は眼を開くよりも吾等に答へよ。汝は常に問答を爲すを習慣とせしに非ずや。汝若し吾等及び國家を打破する行爲を是認する所の不平あらば之れを云へ。第一汝をして此世に生れ出でしめしは吾等の力ならずや。汝の父母は吾等國法の助けに由つて結婚して汝を生みたり。汝若し此の結婚を正しうする所の吾等諸法律に對して不満あらんには之れを言へ」と。余答へて云はん、何の不満もあることなしと。法律又た謂はん、曰く「汝若し汝を教訓する所の養育法及び教育法に就いて不満あらば之れを言へ。此れを所理する所の法律は、汝の父に命じて、音樂及び體操を汝に學ばしめしは果して正しからざるか」と。余答へて云はん、正しと。法律又た云はん、曰く「然らば汝は吾等に由つて出産し、保育され教育されたるものにして、第一、汝は吾等の子たり、又た奴隸たること、是より前汝の父祖等が然りし如きことを否むことを得るか。若し眞に然りとせば、汝は吾等と同等の權利を有せるものに非ず、又た汝は吾等が汝等に對して爲したると同一なることを吾等に爲すの權利ありと思ふこと能は

子は父に反抗するを得ず

國家の生殺權

國家は至貴至重

國家に對するは父母に對するが如し

國家の命に惜れ従ふべし

ざるなり。汝若し父或は主人を有せりとせば、汝彼れの爲めに或は打たれ、或は侮辱せられ、或は彼れの手を以つて或る害惡を加へられたる時、汝は父或は主人を打ち或は侮辱するの權利ありとなすか——汝決して然りと云はざるべし。吾等は汝を殺す權利ありと思ふと同じく、汝は又た其の返報として汝の力の及ぶ所に於て、吾等を破壊し、汝の國家を滅ぼして可なりと思ふか。嗚呼真正の徳義の教師たる汝は、是く思考して正しとなすか。汝の如き哲學者にして、尙ほ吾等の國家は汝の父母祖先等よりも一層重く、高貴にして又た神聖に、而して諸神及び知慧ある人の尊重し、又た之れを慰安し、或は若し其の怒るある時は敬意を以つて柔和に之れに懇願すること父に對するよりも一層丁重にし、又た若し聽かれざる時は之れに従順なるべきことを發見すること能はざりしか。吾等若し國家に山つて罰せられ、或は禁獄され、或は笞杖さるゝことありとも、其刑罰は吾等慎黙して之れを受くべきなり。國家若し吾等を導きて戰場に至り、或は血を流さしめ、或は死せしむることありとも、吾等其命に従ふは之れ正理なりとす。而して何人と雖敵軍に降り、或は遁走し、或は列を脱す

個人は絕對的に精神及び主義の自由も無し

税賦を企つるは國家を害せんとするものなり

國家は汝にあらゆる善を與へ自由を許るせり

我國家を嫌はば他國に移住するを得たりしなり

るが如きことを爲すべからず。而して戰場たれ、法庭たれ、或は其他何れの處たれ、人は必ず其都市或は國家の命じたるが如く行ひ、又た吾等自己の意見を變じて、國家が認めて正理とせし所の見解に従はざる可からざることあるなり。人若し其父母に對して決して害惡を加ふ可からずとせば、其國家を害す可からざるは又た一層然りとなすこと。クリントンよ、余は何ぞ之れに答ふべきや。法律の言は眞なるか、或は然らざるか。

クリントン 思ふに甚だ正しき如し。

ソークラテースよ、若し之れ眞なりとせば、汝の目下企圖せる所は、之れ吾等を害せんとする所のものなりと考へざる可からず。何となれば、吾等は汝を世に生れ出でしめ、汝を保育し、汝を教育し、汝及び其他の一切の市人に與ふべき有らゆる善事は之を與へ、之れに加ふるに吾等全アテライナイ人に權利を發布して之れを與へたり。故に人若し相當の年齢に達し、都市の道とする所を見、又た吾等を熟知したる上にて、若し吾等を好まざらんには、彼れ其好む所に到り、又た其財産をも共に携へ去ることを得べく、吾等法律は毫も之れを禁ずることなく、

汝は國家に従ふ
ことを黙約せり

國家に従順な
るの三惡

ソークラテース
の脱獄は他人よ
りも一層惡行な

又た干渉することもなし。然るに吾等が正義を司り、又國家を治むる所の方法を熟知し、而も尙ほ此地に留まるは、之れ吾等の命する所に従ふとを黙約したるものと云ふべきなり。而して吾等に従順ならざるものは吾等の主張する如く、三重の惡を行へるものならざる可からず。第一、吾等に従順ならざるは、即ち之れ父母に従順ならざるものなり。第二、吾等は彼れの、教育の命令者なればなり。第三、彼れは正常に吾等の命令に従ふことを吾等に約したればなり。而して彼れ従順ならず、又た吾等の命令の惡なるの理由を吾等に陳辯すること、も之れを爲さざるなり。吾等は決して亂暴に彼れを責むるものに非ずして、吾等に従順なるか、或は不従順の理由を陳辯するか、兩者其一を擇ばしめたり。吾等此く案を提出せりと雖、彼れ其の兩者何れをも爲さざるなり。

「之れ實に汝に向けらるゝの問罪の言にして、殊にソークラテースよ、汝の企圖せる如く脱走を行ふに當つては、他のアテーナイ人に優りて、汝は一層責めらるべき人たるなり」と。余は其の何故なるやを問ふとせんか、彼等正當に余に向つて、余は他人に優りて此の法律に遵ふの約束を承認

ソークラテースは最も常に自國を愛したり

ソークラテース外國に行きしこと稀なり

外國の美を羨やむことなく自國に満足せり

ソークラテース國外放逐よりも死利を擇べり

せし者なるを謂ふて云はん、曰く、ソークラテースよ、汝が吾等及びアテーナイ市を嫌はざるとに就いては明瞭なる證據あつて存す。全アテーナイ人中、汝は最も不斷にアテーナイ市に住居し、決してアテーナイ市以外に出でざりしは、必らずや之れアテーナイ市を愛したるに由るならん。

汝はたゞ一度地峽の遊戯を觀んとして他國に行きたるとあると、兵役に服して他國に行きたるの外、決して祭禮遊戯を見んとしてだに、アテーナイ以外に、他國に出で行きしことあらず、又た人々の爲すが如く旅行せしことあらざるなり。汝は又た他の諸國或は諸國の法律を知らんとし、好奇心も之れを有せず、汝の愛情は吾等及び吾等の國家以外に出づるとなく、吾等法律は殊に汝の愛する所なりき。而して汝は吾等の政府に安んせり。又た此の國家はこゝに汝が子女を生みし所の國家にして、汝は此の國家を以つて満足せるの證たるなり。且つ汝若し願ひしならんは、汝の審問中其の罪をして追放の刑となすを得たりしなるべく、其の審問の時には、國家は之れを許可したりしと雖、今は之れを許るさざるなり。而して其の時汝は追放よりも死を以つて善なりととして之れを擇び、死は

國法に支配されることに同意せしむべきや

其の悲しむ所に非すと云へり。然るに今ま汝此の美麗なる感情を忘却し、吾等法律を尊敬せず、却つて之れを破らんとし、下等なる奴隸が爲さんが如く、汝は市民として誓ひたる所の約束に背を向けて脱走し去らんとせり。汝先づ第一に余の間ふ所に答へよ、——汝は單に言語のみに非ずして、又た實行上に於ても吾等法律に由つて支配されることに同意したりと云ふは、吾等誤れるか。之れ眞なるか或は否か」と。クリトーンよ、吾等如何に之れに答ふべきぞ。吾等同意せざる可からざるに非ずや。

クリトーン クラテースよ、他に如何ともすべきなし。

之れ自由の約束なりき

ソークラテース 然らば法律等は又た此く云はざるか、曰く「ソークラテースよ、汝は十分なる時を有して吾等と爲したる同意の約束を破らんとせるか。

七十年間恩老の時日ありき

此の約束たるや、決して急速に壓制され、或は欺かれて爲したるものに非ざるべく、其可否の思考に就いては、汝は七十年の年月を有したりしなり。

去就の自由ありき

此の長年月の間、汝若し吾等を好まず、又た、吾等の約束にして好まじからずとせば、此のアテーナイ市を去りて何處に至るとも汝の自由たりしなり。汝は自ら心に擇び、汝が數々其政府の善良なることを稱揚し居たる

汝は心よりアテ
：ナイを愛した
り

今に至つて約に
背かんとするか

脱獄と後難

所のラケガイモーン、或はクレター、或は其他のグレンシア諸國何れに至る
ごも自由たりしなり。然るに汝は他の一切のアターナイ人に優りて最
もアターナイの國家、他語以つて謂はゞ、吾等即ち國家の法律を愛したる
者の如し。(何となれば何人と雖法律なき國家を好む者あらざる可けれ
ばなり)。其の之れを愛するが故に、汝は決して國外に出づることなく、賊
者、盲者、及び癡疾者等が移動することなきよりも、汝は一層移動せざりし
なり。然るに今に至つて汝は其の約に背きて脱走せんとす。ソークラ
テースよ、汝若し余の忠告を用ゐば、決して此くの如きことを爲すことな
く、アターナイ市を脱出して、自ら人に笑はるゝ者となること勿れ。

「善く此事を熟考せよ、今若し汝其道を誤り、道ならざる事を爲すに於て
は、汝は自己及び友人等に果して何の善きとを爲すものぞ。爲めに汝の
友人等は放逐され、市民たるの資格を失ひ、又た其財産を沒收さるべきや
殆ど明瞭なることとなす。而して汝自身に於ては、近隣の都市例へばテ
ーバイ或はメガラ等に遁れんか、是等の都市は最も善く治まれる所にし
て、必ず汝の敵となり、其政府は汝に反對すべく、其等の都市の愛國者は盡

アターバイに至ら
んか

有罪人、青年の
腐敗者と云はれ

此くても生存の
價値あるか

耻づるなく尙ほ
正義法律等を勉
らんとするか

テッサリアに至
らんか

く汝に對して惡視を放ち、汝を以つて法律を破壊するものとなし、其裁判官等は心中汝を以つて有罪なりとするの正當なるの確信を起こすべきなり。何となれば法律を腐敗せしむる者は青年或は愚昧なる人々を腐敗せしむるよりも一層大なる惡事たればなり。此に於て汝は此くの如き善く治まれる諸都市或は有徳の人々の地を去りて他に行かんか、此くて汝尙ほ生存の價値ありとなすか。或は耻づるの心なくして彼等に到り、彼等と輿に語らんとするか、ソークラテースよ、若し彼等と輿に語らんとせば、果して何事を語らんとするぞ。汝は此處に至りても尙ほ徳義、正義、制度、法律等の人間最善のものなるを云はんとするか。之れ果して汝に相應はじきことなりと云ふべきか。否な決して然らざるべし。汝若し善く治まれる諸國を去りて、テッサリアなる、クリトーンの友人等の居る所の都市に至らんか、此地は甚しき混亂放肆ありて、其の地の人々は、汝が破獄して遁走するに當り、或は山羊の皮を着し、或は其の他の假扮を用ひ、其の他種々遁走者の爲す所の變態をなしたる珍談に耳を傾けて、奇として之れを喜ぶことあるべし。然りと雖、汝が其の老齡に於て、餘年短かき

墮落のみ

子女の爲めに生
きんとするか

却つて不利なり

命を生き延びんとする卑しむべき欲望の爲めに、最も神聖なる法律を破りたることを言ひて、汝に之れを想ひ起こさしむる者は、一人もあること無しとするか。然り、汝若し彼等人々をして怒らしむることなき時は其の事無事なるべしと雖、汝彼等を怒らしむるとあるに於ては、汝は彼等より多くの下等墮落の嘲笑罵詈の聲を聽かん。汝は生存するを得べし、然りと雖、如何に生存するか——必ずや凡ての人に阿諛する者となり、凡ての人の僕奴となるべきなり。而して其の爲す所の事は何ぞや——テッサリアに於て或は飲み、或は食ひ、又た食物を得んが爲めに諸所に徘徊すべきなり。此くて汝は、正義及び徳義に關する美麗なる感情果して何處にかある。汝或は云はん、汝の生きんとするは其子等の爲めにして、之れを養育し、之れを教育せんが爲めなりと、而して汝其子等をテッサリアに連れ行き、以つて汝の子等のアテナイ人たる資格を失喪せしめんとせんか。之れ果して汝の子等に取つて利益あることなるか。或は汝の子等は之れをアテナイ市に残し置き、たとひ汝は他國に行きて不在なりとも、尙ほ生存せるに於ては、汝の友人は一層能く汝の子等に注意を與ふべしと思

友人あるに非ずや

生命は第一義に非ず正義之れ第一義

正義と未來界の幸福

脱獄は惡を以つて惡に報ゆることなり

ふか。或は汝若しテッサリアの住民となる時は、汝の友人は汝の子等を注意すべしと雖、若し他界の人となる時は、彼等は汝の子等に注意することなしと想像するか。否な、自ら友人なりと云ふ所の者は、之れ眞の友人にして、如何なる事なりとも善を計る者なり、必ず其の然るや確實なり。

「然らばソークラテースよ、汝を養育成長せしめたる所の吾等の言を傾聴せよ。決して生命及び子等を第一の念頭に置き、正義を後段のものとすることなく、第一に正義を思ふことを爲せ、然らば未來界の君主必ず汝を是認すべし。然るに汝若しクリトーンの言へる如く爲す時は、汝は勿論、汝に屬する者盡く、現世に於ても未來に於ても、幸福なるなく、神聖なるなく、正義なるなからん。今若し汝無實の罪に由つて死せんには、之れ惡を受けしものにして、惡を加へし者に非ず、人の爲めに犠牲に供せられしものにして、法律が犠牲に供したるに非ざるなり。然るに汝若し脱走せんか、之れ惡に報ふるに惡を以つてし、害に報ふるに害を以つてし、吾等に約したる所を破り、害すべからざる人々、即汝自身、汝の友人、汝の國家及び吾等を害せるものにして、吾等汝の生存中は、大に汝に對して怒り、又吾等

クリトーンの言に聽くこと勿れ

此言耳に鳴りひいけり

神意に従はんのみ

の兄弟たる所の未來他界の諸法律も、必ず汝を敵として受くるならん。何となれば汝は力を盡くして吾等を破壊せんとしたるを彼等知れるを以つてなり。故に吾等の言に聽き、決してクリトーンの言を聽くこと勿れ

愛するクリトーンよ、之れ余の耳にさゝやく如く思はるゝ音聲にして、神秘教徒の耳に於ける笛の音の如きなり。余は云ふ、此音聲余の耳に鳴り聽こゑて、其の他の音聲を聽くことを得ざらしむる所のものなりと。而して余は知る、君の尙ほ言はんとする所のものは已に徒爾なることを。然りと雖君若し何事なりとも言はんとする所あらば願くば之れを語れ。

クリトーン クラテースよ、余は何事も云ふべきなし。

ソール 然らば余は神の命する所に従はんのみ。

フ
ァ
イ
ド
ー
ン



ファイドーン解題

本篇の筋

數月或は數年の後ソークラテースの愛したる門弟子ファイドーン、ペロポンネーソスの一都府フリウスにて、ソークラテースの臨終の話しをエヘクラテースに語れり。其當時の状況の最も詳細なる話しは、遠くに在る所の友人には甚だ興味あり、又た話者たる者も熱心を以つて其奮師の臨終を語れるなり。本篇は即チファイドーンの談話なり。

初めに、ソークラテースの死刑の日の遅延せしは、デーロス島の祭禮に派遣せし船の往復三十日間は、アテーナイ市にては死刑を施行せざるに由ることを述べ、其間日々諸友人はソークラテースを獄中に訪問して談話したるが、死刑の當日は人々例刻よりも早く獄に來りて談話せることを語る。其日來會せるはテーバイ人シンミアス及びケーベスあり、之れフィロオスの門弟子なるが、ソークラテース「其魔術に由つてテーバイより引き付けたり」(メモラビリア三卷十一章)と云ふ所のものなり。又たヘルモゲチース、此人よりキセノフォーンはソークラテースの審問の時の状

情を聞きし人なり(メモラピリア四卷八章)狂人の稱あるアポロドロス、メガラ人エウクレイデース、テルプシオンあり、クテシッポス、アンチステニス、メチキセノス、其他多の名の知れざる人々あり。アリスチッポス、クレオンプロトス及びプラトーンは其日此場に在らざりき。是等の人々の入り來りし時、ソークラテースはクリトーンの家僕をして、妻キサントッペ及び子等を家に連れ歸らしめたり。ソークラテース此時鐵鎖の縛を解かれ、苦痛より快樂生ずるを語り、若しエソップならんには快樂苦痛を表はすに一頷にして兩體の動物の比喩を以てすべきなりと云へり。ソークラテースは元來詩を作りしとなかりしが、獄に入りしより、エソップの小話を詩に直ほしたるもあり。而して詩人エエノスなるもの其理由をケーベスに問ひしとありしが、今まソークラテースが、エソップの名を云ひしより思ひ起し、エエノスの意をソークラテースに告ぐ。ソークラテース其理由を語り、且つ曰く、エエノスをして余の死に従ひ來れど傳言せよと。シンミアス其異言に驚くや、ソークラテース曰く、エエノスは哲學者に非ずや、哲學者は死を學ぶ者なりと。されども自殺は之を不善となす。ケ

ソークラテース曰く、人は神の所有なり、神命なくして死するは、不良なる家畜の随意に死せんとするが如きものなりと。ケーベス、ソークラテースの死の決心を評して、之れ諸神より遣れ去らんとする人なりとなす。ソークラテース答ふるに自己は、善と智との他の神の前に至るものなりとし、死の悲しむべきものに非ざることを以つてす。シンミアス其理由の説明を求む。

ソークラテース答へて曰く、哲學者は死を求むる者なれば死時近づくも悲しむを安せずと。シンミアス曰く、世人若し此言を聞かば必ず笑ふべしと。ソークラテース答て曰く、之れ世人は死の性質を知らざるに由る、然らずんば哲學者如何でか死を求めんと。死は肉體と靈魂との分離なり、靈魂が最もよく肉體の關係を離れて單獨なるを得るは、生活の最上の者にして、肉體上の快樂を意とせざる哲學者に取つては、生命は活くるの價值なき者にして、是等の快樂に心なき者は死の如きものとなすと。

ソークラテース又た知識を得るに肉體の感覺は甚だ不確實のものとなし、真理は思想に由つて之れに遠するを得となし、肉體に告別して心意

に統一せる時思想は最も善良なりとなす。之れ哲學者が肉體を脱出せんことを求むるの理由たるなり。其他一切の惡は肉體あるより來る者なり、故に肉體と分離することは最も望まじきこととなす。

且つ哲學者は善惡に關して俗人と異なる意見を有す。何となれば人々は他の大なる危難を恐るゝが故に勇氣あり、他の大なる快樂を得んが爲めに節制あり、然るに哲學者は、此快樂苦痛の兩換主義を卑しむ、之れを以つて商買上の交換なり、徳義に非ずとなし、一切の徳義も知識も皆な之れ靈魂を淨むることとなす、之れソークラテースが其神其友を棄てて去り行くを咎めたる者に答へし所なり。

然るに尙ほ靈魂が肉體を脱出したる後は煙の如く空氣の如く、風に吹かれて消え去ることを恐るゝ者あり、ソークラテース之れに答ふるに先づ古代の傳説たる、人死せば靈魂下なる他界に在りて、又た其れより生者を生ずとの事を以つてし。次に之れを哲學上、反對は反對より生ずとの論に移して證明し、若し死は生より、生は死より生ずることなくんば、萬物盡く死に終るべきのみとなす。

靈魂前世存在説は又た之れ靈魂不死の一證となす。之れプラトーン
創唱の回想説に基づくものにして、其理由は「メノーン」篇中のものと同じ
く、數學の潛知よりするものなり。こゝに又た聯想作用なるものありて、
一の念は他の念を聯想せしめ、木石等の同等なる諸片は一層上なる絶對
の同等の念を聯想しむ。而して物質上の同等は、之れを其標準たる所の
絶對の同等に比較する時は必ず劣れり。而して標準は其度らるゝ物の
前に存在すべく、同等の念は可視物の同等より前に存在せざる可からず。
其他吾等美、正、善及び感覺の助を借らずして存する諸觀念を有す。若し
是等にして具體物より前、及び感覺より前に存すとせば、必ずや是等は前
世より存在せるものならざる可からず。若し是等の觀念前世より存在
すとせば、吾等の靈魂は又た前世より存在したるものならざる可からず。
靈魂の前世の存在は一に觀念説に倚るものとなす。

シンミアス及びケーベス、共に靈魂の前世存在説に同意したりと雖、死
後の不死は未だ證明されずとなす。ソークラテース前論に返へり、生は死
より來るとせば、靈魂は死後も存せざる可からざるを答ふ。又た死後靈

魂は風に吹かれて飛散するとあらざるかとの疑問に對して答へて曰く、かの飛散するものは複合物なるか單一物なるか、變化すべき物なるか變化するなき物なるか、可視物なるか不可視の物なるか——其の後者にして決して前者に非ざるや明かなり。而して靈魂は自己の純潔なる思想に於いては不變のものにして、決して飛散すべき性質のものに非ざるなり。且つ靈魂は命令し、肉體は之に事ふ、此點よりする時は一は神の如く一は人間の如し。然りと雖若し靈魂肉體を使用する時は變化の境界に引き入れらるゝと雖、能く靈魂自己に歸へる時は永遠不死清淨の世界に至らん。人が幽靈となりて墓畔に隱見するは、靈魂肉體上の事に執着するよりか、可視の分子靈魂中の浸潤し、爲めに形ある者となるなり。而して不淨の靈魂は遂に禽獸の體內に入ると雖、かの清淨を保ちたる哲學者の靈魂は諸神の伴侶となりて幸福を受けん。之れ哲學者が肉欲を心とせざる理由となす。且つ哲學者に取つて肉體の最大惡なるは、激烈なる感覺が真知を錯亂するにありと。

シンミアス、ソークラテースの論を駁して曰く、靈魂は一種の調和なり、

「リラ」琴より後に殘留すること能はず。之れと同じく靈魂は肉體より後に殘るとの證は如何んど。ケーベスも亦他の比喻を以つてソークラテースを駁して曰く、人は數多の衣服よりは永生なりと雖、最後の衣服は人間よりも後に殘るなり、之れと同じく靈魂は數個の肉體を經過すと雖、最後には衰耗して死するには非ざるかと。

此論甚だ有力にして、人々皆ソークラテースの論は破れたる者として、大に失望落膽して一坐寂然として聲なし。然るにソークラテースは泰然自若、宛も一個の大將が敗軍散亂の兵士を集合し再び隊伍を整へ肅々として議論の戰場に向ふが如くにして、先づ「リラ」琴及び調和の比喻を以つて不當となし、調和は音聲、絃、及び琴よりも後に生ずるものなりと雖、靈魂は肉體よりも前に存在せり。調和は結果なりと雖、靈魂は結果に非ず。且つ靈魂若し調和なりせば、何故に靈魂に善惡の種類あるや、調和には度ありと雖、靈魂には度なる者なし。又た靈魂は肉體感情に反抗することを爲す、之れ決して肉體より後に生じ之れに隨ふものに非ざるを示めずとなし、ハルモニア(調和)の女神は屈服し玉へりと雖、其夫の神カドモスは如

何に神鎮め申すべしや、と云ひつゝケーベスの議論に答へんとす。

而して之れに關してソークラテース自己の精神上の經驗を語るべしとなし、其若かりし時自然に關する學問に心を傾け、萬物の原因及び其然るの理由等を研究せしと雖、毫も満足を得るとなく、矛盾は依然として解釋するに能はざりしとなし、或時、人のアナキサゴラスの書を讀むを聽き、「心意」は萬物の原因なりとの語ありしより、大に望を此學說に屬せしと雖、之れ亦遂に要領を得ず大失望に陥りたるを言ひ、且つ此くの如き研究を以つて危険なりとし、以前に決定したる所の觀念說の安全なる研究法に據るを以つて優れりとなし、觀念說を以つてする時は、容易に靈魂不死を説明し得べしとなせり。

ソークラテース、先づ美、善、大、及び其他の觀念の存在せることの承認を得たる後、物の然るの理由の説明に進みて曰く、吾等が物を稱して美と云ふは、色彩形狀に非ずして其物「美」なる觀念を有せるに由る、物の大なるは「大」なる觀念其物に存せるに由る、物の小なるは「小」なる觀念其物に存せるに由る、而して反對の觀念は同時に同一物に存すると能はず。故に一の

觀念近づく時は、他の觀念は退隱するなり。單に之れ反對物其物のみに然るに非ずして、其反對物たる觀念と分離すること能はざるものも互に相拒反す。例せば寒と熱とは相反するものにして、熱と分離せしむべからざる火は、寒と分離せしむべからざる雪と一致共存すべからざるが如く、奇數と偶數と三と四との例に於ても亦然り。此くて死と生とは相拒反するのみに止まらず、生命と分離せしむ可からざる所の靈魂は又た死を拒斥す。故に死を許容せず、不死たるなり、不死は不滅なり。故に靈魂は死の近づくや消滅せずして退隱するなり。

此に於て靈魂不死に對する反對論は緘黙せり。今や其應用を論せざる可からず。若し靈魂不死なりとせば、人は如何に行爲せば可なるべきか、死は萬事の終りに非ずして死後の世界あり永生あり。若し死と共に靈魂消滅するものならんには、惡人は其罰を被ることなく、大なる利得なるべしと雖、靈魂は不死にして審判を受け、其應報を得ざる可からず、純潔なる靈魂と不純の靈魂とは、其至るべき所を異にすとす。

而してソークラテース地球は一大球形のものにして天の中央にあり

となし、想像を逞うして種々の場所あるを説き、吾等の住せる所は地球の表面の一種の凹窪にして、天上の地に比する時は甚だ劣り、其美、其完全到底比較すべからざるものにして、天上の地は色彩光華一切善盡くし美盡くし、其地に住する者は非常なる幸福を享くとす。

地上の凹窪は其數甚だ多く、大なるあり小なるあり、深きあり浅きありて皆な地の内部に通じ、又たタルタロスなる大地獄ありて、水、泥土、及び火の河流は之れに流注し、其一部は表面に出でて湖水となり、河となり。海となり、又た火山となる。元來タルタロスには常に上下の動搖ありて、水は常に上下して地球の下に至り、又た上に至り、其進路に當つて湖水、河流等を作る。而して四大河あり種々の方向に、種々の地を通りて流れ、水の河あり火の河あり。其内アヘローン河はアヘルシア湖に至る。此河は之れ死者が地球に再歸するを待つ所なりとす。

死者は盡く審判を受けざる可からず。其罪の重大にして治すべからざる者はタルタロス地獄に投入されて再び出づるとなく、其他輕き罪の者は其れに應じたる罰を受け、純潔なる靈魂は上なる世界に住すること

を得。

之れ地球の記事なりと雖、ソークラテース之れを以つて文字通りに正確なりと云ふに非ず、或は此くの如きものなるべしと云ふにあるのみ。

今や時は來り、ソークラテース毒を飲まざる可からざるなり。クリトーン埋葬は如何にすべきやを問ふ。ソークラテース答へて曰く、屍體はソークラテースに非ざれば如何にするとも可なりと。大懼に毒杯を傾けたり。人々今までは悲歎を制し居たるも、こゝに於て制する能はず、アポロドーロスの如きは、聲を揚げて泣き悲しみ、其他の人も皆其れが爲めに感動を受けたり。而してソークラテースは獨平然として人々を勵まし居たり。されども毒藥今や其勢力を及ぼし遂に冥す。最後の遺言は、「クリトーンよ、余はアスクレーピオス神社に雄鶏を負へり、余の爲めに此事を忘るゝ勿れ」と云ふにありき。ソークラテースの死せし眼を閉ぢ、口を結ばしめしは老年の親友クリトーンなりき。

○

本編は靈魂不死を論ずるものなりと雖、吾人は此問題に就いては此に

論ずることなかるべし。プラトリーの論證の不完全のもの素より甚だ多くして、其學説は或は廢ることありとするも、たゞ其高尚なる精神に至つては、實に不朽のものたるべし。

其死に臨みて泰然自若たる、之れ吾人の感ずる所にして、吾人は此光景中のソークラテースを見る時は、之れを憫れむの情起ると云はんよりも、寧ろ其容貌、言語、及び動作に於て高尚に、大膽に、又た堂々たる威嚴に打たるゝなり。彼れ毫も平常と異なることなく、たゞ温和に、優しくなりしのみ。又た其議論を好む事に於ても、毫も減することなく、獄吏がソークラテースに注意するに、談話は發熱せしめ毒藥の効力を薄くするを以つてすと雖、毫も議論を止めざりしなり。

其愛するフアイドリーの頭を撫で、美麗なる髪を手に弄しつゝ、尙ほ滑稽を交へて議論せるが如き、平常のソークラテースと毫も異らざるなり。

又た其妻キサントッペ及び子等を家に歸らしめし如き、決してソークラテースの木石の人に非ざるを示めし、又た人の臨終は靜肅にすべきなりとの周到なる注意は、其議論の周到なるに等しと云ふべきなり。

實にソークラテースの臨終は、常人と異にして寧ろ精神高揚し、其超然として人間の利害を脱出せるが如き、其靈魂上の哲學よりも、人格の高尙堅固靜平なるは、却つて人心に大なる感動を起すなるべし。

○

本篇中の對話人物は二種に分類するを得べし。第一は私交上の朋友なり、第二は議論に關係せるものなり。

クリトーンは已に「エウチデモス」及び「クリトーン」篇中に出でたる人なるが、ソークラテースと同年輩にして、ソークラテースの若き門弟子等と異なる關係の人なり。彼れ、世間一様の人物にして家甚だ富めり。別に哲學の傾向は有せざりしと雖、ソークラテースの最も仲善き朋友にして、ソークラテースが別室にて其家族に後事を命じ、告別する時にも、クリトーンのみは其場に在り、又た遺言ありやを聽き、又たソークラテースの絶息後、近づきて其眼を閉ぢしめたる如きの義務を完ふせし人なり。

ソークラテースの友人中獄吏ありしことも決して忘る可からざるなり。性甚だ温良にして、其官命をソークラテースに傳ふるに際して、泣き

悲しみしが如き、よく其性質を示めすものなり。

哲學の議論には關係せざりしと雖、こゝにアポロドーロスなる者あり、宴會篇中に「狂人」と稱されたる同一人なり。ソークラテースの毒藥を飲むに當つて、大聲を揚げて泣き悲しみたるに由つても、其性の感動し易き人なるを知るべし。又た小兒の如く一意ソークラテースに依頼せるを知る。

フアイドーンは、ソークラテースの「愛せる門弟子」にして、耶蘇のヨハ子に於けるが如く、「其胸にもたれて」には非すと雖、ソークラテースの側に坐しソークラテース其美しき頭髮を撫でつゝ談話せるが如き、其大に彼れを愛せるとを知る。彼れアポロドーロスの如く、議論に關係せざりしと雖、最もソークラテースの談話を聽くを楽しみしなり。ソークラテース毒杯を仰ぎし時悲歎禁せざるに及びて、其面を蔽ひて泣きしは、其心情の靜かなるを示めし、アポロドーロスの大聲に泣き叫びたるに對照すべし。

シンミアス及びケーベスは本篇の主なる議論者にして、ピタゴラス哲學派のテーパーイ人フィロラオスの門人なり、何れも議論に長じ、能く疑ひ能

く論じ、十分自己の満足を得るまでは、根柢まで論じ盡くさんとの勇氣ある人物なり。『ファイドロス』篇中には、ソークラテースはシンミアスを以つて最も議論に長せるものとなし、本篇中にはケーペースを以つて人間中最も事物を信せざる者となせり。

メ子キセノス、クテシッポス、リュシス等は舊友なり。エズノスは『辯證』篇中已に諷刺せる所あり。アイスヒチース及びエビゲチースは、審問の時に居たる人なり。エウクレイデース及びテルブシオンは『テアイテトス』篇中に出で、ヘルモゲチースは『クラテュロス』篇中に出づる人物なり。キセノフオーンは此時アジアに在りしが、プラトーン其名をだに記載せざりしことに就いては十分之れを説明することを得ざるなり。プラトーンの此場に在らざりしは病なりしを以つて來り能はざりしなり。

○

本篇の位置は甚だ不明瞭にして、觀念論は確かにソークラテースの哲學を超脱し、プラトーンの其他の篇中のものよりも最も完全に發展せるものなり。靈魂不死論は果してソークラテースの哲學なりしや否や、キ

靈魂不死論はソークラテースの説きし所なるか

セノフォーンの『メモラピリア』は此事に就いて云ふ所なく、プラトーンの初めの部分の書は殆ど反對の説を爲せり。然りと雖ソークラテースの宗教心、敬神、及び『ダイモーン』等の信仰に由つて見る時は、尙ほ之れソークラテースの説きしものと云ふを常れりとなす。而して『辯證』篇及び『クリトロン』篇の言は此事を證明すと云ふべきなり。

○

本篇と他の關係
諸篇

本篇はプラトーンのソークラテース主義の時代のものにも非ず、又、プラトーンが觀念説を忘れたる後代のものにも非ずして、其中間のものなるべし。其著述の精密なる年代は之を問はず、ソークラテースの傳記を知るの點よりして、之れを『メノーン』、『エウチフローン』、『宴會』、『辯證』、『クリトロン』等に連結して讀むを以つて便利となす。又た『メノーン』、『フアイドロス』及び『フアイドロン』は靈魂不死と觀念との關係を論せる點に於て其間に連鎖あるものと謂ふべし。其『メノーン』の觀念説は靈魂輪廻の信仰に基づくものにして、此説又た『フアイドロス』、『理想國』及び『チャイオス』等の諸篇に再出し、皆な應報説を以つて連結さるゝなり。『フアイドロス』中の靈魂不死説は、

其運動原理なりとの説に基づき、「理想國」にては靈魂自然の連續説に基づくとす。「チャイオス」篇にては靈魂は至上の創造主より來り、死すれば上りて其同類たる所の星に行くか或は然らざれば下等動物の體內に入るとなし。「辯證」篇中には「フアイドーン」篇と殆ど同一の論を爲し、「テアイテース」篇中には、靈魂飛揚して神と與ならんとを欲する旨を記せり。「宴會」篇は「フアイドーン」と相似、又た相似ざる點ありて、不死論の始めの部は子孫の生殖及び死後名譽の永生を言ふものなりと雖、後段に至つては、美の高尙なる示現に接し、以つて不死なるを得と説く。其立論や此くの如く夫れ異れりと雖、プラトーンは深く靈魂不死の信念を有せるものと云ふべし。

○

本篇は其他の對話書の如く、始め一見したるよりも、一層組織を有し、議論の連絡は前代の諸哲學に基づくものとなす。其論神秘説を以つて始め、次にヘーラクレイトスの、反對は反對より生ずとの説に及び、次にピタゴラスの調和説及び、輪廻説に及び、プラトーン獨創の回想論を以つて議

「フアイドーン」はして
本篇の統一せる
こと

論一步を進め、次にアナキサゴラスの心意説を論じ、終に靈魂は觀念と分離せしむ可からざるものなりとの確信に達し、此に議論の舞臺に神話の幕を下し、一轉して實行問題に進む。

本篇は其「ドラマ」としては最も統一あるものにして、プラトーンは死及び苦痛の終局は美を以つて蔽はるべきものなりとの、クシシア人、否寧ろ一般美術の條件を完うしたるものと謂ふべし。其對話の始めに當つて諸友人を集會せしめたる、哲學上の議論の場には在らざるを宜しとして其妻キサントッペを家に歸へらしめたる、又た後に至りて最後の告別の爲めに子等を伴ひて獄中に来りたる、シンミアスの爲めにソークラテースの議論の一時論破されし如く見へし時の人々の失望の状況、ソークラテースが愛する門弟子フアイドーンの美麗なる髪を弄するの趣、最後の瞬間に至り、ソークラテース一人能く泰然たる―此くの如きは實に美術の大傑作と稱すべきなり。

「術を隠蔽するの術」は、ソークラテースの審問及び死を叙述せる所のプラトーンの是等諸篇に於て最も完全に存すと云ふべし。其質朴なる叙

事は却つて一層の興味を興へ、以つて深切なる感動を生ぜしむ。古今詩歌に歴史に、プラトーンの書中のソークラテースの臨終に比すべき大悲劇は、決して他に之れなしと斷言するを得べし。

ファイドーン

對話人物

場

ファイドーンと
ソークラテース

ファイドーン

對話人物

ファイドーン—話者

エヘクラテース

(フリウス人)
譯者

ソークラテース

アポロドーロス

シンミアス

ケーベス

クリトーン

獄卒

場—ソークラテースの獄内

此談話を爲せし場所—フリウス



エヘ
ファイドーンよ、ソークラテースの毒を仰ぎし時、君はソークラテースと共に獄内に在りしかか。

フアイ 然り、エヘクラテースよ、余は其場に居たり。

エヘ 余はソークラテースの最後に就いて聽かんことを希ふ。其最後の時のソークラテースの言や如何ん。ソークラテースは毒を仰ぎて死せしとは吾等の知る所なりと雖、其他詳細の事は何人も之れを知るなし。何となればフリウス人は當時アテーナイに到りしもの一人もあるなく、又た他國人にしてアテーナイより此地に來りしものなきも已に久しぶきことにして、此くて吾等ソークラテースの死に就いて明細の事を知らざるなり。

フアイ 君は未だ審問の状況を聽かざりしか。

エヘ 然り、人ありて審問の状況を語りしと雖、死刑宣告の後久しくして死に處せられしの理由は之れを知らざるなり。其理由は何なりしぞ。

フアイ エヘクラテースよ、之れ實に偶然のことにして、會々アテーナイ人のデーロス島に派遣する船の艦、ソークラテースの審問の前日加冠されしを以つてなり。

エヘ 其船とは如何なる船ぞ。

ソクラテースの死はデーロスの爲めに遅延す

エヘ、フアイドーン、ソークラテースの死せし時、彼れを救へり。況を語らんことを求む

フアイ　アテーナイ人の傳説に由る時は、テューセウスのクレテー島に至る時、十四人の青年を伴ひて此船に同乗し、是等の青年及び自己を救へり。時に彼等アポローンの神に誓ふに、若し彼等救助さるゝならんには、必ず毎歲デーロス島に船を派遣すべしと。此くて此習慣今も尙は繼續し、此船の艦のアポローンの祭司に加冠されし日より、デーロス島に往きて歸るの間は、神聖なる期節にして、此期節内には、アテーナイ市は公刑等に由つて、決して穢がすことを許さざるなり。而して若し風波順ならざる時は、往復非常の日子を費やすことにして、今ま余の言ひしが如く、此船審問の前日に加冠されしを以つて、ソークラテース獄中に在つて、死刑宣告後久しく死に所せられざりしなり。之れ其理由となす。

エヘ　フアイドーンよ、ソークラテースの其時の動作や如何ん、如何なることをか言ひ、或は行ひたる。彼れと共に在りし友人は誰々なりしぞ。或は官吏は人々の面接を禁じ、ソークラテースの死せし時は、彼れの傍には友人も有ることなかりしか。

フアイ　否な、數名の友人はソークラテースと共にありき。

エへ 君若し差支なくんば成らん限り正確に、時の状況を余に告げんことは余の切望する所なり。

ファイ 余は今更別に爲す事なし、然らば君の願望を満足せしむることをかめん。實に余は自ら之れを語るとも、或は人の語れるを聴くとも、ソークラテースの事を想ひ起さしめらるゝは最大なる歡びとなす所なり。

エへ 君は、君の心と同様なる多くの聽聞者を有するなるべし、願くは成らん限り正確に語り聽かせよ。

ファイ 余はソークラテースと共にありて實に奇異の感ありき。何となれば、エヘクラテースよ、余は朋友の臨終の席にありとの感あらざりしを以つてなり。故に余はソークラテースを憐れむの情あらざりき。實に彼れの死や大膽にして畏るゝ所なく、其言語及び動作は高尚優美にして、彼れや幸福の人の如く想はれたり。思ふに、彼れの他界に行くや、之れ必ず神の招きに由るものにして、若し何人か彼地に到着して幸福なるものありしとせば、彼れ必ずや幸福の人たるべきなり。而して此くの如きの場合に於ては、何人も悲哀の情の起るは其自然なりと雖、余は彼れの此

状態を見て、彼れを憐れと思ふことあらざりき。然りと雖哲學の談話(之れ吾等の常に爲す所)の時常に感ずる如き愉快は之れを感ぜざりしなり。余素より愉快を感ぜざるに非すと雖、其内又た一種奇異なる苦痛の分子混入せり。之れ、直ちに彼れの死する者なることを考ふるに由るものにして、此兩感情胸中に往來し、吾等交々笑ひ又た泣けり。殊に感情深きアポロドーロスの如きは甚しかりき。君は此人を知れりや。

エへ 然り。

ファイ 彼れ全く其正態を失ひ、吾等爲めに大に感動されたり。

エへ 其場に在りしは誰々なるぞ。

ファイ アテーナイ人にしてアポロドーロスの他に、クリトブロス及び其父クリトーン、ヘルモゲチース、エピゲチース、アイスヒチース、アンチステチース等にして、バイアニア區のクテシッポス、メチキセノス及び其他の人々ありき。若し余の想ふ所にして誤らずんば、プラトーンは病氣なりしを以つて此場に來り能はざりしなり。

エへ 他國人もありしか。

ソークラテースの門人及び知人

此日プラトーンは疾病なりき

ファイ 然り、テーバイ人シンミアス、及びケーベス、及びファイドンデース及びメガラより來りしエウクレイデース及びテルブシオン等あり。

エヘ アリスチックポス及びクレオンプロトスは其場にありしか。

ファイ 否、彼等アイギナにありしと云ふ。

エヘ 尙ほ此他にはあらざりしか。

ファイ 大畧是等は凡てなりしと思ふ。

エヘ 扱て君等の語りし所の事は如何ん。

諸弟子日々獄中に會合す

ファイ 余は始より語りて、談話の全體をこゝに繰りかへさん。此數日

前より吾等毎朝早くソークラテースの審問ありし法庭に會合すること

となせり。法庭は監獄より遠からざる所にあり。こゝに吾等落ち合ひ

て監獄の門の開くまで、互に語り合ひ居たり(監獄の門は早く開かれざる

故に)。而して門開かるゝに及びて吾等獄内に入り終日ソークラテース

と談話し居たり。最終の朝は吾等平常よりも早く會合せり、何となれば

其前日の夕刻、吾等監獄より歸りたる後、デーロス島よりの神聖なる船歸

航せりとの報道に接したるを以つて、吾等平常よりも甚だ早く例の場所

ソークラテースの死の當日は人平常より早く會合す

ソークラテース
の妻キサンチッ
ペ

ソークラテース
鐵鎖を解かれて
快樂を感じ快樂
と苦痛との相関
なるを説く

に集合することゝなせしなり。吾等監獄に到りし時、門衛、吾等を内に入らしめずして、却つて自ら出で來りて、暫時吾等に待つべしと云うて曰く、「今ま十一政官ソークラテースと共にあり、ソークラテースの鐵鎖を解き、今日死すべきことの宣告を與ふる時なり」と。門衛やがて歸り來りて吾等をして内に入らしめたり。吾等、獄内に入りし時、ソークラテース、今や其縛されたる鐵鎖を解かれ、君の知れるキサンチッペ、傍に其の子を懷きて坐し居たるを見たり。彼女の吾等を見るや、凡て婦女子の通性として、泣き悲しみて謂うて曰く、「あゝソークラテースよ、おん身が朋友の人々と談話し、朋友の人々がおん身と談話するは最後の日なるよ」と。ソークラテース、クリトーンの方を向きて謂うて曰く、「クリトーンよ、願くは何人かをしてキサンチッペを家に送り歸へらしめよ」と。因つてクリトーンの内、或者、泣き悲しみ、正體なき彼女を家に連れ歸へれり。彼女の歸へりし後、ソークラテース臥床の上に坐し、膝を屈めて摩擦しつゝ人々に謂うて曰く、「實に奇妙なるは吾等の快樂と稱するものなるかな。又た其反對なりと考へ得る所の苦痛なるものとの關係も不思議なりと謂ふべし。實に

是等快樂苦痛は決して同時に俱在するものに非すと雖、其一方を得んとするものは、又た他の一方をも之を取らざるを得ざるなり。快樂と苦痛、其體二なりと雖、一の頭に由つて連結されあるものと謂ふべし。意ふに若しエソップにして此事に心付きしならんには、必ず比喩話を作りしなるべし、而して云はん、神は快樂と苦痛とを調和せんとして能はず、之れを以つて其兩者の頭を連結せり。是故に一を取る時は他も亦必ず隨ひ來らざるを得ざるなりと。現に余の實驗上、鐵鎖に由つて生じたる苦痛の後には快樂は繼ぎ來るものと如しと。

こゝにケーベス曰く、ソークラテースよ、君が今まエソップの名を言ひしは余の喜ぶ所なり。之れ多くの人が余に問ひし所の事を想ひ起こさしむるものなればなり。一昨日も詩人エエノス余に問へり、此後も亦問はんことは必定なり。故に君若し余が彼れに興ふべき答言を有せば願くは之れを教へよ。エエノスの知らんとする所は、君は從來一行の詩をも作らざりし人なるに、今や獄中に在りて、エソップの小話を詩に直ほし、又アポローンの讚美歌をも作れるは如何なる理由に基づくものなりやと云

ソークラテース
の告げに由り
て獄中に詩を作
り始む

ふにあり。

ソークラテース答へて曰く、ケーベスよ、彼れに眞實の事を語りて此く云へ、曰く―余は毫も彼れ及び彼れの詩と競争せんとするの意志あるに非ず、又た之れ容易の業に非ざるなり。然りと雖余は一種我夢に關して疑念を一掃するや否やを試みんとしたるものなり。余は從來『音樂の曲を作れど』の夢を見たること數度ありて、此の夢時には或形を以つて現はれ、時には他の形を以つて現はる。然りと雖夢の意味は大抵同一なる言語にして『音樂を研究し、又た作曲を爲せ』と云ふにあり。而して余は想像すらく、之れ余が一生の専門と爲し來れる所の哲學研究を奨励せんとせるものにして、哲學は音樂の至高至善のものなり、夢の余に命ずる所は、宛も競争者が其疾走中、見物人より尙ほ其疾走を勵まさるゝが如きなりと。然りと雖此事に關して余は確知せるに非ず、何となれば夢に謂ふ所は、普通に謂ふ所の音樂なるやも知る可からざればなり。而して今回死刑に宣告せられ、祭禮は死を延期したるより、余は心に謂へらく、夢の言ふ所に従つて、余の死するの前三三の詩を作りて余の疑念を晴らさんものをと。

ソークラテース
エゼノスに已に
從ひ來ること傳
言す、即ち死す
ることなり

哲學者は死を喜
ぶものなりと雖
自殺は之れを爲
す可からず

因て余は第一に此祭禮の神の讚美歌を作り、又た詩人たる者眞に詩人た
らんには、單に言語を結合するのみに止まらず、又た其話しを創作せざる
可からずと思へり。然るに余は創作を有せず、之れを以つて、余の記憶し
て知れる所の、エソップの小話を取つて詩となさんと心付けり。エソップの
小話を詩となさんと、之れ第一に念頭に浮びたる所なり。ケーベスよ、
此事をエゼノスに語れ、而して彼をして心安からしめよ。且つ言へ、彼れ
若し賢人ならんには余に從ひ來れ、決して躊躇すること勿れ、且つ余は今
行かんとせり、之れアテーナイ人の命する所たるなりと。

シンミアス曰く、此くの如きの人に對して、此くの如き使命とは何事ぞ。
余は屢々彼れに交はりしことあるを以つて、若し余の知れる範圍より云
はんには、彼れ若し止むを得ざるに非ざるよりは、決して君の忠告には從
はざるべしと。

ソークラテース曰く、其は何故ぞや。エゼノスは哲學者には非ざるか。
シミアス曰く、意ふに彼れは哲學者なるべし、然らば、彼れ、或は其他何
人と雖、苟も哲學の思想を有せる者は、必ずや喜びて死すべきなり。然り

と雖自ら其生命を斷絶するが如きことは之れを爲すべからず、何となれば之れ不法の事たればなり。

此にソークラテース其位置を變じて、其足を臥床外に地上に出し、其後談話中は此くて坐し居たり。

ケーベス曰く、人は自ら其生命を取り去るべからずと雖、哲學者は直に死に繼ぎ行くべきものなりとは何故ぞ。

ソークラテース答へて曰く、ケーベス及びシンミアスよ、君等はフィロラオスの門弟子なり、彼れが此事を語れるを聽きしことあらざりしか。

然り、ソークラテースよ。然りと雖彼れの言語や曖昧なりき。

余の言語とても、亦た之れ單に反響に過ぎざるなり。然りと雖、今の聽きし所を、こゝに今ま再述すべからざるの理由もあることなし。且つ余は他界に行かんとせり、故に余の今ま爲さんとする所の旅行の性質に關して、或は思考し、或は談話するは最良の機會なるべく、今より日没に至るの時間、之れに優れる善事を爲すこと能はざるべし。

ソークラテースよ。何故に自殺は不法なるか。今ましも、君の言ひし

ソークラテース
自殺の不法なる
を論ず

所のフロラオスの吾等と共にテーバイに滞在せし時、其事を言ひしことを聴けり。又た他にも同様の言を爲せし者なきに非すと雖、余は未だ之れを了會せざりしなり。

ソークラテース曰く、落膽すること勿れ、君等は之れを了會するの時あるべし。意ふに君等必ず此事に驚かん、如何なれば、他の不善なる事物も、時に由り、人に由りて善たることあるに係はらず、獨り死のみは除外例なるか。又た如何なれば、人は生くるよりも死の優れる時に於て、自ら自己の救済者たること能はず、他の者の手を待たざる可からざるかを。

ケーベス靜かに笑ひつゝ、其本國なるポイオーチア語を以つて語りつつ曰く、眞に然り。

余の言ひし所には矛盾の外観あるは余の許るす所なりと雖、其實毫も矛盾は之れあらざるなり。且つ余の耳に秘密にひゞく所の一種の學理ありて曰く、人は一種の囚人の如く、自由に其戸を開きて脱走するの權利を有せざるなりと。之れ一太秘密にして、余の未だ了會せざる所なりと雖、余は信ず諸神は吾等の守護者にして、吾等人間は諸神の所有物なりと。

人は一種の囚人にして、逃走の權利なく、凡つ神々の有なり、自由にするべからず

君等は余に同意なりや如何ん。

ケーベス曰く、余は全然君に同意す。

例へば、若し君の所有物たる牡牛或は驢馬にして、君其の死すべきことを命せざるに當り、随意に死せんとすることあらんには、君は必ず大に怒り、若し能ふべんば之れを罰するには非ざるか。

ケーベス答へて曰く、然り。

是に由つて之れを觀れば、余の如く、神の招きを受くるまでは、人は随意に其生命を絶つべきに非ずして、神の招きを待つべきの理由あるなり。

ケーベス曰く、然りソークラテースよ。君の言へる所真理あるが如し。然りと雖、諸神は吾等の守護者にして、吾等は其所有物なりと云ふ所の明瞭なる真正の信仰と、又た君が今ま哲學者なるものは死を歡ぶものなりとするの意見とは、如何にして之れを調和せんとするか。かの人間中の至賢なる者が統治者中の最上なる者たる諸神の支配せる所の勤務を遺棄すと云ふことは、實に道理あることにあらざるべく、苟も智者たる者にして誰か其自由を得たる時は、自ら能く其の一身を慎重すること、神の支

ケーベスソーク
ラテースの言に
矛盾ありと評す

配の下にありし時よりも、一層然らざる者あらんや。然るに愚昧なる輩は、其義務は能く最後にまで其守るべき道を守り、決して善より遁走することなく、又た其遁走は無意味なることを考へずして、宜しく其主人より遁走すべしと思はん。智者は常に自己に優れる者と與たるとを求むべきなり。而してソークラテースよ、之れ今ま君の言ひし所と反對にして、此見解に由る時は智者は死を悲しみ、愚者は死を喜ぶものたるべきに非ずや。

ケーベスの熱心は大にソークラテースを喜ばせたるが如し。ソークラテース余等に向つてケーベスの甚だ熱心なる研究の精神を有し、其の始めて聴きし所は、容易に之れを信せざる人なることを言へり。

シンミアス曰く、而して、今まケーベスの爲せる所の反對論には、余は一種の勢力あるものゝ如きを感じず。何となれば、苟も眞の智者たるものにして、遁走して輕々しく自己に優れる主人を遺棄せんとするの精神は果して何事ぞや。思ふにケーベスの謂へる所は、君を指して言へるものなるが如し。彼れ謂へらく君は餘りに容易に余等を遺棄し、又た餘りに容

シンミアス、ソ
ークラテースを
謂ふて容易に遁
走するの人なり
となして彼れの
死の決心を咎む

易に、君の承認して善良なる主人とせる所の諸神をも遺棄せんとするものなりと。

ソークラテース答へて曰く、然り、君の言へる所一理在つて存す。因つて君は今ま余が君の告發に答ふること、猶ほ余が法庭に辯論したるが如くなさざる可からずとなすか。

シンミアス曰く、君が其如くなすは吾等の願ふ所なり。

然らば余は法官の前に立ちて辯證したるよりも、今ま君等の前に於て一層有力なる辯證を爲さんことを力めん。シンミアス及びケーベスよ、

第一、若し余にして智にして善なる他の諸神の許の至ること(此事に就いて余の確信せること、猶此他此くの如き事に於て確信せるが如し)及び第二(此第二の事に關しては余は確知せずと雖)死者は、後に残れる生者よりも幸福なりとの信仰を有せざるに於ては、余は素より死を悲しむものなることは之れを許す。然るに此信仰あるを以つて、余は悲しむべきが如しと雖、悲しむことあらざるなり。之れ余は、死者には尙ほ何物か殘こし蓄へありとの喜望を有せるに由る。而して、古來言ひ傳ふる所に由れ

ソークラテース
自己は今ま他の
善く智との神の
前に至る者なり
と答ふ

故に死を悲しま
ず

シンミアス其理由の説明を求む

クリトーン、ソークラテースに告ぐるに多言せば熱することありて毒藥の効力を減ずることを以つてす

ば、悪人よりも善人には、一層善き或物ありと云ふ。

シンミアス曰く、ソークラテースよ、君は又た君と共に、君の思想をも持ち去らんとするか。君は君の思想を吾等に與ふることを爲さざるか。實に君の思想は有益なるものにして、吾等は之れを得んことを欲せり。且つ、君若し吾等を論破して確信せしむるに於ては、又た之れ君に向けらるゝ所の責罪の辯證たるべし。

ソークラテース答へて曰く、余は能くす限りを盡くして答へん。然りと雖先づ余にクリトーンの言はんとする所を聽くことを許るせ。彼れ長き前より何事をか余に言はんとするものあるが如し。

クリトーン答へて曰く、ソークラテースよ、余の言はんとせる所は、たゞ是れのみ——君に毒藥を與へんとする所の獄吏余に告ぐるに、君が餘りに多く談話せざるやう、君に告げよとのことにして、彼れの言ふ所に由れば、談話は體温を高め、毒藥の効力を弱からしむるものなり。故に自ら感情を激したる人々は、往々にして毒藥二杯、尙ほ効力なくんば三杯を仰ぐことありと。

哲學者は死を求むるものなれば、死時の到達せるに及びて何故に悲しむべき

ソークラテース曰く、然らば彼れをして其職務を行はしめ、若し必要ならんには毒藥二杯たれ三杯たれ之れを準備せしめば可なるのみ。

クリトーン曰く、余は君の言はんとする所は之れを熟知し居たり。されども余は彼れを満足せしめんと欲するなり。

ソークラテース曰く、彼れの言は之れを意に介するを要せずと。而して言うて曰く――

あゝ吾が裁判官諸君、余の今ま證明せんと所する所は、眞の哲學者なるものは、其の死せんとするに當りて勇氣あるものにして、死後他界に在つて最大善を得ることを希望するものなりとのこととなす。而してシンミアス及びケーベスよ、此事如何にして然り得るやに、就いて余は説明する所あらんと欲す。余の思ふ所に由れば、眞に身を哲學に捧げたる者は、衆人より誤解さるゝが如し。衆人は、哲學者なる者は、常に死及び死することを追求せるものなることを知らざるなり。而して若し之れ哲學者の求むる所にして、終生死の欲望を有せる者なりとせば、如何なれば其時の到達したるに及びて、常に其の得んとして求め居たる事を怨むことの

シンミアス曰く
世間此言を聞か
ば必ず笑はんと

世人は死の性質
を知らざるなり
然らずんば
哲學者如何で死
を求めん

あるべきぞ。

シンミアス笑ひつゝ答へて曰く。ソークラテースよ、素より滑稽に非
すと雖、君は余を笑はしむるなり。而して余は此く考へざるを得ざるな
り、曰く—今若し一般の人々にして君の言を聴きしならんには、彼等必ず
笑ひて言はん、君は真に善く哲學者の如何なるものなるかを謂へる人な
るかなど。又たアテーナイ人等も必ず云はん、哲學者等の求むる所の生
命なるものは其實死にして、其求むる所は死を得ることなるを發見した
りど。

シンミアスよ、彼等が此く思ふも素より一理なきに非ずと雖、彼等が發
見せり」との言は之れを除かざる可からざるなり。何となれば、真正の哲
學者の求むる所の其死の性質は如何なるものなりや、或は如何なれば彼
れは死を求め、死を欲するやに就いては世人は知る所あらざるを以つて
なり。然りと雖、世人は之れを世人に一任し去り、吾等は吾等の仲間に於
て議論すべきなり。吾等は死なるものあるを信するか。

シンミアス曰く、確かに之れ有り。

死は内體と環境との分離なり

靈魂が最もよく肉體の關係を離れて單獨なるは生活の最上のものなり

之れ靈魂と身體との分離にあらずや。而して死とは其分離の完成にして、若し靈魂は獨立して存在し、身體より分離し、身體も亦靈魂より分離する時は、之れ死に非ずして何ぞや。

彼れ答へて曰く、眞に然り。

こゝに又た他の問題あり。若し此れに關して君と余と意見を同うすることあらんには、恐くば此研究に一の光明を投與すべし、乃ち―哲學者なるものは、飲食―若し之れ快樂と稱さるべきものならんには―是等の快樂に心を置くべきものなりや如何ん。

シンミアス曰く、決してしか爲す可からず。

然らば戀愛の快樂は如何ん―彼れ是の快樂に心を置くべきか。

決して然らず。

然らば彼れ其他の身體上の快樂を心とすべきか。例せば高價の衣服、或は紐靴、或は其身の裝飾品を求むるを心とすべきか。或は是等の諸物は、之れを自然の必要以上に求むるものは、寧ろ之れを輕蔑すべきか。君の意見や如何ん。

余は云はん、眞正の哲學者は、此くの如きものは之れを蔑視するなりと。君は、彼れを以つて全然靈魂のみを心となし、身體を心とするものに非ずと云はざるか。彼れ眞正の哲學者は、其能くし得る所の範圍に於て、身體を脱して靈魂に歸らんとすべし。

眞に然り。

此等の事に關して哲學者は一切の人に優りて、如何なる方面に於ても、其靈魂を肉體の交通より分離せしめんとするを見る。

眞に然り。

然るに、シンミアスよ、世人は謂へらく、かの快樂の感なく、又た肉體上の快樂を求めざる哲學者に取つては、生命は活くるの價値なきものにして、是等快樂に心なきものは、死の如きものなるのみと。

之れ亦眞に然り。

吾等の眞に知識を得ることに就いて、吾等果して何と云はん——若し眞理の攻究に進むに當り、肉體は果して妨碍を興ふるものなるか、將た又た補助を興ふるものなるか。余は云はん、視覺、聽覺等、此内果して眞理の

感覺は眞の知識に達するに不確
實の指標者なり

るか。是等は、詩人が常に吾等に教ふるが如く、不正確なる實際者たるなり。而して是等は諸感覺中の最上なるものたるは、君必ず之れを許るさん。然るに是等にして尙ほ且つ不正確不明晰なるものなりとせば、其他の諸感覺の如きは推して知るべきのみ。

彼れ答へて曰く、實に然り。

然らば靈魂は如何なる時に真理に達すべきか—何となれば今ま若し何事なりとも、靈魂之れを思考せんとするに當り、肉體常に之れと與なりとせば、靈魂は必ず之れに欺かるべければなり。

眞に然り。

然らば他の方なとせば、實在の真理は思想に於て靈魂に啓示されざる可からざるに非ずや。

然り。

而して思想なるものは、善く心意の一統して、何物も—音響も、視覚も、快樂も、又た苦痛も、—之れを攪亂するものなきの時、靈魂其肉體に告別して、成らん限り肉體の關係を少くせるの時、靈魂毫も肉體上の感覺及び欲望

眞理は思想に由つて達す

肉體に告別して心意を統一せる時思想は最も善し

故に哲學者は肉體を脱せんことを求む

他の議論あり、即ち絶對正義、絶對美及び其他の點は、其を以つて知る可からず

を有せずして、たとひ眞實の存在を求めんとせるの時——此時にこそ思想は最も善良なるものにあらずや。

確かに然り。

此くて哲學者は肉體を貴ばず、其靈魂は肉體を脱出し、以つて獨り自在らんことを欲するに非ずや。

眞に然り。

而してシンミアスよ、尙ほ他のものあり。絶對の正義なるものありや否や。

確かに之れあり。

絶對美も、絶對善も亦之れ有るか。

勿論なり。

然りと雖君は肉眼を以つて是等のものを視たることあるか。

視たることなし。

或は其他肉體上の感官を以つて是等のものに違したることあるか——

余の謂ふ所は單に之れのみならず、絶對の大、絶對の健康、絶對の強力及び

心意のみにて研
究すべし

感覚は知識に非
なく却つて知識
を亂るものなり

萬物の眞實體或は眞相に就ても然り。是等の實體は君之れを肉體上の
機官に由つて知覺したることあるか。或は寧ろ是等のものゝ眞相の知
識に最も近づかんには、かの能く知性上の視覺を命令して、其思考する所
の物の本體の最も正確なる概念を得ることを力むるに由つて得らるべ
きには非ざるか。

眞に然り。

而して心意のみを以つて各事物に向ひ、其思想の作用中、視覺或は其他
の感覺等は、毫も之れを道理中に混入せしむることなく、心意自己の明瞭
なることを以つて光となし、以つて各事物の眞理を攻究する者は、能く是
等事物の純粹なる知識に達することを得るなり。かく眼耳及び其他身
體全部の諸感覺は、皆な之れ眞理及び知識を得るに於ては、精神を穢染し
之れを攪亂する分子なりとし、成らん限り之れを脱却したる人に非ざる
よりは、誰か眞實體の知識に達することを得んや。

シンミアス答へて曰く、ソークラテースよ、君の言へる所は、其内驚くべ
きの眞理あつて存す。

食欲色欲其他の
欲は靈魂を亂る
ものなり

一切の悪は肉體
あるに由つて生
ず、戦争も金錢
の欲も

而して眞正の哲學者の、一切是等の者を思考する時、左の如き言語を以つて言ひ表はすべき思念を爲すに至るにはあらざるか。曰く、「吾等は議論をして能く其結論に達せしめ得るの觀ある思想の道を發見したるにあらずや。吾等肉體内に在留して、靈魂は肉體上の諸惡に汚染さるゝ間は吾等の欲望は決して満足されざるに非ずや。而して吾等の欲望とは之れ眞理の欲望たるなり。何となれば肉體はたゞ其食物を得んとするの理由により、吾等に取つては永久煩惱の本源たり、又た疾病に陥り、吾等の眞理の追求に追ひ越し、吾等を妨害するものたればなり。肉體は戀愛、欲情、恐懼、一切の空想及び無限の愚痴を以つて吾等を充たし、實に人々の言ふが如く、全く吾等の思考力を奪ひ去るものなり。戦役何に由つてか起る、争鬭何に由つてか起る、一揆何に由つてか起る。たゞ之れ肉體及び肉體の欲情の外あることなし。戦争は金錢の愛より起り、金錢は肉體の爲め、肉體の用役を爲さんが爲めに外ならざるなり。此くて是等の妨害に由り、吾等哲學に委するの時を失ふ、而して最後の最も惡しきものは吾等幸にして時間を有して或る思考を爲せる時、肉體突然として思想中

肉體の最も惑し
きことは思想を
亂して眞理を認
得するを得しめ
ざることをなり

靈魂獨立せば自
ら物の真相を認
め得べし

に闖入し、吾等の攻究に紛擾擾亂を喚起し、以つて眞理を認得するの妨害をなす。吾等若し、何物なりとも其純粹の知識を得んとせば、必ず肉體を脱出せざる可からざるは實驗に由つて知る所なり。乃ち靈魂は自己自身を以つて、物の本體を視ざる可からざるなり。然らば吾等の願望する所の知識に達し、吾等は其愛者なりと稱する所のものを得べし。之れ吾等の生ける時に非ずして、死せし後の事たるなり。何となれば、吾等若し肉體と與なる時は、靈魂は純粹なる知識を有すること能はずして、左の兩者其一ならざる可からざればなり、乃ち知識は遂に得らる可からざるか、若し或は遂に得らる可からずとせば、死後に之れを得らるべきなり。何となれば、此時までは然らざりし靈魂は、今や肉體より分離して獨り自己自身存在すべければなり。此現世の生活に於ては吾等若し成らん限り肉體との交渉を滅却し、肉體上の性質の奴隸となることなく、以つて自ら純潔にし、以つて神が吾等を解放するを待つに於ては、最も知識に近づきたるものと謂うて可なり。此くて若し肉體上の愚痴を脱却したる時は、吾等は純潔なるものとなり、純潔なるものと與に語り、而して自ら何處に

於ても明晰なる光明を知らん。此の光明は之れ真理の光明たるなりと。何となれば不純のものは純粹なるものに近づくこと能はざればなり。シンミアスよ、之れ真正の知識の愛者等が互に相語る所の言語たらざる可からず。而して君も亦必ず此言に同意なるべしと信す。或は同意ならざるか。

ソークラテースよ、同意たるや疑を容れず。

然りと雖、あゝ、我友よ、若し之れ真に然りとせば、吾が旅路終りて、余の到るべき所に到らば、余の終生求めたる所のものを得べしとの希望を懐くに大なる道理在つて存すと謂ふべし。之れを以つて余は、歡びて余の行くべき道に行くものなり。而してたゞに之れ余一人のみに非ず、何人と雖其心意は其の之れに應すべきことを信じ、能く純潔になし居る者は又た此くの如きを得べきなり。

シンミアス答へて曰く、實に然り。

而して純潔にするとは、余が前に言へる如く、靈魂の肉體より分離すること非ずして何ぞや。靈魂の常性なるものは、身體外部より、自己を自

靈魂を純潔にするとは肉體と靈魂との分離なり

己に集中し、成らん限り、獨り靈魂自己の居所に其坐を占むること、他界に於いて然るが如く、現世に於ても亦然るべし。——之れ靈魂が肉體の繫縛を解放されたるものに非ずや。

彼れ曰く、真に然り。

而して靈魂が肉體より分離解放されたることは、之れ所謂死なるものには非ざるか。

彼れ曰く、確かに然り。

而して眞正の哲學者のみは、常に靈魂の解放を求むるものにして、靈魂を肉體より分離し、解放することは、是等哲學者の専門として研究する所にあらずや。

其は眞に然り。

而して余が始めに言ひし如く、人は成らん限り死に近かき状態に於て生きんことを學ぶべしとなし、而して死の來りし時、之れを悔み之れを悲しむは實に笑ふべき矛盾なりとしたるは此理由なり。

明かに然り。

而してシンミアスよ、眞正の哲學者は常に死を實行せんことを力むるものなり、故に又た彼等は、一切の人間中最も死を恐れざる者たるなり。今ま此く考へ見よ―若し眞正の哲學者は凡ての點に於て肉體を以つて敵となし、獨り靈魂のみにてあらんと欲し、而して其願望許るされ、其行くべき所に向つて出立し、其所に達する時は、現世に於いて願望したる所のものを得べきことの望あり、而して其得る所のものは知識にして、又た同時に其敵たる肉體の伴侶たるを脱却するを得るに及び、大に之れを喜ばずして、却つて之れを悲しむ、之れを恐るゝとは、矛盾も亦甚しと謂はざる可けんや。多くの人は現世の戀人或は妻子に再會し、彼等と談話するを得べしとの希望に勵まされて、下なる他界に行くを喜ぶものあり。而して知識の眞正の愛者にして、下なる他界に於てのみ、眞理を樂しむを得べしとの信仰を有するものにして、焉んぞ死を悲しむべけんや。否な彼れ必ずや喜悅を以つて死すべきなり。あゝ我友よ、若し彼れは眞正の哲學者たらんには、必ずや喜悅を以つて死するなるべし。何となれば彼れは其の所に、たゞ其所にのみ純粹なる知識を發見するを得べしとの確

他界に於て始めて純粹の知識を樂しむを得べし

哲學者の所謂勇氣及び節制は常人のと異れり

信を有すればなり。若し之れ眞に然らんには余が前に言ひしが如く、彼の死を恐るゝや實に不合理の事と謂はざる可からず。

シンミアス曰く、彼れ眞に然らざる可からず。

若し人死の近づきを悲しむことあらんには、之れ彼れは知識の眞正の愛者に非ずして、肉體の愛者たり、又た恐くは同時に或は金錢、或は權勢、或は是等兩者を愛するものたるの十分の證據たるなり。

彼れ答へて曰く、全く其の如し。

シンミアスよ、勇氣なるものは殊に哲學者の特質にあらずや。

然り。

節制なるものあり、此もの、俗人と雖尙ほ、諸情欲を制御し、諸情欲よりも上位にありとの感を以つて之れに臨むものなりと解せり——節制なるものは、能く肉體を輕視し、其一生を哲學に委する者の有する徳義にはあらざるか。

最も確かに然り。

何となれば常人の勇氣及び節制なるものは、君若し之れを思考せば、其

矛盾せるものなることを知るべし。

其は何故ぞ。

ソークラテース曰く、常人は死を以つて最大悪と思へることは君の知れる所なるべし。

彼れ曰く、真に然り。

而して勇氣ある人の死に面するや、尙ほ他に一層大なる悪ある故に非ずや。

真に然り。

然らば哲學者を除きて其他の一切の人は、恐懼ありて之れを恐るゝが爲めに勇氣あり。然るに人は恐懼あるが爲め、又た怯懦なるが爲めに勇氣ありとは實に不思議の事と云ふべし。

真に然り。

常人の節制なるもの亦同日の論にあらずや。彼等の節制なるは其實不節制なるに由るものにして―此く云ふは一見矛盾の如しと雖、實は之れ彼等の愚なる節制より生ずる所のものたるなり。何となれば彼等は

哲學者のみ真正の徳を知るものと俗人は害の大くの比較に基づ

或快樂を有し之れを失はざらんことを欲し、爲めに他の快樂を制止するなり、而して之れ尙ほ他の快樂に打勝たれたるものに外ならず。人々は快樂に打勝たるゝことを謂うて不節制なりと稱すと雖、彼等常人の快樂を征服すると云ふことは、其實快樂に勝たるゝことに外ならざるなり。之れ余が、彼等は不節制に由つて節制となれりと云ふの意味なり。

然るが如し。

常人の徳義は交換主義なり

然るに一の恐懼或は快樂或は苦痛を以つて、之れを他の恐懼或は快樂或は苦痛に交換し、或は其大なるものを以つて之れを其小なるものに交換すること宛も貨幣を兩換するが如き、之れ徳義の交換に非ざるなり。あゝ愛するシンミアスよ、こゝに一切の物常に盡く兩換さるべき真正なる一貨幣はあらざるか——此貨幣とは之れ知識の謂なり。而して唯之に交換して、又た之れと與にして、何物も眞に賣買され、勇氣も、節制も、又た正義も得らるべきなり。換言せば眞正の徳義とは知識ウィに伴ふものにして、如何なる恐懼も、快樂も、或は其他之れと同様なる諸善或は諸惡の有無は毫も問ふ所に非ざるなり。然るに是等諸善より成立せる所の徳義も、一

且知識の關係を斷絶し、互に永久相交換さるゝが如きに於ては、之れたと
 徳義の陰影たるに過ぎざるなり、此内決して自由あるなく、健康あるなく、
 或は又た正義あるなし。然るに真正の交換には、是等一切情欲の穢ひ淨
 めなるものありて、制節も、正義も、勇氣も、又た知識自身も皆なこれ情欲の
 穢ひ淨めの結果たるなり。此神秘説を創唱せし人々は、眞實の意味を有
 せざるものに非ざるが如し。而して彼等古代に在つて形様語を以つて
 暗示して一かの淨められず、又た教義を奉せざる者の下なる他界に至る
 や、彼れ泥濘中に墮陞せざる可からずと雖、其教義を奉じ又た清淨にされ
 たるものは下なる他界に於て、諸神と與に住すべしと云へるは、全く無意
 味の言を爲すものに非ざる如し。彼等の神秘説中に云ふ所に由れば、『多
 數の人は酒神笏*の携帶者なりと雖、其少數は神感したる者なり』と。神感
 したる者とは余は之れを哲學者なりと解す。余は是等の人々の數中に
 加はらんことを求め、終生我力を用ゐたり。而して余の方法は正しかり
 しか、或は正しからざりしか、或は成功したりしか、或は成功せざりしかは、
 やがて余の他界に到りし時、神若し嘉し玉はゞ、直に眞に之れを知ること

靈魂肉體を脱せ
ば風に吹かれて
分散せざるか

を得べし。之れ余の信仰する所なり。是れを以つてシンミアス及びケ
ーベスよ余が君等及び現世の主人たる神々より別るゝごも、之れを悲し
み之れを歎くことを爲さざるに於て、余は正常なることを主張す。何とな
れば、余は他界に於ても、同じく又た善良なる主人及び朋友を得ることを
信すればなり。然りと雖俗人等は此言を信せざるべし。されども若し
此の辯證にして、アテーナイ市の諸法官等に對して爲したるよりも、一層
善く君等を説得して確信せしむることを得たらんには、余は以つて満足
と感ずるものなり。

ケーベス答へて曰く、ソークラテースよ、議論の大體に於ては、余は君の
説に同意するものなりと雖、靈魂に關する説に於ては、世人或は之れを信
せざるべし。彼等は謂へらく、靈魂一旦肉體を脱離する時は、今や其行く
べきの所を失ひ、死の其日に於て靈魂亦消滅し終るべく、乃ち肉體より解
放さるゝや否や、直に煙の如く空中に飛散し、遂に無に歸するに至るべし
と。若し靈魂にして君が云へるが如き諸惡より解放さるゝを得たる後、
能く自ら自己に集中するを得るとせば、ソークラテースよ、君が云へる

所の事を眞なりとして之れを希望するの理由あるべし。然りと雖之れを證明せんと欲せば必ずや人の死後靈魂は尙ほ存在して、或勢力或は知性を有せりとこの十分の議論と證據とを要するなり。

ソークラテース曰く、ケーベスよ、眞に然り。余は是等の事の有り得べきここに就いて聊か語る所あるべきか。

ケーベス曰く、余は是等の事に關する君の意見を知らんことを好むものなり。

ソークラテース曰く、今ま余の言を聴く者は、彼れ余の古よりの敵なる滑稽詩人なりと雖、余を以つて、余の無關係の事に就いて漫言せるものなりとして、余を嘲笑することあらざるべし。君若し意あらば、余は此事の研究に進まん―

吾等今ま、人の靈魂は死後下なる他界にあるものなりや否やの問題を討窮すとせんか。靈魂なるものは此世より他界に至り、他界より又た此世に歸へり、以つて死より再び生るとの古代よりの學說余の心中に浮び出でたり。若し生は死より來るとの説にして眞ならんには、吾等の靈魂

反對を有するものは反對より生ず

は是れより前他の世界に在りしものならざる可からず。若し夫れ然らざるに於ては是等の靈魂豈再生することを得んや。而して吾等若し、生は死より生ずるものなるを證明したらんには、之れ吾等の言へる所の十分の結論たるべしと雖、若し夫れ然らずとせば、吾等他の論證を爲さざる可からざるなり。

ケーベス答へて曰く、眞に然り。

然らば吾等此全問題を考窮するに當り、單に之れを人間の關係のみに於て見ることなく、又た動物全體、植物及び其他何物と雖、苟も生産あるものに就いて見る時は、其證明は一層容易なるべきなり。萬物反對を有せるものは、其反對物より生ずるにはあらざるか。例へば善不善、正不正等の如き、尙ほ此他無數に其反對物より生ずる反對物ありと云ふなり。而して余は、一切の反對物に於て必然に同様なる變化あるを證せんと欲するものなり、例へば何物と雖、大となるものは始め小にして然る後、大となるものならざる可からず。

眞に然り。

かの、小となるものは、始めは大にして而して後、小となりしなり。
然り。

弱きものは、強きものより生じ、速かなるものは、遅きものより生ず。

眞に然り。

悪しきものは、善きものより、正しきものは、正しからざるものより生ず。
勿論なり。

若し之れ一切の反對物に適用して眞なりとせば、吾等、是等凡てのものは皆な其反對より生じたるものなりと確言して可なり。
然り。

而して萬物此く反對に相生するに當り、又た其中間に立つ二個の作用あるに非ずや。即ち一方より他の反對物に對して往く所の作用と、又た歸る所の作用と之れなり。又た大小の存する所には増減の二作用中間にありて、其成長するを盈と云ひ、其枯凋するを虧と云ふ。

彼れ曰く、然り。

其他尙ほ數多の作用あり、分解あり組成あり、冷却あり温熱あり、以つて

反對より反對を
生ずる中間の二
作用

生は死より生ずる
此は覺醒の如し
眠より生ずる如し

一方より作用し、又た一方より之れを反歸す。而して此くの如きは之れ、常に言語に表はさずと雖相互の反對物間に必然なる作用にして、是等の反對諸物は、其反對より生ずるものにして、又た其一方のものは他の一方のものに移り變り行くの作用たるなり。

彼れ答へて曰く、眞に然り。

而して、生命の反對なるものあらざるか、宛も睡眠は覺醒の反對なるが如く。

彼れ曰く、然り之れ有り。

然らば其物何ぞや。

彼れ答へて曰く、死なり。

若し是等にして反對物ならんには、是等は其反對物より生ずるものにして、又た中間に存する所の二個の作用なるものあらざるか。

勿論之れ有り。

ソークラテース曰く、余は今ま、君に云ひし所の反對物の二對中、其一對及び其中間作用を分析すべければ、君は他の一對を余の爲めに分析せん

七三二
ことを希望す。睡眠の状態は覺醒の状態と相反し、而して睡眠より覺醒
生し、覺醒より睡眠生ず、而して其産出の作用たるや、一は眠むることにし
て、他は目覺むることなり。君之れに同意なりや如何ん。

全然同意す。

然らば、君は、同一なる方法を以つて、生と死とを余に分析せよ。死は生
の反對に非ずや。

然り。

而して是等其一は他より生ずるものにあらずや。

然り。

生より生ずるものは何ぞや。

死なり。

死より生ずるものは何ぞや。

余はたゞ生なりと答ふあるのみ。

然らばケ―ベスよ、物たれ人たれ、生は死より生ずるにあらずや。

彼れ答へて曰く、明かに然り。

然らば吾等の靈魂は下なる他界に生存すと推論して可なるか。
眞に然り。

而して其二個の作用或は産出作用の一方は、吾等の視得る所なり、何となれば死の行動は、確かに見得る所たればなり。

彼れ曰く、確かに然り。

然らば其結果や如何ん。吾等其反對の一方の作用を除外し、自然は單に片脚以つて歩行せるものと考へざる可からざるか。或は寧ろ之れに對する、産出の或作用あるを謂はざる可からざるにはあらざるか。

彼れ曰く、然り。

然らば其作用とは何ぞや。

生に歸へるごと之れなり。

若し此くの如きものありとせば、生に歸へるごは、死が生の世界に生るることに非ずや。

眞に然り。

然らば吾等は茲に、生は死より來ること、猶ほ死は生より來るが如しと

若し及過の作川
なき時は萬物死
の狀態となりん

睡眠せるエンヂ
ニミオンは
世界に於て無
意味となりん

の結論に達する新なる道ありと云ふべく、若し之れ眞なりとせば、死者の
靈魂は再び出で来る所の或場所に存在すとの最も確實なる證據を提供
するものと謂ふべし。

彼れ曰く、然りソークラテースよ。此結論は吾等の前定したる所より
必然に流出するものゝ如し。

ソークラテース曰く、而してケーベスよ、是等のことを許容するの不當
ならざることは、余は左の如く證明さるべしと思惟す、乃ち——若し生産な
るものは、單に一直線のみにして、自然界に於て報返或は循環なるものあ
るなく、或は其反對の方に反歸し、或は反轉することあらざりせば、萬物遂
に同一形狀となり、同一狀態に止まり、決して他物の生ずることなきに至
らん。

彼れ曰く、君の意味する所如何ん。

ソークラテース答へて曰く、事極めて單純なり、余は睡眠の例を以つて
説明せん。今若し睡眠及び覺醒の變化なきに於ては、睡眠せるエンヂニ
オインの話しは遂に何の意味も無きに至らん、何となれば其他一切の諸

物も亦同じく皆な睡眠にして、彼れ其他の諸物より區別さるゝ所あらざる可ければなり。或は若し世界に於て、單に物質の結合のみにして、毫も分解なしとせば、アナキサゴラス（後）の混沌を再演するのみ。愛するケーベスよ、之れと同じく、一切の生を有せる物死し、其死せしもの永久死の状態に存し、再び生に歸ることなしとせば、萬物遂に盡く死し、一物の生けるものなきに至るべし——此他如何なる結果あることを得んや。何となれば若し生にして或他物より生じ是等も亦た「死すとせば、萬物遂に盡く死に吞入され了らざる可からざるに非ずや。

ケーベス曰く、ソークラテースよ、他に遁るべき言なし。余の見る所を以つてすれば君の議論は全然真理なるが如し。

ソークラテース曰く、然りケーベスよ、余の思ふ所に由ればこは眞なり、又た眞ならざる可からず、而して吾等此の許容を爲すに於て誤り或はされざりしものとなす。然りと雖余は眞に再生なるものあり、而して生は死より生じ、死者の靈魂は存在して、善良なる靈魂は惡しき靈魂よりも善の報酬を得べしとは、堅く信する所なりとす。

再生、及び善靈
魂は善の報ある
を信す

回想説は靈魂の
前生存在を含蓄
す

回想説の眞なる
を知らんとせば
人に疑問を提出
せよ、彼れ自己
の心より答ふべ
し、即ち幾何學
の例の如し

ケーベス附加して謂うて曰く、ソークラテースよ、君の好みて主張する所の、かの知識は單に回想なりとの學説にして、若し眞なりとせば、吾等の今ま回想し出す所のものは、之れより前或時に學びたることを含蓄するものなり。然りと雖若し吾等の靈魂にして、人間の形狀を取るの前、何處にか存在し居りしに非ざるよりは、こは不能のことにして、又た之れ靈魂不死の他の一證となすに足らん。

シンミアスを介して曰く、ケーベスよ、其回想説を證明する所の議論や如何ん、願くば語りて余の記憶を新にせよ、余は全く忘却せるなり。

ケーベス曰く、質問することに出つて、最も卓絶せる證明を得るなり。君若し正常なる方法に出つて人に質問する時、彼れ能く自ら眞正の答へを爲すべし。然りと雖彼れ若し己に知識及び正常なる道理を有せざるに於ては、如何でか之れを答ふることを得んや。君若し幾何學に關する圖形、或は此種のものに就いてせば、此事最も明瞭なるを得べし。

ソークラテース曰く、シンミアスよ、君尙ほ信ずること能はずとせば、此事に關して、君は他の方法を以つて之れを試み、而も尙ほ同意すると能は

ざるかは余の間はんとする所なり。——換言せば君は、尙ほ知識は回想な
ることを信ずる能はざるかと云ふにあり。

シンミアス曰く、余は之れを信せざるに非すと雖、此回想説の學理をし
て、余の記憶に回想せしめんことを欲するなり。而してケーベスの言ひ
し所に由り、余は稍々回想し來り、又た確信するに至らんとせり。然りと
雖君の議論は余の大に聽かんことを欲する所なり。

彼れ曰く、余は此く云はん、若し余にして誤らすんば、尙も人回想すと云
はゞ、必ずや或る以前に知る所なかる可からすと云ふに一致せざるを得
ざるなり。

眞に然り。

而して此知識或は回想の性質は果して如何なるものぞ。余の間ふ所
は——人は或は視、或は聽き、或は或方法に由つて何物かを知覺する時は、單
に其物を知るのみに非ずして、尙ほ他の或物の概念を形成す。而して此
或物たるや、其の同一の知識の主體に非ずして、或他の種類の知識の主體
たるなり。乃ち之れ、其の概念を有する所の其物を回想せしものなりと

人は自己の見
る所の物と共に
未だ見ざる所の
物を想起す。この
は何故ぞ

云ふべきに非ずやと云ふにあり。

シンミアス曰く、其意味如何ん。

余の意味する所は次に説明するが如し、リラ琴を知ると、人を知るとは同一にあらざるに非ずや。

然り。

然るにこゝに戀愛者ありて、若し其愛人の使用せし、リラ琴、衣服或は其他のものを見し時の感情や如何ん。是等戀愛者は、其リラ琴を知れるより、心の眼に、其リラ琴を所有せる所の愛する青年の風彩容姿を形成するにあらずや。之れ實に記憶なり。之れと同じく、人若しシンミアスを見る時は、又たケーベスを想起すべく、此くの如きの例は無限たるなり。

シンミアス曰く、真に無限なり。

而して回想は普通専ら時間及び不注意の爲めに、已に忘れたる事を回復する作用たるなり。

彼れ曰く、真に然り。

又た馬或は、リラ琴の畫を見て、其人を記憶し、シンミアスの肖像より、又

たケーベスを想起することあらざるか。

然り。

或はシンミアスを其人を想起することあらざるか。

然り之れあり。

此くて回想なるものは、同様なるもの或は同様ならざるものより生ずるなり。

或は然らん。

今若し回想にして同様なる物より生じたる時は、こゝに他の一思考必ず起るものなり乃ち——其同様なることの度は、想ひ起こしたる物よりも劣れりや否やと云ふこと之れなり。

彼れ曰く、真に然り。

吾等一步を進めて同等と云ふものあるを断言せんか。而して其同等たるや木石の片々が、互に相等しと云ふに非ずして、一切是等を超絶してこゝに絶対の同等なるものありとなす。吾等此く言ひて然るべきか。

シンミアス答へて曰く、然り、しか云ひて可なり。一生の確信を以つて

木石等の不完全なる同等は、絶対の同等の念を喚起す

其事を誓はん。

吾等此絶對の實體の性質を知るか。

彼れ曰く、確かに然り。

此知識は吾等果して何れよりか之れを得たる。吾等木石等の如き物質上の諸物の同等なることを見、而して是等の諸物とは異なる所の、同等の觀念を是等より集聚するにあらずや。又た他の方法を以つて此事を観るに木石等の同一なる片々は、時に同等なりと雖、又た時に不同等なるにはあらざるか。

眞に然り。

然りと雖、眞の同等にして、不同等たることあるか、或は同等の觀念は不同等の觀念と同一なるか。

ソークラテースよ、其は不能の事に屬す。

然らば是等の所謂同等なるものと、同等の觀念とは同一にあらざるにあらずや。

ソークラテースよ、余は、明かに、同じからずと云はざる可からざるなり。

是等の同等なるものは、素より同等の觀念とは異なりと雖、其觀念は是諸物より得たるものにあらずや。

彼れ曰く眞に然り。

此同等の觀念は、是等の諸物と同じきことあり、又た同じからざることあるか。

然り。

然りと雖、こは毫も關せざる所にして、一物を見る時は、又た他物を想起す而して、其同じきと同じからざることに關せず、必ず回想なるものあらざる可からず。

眞に然り。

然と雖、木石の等しきもの、或は其他物質上の等しきものに就いて君は如何に云はんとするか、又た其等に由つて生じたる感覺や如何ん。是等の同等なる諸物は、絶對の同等が等しきと同一なる意味に於て等しきか、或は是等の同等は完全なる同等に比して劣れる所あるか。彼れ曰く然り、大に劣れり。

物質上の比較の
同等は理想上の
同等の如きを得
ず、然らば理想
上の同等なるこ
とに前在せざる
可からず

又た、余或は何人たりとも或物を見、而して其物は或他の物たらんことを目的となすと雖、未だ達せざる所ありて其物たること能はず、尙ほ劣れる所あるを見ることせば、此觀察を爲せし其人は、其物たとひ相近似せりと雖、尙ほ他物に對する時は劣れりと謂ふ所の標準の觀念は、先づ以つて之れを有せざる可からざることは、吾等の許容せざる可からざる所に非ずや。

然り。

之れ吾等の此に論せる所の同等諸物及び完全なる同等の場合に應用さるべきことに非ずや。

全く然り。

然らば吾等は諸物の等しきことを見るの前、先づ同等なるものを知り、而して是等外見上の同等なることは、完全なる同等を得んとせるも、未だ其れに達すること能はざるものなりと思考したるものにあらずや。

眞に然り。

此の完全なる同等は只だ視覚觸覚或は其他の或諸感覺の媒介に由つ

て知りたるもの、又た知り能ふものにして、其感覺が媒介者なる點に於ては、同一なるにはあらざるか。

然りソークラテースよ、此議論の範圍に於ては、是等諸感覺は互に相同じと云ふべし。

然らば一切可感の諸物は、皆な完全なる同等を得んとすと雖も、而も未だ達せざるものなりとの知識は、諸感覺より得たる所のものなるか。

然り。

然らば吾等如何なる方法なりとも、或は視或は聽き、或は知覺するに先き立ち、吾等完全なる同等の觀念を有せざる可からず。然らざれば吾等諸感覺より得たる所の等しき諸物を將て、之れを其標準に引き合はすこと能はざりしなるべし。實に是等凡ての物は此の標準に達せんことを求め、而も之れを得ざるものなればなり。

前論よりする時は素より他の推論は得られざるなり。

吾等生れ出でしより、直ちに視聽き、又た其他の諸感覺を使用するに非ずや。

同等の知識は生前に得たるものならず可からず

然り。

然らば同等なる知識は其れより前に已に得たるものならず可からず。

然り。

意ふに吾等の生れざるの前に然りと云ふべきに非ずや。

眞に然り。

若し吾等生前此知識を得、而して生れて之れを使用せるものなりとせば、吾等又た單に等しきこと、或はより大なること、より小なること等に止まらず、又た其他一切の諸觀念は、生前及び生誕時に之れを知れるものたるべし。何となれば吾等單に同等のみを謂ふに止まらず、又た美に就いて、善に就いて、正義及び神聖及び其他吾等の問答中實在の名稱を有せる所の一切の諸物に就いて謂ふ所あればなり。是等の諸點より吾等は此知識は吾等の生るゝ前に之れを得たるものなることを断定するを得るに非ずや。

然り断定することを得。

而して此知識を得て、吾等其得たる所を忘れざる時は、吾等必ず常に其知

學得とは前世に
有したる觀念の
回想なり

識を有して此世に生れ、又た終生其を知り續ぶくなるべし、何となれば知るとは知識を得ることゝ之れを忘れざることゝなればなり。シンミアスよ、忘却とは知識を失ふことに非ずや。

ソークラテースよ、全く然り。

然りと雖吾等の生るゝ前に得たる所の知識は、若し之を誕生の際に失喪し、又た若し其後諸感覺の使用に由つて以前に知り居たる所を回復したりとせば、吾等の學得すと稱する所の行爲は、實は、吾等に本然せる所の知識を回復することにして、是は之れ回想と謂ふが正當なるに非ずや。眞に然り。

此くて吾等視覺、聽覺或は其他の感覺に由つて或物を知覚する時、其知覺より吾等は他の或同じきもの、或は同じからざるものにして、其物に聯想さるべきも、而も忘れたる所のものゝ觀念を引き出すことを得るは明かなり。此に於て余の已に言へるが如く、兩者其一、乃ち―吾等此知識は誕生の時に之れを有し、而して終生之れを知り續づけたるか、或は、生れたる後學ぶとは記憶のみ、學得とは單に回想のことなりとじて之れを得た

りとなすべきか、其内何れかならざる可からず。

然り、ソークラテースよ、其は全く然り。

シンミアスよ、此兩者中君は其何れを取らんとするか。吾等は生るゝ時知識を有せりとなすか、或は吾等の生るゝ前に知りし所のものを回想すとなすか。

余は即坐に答ふること能はず。

然りと雖、苟も知識を有せるものは、其有せる所の知識に關して陳述することを能くするや否やの如きは、君之れを決定するを得べし。君は何と云はんとするか。

彼れ必ず之れを能くすべし。

然りと雖、吾等が今ま語り居る所の事に關して、何人と雖之れを陳述することを能くすと君は思へるか。

ソークラテースよ、余は彼等が其を能くせんことを欲す。然りと雖余は、明日此時刻に於ては、生者の内一人として是等の陳述さるべき筈のものに關して陳述を能くするものあらざること恐る。

然らばシンミアスよ、君は凡の人は是等の事を知れりこの説に非ざるか。
然り其説に非ず。

然らば彼等以前に知りし所のものを回想するなるか。

然り。

然りと雖吾等の靈魂は何れの時に此知識を得たるものぞー吾等が人と生れし以後にては非ざるべし。

生れし以後に非ず。

然らば生るゝの前なるか。

然り。

然らばシンミアスよ、吾等の靈魂は、其未だ人の形を有せざるの前、身體無くして存在し、而して智性を有せしものならざる可からず。

實にソークラテースよ、君若し是等の觀念は吾等の生るゝ其瞬間に知りしものたるを許すに非ざるよりは、他に又た之れを知るの時あらざるなり。

然り吾が友。若し夫れ然りとせば、吾等が其知識を失ひたるは果して

然らば靈魂は、
人と生るゝの前
存在せしものな
らざる可から
ず。若し靈魂な
かりしならんに
は觀念もなき筈
なり

何れの時なるぞ。實に吾等の生れし時、吾等が是等の知識を有せざりしことは已に許容したる所たればなり。吾等其知識を得たる時直に之れを失ひしか、若し又た然らずとせば、如何なる時に之れを失ひしぞ。

否、ソークラテースよ、余は知らず識らず無意味のことを語り居たるを知れり。

然らばシンミアスよ、吾等が常に反復するが如く、若し絶対美、絶対善、及び萬物の絶対實在なるものありとし、而して此物、即ち今ま吾等が前世より存在したるを發見せし此物に、一切吾等の諸感覺を對照し、而して此物と諸感覺とを比較して、是等の諸觀念は吾等の前世に存在し、又た吾等之れを生有せるを發見せば、吾等の靈魂は前世に存在したるものならざる可からず。若し夫れ然らずとせば、議論全く其力を失墜すと謂ふ可きに非ずや。且つ是等の諸觀念は、吾等の生るゝ前に存在し居たるものならざる可からずとの證據あるとは、吾等の靈魂は吾等が人と生るゝの前に存在し居たるの證據あると同一にして、若し是等諸觀念にして、其前在の證據なき時は、靈魂の前在も亦同じく證據なきものたるなり。

ケ
ー
ベ
ス
及
び
シ
ン
ミ
ア
ス
謂
ふ
て
曰
く
、
靈
魂
の
前
に
存
在
す
る
と
雖
未
だ
死
後
に
存
在
す
る
を
證
明
さ
れ
ず

然りソークラテースよ、一方必然なりとせば他方も亦必然なるは余之れを確信するを得たり。而して生るゝの前に靈魂は存在し居たるものなりとのことは、君が今ま言ひし所の、實體の存在の思想と分離せしめ得べきことに非ず。何となれば余の心中には、今ま君の言ひし所の善美、及び其他の諸觀念の如き、最も眞實に又た最も完全なる存在を有せりと云ふが如き、明瞭なること他にあらざるを以つてなり。而して余は此證據に満足するものなり。

然りと雖ケーベスも亦満足せるか。余は又た彼れをも確信せしめざる可からざるなり。

シンミアス曰く、思ふにケーベスも亦満足せるものゝ如し。彼れは人間中最も事物を信せざる性質の者なりと雖、其生るゝの前に靈魂は存在したりとの説に就いては、彼れ蓋し之れを確信せん。然りと雖死後、靈魂の存続することに就いては未だ余をして満足せしむるの程度にまでも證明されざるなり。余はケーベスが云ひし如く、人死せば其靈魂は散逸するものにして、之れ即ち其死滅なりとの、世間の人々の信するが如き感

靈魂の未來存在の證明なければ、
一半の論證不足なり

此證明と、生は死より來るとの證明を合併せば完全なるべし

情を除き去ること能はざるなり。何となれば靈魂は何處にか生れ來りて他の諸原素を組織し、人身に入るの前存在せしことを許容するも、一旦人身内に入り、而して出で去りたる後も、尙ほ滅亡消盡し去らずとするは其理由如何ん。

ケーベス曰く、シンミアスよ、君の言眞に然り。要求したる一半、即ち吾等の靈魂は、生るゝ前に存在し居たりとのことは、此くて證明されたりと雖、其生るゝの前に存在し居たりし如く、死後亦存在すべしとのことは、未だ證明されざる一半にして、こは補全されざる可からざるなり。而して其證明與へられし時は、議論此に完しと謂ふべし。

ソークラテース曰く、シンミアス及びケーベスよ、其證明は余已に之れを爲せるなり。君若し二個の議論を合併せば此に可なり、乃ち之れ一余が今ま論證したる所と、前に論證したる所の、生は死より生ずとの論證とを合併すべしと謂ふにあり。今若し靈魂は其生るゝの前に存在し、而して人間と生るゝは、惟だ死及び死することよりするものにして、其再び生るべきものたる以上は、死後も必ず存續せざる可からざるに非ずや。

故に君の要求する所の證明は余は既に之れを爲せしなり。されども余は君及びシンミアスは、尙ほ此の議論の考究に進入せんことを欲するものたるを疑ふ。君等は宛も小兒の如く、靈魂一旦肉體を脱離する時は、眞に、風は忽ち靈魂を吹き去りて之れを散逸せしむとの恐れに念に惱まざるゝものゝ如し。殊に天候靜穩なる時に非ずして、暴風の時に死するものは然りと思へるが如し。

ケーベス微笑しつゝ答へて曰く、然らばソークラテースよ、君は吾等の恐懼の念を拂ひ去らざるべからず―且つ嚴密に云はゞ此くの如きは吾等の恐るゝ所に非ずと雖吾等の内には小兒の如きものありて、此等の人に取つては死は一種妖怪の如く思はるなり。吾等又た此くの如き人に對して其暗所に獨居せる時、恐るゝことなきやう敷説する所なかる可からざるなり。

ソークラテース曰く、日々呪術者の聲を使用し、以つて君等の恐懼を呪おそなひ去らざる可からず。

ソークラテースよ、若し君近く時は、吾等何處にか恐懼を呪なひ去る者

靈魂は空氣中に
消散すとの恐懼
心は蔽ひ去るを
要す

を發見することを得ん。

ソークラテース答へて曰く、ケーベスよ、ヘラスは廣し、多くの善良なる人あり、又た野蠻人種も少きに非ず。此廣大なる範圍内にて是等一切の人々の中より、此呪術者を發見せんが爲めに、決して勞苦と金錢とを惜しむこと勿れ。金錢を消費せんには、之れに優れる用途あることなし。且つ君等は又た君等自身の内に此種の人を求むることを力めざる可からず、何となれば此呪なひを爲すに當り、君等に優れる他人を發見することあらざる可ければなり。

ケーベス答へて曰く、吾等君の命に従ひ、必ず其人の探索を爲すべし。然りと雖若し君の意に適せば、今暫く始めに岐路に入りし點に歸りて論ずる所あらしめよ。

ソークラテース答へて曰く、必ず其如くすべく、此事を外にして何事か余の意に適するものあらんや。

然らば幸甚。

ソークラテース曰く、吾等かの離散すと想像し、其を恐るゝ所のものは

離散するものは
結合のものに
て、靈魂は單一
物なれば離散せ
ず

果して如何なる物ぞ、又た其の恐れざる所のものは果して如何なる物ぞ、
—之れ吾等の自ら考究せざる可からざる所に非ずや。然る後、かの飛散
する所のものは、靈魂の性質なるか或は然らざるかの研究に進むことを
得べく、—吾等の靈魂に關する希望も恐懼も、一に是等の問題に對する答
解如何に繋がるものと謂ふべし。

彼れ曰く眞に然り。

かの結合したる物或は集成したるものは、其集合されたるが如く又た
分解され得べき自然の性質のものなりと雖、かの結合より成立せざる所
の物は—若し何物たりとも此くの如きものなりとせば—たゞ此物のみ
は分解せざるものなりとは吾等の思考する所に非ずや。

ケーベス曰く、然り余は爾か思考す。

而して結合物は常に變化し決して同一に存することなしと雖、結合物
に非ざるものは常に同一不變なりと前定することを得べし。

彼れ曰く余は君に同意す。

然らば前論に立ち歸へらんにかの吾等が論理の過程に於て、實體或は

實及び觀念は
不變にして不可
視の階級に屬す

實在なりと定解したる所の觀念或は實在は、同等、或は美、或は其の他何物の實在たれ、—是等の諸實在は時有つて何等か變化することあるか、或は是等は常に在るがまゝに、同一の單一なる自己存在を爲し、不變の形態を有して、如何なる方法、如何なる時にも、毫も變化を容れざるものなるか。

ケーベス答へて曰く、ソークラテースよ、是等は常に同一不變ならざる可からず。

かの多くの美なる物は如何ん—人、馬、衣服其他何物たりとも同一名稱を有して或は等し、或は美なりと稱せらるゝ所のもの—是等は凡て不變にして常に同一なるものなるか、或は全く之れに反せるか。是等は寧ろ自らするか、或は他と共にするか、常に變化して殆ど不變なること能はずと謂ふべきに非ずや。

ケーベス答へて曰く、後者なり。是等は常に變化の状態にあり。

而して是等諸物は、諸感覺以つて之れに觸れ、之れを見之れを知覺するを得ると雖、不變の諸物はたゞ心を以つて知覺するを得るのみ—故に是等は不可視にして、視るを得べきものには非ざるか。

彼れ曰く、眞に然り。

ソークラテース言を加へて曰く、然らばこゝに二種の存在物あり、一は目以つて視るべきものにして、他は視るべからざるものなりと云ふべし。

蓋然らん。

視るべきものは變化するものにして、視る可からざるものは不變のものなるか。

之れ亦蓋然らん。

且つ吾等の一部は肉體にして、他の一部は靈魂に非ずや。

然り。

然らば肉體は如何なる階級の物に近似するか。視るべき物たるや、瞭然たり—誰か之れを疑はん。

然らば靈魂は視るべきものなるか、或は視る可からざるものなるか。

ソークラテースよ人の得て視る可からざるものたるなり。

『視るべきもの』及び『視る可からざるもの』とは果して何をか意味す。之

れ人間の眼を以つて視るべきもの及び視る可からざるものを謂ふか。
然り、人間の眼に。

而して靈魂は視ることを得るか、或は視ることを得ざるか。
視ることを得ず。

然らば不可視なるか。
然り。

然らば靈魂は不可視に、肉體は可視に属すと謂ふべきか。
ソークラテースよ、こは必然の結論なり。

余は前に、靈魂其知覺の機械として肉體を使用し、視覺聽覺或は他の感
覺を使用する時(肉體を介して知覺するとは、諸感覺に由つて知覺するこ
となり)―靈魂は肉體の爲めに變化の境界に曳き入れられ此に行吟惑亂
せん、而して靈魂一旦變化に觸るゝ時は世界は、其四周に回轉し、宛も酒に
酔ひたる如くなるべし。

真に然り。

然るに靈魂能く自己に歸へりて沈思する時は、靈魂こゝに清淨、永遠、不

靈魂肉體を使用
する時は變化の
境界に引き込ま
る

靈魂自己に歸へ
り沈思すれば永
遠不死情淨の世
界に到らん

靈魂は支配し肉
體は服役し、靈
魂は人の如く肉
體は人の如し

死、不變等、其親族の住せる世界に到らん。而して靈魂若し能く己を保ち、外物毫も之れを妨害することなき時は、其世界に永く彼等と共に住することを得べし。此に於て靈魂は其誤謬の途を歩むことなく、不變と共に交はりて又た不變たるべし。靈魂の此状態は所謂智慧なるものにはあらざるか。

彼れ答へて曰く、君の言や實に善し、又た眞なり。

此に論じたる所、及び以前より論じたる所に由つて断定を下す時は、靈魂は、如何なるものゝ階級に一層近しと云ふべきか。

ソークラテースよ、意ふに、何人たりとも此議論に據る時は、靈魂は無限に不變物に類すと云はん——如何なる頑冥不靈の人と雖決して之れを否まざるべし。

而して肉體は變化すべきものゝ如きか。
然り。

今ま一度、他の光明に照らして此問題を思考せんか——靈魂と肉體との合體せる時は、自然は命令して靈魂をして支配せしめ、肉體をして服従

勤役せしむ。而して是兩職掌中、何れか果して神に近く、何れか果して人に近しとするか。神は自然に命令し、支配するものにして、人は服従勤役するものなりと君は思はざるか。

然り。

而して靈魂は何れに似たりとなすか。

ソークラテースよ、靈魂の神に似、肉體の人に似たるは疑ふべきなし。

ケーベスよ、然らば從來論じたる所に由つて思考せば、結論は實に左の如きには非ざるか、曰く—靈魂は神性、不死、智性、單一、不可分解、不變のものに類し、肉體は人間、可死、無知、雜多、可分解、變化のものに類せりと謂ふべきに非ずや。愛するケーベスよ、是れ果して否むことを得るか。

否み能はず。

然りと雖、若し此論にして眞なりとせば、然らば、肉體は急速に分解に歸すべきものなりと雖、靈魂は殆ど全く分解せざるものにあらずや。

確かに然り。

人死して後、可視の世界に存する所の其可視の部分たる肉體にして、之

肉體の如きすら
尙ほ或時日存し
得るを見て靈魂
に關して學ぶ所
あるを得べし、

靈魂は風に吹き
去らるゝ如きも
のに非ず

れを屍骸と稱し、自然に分離し、瓦解し、消散に歸すべきものと雖も、直に分
離瓦解せずして暫時は能く残留することを得るなり。又た若し死する
の時、其人の身體強健にして、又た其時候好き時は、其屍體も或は長時日を
保つことは君の實知せる所なるべし。且つ肉體は若し善く之れを緊縮
し、又た之れを木乃伊ミイラとするにエヂプト人の爲すが如くせば、殆ど無限
の時間に残留することを得べく、諸部分或は壞頽すと雖尙ほ骸骨及び軟
帶等は實際に不滅たるなり——然らずや。

眞に然り。

而して此の不可視の靈魂が、又た同じく不可視にして純潔、高尚なる所
の眞正のハイデースハイドース神の居所に赴くに當り、又た若し神意にして好み玉
はど、吾が靈魂又た此の善にして智ある所の神の途に進むに當り、——余は
反復して云はん、若し之れ靈魂の性質及び本源なりとせば、衆人の謂ふが
如く、其身體を脱離するに當り、果して直ちに風に吹き去られて消滅すと
謂ふべきものならんや。愛するシンミア及びケーベスよ、此は決して有
り得べからざるなり。眞理を言はど、寧ろ、死するの時能く其靈魂の純潔

を保ち、毫も肉體の汚染を被らさず、其生存中決して好みて肉體と關係するに非ずして、却つて之れを忌避せる所の靈魂は、能く自ら自己に集合し、此くの如き肉體の脱離と自己集合とを永遠の研究の科目となすと云ふべし。之れ靈魂は哲學の真正の門弟子たりしことを示めすものにして、又た、其實、常に死を實行することを心とせるものに非ずや。實に哲學とは死を研究するものなるには非ざるか。

眞に然り。

余は云ふ。かの不可視の靈魂は神聖、不朽、且つ道理ある不可視の世界に出立して、此ここに到達する時は、能く幸福を享有し、又た能く人間の誤謬と愚痴と恐懼と野卑なる欲情と、其他一切人間の惡事より脱却し、人々の云ふが如く、教義を奉じて永久に諸神と共住すべし。ケーベスよ、之れ眞理にあらざるか。

ケーベス曰く、然り、疑ふまでもなし。

然るにかの死するの時汚染せられ、純潔ならずして、常に肉體の友たり、奴僕たり、而して肉體及び肉體の欲望及び快樂に誘惑され、遂には、眞理は

たゞ肉體の形狀に存し、人は之れに觸れ、之れを視、之れを味ひ、而して其情欲の目的に使用する爲めのものなりと信するに至る所の靈魂——此くの如く肉眼には暗黒にして視ること能はずと雖、たゞ哲學に由つて見るを得る所の智性の原理を嫌ひ、之れを恐れ、之れを避くるに慣れたる靈魂——此くのごときの靈魂は、君は果して純潔無雜の状態にて死すべしとなすか。

彼れ答へて曰く、不能なり。

此くの如きの靈魂は、常に肉體の事を以つて心となし、以つて之れに係したるより、靈魂の性質に影響を及ぼし、遂に肉體の爲めに束縛さるゝに至るものなり。

眞に然り。

而して友よ。此の有形分子は重くして土の如く又た粗なり。而して靈魂は此可視の分子の爲めに不可視のものを恐れ、下なる他界を懼るゝより、再び可視の世界に壓抑せられ引き摺られ、——而して人々の言ふが如く死者の靈魂幽靈となりて、墓地を彷徨し、墳塋の四邊に隱見するを見る。

悪人の靈魂は肉體分子に由つて引き摺らる

之れ其死して肉體を脱離する時靈魂純潔ならずして、現世の可視の物體は其内に浸潤し、爲めに墮落して靈魂は視らるべき形體あるものとして存するに至りしなり。

ソークラテースよ、眞に然るが如し。

然り、ケーベスよ、此は眞實なるが如く思はるゝなり。而して是等は善人の靈魂に非ずして悪人の靈魂が、生前の不良なる行爲に對する罰を受けんが爲めに、此かる陰鬱なる場所に彷徨せざるを得ざらしめられたるものにして、尙ほ其羈絆を脱せずして付き纏へる煩惱の爲めに、遂に他の動物の體に入りて此所に幽閉の身となるに至るまで、其彷徨を繼續す、而して其幽閉さるべき牢獄たるや彼等の生前執着したる所と同一性質のものなるが如し。

ソークラテースよ、君の意味する所は如何なる性質のものなるぞ。

余の意味する所は、かの大食、放蕩、及び大酒に耽り、毫も是等を避けんとするの心なかりし人等の靈魂は、驢馬或は此種の動物に入るべしと云ふにあり。君は如何に思ふや。

不淨の靈魂は其性質に似たる禽獸の體内に入る

思ふに此くの如きの説は甚だ有り得べきこととなす。

かの不正を行ひ、壓制を事とし、亂暴を爲したる者の靈魂は或は豺狼、或は鷹、或は鷹等とならん——豈他あるを得んや。

ケーベス曰く、然り、此くの如きものとなるは疑ふまでもあらざるなり。彼れ曰く、其他種々の性質或は情欲に對して、一々其れに應ずる所のものを配當するは、敢て難しとせざるなり。

彼れ曰く、然り、困難あらざるべし。

而して是等のものに比較して、或者は稍々幸福なるあり。而して彼等自身及び其行くべき場所に於て最も幸福なるは、哲學或は心意を以つてせずして、習慣及び注意等に出つて、かの節制及び正義等を自得し、以つて此の民事上及び社會上の徳義を實行せし所の人々となす。

彼等何故最も幸福なる。

何となれば是等の人々の靈魂は、其性質に似たる所の、一種温和にして社會心あるもの、例へば蜂、蜜蜂或は蟻等となり、或は再び人間の形體を取るものなり。而して正直温和の人々は、實に是等の内より生ずるものな

りと思像さるゝなり。

眞に然るが如くに思はる。

かの哲學を修めず、又た其死するの時、全然純潔ならざる者は、諸神の伴侶たることの許可を得ず、たゞ知識を愛する者のみ、此恩典を得るなり。

シンミアス及びケーベスよ、之れ眞に哲學に一身を委ねたる人々が、一切肉體の欲情を禁斷し、是等に反抗し、決して是等に降伏せざることの理由にして、かの世間の金錢を愛する人々及び世間一般の人々の如く、貧賤とならんことを恐れ、或は零落せんことを懼れて然るにあらず、或は又た權勢及び名譽を好む人が、惡行の不名譽を恐るゝが如く然るにあらざるなり。

ケーベス曰く、然り、ソークラテースよ。彼等決して此くの如きものたらざるべし。

彼れ曰く、彼等眞に此くの如き者とならざるべし。故にかの善く自己の靈魂に注意するものは、單に肉體に服従順應せざるのみに非ずして、尙ほ且つ一切是等のものに告別するなり。而して彼等決して盲者の途を

往くことなく、哲學若し彼等を淨め、惡なからしめんとするに於ては、彼等
哲學の力に背くべきものに非ざるを感じ、哲學の導く所は、何處なりとも
之れに隨はんとせり。

ソークラテースよ、君の意味せる所は何事ぞ。

彼れ曰く、余は語らん。かの、知識を愛する人々は此く意識すらく—靈
魂は單に肉體に繫縛されて固着されあるのみにして、哲學其靈魂を引き
取るに至るまでは、靈魂はたゞ其牢獄鐵窓の間隙より、眞實在を見るに止
まり、決して自己自身を以てするにあらず、種々なる無智の泥濘中に轉輾
し、又た其欲情の爲めに靈魂は却つて、自己を束縛するの主要なる助力者
となるものなりと。之れ實に靈魂の本態なり。此に於て余が前に言へ
るが如く、智慧を愛する人々は能く此の事を知るなり、乃ち—哲學は靈魂
自ら原因となりて自己を縲縛の身と爲すの怖るべきものなるを見て、來
つて靈魂を容受し之れを慰藉し、又た其惡の繫縛を解放せんとし、耳目及
び其他の諸感覺の虛偽に充滿せることを指示し、靈魂に勸めて、是等諸感
覺に頼ること勿らしめ、たゞ其必要なる使用の外、一切之を禁斷し、以つて、

靈魂をして自己に集結せしめ、以つて自己及び純潔なる實在の純潔なる
理會を信せしめ、決して其他の通路を通じて來る所のもの、及び變化常な
きものを信すること勿らしむ。之れ此くの如きものは可視、可觸のもの
なりと雖、靈魂其本性を以つて見る所のものは、智性のももの、不可視のもの
なればなり。而して眞正の哲學者の靈魂は意へらく、此救拯には抗抵す
べきものに非ずと、故に其の能くする限りは快樂、欲望、苦痛及び恐懼を禁
斷す。而して又た謂へらく、人若し大なる喜悅、悲歎、恐懼或は欲望を有す
る時は、單に預期され得る所の害惡——例へば其欲情の爲めに犠牲に供じ
たる所の健康及び財産上の損失等の一——如きに止まらずして、又た一層大
なる害を被るべし。而して此惡は一切諸惡の最大最惡なるものにして、
實に彼れの意想外のものなり。

ケーベス曰く、ソークラテースよ、其は何ぞや。

其惡たるや、若し快樂、苦痛の感覺深切なる時は、凡ての人の靈魂は、此深
切なる感覺の目的物を以つて、最も明瞭に又た最も眞實なるものなりと
想像することゝなす。然りと雖、其實は然らずして、是等は單に外觀のも

哲學者に取つて
の最大惡は激烈
なる感覺の眞知
を錯亂すること
なり

のたるなり。

眞に然り。

而して、是れ靈魂が最も多く肉體の奴隷となる所の境遇に非ずや。

何を以つて然るか。

何となれば、各快樂及び苦痛は一種の釘にして、固く靈魂を肉體に釘付けして、靈魂をして肉體の如くならしめ、遂に肉體の以つて眞實なりとする所は、靈魂亦之れを眞實なりと信するに至らしむ。而して其肉體と合一し、其肉體と同一なる歡樂を有せるより、何時しか靈魂は同一の習慣及び欲望を有せざるを得ざるに至り、下なる他界に出立するに當り、決して純潔なるなく、常に肉體に由つて汚染さるゝなり。此に於て靈魂他物の體中に沈淪し、此ここに萌芽し、こゝに成長し、神聖、純潔、單一なるものとの交通絶えてあることなし。

ケーベス答へて曰く、ソークラテースよ、眞に然り。

ケーベスよ、之れ眞に知識を愛する人々の節制且つ勇氣ある所以にして、決して世人の思ふが如き理由に非ざるなり。

快樂苦痛を脱却
せし靈魂は死し
て風に吹き去ら
るゝ如きことな
し

シンミアス及び
ケーベス尙ほ疑
ふ

眞に、世人の思ふが如きに非ず。

眞に世人の思ふが如きに非ず。哲學者の靈魂は全く異なる道理を有し、其救拯を哲學に求め、而して救拯せられたる後は、再び其身を委して快樂苦痛の奴隸となし、事を爲すは實は只だ再び之を爲さざらんが爲めに、して宛もペーテロペーの衣織るは實は之れ織らざらんが爲めなる如きに非ずして、却つて其情欲を靜平にし、道理に遵順し、哲學の思考を事とし、以つて眞實と神聖之れ憶說の問題に非ずとを見て、以つて營養を此に取るなり。此くて其生命あるの間は生活し、死後は靈魂其己れに同じき所の親戚たるものゝ所に至り、以つて人間の諸惡より解除されんことを希望するなり。シンミアス及びケーベスよ、恐るゝ勿れ。此くの如く養育せられ、此くの如きの目的を有する所の靈魂は、其身體を離脱するに當り、風に吹き去られて、何處にも有るなく、何物にてもあるなく、消散滅盡するものなりと思ふこと勿れ。

ソークラテース語り終りし時、人々暫時沈黙して一坐寂然たり。之れ吾等往々爲すが如く、彼れ其の言ひし所を再考せるものゝ如し。而して

ソークラテース
遠慮なく質問す
べきをすむ

ソークラテース
人を囑情せしむ
るの困難なるを
歎す

唯だケーベス及びシンミアスの兩人互に私語せるあるのみ、ソークラテース兩人の私語せるを觀て問うて曰く、今まで爲したる議論に就いて如何に思考せりや、又た何物か十分ならざるものありや。素より十分に精密に簡にかけて論究せんとする者にとつては、疑問及び攻撃を介むの數點の餘地ありて存す。若し君等にして他事を語れるものならんには余は何事も言ふの要なしと雖、若し尙ほ疑はしき事あらんには、憚ることなく其思ふ所を吐露し、君等が思ひ出したる所の事に就いて何等か進歩する所あらば幸なりとす。若し君等にして余を以つて何事にか役立つ者なりとせば、君等の助力となることを許るせ。

シンミアス曰く、ソークラテースよ余は自白す。疑念吾等の心中に起り、吾等其の質問を爲すことを互に憚りて相推移し居たるなり。何となれば、此くの如き場合に於て、餘りに執拗に質問するは、君にとつて甚だ惱まじかるべきを恐れて、吾等言ひ出だすことを好まざりしなり。

ソークラテース微笑して答へて曰く、あゝシンミアスよ、君は何をか言へる。余は今ま君をだに説伏して、余の現在の位置は、決して平常よりも

白鳥の預言力と
ソークラテース

白鳥は死時却つて愉快に歌ふ之れは事ふる神の坐に行くを知らばなり

ソークラテースは白鳥と共にアポロンの神の僕として友なり故に楽しく此世を去らん

悲むべきものに非ざることを承認せしむる能はずとせば、世人をして、余の現状の悲しむべき不幸のものに非ざることを承認せしむるは又一層の困難と謂はざる可からず。君は余に許るすに白鳥の有する程度の預言力だに以つてすることあらざるか。實に白鳥は其死せざる可からざるを知る時は、其一生の事を歌ふものにして、其歌ふや平常よりも愉快の調子を以つてするなり。之れ其事ふる所の神の膝下に至るを得るを喜べるに由る。然るに人は己れの死を恐るゝの情よりして、誤謬にも白鳥の歌ふを以つて其死を悲しむものなりと思ふに至る。彼等は如何なる鳥と雖、嚴寒、饑餓、或は苦痛に際しては、決して歌ふ者に非ざるを知らざるなり——而してナイチンゲール、燕、或は戴勝鳥等の悲哀の曲を歌ふ所の鳥と雖然り。されども是等の鳥に關しては、余は白鳥に關する信仰よりも多く信せずと雖、尙ほ然るが如きなり。然りと雖白鳥はアポロン神の神鳥なり、故に預言の力を有し、他界の善なる事を前知せるを以つて、其死の日に當てや、平常よりも歡ばしく歌ふなり。余も亦自ら此神の神僕にして、白鳥等の友たる神僕なりと信じ、余の主たる神より、白鳥等の有せる

レンミアス此間
題を終終底まで
論ぜざる可から
ざるを主張す

よりも優れる所の預言力を受けたりと思へり。故に若し之れ君の逡巡する所の理由ならんには、憚ることなく思ふ所を語れ、アテーナイ政府の十一行政官の許可する間、吾等互に相語らん。

シンミアス曰く、大に善し、然らば余は余の疑問を語るべく、ケーベスは彼れの疑問を語るべきなり。余は自ら感ず思ふに君も亦同感なるべし。現世に於いて、此くの如き疑問に關して或確實なることを得るは實に困難なるのみに非ずして、寧ろ不能と云ふべきなりと。然りと雖かの是等の事に關したる言語を其窮極にまで證明することなく、又た各方面より是等の問題を考察するに撓む所の人は、余は稱して怯懦の輩となす。而して彼れ左の兩者其一を得るまでは十分に耐忍せざる可からざるなり。乃ち彼れは是等の問題に關して自ら發明する所あるか、或は人より教へらるゝ所あるか之れなり。若し此事にして不能ならんには、彼れ人間の諸説中最も善良にして確實鞏固なるものを取り、以つて之れを舟筏として人世を航行すべきなり。されども彼れ若し神の或る言語を發見して以つて其人生の航行をして一層安全確實ならしむること能はざる時は、

シンミアス曰く
「現象は一種の調
和なり、調和は
「リラ」琴より後
に發せしむること
能はず、之れと
同じく靈魂は肉
體より後に發せ
るとの如し何ん

余は素より其危険あるを認めざるを得ざるなり。而して今や君の命に従ひ、君に質問を提出せん、然らば今後自ら其思考せし時に發言せざりしことを後悔することあらざるべし。實にソークラテースよ。余は此問題に關して、余一人或はケーベスと共に思考するに於いて、君の議論は余に十分ならずと感ぜらるゝなり。

ソークラテース答へて曰く、友よ、余は敢て云はん、或は君の言正當なることあらん。余は如何なる點に於て余の議論は不十分なるかを知らんことを欲す。

シンミアス答へて曰く、此點なり——今若し調和及び「リラ」琴を用つて同様の議論を爲すと假定せんに——彼れ調和を以つて不可視、非物質、神聖なるものとなし、善く調和したる「リラ」琴に存すとなすと雖、其「リラ」琴も其絃も共に之れ物質にして、組成したる物、土地に屬すべきも、死して朽つべきものに近きものなりと論じ得べきに非ずや。而して人若し其琴を壞り或は其絃を斷つことあらんには、此見解を有せる人は、君が論ずるが如く、同様の比較論を以つて論じ、調和は生存し、決して死したること無しと

なし、一而して彼れ云はん、汝は絃なくして琴尙ほ存じ、又た其斷絶したる
絃は朽つべきものなりと雖尙ほ存す、然るにかの神聖不朽の性質にして
又た是等と近親なる調和なる者が、如何でか消滅し、朽つべき物に前き
立ちて消滅することあらんや、此くて調和なるものは何處にか存在し、琴
材及絲絃は、調和なるものゝ破滅するに前き立ちて破滅すべしと。ソ
クラテースよ、吾等の靈魂に關する觀念は此くの如きものなりとの思想
は、君の心中に起りしことならん。而して身體は寒温乾濕の諸原素に由
つて、集成され、而して一種の方法に由つて調べらるゝ時は、靈魂はこゝに
調和たり、又た是等諸原素の適當なる比例を有せる配合に外ならずと云
ふべきなり。若し夫れ然りとせば、身體の諸絃にして時に疾病或は其他
の害に由つて、其度を過ごして或は弛緩し、或は緊縮することあらんには、
靈魂假令最も神聖なりと雖、音樂或は其他技術上の調和等の如く、勿論直
に消滅すべく、身體の物質上の遺骸は、其朽敗し或は燒燃さるゝまでは、尙
ほ長時日存續するなり。若し人ありて、靈魂は身體諸原素の調和にして、
所謂死なるものに於いて、其消滅を始むと云ふ者あらんには、吾等果して

何と答へば可なるべきぞ。

ソークラテース例の如く吾等を凝視し、微笑して曰く、シンミアスの言には又た一個の道理在つて存す。諸君の内、何人か余よりも善く答へ得る者彼れに答へざるか、實に彼れが余に加へたる攻撃や甚だ力あるものなり。然りと雖、吾等の彼れに答ふるの前、先づケーベスの言はんとする所を聽かば吾等思考の時間を得べし。而して兩人共に語り終りて、其言真理あらんには吾等之れに同意すべしと雖、若し夫れ然らざるに於ては余は余の説を守りて之れを主張すべしと。而して曰く、ケーベスよ、然らば君の難問とせる所を余に告げよ。

ケーベス曰く、余は余の難問とせる所を語らん、此議論は毫も前進することなく、依然として其在りし所に在りて、又た前同様の反對を被らざる可からざるは余の感ずる所なり。其靈魂が肉體に入るの前に存在し居たりとの論は、甚だ巧みに立論され、余は以つて十分に證明されたりと謂ふことを得んか。然りと雖、余の見る所を以つてすれば、死後靈魂の存在は、未だ證明されずとなす。余の反對する所はシンミアスとは同一に

ケーベス曰く、
人は數多の衣服
より、永生なり
と雖、最後の衣服
は人間よりも後
に残る

非ざるなり、何となれば、余は靈魂は肉體よりも強力にして、又た永續すべ
きものなるを拒否することなく、寧ろ凡て此くの如き關係に於ては遙か
に身體に優れりと爲すものなればなり。此に於て議論は余に向つて發
問して曰く、如何なれば汝は尙ほ之れを確信することなきや、汝は人間
の弱き部分だも、尙ほ且後に残るは汝の實知する所なり、然るに其者より
も一層永續すべきもの、其同年月の間存續することは之れを認めざる
かど。余は今まシンミアスと同じく比喻を以つて語るべければ、余の言
或は道理ありや否や、之れ君の思考を煩はさんとする所なり。余のこと
に用ゆる所の比喻は左の如し、爰に一人の老たる衣を織る者ありて死
せり、其の死後或者謂うて曰く、彼れ死せるに非ず、生ける者たらざる可か
らず、故に見よ此に上衣あり、之れ彼れの織りし所、又た着たる所、而して全
くして壞る所なくして後に残れりと。而して彼れ進みて、之れを信せざ
る者に問ふに、其一層永く存續する者は、人間なるか、將た又た使用し着用
したる所の上衣なるか、何れなりやを以つてし、若し人間は遙かに永く存
續する者なりとの答辯を得たらんには、其人必ず此く思はん、曰く、比較上

之れと同じく、
魂は數個の肉體
を経たりと雖、
最後には衰耗す

短少時存續するものゝ残れる以上は、一層永續する所の人間の生き残るは一層確かに證明されたるものなりと。然りと雖シンミアスよ、余は君の注意を乞はん、彼れの言は誤認たるなり、何人と雖此くの如き言の無意味なるを見ることを得べし。而して其眞を云はゞ前記機を織る者は多くの此くの如き上衣を織り又た着、而して是等數多の上衣よりは長生じたりと雖、遂には其最後の上衣は彼れよりも後に残れり、然りと雖之れが爲めに人は上衣よりも劣り、又た弱きものなりと證明されたるに非ざるなり。靈魂と肉體との關係は同様なる比喻を以つて之れを説明するを得べく、何人と雖靈魂を以つて長生のものとなし、肉體は之れに比較せば弱くして短生のものなりと云ふことを得べし。彼れ又た同様の議論を以つて、各人の靈魂は肉體の數個を着脱したり、殊に長生を爲したるもの如きは然りと云ふことを得ん。其の生命あるの間は、肉體は溶解枯落して、靈魂常に他の衣を着し、又たその破損を補修することを爲す。然りと雖靈魂死するに當つてや、其最終の衣服を着せざる可からずして、此衣服たる肉體は、靈魂よりも後に残るべし。されども遂に靈魂の死するに

於ては、肉體其本來の弱點を示めし、速かに分解を起して消散す。故に余は寧ろ力の優等なるの點よりする所の、靈魂は死後にまで存続すとの證明を信せざらんと欲す。今若し可能なりとして君が肯定する以上を許容し、實に靈魂の生前の存在を認むるのみに止まらず、尙ほ或人の靈魂は死後に至るも存在して、再三三四死亡し甦生し、而して靈魂は自ら自然の力を有し、以つて能く持續して數度甦生するを得ん、されども余は尙ほ此く考ふることなき能はず、乃ち靈魂は數回の甦生に疲勞し、遂に其數死中の一に於て挫屈して、全く茲に消滅に歸す、而して此死、及び靈魂に破滅を來らしむる所の肉體の瓦解は、何人も知る者なし、何となれば吾等の内何人も其經驗を有せしものあらざればなり。若し此説の如しとせば、かの死後の存在を信仰するものは若し彼れ靈魂の不死不朽なることを證明し得るに非ざるよりは、實に之れ愚昧なる信仰を有せるものと云はざる可からず。若し彼れ靈魂の不死なることを證明すること能はずとせば、かの將に死せんとする者が、常に、肉體瓦解して靈魂亦全然消滅するを恐るゝは道理なきに非ざるなり。

ソークラテース
の議論は破れた
りとして人々皆
な不快の感を爲
せり

吾等凡ては彼等の言ひし所を聽きて甚だ不快の感を有したるは、此後吾等互に語りたる所に由りて知りぬ。何となれば是れまで鞏固に確信したる所は今や其信仰を振盪され、混雜不明の感は、單に是れまで爲したる所の議論のみに止まらず、又た今後の議論にまで影響を及ぼし、吾等判断を形成すること能はざるか、或は信仰の基礎を失ふかの兩者其一とならんとせり。

エヘ　ファイドーンよ、君の語れる時、嗚呼余は同一なる疑問を引き起し、自ら心に謂へらく、今後余は如何なる議論を信すれば可ならんと。何となれば、ソークラテースの議論に優りて吾等の確信すべきもの他に有るとなし、然るに今や此議論は全く破られて信すべからずとなりたればなり。かの靈魂は一種の調和なりと云ふの説は、常に余に對して非常なる引力を有したるものにして、人の之れを謂ふ時は、直に余に歸へり來り、余の自家創見の確信の如く感じたる所のものなり。然るに余は今や討究を新にし、人死すると雖靈魂は生き残るものなるを證明する所の他の議論を索めざる可からざるなり。余は君に願ふ、ソークラテースは果して

ソークラテース
泰然自若として
尙ほ議論を續く

如何なる議論を爲したるか、之れを告げよ。彼れ亦君が謂ひし如く人々と同じく不快なる感覺を有したるか或は平然として其攻撃に對せしか。彼れ力強く答へしか、或は其答辯は弱かりしか。成らん限り精密に語り聽かせよ。

ファイ エヘクラテースよ、余は屢々ソークラテースには驚歎するものなりと雖、今回の如く驚歎の情禁せざりしことはあらざりき。其の彼れが答辯し得ることは何事にも非すと雖、第一余を驚かしたるは、温和愉快にして、嘉稱したる態度にて、兩青年の言を受容したる事にして、次に議論に由つて被らされたる創痕に對する鋭敏なる感覺、及び容易に之れを全癒せしめたることとなす。彼れや宛然一個の大將が敗軍散亂の兵士を集合し、隊伍を整へて肅々として再び議論の戰場に向ふが如くなりき。エヘ 次に如何なることありし。

ファイ 願くば聽け。余は彼れの右側に近くに在りて、倚子様のものに坐し、彼れは稍や高き寢臺の上に坐せり。時に彼れ余の頭を撫で頭髮を余の頸に押し付け、余の頭髮を持て遊びつゝ云うて曰く、ファイドーンよ、

愛するファイド
ンの美しき髪

想ふに明朝君の此美麗なる頭髮は切斷さるべしと。

余答へて曰く、然り、ソークラテースよ、余は然るべしと、想像す。

されども若し余の忠告を用ゐば、然らざるべし。

余曰く、然らば余は何を爲すべきぞ。

彼れ答へて曰く、今日なり、明日に非ず、若し此議論死し、吾等再び之れを生かしむること能はざらんには、君と余とは共に剃髮すべし。若し余にして君ならんには、又た議論は余より遁走して余はシンミアス及びケーベスに對して余の地歩を保つこと能はざらんには、余は自らアルゴス人の如く、誓つて、再び戦鬪を開始し、以つて彼れを破るに至るまでは、決して頭髮を落ふることを爲さざるべし。

余曰く、然り。然りと雖へーラクレースの如きも尙ほ且つ二人に敵すること能はざりしと云へり。

彼れ曰く、然らば余を呼び出だせ、今日の太陽西山に没するまでは、余は君のイオラオスとなるべし。

余曰く、余の君を呼び出だすはへーラクレースがイオラオスを呼び出

だせし如くならず、寧ろイオラオスが、ヘーラクレスを呼び出だせし如く
なさん。

彼れ曰く、夫れ然り。然りと雖第一吾等十分に注意し危険を避けざる
可からざるなり。

余曰く、如何なる性質の危険ぞや。

厭理家となるは
厭人家となるよ
りも危険なり

彼れ答へて曰く、乃ち厭理家とならざれと云ふにあり、實に之れに優れ
る惡しきことはあらざるなり。世に厭人家即ち人間を嫌ふ所の人ある
が如く、又た厭理家即ち道理を嫌ふ人ありて、兩者共に其原因を同うし、世
界人生を知らざるに由るものとなす。厭人主義は、經驗なきことを過信
するより生ずるものにして、人を信じて全く眞實、堅固、正直なるものとな
すと雖、暫時にして其信じたる人虚偽邪曲の人となり、此くの如きこと屢
々にして、殊に其最も信用し、最も親密なりとせる朋友にして此くの如き
ことあり、又た數々彼等と不和なるに於ては、彼れ終に一切の人間を厭ひ、
一人として彼れに對して善き者なしと信ずるに至る。君は此くの如き
の人物あるは實知せる所ならん。

厭人家となるの
理由は人を過信
するに由る

然り余は實知せり。

實に感情なるものは信すべからざるかな、此くの如き人物が、人と交はるや、人性に關する何等の經驗をも有せざる者なるや明かなり。何となれば經驗は人に教ふるに人世の真相を以つてし、其少數は善良にして、又た少數は不善なりと雖、多數の人は善不善の中間にあることを示めしたるべければなり。

余曰く、君の言ふ所や何をか意味す。

彼れ答へて曰く、之れ甚だ大なる人と甚だ小なる人の場合の如しと云ふにありて——甚だ大なる人と甚だ小なる人とは甚だ普通ならざるものにして、凡て之れを一切の極端の事即ち大小、遲速、美醜、黑白等に適用して云ふを得べく、又た人の場合、犬の場合其他凡ての場合に於て、極端なるものは少數にして、多數は中間のものなり、君は此事實を觀察したるか。

余曰く、然り、余は之れを觀察せり。

彼れ曰く、若し此に悪人の競争なるものありとせば、其内大悪なるものは甚だ僅少なるは君の發見する所なるべし。

眞理家となるは
初めに或種の議
論を過信せしに
由る

余曰く、其は眞に然るが如し。

彼れ答へて曰く、然り眞に然るが如し。素より此關係に於て、議論は人間の如きに非すと雖——こゝに余は君に導かれて、余の云はんとせし以上の事を言へり。然りと雖比較の點たるや、かの單純にして甚だ論法に熟達せざるものは、初めは或議論を眞なりとして信するも、其後眞に誤謬なるか或は否らざるか、兎に角に之れを誤謬なりと思ひ、數度此くの如きとに遭遇し、彼れ遂に何物をも信せざるに至り、君も知れるが如く、大論客終には自ら人間中至賢の者となれりと思ふに至る、之れ彼等のみ、一切の議論及び一切の事物は、宛もエウリポスの潮流の不斷に干満するが如く、全然堅實ならずして、動搖不定なるを知れるを以つてなり。

余曰く、其は眞に然り。

彼れ答へて曰く、然りフアイドーンよ、今ま若し眞理確實なること、或は知識の可能なるものありとするも、かの始めに眞理の如く見しと雖、忽ちにして不眞理と變する如き人物は、實に不幸の人と云ふべく、自己及び自己の才知なきことを咎めずして、其自己の煩悶せるが爲めに、自己の咎を一

不健康の思想は
之れを容受する
こと勿れ

人を説服せんと
するに非ず真理
を見んとするに
あり

般の議論に移し、今後永久に議論を嫌ひ之れを誹謗し、而して遂に眞理及び實在の知識を失喪するに至るべし。

余曰く、然り、實に不幸なること云ふべし。

彼れ曰く、然らば吾等如何なる議論に於ても健康ならざる思想は決して始めに之れを心中に容受せざるやう注意することゝを要す。而して寧ろ言へ、吾等尙ほ未だ自ら健康堅固を得ざるなり、故に吾等勇ましく進みて精神の健康を得ざる可からずと一而して君及び凡てその他は其將來の生活全體の爲めに、余は又た死の希望の爲めに此く云ふべし。余は目下の事情に於て或は哲學者の面目を失ひ、或は俗人の如く偏見の爭論心あらざるやを恐るゝものなり。かの爭論家なるものゝ議論するや、其問題の正理如何んは之れを問ふことなく、たゞ自説に固執し、人を説伏することのみを旨となす。而して此種の論者と余との現在に於て區別さるるは、唯だ此點のみにして一彼れは自己が眞なりと云ひし所に關して、人を説伏せんことを求むと雖、余は寧ろ自己を説伏せんとするのみにして、人を説伏するは第二段の事なり。而して余は議論に由つて如何に多く

ソークラテース
を眼中に置かず
して眞理を目的
とし公平に思考
せよ

シンミアス及び
ケーベス「回想
」は尙ほ之れ
を信ずと雖靈魂
は肉體より前に
消滅せんことを
恐る

得たる所あるやを見ることを爲すの外他あらざるなり。若し夫れ余の言ふ所にして眞實ならんには、余は眞理に説得されしものと謂ふべく之れ善なり。然りと雖死後何物もあることなしとするも、尙ほ残れる小時間中に悲哀を以つて友人を困らしむること勿るべく、又た余の無知も永續することなくして、余と共に死す可ければ、何の害をも及ぼすこと之れ有らざるべし。シンミアス及びケーベスよ、之れ余の心の状態なり、余は此心を以つて議論を爲せり。而して余が君等に願ふ所は、君等はソークラテースを意とすることなく、たゞ眞理を思考せんことなり。君若し余は眞理を語れるものなりと見ば、君等幸に同意せよ、若し夫れ然らざるに於ては全身全力を以つて余に反對し、余をして、其熱心の餘り、君等を欺き、併せて余自己を欺き、宛も蜜蜂の如く、余の死するの前君等の心中に余の刺劍を留めしむる如きこと勿らしめよ。

而して彼れ曰く、今や吾等進み論せんに、先づ君等の言ひし所を余の心に確實にするを要す。若し余の記憶にして誤らずとせば、シンミアスの疑ひ恐るゝ所は、靈魂は假令ひ肉體よりも美麗にして又た神聖なるもの

なりと雖、其調和の形狀に存せる所より、或は先づ消滅するにあらずやと謂ふにあり。然るに之れに反してケーベスは、靈魂を以つて肉體よりも永續するものなるを許すと雖、靈魂數個の肉體を著脱したる後、遂に最後に着したる肉體を後に残して自ら消滅するに非ずや。之れ即ち死なり、之れ肉體の破滅に非ずして靈魂の破滅なり、何となれば肉體には破滅作用常に行はれ居るものなればなりとなす。シンミアス及びケーベスは、是等は吾等の思考すべき諸點に非ずや。

彼等兩人此言を承認せり。

彼れ尙ほ進みて、彼等は以前よりの議論全體の力を否定するか、或は其一部を否定するものなるかを問へり。

彼等答へて曰く、其一部のみなり。

彼れ曰く、然らば吾等が知識は回想なり、故に靈魂は其肉體に幽閉さるる前、何處にか前在し居たるものならざる可からずと推論する所の議論の此部分に就いては、君は如何に思考するか。

ケーベスは、議論の其部分は非常に其感したる所にして、其確信は毫毛

調和の諸分子は
調和より前にあ
り、肉體は靈
魂より前にあ
らず

だに變動することなくして存せることを答へたり。而してシンミアスは之れに同意し、決して之れに異りて、考ふることは不能なりと云へり。

ソークラテース曰く、然りと雖テーパーイの友よ、若し君にして尙ほ音樂の調和は複合物にして、靈魂は、肉體の構造に於て設けられたる糸絃より生ずる所の調和なることを主張する者ならんには、君は異りたる思考を爲さんとせるものなり。何となれば君は調和なるものは、其を組成する所の諸分子より先きに在るものなりと云ふことは、決して之れを許容することなかる可ければなり。

ソークラテースよ、決して之れを許容することなし。

然りと雖此思想は之れ、君が靈魂は人の形體を取るの前に存在し、又た未だ存在せざる所の諸原素より成立すとの言中に含蓄せるものには非ざるか、何となれば調和なるものは、君の想ふが如く、靈魂の如きものに非ずして、始めに琴あり、次に絃あり、次に音聲の未だ調和せざる状態に存せる者あり、而して最後に調和生じ、其消滅するも亦、最初の者たればなり。靈魂に對する此くの如き觀念は、果して能く其他の觀念と一致するを得

るか。

シンミアス答へて曰く、毫も一致せざるなり。

彼れ曰く、然りと雖、調和を以つて主旨せる議論其物には必ず當に調和あるべきに非ずや。

シンミアス曰く、必ず然るべきなり。

彼れ曰く、然りと雖、かの知識は回想なりと云ふ所の意見と、靈魂は調和なりと云ふ所の意見とは調和せざるに非ずや。而して君は兩者其何れを取らんとするか。

彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、余は兩意見中の前者に對して一層強き信仰を有すと信ず。之れ實に十分余に證明されしものなりと雖、後者の意見は未だ毫も證明されしことなく、たゞ蓋然なるか、或は外見然るを得るが如き基礎あるのみにして、其れが爲めに多くの人々の信する所たるに過ぎざるなり。余は蓋然の點より立論する所の是等の議論は人を瞞着するものにして、其使用上大に注意するに非ざるよりは時に詐欺に陥るものなるは熟知せる所なり——幾何學及び其他の事に於ても亦然

己の議論は、
己の知識は、
己の回想は、
己の調和は、
己の蓋然は、
己の蓋然なるを認む

り。然りと雖知識及び回想の學理は、信すべき基礎に於て余に證明されたり。而して其證たるや、靈魂は肉體に來るの前已に存在したるものならざる可からずと云ふにあり。而して其理由たる、靈魂の實體は其名稱中に存在の意義を含蓄せりと云ふにあり。余の確知せし如く、正しく、且つ十分なる基礎ありて此結論を承認したる上は、意ふに余は靈魂を以つて調和なりとするの論は之れを停止し又人をして此くの如きの論を爲さしめざるやう爲さざる可からず。

彼れ曰く、シンミアスよ、余は又た他の點より此問題を觀察せんに、君は調和或は其他の結成物は、其の之れを結成する所の諸原素の状態以外、他の状態に在るを得べしと想へるか。

決して然か思はざるなり。

或は其結成諸原素の行動、堪受するより以外のものを行動、堪受するか。シンミアス答へて曰く、否な能はず。

然らば、正しく云ふ時は調和なるものは、之れを構成する所の諸部分或は諸原素を導くものに非ずして、たゞ是等諸部分ありて後之れに附隨す

るものたるなり。

彼れ同意せり。

實に調和なるものは其諸部に反對する所の何等の運動も、音聲も、又た其他の性質をも有する能はざるものなればなり。

彼れ答へて曰く、然り之れを有すること能はざるなり。

而して凡ての調和なるものゝ性質は、諸部分が調和さるゝ所の方法に關するに非ずや。

彼れ曰く、余は君の言を解せざるなり。

余の意味せる所は、調和には其度の存するものにして、若し一層眞に且つ十分調和さるゝ時は、一層善く調和し、又た一層完全に調和すと雖、若し又た十分に眞ならず又た十分完全に調和されざる時は、其調和の度少なく、又た完全ならずと云ふにあり。

眞に然り。

然りと雖靈魂には程度あるものなるか。或は一の靈魂は、程度の些少の相違に由りて、他の靈魂よりも或は多く、或は少なく完全なるとあるか。

調和には程度ありと雖も靈魂には程度なし

否な、此事なし。

然りと雖若しこゝに二個の靈魂ある時、其一方は知慧と徳義とを有し又た善なりと雖、他の一方は愚痴と不徳とを有し、又た不善なることあるは確實にして、之れ眞に然らずや。

眞に然り。

然りと雖かの靈魂は調和なりとの説を主張する所の人は、靈魂中に徳及び不徳の存在する此事を如何に説明せんとするぞ―彼等又た此處にも他の調和及び他の不調和ありて、有徳の靈魂は調和したるものにして、自體已に調和し、又た其内に他の調和を有し、不徳の靈魂は元來不調和にして、又た其内に他の調和なるものも之れなしと云ふべきか。

シンミアス答へて曰く、余は答へ能はざるなり。然りと雖此くの如きの説は、かの靈魂を以つて調和なりとする人の唱ふる所なるべしと信ず。而して吾等已に許容すらく、如何なる靈魂も其靈魂たるに於て他の靈魂に優れるに非ざることを。而して之れ調和なるものは其調和に多少あるに非ず、又た完全或は不完全の調和あるに非ざることを承認せるに

故に靈魂は調和
に存するに非
ず、又た調和は
靈魂中に存せず

等しと云ふべきに非ずや。

全く然り。

而してかの調和に多少なき所のものは、其の調和されたる事に於て多
少なきものに非ずや。

真に然り。

かの調和されたる事に於て多少なき所のものは、調和の多少あること
能はずして、たとへば同等の調和なるのみならずや。

然り、同等の調和なり。

然らば一の靈魂は、他の靈魂よりも或は優りて或は劣りて、靈魂たるに
非ずして、又た或は多く、或は少なく調和されたるに非ざるにあらずや。

確かに然り。

然らば靈魂は調和不調和に多少あること能はざるにあらずや。

然り。

而して調和或は不調和に多少なき以上は、若し不徳は不調和にして徳
は調和なる時は、一の靈魂は他の靈魂よりも多くの徳、或は不徳あるに非

ざるにあらずや。

眞に然り。

シンミアスよ、今一層之れを精密に云はん——若し靈魂は調和なりとせば、其内決して不徳あることなしと云ふべし、何となれば調和なるものは、全然調和にして、決して不調和の部分ある可からざればなり。

然り、不調和ある可からず。

故に靈魂にして完全に靈魂たる以上は不徳あることなきに非ずや。

然り、若し前論にして存立せる以上は、靈魂中如何にして不徳有るを得んや。

若し靈魂は何れも皆其性を等しうして靈魂たる以上は、一切の動物の一切の靈魂は、又た等しく善たるべきか。

彼れ曰く、ソークラテースよ、余は君に同意す。

彼れ曰く、君は凡て此事は皆な眞なりと思考するか。何となれば是等は、靈魂は調和なりとするより生ずる所の結果たるを以つてなり。之れ眞理たること能はず。

若し靈魂は調和
なりとせば一切
の靈魂は皆な一
様に善なるべし

彼れ曰く、今ま一度問はん、人性の諸分子中、靈魂以外果して他に如何なる支配者かある。殊に賢者に於て之れを謂ふ。君は果して何等か他に之れあるを知るか。

實に余は他に之れ有るを知らず。

而して靈魂は肉體の感動と一致せるか、或は相反對せるか。例せば身體熱して渴せる時は靈魂は吾等をして飲むことに逆はしめ、又た其餓ゑし時は食することに逆はしむることを爲さざるか。此くの如きは、靈魂が肉體上の事に反對する千萬中の一例たるに過ぎざるなり。

眞に然り。

然るに靈魂は調和なる以上は、其の之れを構成する所の諸絃の緊張、弛緩、振動及び其他の感動に逆つて、一音だも發すること能はずして、たゞ之れに隨從するのみ、決して導くこと能はざるにあらずや。

彼れ答へて曰く、其は然らざる可からず。

然るに靈魂は全く其反對の事を爲せるは吾等の實知せる所にして、由つて構成されたりと信せらるゝ所の諸原素を導き、終生一切の方法を

靈魂は導く者にして隨從する者に非ず

靈魂は肉體に反抗す

以つて常に其諸原素に反對し、衝突し、時には醫療及び體術の激烈なる苦痛を以つてし、時には温和の方法を用ゆることあり。或は時に種々の欲望、情欲、恐懼等を脅迫し、或は譴責し、宛も靈魂自身ならざる物に對して語るが如くするあり。乃ちホメーロスが「オヂテセウスの詩中にオヂテセウスを詠じて」

「彼れ其胸を打ちて心を責めて曰く、忍べよ我心、汝は既に之れにも増りて惡しきことを、忍びしには非ざるか」

と云へるが如し。君はホメーロスの此言を以つて、其靈魂は調和にして肉體の感動に由つて左右さるゝものなりと雖、肉體諸感動を導き、之れを左右するものに非ずとするの觀念を以つて書きしものなりと思ふか、或は靈魂は如何なる調和よりも遙かに優りて神聖なりとなすものなりとするか。

然り、ソークラテースよ、遙かに神聖なりとて書きし物なりと信ず。

然らば友よ、吾等靈魂は調和なりと云ふは正當に非ざるなり、何となれば之れ即ち神聖なるホメーロスに背き、又た吾等自身に背くものなれば

なり。

彼れ曰く、眞に然り。

ソークラテース曰く、此くて君の本國テーバイなる、調和の女神ハルモニアは、いと町重に吾等に屈服し玉へり。されどもケーベスよ、其夫の神たるカドモスに對しては吾等如何に云ひて之れを鎮め申すべき。

ケーベス曰く、余は信ず、君は神鎮づめの方法を發明すべしと。余は君が此議論をハルモニアの女神に關係せしめたる所の巧妙なることは、實に意外たりしなり。實にシンミアスが其難問を提出せるの時、余は眞に想像すらく、彼れに對する答辯は決して有り得べからずと、此く思ひたるが故に彼れの議論が君の一撃に因つて之れを支ふること能はざりしを見ては、又た大に驚かざるを得ざるなり。而して君の所謂カドモスたる所の他の議論も、亦た同一の運命に遭遇するや必せり。

ソークラテース曰く、否、善良なる友よ、吾等誇る所なからんことを要す、何となれば或は嫉妬ありて、今ま余の言はんとせる所の言語を逸失せしむるの恐れあればなり。然りと雖此事は神の手中にあり。されども吾

調和の女神ハルモニアは屈服し玉へり

ハルモニア女神の夫なるカドモスの神もやがて屈服し玉ふべし

等ホメーロス時代の風習の如く、互に相近づき、以つて君の言語の力を試みんと欲す。而して今まこゝに論せんとする諸點は——君が、靈魂の不滅不死のものなるを證明するを要求せること、及び若し此事にして證明されざるに於ては、かの死に於て確信を有せる所の哲學者が、他界に至りし時は、他の種類の生活を爲せし所の人々よりも幸福なるを得ると信ずるは、空しく且愚昧なる信仰に過ぎずとなし、而して君は、此く云はん、曰く、靈魂の機能及び神聖なることの説明、及び又た其人體に來らざるの前に存在せるものなることの證明は、必ずしも其不死を含蓄せず。假令靈魂是れまで長生し、前生に於て種々の事を知り、又た行ひたることを許容するも、此理由を以つてしては、尙ほ靈魂は不死なりと云ふべからざるなり。而して靈魂が人體に入るは、或は之れ疾病の一種にして、靈魂瓦解の始と云ふべく、而して終に生命の勞苦終りし時、所謂死なるものに於て終焉すと云ふを得べし。而して靈魂の肉體に入るは、其一度たると數度たるとは、君の云へるが如く、毫も個人の恐懼を生ずる點に差異を生ずることなし、何となれば、人若し知識なくして靈魂不死の理由を證明すること能は

ざる時は、何人とも雖苟も常識を缺損せざる以上は、死を恐れざるを得ずと、ケーベスよ、此言、或は此くの如きの説は恐くは君の思想とせる所なるべし。余がこゝに之れを再述するは、何事も遺漏なからんが爲めに、殊に爲したる所なり。故に若し君にして余の言ひし所に不足なりとせば、之れを補ひ、冗多の所ありとせば、之れを除き去りて可なり。

ケーベス曰く、余の今ま見る所を以つてすれば、目下何事も増減する所あるなく、君の云へる所は、全く余の意味せる所なり。

ソークラテース暫く言を中止し、沈思冥黙する所ありしが、遂に云うて曰く、ケーベスよ、君は生産及び腐朽の性質全體を包容せる所の驚くべき疑問を起こさんごせる者なり。此事に關し、君若し欲せば、余は自己の經驗を語らんと欲す、若し何事か余の言ふ所にして、君の難問を解釋するに於て利益ありとせば、請ふ之れを採用せよ。

ケーベス曰く、余は君の云はんとせる所を聴くは、大に望む所たるなり。ソークラテース曰く、然らば余は君に語るべし。ケーベスよ、余の尙ほ年若かゝりし時、余はかの所謂自然研究なる哲學を知らんことの熱心な

自然學に關する
思想はソークラ
テースをして最
も普通の本を忘
れしめたり

る願望を有し、萬物の原因を知り、何故に物は存在し、或は創造され又た破壊さるゝやを知るは、高尚なる學問なりと思ひたり。又た余は常に此くの如き疑問を思考することを以つて自ら心を悩ませたり。乃ち其疑問たるや―諸動物の成長なるものは、或人の言へる如く、果して寒暑の原理の作用に由つて生ずる所の或る頽敗の結果なるか。かの血液なるものは、吾等の思想を作るものなるか、或は之れ空氣なるか、或は火なるか。或は全く是等のものに非ずして―たとへば腦髓のみは、視ること、聽くこと、臭ふこと等の知覺の本源する力にして、又た記憶も意見も此より生じ、學術なるものは、記憶及び意見等が確固たることを得るに至りて、始めてこゝに基づくことを得るに非ずやと云ふにありき。此に於て余は物の腐敗を試験せんとし、又た天地の事物を討究し、而して終に自ら是等の研究の全然不能なることの結論に達せり、此事に關しては、余は十分君等を満足せしむるやう證明を試むべし。余が是等の研究に感溺したるや實に甚しきものありて、余は爲めに自己及び他人にも、十分知れ居たる所の事物に對し、全く盲目となり、以前に自明の真理と思ひし所は、之れを忘却し去り

たり。例せば人間の成長するは飲食の結果にして、食物の消化に由つて、人は肉に肉を増し、骨に骨を加へ、適合性のものある時は、少量のものは多量となり、小なるものは大となる等の事等、是等は余は自明の眞理と思ひ居たり。之れ道理ある思想にはあらざるか。

ケーベス曰く、然り、余はしか思へり。

然りと雖余は尙ほ言ふべきことあり。前には余は大小の意義は十分之れを理會せりと思ひたり。故に長大なる人の短小なる人と並び立てる時は、余は、一方は他方より丈高きこと殆ど頭の長さなりと想像し、又た馬を見たる時は、其一方大にして他の一方の小なるをも之れを知れりと想ひ、尙ほ又た十は八よりも大なること二なり、二尺は一尺よりも大なり、何となれば二は一の倍なればなりと知れりと想へり。

ケーベス曰く、此くの如き事に關する君の現在の思想や如何ん。

彼れ答へて曰く、あゝ、余は是等の内の何物の原因をも知れりと云ふこと能はざるなり。何となれば余は一に一を加ふる時、加へられたる所の一は二となり、又た二個の單位の加へらるゝ時は、加法の理由に由つて二

ソークラテース
はアナキサゴラ
スの萬物皆一心
意なりとの説
に望を屬したり

となるこの理由に就き、自ら満足すること能はざるなり。今若し是等を
分離せしむる時は、各々一にして二に非ず、又は是等を合し、單に之を接
置會合せしむることは、是等が二となるの原因たりとの理由に至つては、
余は之れを了會すること能はざるなり。又た余の解せざる所は、如何な
れば一を分解するは二となるの方法なりやと云ふこととなす、何となれ
ば異りたる原因にして、同一結果を呈すべければなり。―即ら前には一
と一とを加法し接置することが二の原因たり、今や一を分離せしめ、又た
減法することが二を生ずるの原因たればなり。此くて余は一或は其他
何物なりとも、或は生じ、或は滅するの理由を知れりとのことに満足する
こと能はずして、たゞ心中新なる研究法の混亂せる觀念を有せるのみに
して、其他を許容し能はざるなり。

彼れ尙ほ謂うて曰く、余は或人のアナキサゴラスの書中、心意は萬物の
裁定者にして、又た原因なりとの語を讀むを聽き、余は大に之を欣び、以つ
て稱賛すべき思想なりとし、自ら心に謂へらく、―若し心意は裁定者なら
んには、心意は萬事最も善良に裁定すべく、各事物を其最良の場所に配置

すべしと。而して余は論じて曰く、人若し何物たりとも、其生産、破壊或は存在の原因を發見せんと欲せば、必ずや、如何なる状態の存在、行爲及び堪受は其物に最良なるかを發見せざる可からざるなり。故に人は自己及び他人に取つて最も好しとする所を思考すべきあるのみ。而して彼れ又た最も惡しきものを知るべし、何となれば學術なるものは善惡兩者を含むものなればなりと。此に於て余は喜びて思へらく、余は、願望したるが如き、存在の原因の教師をアナキサゴラスに於て得たり、而して彼れ第一、地球は平面なるか或は球形なるかを余に教ふるならん、而して若し其何れかなりとせば、彼れ必ず進みて、其然るの原因及び必然の理由を説明すべく、次に又た最も善きものゝ性質を教へ、又た何物は最も善きものなるかを示めすべし。若し彼れ地球は宇宙の中心にあるものなるを云はば、尙ほ又た進みて此位置の最も善良なるものなることを説明するなるべく、而して余は此説明に満足して他の原因の如何なるものをも要することあらざるべし。余は又た進みて日月星辰に關して問ふことあらんには、彼れ余に説明するに是等諸天體の比較速力、其回歸、及び能動所動の

種々の状態を以つてし、凡て是等の事は何故に最も善なるかを以つてすべしと信じたり。何となれば彼れが心意を以つて萬物の裁定者となすや、彼れ必ず又た萬物の現在あるがごときは、之れ最も善良なればなりと云ふの外、他に理由を與へ得べしと想像し能はざればなり。余又た思へらく、若し彼れ詳細に各事物の原因、及び一切萬物の原因を説明するならんには、彼れ尙ほ進みて、何物は各事物に最も善にして、又た何物は一切に向つて善なりやを説明するならんこと。余は實に多額の金錢を以つて、是等の希望を、賣ることを爲さず、余は其書物を得て熱心以つて之れを讀破し、成らん限り速かに、最も善良なるもの、及び最も惡しきものを知らんことを力めたり。

此くて心中に形成したる所の希望は、悲しむべくも全く失望に終りたり。余は進みて研究したるに、此哲學者は、凡て心意或は命令の他の原理を放棄し去りて顧るなく、たゞ空氣、エーテル、水或は其他の法外のものを假り來りて以つて説明に資せんとせり。余は比喻を以つて彼れを謂はば、彼れや、全般に心意を以つてソークラテースの行爲の原因なりと主張

するに始めたる人なりと雖、詳細に余の種々の行爲を説明せんとするに當つてや、余の此に坐するは余の身體は骨格及び筋肉より成り、而して骨格は堅硬なるものにして、是等を分つ所の關節を有し、又た筋は彈力を有して骨格を包覆し、又た其上面には之れを覆ふ所の肉及び皮膚を有せり。而して骨格は筋の收縮及び弛緩に由つて關節に支持せられ、余が四肢を曲折するを得るは曲りたる姿勢に在るを以つてなり——とは彼れの言はんとする所なり。又た余が此に君等と談話し得ることに付いても、彼れ同様なる説明を與へ、其理由を以つて音響、空氣及び聽覺に歸し、其真正の原因を明示することを忘れて、同様なる他の千萬の原因を當てはめん。其の真正の原因とは、アテーナイ人等は余を以つて刑すべしと考へたるが故に、余は此に留まり、余の宣告に従ふを以つて一層善にして一層正常なりと考へたる所のものなり。何となれば若し是等の筋肉及び骨格等にして、單に是等肉體に最も宜しかるべしと考へたる思想に従つて動かさるゝものにして、余は懶惰を働かず、決して脱走を企つる如き事を爲さず、國家が加ふる所の如何なる罰をも之れを堪受する所の、一層善良なる、

一層高尚なる事を探ふことを爲さざりしならんには、是等の筋肉、是等の骨格等は、久しき前に已にメガラ或はポイオーチアに到りしなるべしと考へざるを得ざるなり、之れ犬に誓つて云はん、必ず然りしなるべしと。此際必ずや凡て是等の事に於て原因及び條件に關し、不思議なる混雜あらん。而して人或は云はん、骨格、筋肉及び身體の其他の部分なき時は、余は決して余の目的を遂行すること能はざるべしと。然りと雖是等有るが爲めに、余は其の爲すが如く爲すを得るものにして、之れ心意の作用する所の方便なり、決して最良なるものを選択して行爲せしに非すと云ふは、甚だ不注意にして、其正鵠を誤りし言語と謂ふべし。余は實に彼等が原因と條件とを區別すること能はざるに驚かざるを得ず。而して多くの人は闇黒中に盲摸して、常に誤り、常に誤りたる名稱を付して原因なりとせり。此くて或者は、渦旋流動體なるものありて、以つて萬物を回轉せしめ、地球を天に固定せしむとなし、或者は又た水槽の如く、空氣を以つて地球を支持するものとなし、決して何等の力なるものありて、是等萬物の然るが如く之れを整理し、最も良く之れを整理するものなりとの事を、心

に思ふことなく、是等萬物中には一種秀絶せる力あるを發見せずして、彼等は寧ろ、善よりも一層強力に、一層永久に、又た一層多くを包括する所の世界の他のアトラス^{*}を發見せん事を望み―而して義務として又た能く萬物を包括する所の善の力なるものに就いては、彼等何事も考ふる所あらざるなり。然りと雖之れ余の求むる所にして、何人たりとも教ふる者あらんには、余は切に之れを學ばんことを熱望する者なり。されども余は自ら此最善なるものを發見する事能はず、又た何人にも學ぶこと能はざりき。故に若し君にして望む所あらんには、此原因を討究する第二の最も善き方法なりと余の發見したる所を、君に示さんか。

彼れ答へて曰く、余は謹しみて其事を聽かん。

ソークラテース進み論じて曰く―此くて余は眞の實在の考究に於いて失敗したるが爲めに、余は靈魂の眼を毀損せざらんやう注意せざる可らずと考へたり。之れ人、日蝕の時之れを氷鏡に映し、或は之れに似たる中間物を使用することなく、直に太陽を見つむる時は肉體の眼を傷害するが如きを以つてなり。余の場合に於ても亦此くの如く、若し余にして

眼を以つて萬物を見、又た感覺に依つて之れを了會せんことを試むる時は、或は全く余の精神を盲目し了らんことを恐る。此に於て謂へらく、余は寧ろ心意界に歸依し、以つて此に存在の眞理を求むるの優れるに如かずと。余は謂はん、此比喻は完全なるものに非ずと——何となれば思想の中間物を介して存在を考究するは、かの行動及び作用に於ける存在を思考する所の人に比較せば幾分か漠然たる鏡影を認むるに過ぎずとの説を、余は未だ容易に許容せざるものなればなり。然りと雖左の如きは余の適用したる方法たるなり、乃ち——余は第一余の認めて最も鞏固なりとせし所の或原理を取り定め、而して何物たりとも此原理に合すと思はれたる所のものは、或は原因に關し、或は其他の諸物に關し、余は之れを眞理なりと斷定し、之れに一致せざる所のものは、余は之れを不眞理なりと斷定せり。然りと雖余の意味せる所を今一層明瞭に説明すべし、何となれば君等は未だ余の云ふ所を了會せざる可ければなり。

ケーベス答へて曰く、然り、實に未だ十分に了會せず。

彼れ曰く、余の諸君に語らんとせる事は、毫も新奇なるに非ずして、たゞ

観念若し獨立して存在すとせば、靈魂は不死なり

余の前論及び其他の場合に於て、常に、又た何處にても再三反復したる所のものに過ぎざるなり。今ま余は、余の思想を充てし所の、其原因なるものゝ性質を説明せんと欲す。余は人々の口にせる所の、吾等の聽き慣れし所の言に溯りて論せざる可からざるなり、而して先づ絶対美、絶対善、絶対大及び其他此くの如きものありとのことを前定して論せんとす、可ならんか。然らば余は君等に原因の性質を説明し、又た靈魂の不死を證明するを得んとの希望存することなり。

ケ―ベス曰く、可なり、直に其證明に進め。

彼れ曰く、然らば余の知らんとする所は、君は此後段の事に於て余に同意するや否やにあり。何となれば若し絶対美の他に、何物か美なるものありとせば、其美は之れ絶対美の一部を分有せるに由るものに外ならずと考へざるを得ざればなり——其他の諸物皆な然り。君は此の原因の觀念に同意なりや如何ん。

彼れ曰く、余は同意なり。

彼れ進みて曰く、余は今ま言ひし所の其等の賢明なる他の諸原因は、何

物の美なるは
「美」なる觀念を
得有せるに由る

物をも之れを知らず、又た何物をも了會する所あるなし。若し人ありて、色彩、形狀或は其他此くの如きは美の原因なりと云ふことあらんには、余は全然之れを顧みざるなり、何となれば是等はたゞに余を混亂せしむるのみなればなり。而して簡明に、單獨に、恐くは又た愚直に心中に断定すらく、何物も物を美となすに非ずして、物の美たるや、其如何なる方法如何なる状態を以つて得たるやは之れを問はず、たゞ「美」の存在及び得有に由つて始めて美たるなり。而して其美の存在及び得有の方法状態等に至つては余は未だ之れを確知せずと雖、余は、美に由つて一切の美なるものは美となりしものなることは、固く執つて争ふものなり。之れ余自身及び他人に對して爲す所の最も安全なる答言なるが如し。而して余は此主義は決して轉覆されざるものなることを信じて固く此主義に信依し、若し余自身及び其他何人たりとも問ふことあらんには、余は安んじて此く答へん、曰く、美に由つて美なるものは美となれるなりと。君は余の説に同意せざるや如何ん。

余は同意なり。

此くて吾等相闘
の矛盾を避くる
ことを得

又た「大」に出つてのみ、大なるものは大となり、より大なるものは、より大となり、「小」に出つて小なるもの小となるに非ずや。

眞に然り。

然らば、若し人ありて君に謂ふに、甲は乙より高きと頭の長さにして乙は甲より低きこと又た然りと云はゞ、君は此言を許容することを拒絶し、固く執つて此く論すべし、曰く、汝の意味する所の、より大なるものは「大」の存在及び其理由に出つて始めてより大たり、小なるものは、たゞ「小」の存在及び其理由に出つて小たるのみと。此くて、より大なるもの及びより小なるものは、兩者に通じて同一なる所の頭の尺度に出つて、より大、より小と云ふの困難を避くることを得べく、又た、より大なる人は、小なる頭の理由を以つて、より大なりと云ふが如き奇怪なる不合理を避くることを得べし。君は此くの如き不合理の論を爲すことを憚らざるか。

ケーベス笑ひつゝ答へて曰く、余は之れを憚る。

君又た、十は二の理由を以つて八より優れりとすることなく、數に由り、又た數の理由に出つて然るなりと云ふべし。君又た二尺の一尺に優れ、

るは其半の理由に由るものに非ずして、大きに由るものなりと云ふべきに非ざるか——何となれば凡て是等の場合に於ては同様なる誤謬に陥り易きものなればなり。

彼れ曰く、眞に然り。

君又た、一と一とを加ふること及び一を分割することは二の原因たることを斷言するには注意するには非ざるか。君は高聲以つて確言して言へ——何物と雖、其自己の固有の本體を分有するに非ずんば、決して存在するものに非ず、従つて君の知れる範圍に於ては、二の唯一の原因は『二たること』なるものを分有することにして——之れ二の二たる所以なり、又た『一たること』なるものを分有することは、一を爲す所の原因たるなりと。君は此く云ふべし、曰く、此の加法及び除法の難問は暫く之れを措かん——余よりも賢明なる頭腦の人之れに答ふべし、經驗なく、又た格言の云へるが如き、容易に自己の陰影に驚く如きの余は、此原理の確實なる基礎を廢棄し去るの讓歩をなすこと能はざるなりと。而して若し何人か此點に於て君を攻撃することあらんには、其論の結局は互に一致するや否やを明

かにするまでは、君は彼れを意とすることなく、又た、答辯すること勿れ。人若し此原理に就きて尙ほ進みて其説明を求むる時は、君は進みて一層高く、尙ほ高き原理を取り、一層高き原理の最上なるものに於て休息するの場所を發見することを爲せ。然りと雖、爭論家の如く、君の議論中、原理と結局とを混同する勿らんことを要す——少なくとも、君若し眞實在を發見せんと欲せば、然り。而して此混同たるや彼等に在つては何事にも非ずして、彼等は毫も眞率に此事を思考して注意するとなく、如何に彼等の觀念は混亂紛雜せりとも、自ら悦ぶことを爲し得るものたるなり。然りと雖、君若し哲學者ならんには、必ず余の言ひし如くなすべし。シンミアス及びケーベス共に言を揃へて言うて曰く、君の言へる所眞に然り。

エへ 然りフアイドーンよ、余は、彼等が同意したるに就いては別に驚く所なし。何人と雖、聊かなりとも知力あらんには、ソークラテースの思想の驚くべき明晰なることを承認すべきなり。

フアイ エヘクラテースよ、眞に然り。此くの如きは實に其席に列なり

居りし一同の其時の感なりき。

エへ 然り、其席に列ならずして、君の其時の状況を語れる談話を聴ける吾等の如きも、亦同様の感を爲せり。然りと雖其れより後は如何ん。

フアイ 凡て此事許容されし後、彼等諸觀念存在し、其他の諸物は觀念を分有し、其名稱を觀念より得たりとのことに同意せり。若し余の記憶にして誤らずとせば、ソークラテースは左の如く言へり。

之れ君の言語の方法なり。而して君若しシンミアスはソークラテースより大にして、フアイドーンよりは小なりと言ふ時は、君はシンミアスに附與するに大なることと、小なることを以つてするにあらずや。

然り、余はしか爲すなり。

然りと雖、言語中に含蓄せりと思はるゝ如く、シンミアスは其實ソークラテースより大なるに非ざるなり。何となれば彼れはシンミアスにして、たゞ其有せる所の「大」なるものゝ理由に由つて、ソークラテースよりも大たるのみ。又た之れシンミアスは其シンミアスたりとの理由を以つて、ソークラテースより大たらざるは、ソークラテースはソークラテ

尙ほ、同一人にして同時に大たり小たるの矛盾はこれ有り、他に對して「大なること」「小なること」なるものを出るに由るなり

スたるを以つて小なるに非ず、たゞシンミアスの大なることに比較して、其小なることなるものを有せるに外ならざればなり。

真に然り。

若しフアイドロンにして彼れよりも大なりとせば、これフアイドロンはフアイドロンたるが故に非ずして、たゞフアイドロンは、比較上小なる所のシンミアスに對して、大なることなるものを有せるが故に非ずや。

真に然り。

故にシンミアスは大なりと稱すべきと同時に、又た小なりと稱すべきなり。何となれば彼れは兩者の中間の人にして、其大なることを以つて一方の小に優り、又た其自己の小なることに優る所の他の大なることを承認せるを以つてなりと。彼れ又た笑ひつゝ附加して謂うて曰く、余は書物の如く語り居たり、されども余の言へる所は真なりと信ず。

シンミアス承認せり。

余は此く語り、之れ君が余に同意するを欲するが故なり。而してかの絶對大なるものは大たると同時に小たるものに非ずして、吾等及び具

「大」の觀念は決して「小」となることなく、「小」の觀念は決して「大」となることなし。

體物に存する所の大は、決して小或は他に劣ると云ふことを許さずして、大小兩物の遭遇する時には、より大なるものは、其反對たる所の、より小なるものに對して或は遁れ或は退隱し、或は小の近づくの時、既に存在を停止せしものたるなり。余の如き場合に於て云ふも、シンミアスに比較して小たることを受け、又た之れを許容したる以上は、余は現に余の、小なるが如く、小き人として存するなり。而して大の觀念は決して自ら屈して小となることなく、之れと同じく吾等に存せる小の觀念は、又た決して大たり、大となること能はざるなり。其他如何なる反對のものど雖、常に同一に存し、其反對のものとなることなく、たゞ其變化に際して退隱するか、或は滅亡するなり。

ケーベス答へて曰く、之れ全然余の思想とする所なり。

此に人々の内一人、余は明かに其誰なりしやを記憶せずと雖、云うて曰く、あゝ之れ吾等が前に許容したる所と正反對には非ざるか。大より小來り、小より大來り、反對はたゞ反對より來るとは前に論じたる所なり、然るに今や此原理は全然拒否されたるものゝ如し。

具體事物の反對
と實體即ち觀念
の反對とは之れ
を區別するを要
す

ソークラテース此言を爲せし人の方に頭を傾け之れを聽きて謂うて曰く、余は君が此事を余に注意したるの勇氣を受す。然りと雖君は兩者の場合の異なることを觀ざるなり。何となれば前には吾等具體の反對事物に就いて謂ひ居りしと雖、今は實體上の反對物を謂へるものにして、已に斷定したる如く、吾等に於ても亦自然に於ても、其物自身と背反すると能はざる所の物なり。友よ、前には吾等諸物に就いて語り居りしものにして、其諸物たるや、反對なるもの其中に存在し、其存在せる所の反對物に従つて其名稱を得たるところのものなりしが、今ま吾等の言ふ所は、諸物中に存在する所の反對物其ものにして、諸物に其名稱を與ふる所のものたるなり。而して是等實體上の反對物なるものは、決して互に相生じ相變化するものに非ざることば、吾等の主張するが如しと。此く云ひつゝ同時にケーベスの方に向ひて曰く、ケーベスよ、君は反對意見の爲めに、吾等の友人に全く攪亂されじや如何ん。

ケーベス答へて曰く、否、余はしか感ぜざるなり。然りと雖余は數々反對説に由つて思想を亂さるゝことを否むこと能はざるなり。

ソークラテース曰く、然らば吾等は結局、反對は、如何なる場合と雖決して自己に反對するものに非ずとの説に一致せり。

彼れ答へて曰く、吾等全く其説に同意す。

尙ほ一問他の觀察點より、君の一考を煩はし、君は果して余の意見と一致せりや否やを見んと欲す、乃ち——稱して温熱と謂ひ、又た寒冷と謂ふものありとするか。

然り、之れ有りとなす。

然りと雖是等は火及び雪と同じきか。

決して同一に非ず。

温熱と火とは別物なり、寒冷は雪と同一に非ず。

然り。

然りと雖雪若し之れに熱を加ふる時は、熱も雪も共に熱及び雪として存留することなく、熱の進むに従つて雪は退隱するか或は消滅すべきなり。之れ前に云ひし所なり。

彼れ答へて曰く、眞に然り。

雪に熱を加ふれば水に變ずると「寒」は「熱」に變ぜざるなり

而して火も亦寒の進むに於ては、或は退隱し或は消滅すべし。又た火にして寒の勢力に制せらるゝ時は、火も寒も前の如くに存することなかるべきなり。

彼れ曰く、然り。

而して或場合に在つては、觀念の名稱は、永久の結合に於て觀念に附着するのみに止まらず、其他、觀念に非ずして、觀念の形に於てのみ存する所の物も、亦其如きことを得るなり。余は例を上げて之れを明瞭にせん——奇數は常に奇の名稱を以つて稱呼さるゝに非ずや。

然り。

然りと雖たゞ奇數のみ奇と稱呼さるゝものなるか。其他、其奇たることとして同一に非ずと雖、其奇たることなきに非ざるより、自己の本名を有し、而も尙ほ奇と稱さるゝ所のものは有らざるか——三の如き數は、奇の階級中に在る所のものにはあらざるか——之れ余の間はんとする所なり。其他尙ほ數多の例あり、例へば——三は其本名に由つて稱呼さるゝと同時に、又た奇數と稱せらる、然るに三と奇とは同一に非るにあらずや。

單に實體上の反對のみならず、其實體を包含せる所の具體物をも互に排斥す

之れたゞ三のみに非ずして、其他五及び其他の隔次の數も亦然り。是等皆な其の奇たることは同一に非ずと雖尙ほ奇數たるなり。之れと同じく二、四、及び其他隔次の數は、偶たること同一に非ずと雖偶數たるなり。君は同意なりや如何ん。

然り勿論なり。

然らば余が今ま論せんとする點を注意せよ——乃ち、其互に相排斥するや、たゞに之れ本質上の反對物が拒反するのみに止まらずして、かの諸物其物に於ては相反せるに非ずと雖、又た反對なるものを含蓋せる所の具體事物をも、共に排斥するものにして、是等は又た其内に含蓋せる所の觀念に反對せる所の觀念を排斥し、若し其觀念近づく時は、是等は或は消滅し、或は退敗すと謂ふべきなり。例せば若し三なる數にして偶數に變化されんとするに當り、三尙ほ依然三として存する以上は、或は破滅、或は其他何事をも甘受するに非ずや。

ケーベス曰く、眞に然り。

彼れ曰く、然るに二と三とは相反せるに非ざるにあらずや。

即ち反對物は反
對物に自家の印
象を與へんとす
るなり

然り、相反せるに非ず。

然らば反對觀念は、互に其反對觀念の進行に反抗するのみに止らずして、又た反對物の近づくことにも反抗する所の、他の性質を有せるなり。
彼れ曰く、眞に然り。

彼れ曰く、然らば其性質の如何なるものなるやは、能ふべくんば吾等之れを決定するを力めんか。

必ず之れを爲さんことを欲す。

ケーベスよ、是等の性質とは、自己の有せる所のものを他物に強ふる所のものにして、他物をして單に自己の形狀を取らしめんとするに止まらず、尙ほ且つ或反對の形狀をも取らむめんとするに非ずや。

君の意味せる所や如何ん。

余の意味する所は、余の今ま云ひし如く、又た君の知れる如く、かの三なる數の有せる所のものは、常に三の數のみに非ずして、又た奇數ならざる可からざるにあらずや。

眞に然り。

相反せるに非ず
と雖、而も反對を
許容せざる所の
性質、例へば三
と偶數との如し

此の三なる數が有せる所の奇數の觀念あるが爲めに、反對なる觀念は決して侵入すること能はざるに非ずや。

然り、侵入すること能はず。

而して此印象は奇數原理なるものと與ふる所に非ずや。

然り。

而して奇と偶とは反對にあらずや。

然り。

然らば偶數の觀念は決して三たることあらざるか。

然り、之れ有らざるなり。

然らば三は偶數に關するなきか。

關することなし。

然らば三なる數は偶數に非ざるか。

偶數に非ず。

茲に前論に歸へり、かの互に相反せるに非ずと雖、而も反對を許容せざる所の性質なる物の區別を論せん——例せば余が今ま言ひし如く、三と偶

〔此點文章甚だ
複雑せり計程を
參考すべし〕

數たることゝは反對に非すと雖、敢て偶數たることを許るさぶるのみに
非ず、又た一方に反對物を現せしむるが如き、又た二は奇數たることを許
容せず、火は冷たることを許容せざるが如き——是等の數例(尙ほ他にも此
くの如き例甚だ多し)に由り、君は左の結論に達するを得べし、曰く、反對は
其反對を容受せざるのみに止まらずして、又た反對を生ずる所のものは、
其生ずる所のものに於て反對を生ずるを以つて、此く生ずる所のものに
反對なるものを容受せざるなり。而してことゝに余は前論を再述せん——
何となれば再述したればとて何の害惡もあることなかるべければなり。
五なる數は、其二倍たる十が偶數なるが如くに、偶數の性質を容受せずし
て奇數の性質を容受すべし。二倍なるものは他の反對を有し、嚴正に奇
數たることに反せるに非すと雖、全く奇數たることを拒反し、又た ∞ の
如き比例、又た半數ある所のものゝ除法、又た三分一の數ある所のものに
關することなく、又た全體なる觀念とは相反せるに非すと雖、全體の觀念
を許容せざる所のものなり。君は之れに同意したりや如何ん。

彼れ曰く、然り、余は全く君に同意し、又た君の言に隨從せん。

單に言語上の眞理は一層高きものを以つて之れに代ふ

彼れ曰く、然らば余は再び論じ始めんに、君は余の質問に對ふるに當り、余の使用したる同様なる言語に由つて答へずして、他の言語を以つて答へよ。又た前に言ひたる所の陳腐なる安全なる答を爲すことなく、同じ他の安全なる答を以つてし、君は其の答言に由り、今まこゝに言ひし所より、眞理の結論を得る所のものを以つてすべし。余の意味する所を説明せんに、人若し君に問ふに、「かの身體をして温熱ならしむる所のものは何ぞや」との言を以つてせば、君は熱なりと答ふること(之れ余の安全にして愚昧なる答言と稱する所のものなり)なくして、火なりと答ふるは一層優りたる答言にして、之れ余の求むる所の種類のものなり。又た人「身體の疾病なるは、何故なりや」と問はんには、君は答ふるに疾病なるが故なりとの言を爲すなくして、發熱の故なりと云ふべきなり。又た奇數たることが奇數の原因なりと云ふことなく、一位なるものが奇數の原因なりと云へ。其他一般の諸物皆な然り。君は十分了會したるならん。他に例を擧げて説明するの要なかるべし。

彼れ曰く、余は十分明に了會せり。

身體を生かすも
の生命に非ず
靈魂なり。靈魂
は生命を與ふる
力を有し死を許
容せず、故に不
死なり

然らば身體を活かす所の固有性なるものは何ぞや、余に之れを告げよ。
彼れ答へて曰く、靈魂なり。

之れ如何なる場合に於ても然るか。

彼れ曰く、勿論然り。

然らば靈魂は何物たりとも其住持する所の物に生命を與ふるものな
るか。

確かに然り。

生命に反對のものありや。

彼れ曰く、然り之れ有り。

其物何ぞや。

死なり。

然らば前に吾等の承認したるが如く、靈魂は其持ち來す所のものゝ反
對を容受すること無かるべし。

ケーベス答へて曰く、然り容受すること能はず。

彼れ曰く、かの偶數たることに反抗する所のものは吾等之れを何とか

稱したる。

奇數なり。

かの正義及び音樂に合せるものに反對する所の原理は何ぞや。

彼れ曰く、非音樂のもの及び不正義なり。

かの死を容受せざる所の原理は吾等之れを何とか稱す。

彼れ曰く、不死なり。

而して靈魂は死を容受するものなるか。

否。

然らば靈魂は不死なるか。

彼れ曰く、然り。

此事は已に證明されたりと謂ふべきか。

彼れ答へて曰く、然り、ソークラテースよ、十分證明されたりと謂ふべし。

若し奇數たることにして不滅のものなりと假定せば、三は又た不滅のものにあらずや。

勿論なり。

若し寒冷なる所のもの不滅なりと假定せば、温熱の原理來つて雪を攻撃するに當り、雪は自己を全うし、融解せずして去り行くべし——何となれば寒冷は消滅すること能はず、又た依然として存して、同時に温熱を許容すること能はざればなり。

彼れ曰く、眞に然り。

又た若し温熱の原理は不滅のものならんには、火は寒冷に攻撃されて消滅することなく、影響を被ることなく去り行くに非ずや。

彼れ曰く、眞に然り。

不死に就いても亦同じ。若し不死なるもの不滅ならんには、靈魂は死に攻撃されし時消滅すると能はざるなり。何となれば前に論じたる所に由つて、靈魂は死或は死すべきことを許容せざるを明かにしたればなり。之れ三或は奇數は偶數を許容せず、火或は火熱は寒を許容せざるが如きなり。然りと雖人或は云はん、假令奇數は、偶數の近づくとの爲めに偶數とならずとするも、奇數消滅して、偶數取つて奇數に代るとなきは何故ぞと。今や此反對説を爲す所の人に對しては、吾等は奇數原理の不滅

不死は不滅なり
故に靈魂は不滅
なり

なることを答へ能はざるなり、何となれば此事未だ彼れの承認せざる所なればなり。されども若し此事にして承認されしならんには、其偶數の觀念の近づきし爲めに、奇數の觀念及び三なる數の去り行くことを論ずるは毫も困難に非ずして、同様なる論理を以つて火及び温熱を論ずることを得べし。

眞に然り。

而して不死に就いても同様なる論を爲すことを得べく——若し不死なるものは不滅なりとせば、靈魂は不滅にして且つ不死なるべし。若し夫れ然らずとせば其不滅なることの或他の證明を爲さざる可からず。

彼れ曰く、他の證明は之れを要せざるなり。何となれば、若し永遠のものたることなる不死にして消滅すべきものなりとせば、一物として不死のものあらざる可ければなり。

ソークラテース答へて曰く、然り、而して神及び生命の固有の形狀及び不死なる者全般の不滅なることは、萬人の一致せる所なり。

彼れ曰く、然り眞に萬人一致せるなり。而して尙ほ且つ余にして誤ら

すとせば、諸神も亦此事に一致せることは人間の如きなりと謂ふべし。
 然らば、若し不死は消滅すべきものに非すとせば、靈魂若し不死なりと
 せば、又た不滅ならざる可からず。

最も確かに然り。

然らば死、人を襲ふ時、其死すべき部分は死すべしと思はれ得べしと雖、
 其不死の部分は、死近づくと雖安全に保存され、毫も影響を被ることなく
 して去り行くには非ざるか。

真に然り。

然らばケーベスよ、靈魂は不死不滅にして、吾等の靈魂は真に他界に存
 在すべきや疑ふべきなし。

ケーベス曰く、ソークラテースよ、余は確信を得たり、又た反対すべき所
 あるなし。然りと雖我友シンミアス及び其他何人と雖、若し尙ほ反対す
 べき事ありとせば、黙することなく、發言せんことを勸む、何となれば若し
 何事なりと、尙ほ言はんとする所、聽かんとする所あらんには、此好機を逸
 せば、余は再び其時あるを知らざればなり。

死せば靈魂他界
 に至る

シンミアス答へて曰く、然りと雖、余は他に言ふべきことなし。又た是れまで論議したる所に對して疑問を介むの道理あるを知らざるなり。然りと雖、余は此問題の大なることと、人間の力の弱きものなることとを考ふる時は、尙ほ余の心中には、不確實なりと感じ、又た不確實なりと感ぜざるを得ざるなり。

ソークラテース答へて曰く、然り、シンミアスよ、其言甚だ善し。且つ其第一原理は、たとひ確實なるが如く思はるゝと雖、尙ほ十分注意して思考せざる可からざるなり。而して満足に確定さるゝ時は、思ふに君は人間の道理に對して、一種の躊躇したる信用を以つて、此議論に従ふべし。而して若し此事明瞭なりとせば、尙進みて討究するの必要なかるべきなり。眞に然り。

彼れ曰く、然りと雖、のゝ我友よ、若し靈魂は眞に不死のものなりとせば、靈魂に就いて吾等果して如何なる注意を爲すべきぞ。たゞ之れ所謂吾等の生ける間の事のみならず、又た永遠に就いて謂ふなり。而して此觀察點よりする時は、靈魂に對して注意することを怠る事は、實に恐るべき

靈魂眞に不死なりとせば、吾等如何に靈魂に注意すべきぞ

生前其人に屬せし情愛其人を審問の場所に導く

ものなるが如し。若し死にして一切萬事の終焉なりとせば、悪人は其死に由つて大なる利益を得べし、何となれば彼等管に其肉體を消失するのみに止まらずして、又た其靈魂と共に其罪惡をも消失すべきを以つてなり。然りと雖靈魂の不死なるや顯著なることなるが故に、吾等たゞ至高なる徳義と知慧とに達するの外、他に罪惡を救はるべき方法あらざるなり。實に靈魂が下なる他界に進行するに當つてや、たゞ其訓練と教育との外何物も携ふる所あらざればなり。而して是等は死者の他界に旅行するの初めに於て、死者に取つて大なる利益たるか、或は大なる害たるものなりとは、人々の謂ふ所なりとす。

人々の云ふ所に由れば、人死せば、生前其人に屬し居たる精靈は、其人を死者の集合せる或場所に導くものにして、判決の宣告されし後、現世より他界に死人を導くことを任せられたる所の嚮導者に従つて、其所より、下なる他界に到る。而して死者等は其の處にて受くべき所の應報を受けて、一定の時日をこくに經過する時は、時代幾變遷の後、他の嚮導者再び死者を此世に送り返へすなり。而して此の他界に至るの道は、簡單なる一直

純潔なる靈魂と
不純の靈魂との
行くべき所の差
異

線に非ざること、アイスヒュロスの『テーレフォス』に云へるが如し——若し其れ一直線ならんには、何人も途に迷ふ者あらざるべく、爲めに嚮導者を要せざる可きなり。然るに其の實多くの岐路あり、又た曲折あるなり。之れ黄泉の諸神を祭る所の儀式及び犠牲を供するとは、地上三岐路の會合せる所に於て之れを施行するに由つて推知するを得るなり。賢明にして秩序ある靈魂は直ちに其途に従ひ、能く四周の情況を知ると雖、かの肉體に執着し、又た余の前に言ひしが如く、久しく無生の形骸及び可視の世界に羽ばたきし居たる者の靈魂は、烈しき抵抗と多くの苦痛の後、暴力を以つて、又た激烈に、其附隨せる所の精靈の爲めに彼方に運び去らるゝなり。而して靈魂、其他の多數の靈魂の集合する所に到りし時、若し純潔ならざるか、或は不法の殺人罪を犯し、或は是等と兄弟たる所の諸罪惡を犯し、或は罪惡上の兄弟の事業を爲すが如き、純潔ならざる行爲をなせし者——此者の靈魂は、一切の者盡く之れを擯斥し、顔を背けて顧るなく、何者も其友たるなく、何者も嚮導者たるなく、其靈魂は獨り一定の時間の經過するまでは、罪惡の極端に彷徨し、其の時期來るときは、此靈魂は其適當なる

所に運び去られ、如何に抵抗すと雖、又た如何ともするなし。又たかの純潔正義にして、終生諸神と友たり、又た諸神の指導の下に在りし所の靈魂も、其適當なる居所を得べし。

實に地球には種々驚くべき場所ありて、其性質及び其大さ、共に地理學者等の思想する如きものに非ざることは、或無名の信すべき人の言へるが如きなり。

シンミアス曰く、ソークラテースよ、君の意味せる所や如何ん。余は地球に關する多くの記録せるものに關して聞きたることあり。然りと雖、其内是等の事に關して君の信を置く所のものゝ如何なるものなるやを知らず、又た之れを知らんことを欲する者なり。

ソークラテース答へて曰く、シンミアスよ、若し余にしてグラウコスの術を有せんには、余は之れを君に語るべし。されどもグラウコスの術も余の自ら證明するゝ能はざる所の余の話しを、證明し得るやは余之れを知らず。又た若し余は之れを證明し得べしとするも、恐くは議論終了に至るの前、余の生命は終らざるを得ざるべし。然りと雖地球の形狀及び

地球の種々の驚くべき場所

地球は球形のものにして、四周の平均に由つて其位置に存す

地球は甚だ大にして、人以其表面より或距離に於て地の一小部分に住せるに過ぎず

種々の場所に関する余の思想に就いて、大要述ぶる所あるべし。

シンミアス曰く、然りと雖、こは十分なるべし。

彼れ曰く、余の確信する所に由れば、地球は球形のものにして天の中央に位せり。故に之れを支持せんが爲めに、空氣或は其他同様の力を要することなく、四周の天の均衡と、又た地球自身の平均とに由つて其の所に保持せられ、以つて或は墜落し、或は傾斜することなし。何となればかの自ら平均の状態にありて、而も一樣に分布せる所のものゝ中央に位する物は、如何なる方向にも、如何なる程度にも傾斜するものに非ずして、常に同一状態に存し、決して差違を生ずることなし。之れ余の第一の思想たるなり。

シンミアス曰く、此は必ず正確なるものなるべし。

余は又た、地球の甚だ大なるものにして、フアシス河よりヘーラクレース柱に至る間の地に住する者は、たゞ之れ海岸の小部に住するに過ぎずして、宛も蟻蟻或は蝦蟇等の沼池の邊に住するが如きのみと信す。而して此他多くの同様なる場所に其他の住人あるなり。何となれば地球上至

眞の純潔なる地
は天に位せり

吾等の住せる所
の地は重濁なる
沈澱のみ

る所種々の形状大小の凹窪ありて、水、霧及び下底の空氣此に集合するものなればなり。然りと雖眞の地は純潔なるものにして、純潔なる天に位し——其所には又た星辰も存せり。而して此天たるや吾等普通に「エーテル」と稱する所のものにして、之れに對比する時は、吾等の此地は下なる凹窪に沈澱せしものたるなり。然るに是等の凹窪に住せる所の吾等は、地球の表面に住せりとの觀念に欺かれ居ること、宛も海底に住する動物が、自ら水の表面に住せるものなりと想像し、海を通じて太陽及び衆星を見て、海を以つて天なりと思へるが如し。而して此の動物其力弱きと其緩漫なるとに由りて水面に出で來らず、又た其の頭を擧げて自己の住せる所よりも、上なる世界の遙かに純潔にして美なるを見ることなく、又た之れを見たる所の者より聽くこともなし。吾等の場合正に此くの如し。

吾等は地球の凹窪に住せるに關せず、自ら以つて其表面に住せりと想像し、空氣を以つて天なりと稱し、此に星辰運行すと想像せり。然りと雖其實吾等の弱きと怠慢とに由り、吾等空氣の表面に達すること能はざるなり。若し何人と雖外圍の界限に達することを得るか、或は鳥の羽翼を有

魚が水の表面に頭を出して、人も吾等も大空の表面に頭を出して、世界を見ることを得べし

上なる世界は凡ての點に於て下界より美に、金色金光、紫色光あり、樹木も花も草等の地上のものよりも美にして一切

して頂上に至らんか、宛も魚が水の表面に其頭を出して此世界を見たるが如く、彼れ彼方の上なる世界を見るべし。今若し人性にして其視力に堪ゆることを得しならんには、必ずや此の上界こそは眞の天、眞の光、眞の地の場所なれと承認せん。何となれば、吾等の住する此土地、此岩石及び四周の諸地の毀損腐蝕され居ることは、海中に於ける一切の諸物は鹹水の爲めに腐蝕され、一物の高尚完全なるもの生ずるなく、只だ洞窟、砂石及び界限なき汚濁の泥濘あるが如きのみ。而して海岸の如きすら、尙ほ且此世界の美觀に比すべきに非るなり。然るに此世界を以つてかの上界に比する時は、其劣ること海が此世界に劣るよりも一層甚しとなす。シンミアスよ、余はかの天の次に下に存在せる所の、上なる地球に關して、愉快なる話しを君に語らんか、之れ亦聴くべき價值あるものとなす。

シンミアス答へて曰く、吾等愉快に君の談話を謹聽せん。

友よ、話しは次の如きなり——先づ上なる地球を天上より見んに、宛も十二片の柔皮もて蔽へる球の如くに畫線され、種々美麗なる色を以つて裝飾さるること、吾等地上の畫工等が用ゆる所の彩色の如きなり。然りと

雖此地球全體は此くの如き彩色に由つて成り、吾等の地球よりも一層光輝あり又た遙かに明晰なりとす。而して或は驚くべき光澤ある紫色あり、金光燦然たるあり、又た其の白色は白堊或は白雪よりも純白なり。此くて此地球は是等及び其他の色より成り、吾等人間の眼が未だ曾て見ざりし所の多くの色彩を有し又た美たるなり。而して此地球に存せる所の其凹窪は(此事は余前に語りたり)固有の色を有せる空氣及び水を以つて充たされ、他の種々美麗なる色彩中、光明輝くかと思はるゝの光を放てり。此くて全體より云ふ時は、統一中に變化の單一連續せる觀望を呈せり。而して此美麗なる地に生ずる所の萬物は——或は樹木或は花、或は果實——之れを吾等の地上のものに比する時は、皆な盡く遙かに美なること、其土地の美なるが如し。又た丘陵も存在し、其岩石は同じく之れを吾等の地上のものに比する時は、遙かに滑かにして、又た透明なり、而して其色の美なるは、吾地上の高價なる綠玉石、橙色瑪瑙、碧玉、其他の寶石等よりも美麗にして、吾地上の是等の寶石は、實に彼の地球の岩石の小破片に過ぎざるなり。何となれば彼の地球に在つては諸石は吾等の寶石の如く

神々は眞に實在
し、住民等は直
接に神と談話す

にして、一層美麗なればなり。其理由たるや、是等諸石は純潔なるものにして、吾地上の寶石の如く、かの凝結せる所の腐敗せる鹹鹽分子の爲めに、汚染腐蝕さるゝことなく、又土地及び諸石、及び動物植物等に不潔及び疾病を養成するが如きものあらざればなり。是等諸石は實に又上なる地球を飾る所の寶玉を爲すものにして、金光銀光及び其他の光輝燦然たり。而して是等は極めて顯著にして、其の大いさ大に、其數多く、到る所に之れ有らざるなく、以つて此の地を觀望者に樂しからしむ。又た動物及び人間ありて、或者は中地に住し、或者は空中に住すること、吾等の海中に於けるが如し、而して又た或者は大陸に近き島嶼に住し、其の四周には空氣流通す。一言以つて之れを蔽へば、彼地球の人間等の空氣を使用するは、吾等の水及び海に於けるが如く、彼等の「エーテル」に於けるは、吾等の空氣に於けるが如きなり。且つ彼地球の氣候は溫度好良にして、疾病あるなく、吾地球上の人間よりも長命なり。其視聽臭の諸感覺も亦遙かに完全にして、其比例たるや、空氣は水よりも純潔なるが如く、又は「エーテル」が空氣より純潔なるが如きなり。彼地球の人間等も、又神社及び聖地を有し、此

處に諸神は實際に鎮坐しまし、其人間等は諸神の聲を聽き、又た答を受け、十分に神々を知り、又た神々と談話を爲すなり。彼等又た太陽、月及び星を見るや、眞實然るが如く之れを見る。其他の幸福皆な之れに準ず。

是れ彼地球の全部及び其四周の事物の性質なり。而して彼地球の表面到る所の、凹窪中に種々の地ありて、其或ものは吾等の住せる所よりも深く且つ廣く、又た或ものは吾等の住せるよりも深しと雖狭く、又た或ものは淺く廣きあり。凡て是等の諸凹窪には皆な數多の穿通ありて、地球の内部に通ずる廣狹の通路ありて互に相連絡し、宛も數多の甕ありて其れより流れ出で、流れ入るが如くにして、壯大なる水の潮流、地下の不斷の巨大なる川流、冷温種々の噴泉、猛烈なる火、火の河、熔解せる泥土の河流は或は薄く或は厚く、恰もシチリアに於ける泥土の河流及び之れに繼續する所の燒石の河流の如く、是等の流出する所の地は、是等に充滿せり。又た地球の内部には振子様のもの、或は上下運動ありて、凡て是等のものを或は上ぼし或は下だすことを爲す。而して之れ次の如き原因に歸するものとなす、乃ち——此に一陥没ありて、諸凹窪中の最大なるものにして、全

地を貫きて穿通せり。此陷没は之れホメーロスの言なる

「遙か遙かの地の下に至極の深き處あり」

と云へる所のものにして、而して之れ其他の章及び他の多くの詩人等のタルタロスの地獄と稱する所なり。而して此上下の動搖は是等の河流が、此大裂口を出入するに由るものにして、是等の河流は各々皆其流るゝ所の土地の性質を有するものとなす。其是等の河流の常に流出流入するの理由たるや、此流體は其床も其底も之れを有せざるより、常に上下に動搖し、四周の風及び空氣も共に動搖す、之れ水の動搖に隨ひて地球上、上下に動搖し、又た彼方此方に動搖するなり——恰も之れ呼吸の時、空氣は常に吸入呼出の状態にあるが如し——而して水と共に動搖して流出流入する所の空氣は、こゝに恐ろしき抵抗すべからざる暴風を生ず。而して水は衝激して所謂地球の下部に退くに當つてや、是等の地を通じて流れ、宛も「ポンプ」に由つて汲み上げし水の如く、是等の地を充たし、又た是等の地を後にして此方に激流し來るや、再び此地上の凹窪を充たし、其充滿するや、地下の水道を通じて流れ、種々の方向に其途を求め、或は海となり、湖水

となり、河となり、泉となる。此くて是等の水は再び地中に沈み入り、或ものは迂回曲折、數多の地を過ぎて行くあり、或ものは少數の地を経るのみにして遠くに行かざるもあり、而して再びタルタロスに流入す。其流入するや、或ものは始めに上り來りし所より大に下なる所に流歸するあり、或ものは左程下ならずして、たゞ其始めに流出したる時よりも稍下なる所に流歸するあり、或ものは再び流入したると反對の側面に突進して流出するあり、又た或ものは同一方向に到るもあり、而して又た或ものは蛇の捲くが如く一重或は幾重にも地球を環り環りて成らん限り下方に下るもあり、然りと雖必ずや其大裂口中に歸入するなり。其諸川の何れの方面より流入するものも、必ず只だ其中央にのみ落つるものにして、決して中央を去ることあらざるなり。何となれば是等諸川の對へる所は、斷崖絶壁なればなり。

其河甚だ多く、大にして又た種々あり。其内著名なる四大河ありて、其最大にして最も外部に在るものをオーケアノスと稱し、環狀に地球を廻り流る。其の反對の方向に流るゝ所のアヘローン河あり、沙漠地を経て

地下の四大河、

(一)オーケアノス

(二)アヘローン

(三)ピュリフレン

ゲートリン

(四)スチユゴオ

ス(或はコ

トキユトス)

地下に浸入してアヘルシア湖に入る。而して此湖水の沿岸は死者の多數の靈魂の至る所にして、或者は長く、或者は短かく、此に一定の時の至るを待ち、彼等動物に生れ代りて再び地上に送り返へさるゝなり。第三の河は右兩河の中間を流れ、其流出口に近き所の廣大なる火地に注ぎて、地中海よりも大なる湖水を爲し、水及び泥土を沸湯し、混濁して泥水となりて地球を環流し、他の諸地を經過して遂にアヘルシア湖の端に来る。然りと雖、其の濁水、湖水と混合するとなく、尙ほ數回地球を循環したる後、一層深き所にタルロスに落下するなり。之れビュリフレゲートンと稱する河にして、地上諸所に火を噴出せしむる所のものなり。第四流は反對の方向に流れ、先づ荒漠不毛にして、一切紺青の如き闇青色の地に入るなり。之れスチュギオスと稱する河にして、スチュギオス湖に流入す。而して其湖水に流入したる後は、水に一種不思議の力を受け、地下を經過し、反對の方向に廻り流れ、ビュリフレゲートン河の反對側にアヘルシア湖の近くに來る。されども此河水又た他と混合することなく、尙ほ環り流れてビュリフレゲートンの落下する反對側にタルタロスに流下す。此河は

死者の書

詩人等の所謂コーキユトスなるものなり。

他界の性質此くの如し。死者、各自の精靈の導く所に到達せば、彼等先づ敬神なる生活を爲せしや否やに關して宣告を受く。其善にも非ず惡にもあらざる如く生活したる如く思はるゝものはアヘローン河に到り、其所に在る所の如何なる船になりとも乗じて湖水に浮び、其の所に滞在して惡行を淨め、他人に對して行ひたる惡行の罰を受けて罪の赦免を得、其善行の價值に従つて報酬を受く。然りと雖其罪惡の大なるより、到底治療の望なき者、乃ち——多くの大なる積罪を犯し、又た不法殘忍なる殺人罪を犯し、其他又た此種の罪行ある者は、之れをタルタロス地獄に投入す。之れ彼等に相當なる運命にして、彼等再び出で來るとあらざるなり。かの大なる罪惡を犯したる者と雖、尙ほ治療の望を失はざるもの、乃ち——例せば怒に乗じて或は父或は母に對して或不法を行ひたるも、其後終生之れを悔む者の如き、或は其の他情狀を酌量すべき事情の下に在つて他人の生命を奪ひたる者の如き——是等はタルタロスに投げ込まれて、一箇年間其苦痛を受けざるを得ざらしむと雖、一年の終に及びて、波は來りて

彼等を彼方に投げ上ぐるなり——而してたゞ人を殺したる者は之れをコ
ーキユトス河に送り、父母を殺したる者は之れをビュリフレグートン河に
送り——此くて彼等は何れもアヘルシア湖に運び去らる。こゝに彼等聲
を揚げて其被害者者或は被害者を呼びて、彼等を憫れみ、彼等に親切を施
こし、此河より湖水に出づることを許るさんことを歎願懇請す。若し其
歎願にして効果あらんには、彼等湖水に出で來り、其苦痛此に止むべしと
雖、若し夫れ然らざるに於ては、彼等再びタルタロスに送り返へされ、其れ
より再び河に送られ、其被害者より恩恵を得るに至るまでは幾回も之れ
を反復せざるを得ざるなり。之れ其裁判者の下したる宣告たるなり。
然るにかの神聖なる生活を爲し、此事に於て優秀なる者は、地球の牢獄よ
り解放せられ、上なる清淨なる居所に至り、一層純潔なる地球に住せん。
又たかの哲學を以つて自ら適當に淨めたる者は、此後全く肉體を脱して、
今よりも一層美麗なる居所に住すべく、其美言ふ可からず、而して余は委
細之れに就いて語るの時を有せざるなり。

シンミアスよ、是等の事を知りし上は、如何んぞ吾等現世に在つて智慧

以上の記事は文字通り正確に非ずと雖も此の如きものならんと云ふのみ

と徳義とを得んとを力めざるべき。其報酬や美なり、其希望や大なり。されども余が今ま言ひし所の事は、盡く正確に然りとば、知識ある人の言ひ得べきことに非ず、余も亦断言すること能はざるなり。然りと雖余は言はん、苟も靈魂の不死なること證明さるゝ以上は、何事か是れに近き事あるべしと思考するは、敢て失當なりとせず、又た此く思考するの資格なしとせざるなり。此く大膽に思考を敢てするは、實に之れ光榮あることにして、彼れ此くの如きの言語を以つて自ら慰藉すべきなり。之れ余が此事に就いて長時間の談話を試みし所以なり。故に余は云はん、かの肉體の快樂及び裝飾を以つて、之れたゞ外物のみ、善を爲すよりも寧ろ害を爲す者なりとなし、以つてたゞ知識の快樂を求め、靈魂を飾るに外物たる裝飾を以つてするなく、靈魂固有の玉飾りたる所の、節制、正義、勇氣、自重及び眞理を以つてし——是等に裝飾されて、時期來りて、靈魂下なる他界に旅行するに當つてや、人々其靈魂に關して心強かれ。シンミアス、ケーベス及び其他の人々よ、君等も亦他日必ず死すべし。余は、悲哀詩人の言はんが如く、已に運命の聲に招呼されたる者にして、暫時にして毒藥を飲ま

クリトーン、ソークラテースに遺言することなきやを問ふ

ざる可からざるなり。思ふに余は先づ入浴するを善しとなす、之れ余の死後、婦女等が余の屍體を洗ふの勞なからしめんが爲めなり。

彼れ、是等の事を語り終へし時、クリトーン曰く、ソークラテースよ、君は何事か遺言して吾等に命する所の事なきや——何事か君の子女に關し、或は其他余等の盡くし得る事に關して云はんと欲する事なきや。

彼れ答へて曰く、クリトーンよ、別に何事も言ふべきなし。たゞ言はんとする所は、余の常に君等に語り居たるが如く、善く君自己に注意せんことなり。之れ君が實行することゝ約束するも又た約束せざるも、君が余及び余の家族、及び吾等凡てに盡くす所たるなり。然るに君若し自己に注意することゝ怠り、余が君等に示めしたる所の規則に従つて歩まざる時は、如何に君が此瞬間に於て宣言し約束したりと雖、益も其益あらざるなり。

クリトーン曰く、余は力の限り之れを爲さん。而して如何なる方法に従つて君を葬らんか。

君の欲するまゝに爲して可なり。然りと雖君は固く余を捕へて、余を

して君より脱走せしむること勿れど。ソークラテース此を語りつゝ微笑して謂うて曰く——余はクリトーンをして信せしむるに、余は談話と議論と居たるソークラテースと同一人物なるを以つてするを能はざるなり。彼れ想像すらく、余は、やがて彼れが見ん所の屍體たるソークラテースなりと、是故に彼れ其葬式に就いて問ひしなり。余は數言を費して、余の毒藥を飲む時は、余は君等を後にして幸福なる喜悅の世界に至ることを證明せんご力めしと雖——余の、君等及び余自身を慰藉せんごせし是等の言語も、クリトーンに取つては何の効能もあらざるものゝ如し。故に余は君等に請ふに、クリトーンに對して余の爲めに證人となること、審問の時クリトーンは余の爲めに裁判官に對して證人たりしが如くならんことなり。然りと雖其保證の約束は全く別種のものにして、前には彼れ余の爲めに裁判官に保證するに、余の此に留まるを以つてするものなりと雖、今ま君等のクリトーンに對して余の爲めに保證するは、余の此に留まらずして、出立して彼方に去り行くのことゝなす。然らば彼れ余の死を悲しむこと少なく、又た余の屍體の焼かれて埋葬さるゝを見る時、

歎くことなかるべきなり。余は、彼れが余の不運を悲しみ、又た埋葬するに當つて、此く吾等ソークラテースを葬りたり、此く吾等墓にまで彼れに従ひ行きたり、或は葬りたり等の言を爲す勿らんことを欲す。何となれば誤謬なる言語は、單に其言語の不良なるのみに止まらず、又た靈魂を汚染するに惡を以つてするものなればなり。愛するクリトーンよ、心強かれ、而して言へ、君はたゞ余の肉體のみを葬らんとす。而して其葬式の如きはたゞ君の善しと思ふ所に従ひ、通常の如くせば可なり。

彼れ此く語りて、起ちて浴室に行けり。クリトーン従ひて共に行き、吾等に待つべしと告げたり。之れを以つて吾等後に残りて、互に議論の問題、及び吾等の悲哀の大なることに就いて談話し、又た思考せり。彼れは實に吾等の父の如くなりしが、今や吾等より取り去られて、吾等は孤兒として今後の生涯を送らざるを得ざるなり。彼れ浴し終りし時、其數子は連れられて來り、ソークラテースは幼稚なる二子と長じたる一子とあり。又た家の婦女子も來りたれば、ソークラテースはクリトーンの面前にて、彼等と談話し、又た二三の事を彼等に教示する所ありて、やがて婦女子及

び小兒をして家に歸らしめ、ソークラテースは出でて吾等の方に歸り來れり。

日没の時は近づきたり、之れ、彼れの彼方に在りしは稍長時間なりしを以つてなり。其此方に出で來るや、浴後又た吾等と共に坐せり。されども其後は多く言語することあらざりき。やがて十一行政官の從者たる獄吏入り來り、ソークラテースの側に立ちて曰く——ソークラテースよ、君は此所に入り來りし者の内、最も高尚に、最も温和に、又た最も善良なる人なることは余善く之れを知れり。然るに他の者等は、余が官命に従つて彼等に毒藥を飲むことを命令するや、大に余を怒り又た余を詛ふと雖、余は君に擬するに、決して此くの如き忿怒の情を以つてするものに非ざるなり——余は信ず、君は決して余を怒ることあらざるべしと、何となれば咎むべきは、余に非ずして他に之れ有ればなり。さらばよ。君は余が宣告せんとする事の何たるやは其知れる所なるべし、避くべからざる事は、心靜かに之れを忍べ、と言ひつゝ、涙に咽び、彼方を向きて出で行けり。

ソークラテース彼れを見て曰く、余は君の好意に報ひ、君の命する如く

獄吏ソークラテースの死を悲しみ別れを告ぐ

爲さんと云ひつゝ吾等の方に向ひて曰く、彼れは實に愛すべき者なり、余の獄中に入りし以來、常に余を見舞ひ、又た時には余と談話し、有り得る限り余に對して善良の者なりき。而して今や優さしくも余の爲めに泣けるなり。クリトーンよ、余は彼れの言へる如く爲さざる可からず。若し毒藥準備整へば持ち來らしめよ、若し未だならんには、何人かをして準備せしめよ。

クリトーン曰く、されども太陽尙ほ西山の上にあり。又た多くの人は成らん限り毒杯を仰ぐことを遷延するは余の知る所なり。且つ宣告を受けし後、其人或は飲み、或は食し、或は愛する人々と與なるを樂むは通例なり、急ぐこと勿れ、時尙ほ十分に之れ有るなり。

ソークラテース曰く、然りクリトーンよ、君の謂ひし所の彼の人々にして、若し其時を遷延するを以つて利ありと思ふに於ては、彼等の爲す所或は正しかるべしと雖、余は僅少時間毒杯を仰ぐことを遷延したらんには、其間に何物か利益あるべしとも思はざるを以つて、余が人々の例に従はざるは亦余の正當の所爲なりとなす。余の見る所を以つてすれば、已に

クリトーン暫時
なりともソー
クラテースを留め
んとす

ソークラテース
時間の遷延も
益なしとす

毒藥を持来る

沒收されたる生命を暫しの間生き延びんとすよせば、余は實に滑稽たるべきなり。故に願くは余の言ふ如く爲し、之れを拒むこと勿れ。

クリトリン、側に立てる所の家僕に目くばせする所ありしを以つて、僕は彼方に至り、暫時にして毒杯を持てる所の獄吏と共に歸り來れり。

ソークラテース獄吏に謂うて曰く、善良なる友よ、君は是等の事に經驗ある人なり、余に如何に爲すべきやの方法を示めす所あらば幸なりと。

彼の人答へて曰く、毒杯を傾けたるの後、君は其脚部の重きを感じずるに至るまで歩むべきのみ、脚部重きを感じば横臥せよ、然らば毒藥其作用を爲すべしと。此くて彼れ毒杯をソークラテースに渡したれば、ソークラテース平然として温和なる態度を以つて、神色自若として人々を見詰めた。エヘクラテースよ、之れソークラテースの常に爲す所の状態なり。

而して毒杯を取りて獄吏に謂うて曰く、此酒杯を以つて何れかの神に灌酒禮を爲すは如何ん、可なりや、不可なりやと。彼れ答へて曰く、ソークラテースよ、余は毒酒の量は、たゞ飲むに足る、丈けをこゝに用意し置きたるなりと。ソークラテース曰く、余は了會せり、されども余は神に禱るに、他

毒杯を仰ぐ

人々悲歎を制し
能はず

ソークラテース
曰く、人は静かに
死すべきもの
はず

界に到る余の旅行をして幸多からしめんことを以つてするは可なるべく、又た之れ爲さざる可からざる事なり。故に余は憐らん、願くは憐りたる如くあれど。毒杯を舉げて之れを其唇頭に當て、從容として樂しげに、飲みほしたり。此時までは余等悲哀を制止するを得たりしと雖、其彼れの飲まんとするを見、飲み終りしを見るに於ては、余等今や忍ぶことを得ず、落涙禁じ能はず、余は爲めに顔を蔽ひて泣けり。されども之れ彼れの爲めに泣くに非ず、此くの如き良友に別るゝ余の不幸に思ひ至りて泣きしなり。されども此く泣き悲しみしは第一に余のしかせしには非ずして、余よりも前、クリトーン其落涙を禁じ得ざるに至るや起ち上り、余は之れに従へり。アポロドーロスは始めより悲歎の涙に暮れ居たるが、此時に至りて其正體を失ひ、大聲以つて泣き叫び、一坐の人々爲めに一層の悲歎を感せり。然るにソークラテースは自若として人々に謂うて曰く、此くの如きの泣啼は何事ぞや。余が前に婦女子を家に歸へしたるは、此くの如き狂態を演せしめざらんが爲めなりき。何となれば余は、人は静かに死すべきものなることを教へられたればなりと。吾等ソークラテース

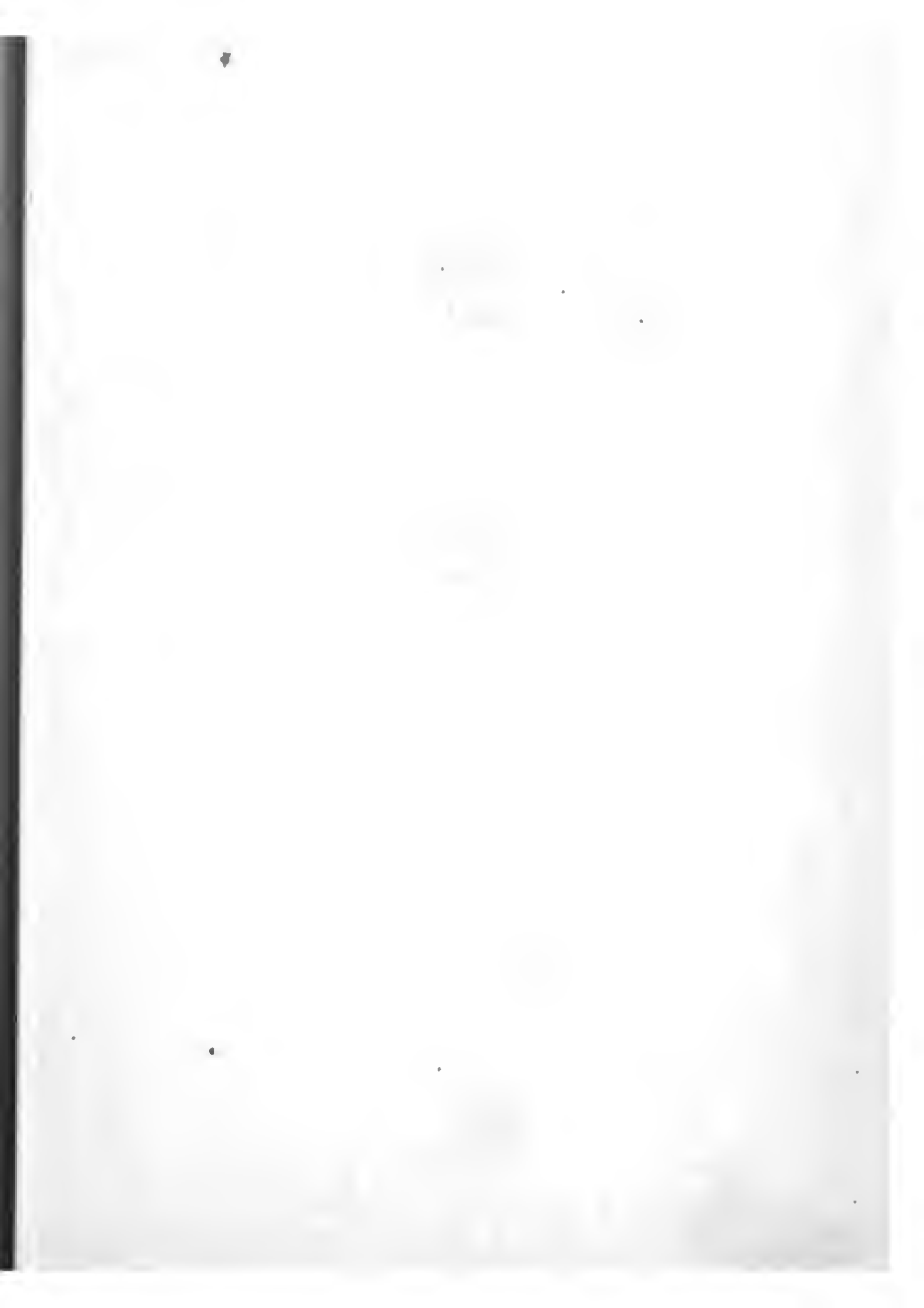
スの言を聴きし時は大に之れを耻ぢ、漸くにして落つる涙を揮へり。ソークラテース歩み居たるが、脚部漸く重きを感じずるに至り、效へられたる如く背を下にして横臥せり。暫時にして毒杯を與へたる人彼れの足及び脚部を試験し、堅くソークラテースの足を壓して、尙ほ感覺ありやを問ふ。ソークラテース曰く、否。而して彼れ次に脚部より次第に上部に及びて、ソークラテースの已に寒冷となり感覺なきを示めせり。次にソークラテース自ら身體に觸れて、而して曰く、毒藥心臟に來らば、我が命終るべしと。ソークラテースは布を以つて自ら全身を蔽ひ居たるが其の腿凹部の寒冷となり來りし頃、面部の蔽ひを開きて謂うて曰く——之れ其最終の言たるなり——クリトーンよ、余は一雄鷄をアスケレビオスに負へり、君此事を記憶して余の爲めに此負債を返濟せよと。クリトーン曰く、負債は必ず返濟すべし、其他何事か言ひ遺こすことはあらざるかど。此問ひに對しては已に答へなく、一二分の後ソークラテース身動きしたる音せり。侍者彼れの蔽布を取り去れば其眼は凝視せり。クリトーン近づきて彼れの眼を閉ぢ口を結ばしめたり。

「アスケレビオスに雄鷄を負へり」

エヘクラテースよ、我友の臨終の状況此くの如くなりき。彼れに關しては余は眞に斷言することを得ん。曰く彼れは當時余の知れる人物中の最も賢明に最も正直に、又た最も善良なる人なりと。

宴

會



宴會解題

プラトーンの著書の中、其の最も美なるを「宴會」及び「ファイドロス」の二篇となす。宴會篇は其仕組の完全して、能く整均を保てるの點に於ては、全く之れグレンシア風にして、宛然彫像を見るが如きの美ありと雖、「ファイドロス」は之れに反して其の組織體裁甚だ不規律放縱にして、宛然「ゴチック風」の美ありとなす。而して「宴會」篇と「ファイドロス」篇との關係は甚だ親密なるものにして、本篇は「ファイドロス」篇の序引の位置のものなるか、或は然らざれば其後繼本論の位置のものなるか、其何れならんとも、兩篇は相携へつゝ前後せるものと云ふべく、此の兩篇は姉妹篇と謂ふべきなり。

プラトーンの翻譯及び出版は各國甚だ多種にして、從來其全著述の分冊として出版せられたるものゝ内、其翻譯の多種にして又た其出版の多數なる者は、若し「宴會」篇第一に非すとせば、「ファイドロス」篇に次ぐ者なるべし。而して歐洲諸國に於て「ファイドロス」篇を珍重するは、宗教上、靈魂

不死の論あるより、自然に然るものなりと雖、宴會篇は眞に純潔なる美其物にして、愛の讚美と其の哲學との美麗なる表出の點に於て、吾人耶蘇敎國人ならざるものに取つては、寧ろ前者よりも本篇の美を珍重するや大なるべきを信ず。此くの如く、宴會篇は諸國に於て、多くの學者に翻譯され、出版されたるや實に夥しく、英國の詩人シユレーの如きも、本篇に對しては歎稱措く能はず、自ら之れを英文に譯述せるが如きに由つて觀るも、本篇の美は以つて之れを想像するに足らん。

本篇中のことを談話するものはアポロドーロスなる一種狂人風のものにして、彼れ之れをアリストデーモスなる人より聽きたるなり。故に本篇の内容はアリストデーモスがアポロドーロスに語りたるものとなす。

一日アリストデーモス、晴れ着を着せるソークラテースに逢ひ、何處に行くやを問ふ。ソークラテース答ふるに、アガトーンの宴會に行かんとする旨を以つてす。此宴會は、アガトーンが過日美文の競争演技に一等の勝利者たりしを祝せんとして友人を招待せしものなり。ソークラテ

リス、アリストデーモスに勸むるに、共に其宴會に行かんことを以つてし、招待されずとも可なり、途々其辭柄を考へ出すべしと、兩人打連れてアガトーンの宴會に趣く。

アガトーンの家の戸に近づくの時、ソークラテース、突然精神上の發作を起こし、隣家の玄關に入りて沈思す。然るにアリストデーモス之れを知らず、アガトーンの戸口に來りしかば、アガトーン、アリストデーモスを歓迎し、又たソークラテースは如何にしたるやを問ふ。アリストデーモス後方を顧りみ、今までソークラテース共に在り、ソークラテースの勸めに由りて來りし旨を告ぐ。アガトーン家僕をしてソークラテースを見せしめ、之れを隣家の玄關に發見し、以つて早く來ることを催がすと雖も、ソークラテース少しも動かざることを報告す。アリストデーモス曰く、之れソークラテースに屢々ある所のことなれば放棄すべし、やがて來るべしと。食事も半ば終りし頃ソークラテース入り來れり。

來客の一人パウサニ阿斯發議して曰く、「吾等昨日も大飲せり、今日又々飲酒せば決して宜しきことに非ず、他に良法はあらざるか」と。醫師を業

とせるエリキシマッホス之れに賛成し、且つ吹笛妓の奏すなる「響き」は之れを廢し、吾等「愛」の讚美の演説を爲し、左より右へ、一同順廻しに爲すは如何んと發議す。人々皆同意せり。而して「愛」の讚美の思想の父はファイドロスにして、之れをエリキシマッホスに語りたるものなるを以つて、先づ演説すべしとなし。ファイドロス次の如く演説す――

「愛」は最も古く生れたる年長の神にして、又た此神が人間に與へたる利益や甚だ多し。其内最も大なる功德は人に耻心を與ふることにして、若し愛者にして卑怯の行爲を爲して之れを愛人に見らるゝ如きとある時は最も之れを耻づるものなり。此理由に基づき國家及び軍隊を組織するに愛者及び愛人を以つてする時は最も有力のものとなるべし。何となれば愛は最も怯懦の人を變じて最も感奮したる勇者となすものなればなり。

單に男子のみに非ず、女子にも亦真正の愛ありて、アルケースチスが夫の爲めに死を恐れざりしが如きは、其貞操の盛なるものなり。而して神之れを賞してアルケースチスを死より再び生に歸へしたりと云ふ。然

るにオルフェウスは妻の爲めに死せず、而も妻を戀ひて生けるがまゝにして他界に至ることを考案したりしかば、神は其卑怯を惡み、其妻に會はしめずして、單に其幽靈のみに逢はせて、他界より追ひ返へし、後、婦人の手に死せしめたり。アヒレウスが其友パトロクロスの爲めに死を否まざりしは、アルケースチスの如し。神之れを賞して幸福の島に彼れを送れり——之れフアイドロスの演説なり。

次席はパウサニアスなり。此く語れり——

フアイドロスは天の愛と普通の愛とを區別せざりしは誤れり、愛に二種あること、アフロヂテーの女神に二あるが如し——其一はウラニアの女にして、母なく、たゞ男性たる父より生れ出でたるアフロヂテーなり、されども他の一はゼウスとヂオーチーとの女にして普通のアフロヂテーなり。前者の愛は高尚神聖なる目的を有し、決して放肆欲情等の影だにもなし。後者は粗野なる愛にして精神よりも肉體を愛す。而して戀愛者の行爲は種々其作法を異にし、又た諸國に由つて男性間の戀愛に關して説を異にす。ポイオーチア人等は男性間の愛を稱賛すと雖、イオーニア及び野

蠻諸國は之れを稱賛せざるなり、其理由たるや、一部は、愛に由つて人民の團結を生じ、政治上の危険あると、アリストゲイトーンとハルモヂオスとの愛の關係の如きものあるに由る。アテーナイ及びスバルタ等にては、意見往々衝突し、時には之れを獎勵し、戀愛者に、種々異様の事を爲すを許るし、之れを以つて人格に害なしとなすと雖、時には年長者其監視を嚴にするごあり。之れ實は、愛に耻づべきものあると、名譽とすべきものあるごに存す。肉體の下等なる愛は、青年の心の凋む時は、翼を生じて飛び去るものにして卑しむべき愛となす。又た富貴權勢等に意あるの愛も卑しむべきなり。たゞ夫れ高尚なる精神の愛は永久に繼續するなり。戀愛者は之れを試験し、其眞偽を判せざる可からず、容易に彼れに聽くべからず。吾等の國に於ては愛人も戀愛者に盡くすに徳義を以つてすべきの規則あるなり。

徳義及び智識の爲めに好意を以つて盡くすことは吾等の習慣の許るす所。而して青年の愛と、徳義と哲學との實踐の、二個の習慣にして相合一する時は、戀愛者等は正當に一致和親するを得べしとなす。而して利

害なくして、相愛する者にして、若し欺かるゝとありとするも、之れ耻づべきことに非ずと雖、利害の心よりする所の愛者愛人等は二重の不名譽となす、何となれば若し彼れ其愛を失ふ時は、併せて其人格をも失ふべければなり。然るに高尚なる愛は、其愛の對手は價值なきものなりと雖、依然として不變なるべし。何となれば徳義の爲めの愛に優りて高尚なるもの他にあらざる可ければなり。之れ天の女神の愛にして、個人及び都市をして、共に其進歩の爲めに働かしむるに於て大に有益たるなり。

次はアリストファネースの順次なり、然るに彼れ咳逆を發して演説するに能はず、故に次席のエリュキシマッホスに請ふに、咳逆を治するか、或は暫時代つて演説するかを爲さんことを以つてせしかば、エリュキシマッホス兩者何れも之れを爲すべしとなし、咳逆を治する方法を放へ、而して次の如く演説に進みて曰く――

パウサニアスが、愛に二種ありとしたりは、大に善しと雖、自己の専門たる所の醫學の教ふる所に由れば、此二種の愛の領分は一切の事物に及ぶものにして、動物にも、植物にも、又た人間にも然り。人體にも二種の愛あ

りて、醫術は其孰れは善良なる愛にして、孰れは不良の愛なるかを示めし、其善者を取り、惡者を去るを勧め、又た衝突せる分子は之れを調和せしむることを爲す。體育術も、農業も又た醫術も、凡て孰れの術と雖、皆な、反對物を調和するにして、之れへ一ラクレイトスの所謂反對の調和なるものなり。音樂とは愛の原理を調和と律とに應用したるものにして、抽象して云ふ時は簡單なりと雖、之れを實際に施こすに及びては種々の困難有つて存す。而して高等なる原理と下等なる原理とは、能く之れを注意して、節制調和を爲さしめざる可からずとなす。

此調和及び不調和なるものは、季候の變遷乾濕寒温等にも存し、一切の疾病は、愛の分子の過不及及び不秩序より生ず。天體に於ける愛及び不調和の是等の分子に關する智識は、之れを天文學と稱し、人が神及び兩親に關係する點より云ふ時は、之れを卜筮と稱す。何となれば卜筮は神人間の平和を作る者にして、たゞ人間の愛の敬神不敬神に對する傾向の知識に由つて作用するものなればなり。此くの如きは愛の力なり、而して正理にして節制なる愛は、最大なる力を有し、諸神及び吾等相互の間の一

切の幸福及び友情の源泉たるなり。余は尙ほ多くの言ふべき事ありと雖之れを省略せり、アリストファース今や咳逆も治まりしが如し、余の省略したる所を補ふか、或は新生面を開きたる演説を爲せ。

次の演説者はアリストファースなり――

彼れ演説の新生面を開かんとして、先づ人性を論ずべしとなして曰く、原始の人間には三性あり、男、女、及び男女兼性之れなり。此男女兼性は現今其の名稱存すと雖、甚だ卑しむべきものとなれり。抑、原始の人間は、身體球形にして、四手四足、頭は前後二面にして圓形の頸上にあり、其他之れに準ず。其力及び速力は非常なるものにして、天に昇りて神を襲はんことを企てたり。諸神其所置に困しみ、若し之れを滅ぼし盡くす時は、犠牲を供するものなきに至らんことを憂ふ。ゼウス遂に一策を案出し人間を二分して其力を削殺することに決したり。此くする時は尙ほ能く人間を生存せしめ、犠牲を供せしめ、同時に神に従順なるべしと云ふにあり。此くて神は人間を兩分すると、毛髮を以つて卵子を割くが如くなし、アポロンをして其顔面の向きを變せしめ、又た凡て傷口を癒やし、身體

諸部分を整理せしめたり。此くて人間二分せられて各々他の一半を求め相擁して事業を爲すなく、彼等爲めに、饑餓に瀕せんとするに至れり。ゼウス之れを憐れみて男女配合の方法を工夫し、彼等をして婚せしめ、各各安んじて其業に就くを得しめたり。而して人々の性質の異なるは、其原始の男性、女性、或は男、女兼性より別れ出でたるに由るものにして、かの男、女兼性の人間より別れたる者は多情多淫の者となり、女性より別れたる者は婦女子を好む者となり、男性より別れたる者は男子のみを好み、其欲望の中心をこゝに置く者となる。而して此の男子間の相愛する者は勇壯なる愛情を有し、殆ど相分離せしむべからざる趣を有するも、彼等其理由を知らず。然るにヘーファイストスの神其神器を以つて來りて兩人の相擁して寝ぬる所に來りて云うて曰く「汝等融和して一となり、今後一として存することを求むるか、汝等の相愛する意志此にありと云ふべきか、何となれば愛とは全體となるを欲する欲望たればなり」と。之れ愛の理由となす。此くて人間始めの全き所を失して半裁されたるものとなれり、若し人尙ほ善良なる行爲を爲すことなくんば、神は又々吾

等を半裁して、合計全人を四分したるものごなし、吾等片手一脚のものと爲さるべし。故に吾等神を敬し、愛の與ふる所の善を得んことを力め、神と和睦し、此地上に於いて貴重なる眞正の愛を發見せざる可からず。而して余のこゝに云ふ所はパウサニアス及びアガトーン兩人間の愛を謂へるものなりと解せざらんことを求む、『プロトゴラス』中、兩人の關係を記せり、何となれば余の云ふ所は應用極めて廣ければなり。

アリストファネス終りて、エリュキシマッホス、アガトーン、及びソークラテースの二三の談話應答ありしが、フアイドロス促して、アガトーンをして演説せしむ。アガトーンの演説は次の如し――

彼れ先づ諸神を讚美し、而して神の恩恵を語らんとして曰く、愛は諸神中の最美、最善、至幸の者なるのみに非ず、又た最も年若き神にして、ヤペトス及びクロノス等の時、諸神の相關へる時代には未だ生れざりしなり。而して其時諸神の爲したる所は、愛より出でしに非ずして、皆必然より爲せしなり。愛は若くして溫柔なる場所に住す。故に女神アテーが人間の頭蓋上を歩むが如きことなくして、人の心情の如き十分溫柔の所を歩

む。愛は柔軟優美にして花の中に居り決して惡を爲すなく、又た受くるなし、人皆な好意自由の心を以つて愛に事へ之れに従ひ、愛の存する所には從順あり、從順ある所には正義あり。愛は正義なるが如く、又た節制なり。何となれば彼れは欲望の支配者にして、若し彼れ是等諸欲望を支配すごせば、必ずや彼れ節制ならざる可からず。彼れ又た勇氣あり、何となれば彼れ軍神にすら勝ちたればなり。彼れ又大智者なり、何となれば彼れは自ら詩人にして、又た他をして詩人たらしむればなり。愛は秩序の創始者なり、能く諸神を和睦せしめたり。彼れ諸動物を造り、種々の技術を發明せり。一切の神は彼れの臣下の如し。彼れは自ら最美最善にして、又た能く最美最善なるものゝ原因となる。彼れ能く人をして宴會に於て同一心情となし、愛情を以つて人心を充たし、愛情に背くこと勿らしむ。愛は人間の嚮導なり、補助者なり、防護者なり、救世主なり。此くの如く、半ば慰樂にして、半ば眞意ある讚美を此神に奉ず。

次はソークラテースの順なり。

彼れ、人々の此演説を以つて讚美に非ずして、單に讚美の外觀のみとな

し此くの如き外觀の讚美を爲すは其約束せざりし所なるを以つて、約束の解除を求むと冷語一番し、自家の流儀を以つて讚美して可なりとせば讚美すべしとなし。アガトーンとの問答を以つて始めたり、其結果の大要此くの如し――

愛は或物の愛にして、愛の欲する所は其自己に有せる所のものに非ず。何となれば人は其己に有せる所のものは之れを求むるものに非ざればなり。愛は美の愛なり、故に愛は美を有せざるなり。而して美は善なり、故に美を求め、之れを欲するなり。愛は又た善を欲す――之れフアイドロスとソークラテースとの問答の結果の大要なり。次にソークラテース、マシチチイアのデオチマと云へる賢明なる一婦人と問答し、其の得たる所の答言も大要其如くなりしと云へり。ソークラテース、始めアガトーンと同じく、愛は有力なる神にして又た美なりと云へり。然るにデオチマ然らずとなし、愛は美と醜と、善と惡との中間なり、又た決して神に非ずして、たと大なる精靈なり、中保者なり、神と人との間に立ちて、人間の祈禱を神に達し、神の命令を人間に致すものとなせり。

ソークラテース問うて曰く、愛の父母は如何ん。デオチマ答へて曰く、豊富(父)と貧乏(母)との子にして兩者の性質を分有し、時に富み、時に餓ゆ。又た母の如く汚穢にして薦の上に寝ぬることありと雖、又た父の如く大膽強壯にして藝術に富めり。且つ彼れ智と無智との中間にあり——此點に於て彼れ智と愚との中間に在る所のものなる哲學者と似たり。之れ「愛」の性質なり、之れを以つて其愛する所のものと混同すべからざるなり。然りと雖愛は美を欲望す。此に於て疑問起る、乃ち——彼れ美に就いて何をか要むと。勿論彼れ美を所有せんことを欲す。然りと雖、美に由つて彼れ何をか得る。今ま美に代ふるに善を以つてして説明せん、善の所有は幸福を得んとするにあることを知るは難きことに非ず。愛はただに善を有せんと欲するのみに非ずして、又た之れを永久に所有せんことを欲す。然らば一切の男女が愛に關して熱中するは如何なる理由ぞ。曰く、一切の男子も女子も一定の年齢に達する時は生殖せんことを欲す。而して愛はたゞに美のみの愛に非ずして、又た美に於て生殖せんことを欲す。之れ死すべき者に於ける不死の法則なりとす。故に美近づく時

は妊娠愛胎の力増加し、醜近づく時は大に之れを嫌惡拒反し、痿縮し去るなり。

然らば何故に之れ單に人間のみに限られずして、又た諸動物にも然るか。曰く、彼等も亦不死の天性を有すればなり。且つ人間の一個人に就いて云はんには、肉體も精神も常に新陳代謝して、新なる可死のもの、舊物に代はりて其處を占むるものなり、之れ即ち新分子に由つて舊分子を繼續するなり。人が子孫を好むは、又た自己の舊位置に新なるものを繼續せしめて存置せんとする所の不死の念に由るものなり。又た名譽の不死を求むるも亦此くの如し。而して精神上の多産の人は肉體上の子孫を生殖することなしと雖、其事業は之れ其精神上の子孫にして、之れ肉體上の生殖よりも高尚なりとなす。

ヂオチマ尙は愛の奥儀に進みて大美の愛に達するの順序を教へて曰く、第一に美なる形態を愛し、次に多數の美を愛して其相連結して一なることを知り、次に美の身體より美の精神に進み、次に法律及び制度の美に至りて一切の美は一種族のものなるを知り、次に法律制度等より學術に

至り、終に絶對美の單一なる學術は彼れに啓示さるゝに至り、こゝに其終局に近づきたるものと云ふべし。此くて彼れ至上なる愛を默想する時は、凡て地上の妄念を拂ひ去り、肉體の眼に非ず、精神の眼を以つて美の眞體を見、而して徳義と智慧とを生産し、以つて神の友となり、不死の後繼者となるべきなり。

ソークラテース語り終るや人々拍手喝采せり。時に宴飲者の一團騒然として庭内に闖入し、アルキピアデースの聲してアガトーンの何處にありやを問ふ。アルキピアデース大に酩酊し、花冠を戴き、人々に援けられてアガトーンの所に来り臥床に横はり、突然ソークラテースの此席に在るを認めて大に驚き、又たソークラテースとアガトーンとは戀愛者なり等の戯言を爲し、人々に飲酒を勧め、冷酒器を以つて杯に代へ、自ら一杯を傾け、之れをソークラテースに廻はし、ソークラテースは又た之れを飲み干したり。エリュキシマッホス宴會の企てを語りたるに、アルキピアデース曰く、若し酩酊したる失戀者(ソークラテースに對して)の資格を以つて、ソークラテースの讚美を爲して可なりとせば演說せんとして曰く――

先づソークラテースを以つて、彫刻師の店頭のセイレーノスの半身像の、内部に神の本尊坐しませるに比へ、次に笛吹けるサチュロスに比へて讚美せん。何となればソークラテースは、マルシヤスの笛を用ゐて爲す所を、たゞ音聲のみを以つて同様の結果を呈するものなればなり。彼れ實に大雄辯家にして能く人心を魅惑する者なり、而して又た能く人を論破説得し、余自己をして、實に自ら耻づべき生活を爲せりと感せしめたり。ソークラテースは一度余を戀愛せる者の如く思はれたり、故に余は其れを利用して彼れより智慧を受けんとしたるも失敗に終りたりと。アルキピアデース尙ほソークラテースのボチダヤ戦争の時寒氣及び饑餓に耐ゆるの驚くべき力あるを示めせるを云ひ、或時は終日終夜佇立して或一事を思考せることを云ひ、又た或時はアルキピアデースの負傷を助け其他有功なりしことを言ひ、又たデーリオン戦争にグレシア軍敗北して遁走するの時、ソークラテース殿して肅然として退軍したる其沈着なることを言ひ、而して曰く、彼れは人間中實に驚くべき者にして、何人も之れに比すべきなく、たゞ比すべきはサチュロスあるのみと。

アルキピアデース演説を終りし時、ソークラテースはアガトーンを愛するものゝ真似し、アルキピアデースとアガトーンとの兩人はソークラテースの愛を争ふものゝ真似し、アガトーン席を起ちてソークラテースの側に至らんとするや、他の一團の宴飲者宴席に闖入し、之れより、一坐大に亂れ、皆々大飲することとなり、酒を好まざる者は立ち去るあり、或者は其坐に寝るもあり、而してソークラテース、アリストファテース、及びアガトーンの三人のみは尙ほ寝ることなくして大杯を飲み廻はして種々の談話を爲し居たるが、アリストファテース遂に睡り、夜明けんとするの頃に至りアガトーン睡りたり。ソークラテース、アリストデモスと共にアガトーンの家を辭し、遂にリュケイオンの園に至りて水浴し、夕景家に歸へりて休めり。

○

プラトーンの宴會篇は實にプラトーン彼れ自身なり、或は神話あり、或は修辭法及び詩歌に就いて、ソフィスト流に之れを扱ふあり、或は快活なるあり、或は眞面目なるあり、又た前代種々の哲學在つて存し、種々の分子相

本篇はプラトーン自身なり

集まりて此篇を構成す。而して其プラトーン自身の表現なるに於ては、之れを他國語に移さんとするには蓋最も困難の事となす。

本篇に於ては、愛は一切萬物に瀰漫せるものとなせり。古代の人間に在つては、四周の現象を説明し、之れを發表するに就いては、愛は大に其影響を及ぼしたるものにして、言語及び神話等の第一の區別は男女の性にして、其れより後世に至つては植物に雌雄を認め、諸原素に陰陽ありとなし、天地を以つて陰陽男女となし、其結婚等を云ふに至れり。

プラトーン亦愛の秘密なるもの人間及び自然に存し、男女の關係以上に及べることを感じたるものゝ如し。プラトーンは、世上至高至上のもの、容易に感覺上の欲望より分離せしめ得べきものに非ず、又た之れ感覺上のものを精神上の形に直ほしたるものに非ざるを知れり。故にソクラテースを表はすに、始めより無感無覺の人となすことなく、たゞ其情欲に打勝ちて能く之れを制御したるものとなし、又た其感化力の秘密は此に存すとせるなり。「フアイドロス」及び「宴會」篇に在つては、愛は單に所謂感情なるものに非ずして、又た美と善との思考にありとなせり。故

に至高の愛は人間に非ずして至高至純の抽象にあり。而して此抽象は遙かの天にして、精神の眼を以つて驚歎して見るべしとなす。プラトンの愛の學說中には、真理の一なること、種々、世界の反對分子の合一、始めて人類に光照したる所の知識の熱望、觀念は人心に相關し、人心は又た觀念に相關なること、不可視界の信仰、永遠不朽の自然の頌美等、是等は凡て包含さるゝなり。

○

愛の演説

愛に就いて、次々に爲せる所の演説は、皆其演説者の人物を表はし、又た種々の程度に於て、終局の結果に貢獻するものにして、皆なソークラテースの演説の準備を爲せるものと爲す。而してソークラテースは新たに其諸説を總攬して、其等の至高の點に翱翔す。然と雖其等の演説は一の觀念の漸次に向上する所の諸階段には非ずして、寧ろ想像上の者にして、其内或真面目のものありて、其等演説家が愛の神に捧げたるものたるなり。是等凡ては論理的のものとは云はんより、修辭及び詩歌性のものにして、又た多少の眞理なきに非ず。エリュキシマッホスが音樂を以つて、其抽象

の原理は簡單なりと雖、其應用は複雑なりとせるは音樂其他諸科の學術に適用して然るの言となす。パウサニアスの個人間の愛は專制政治に害ありとの説は、グレシアの歴史の證明する所なり。アリストファネースが、愛を以つて完全を求むるの情なりとせるは、此内真理在つて存するものと謂ふべし。又たアガトーンが愛と自由の意志とを結合し必要に迫らるゝことに反對せしめたるは、又た倫理上注意すべきこととなす。此くの如く、プラトーンは滑稽と熱心と、真理と僥説とを鎔冶して、以つて本篇を作せり。

○

本篇に於て人々の愛を云ふや、多くは男性間の愛にして、男女の愛を云へること極めて少し。恐くは之れグレシア諸國民の強國主義の思想より、體育を奨励し、勇壯なる氣象を養成し、以つて外敵を禦ぐの必要ありしより、自然に其柔弱に流るゝを拒がんとして、婦女子の愛よりも男性間の愛を貴び、之れを重んずるに至りしものゝ如し。而して男性間の愛たるや、素より年長者は年少者を愛して之れを教育するは其精神たりしなら

んと雖、又た肉欲の分子の混合したるの事實は之れ有るなり。本篇中の諸演説に就いても之れを察知すべく、又たアルキピアデースの爲せし所に就いて云ふも其然りしを知るなり。要するに之れ尙武の氣象の餘波なるべし。

然りと雖他に美少年を愛するの理由なきに非ざるなり。乃ち美少年とは身體の構造整和を得、其才氣及び知力の外貌に表はれ居るものゝ事にして、以つて之れを教育せば、將來必ず有爲の人物となすを得べしとの望あるに由るものならん。其美少年を好むは、人性の好美心に基づくものなりと雖、又た身體と精神とは内外相應せりとの思想存するにも由るべし。宴會篇にはアルキピアデース、ソークラテースを戀ふるものなりと雖、『第一アルキピアデース』篇に於ては、ソークラテース、アルキピアデースを戀ふ、而して其精神たるや、此有爲有望にして活潑、且つ美麗なる青年を教育熏陶して、以つてアテーナイの大人物となさんとするにありしものゝ如し。ソークラテースが美少年を愛するの甚しかりしは其理由こゝに存すべし。而して女子は、此くの如き目的に向つては適當せざる

より、自然に男性間の愛情を重んずるに至りしものゝ如し。

○ 對話中の諸人物に一瞥を投せんに、ファイドロスは實に哲學上の議論の原因を爲せる人と云ふべく、アリストファチースは滑稽の假裝の裡面に眞面目の目的を有せる人なり。アガトーンは柔弱なる修辭家の風あり、之れ後來アリストファチースの諷刺せる所なり。アルキピアデースは大なる力と大なる惡との反對を有せる一種の人物なり（殊にアルキピアデースの今後の行動を回想して考ふる時は、又た一層の興味を添へん）——是等の諸人物皆躍如として生動せるを見る。吾人は又た本篇に由つてパウサニアス及びエリキシマッホス等の聊か名の聞こへざる所の人物の性狀を想見することを得。吾人は又たキセノフォインの所謂「小男」なるアリストデーモスの面影を想像するを得るなり。

○ 演説ソークラテースの順次となり、愛に關するマンチ子イアの賢婦人デオテマなる者の教へたる所を語るや、人體美及び生殖欲等より其歩を

「ドフマ」構成の巧みなること

進め、遂に至高至上至大の絶對美の域に達し、自然の力は今や是れより進むと能はざるの時に當り、突然一群の快樂主義の男女をして騒然としてアルキピアデースを先きに立て、此宴席に闖入せしめ、餘りに抽象に過ぎたる一坐の光景を變じて具體となし、餘りに精神主義に傾きたるものに快樂主義を混和し、而も醉人の口より眞理を出さしめ、以つてソークラテースの人物を寫し出して宴會に一層の興味を増さしめたるが如き、ドラマ構成上最も巧妙なるものと云はざる可からず、吾人は實に本篇の美に心酔し殆ど恍惚として言語を絶せるものなり。

○

著作の年月

本篇著作の年月を定むる標的は、たゞマンチチアの滅亡の後、アルカヂアの分割を云へる記事に由るあるのみ。之れ紀元前三百八十四年に起りたる事變にして、プラトーンの四十四歳の時なり。之れを以つて宴會篇はプラトーンの若き時の作なりと云ふ可からず、又マンチチイアは三百六十九年に回復されたるを以つて見る時は、本篇は恐くは三百八十四年と三百六十九年との間に成りしものなるべし。されどもマフィドイ

ン』『宴會』及び『ファイドロス』等の著述の前後を定むるは到底不能のこととなす。

宴會篇は其文體及び論題に於て『ファイドロス』篇に關係を有せるものにして、十分長く愛を論じたるものは此二篇なり。又た何れも哲學を以つて熱中或は狂氣の一種となせり。

プラトーンの宴會篇の他に、又たキセノフォーンの『宴會』篇なるものあり。其數々『ファイドロス』及び『宴會』篇等に照應せること多きに由つて見る時は、吾人は之れを以つてキセノフォーンの眞著と見ること能はざるなり。若し之れ其眞著なりとせば、彼れ、プラトーンに敵對して書きしものならざる可からず。然るに『メモラビリア』中には毫も其事なきに由つて見る時は、或は後人の偽作なりと云ふを以つて當れりとなす。

キセノフォーンの宴會篇

宴會

對話人物

アポロドーロス—之れ談話

者にして、アリストデーモス

より聽きたる所の對話を

其友人に語るなり。され

ども此話しは既に一度グ

ラウコーンに話されたる

ものなり。

宴會の—組

場—アガトーンの家

ファイドロス

パウサニアス

エリュキシマツホス

アリストファチース

アガトーン

ソークラテース

アルキビアデース



の聴かんとする事に關しては、余は答ふるの準備ありと信ず。
 一昨日余のフレローンの家より此の市に来るの途中、一友遙
 かより余の後姿を認め、樂しげなる態度を以て余を呼び止め
 て曰く、フレローンの人なるアポロドーロス、暫く待ちねど。余其言の如
 くせり。彼れ曰く、アポロドーロスよ、余は、アガトーンの家の晚餐會に於
 いて、ソークラテース、アルキビアデース及び其の他の人と爲したる愛の
 讚美の演説を聴かんとして、今しも君を尋ね居たり。フィッポスの子、フォイ
 ニックス之れを或人に語り、其人、君が能く此事を知れる由を余に告げたり。
 而して彼れの言ふ所は甚だ不明瞭なりしを以つて余は君より聴かんこ
 とを希望するなり。此事を委しく語り得る者は、君を措きて他にあるこ
 となかるべし。君は其宴會に出席したりや否や、先づ是れより語り始め
 よ。

余曰く、グラウコーンよ、君若し此會合は近時の事にして、又た余が其席
 にありしやと云ふが如きに由つて見る時は、君に報道したる所の人は極
 めて不精密なりしものゝ如し。

アポロドーロス
 と宴會當時のほ
 なし

彼れ答へて曰く、然り、されども此は余のしか感じたる所なり。

余曰く、されども其事如何にして有り得べきや。アガトーンは此數年間アテーナイ市に在らざる事を君は知らざるか。又た余がソークラテースを知りて、其言語行爲を日々の研究科目となすと雖、未だ三年をも経過せざるなり。且つ之れより前余は諸方を奔走して、以て自ら善き職業を爲せる者なりと思惟せり。然るに其實余は最も憐れむべきの状態にありて、君の現在の状況に比して毫も優る所あらざるなり。而して以爲らく、余は哲學者たるよりも、何事か他の事を爲さざる可からずと。

彼れ曰く、滑稽は暫く之れを措き、先づ、此會合は何時ありしかを告げよ。余答へて曰く、余の小兒なりし時、アガトーン其初作の悲劇に由つて懸賞を得たる翌日、彼及び彼れの知人等、勝利の祭禮を行ひし時の事なり。

彼れ曰く、そは甚だ長き以前の事なり。君は誰より其事を聽きしや、ソークラテースよりか。

余答へて曰く、否な、フイニックスに語りたると同じ人にして、キダテナイオン區のアリストデームスと謂ふ者より聽けり。彼れ身體短小にして、

實會のありしは
數年前アガト
ンが其競技一第
賞を得たる時な
り

アリストテレス此時の事情を記憶して傳へたるなり

アボロドーロスの滑稽

常に靴を穿たざるなり。彼れ其宴席に在りき。而して當時ソークラテース崇拜者の内、彼れに優りて熱心なる者あらざりしなり。且つ余は彼れの話したる或部分に就いて、ソークラテースに其眞否を質し、ソークラテース其を確實なりとしたり。グラウコーン曰く、然らば願くは再び之れを語り聞かせよ。此處よりアテナイに到るの路は、實に之れ談話の爲めに設けあるにあらずやと。此くて吾等愛の演説に就いて談話しつつ歩みたり。是を以て余は始めに言ひしが如く、答ふるの準備あるなり。故に君若し好まば、余は此に之れを繰り返して語るべきなり。余は哲學に就いて或は語り、或は人の語るを聽くを好むものにして、利得ありと云はんよりも、至大の快樂此中に存するなり。されども他の談話、殊に君等金満家及び商人等との談話は、余は甚だ之れを好まざるなり。余は實に余の友たる君を惘然と感ずるなり、何となれば君は其實怠惰にして、而も常に職業に勤勉なりと考へ居るを以てなり。君は又た同じく余を以て惘然となし、不幸なるものとせん、然り、恐くは不幸のものならん。されども余は君がたゞ余のみ然りと考へ居ることは確かに之れを知れり、—乃

ち之れ差異ある所以なり。

友人 アポロドーロスよ、君は相も變らず、例の如く、君自身及び他人を善く言はざる人なる哉。君は君自身を始めとして、たゞソークラテースを除くの外、一切の人を惘然なりと笑へり。君は從來狂人アポロドーロスの目ある人なるが、余は君が何故に此名稱を得たりしやを知らずと雖、最も眞を得たる者なりと感ず。何となれば君はたゞソークラテースを除くの外は、君自身及び凡ての人に對して常に不満を鳴らせばなり。

アポロドーロス 然り、余の狂人なりと稱せられ、又た余の常識を脱せりと稱せらるゝの理由たるや、たゞ余が、余自身及び君等に就いて此くの如き見解を有せりと云ふにあるのみ。其他何の證明をも要せざるなり。

友人 アポロドーロスよ、余は此事に就いては已に言ふの要なし、されども願くは余が願ひたるが如く、愛の演説を繰り返へして余に聽かしむることを爲せ。

アポ 愛の談話は此くの如くなりき——然りと雖、余は備さに始めより始めて、正確にアリストデモスの語りたる所を繰り返へして語るべし。

此時の事を話したるアリストテレスはソークラテースの勳めに由りてアガトーンの宴會に至りしなり

アリストテレス曰く——彼れ、ソークラテースの新に浴して、紐靴を穿てるに逢ふ。元來ソークラテースが紐靴を穿つは通常の事の非ざるより、其晴れ着を着て何處に行かんとせるやを問へり。

ソークラテース答へて曰く、アガトーンの宴會に行かんとするなり、實は昨日招待されしと雖、此日は來會者餘りに多數ならんことを恐れて今日行くことを約せり、余の清装せるは、アガトーンは奇麗を好む人なればなり。君は招待されずとも余と共に行かざるか。

余答へて曰く、君若し招待せば、余も亦同伴すべし。

彼れ曰く、然らば共に行きて

「劣れるものゝ宴會には、招かれずして善人至る」

この格言を消滅に歸せしめ、吾等の格言を此く爲さん、曰く

「善人の宴會には、招かずして善人至る」

と、而して此格言の變更はホメーロス自身之れを爲せる者にして、ホメーロスは單に文字上に之を變更せしのみならず、此前者の格言を攻撃せり。何となれば、彼れ、アガテムノーンを描きて人間中最も勇敢なる人

ホメーロス自ら自己の規則を破る

となし、痿弱なる心情のメネラオスをして、招かれずしてアガ멤ノン
の犠牲を供する宴會に至らしめたり、之れ優れる者が劣れる者に至るに
非ずして、劣れるものが優れる者の宴會に至りしものなり。

アリストデモス曰く、ソークラテースよ、余は寧ろ劣れる者にして、ホ
メロース中のメネラオスの如く、

「招かれずして智者の宴會に至る」

ものたることを恐る。されども余は君に招かれたり、君は吾等

「兩人共に連れ立ち行く」

の辭柄を作らざる可からずと。彼れ、ホメーロスの口調にて途々兩人中
の何れか其辭柄を考案すべしと答へたり。

之れ兩人對話の情狀にして、吾等此く談話しつゝ行けり。然るに突然
ソークラテースは、宛も喪心したるものゝ如くに立止まり、其を待ち居た
るアリストデモスの、自己よりも先きに至らんことを求めたり。アリ
ストデモス、アガトーンの家に至るや、門戸は廣く開きありて一の滑稽
事件は起りたり。家僕出で來りて宴席に案内せり、而して酒宴は今や始

アガトーン、ア
リストデーモス
を歓迎し、ソ
ークラテースは如
何にせしやを問
ふ

まらんとし、衆客身を横たへつゝありき。アガトーン、アリストデーモス
を見るや否や、之れを歓迎して曰く、願くは君も吾等と晚餐を共にせよ。
君若し他の用務の爲めに來りしとせば、此は之れを他日に譲りて吾等の
一人に加はれ。實は、余は昨日君に會はんと欲し、若し會ひしならんには、
今日君を招待せんと思ひ居たり、善くこそ來れ。されどもソークラテ
ースは如何にせしぞ。

余は四周を見廻はせしに、ソークラテースは在らざるなり。因つて余
は今までソークラテースと共にありて、ソークラテースの勧めに由つて
來りしことを告げたり。

アガトーン曰く、君の來りしことは余の歡ぶ所なり。されどもソーク
ラテース彼れ自身は何處にありや。

アリストデーモス曰く、今しも余の此處に入り來りし時、ソークラテ
ースは余の後ろにありき。彼れ如何なりしならん、余考へ能はざるなり。

アガトーン曰く、子供等よ、行きてソークラテースを見出して連れ來れ。
アリストデーモスよ、暫くエリュキシマッホスの側に坐せ。

此くて家僕は彼れの足を洗ふを助け、而して彼れ横はりて坐に就きたるに、他の家僕來りて、我友ソークラテースは隣家の玄關に入り込めるを告げ、且つ曰く、「彼れ彼處に佇立せり。余は彼を呼びたれども、彼れ動きだに爲さざるなり」と。

アガトーン曰く、奇なるかな。汝今一度至りて彼を呼び來れ。

アリストデモス曰く、ソークラテースは、願くは其儘に爲し置け、彼れ時々此事ありて、理由なくして彼れの自心を喪失し、何處なりとも立止まるの習慣あり。妨げずして放任せよ、やがて彼れ自ら來るべし。

アガトーンの丁
重なる歡待

アガトーン曰く、君の説然らんには、君の言に従つて放任せん。と云ひつゝ家僕等に謂うて曰く、「ソークラテース來らずとも、吾等は待たずして食事せん。何人も汝等に命令する者あらざれば、汝等其好じとする所に従つて配列せよ。余は是れまで汝等に一任したることあらざりしが、今日は汝等は我等を接待する主人にして、余及び吾朋友は、皆な汝の賓客なりと思ひ、最も好く吾等を歡待せよ、さらば汝等に褒賞せん」と。是より食事は生まれり。食事中、アガトーン、數々ソークラテースを招び來らんと

ソークラテース
入り來り、アガ
トーンと挨拶す

ソークラテース、
アガトーン
を稱賛す

の意志を表はせりと雖、アリストテームス之を制止せり。ソークラテースの發作は例として餘り長時間のものに非ざりしが、食事殆ど其半ばを終りし頃、入り來れり。アガトーン一人食臺の端に身を横へつゝありしが、ソークラテースに乞ふに、自己の側に坐せんことを以つてして曰く、「余は君に接觸し、以つて君が隣家の玄關に於て、君の心中に來り、今は君の有となりし所の知慧の思想の利益を得んことを欲す。何となれば君は求むる所は、之を得ざる以上は、決して其所を去りて、此處に來らざる可ければなり」と。

ソークラテース、アガトーンの願ひし如く其席に就きて謂うて曰く、余は接觸の媒介に由つて、充滿せる者より、空虚のものに智慧を注入すること、宛も毛布を以て充滿せる水器より其れを吸ひ取りて、之れを空虚の水器に充たすが如くなすことを得るは、其最も願ふ所にして、若し此くの如きこと有り得とせば、余が君の側に坐することを得るの特權は、甚だ貴重なりと謂ふべきなり。何となれば、君は、豊富にして美麗なる智慧の泉の流れを以て余を充たすべければなり。然るに余の智慧なるものは、之れ

を君に比較するに、實に下等にして甚だ疑はしきものたるのみならず、夢にだも若かざる種類のものたるのみ。之に反して君の智慧は實に光輝赫々として、將に是より愈々旺盛ならんとするものにして、一昨日の如きは、君は青年の壯大なる偉觀を以つて三萬以上の大衆のグレシア人の前に立つて之れを發表したりしなり。

アガトーン曰く、ソークラテースよ、君は人を擲擄せるなり。暫時にして、君と余と、何れか智慧の勝利の棕櫚を取り去るものなるやを決定すべく、デオニュソスの神其審判者たるべし。されども先づ君は食事すべきなり。

ソークラテース其坐に就けり。食事も終り、灌酒禮も行はれ、讚美歌も歌はれ、慣例の儀式も執行され、將に酒宴に移らんとせざる時、パウサニアス發言して曰く、友人諸君、吾等は如何にせば、飲酒して最も害の少きことを得べきぞ。余は昨日の競飲の結果を感じて酷しく苦しめる者なるを以つて、今や寧ろ快復するの時を得んとを望む。意ふに、諸君の内の多數は、亦昨日其仲間なりしを以つて、又た同一の状態に在るべきなり。然らば

パウサニアス今日
の宴會は大飲
することなから
んことを欲する
旨を述べ

諸君思考せよ——如何にせば最も輕易に飲酒するを得べきやを。

アリストフアネース曰く、余は全然同意なり。如何にもして、吾等は強飲を避けんことを欲す。何となれば余は昨日飲み潰れたる一人たればなり。

アクメノスの子なるエリュキシマツホスも亦曰く、君の言や大に善し、吾等互に談話することとなしては如何ん、アガトーンは尙ほ強飲することを得るか。

アガトーン曰く、余は大飲すること能はざるなり。

エリュキシマツホス曰く、頭の弱き我が如きを始めとし、アリストデーモス、ファイドロス、其他飲酒し能はざる者は、大酒家が飲酒せざるを見ることを以つて幸福なりと感ず、ソークラテースは全く別物なり、彼れ、飲酒するとも、又た飲酒せざることも之れを能くせばなり、而して人々今日は多くは飲酒することを欲せざるより、余は醫師として此く言ふことを行むるなくんば、幸なり。實に飲酒は宜しからざる習慣にして、若し能ふ可くんば、余は決して此くの如き習慣に従はざるべく、又た決して他に之れを勧め

醫師エリュキシマツホス大酒の害を語る

ソークラテースは大酒小酒、何れも之れを能くす

今日の宴會は酒
は隨意となし、
飲まんとする者
は飲むこととな
す

藝妓も之れを不
用となす

ざるべし。殊に昨日の大酒の結果を感ずる人に於ては然り。

ミユリヌシア區のフアイドロス、及び其他の人々同意して曰く、余は常に君の忠告に従ひ、殊に君が醫師として命じたる所は之れを守るべし。苟も智ある人は皆な此くの如く爲すならん。

人々皆飲酒は今日の規定外となし、たゞ飲まんと欲する者のみ飲酒すること一致せり。

此に於てエリキシマツホス曰く、然らば飲酒すること、飲酒せざることは、人々の隨意となし、敢て強ふることなきに一致したれば、次に余の勸議とする所は、今しも入り來りし吹笛妓は此席より去らしめて彼等自ら笛吹きて樂しむか、或は奥なる婦女子に其を聽かしむることとなし、之れに代ふるに吾等互に談話することとなしては如何ん、諸君若し同意ならんには如何なる種類の談話を爲さんかを余は言はんと。一同此提議に同意せしかば、エリキシマツホス次の如く語りて曰く――

彼れ曰く、余はエウリビデース中のメラニッペーの

「此言は我れの言に非ず」

エリユキシマツ
ホス、詩人等が
愛の神の讚美歌
を作らざること
を慨歎す

この態度を以て始めん。余の語らんとせる所は實にフアイドロスの言たるなり。彼れ常に愁訴すらく「エリユキシマツホスよ、他の多くの神々は皆な多くの詩人の頌徳詩或は讚美歌を有せりと雖、かの大なる、光榮ある神なる「愛」は、此くも多くの詩人中、一人の頌美する者だになきは實に不思議と云ふべきなり。又た多くの有名なるソフイスト中例へばプローヂコスの如きは、散文もてヘーラクレーヌ及び其他の英雄の功績を頌美せるあり、且つ余の意外に感ずるは、某哲學書中には滔々數千言、鹽の功用を述べて雄辯なる論文の題となせるを見る。其他此くの如き事物に對しては、同じく非常の頌美を呈し、以て至大の興味此に存すと思惟したるものならざる可からず。然りと雖、今日に至るまで、フアイドロスの明言せるが如く、「愛」の讚美歌を作りし者は未だ一人だに之れあらざるなり」と。實に此大なる神は全然人々に看過されあるなり。而してフアイドロスの此く言へるは眞に正常なることにして、余はフアイドロスの此思想に寄進する所あらんと欲し、又た吾等一同が此くの如きの時に於て、「愛」の神を頌美する以上の善きことはあらざるべしと信ず。諸君若し余の言に同意ならんに

愛の神の讚美の
演説を爲すこと
とむす

人々賛成す

は、談話の材料に於ては不足なることあらざるべし、何となれば吾等一同左より右に順次に「愛」の榮光を頌美する談話を爲すべければなり。而して吾等各自能ふ限りの談話を爲さん、されども左側の第一席に在る「フィドロス」は此思想の父なれば、請ふ彼れより始めんことを。

ソークラテース曰く、エリュキシマッホスよ、何人も異存なきが如し。余は自ら何事も知る所なしと雖、只だ聊か知れりと公言し得る所の愛の問題に就いて談話するは敢へて異議あることなく、又たアガトーン及びパウサニアスも必ず同意なるべし。アリストファニス^テは專念テオニユッス及びアフロデテ^イを事とせる人なれば、其の同意なるや疑ふべくもあらず、余の左右の人、一人として反對するものあらざるが如し。余に於ては、最終の席にあるを以て、談話甚だ困難なるを知ると雖、若し始めに善良なる談話を聽くことを得ば、最後に談話する困難の如きは何かあらん。フィドロス先づ「愛」の讚美を始めよ、そは彼に取つては僥倖たるなりと。一同ソークラテースに同意し、フィドロスの語り始めんことを求めたり。アリストデーモス^スは其談話を記憶せず、又た余も彼の語りし所を

盡く記憶せずと雖、余は最も記憶に價値ある所のもの、及び主要なる人物の演説を君に語り聽かすべし。

フアイドロス「愛」の偉大なる神にして、諸神及び人間中最も驚くべく、特に其誕生の驚くべきことを確言しつゝ語り始めたり。實に「愛」は諸神の最長者にして、其名譽は彼のものたるべし。其證たるや、愛の兩親に就ては一の記録だにあるなく、詩人も散文家も一人として「愛」に父母あるを謂へるものなし、ヘシオドスの謂へるが如く、

「太初に混沌生じ、次に胸廣き地生ず。

之れ凡て存在せるものゝ永久の坐たるなり。

而して次に「愛」生ず」

と。他語以て之れを言はゞ、混沌の次に「地」と「愛」との此兩者生じたるなり。バルメニデーヌ亦諸神の生誕を歌ひて曰く――

「一切諸神の第一に、彼れ「愛」を形成せり」

と。アクシラオスも亦ヘシオドスと同一意見を有せり。此くて多くの人々は愛は諸神中の最年長者なるを認め居るなり。而して彼れ單に年

愛はよく人に徳
義の念を扶植す

愛者及び愛人を
以つて組織せる
國家及び軍隊の
有力なること

長者なるのみに非ずして、又た吾等にとつて最大利益の源泉たるなり。何となれば、今や生活を始めんとせる所の青年にとつては、有徳なる愛者より善きはなく、又た愛者にとつては愛人より善きはなかるべければなり。人苟も高尚なる生活を爲さんとするに當り、其嚮導者となすべき方は、則を固く吾等に扶植する所のものは、余は云はん、親戚も、名譽も、富有も、或は其他の動機も、決して愛に優らざるなりと。余の言はんとする所は、果して何事ぞ。曰く名譽不名譽の感なり、此感なき時は、國家も個人も決して善良偉大の事業を成すこと能はざるなり。余は言はん、若し愛者にして不名譽なる行爲をなし、又たは人の己れに不名譽を加ふるに當つて、卑怯にも其れに降伏するが如きこと、この看破さるゝ時は、其父、其友、或は其他の人に由つて看破さるゝよりも、其愛人に看破さるゝは、一層の苦痛を感ずるものたるなり。又た愛人たる者も、或不名譽なる位置に在るを見らるゝ時は、其愛者に對するや、又た同一の感あるなり。若し一種の國家或は軍隊を組織するを得べき方法あらんには、愛者及び愛人を以て之れを組織すべし。然らば彼等一切不名譽の事を避け、互に名譽を競ひ、以て自

己の都市の善良なる政治を爲すべきなり。而して一旦事あるに當ては、愛者愛人相携へて敵と戦はゞ、假令兵數少しと雖、其名譽上の勇氣は、以て萬人に敵することを得べし。何となれば愛者なるものは、自己の守るべき所を守らず、或は武器を棄てゝ遁るゝを萬人に見らるゝことも、愛人一人に之れを見らるゝを好まず、其卑怯なる所行を愛人に見らるゝの苦痛よりも、寧ろ彼れ幾千度なりとも死するを擇ぶべければなり。何人か危急に際して其愛人を棄つる者あらん。此くの如き場合に於ては、極めて卑怯の者と雖、感奮せる英雄となり、最も勇敢なる人と同等となるべし。「愛」は能く人を感激せしむ。ホメーロスの言へるが如く、神は其勇氣を英雄の胸中に鼓吹し、又た其愛を愛者に吹き込むなり。

「愛」は人をして其戀人の爲めに死することを爲さしむ——たと愛のみ之れを能くす。之れ男女に通じて然り。此事に就いてペリアスの女なるアルケースチスは實に全グレシアの記念碑なり。アルケースチスは其夫の爲めに貞操を盡くしたる者にして、夫は父あり母ありと雖何人も彼れの爲めに盡くさんとする者なき時に、彼女夫の爲めに、身命を損するも

愛はよく其愛する者の爲めに人を死せしむ

アルケースチスの貞操

敢て恐れざりしなり。夫は父も母も之れなきに非ずと雖、彼女の愛は彼等に優り、彼等は其子に對して血族上宛然他人の如く、たゞ其親縁の名稱あるに止まるが如きの感あり。彼女此く貞烈なる行爲を以て神人を感動せしめたり。其高尚なる行爲たるや、多數の有徳なる行爲を爲せし人の内にも最も稀なる所にして、神は彼女の高尚なる行爲を稱美して彼女に許るすに、活きて此地に歸ることを得るの特權を以つてせり。此く秀絶なる榮譽は、貞操と愛情の徳とに對して與へられたり。然るに之に反してオイアグロスの子にして立琴の名人たるオルフェウスは、諸神は空しく彼れを立ち歸らしめ、たゞ僅かに、其慕ひ求むる所の戀人の幻影を見せしめしのみにして、諸神は決して彼女其ものは之れに會はしめざりしなり。之れオルフェウスは其誠心を表はさざりしを以つてなり。オルフェウスは單に一個の立琴の伶人たるのみにして、アルケースチスの如く、其愛の爲めに死することを欲せず、生きながら、黄泉に降りて其戀人に逢はんを考案したりしなり。之れを以つて諸神は其卑怯の罰として、此後オルフェウスをして婦女子の手に死せしめたり。大に之れと異なるはアピレ

オルフェウスの
誠心なき罰

ウスが其愛者パトロクロスに對する真正なる愛情の報の高尙なるとと
なす—彼れ己を愛する者の爲めに死せしなり、己の愛する者の爲に非ず。
（パトロクロスはアヒレウスの愛人なりとなすは誤謬なり、アイヌヒュロス
此の誤謬に陥れり。何となればアヒレウスはパトロクロスよりも美麗
なるのみに非ず、其他の諸英雄よりも美麗にして、又た其年齢も若く、ホメ
ーロスの言へるが如く、鬚髯あざりしなり）。而して諸神は大に愛の徳
を頌贊し、又た愛されたる者が、愛する者に其愛を報ゆるは又た一層に頌
贊し、價値あることとなし、報ひを與ふる所のものたるなり。何となれば
愛者は、インスピレーションを受けたるものにして、一層神聖なるものなれば
なり。アヒレウス若しヘクトールを殺さんとするの心を抑損せば、よく
自己の死を遁れて、家に歸り安樂に老年に至ることを得ることば、母の教へ
たる所に由りて素より其知れる所たるなり。然りと雖彼れ其親友の爲
めの復讐に生命を無きものとなし、彼れ自身の防禦の爲め、及び其死後の
爲めに敢て死せり。之れを以て諸神はアルケースチスよりも彼れを尊
敬し、死後彼を幸福島に送りたり。其他尙ほ、愛は諸神中の最長年者たり、

パウサニアスの
演説

愛に二種あり一
は精神的、他は
普通のものなり

至高のものたり、最大勢力のものたり、又た現世の徳義及び、死後の幸福の
主要なる創造者たり、賦與者たりとするの證據少なからざるなり。

此くの如き、或は大要此くの如きはフアイドロスの演説なりき。而して
次に數多の演説ありしと雖、アリストデーモスは之れを記憶せざりき。
次に彼れの語りし所はパウサニアスの演説なり。彼れフアイドロスの言
は、愛に區別を立てざるものなり、此く混同して愛は讚美すべからずとな
し、若し、愛なるものは天下唯た一のみならんには、フアイドロスの言或は正
しからんと雖、愛は一以上あるに於ては其内の何れは吾等の讚美すべき
ものなるかは、先づ之れを決定せざる可からざるなり。而して余はフアイ
ドロスの此缺點を補ふべしとて謂うて曰く、先づ余は、如何なる愛が頌
美さるべき價値あるやを言ひ、而して其頌美すべきものは神に相應はし
き方法を以て之れを讚美することを力めん。吾等皆な、愛はアフロヂテ
ーと分離せしむ可からざるを知る、故に若し一アフロヂテーのみなりと
せば、愛も亦一たるべしと雖、二の女神ありとせば、愛亦二あらざる可から
ざるべし。余が二女神ありと言ふは或は正しからざるか。其女神の年

長者の方は母なく、ウラノスの女にして天のアフロヂテーと謂ふ、年若き方はゼウス及びヂオーチーの女にして、吾等の普通に所謂アフロヂテーなり。此くて此女神と與なる愛は、又た他の天の愛に對して普通の愛と稱す。而して一切の諸神は皆な其讚美歌を有すべきなりと雖、其神々の性質に由つて讚美に差異なき能はず。故に吾等先づ兩愛の性格を區別することを要す。元來行爲なるものは其之れを成すの方法に従つて、異なるものなり。例へば吾等の今此く行爲し、飲酒し、謠歌し、談話する等、是等の行爲其物は善に非ず又た惡にも非ずと雖、若し其是等を爲す所の方法に差異を生じ、善く之れを爲さば善となり、惡しく之れを爲さば惡となるが如く、愛とし謂はゞ盡く之れを頌讚すべきに非ずして、たゞ高尚なる目的を有する、愛のみ高尚にして讚美するの價值あるなり。然りと雖普通のアフロヂテーの子なる愛は素より普通のものにして何の區別あらざることなく、男子も女子も青年も同じく感ずる下等なる種類のものにして、精神よりも肉體に屬するものなり。而して最も愚昧なる者は、此愛の目的物にして、此愛はたゞ其目的を達することのみを事とすと雖、高尚に其目

高尚なる愛は男
性のみにして神
性の「インスピ
レーション」あ
りて誰又た濫用
さるることあり

的を達せんことに思ひ至らざるなり。之れを以て善惡混じて之れを行ふ。此愛の母は一方の愛の母よりは遙かに年若く、男性女性の一致より生れたるものにして、又た兩性の分子を有せり。されども天のアフロデテーの子は、女性の分子なく——たゞ男性のみより生れたる所の母より生れたるを以て、其愛や青年のみを愛するものなり、而して此女神は年齢長せるを以て、放恣の事あらざるなり。此愛に由つて感動さるゝものは、心は男性に向ひ、益々勇壯、伶俐の性を好み、其愛着の性質中、純潔なる熱誠を認むることを得べし。故に人々小兒は之れを愛せずして、伶俐の青年の其理性の發達を始め、又た漸く鬚毛の生せんとする頃の者を愛す。此くの如き青年を友とするは、彼等に忠實を盡くし、一生を彼等と共に送り、彼等と共に居り、彼等の無經驗に乗じて之れを欺き、或は彼等と共に痴事を行ひ、或は彼等の一方を他に見代ふる如きことを爲さざらんとするにあり。されども年少小兒を愛するは法律に由つて禁せざる可からず、之れ其將來、未だ確定せず、精神も身體も、共に、或は善となり、或は惡となり、彼等に盡くしたる高尚なる熱心も、或は全く徒勞に歸することあるべければなり。

男子間の戀愛は
グレシヤ諸州に
於て其趣を異に
す

此點に關しては、善を以て彼等自身の法則となし、戀愛者の粗暴なる徒は強力に由つて之れを制すること、恰も彼等が自由公民の婦女子に愛情を確定するを禁制するが如くせざる可からざるなり。何となれば物の濫用は正常なる使用にも、不信用を來すものにして、此の種の愛情に不正當に且つ不良なるものある時は、人をして愛の正常なるものなることを否認するに至らしむるものなればなり。されども禮儀を正しくし、法則に従つて行ひたる愛情に對しては、一人として之れを惡言するものあらざるなり。當今多くの都市に於ける愛の法則は極めて簡單にして、容易に了解さるべきものなりと雖、當市及びブラケダイモーンの法則は甚だ複雑を極む—エリス及びポイオーテアに在つては、人々雄辯の天賦なく直情徑行の性にして、一般の人情は、たゞ此種の結合を愛し、老ひたるも若きも一人として此種の愛情に不信用を唱ふる者なし。其理由たるや、是等の地方の人々は、甚だ寡言の性なるを以つて、愛者等は訴訟上の辯論等を以つて煩となし、之れを好まざるに由るものゝ如し。されどもイオーニア及び其他一般野蠻人に從屬せる地方に在つては、青年間の愛情は、專制に

敵たるものとなし、哲學及び體操術も之れと共に不評判を被り居るなり、何となれば治者の求むる所は、其被治者たるものゝ精神柔順にして、人々の間に友情及び社會團結の強固なる結繩存せざることを欲せばなり。殊に愛情は他の種々の動機中、最も人々の團結の情を鼓吹すること、吾がアテライナイの専制政治家が、其實驗に由つて學びたるが如きものなればなり。之れアリストゲイトの愛及びハルモデオスの貞烈は、以て能く彼等専制王の權力も亦如何んともすべからざらしめたるを視ても知るべし。而して此種の愛着の不評判を被るに至りしは、之れを不評判なるに至らしめたる人々の事情に由るものにして、換言せば、治者たる者が自ら求めて、此に至らしめたるを、被治者たるものゝ、臆病とにより、此の結果を生じたるに由る。然るに一方、或諸國に於て、無差別なる名譽を彼等に與ふるは、彼等に對する此意見を有する者の怠慢なるに歸せざる可からざるなり。吾國にては遙かに善良なる法則ありて行はれ居ると雖、其説明は余の言へるが如く複雑の嫌なきに非ざるなり。吾等の注意すべきことは公然の愛は秘密の愛よりも一層名譽にして、又たたさひ其愛人の

習慣は、戀愛者が
利便の事を爲す
ことを計るす

容貌は他に比する時は、或は多少劣ることありとするも、高尚にして位置
高き者の愛は、殊に名譽とせらるることなり。吾等又た此事を思はざる
べからず、即ち、世間一般が如何に大に愛者を奨勵せるやと云ふこと之れ
なり。彼れ愛者は、人々より決して不名譽なることを爲しつゝありと想
像さるゝことあらざるなり。されども彼れ若し成功せば稱讚せられ、失
敗せば耻を受く。而して愛者其愛を得んとするに當り、人々、彼れが種々
異常の行を爲すとも咎むることなし。されども若し之れ利害の心より
或は官職を希ふより、或は權勢を得ん等の心より爲すに於ては、哲學は酷
しく之れに反對するものなり。彼れ祈願し、懇請し、哀願し、起誓し、又た如
何なる奴僕よりも一屑の奴僕たるを堪受し、或は粗席の上又は戸板の上
に寝ぬることも之れをなさん——素より其他の場合に在つては、朋友も敵
人と同じく共に彼を妨ぐることあるべしと雖、此愛情に關したる場合に
於ては、朋友は毫も之れを以て彼を耻とするが如きことなく、又た之れを
咎め諫むることもなく、其敵人も彼を以て卑しとなさず、又た阿諛せりな
ごとと云ふことなし。愛者の行爲は其内優美なるもの有りて、以て其の行

爲を高尙ならしむ。而して一般の習慣も大に此等の行爲を稱美して、決して、其人格を喪ふものに非すとせり。且つ是等凡ての内、其最も奇とすべきは、たゞ愛者のみ、能く誓ひ、又た自ら破誓することを得（とは人々の謂ふ所なり）而して神も彼れの罪を免すべし、何となれば、愛者の誓なるものあらざればなり。此くの如きは吾等の地方に行はるゝ所の習慣に出つて、神も人も共に愛者に許容したる全自由たるなり。故に今ま此點より觀察する時は、人或は云はん、曰く、此アテーナイ市に於ては、愛すること及び愛さるゝことは甚た名譽なることなりと。然りと雖も、兩親は其子の、愛者と談話することを禁じ、之れを師傅の監督の下に在らしめ、師傅は是等の事を監視し、其同輩朋友等は、若し此くの如き事を見る時は、自ら之れを戒め、其長上たるものも亦彼等を咎むる者を黙せしめず、又た之れを鎮むることを爲さざる時は、凡て是等の事に就いて考ふる者は、皆な必ず前の場合に反して、愛を以て不名譽の事となすべし。然りと雖余が始めに言ひたる如く、此は是れ名譽とすべきものなるか、將た名譽とすべからざるものなるかは、意ふに、決して簡單なる問題に非ずして、其の之れを高潔

高尚なる愛は魂の愛にして、
身體の美、金錢、
權勢等に非ず

不名譽の愛

に實行せる者に在つては此事名譽のものなりと雖、其の之れを不名譽に實行せる者に在つては、不名譽のものたるべしと云ふにあり。其醜惡或は醜惡なる方法に従ふ時は、素より不名譽なりと雖、善或は名譽なる方法に依る時は名譽たるなり。彼の世俗の愛者が精神よりも肉體を愛するは、之れ醜惡にして、彼れ堅固貞操なるとなし、何となれば不定なる肉體を愛すればなり。彼れの如きはたゞ青年の花をのみ求むる者にして、若し其青年の花の凋むに當つては、彼れは翼を伸ばして此青年より飛び去り、以前の約束も誓言も、全く之れを水泡に歸せしむべし。然るに高尚なる精神の愛は、之れ不變なるものごととなり、其愛や又た永久なるべし。吾國の習慣は、能く是等兩者の性質を明かにし、吾等をして、一を取りて他を避くることを爲さしめ、種々の試練と競争とに由つて、愛者及び愛人は、果して何れの種類に屬せるやを明かにせんさせり。之れを以て、第一、輕忽の愛情は以て不名譽となす、何となれば時日は諸事物の試験を爲すものたるが如く、又た愛情の試験をもなすものなればなり。次に又たかの金錢、財産或は政權に戀々して之れを得んとして其以上に超然たること能

はざるか、或は之れを失はんことを恐れて戦々競々たるが如きは、吾等の以て不名譽と爲す所たるなり。實に此等は永久に續づくべきものに非ず、又た真正の寛大なる友情なるものは、決して是等より發生するものに非ざればなり。而して此に名譽なる愛情の一方法殘れり、之れ習慣が愛人に許るす所のものにして、之れ實に徳義に進む方法たるなり。何となれば、愛者が愛人に盡くす所の謹勞は、決して之れを阿諛或は不名譽と云ふべからず、又た愛人たる者も、愛者に對して不名譽ならざる任意の謹勞を爲すの一法ありて、之れ徳義の謹勞たることは吾等の許容する所たればなり。

吾等習慣あり、而して何人と雖其慣習に従ひて、能く他人の知識或は其他特殊の徳義を進歩せしめんと、の觀念を以て他人に盡くすことは——余は云ふ、此くの如き任意の謹勞は、決して不名譽と云ふべからず、又た人々決して阿諛と稱することあらざるべし。此くて青年の愛と、哲學及び一般徳義の實行なる此二個の慣習は、一致和合して、愛人は名譽を以つて愛者を樂しむことを得べし。若し愛者愛人相一致し、各々其法則を有し、

愛は互に盡くす
ことあり、而し
て哲學の實行は
之れに合して一
たるべし

愛者は彼れの能ふ限に於て、其愛人に愛を盡くすを正理なりと信じ、愛人は彼れの能ふ限に於て、自己を賢にし、又た善良ならしめんとする其人に慰懃を盡くすを正理なりとし、此くて一方は智慧と徳義とを教へ、又た他の一方は自己の教育と智慧とを目的となして之れを求め、以て兩者共に各兩者の愛の法則を完うして相一致する時は——茲に始めて愛人は名譽を以て愛者に従ふべきなり。若し此くの如き純潔なる意志より出づるものならんには、たとひ欺かるゝことありとも耻に非ず、若し夫れ然らざるに於ては、欺かるゝも欺かれざるも、同じく共に不名譽なりとす。今若し己れを愛する者は富有なりとの思想を以つて、之れに鄭重を盡くすこと雖、一旦貧窮に陥るに及びて、獲る所なきに失望するが如きは、其の耻づべきや一なり。何となれば、之れ金錢の爲めに、自己は、何人になりとも、其下等なる用を爲すものたらんことを示めすものにして、決して名譽とすべきことに非ざるなり。而して同様の精神を以て、己れを愛する者は善人なるより、一身を彼れに委ねて、此人を友とし、以て自己の進歩を希望する者は、愛者の愛情の目的は或は下等なる者と變じ、徳義に缺如する者と化

アリストファネス
イリス逆を發し
エリユキシマッ
ホス代つて演説
するこどもなす

するとあり、又た欺かれたりとするも、尙ほ之れ高尚なる過失を行ひたる者と謂ふべきなり。何となれば、彼に在つては、徳義の爲め及び進歩の爲めとし謂はど、何人になりとも又た何事なりとも、之れを爲すことを證明したるものにて、之れに優らん高尚なる事有らざればなり。此くの如く凡ての場合に於て高尚なるは、徳義の爲めに人々の喜ぶ所たるなり。此愛や之れ天の女神の愛にして、神聖なり、能く愛者及び愛人をして、自己の知徳を進歩せしむる事業に誠實ならしめ、一個人及び諸都市に大なる利益を與ふるものなり。然るに此他の愛は普通の愛の女神の産する所たるなり。ファイドロスよ、余は此の愛の讚美の寄進を君に呈す。之れ余が咄嗟の場合に最も善く爲し得たる所なりとす。

パウサニアス、語り終えたり——之れ余が智者より教へられたる語り様なり。而してアリストデーモスは、次順はアリストファネスなることを言へり。されどもアリストファネースは多食せしに由るか、或は又た他の原因に由るか、咳逆を發して止まざりしかば、順序を變更して、次席の床上に横はり居る醫師なるエリユキシマッホスに請ふに、代りて演説せんことを

以つてして曰く、エリュキシマッホスよ、君は余の咳逆を止むるか、或は余の咳逆の止む時まで、代つて演説せざる可からずと。

エリュキシマッホス曰く、余は其兩方共に之れを爲すべし。余は君に代つて演説すべければ、君は余の順次に演説せよ。余の演説する前に、大畧咳逆を止むるの法を教へんに、先づ試みに暫時呼吸を停止すべし。若し之れを以てして効なくば、少量の水を以て含嗽すべし、咳逆尙ほ息まざる時は、小き物を以て君の鼻をくすぐりて噴鼻すべし、噴鼻すること一兩度ならんには、如何なる頑固の咳逆と雖、必ず止むことは余の保證する所なり。余は然らば君に代つて演説すべし、君、余の順次に演説せよと。アリストファチース曰く、余は處方を守りて行ふべし、然らば願くは演説し始めよ。

エリュキシマッホス次の如く語りて曰く、パウサニアスの演説の始は甚だ見事なりしが、終りや跋なりと謂ふべし。故に余は其不足を補はんぞす。余思ふに、パウサニアスが愛を區別して二種ありとしたりは、正常なるが如し。余の専門たる醫術の尙ほ余に教ふる所に由れば、此二種の愛は、單に人間の精神が美に對し、或は其他諸物に對して之れ有るのみに非ずし

エリュキシマッ
ホスの演説

醫術は身體の二
種の欲望の知識
なり

て、又た一切の動物にも植物にも發見さるゝ所にして、一切存在せる萬物殆ど通じて然るが如し。之れ余の醫術上の事實より集めて觀察したる所の結論にして、此愛の神の勢力の大にして驚くべく、又た普遍にして、其版圖たるや神たれ人間たれ、一切存在物に及べることを證するものなり。余は此事を醫學上より語りて、以て醫學の名譽となさんとするなり。實に人體には全く種類を異にせる二種の愛ありて、其種類を異にせるより又た其愛する所、欲望する所を異にし、一は健康を好み、他は疾病を好む。而してパウサニアスが今ま善人を好むとは名譽にして、惡人を愛することとは不名譽なりと云ひしが如く、身體に在つても善及び健康分子は之れを好み、惡分子及び欲望の分子は之れを好まず、之れを獎勵せざるなり。之れ凡て醫師の力むる所にして、醫術之れに由つて成立す。何となれば醫術なるものは、身體の愛する所、欲望する所、及び之れを満足せしめ、或は満足せしめざることの知識なればなり。而して名醫は善良なる愛と不良なる愛とを區別し、或は不良なる愛をして善良なる愛に變化せしむるものなり。若し彼れ精達せる者ならんには、不良なるものを根絶し、必要

調和論及び音樂論

なるものを扶植する方法を知り、或は能く敵對せる分子を人身中に調和して、以て是等を親密の友たらしむることを爲し得。其敵對せる甚きものは、最も相反せるものにして、寒熱、乾濕、甘苦等の如きものなり。而して吾祖先たるアスクレピーオスは、能く是等反對分子を調和して其間に友情を扶植するの方を知り、以て醫術の元祖となりしこと、吾等の朋友たる詩人等の吾等に語りし如きなり。余は之れを信ず、而して單に各科の醫術のみに非ずして、體術及び農業等も亦其範圍中のものなり。若し多少なりとも注意したる人は、音樂に於ても同じく兩反對の調和あることを知らん。ヘーラクレイトスの言、多少精密を缺けりと雖、其精神は又た是れに外ならざるなり、彼れ曰く「二」は不一致に由つて統一さるゝと宛かも弓とリラ琴との調和の如じと。されども調和なるものを以つて、不和なるもの或は尙は不和の状態に在る所の諸分子の構成する所なりとするが如きは道理に反せりとす。然るに今ま彼れの眞意を考ふるに、調和とは高調子及び低調子の異りたる音律が、前には一致せざりしものも、今や音樂の術に由つて調和されて生ずるものなりと謂ふにあるが

如し。何となれば若し高調子及び低調子にして尙ほ一致せざるに於ては、調和なるもの決してあり得可からざればなり——然り明かに此事有り得ざるなり。實に調和は和音なり、和音は一致なり、然りと雖若し彼等一致せざる時は、不一致の一致なるものは成立すること能はず、諸君は一致せざる所のものを調和すること能はざるべし。律亦此くの如く、短分子と長分子とより成立し、前には異りたるも、遂には和合する所のものなり。此和合たるや、前述醫術に於けると同じく音樂の扶植する所にして、高低長短の諸分子中より、愛と一致を生せしむるなり。此くの如く音樂は、又た、愛の諸原則を調和及び律に應用することを旨とするものなり。且つ調和及び律の抽象の原理に於ては、是等を辨別するに困難を感ぜざるなり、何となれば愛尙ほ未だ兩種の性質を有せざればなり。されども若し之れを作曲に、或は既に作曲されたるものゝ風格及び詩句を正格に演奏する如き、實際の生活に應用せんとするに於ては、こゝに困難生じ、熟達の樂師を要するなり。而して其後者は之れ教育と稱するものとなす。此に於いて美なる天の愛の古譚はこゝに繰り返へして話されざる可か

らざるなり、乃ち——美なる天のミューズたるウラニアの愛、節制なる人を稱するの義務、又た不節制なりと雖、尙ほ以つて節制たるを得る者、及び彼等の愛を保存すること等、又た之れに加ふるに野卑なるポリュミアは、能く之れを警戒して、快樂をして放蕩を生せしむることなき範圍に於て之を使用すること、恰も吾醫術に於て、美食家を以て其嗜好を満足せしめて、而も附隨して疾病の惡來ること勿らしむるは、名醫の熟練に由る、如き等を以つてせざる可からざるなり。之を要するに、音樂に於ても、醫術に於ても、其他人事神事に於ても、此兩種の愛の存せる以上は、成らん限り十分之れを注意せざる可からざるなり。

眞正の愛と虚偽の愛とは人間、動物及び氣候にも存す

時候の推移も亦兩原理に充つるものにして、余が云へる如く、寒熱、乾濕の諸分子相互に調和したる愛を得て、節制及び調和に融合せば、こゝに人間、動物及び植物に健康と豊富とを生じて是等に害を及ぼすことなし。然るに不良過度の愛にして、勢力を強め、以つて年の氣候に影響を及ぼす如きは、之れ甚だ有害にして、大なる破壊を爲し、又疫病の源泉となり、動物植物に種々の疾病を來たすものなり。又た霜害、雹害及び水旱等、之れ皆

な愛の是等の分子の過不及及び不調和より來るものなり。而して天體の運行及び時候の推移の知識は、之れを天文學と稱す。且つ一切の犠牲及び卜筮の一切の範圍は之れ神と人との間を感通せしむる術にして——是等は余は、たゞ善良なる愛の保存及び不良なる愛の治療を旨とするものなりと言ふ。實に一切の不敬虔は、人々其一切の行爲に於て、調和したる愛を承認して、之れを名譽とし、之れを尊敬することなくして、諸神に對し、父母に對し、或は生者に對し、死者に對して、其感情に於て他の「愛」を敬するより生ずるものなり。之を以て卜筮の事とする所は是等の愛を會得して、以つて之れを治療せしむるにあり。而して卜筮はたゞ人間の愛中に存在する所の宗教心、或は非宗教心の知識の作用に由つて諸神と人間との間の平和を計るものたるなり。此くの如きは實に愛一般に通せる大なる、有力なる、又た寧ろ全能の力なりとす。殊に善を以つて旨となし、節制及び正義と共に、諸神及び人間の間に行はるゝ所の愛は、至大なる力を有せるものにして、神と人と又た吾等人々の間の凡ての幸福、調和及び友情の源泉となり、能く吾等をして、天なる神と友ならしめ、又た吾等をし

て互に相親愛せしむ。此他余は愛の讚美に於て尙ほこゝに言ひ漏らしたる事少なからざるべし。されども之れ故意にしかなせしには非ざるなり。而してアリストファニスよ、然らば次に幸に余の省略したる所を補ふか、或は愛の頌讚の他の方針を取れ。君は今や咳逆も息みたるものの如し。

次順のアリストファニス曰く、然り、咳逆は漸く息みたり、されども鼻をくすぐるまでは息まざりしなり。余は、實に人間の調和なるものは此くの如き喧騒及びくすぐりを愛するものなるに驚かざるを得ざるなり、何となれば余はくすぐりを用ゆるや否や、咳逆直に息みたればなり。

エリュキシマツホス曰く、友なるアリストファニスよ、願くは注意せよ、君は演説を始めつゝありと雖、余に關して滑稽を試みんとするが如し。故に余は君の演説に注意し、君が平穩に演説し得る時に、尙ほ人を笑はすことなきやを監督すべし。

アリストファニス笑ひつゝ答へて曰く、君の言や正し。余の前言は、之れを言はざりしものと見做し、幸に餘りに余の言に注意すること勿れ。

アリストファネスの愛に就いて
他の趣のものを
語ることを約す

何となれば余の今ま爲さんとせる所の演説は、余の生來のミューズに適順し、甚だ好結果たるべく、而して人々も余と共に歡笑すべしと雖、若し餘りに注意さるゝ時は、余は好成績を得ずして、却つて人々に笑倒さるゝに至らんことを恐るればなり。

アリストファネスよ、君は一矢之れを發して遁れんとするか。君若し十分注意し、責任の感を以てせば余は君を放寬すべし。

アリストファネスは演説の他の脉絡を取り、パウサニアス及びエリュキシマッホスと趣を異にしたる方法を以て愛の讚美を始めんとせり。彼れ曰く、余思ふに人間なるものが、愛の神を粗畧にせるより推論する時は、人は毫も「愛」の力を了會せざるものと謂はざる可からず。若し人間にして愛の神を了會したらんには、必ずや高尚なる神殿、祭壇を建築し、其光榮の爲めに嚴肅なる犠牲を捧げしなるべし。然るに此事なし。此は必ず爲されざる可からざることとなす。何となれば愛の神は、諸神中人間の最良の友たり、又た補助者たり、而して人間幸福の大障礙たる疾病の治癒者たればなり。余は愛の神の力をこゝに語るべし、諸君は余の言ふ所は之

原始人間は男、
女及び兩性の三
性なりき

原始の人體は球
形にして四手四
足其他之れに準
じたり

れを反復して以て全世界に宣傳する所なかる可からざるなり。余は先
づ人間の性質を論じ、又た如何なる事變が人性に起りたるやを演べん、何
となれば原始の人間の性質は現今とは全く異なりたるものなればなり。
元來性なるものは現今は男女兩性なりと雖、原始人間に在つては三にし
て、男性、女性、及び男女合一の三性ありしなり。其兩性合一なるものは之
れに相當せる名稱ありて、眞に實在したりしものなりと雖、現今は此兩性
者斷絶して、たゞ其 * Ανδρογυνος Androgynos なる名稱は一種卑しむべきものとして殘
れるあるのみ。次に原人の身體は球形にして、胸背共に圓形を爲し、四手
四足ありて頭は一にして兩面を有し、反對の方向に向ひ圓形の頸上に在
つて兩面共に精密に同様なり。耳は四個あり、二個の陰部を有し、其他皆
な之れに準ず。彼若し歩行せんと欲せば、現今吾等の歩行するが如きを
得、又彼れ其四手四足總計八個に倚りて、大速力を以て足を上に逆立て、
車輪の如く回轉して進行するを得、之れ其急速に走るを要する時に爲
す所なり。又た、余が言ひし如く、人に三性あり、何となれば日、月及び地球
の三あればなり。而して男性は日の子なり、女性は地球の子なり、男、女は

日及び地球より成立せる所の月の子なればなり。此くて人は其の親の圓形なるが如く凡て圓形にして、又た其運動も圓形なり。其權力及び脅力は恐るべき強大なるものにして、其胸中に抱懐せる思想や亦甚だ大にして、諸神に攻撃を加へたり。其中オーチュス及びエフィアルテース等の如きは、ホメーロスの話に云へるが如く、實に天に昇り、手を諸神に加へんとしたりと云ふ。諸神等因つて會議を開き、以て其處分策を講究す。若し諸神にして、一度巨人等を滅ぼしたる如きの方法に由り、雷霆を以て一撃是等の人種を絶滅せしめんか、爰に從來人間が捧納し來りし犠牲及び禮拜なきに至らん。然りと雖又た一方に於て、諸神は人間の加ふる暴慢無禮を忍び能はざりしなり。終に考熟考してゼウス一法を案出せり。彼れ曰く「我此意見を有す、若し此くせば彼等人間をして其傲慢心を下し、又た其行動を改めしめ、以て尙ほ生存せしむるを得べきなり。其法たる、人間を兩斷半裁するにあり。然らば彼等力を減少し、其數を増加すべし。之れ彼等をして吾等の用たらしむるの良法なり。而して彼等二足に於て直立して歩行すべし。然るに尙ほ若し無禮を繼續して行ふに於ては、

ゼウス、人
類に於て
法を考案す

人間の兩脚

再ひ之れを兩分し、一足を以つて跳り歩むやうなすべしと。ゼウス此く言ひて人を兩分し、宛も吾等が鹽漬けにする菓實を兩分するが如く、毛髮を以つて卵を兩分するが如くして、一人づつ此く爲せり。而してアポローンに命じて顔面及び半頸の方面を轉せしめ、以て人をして自己の裁斷面を觀ることを得しむ。之れ人をして謙遜の心を生せしめんが爲めなり。アポローン又た命せられて人間の傷創を治療し、又た形態を作る。

此に於て彼れ顔面の方向を轉じ、切斷したる所の皮膚は之れを引き寄せ、吾等の所謂腹に於て、宛も囊の如くにして之れを緊收し、其中央に一孔を作る、之れを臍と云ふ。彼れ又た胸部を形成して多くの皺襞を去ること、宛も靴工が靴襪の上にて其皺を平にするが如くなせり。されども皺襞の少部分は之れを腹部及び臍部に殘し置き、以て原始の變化の紀念と爲せり。人間此く兩分せられて、一半互に他の一半を求めて相集まり、互に手を懸けて相抱き、以て一たらんことを熱望す。而して彼等半半、離れて何事をも爲すことを好まず、爲めに饑餓と怠惰とより將に死に垂とせり。又た若し一半死して他の一半生存する時は他の伴侶を求む、而して

中々互に相求む

爰は原始の全人に
反へらんとす
るの情

其伴侶たるや、全男或は全女の半切されたる所謂男子、或は女子、其何れなりとも、彼れ之れを求め抱く。されども事情此くの如くなる時は、之れ人類の絶滅を來すものなるを以て、大神ゼウス之れを憐れみ、一の新法を發明し生殖機を體の前側に廻はしたり。實に生殖機は始より前側にありしには非ざるなり。而して始めは人間の種子は、蠶斯の爲すが如く之れを地中に生み付けしと雖、今よりは此くの如くなさずして互の體内に生み付くることとなり。生殖機置き替への後、男子は女子中に生殖するやう成れり、之れ男女相抱擁して生殖するを得、以て人類の存在を繼續するを得んが爲めなり。又た若し男性にして男性と合體するを得たらんには、彼等満足し、休憩し、以て各々生活の途に進むことを爲す。吾等人間に扶植らある互に相求め、再び吾等の原性を一致し、二人一體となり、以て人間の状態を恢復せんとする欲望の古代のものなること此くの如し。吾等各人若し別々に存する時は、宛もこれ人の割符の如く、又た一面のみを有する平面魚の如きものにして、常に他の一半を求め居るなり。夫の兩性人即ち前に *Androgynos* と稱したる者の兩分せられて生じたる人は

男子も女子も其性質の異なるは原
始に感斷された
る所の人間の性
質如何より生ず

青年を愛するも
のほ高尙なる人
物にして之れ原
始の男子の分た
れたるものなり

性質多淫にして、多淫男子及び多淫多情の女子は通常此種子の人なり。かの女性の兩分より成れる女子は、男子を好まずして唯女子のみを愛す。女子を友とする者は此種の人なり。かの男性の兩分に由つて成れる男子は男子を好み、其若きときは男子を求め、男性の一半なるの故に、男子を抱擁す。而して其最も男子らしき性質を有するを以て、彼等は小兒及び青年として最も好良なるものなり。人或は此種の男子を謂うて無耻のものとなすと雖決して然らず、彼等此く爲すは、決して無耻なるに非ずして、其勇壯敢爲の性質を有し、勇壯なる容貌を有せるより、自然に其己れに似たるものを抱擁するなり。彼等若し成長せば、政治家たるべき者に似て、たゞ彼等のみ、眞に然るを得るなり。之れ余の言ふ所は、眞理なるの大なる證據となす。若し彼等成年に達せば、青年を愛し、決して自ら進みて婦人と婚し、子女の生産を爲すとなし。されども彼等の之れを爲すや、ただ法律の命に遵ふのみにして、若し結婚せずして生活するを得るとせば、彼等之れに満足せり。而して此くの如き性質の者は自然に愛を爲し、又た己を愛する者には其愛を返へし、常に己に似たるものを抱擁す。若し

戀愛者等最も強
く愛するも其何
故に然るを知ら
ず

彼等の内、其伴侶たる一半を發見し得る時は、其者或は青年の愛者ならんとも、又た其他の種類の愛者たらんとも、此一對は愛情、友情、及び親交の驚歎に恍惚として我を忘れ、一瞬時と雖、互に相離居することあらずして、其一生を相互の爲めに生活す。されども彼等相互に何を欲望して然るか、は、説明すること能はざるなり。其の彼等の熱中せる相思の情は、交接の欲望に非ずして、たゞ一種精神の欲望して、而も言以て言ふ可からず、精神中漠然たる愛あるのみ。今若しヘーファイストスの神其神器を持ちて、此兩人相並びて寝れる所に来り、彼等に向つて、「汝等人民互に何の要する所ぞ」と問はゞ、彼等之れを説明すること能はざるべし。尙ほ假定せんに、此神若し彼等の惑亂せるを見て謂うて曰く、「汝等全々一となり、夜となく晝となく同居することを望むか。之れ若し汝等の望む所ならんには、我れ直に汝等二人を融合して一となし、其生存中は、汝等宛も一人なるが如く共同の生活を爲し、死後他界に在つても、尙ほ一人の死したる靈魂の如くにし、決して二つたること勿らしめん。余は問はん、之れ汝等の愛好して願ふ所なるか、或は汝等之れを得て満足するか」と。此くの如き言を聞き

若し神に不従順なる時は又々二分さるべし（即ち始めよりせば四分さるとなり）

し時、兩人互に相擁して融合し、以て二人たるとなく全く一人たらんと願望は、實に其古代よりの願望なることを否み或は之を承認せざるもの一人だにあらざるべし。其理由たる、人性は原始に一にして、完全なりしに由るものにして、此完全なる一體とならんと欲望を吾人稱して愛と謂ふ。余は謂はん、古、二人の一體たりし時ありしと雖、今や人間の悪行に由つて、神は吾等を分割したること、アルカデア人等が、ラケダイモーン人に由つて、數多の村に分離せしめられたる如きなり。若し我等神に對して従順ならざらんには、神は又々我等を兩分すべく、吾等は浮彫の如くなり、紀念碑等に彫刻しある肖像の如く、たゞ鼻の半面のみを有するのみとなり、又た符契の一半の如きの姿となりて行歩せざる可からざるべし。故に吾等人々に勸めて神を敬し、惡を避け善を行ふことを力めざる可からず。之れを爲すには、愛は主君なり嚮導者なり。一人として此神に背反すること勿らしめよ、此神に背反するものは諸神の敵なり。若し吾等神の友となり、能く神と調和する時は、吾等此世界に於て稀有なる所の吾等の眞の愛を發見することを得べし。余は眞面目なり、故に願くばエリュ

愛は人を原始の
全人に回復する
ものなり

キシマッホスよ、余の言を嘲弄することなく、又た余の演説中の言語を取り出して、之れパウサニアス及びアガトーンに關して云へる所なり等の言を爲すこと勿れ。素よりパウザニアス及びアガトーンの兩人は余が今ま言ひしが如く男子らしき性質の人にして、其階級に屬せる者なりと信ず。されども余の演説したる所は應用甚だ廣くして、男女共に通じて之れを適用するを得るなり。且つ余は信ず、若し人皆完全に其愛を得、各人皆原始の人性に復歸して原始の真正なる愛を有することを得ば、吾等人類は幸福たるべしと。若し之れ一切の事物中の最も善なるものなりとせば、現在の事情に在つては、次に最も善きことは、此くの如き合一に最も近きものたるべく、同好性の親密なる愛を得ることは即ち之れなり。今若し吾等に利益を與ふる者を稱賛すとせば、吾等は神なる「愛」を讚美すること力をめざる可からず。何となれば、此の愛の神は、吾等の最大の恩人にして、現世に於て、吾等を導きて眞性に歸へらしめ、又た未來の爲めには、吾等に高尚なる希望を興へ、吾等若し敬神ならんには、愛の神は吾等を原始の状態に回復し、吾等を治療し、吾等を幸福ならしむることを吾等に約

アリストファチ
ース終る

したればなり。エリュキシマッホスよ、是れ余の愛に關する演説なり。或は君の言ふ所と異なることありとも、願くば君の嘲弄の弓矢を以て攻撃することなく、各人をして順次に其談話を爲すを得しめよ。各人と云ふと雖残れるはアガトーンとソークラテースとの二人あるのみ。

エリュキシマッホス曰く、然り、余は君を攻撃することなからん、余は君の演説は甚だ愛嬌あるものと思ひたればなり。而して若し余にして、アガトーン及びソークラテースは、愛の術の達人たることを知らざりしならんには、此く殆ど言ひ盡くしたる後に於ては、彼等は今や言ふべきこと無からんことを恐る。されども余は、此くの如きに關せず、決して望なきに非ざるなり。

ソークラテース曰く、エリュキシマッホスよ、君の爲せし所の演説は甚だ見事なるものなりき。されども君若し余の位置にありて、アガトーンの談話したる後、談話せざる可からざる余の如くならんには、君と雖必ず大に困難を感すべきなり。

アガトーン曰く、ソークラテースよ、君は余に施すに一種の魔法を以つ

ソークラテース
アガトーンを挑
撥す

てし、余は巧妙なる演説を爲すものなりとの豫想を人々の心中に喚起せしめ、以つて余を攪亂せんとせるなり。

ソークラテース答へて曰く、アガトーンよ、若し余にして、君の頭腦は朋友の小集會に於て攪亂さるべしと思ふことあらんには、君が曩きに其文章を朗讀する時、多くの俳優等と共に、舞臺に立ち現はれ、全劇場に面して毫も怖るゝ所なかりし勇氣と、其泰然たる態度に就いて、余は全く健忘なりと謂はざる可からず、余豈此くの如きことあらんや。

アガトーン曰く、ソークラテースよ、君は余の頭腦を以つて、少數なりとも知者の判断は、多數の愚者よりも畏ろしきものなることを知らざるまでに、劇場の事を以つて充たされ居るものなりと思へるか。

ソークラテース答へて曰く、否な、アガトーンよ、余は君を以つて此事及び其他禮儀に於て缺損せりとなすものに非ざるなり。又た若し眞に以て知者なりとする人に會合する時は、君は其人の意見に對しては愚者の多數よりも大に注意せざる可からざることば吾等の十分覺れる所なり。然りと雖、吾等は其時劇場に在つて愚衆の一部分なりしを以て、決して撰

愚者の多數と知者の少數

ソークラテース
人と談話するこ
とを許可されず

扱したる知者として見らるべきにあらざるなり。若し、君彼等愚衆の一
人に非ず、眞の知者に遭遇する時は、此人の前に於て不名譽の言行ある時
は、勿論耻づべきものなるは余の知る所なり。然らずや。

アガトーン曰く、然り。

されども多数の前に在つては、君は不名譽なることを爲したりとも、毫
も耻づるの要なしとするか。

こゝに於て、フィドロス彼等の談話を遮ざりて謂うて曰く、親愛のアガ
トーンよ、ソークラテースに答ふること勿れ。彼れたゞ談話の對手を求
むるなるのみにして、殊に容貌美麗なる人を好めるなり。此くてソーク
ラテースは吾等の企てし所を實行するの意なし。余はソークラテース
の談話を聞くことを好むものなりと雖、目下余は、愛の讚美の詞を、ソーク
ラテース及び其他人々より受くべきことを忘るゝ能はざるなり。君及
びソークラテースにして、神に對する寄進終らば、君等随意に談話すること
を得べきなり。

アガトーン曰く、然り、余焉んぞ演説を爲さざらんや、ソークラテースと

アガトーン、前
の人々の爲した
る祝は愛の讚美
の性質を誤ると
なし、演説を始
む

先づ愛を讚美し
次に神恩を述べ

談話するは、又た他の多くの機會あり。余は先づ如何に演説すべきやを
言ひ、次に本論に進むべきなり。

前に演説したる諸君は、大抵皆な「愛」の神を讚美し、又此神の性質を明か
にするを爲さずして、此神が人間に利益を與へたる點に付きて、人間を
祝賀したるものゝ如し。されども余は之れに反して、寧ろ先づ此神を讚
美し、次に神の恩恵を述べん、之れ凡て、物を讚美する正當なる方法となす。
余は幸福なる諸神中、此神は最も美にして、又た最上の神なるより、最も幸
福の神なりと謂ふとも不敬神にわたり、神意に違ふことあらざるべしと
云ふことを得んか。其最も美なる神なりと謂ふや、第一、此神は、最も若き
神にして、其若きことは彼れ自ら之れが證人たり。老齡は非常なる速力
を有し、吾等の比すべきなきの大速力を有せるものなりと雖、愛は能く老
齡の道を脱出せり——愛は老齡を嫌惡するを以つて、老齡決して愛に近づ
くことなし、されども、青年と愛とは共に生活し、共に動くこと、格言の言へ
るが如く、同は、同と與たるなり。ファイドロスの「愛」に就いて種々語りたる
所は、余は之れに賛成するものなり。然りと雖、愛の神はヤベトス及びク

愛は年長者に非
ずして若く且つ
柔和なり

ロノス等よりも年長なりとせるの點には、余は同意すること能はざるなり。余は之れに反して、此神は諸神中最も年少にして、又た永久に年少なるを主張す。ヘシオドス、及びバルメニデース等の言へるが如く、古昔諸神の行爲せしことに關する傳説にして眞なりとせば、こは「必要」の爲せし所に於て、愛の爲したることに非らざるなり。何となれば愛若し其當時に存在したりしならんには、諸神中或は鐵鎖を以つて繫縛し、或は毀傷し、或は其他猛烈なる行爲を爲すことあらざりしなるべく、たゞ平和と雍穆とのみなること、天の現状の如くなるべし、何となれば愛の支配始まりたる可ければなり。「愛」は年若くして又た柔和なり。「愛」の神は、其の柔和なることを謳歌せんが爲めにホメーロスの如き詩人を要す。ホメーロスのアテーに就いて、其の女神なること及び其の柔和なることを謂へる言に曰く

「彼女の足は柔和にして、其歩むや地を歩まずして人の頭を歩む」
と。之れ彼女の柔和なることの最も正當なるの證となす。何となれば彼女堅硬なる物の上を歩まずして、柔軟なるものゝ上を歩めばなり。吾

愛は軟柔なり

等又た「愛」の柔和なることに就き、同様なる證據を擧げん。實に彼れは地を歩まず、また人の頭蓋を踏まざるなり、頭蓋の如きは十分堅きものなればなり。たゞ其歩むは人の心情と精神とにして、是等を以て道となし、住居となし家となす。されども彼れ、除外なくして、如何なる精神なりとも之れに住するに非ずして、苟も堅硬なるものある處には、彼れ居らずして、柔和存する所に住し、常に其足に依り、一切の方法の態度を以て、柔和なる場所の最も柔和なる所を歩行す。此くて彼れ、如何んぞ萬物中の最も柔和なる者にあらざるを得んや。彼れは最も若く、最も温和にして又た柔軟なり。何となれば若し柔軟なることなくんば、彼れ如何にして萬物を包容することを得ん。若し彼れ堅硬ならんには、如何でか見現はさるゝことなくして、人心中に出入することを得んや。彼れの容姿の柔軟且つ鈎齊なることの證たるや、其優美なるにあり。之れ特に「愛」の性質として、一般に人々の許容する所にして、野卑と愛とは常に互に戰へるなり。彼れの容姿の美なるとは、其花の中に住へるに由つても之れを知るべし。彼れ身體たれ又た精神たれ、花咲かざる所、或は凋む所の美の内に住せず

愛は優美なり

愛は正義なり

愛は節制なり

愛は勇氣なり

して、たゞ花咲く所、香氣馥郁たる所にのみ住するなり。彼れの美に就いては既に十分之れを云へりと雖、此他尙ほ言ふべきこと少なからざるべし。而して余は今ま彼れの徳を語らんと欲す。實に彼れの最大の光榮とすべき所は、彼れ諸神或は人間に決して如何なる害悪をも加ふるとなく、又た自ら之れを受くるなきこととなす。何となれば彼れたとひ自ら害悪を受くることありとも、決して強制に由つて受くるに非ざるなり、何となれば強制なるものは彼れに近づかず、又た彼れ強力に由つて事を爲さざればなり。凡べて彼れに事ふる者は、如何なる事と雖、皆な其自由の意志より之れを爲し、又た都市の君主たる法律の言ふが如く、合意存する所正義存するなり。彼れたゞに正直なるのみに非ず、又た非常に節制なり、何となれば「節制」とは快樂及び欲望の認定されたる支配者たればなり。而して如何なる快樂と雖、決して「愛」に優ること能はざるなり。「愛」は衆快樂の主人にして、衆快樂は盡く「愛」の従僕たるなり。「愛」若し是等諸快樂に勝てりとせば、愛は實に節制なりと謂はざる可からざるなり。勇氣に關しては、戦争の神と雖、愛に敵すること能はず、彼れは捕虜にして、愛は君主

愛は智なり

愛は詩人なり

なり。何となれば、愛即ちアフロヂターの愛は、彼れに勝つことは古へより云ひ來れる所なり。而して主人は奴僕より強きなり。彼れ若し一切の物の最も勇敢なるものに勝つとせば、彼れは自ら最も勇敢なるものたらざる可からざるなり。彼れの勇氣、正義、及び節制に就いては以上述ぶるが如し。然りと雖余は尙ほ彼れの智慧に就いて語り、余の爲し得る限りの力を盡くさざる可からざるなり。第一、彼れは詩人なり（ことに余はエリユキシマッホスの如く、余の専門の技術を自ら誇大せざる可からず）而して彼れ又た他人の詩歌の源泉たるなり。彼れ若し自ら詩人たらずんば、焉んぞ能く他の詩歌の源泉たることを得んや。彼れ一たび觸るゝ時は、從來音樂を知らざりし者と雖も、皆な盡く詩人と化す。これ、愛は大詩人にして、又た音樂の術に於て精達せるを證明するものなり。何となれば自己に有せざる所のものは人に之れを與ふる能はず、自ら知らざる所のものは、人に之れを教ふる能はざればなり。誰か諸動物の創造は彼れの爲す所なるを否むものあらん。是等は皆な彼れの智慧の事業にして、彼れより生れたるものなり。美術に關しては、愛の鼓舞したる者のみ名譽

愛は秩序の創造者なり

愛は平和を作るものなり

の光輝を有じ、愛の觸れざるものは闇黒を歩むものなることは、誰か之れを知らざらん。醫術、弓術、卜筮等、之れ皆な愛及び欲望の指導を得て、アポロンの發明したる所にして、アポロンも亦之れ愛の弟子たるなり。ミューズ等の音樂、ヘーライストスの冶金術、アテー子一の機械術、諸神及び人間を統御する所のゼウスの帝國、是等皆な「愛」の發明したる所にして、愛に負ふ所のものとなす。「愛」は諸神の帝國に秩序を興へたり——即ち之れ美の愛に基づくものなるや明なり何となれば愛は醜に對し毫も關する所あらざればなり。余が始めに言ひしが如く、以前は猛烈なる行爲、諸神中に存せり。之れ諸神は「必要」なるものに支配され居たるを以つてなり。されども一旦「愛」生れ、美の愛の生じたるより、天にも地にも凡ての善は生起せり。故に「フアイドロス」よ、余は「愛」は最も美にして、又た彼れ自身最も善たり、而して其他一切の事物の最善最美の原因なりと云ふなり。余は又た詩に云へるが如く、

「彼れは地上に平和を興へ、荒ぶる海を靜む、

彼れ海を靜め、苦しむ者を寢らしむ。」

愛は救護者なり

愛は最上にして
最も光輝あるも
のなり

る神なりと云はんと欲す。彼は宴會に於ては此くの如く衆心を一にし、愛情を以つて人心を充たし、以つて憎悪なからしむ。祭禮に於て、宴會に於て、又た舞踏に於て、彼れは吾等の君主なり。——彼れは鄭重を與へ粗暴を逐ひ常に親切を與へ、決して不親切を與ふるゝ無し。彼れは善人の友たり、智者の驚歎する所たり、諸神の歎美する所たるなり。彼れに關係を有せざるもの之れを希ひ、彼れに善き關係を有せるもの之れを貴重し、閑雅、華美、欲望、愛好、柔和及び優美の父となり、善に注意し惡を顧みず、凡ての言語、事業、希望、恐懼に於て——嚮導者、援助者、防護者、救助者にして、諸神及び人間の光榮たり、又た最良にして最も光輝ある指導者たるなり。人々皆な讚美歌を歌ひ、愛が諸神及び人間の精神を歎ばす所の、美麗なる歌曲を歌ひて「愛」の歩みに隨伴せよ。ファイドロスよ、之れ半ば慰樂の談話なりと雖、亦或る度に於ける眞面目のものたるなり。之れ余の能力に従つて愛の神に捧ぐる所たるなり。

アガトーン語り終へし時、アリストデーモスの言ふ所に由れば、人々大に拍手喝采し、美麗なる青年は自己にも神にも價值ある演説を爲せりと

評しあへりど。時にソークラテース、エリュキシマッホスに向つて謂うて曰く、アクメノスの子なる君よ、余は果して預言者に非ざるか。余はアガトーンは必ずや驚くべき演説を爲すべく、而して余は其後に語るの困難あるを前言したりしに非ずや。

エリュキシマッホス曰く、思ふに第一の前見に於ては君は正しと雖、第二の前見は未だし。

ソークラテース曰く、親愛なる友よ、余を始めとし、何人と雖、此くの如き思想豊富にして變化多き演説の後に演説するは、最も困難とする所なるべし。余は殊に其終結の美に感動せり、誰か歎美することなくして之れを謹聴するを得るものぞ。余は自己の力の甚しく拙劣なるを思ひ、若し遁れ得べくんば、耻かじさに由つて遁れ去らんとせり。余はゴルギアスを想ひ起こせり、而して彼れの演説の終に於て、アガトーンは修辭學の大家ゴルギアス、或はゴルゴンの頭をふりかざし、余及び余の演説をして、ホメーロスの言へるが如く石の如く無言ならしめたり。而して、余は、君と共に、余の順番に於て愛の讚美を爲すことに同意し、又た自ら其術を知れ

ソークラテース
人々の讚美は讚
美に非ず、單に
讚美の外觀のみ
となし、自己は
此くの如き讚美
の約束を爲すの
意なかりしを以
つて、約束の解
除を要むとなす

るものなりと名乗り、而も「讚美」とは眞たれ偽たれ、たゞ其れを頌美する
ことの別名なるが如きものたるを知らず、此意味に於ては、余は何事をも
讚美すること能はざるを願みずして、演説すること約したるが如き、自
ら其愚の大なるを知る。余の朴訥なる、自ら謂へらく、讚美の趣旨は眞な
るべく、其眞なるものを基礎として、演説者は其中より最も善きものを取
り出し、最も善く之れを順列するにありと。而して自ら傲然として謂へ
らく、我れ他の人々の如く演説するを得べし、我れ眞の讚美の性質を知れ
ばなりと。されども今や余は知れり、諸君の目的としたる所は、たゞ種々
の偉大なることと、光榮とを、愛に歸與し、其果して眞に愛に屬すべきもの
なりや否や、或は眞なりや偽なりやは、毫も問ふ所に非ざること。され
ども此は言ふの要なし、何となれば諸君の始めの目的は、眞に愛を讚美す
るに非ずして、たゞ讚美する如く見ゆれば可なりとせるが如きを以てな
り。而して諸君は何處よりなりとも聚集し得べき所の、想像上の種々の
讚美を愛に附與して曰く、「彼れは凡て之れなり」。「彼れは凡べて此の原
因者なり」と。此くて愚者は欺くことを得べしと雖、苟も之れを知る者は

自己の流儀を以
つて愛を讚美せ
ん

欺く可からず。而して諸君は高尚嚴肅なる讚美の詞を爲せり。されども余が余の順次には演説すべしと約したるは、讚美の性質を誤解して約したることなるを以つて、余は約束の解除を得んとを願ふ、之れ(エウリビデース必ず言はんが如く、單に口唇の約束にして、心よりせるものに非ざればなり。此くの如き讚美の方法は余は之れを辭せん。此くの如きは余の方法に非ず、否、余は此くの如き方法を以てしては、讚美すること能はざるなり。然りと雖、諸君若し愛の眞理を聽かんと欲せば、余は諸君等と競争するの滑稽を演ずることなく、余自身の流儀を以て之れを爲さん。さらば、フアイドロスよ、余が愛の眞理を語るに當り、如何なる言語を以てするも、如何なる順序を以てするも、此時余の心中に起りたるがまゝに語りて可なるか。君之れを承諾するや否や。

アリストデームスの言ふ所に由れば、フアイドロス及び其他の人々、ソクラテースの欲するまゝに爲して可なりとせりと。時にソクラテース曰く、然らば余が二三の質問をアガトーンに試み、彼れの承諾を余の談話の前提となさんと欲す、君は其れに承諾を與ふるか。

愛とは或もの
受にして自己に
有せざる所のも
の欲望なり

ファイドロス曰く、余は其許諾を與へん。君の質問を提出せよと。ソー
クラテース次の如く進みて曰く――

愛するアガトーンよ、君の試みたる見事なる演説中、先づ「愛」の性質を語
り、而して次に其事業に及ばんと言ひたるは實に正常なるものにして、之
れ演説を始むる方法として余の大に賛成する所なり。而して君の「愛」の
性質に就いて語るや實に雄辯なりき。願くは余の問ふ所に答ふるや否
や。余は問はん、愛とは或物の愛なるか、或は何物にても無きものゝ愛な
るか。余は此質問の意味を説明せんに、余の問ふ所は、君は、愛とは父の愛
或は母の愛と云ふ如きに答ふるを要せず、此くの如きは滑稽なり。余若
し、父は或物の父なりやと問はゞ君は子の父或は女の父と答ふる如きに
して、別に困難あることなし。

アガトーン曰く、然り。

而して母に就ても君は又た同様の答へを爲すか。

アガトーン同意せり。

尚ほ余の意味の明瞭を得しめんが爲めに、今一問を試みんに、兄弟は又

た或物の兄弟にはあらざるか。

彼れ答へて曰く、然り。

即ち兄弟或は姉妹の兄弟なるか。

然り。

ソークラテース曰く、余は今ま愛に就いて問はんには、愛とは或物の愛なるか、將た又た何物にてもなきものゝ愛なるか。

彼れ曰く、必ず或物の愛なり。

此事の何たるやを心に留め、而して余の知らんとする所の如何なるものなるかを余に告げよ——即ち愛は、愛の依つて以つて存する所のものを願ふや否やを。

然り、確かに。

人は其愛する所及び欲望する所のものは、彼れ之れを有せるか、將た又た之れを有せざるか。

恐くは之れを有せざるべしと余は言はざる可からず。

ソークラテース答へて曰く、否な、たゞ言語に然りと云ふのみに非ずし

故に愛は善或は
大なるものに非
ずして、之れを
欲望するものな
り

除外例の如き趣
きあるもの（然
りと雖實は除外
例に非ず）

て余は君が必然にしか考へざる可からずとなす。元來其論理たるや、或
者を欲望する者は、彼れ之れを有せざるに由る、何物をも欲望せざるもの
は、何物をも要せざるべしと云ふにありて、余の判断に由れば、こは絶對に
又た必然に眞理なりとす。アガトーンよ、君は、以つて如何んとなす。

アガトーン曰く、余は君に同意なり。

大に善し。然らば大なることを欲望するものは大にして、強からん
ことを欲望するものは強しと云ふべきか。

此は前に許容したる所と兩立せざるなり。

然らば人若し已に何物かなる時は、彼れ其物たるを欲することあらざ
るか。

然り。

ソークラテース曰く、然りと雖強力の人も尙ほ強力たらんことを欲し、
敏捷なる人も尙ほ敏捷ならんことを欲し、健康なる人も尙ほ健康ならん
ことを欲す。此くて何人と雖、自己の既に有せる所を、尙ほ欲望するを得
と考ふることを得べし。余は誤解を避けんが爲めに例を擧げて之れを

已に有せる所を
將來に有し續づ
けんを欲すと云
ふは尙ほ將來に
有せざる所を求
むるなり

説明せん。

アガトーンよ、是等の諸性質を有せる人々は、自ら之れを撰擇するも撰擇せざるも、其時に於て、夫々の利益を有せりと假想せざる可からず、而して誰か自己の有せる所を欲望し得るものやある。故に人若し謂うて、余は既に健康なり、尙ほ健康ならんことを欲す、余は既に富めり、尙ほ富者たらんことを欲す、余はたゞ余の有せる所を欲望するなりと言はんには、吾等は此く彼れに答へん、曰く、友よ、君は既に富も、健康も亦強力をも之れを有せるを以て、今や之れを繼續せんと欲するなるべし。現下に於ては君が之れを撰擇するも撰擇せざる君は之れを有せるなり。故に君若し、余は余の有せる所のものを得んと欲す、豈他あらんやと云ふことあらんども、此は現在君の有せる所を、將來に於ても有せんことを欲すと云ふの意味にはあらざるか」と。彼れ之れに同意せざる可からざるか、否か。

アガトーン答へて曰く、彼れ同意せざる可からず。

ソクラテース曰く、然らば彼れ現在既に有せる所のものを將來も自己に保有せんと欲するは、之れ其未だ有せざる所の或ものを欲望し、而も未

だ其物を得ざるなりと云ふに等しきなり。

彼れ曰く、真に然り。

然らば人々の欲望する所は彼の既に有せる所のものを欲望するに非ず。而して之れ將來のことなり、現在に非ず。彼れの有せざる所のもの、彼れの然らざる所のもの、彼れの缺乏せる所のものなり、是等は愛及び欲望の求むる所のものに非ずや。

彼れ曰く真に然り。

ソークラテース曰く、然らば吾等前論を再述せんに、第一、愛とは或物の愛及び自己に無き所のものゝ愛にあらずや。

彼れ答へて曰く、然り。

君の言へる所を尙は能く記憶せよ、若し君記憶せざれば余は其事を云ひて君をして思ひ起さしめん。君は曰く、美の愛は神々の帝國に秩序を興へたり、何となれば醜物に對しては愛あらざればなりと——君は此くの如きことを言はざりしか。

アガトーン曰く、然り余は之れを言へり。

結論せば、愛は
美に非ずして美
の愛なり、而し
て美は善なり

然り我友、君の所説や正しと謂ふべし。而して若し之れ眞なりとせば、愛とは美の愛にして醜の愛にはあらざるべし。

彼れ然りとす。

而して愛とは人の求むる所にして、缺如せる所のものなることは既に許容したるに非ずや。

彼れ曰く、眞に然り。

然らば愛は美を求め、美を有せずとなすか。

彼れ答へて曰く、然り。

君はかの美を求め、美を所有せざる所のものを以つて美となすか。

決して然らず。

然るに君は尙ほ愛は美なりと謂うか。

アガトーン答へて曰く、余は殆ど何を言ひつゝありしやを解するに迷へり。

ソークラテース答へて曰く、アガトーンよ、君の演説や大に宜しかりき、されども余は尙ほ一事君に問はんと欲するとあり、善も亦美にあらずや。

然り美なり。

然らば美を缺如せる故に、愛は又た善をも缺如せりと云ふべきか。

アガトーン曰く、ソークラテースよ、余は君を論破すること能はず——吾等は君の言ふ所は盡く是なりと前定すべし。

ソークラテース曰く、愛するアガトーンよ、君は寧ろ言へ、真理は之れを論破し能はずと雖、ソークラテースを論破するは易々たるのみと。

デオチマのソークラテースに對へたる愛の哲理

扱て君との談話は、大要此に止め、昔し余がマンチチイアのデオチマより聽きたる愛の話を爲すべし。此デオチマは此事及び其他の事に於て甚だ知識ある婦人なり。此婦人は是より前アテーナイ人が、疫病の來らんとするの、前犠牲を供して神に禱れる時、能く疫病の襲來をして、十年間遅延せしめたる同人にして、愛の技術に於ては余の師匠たりし人なり。余の此談話を爲すに當つてはアガトーンの許容したる所を以つて始めんと欲す。其許容たるや、此知識ある婦人が余に問答を試みし時、余が爲したると、全く同一のものに非ずとせば、殆ど同一のものにして、最も容易なる方法たるなり而して、余は自ら能ふ限り兩者の位置に立ちて之れを

愛は美に非ず特
に非ざればとて
醜なり惡なりと
云ふ可からず

語らん。アガトーンよ、余は君の言ひし如き順序に従つて、先づ「愛」の本體及び性質を語り、次に其の事業に及ばんと欲す。第一余の彼女に云ひし所は、アガトーンが余に言ひし所と殆ど同一にして、「愛」は有力なる神にして、又た美なることを以てせり。而して彼女は余が今まアガトーンに證明したると同様なる語法を以て、「愛」は美にも非ず、又た善にも非ざること、余に證明せり。余問うて曰く、「デオチマよ、おん身の意味する所如何ん。然らば愛は惡にして醜なるか」。彼女叫びて曰く、「默せ、美に非ざれば醜なりと謂はざる可からざるか」。余曰く、「然り」。然らば智ならざる者は愚なるか。君は智と愚との中間あるを知らざるか。余曰く、「其は如何なるものぞ」。彼女曰く、「君の知れる如く、正常なる憶説は、道理を與ふると能はざるを以て、此は智識と謂ふ可からざるなり、何となれば、智識は道理なきと能はず、又た無知たること能はず、何となれば無知は眞理に達すること能はざればなり、故に憶説は無知と知識との中間のものたるや明かなりとす」。余答へて曰く、「眞に然り」。彼女曰く、「然らば美ならざるものは、必しも醜なりと主張すること勿れ、善ならざるものは、必しも惡なりと謂ふこ

然りと雖又た一方に於て、善と笑とを有せざる所の彼れ(愛)は神に非ず

と勿れ。或は又た「愛は美に非ず善に非ざるより推論して、愛は此故に醜なり悪なりと云ふこと勿れ、何となれば、愛は是等の中間なればなり。」余曰く「されども、愛は必ず凡の人の、大なる神として認定せる所なるべし。」
「知れる人に由つてか、或は知らざる人に由つてか。」
「凡ての人に由つて。」
彼女微笑して曰く「ソークラテースよ、愛は決して神に非すとせる人々は、如何にして「愛は大なる神たることを承認するか。」余曰く「愛は神に非すとすものは誰ぞや。」彼女答へて曰く「君と余とは其中の二人なり。」余曰く「何を以て然りとなす。」彼女答へて曰く「そは甚だ見易きことなり。君は、諸神の、幸福且つ美なることを承認する者なるべし。君敢て或は諸神は幸福且つ美ならずとなすか。」余答へて曰く「否、」然らば幸福とは善或は美の所有者を云ふか。」
「然り。」
「而して君は「愛は善及び美なる者を有せざるを以て、其有せざる所を得んことを欲望せることを許容したるに非ずや。」然り余は其れを許容せり。」
「されども善及び美を有せざる所の者、如何にして神たることを得んや。」
「然りこは不能の事なり。」
「然らば君も亦「愛の神なることを否む者なるを知らん。」

愛は神と人々の
中間に立つ所の
精靈なり

愛は豐富と貧乏
との子なり

余問うて曰く「然らば愛は如何なるものぞ。彼れ死すべき者なるか。」
「否、然らば如何なるものぞ。」前の場合と同じく、愛は死すべきものに非
ず、又た不死のものにも非ずして、此等兩者中間のものなり。「デオチマよ、
然らば彼は何者ぞや。」彼は大きな精靈(Daemon)なり。而して凡ての精靈
の如く、彼れ神と人間との中保者たるなり。」余曰く「彼れの精神上の力の
性質は如何なるものぞ。」彼女曰く「其力たるや、人間の祈禱を通辯し、犠牲、
供物を神に進達し、又た神の命令及び報酬を人に傳ふるものなり。而し
て此力は神と人との間にある所の間隙に橋を架する者にして、凡ての事
物皆此力に總括せらる。此力を通じて豫言者及び祭司等の犠牲、神秘、符
呪及び凡ての豫言及び魔法等行はるゝを得るなり。何となれば神は人
と混するものに非ずして、此力を通じて覺醒時も睡眠中も、神と人との交
際あるを得るなり。此事を了會する所の智慧は精神上のものにして、其
他の技術手工等の如き智慧は下等にして野卑なるものとなす。此仲保
の力なるものは多數ありて皆神聖なり。其の中の一は即ち愛なり。」余
曰く「愛の父は誰にして其母は又た誰なりや。」彼女曰く「話せば長きこと

愛は執なく來なく諸方を遍歴し、強力敏捷にして常に美と善とを得んとすの野心を包蔵す

なりと雖、余は之れを語るべし。アフロヂテーの誕生日に諸神の響應ありき。時にメーチス一名智慮と稱する神の子なるポロス一名豊富の神も其來賓の一なりき。宴會終りし時ペニア一名貧乏の女神、例として戸に倚つて食を乞ふ。豊富の神神酒に酔ひゼウスの花園に至りて熟睡す。「貧乏」の女神は其身の窮境を思ひて豊富の神を其夫となし、子を得んとするの野心を起し、因つて豊富の神の傍に寝ねて、愛を妊めり。而して「愛」はおのづから美を好むに因るとは言へども、又たアフロヂテーの美なるも、又た彼れアフロヂテーの誕生日に生れたるとの理由を以て、アフロヂテーの従者となり侍者となれり。其財産も亦其兩親の如く、始めは彼れ常に貧にして何物をも之れを有せず、たゞ人々の想像するが如く優さしく美しかりしのみ。其容貌や粗剛にして汚穢に染み、歩むに靴なく、住するに家なく、其寝ぬるや青天の下に地上に横はり、或は市街に、或は人の門戸に息ひ、其母の如く常に不幸の境遇に在りき。然りと雖亦幾分か其父に似たる所ありて、彼れ常に美と善とに對して野心を抱懐し、性大膽冒險にして強力を有し、能く、人を獵し、常に或隱謀及び其他のとを企て、智慧の追

彼れ智ならず、
されども智慧を
愛するものなり

求に於ては甚だ鋭敏にして、決して其方法に窮することなし。常に哲學者たりと雖、又た妖術者の如く、幻術者の如く、「ソフィスト」の如く激烈なり。彼れは死すべき者に非ず、又た不死のものにも非ず。彼れ豊富なる時に、或一時は生きて榮えつゝありと雖、又た他の瞬間に於ては死いし、而して又た其父の性質の理由を以つて再び活動す。されども其常に流入しつゝある所は、又た一方に於ては流出しつゝあるを以つて、彼れ素より貧しきことあらずと雖、又た富有なることもなく、又た彼れ智と無智との中間に在り。此問題の真理たるや此くの如きなり、曰く如何なる神も哲學者或は智慧の追求者に非ざるなり、何こなれば彼れ已に智なればなり。又た何人と雖、已に智なるものは智を求むることなく、又た無智者は智を求むることあざるなり。無知の惡たる所以此に存す。而してかの善にも非ず、智にも非ざる者は自ら自己に満足せり、是故に彼れ其必要を感せず。余曰く「然りと雖、る所の物に對しては、之れを得んとする欲望あるなし。」余曰く「然りと雖、テオチマよ、若し智慧を愛する者は智者にも非ず、愚者にも非ずとせば、然らば何人か果して智慧を愛する者ぞ。」彼女答へて曰く「此くの如きの疑

愛は美の愛なり
然りと雖之れに
由つて何を求む
るか

問は、小兒と雖答ふることを得べし。智慧を愛する者は、兩者の中間に在るものなり。「愛」は其一人なり。何となれば智慧は最も美なるものにして、愛とは美の愛なればなり。故に愛は又た哲學者なり、或は智慧の愛者なり。其智慧を愛する者たるより、智と無智との中間たるなり。之れ亦「愛」が其兩親より受け傳へたる所の性質なり、何となれば其父は富且つ智なりと雖、其母は貧且つ愚なればなり。愛するソークラテースよ、此くの如きは「愛」なる靈體の性質なり。君の愛に對する觀念の誤謬は素より自然にして、君の言へる所に由つて想像するに、其誤謬は愛する者と愛さるる者との混同より起り、以つて愛は凡て美なりと思ふに至りしならん。實に愛さるるものは眞に美にして艶に、而も亦完全且つ幸福なりと雖、愛の原理は全く他の性質のものにして、余の説述したるが如きなり。」

余曰く「嗚呼、他國の婦人よ。おん身の言へる所は巧みなるかな。今若し「愛」なるものはおん身の言へるが如きものなりと假定せば、人間に取つて「愛」の用は如何ん。」彼女答へて曰く「ソークラテースよ、余は其事の説明に進むべし。「愛」の性質及び誕生は余已に之れを言へり、而して君は愛と

美を有すること
は又た善を有す
ることなり、又
た之れ幸福なり

は美の愛なることを承認せり。されども人或は言はん、ソークラテース及びヂオチマよ、美とは何の美ぞやと。故に余は寧ろ一層問題を明瞭にし、而して問はん、人は美を愛して果して何を欲するものなるかと。余彼女に答へて曰く、美を其有と爲さんとするにあり。彼女曰く、此答は尙ほ他の疑問を想ひ起こさしめたり、曰く、美を所有せば何をか得べき。余答へて曰く、之れ余の未だ答へ能はざる所たるなり。彼女曰く、然らば美と云へる言語に代ふるに、善と云へる言語を以てし、而して疑問を再言せん、曰く、善を愛して、果して何を欲するか。余曰く、善を所有せんことなり。善を所有するものは果して何をか得べき。余答へて曰く、幸福を得るなり。此くの如きことに答ふるは容易なるのみ。彼女曰く、然り、幸福は善良なる事物を得ば幸福たるべし。而して人は何故に幸福を欲するかは、之れを問ふの要なからん。何となれば其の答へや終局のものなればなり。余曰く、おん身の言や正し。而して此願望及び此欲望は、萬人普通のものなるか、人皆な常に自己の善を欲するか、或は單に或種の人のみ然るか。君の思ふ所如何。余曰く、萬人之れを欲す、此欲望は萬人普通たるなり。

然るに愛は普通
に此一般の意味
に解されず

彼女曰く「然りと雖、ソークラテースよ、萬人盡く愛するに非ずして、たゞ彼等の中の或者之れを愛するなり。然るに君は萬人皆な常に同一物を愛すと云へり。」余曰く「余は自ら驚く、こは何故に然るか。」彼女曰く「何の驚くとかあらん。其理由たるや、愛の一部分は分離して全體の名稱を得、他の一部分は他の名稱を有せるにあり。」余曰く「例を舉げて之れを説明せよ。」彼女次の如く余に答へて曰く「詩なるものは君の知れるが如く、甚だ複雑多端のものにして、凡ての創作即ち無を有にすることは、之れ詩或は創作にして、一切の技術の方法は皆な創作なり。而して技術の名人は皆な詩人或は創作者たるなり。」真に然り。」彼女曰く「然るに、君は、彼等盡く詩人と稱せられずして、他の名稱を有せることを知る。而して此の種の廣義の名稱たる詩より分離して、音樂及び詩句等に關する所の特殊の技術のみ詩の名稱を有し、此の詩の意味を以つて、彼等は詩人と稱せらる。」余曰く「真に然り。」愛に於ても亦同じ。何となれば君は概言して、善及び幸福の欲望は、たゞ「愛」の大なる不思議の力なりと言はん。然りと雖、此他かの或は金儲けなるか、或は體育なるか、或は哲學なるか、何れの途に由り

てなりとも愛の方に引き寄せらるゝ者は愛者と稱せられず——全體の名稱は、かの其感情は、單に一形態のみを呈する所の者に與へられ、此くの如き人々のみ、愛すると稱せられ、又た愛者と稱せらるゝなり。』余曰く『此事に就いて、おん身の説や正しと謂ふべし。』彼女曰く『君は、愛者等は自己の半身を求めつゝあるものなりとは人々の言へる所なるを知らん。されども余は言ふ、彼等其半身或は全體にして、善に非る以上は、決して其半身を求むるものにも非ず、又た其全體を求むるものにも非ずと。故に人々たごひ自己の手なりとも、又た自己の足なりとも、若し其有害なるに於ては、之れを切斷し去るなり。之れ彼等が是等を以て自己のものなりとして愛するに非ずして、たゞ善なるを以てなり。其之れを嫌ふや、他人のものなりとの理由より然るに非ずして、其惡しきを以てなり。人々の愛する物は他なし、唯善のみ。君は尙ほ他に之れありと思ふか。』余は云はん、他に之れなしと。』彼女曰く『單純なる眞理を云はゞ人は善を愛すと云ふにあり。』余曰く『然り。』之れに加ふるに、人は、善の所有を愛すと云ふことを以つてすべからざるか。』然り、之れ附加せざる可からざるなり。』單に

愛は生産なり、
創造なり、妊娠
の神聖なる力な
り

美醜と生殖力の
關係

善を所有すと云ふに止まらず、又た之れを永久に所有すと、附加すること
は如何ん。」「然り、是れ亦附加せざる可からず。」「彼女曰く「然らば愛とは、概
言せば、永久に善を所有することの愛と云ふを得べきか。」「余曰く「こは眞
に然り。』

彼女曰く「若し之れ愛の性質なりとせば、君尙ほ余に告げよ、愛を追求す
るの方法如何ん、又た愛と稱する凡て此熱情を表はさんとするには、彼等
果して何を爲すべきや。又た其目的とせることは、何なるやを。」「余曰く
「否な、デオチマよ。若し余にして之れを知れる者ならんには、余は決して
おん身の智慧に驚かざるべく、又たおん身に學ばんとして、此處に来るこ
とも爲さざりしなるべし。」「彼女曰く「然らば余は君に誨へん。愛は身體
上或は精神上、美に於て生るゝことを目的となすものなり。」「余曰く「余は
おん身の言を理會すること能はざるなり、神託は説明を要す。」「彼女曰く
「余は今ま言ひし所を明かにすべし。余の意味する所は、人は皆其身體に
於て、又精神に於て生殖せんとするものなりと云ふにあり。凡て人の性
質にして、或年齢に違する時は、生殖を欲望するものにして、此生殖なるも

愛は單に美のみ
に非ずして又た
美に於て生るゝ
ことの愛なり

のは美に於てして、決して醜に於てするものに非ざるなり。是れ實に男女關係の不思議なる所にして、又た之れ神聖なることなり。何となれば妊娠及び生殖は、死すべき生物に於ける不死の原理たればなり。而して之れ不調和に於てはあり得ざることとなす。凡て醜なるものは神聖なるものと調和せずと雖、美は神聖なるものと調和せるなり。然らば美は人の出産に際し守護として臨める分娩の運命或は女神なりと謂ふべし。故に人若し美に近づく時は妊娠力順當、圓滿、安全にして、能く實を結び、又た能く生産す。然るに醜者を見ては、彼女之れに濫而し、苦痛を感じ、憎惡し、發怒し、萎縮し、苦痛を以て妊娠を避くるなり。是故に妊娠の時近づき、生殖力充滿するや、美に對しては非常の喜悅あり、恍惚あり。是れ美の近づきて苦痛を輕減するに由るなり。何んとなればソークラテースよ、愛なる者は君の想像するが如く、單に美のみの愛に非ざればなり。然らば何ぞや。』生殖、及び美に於いて生産するとの愛之れなり。』余曰く『然り。』彼女曰く『實に然り。』余曰く『されども何故に生殖の愛あるか。』彼女答へて曰く『死すべき人間に取つては、生殖は永生不死の一種なり。且つ已に

人間及び動物に於ける愛の大勢力は、何處より來るか

前に許容されたる如く、若し愛なるものは永久に善を所有することなりとせば、萬人盡く必ず不死と善とを欲望するなり」と。

凡て之れ種々の時、彼女の愛に就いて、余に誨へたる所なり。他日又た彼女の余に誨へたる所に曰く、「ソークラテースよ、此愛及び其從者たる欲望の理由は如何ん。君はかの一切の禽獸が其生殖欲に愛の傳染したる時は、彼等皆な苦痛を感せるを見ん、之れ雌雄相合一せんとするに始まり、其の産兒を保護するの感情を附加す。而して其兒を愛するの情は、能く最も弱き者をして最も強力の者と闘ふとを爲さしめ、飢渴も苦痛も、又た如何なることと雖、其の兒の爲めには、親たるものは之れを忍び、身死するに至るまでも其兒を愛護するなり。人が此くの如きことを爲すは、或は道理之れを然らしむるなりと言ふを得べしと雖、如何にして下等の動物が此くの如き感情を有せるか。君其理由を余に告ぐることを得るや如何ん。」余は又た知らずと云へり。彼女余に謂うて曰く、「君若し此の事を知らざるに於ては、如何でか愛の術の名人たることを得んや。」余曰く、「オチマよ、余が君を訪問し來れるは此れが爲めなるとは、前に言ひたるが

人間の精神も身
體も間断なく變
化し新陳代謝せ
り、

如し。余は師の必要あるを感ず。願くば、此事及び其他、愛の不思議を余に教へよ。』彼女曰く「驚く勿れ。吾等已に許容したるが如く、君若し愛の不死なることを信せば、此にも亦同一理由に由つて、死すべきものゝ性質として、成らん限り永生不死なることを求めつゝあるなり。而して是れは之れ惟だ生殖に由つて得らるゝことたるなり。何となれば新は舊に代つて其所に残る可ければなり。同一一個人に於てするも、決して純全たる不變なるものあらずして、たゞ繼續あるのみ。而して之れを謂ふて同一不變と云ふ。青年より老年に至るの短少なるの間、諸動物皆な生命を有し、同一不變なるが如しと雖、此間尙は間断なく消失と、補充とは行はれ、毛髪も筋肉も骨格も、血液も全身常に變化せり。是れたゞ身體のみに然るに非ずして、精神に於ても亦然り。故に習慣、性癖、意見、欲望、快樂、苦痛、恐怖等、決して不變なるに非ずして、絶へず來往せるなり。尙は一層驚くべきは、知識に關しても然ることとなす。知識全般は單に來往變化するの理由を以つて吾等決して同一不變に非ざるのみにあらず、特殊の知識も亦同一の變化を實驗するなり。何となれば、回想なる語中には、知識

不變と思ふは外
觀のみ

繼續の法則に由
つて不死たるを
得

人の厭離苦痛を
堪へ種々の事を
爲すは不死を得
んが爲めなり

の退去と云ふことの意味を含むものなればなり。而して此知識たるや、
嘗て忘れたるものが、回想に由つて再生され、保存されたるものにして、以
前と同一不變のものゝ如く思はると雖、實は全く新しきものたるなり。
此の繼續の法則に由つて、一切の死すべきものは保存せられ、全く同一不
變のものに非ずして、交代に由つて舊き疲勞したる死すべきものは、他の
新しき同様なるものを後に残して代謝するなり。之れ不死者の常に不
變同一なると大に異なるの點となす。此くてソークラテースよ、死すべき
身體或は死すべき何物と雖不死たるを得るなり。されども其不死や方
法を異にせり。故にかの愛に由つて子女を生むの理由に付いて異しむ
を要せず。何となれば、人々一般相愛し又た之れに心を置くは、實に不死
を得んが爲めなり。

余は此談話を聽きし時、大に驚きて謂うて曰く「あゝ汝賢明なるデオチ
マよ此はまことに眞なるか」と。彼女宛然「ソフィスト」の如き權威を以て謂
うて曰く、「あゝ汝ソークラテースよ、此は確信して可なり。君若し、たゞ、
人間の大望なるものを一見せば、其無意味なるに驚くべしと雖、實は之れ

智慮、徳義、詩
人の作、大立法
家等の凡て、精
上の創作は、人
間身體上の子孫
よりも遙かに美
なり

名譽の不死を愛するなり。大望家なるものゝ名譽の爲めに危険を冒すは、其子女の爲めに危険を冒すよりも大にして、或は金錢を消費し、或は種の勞苦に堪え、或は身死することを爲せり、之れ其不死の名を得んが爲めなるのみ。かのアルケースチスがアドメートスの爲めに死し、アヒレウスがバトロクロスの爲めに死し、君の尊ぶ所のコッドロスの爲めに死し、以て傳へんとして死したる如き、彼等若し其徳義の記憶後世に傳はりて、以て不死なることを得べしとの想像なかりせば、彼等果して此くの如き行爲を爲すべしと君は思ふか。否。余は信ず。人皆な不死の徳義の光榮ある名譽の爲めに萬事を爲すものにして、其物益と善にして人は益と之れを欲す。何となれば人皆な不死の欲望を喜ぶを以てなり。

「たゞ身體のみに生殖するの人は、自ら女に合して子を生む。之れ彼等の愛の性質なり。而して彼等の希望する如く、其子女は彼等の記憶を保存し、彼等の望むが如く、彼等に與ふるに冥福と不死とを以つてす。然りと雖多産の精神は——人間には身體よりも精神上の生殖に長せる人ありて——精神中に最も適當なるものを妊みて之れを保存す。而して其妊娠

する所のものは何ぞやと謂はゞ、之れ——智慧及び徳義の全般たるなり。而して此くの如き創造者は凡ての詩人及び技術家にして、皆な發明者創見者の名稱に合ふ人なり。然りと雖智慧の最大最美のものは、國家及び家族を治むるものにして、之れ節制及び正義と稱する所のものなり。かの青年に於て是等の種子は蒔かれ、又た自ら是れに感興^を鼓吹されたるものは、成年に達せば又た此種の生殖を爲さんと欲し、其子を生まんとして美なる者を求めて遍歴す。何となれば醜者は生殖せざればなり。此くて彼れ醜者よりも美者を得て之れを抱擁す。彼れ若し美にして高尙に、且つ善く教養されたる精神を求め得たらんには、此に兩者相抱擁して一たるなり。而して彼れ此くの如き美者に對しては、徳義及び善人の性質、及び善人の爲すべき事に關して美麗なる談話を爲し、彼れを教育せんことを勉む。此に於いて美は常に彼れと與に在り、若し又不在なる時は其記憶中に存し、彼れ其美に接觸して、久しき以前に姪みし所の美を出産し、彼等は共同して與に其の生産したる所のものを愛育す。其彼等の親密なる友愛の結繩は、死すべき肉體の兒を生むものよりも一層親密たるな

具體美より抽象
美に、個物美よ
り一般美に、一
般美より眞理及
び美の宇宙に達
すべし

り、何となれば兩者間に産出したる兒は、一層美にして一層不死なればなり。人若しホメーロス及びヘシオドス及び其他の大詩人等を考ふる時、誰か通常の人間の兒よりも、寧ろ彼等の兒を得んことを欲せざるものあらんや。誰か彼等が其名聲を不朽に傳ふる所の多くの兒を産みたるを頌美せざるものあらんや。誰かかのリクルゴスの如き兒を生みて、自己の死後、救世主となりて、單にラケダイモーンのみに止まらず、全グレシアの救世主たるが如き兒を欲せざるものあらんや。ソローンはアテーナイの法律の父祖として尊敬せらる。其他尙ほグレシアにも野蠻國にも此種の人少なからず。彼等皆な多くの高尚なる事業を爲し、種々の徳義の父母たりしなり。而して多くの神社は皆な彼等の子孫の名譽に於て建てられたるものなりと雖、身體上の子孫の名譽の爲めに建てられたるに非ざるなり。

「以上語りたる所は、愛に關する小不思議にして、汝ソークラテースと雖容易に入り得べきなり。然りと雖、其大なる且つ隠れたる不思議は此問題の冕冠なり。君若し正しき心に於て是等を求めんと欲せば、是等は君

美に進むの順序

形態の美

形態一般の美

制度法律の美

を導くべし。君の之れに達するを得るや否やは余の保證せざる所なりと雖、余は能ふ限り君に語るべければ、君若し能くせば余の言に従ふべし。人若し此問題に就いて正しく進まんとせば、其青年の時に於て美なる形態に心に向け始めざる可からず。第一若し其教師にして正しく彼を指導せば、彼れたゞ此くの如き美なるものゝみを愛することを學び、其れよりして美なる思想を創造すべく、やがて彼れ自ら、一の形態の美は、他の美に關係を有せることを悟るべし。次に彼れ若し、美全般を目的として求め、而も種々の形態に於ける美は一にして同じきことを認識せずとせば、彼れや實に愚なりと謂ふべし。彼れ若し之れを知りたらんには、彼れ一物に對する烈しき戀愛を禁遏し、之れを輕視して小事となし、以つて一切の美なる形態を愛する者となるべし。且つ此行爲は彼を導きて、精神上の美は外形上の美よりも名譽とすべきことを考へしむるに至らん。此くて有徳の精神の者にして、若し聊か愛らしき所あらんには、彼れは其者を愛して満足し、以て彼れを保護し、青年を進歩せしむる所の思想を探り出して之れを出産せしめ、遂に其愛人をして、制度及び法律の美を思念し、觀

取し、凡て是等は一類のものたるを解し、人體美の如きは、以つて小事となすに至らしむ。法律及び制度の後には、彼れは、其者を導きて學術に至らしめ、以て其美を觀せしむ。決してかの一青年、或は人間、或は制度等の美の、卑しき、奴僕となり、又たは狹隘なる見識の者となるなく、能く美の豊富なるものを觀、美の大海に近づき、以つて、知識の無限の愛に於いて、多くの美なる、高尚なる思想及び概念を創造し、觀視し、遂に彼れ其海岸に成長して強力となり、最後に唯一の學術の示現は彼れに啓示さるゝに至る、是れ一切處の美の學術たるなり。余は談話を此點に進むべければ、君は願くは最大の注意を以つて之れを聽け。

「かの愛に關して此く十分に誨へられたる人、及びかの、美を正當なる順序と繼續とを以つて視ることを誨へられたる人は、終に至つて突然驚くべき美の性質を知るべし。(而してソークラテースよ、是は之れ吾等の以前の勤勞の終局原因なり)乃ち其性質たるや——第一には、此物永遠の者にして成長せず凋落せず、滿つることなく虧くることなし。第二には、一方より見れば美なりと雖、一方より見る時は醜たり、又た或時、或關係、或場所

に於ては美なりと雖、他の時、他の關係、他の場所に於て醜たり、一人には美なりと雖、他人には醜なりと云ふが如きものに非ず、或は顔面或は手或は身體諸部に似たる如きの美に非ず、或は言語或は知識の或形狀に於ける美の如きに非ず、或は他の諸物、例へば動物に於て、或は天に於て、或は地に於て、或は其他の場所に於て存する如きの美に非ずして、其美や絶對、脫離、單純、且つ永遠にして、増減なく、變化なく、他の一切諸物の、常に成長し又た消滅する所の美なるものに其美を與ふ、人若し眞の愛の感化に由つて、是より上に昇りて其美を見初むるに於ては、彼れの達すべき終點や遠かべざるべし。而して自己の力に由り、或は他に導かれて愛の諸物に到るらき眞の順序は、地上の諸の美なるものより始めて、單に之れを階段と爲し、此れに依つて其他の美に上り行くなり。其上り行くや、一より二に及び、二より一切の美なる形態に及び、美なる形態より美なる行爲に及び、美なる行爲より美なる概念に及び、美なる概念より絶對美の概念に達し、終に美の實相の如何なるものなるやを知るに至らん」と。マンチ子イアのチオチマ語を續ぎて曰く「愛するソークラテースよ、之れ人が絶對美を冥想

して、以つて他一切の事物に超然たるの生活となす。然りと雖、君若し一旦此美を觀る時は、かの金銀、美服、及び君等の精神を奪ひ、而して君及び多くの者は之れを愛好し、若し能ふべくんば飲食を廢することも、彼等を見、彼等と語るのみなりとも之れに満足して彼等と共にあらんとを求むる所の美童、美少年等、是等は到底其美に比較すべきにあらざるを知らん。されども人若し果して眞の美を見るの眼力を有すとせば如何にぞや——眞の美とは神聖、純潔、清明、無垢にして、死すべき人間の汚れなく、人生の虚飾或は彩色なき所のものなり。而して人之れを見て、其神聖、單純なる美と談話せば如何にぞや。此くてたゞ此交際に於て、心の眼を以て其の美を保有する時は、之れ美の肖像に非ずして、眞實の美を生み得るものと云ふべし、何となれば彼れ美の肖像に非ずして眞體を保有せるを以つてなり。而して眞正の徳義を生み、之れを養育し、若し死すべき人間にして能くすべくんば、以つて「神」の友となり、又た不死たるを得べし。此くの如きの生活は果して貴ぶに足らずとするか」と。

ファイドロスよ、此くの如きはデオチマの余に語りし所なり。余は之れ

をたゞ君にのみ語るに非ずして諸君等凡てに語るなり。而して余は其眞理に服す。余は之れが眞理に服したるより、又た此眞理を以て人々を説得せんとを欲す。而して人をして此境界に達せしむるものは、愛を措きて他に適當なる助力者あるを知らざるなり。之れを以て余は言はん、余自ら愛を敬せるが如く、各人皆な愛を敬し、愛の道を歩み、人を勸めて又た其如くなさしめ、且つ余が從來爲し來りし如く、余の力の及ぶ限りを以て愛の力と其精神とを讚美したる如くなさんど。

フアイドロスよ。余の今まで語りし所、君或は以て愛の讚美と謂ひ、或は然らずと云ふ、こは君の好むがまゝに一任せん。

ソークラテース語り終るや、一同拍手喝采し、アリストファテースは、ソークラテースが以前に自己の演説に對して引き合ひに出したる所に就いて何事か答ふる所あらんとせり。時に戸外に騒然として宴飲者の聲、吹笛妓の音響鳴りひびき、戸を敲く音聽こゆ。アガトーン從者に命じて來會者の何人なるかを見せしめて曰く、「若し彼等吾等の友人ならば入り來れと云へ、然らざれば宴會既に終れりと告げよ」と。暫時にして、アルキ

ソークラテース
語り終る

戸外宴飲者及び
アルキピアデー
スの聲聽ゆ

大酩酊のアルキ
ピアデーを花冠
及びリボンを戴
き来りアガト
ンを祝賀せん
す

會衆一同アルキ
ピアデーを歡
迎す

ピアデーの聲、内庭に響き渡れり。彼れ大酩酊の狀にして、わめき叫びて曰く、「アガトーン何處にありや、アガトーンの居る所に案内せよ」と。遂に藝妓及び友人等に援けられて、彼等の居る所に至る。アルキピアデー、及び蠶の大なる花冠を戴き、頭はリボンの波を打たせ、戸口に立ち現はれて曰く、「友人諸君を祝す。諸君は此の一人の酩酊者を仲間となすを肯んずるか、或は余の此所に來れる目的の如く、たゞアガトーンに此花冠を戴かせ、以て直ちに歸るべきか。余は昨日來ること能はざりしを以つて今日來れり。余の頭に戴ける此リボン、之れを人間中最も美麗なる、又た最も賢なりと云ふを得る所のアガトーンの冠となさんと欲す。諸君は余が醉へるの故を以つて笑へるか。諸君たとひ余を笑ふと雖、余は自ら眞理を語れることを能く知れり。されども先づ余に告げよ、余は醉へりと云ふことを諸君の承知の上にて、余は此處に入るべきか。諸君は余と共に飲むや否や。」

一同異口同音アルキピアデーの共に席に列ならんことを希望し、殊にアガトーンは之れを懇請せり。此に於て與にありし人々に援けられ

アルキピアデー
ス花冠をアガト
ーンに冠せしめ
んとす

アルキピアデー
ス、ソークラテ
ースの此席にあ
るを知りて驚く

アガトーンはソ
ークラテースの
愛人なりと云ふ

て、アルキピアデー室内に入り、自己の頭より花冠及びリボンを取り下し、之れをアガトーンに冠せんとして自己の目の前に捧げたるより、アルキピアデーの爲めに道を開きたるソークラテースを見ることなく、やがてアガトーンとソークラテースとの間の空席に坐を占め、アガトーンを擁して、之れを冠せしめたり。アガトーン侍者に謂うて曰く、アルキピアデーの紐靴を脱がしめ、而して同一臥床の三人中の一人たらしめよと。

是非其を願ふ。されども吾等の仲間の三人中の一人は誰ぞや、と云ひつゝ願みてソークラテースの在るを見て驚きて曰く、あゝヘーラクレスの神かけて、此は何事ぞや。ソークラテース此處に在りて常に余を待ちて横はれり。又た彼れの習慣として常に怪まれざる場所に在り。抑も君は君自己の爲めに何を言はんとせるか。又た何故にアリストファネスの如き滑稽先生の傍に非ずして、一同中の最も美麗なる人の傍に席を定めたるか、恐くは之れ君が企て、此席を取りしものならん、と余は信ず。

ソークラテース
戯れてアガト
ンと愛者愛人の
關係なるを云ひ
アルキピアデー
スの嫉妬を恐る
る眞似す

アルキピアデー
ス、アガトーン
の花冠の一部を
取りてソークラ
テースに冠せし
む

ソークラテース、アガトーンに向つて謂うて曰く、アガトーンよ、願くば余を保護せよ、アルキピアデーの余に對する情は重大なる事情となれり。余は一旦彼れの頌贊者となりしより、彼れ、余の、他の美しき人と談話することを許さず、又たたゞ見るをだに許さざるなり。余若し之れを爲す時は、彼れ嫉妬羨望の情を以て、たゞに余を罵詈するのみに非ずして、余より其手を離さず、或は余に或種の言を加ふることあらん。故に願くば彼れと余とを調停するか、或は若し彼れ暴行に及ばんとする時は、余を保護せよ、余は彼れの狂熱の所行を恐るゝなり。

アルキピアデー曰く、君と余との間は調停すべからず。然りと雖今は免るして譴責を猶豫せん。アガトーンよ、余は君に請ふ、願くば「ソポン」の一部分を余に返へし與へよ、之れ此の一般人々を制壓する者の驚くべき頭を飾らんが爲めなり——今若しただ君のみに冠せしめて彼れを粗畧にする時は、彼或は余を怨みんことを恐る。彼れは對話に於ては實に全人類に勝ちし者にして、其勝利たるや、君が一昨日勝利を博したるが如き、たゞ一度に非ずして、常に勝利者たりしなり。と、云ひつゝアガトーンの

アルキピアデー
ス飲酒をすむ

ソークラテース
の大酒量

頭より、リボンの一部分を取りてソークラテースの頭に加へて、再び身を横へたり。

而して彼れ謂うて曰く——友人諸君、諸君は素面なるが如し、是は堪えらるべきことに非ず、諸君は酔はざる可からず——之れ余と諸君と約束したる所なり——而して余は自撰して、諸君の酔ふまでは、此宴會の主人とならん。アガトーンよ、吾等に大杯を與へよ、或は寧ろ侍者に命じて、余に其の冷酒器を持ち來さしめよと。彼れの注目したる冷酒器は一升二三合の容量を有せるものなり。彼れ之れに注がしめて飲みほし、ソークラテースに廻はし、侍者に命じて之れに注がしめて曰く、諸君、見よ、余の巧妙なる策畧もソークラテースには何の効果もあらざることを。何となれば彼れ酒幾何量なりとも之れを飲むとを得、而も酔ひに近き程ともならざるなりと。ソークラテース侍者の注ぎし酒杯は之れを飲み干したり。

エリュキシマッホス曰く、アルキピアデー、よ、こは何事ぞや。吾等たゞ酒を飲むのみにして、談話も爲さず、歌も歌はず、たゞ渴せる時の如く飲むのみにして可ならんや。

アルキピアデーは答へて曰く、君の萬歳を祝す——最も賢明にして著名なる父の著名なる子たる君、萬歳。

エリユキシマッホス曰く、足下に於ても御同様。されども吾等何をか爲すべき。

アルキピアデーは曰く、其は君に一任せん、

「賢明なる醫師は吾等の負傷を治療するに長せり。」

故に吾等處方のまゝに従はん。君は何を爲さんとせるか。

エリユキシマッホス曰く、君の來らざるの前、吾等各々順次を以て、成し得る限り、最も善く愛の讚美を演説するの決議を爲せり。順次は左より始めて右に廻り、吾等皆語り終り、君一人未だ語らず、たゞ善く酔へるなり。故に君は演説せざる可からず、然る後何事か君の欲する所をソークラテースに課し、ソークラテースは又た其右の次席の人に、順次廻はすべきなり。アルキピアデーは曰く、エリユキシマッホスよ、其は甚だ善し。されども酔人の演説と、素面の人の演説との比較は甚だ善きものに非ず。愛する友よ、君は、ソークラテースが今ま言ひし所の事は全く眞實なりと信ずるか。

余は云ふ此は全く反對の事實にして、若し余にして彼の目前に於て、神たれ人たれ、苟も之れを讚美する時は、彼れ余を捕へて決して離すことを爲さざるなり。

ソークラテース曰く、あゝ此は君の事なり。

アルキピアデース曰く、ポセイドーンに誓つて謂ふ、君之れを否むの用なし。余は君の面前に於ては、君の外何者をも讚美せざる可ければなり。エリュキシマッホス曰く、君の欲するまゝに爲せ、若し好まばソークラテースを讚美して可なり。

アルキピアデース曰く、エリュキシマッホスよ、君は如何に思へるか、余は彼れを攻撃して、君等凡ての面前にて彼れに譴責を加へんか。

ソークラテース曰く、君は何を爲さんとせるか。或は余を滑稽なるものとなじて笑はんとせるか。君の讚美の意味は是れなるか。

君若し許るさば、余は眞理を語らんとせり。

余は單に之れを許るすのみにあらず、又た之れを獎勵す。

アルキピアデース曰く、然らば余は直に之れを始めん、若し余にして眞

アルキピアデースの所謂眞理

アルキビアデー
ス、ソークラテ
ースの讚美演説
を始む

ソークラテース
はセイレーノス
の半身像の如し

笛吹けるマル
シヤスの如し

ならざることを語れりとせば、君若し咎めんと欲せば演説を中斷して可なり。余の意思は素より眞理を語らんとするにありと雖、其誤謬なるに於ては、之れ虚言なり」と云へ。されども余の心中に來りし如く語りたりとも、君、爲めに驚くこと勿れ、何となれば一切君の驚くべき性質を枚舉して之れを演説するは困難なることに非ずして、余の如き事情の下に在るものに取つては甚だ容易なることとなす。

余は、ソークラテースを讚美するに一種の形様比喻を以つてせんとす。而してソークラテースは余を以つて滑稽するものなりとせん。されども余はソークラテースを嘲笑せんとするには非ずして、たゞ眞理を語らんとするにあるのみ。余は言はん、ソークラテースは正しく、彫刻者の店頭に笛吹き居る所のセイレーノスの半身像なりとす。而して是等の彫像は中央より開くやう作られありて、其内部には神の本尊は在じませり。余は又云はん、彼はマルシヤスと云へるサチュロスの如しと。ソークラテースよ、君の容貌のサチュロスの如きは君之れを否まざるべし。其他尙ほ類似の點なきに非ず、例へば君も亦快活なると之れなり。君若し自白せず

ソークラテース
は笛を用ゐずた
だ書讀を以つて
人を感ぜしむ

んば、余は自ら之れを實際上より證明せざる可からざる位置にあり。君は吹笛者には非ざるか。然り、君はマルシヤスよりも一層恐るべき長遠せる吹笛者なり。何となればマルシヤスは樂器を用ゐ、其呼吸の力に由つて人心を感ぜしむると、尙ほ現今彼れの音樂を傳ふるものゝ爲すが如し。又たオリュンポスの音樂はマルシヤスの教へより傳はれるものにして、是等の音樂は斯道の大家に由つて奏さるゝとも、又たは憐れむべき吹笛妓に由つて奏さるゝとも、他の有せざる一種の力を有せるものにして、ただ是等のみ能く人心を左右し、諸神及び神秘を要する者等の求むる所を啓示するなり、之れ彼れ神の感化を受けたるに由るなり。然りと雖君は笛を用ゆることなく、單に音聲のみを以てして、能く同一の結果を生ず、之れ君と彼れとの異なる所となす。吾等他の演說者を聽く時、其者甚だ雄辯の大家なりと雖、之れを君に比較する時は、實に全く何の感動をも與へざるなり。然るに君の演說或は君の言語の片々なりと雖、又た之れ傳へ聽きしものなりと雖、又た甚だ不完全に傳へられしものなりと雖、能く各人の心を動かし、男子と雖も、女子と雖も、小兒と雖も、尙も之れを聽くものを

雄辯の大家と雖
ソークラテース
に比する時は人
を感動せしむる
の力なし

ソークラテース
の引力はセイレ
ーンの如し

感動せざることなし。君若し余を以て醇漢なるのみとすることなくんば、余は君の感化力の余に對して常に大なりしこと、及び今も尙ほ其如きは、單に之れを言ふのみに非ずして、又た之れを誓ふべし。實に余がソークラテースの言語を聽く時は、余の胸は、コルユバンテス宗の遊興者の如く躍り、我眼は涙の雨を爲せり、而して余は他の人も亦同様に感動さるゝとを知る。余はペリクレーヌ及び其他の雄辯家の演説を聽く時、彼等は甚だ善く辯せりと思ふと雖、同様なる感動なく、余の心は彼等の演説に由つて興起し、或は余自ら奴隸の状態にありとの憤勵心を起こすこともあらざるなり。然るに此のマルシヤスは余をして屢々、余が現在爲しつゝある所の生活に堪へ能はずとまで感せしめたる位置に置きたり、ソークラテースよ、之れ君の承諾する所ならん。而して、若し余にして耳を彼に塞ぎて、此のセイレーンより遁れ去るに非ずんば、彼れ余を引き留めて、彼れの足下に坐して老ゆるに至らしむべし。彼れ余に自白せしむるに、余が靈魂上の要求を顧みず、以つてアテーナイの政務に携はるが如き、余の現在の如き生活を爲すべきものに非ざること、を以つてせり。故に余は耳を

アルキビアデ
スの功名心はソ
ークラテースの
爲めに内心に苦
しむ

ソークラテース
美少年を好む

蔽ひて自ら彼れより分離するなり。彼れは余をして自ら耻を感せしめたる唯一の人なり、此耻の感たるや、余の性質中に無き所のものなるは君の思ひ得たる所なり。而して其他是れに同じことを爲し得るもの一人としてあることなし。余は自ら爲さんとする所にして、彼れ之れを爲す可からずと命ずる事に對し、彼に答へ又たは之れを否むこと能はざるを知る。然りと雖余は彼れの前を去る時は、功名の念は勃然として起りて直に余の心胸を充たす。是故に余は彼れより遁れ去るなり、何となれば若し彼れに逢ふ時は、余は彼れに懺悔して誓ひたる所を耻づべければなり。此くて余は屢々彼れの死せんことを願ひたり。されども若し彼れ死せんには、余は之れを喜ばんよりも、寧ろ甚しく悲しむことは之れを知れり。此くて余の、此人を所置するの知や窮せりと謂ふべし。

之れ余及び多くの人が此サテュロスの吹笛に苦しむ所以なり。されども尙ほ余の言ふ所を聴け、余は、如何に君がかの偶像に酷似し、又た如何に驚くべき力を有せるかを云はん。諸君の内一人として必ず其を知るものあらざるべしと雖、余は能く彼を知れるを以つて、余が始めたる如く彼

ソークラテースの外面はセイレスの如し内部には人を惑はすばかりの美麗なる神體存す

アルキビアデース以爲へらくア

れに就いて演説する所あるべし。諸君は彼れが如何に美少年を好めるかを見ざるか。彼れ常に美少年と共に在り、又た常に其美に感動し、又た彼れ何事をも知らず、一切の事に無知なり——之れ實は彼れの外部に被覆せる所なり。此點に於いて、彼れはセイレーノスの如きには非ざるか。然り、正しく之れ彼れの假面にして彫刻したるセイレーノスの頭なり。されども一度之れを開く時は、あゝ飲酒の朋友諸君、其の内部には節制なる神體は鎮坐しませり。諸君は、人々の驚歎する所の美なり、富なり、名なり、是等は彼れに取つては何物にてもあるなく、彼れ全く之れを蔑如せるを知らざるか。此等諸善を有せる人と雖、彼れ毫も之れを眼中に置くことなく、人類全體、彼れに於ては何物にもあらず、彼れの一生は、是等を嘲笑輕視するに費せり。されども余一旦彼れを開き、其内部の真正なる目的を見るに於ては、余は彼れの内には神聖なる黄金に輝く神體ありて、其美は以て能く人を嬌惑し、直に余をしてソークラテースの命する如く行はせ得るものあるを見る。是等は人々の觀察に洩れしなるべしと雖、余は是れを見たり。時に余は以爲へらく、彼れは眞に余の美に愛着せるものな

ソークラテースは
自己の青年美に
戀着せるものな
りど

ソークラテース
を招待す

ソークラテース
戀愛に就いて一
言も爲すなし

アルキピアデー
ス、如何にもし
てソークラテース
を口説き落さ
んと決心す

りど。而して又た以爲へらく、是れ彼れの知れる所を盡く聽き得る大機會なりど、何となれば余は大に自ら余の青年美の引力あるを信せるを以つてなり。此目的を達せんと欲して、余は次に彼れを訪問したる時、常に余に従ひ來れる従者を歸らしめたり、余は全く實を自白するものなれば、諸君願くば靜聽せよ。若し余にして詐りを語りしならんには、ソークラテースよ、幸に其誤謬を指斥せよ。此くて彼れと余とは兩人の差し向ひのみ。而して余以爲へらく、此く吾等二人のみなる時は、ソークラテース必ず戀愛者の爲すが如く、愛の言語を語るならんと、而して余は心に悦び居たり。然るに戀愛に就いては彼れ一言だに爲すことなく、平常の如く談話し、以て余と共に終日語り暮らし、而して別れたり。其後余は彼れに角力場に挑戦したりし時、彼れたゞ余とのみ數度角力して勝負せり。而して余以爲へらく、此方法を以つて余は成功することを得べしど。然るに少しも其功あることなく、此くて余は失敗を續づけたり。終に余は心に謂へらく、今や余は強手腕を揮つて、余が始めたる如く、大膽に彼れを攻撃し、事の決着するまでは決して中斷すること勿かるべしど。因つて、余

再び招待す

ソークラテース
アルキビアデ
スの家に宿泊す

は彼れを晚餐に招待するに、宛も彼れは一個の美少年にして、余は其れに意ある所の戀愛者たるが如き趣向を以つてせり。然るに彼れ容易に來るを肯んせざりしが、漸くにして之れを承諾せり。而して彼れの始めて來るや晚餐を終るや否や、直ちに辭して歸らんとし、余は之れを留むると能はざりき。尙ほ余は初志を貫徹せんと欲し、再び彼れを招待し、吾等食事後談話して夜更けたり。彼れ歸らんとするや、余は夜の更けたるに事よせて、彼れに勸むるに、留まりて余の家に宿せんを以てせり。彼れ食事したると同じ床上に、余と床を並べて寝ねたり。而して寢室中他に一人も在ることなし。此點までは何人に語ることも耻づべきことなし。雖、是より後の事は、余は素面にては諸君に語ることも能はざるなり、されども格言にも云へるが如く、酒は、小兒等共に在りとも又た在らずとも、眞理を語らしむと言へるを以て、余は之れを語らざる可からざるなり。且つ又た余のソークラテースを讚美するに當り、ソークラテースの高尙なる行爲を隱蔽するは宜しきことに非ず。且つ余は毒蛇に刺衝されたる苦痛を感せり。而して人々の言ふ所に由れば、此苦痛を感せる者は、たゞ之

燈火は消されたり
ソークラテースと
アルキメデースと
二人のみ

れを、其經驗ある人々にのみ語るに云ふ、之れ、たゞ彼等のみ能く其苦痛を解することを得、又た其苦痛より出でし所の言語動作を判するに過激なることなきを得んどの希望に由るのみ。實に余は蝮蛇の毒齒以上のものに害されたり。余は余の精神に、心情に、及び其他の部分に知る、苦痛の最も悪しきものにして、如何なる毒蛇の齒よりも、最も激烈に伶俐なる青年を苦しむるものは、實に哲學の苦痛なるを。此の苦痛は人をして或事を言はしめ又爲さしむ。余の周圍なるフアイドロス、アガトーン、エリュキシマッホス、パウサニアス、アリストデーモス、アリストファチース等諸君を始め、余に至るまで、ソークラテースは云ふを要せず、皆な哲學に熱狂したる同一の經驗を有せり。是を以つて余の爲したる所を寛假し、今ま言はんとする所に耳を傾けよ。されども侍者及び其他の凡俗粗野の輩は其耳の門戸を閉ざせ。

燈火は消されたり、家僕等は彼方に立ち去りたり。其時、余は心に謂へらく、余は彼れと共に明瞭にし、曖昧の事あるを要せずと。此くて余は彼れを揺り動かして曰く、「ソークラテースよ、君は已に寝ねたるか。」彼れ曰

アルキピアデー
ス、ソークラテ
ースを口説く

ソークラテース
冷然として他を
言ふ

く「否。」余曰く「君は、余が何を思考せるやを知れるか。」彼れ曰く「其は何ぞや。」余答へて曰く「思ふに、余が從來有したる多くの余を愛するものゝ内、實に君は最も余に相應はじき人にして、君は言語餘りに謙讓なるが如し。余は君の此好意及び他の好意を否むの愚なるを感せり、故に余は余の有せる所、及び朋友の有せる所を以つて、君の足下に來り、余の徳義の道に進むことを助けんことを願ふなり。之れ余の萬事に勝りて欲する所にして、之れを爲すに於いては、君は他の者よりも最も多く余を助くる者なることを信す。且つ君の如き人物の戀情を拒絶するは、愚者の言ふ所は之れを度外するとも、智者は果して何と云ふならんかを考へ、寧ろ之れを以て耻となすの理由を有せりと信す。」此言を聽きて彼れ其特質たる所の冷笑の温和の態度を以てして曰く「我友アルキピアデー、若し君の言ふ所は眞にして、又た余に力ありて、依つて以て君を進歩せしむるものありとせば、君の目的や實に高尚なりと謂ふべし。實に君は、余に一種高價の美ありて、其の美たるや、余が君に於いて見る所のものよりも無限に高きものなることを余に認めざる可からざるなり。君若し之れを認

ソークラテース
自己の美はアル
キピアデースの
美よりも高尚な
りトす

アルキピアデー
ス成功せず

めて、余と與に其美を分有し、又君の有せる所の美と、余の有せる所の美とを交換せんと欲せば、君は余に由つて大なる利益を得べし。君は外貌の美に代へて、眞の美なるものを得べく——テオメーデースの如く、眞鍮に交換して黄金を得べきなり。愛する友よ、されども再視して、余に欺かれ居らざるやを思へ。身體上の眼力の衰ふる時は心は批評の方面に成長するものなり。而して君の未だ此點に達せざるや遠し。余は之れを聽きて曰く、余は已に余の目的は之れを言へり、之れ眞面目に言へるなり。而して君は、君及び余に取つて如何なるとは最も善しと考ふるや。彼れ曰く、其は善きことなり。他日、此事及び其他の事に關して最も良きことを考へ、其如く行ふことを爲さん。此答を聽きし時、余想像すらく、彼れ必ず余の言に打たれ、余の放ちたる矢は彼を傷け得たりと。此くて余は彼れの其他の言を待たずして起き上り、余の上衣を彼れに被せかけ、余は彼れの靡り切れたる上衣の中にもぐり入りたり、時之れ冬なりしを以てなり。而して余は終夜此の驚くべき怪物を抱擁して寝ねたり。ソークラテースよ、是れ君の否まざる所なるべし。然るに凡て此くの如くなるにも係

美もソークラテ
ースを動かすに
足らず

はらず、彼が余の懇願に超然として、余の美に對するや、輕視、嘲弄、侮蔑を以てし、余は眞に自己の美に或引力ありと信じたる其美も彼を動かすに足らざりき。嗚呼、審判者諸君願くは之れを聽け。諸君はソークラテースの傲慢なる徳の審判者たるべし——此くて余は翌朝覺めて、宛も父或は兄の寢床中より起き出づるが如き思ひを爲せり、諸神及び女神等、實に余の
（匿人なり。）

此く拒絶されたる余の不名譽の感や、諸君は果して如何なるべしと想像するか。されども余は彼れの自然の節制、自制、及び勇氣に對して敬歎措く能はざるなり。余は未だ嘗て彼れの如き智慧あり、忍耐力ある人に、遭遇し得ることを想像だに爲し得ざるなり。余は彼れの爲したることな
に就いて決して怒ることなく、或は彼れの仲間より脱出する等のことなく、たゞ彼の心を得んとを力むるあるのみ。余は之れを熟知す、若しアイ
アスにして銳利なる刀劍に由つて傷つけられずとせば、其金錢に由つて
傷つけられざるは一層明瞭なることとなす。而して余は自己の身體の
美を以つてソークラテースを生擒する唯一の好機會を逸したり。此く

ポチダヤ戦争の時ソークラテースの表はしたる驚くべき耐忍力

観望時の耐忍力と宴席第一の歡喜力を有せる人

て余は其方途に迷ひ、殆ど如何にすべきやを知らず、何人と雖、此くまで望みなく他より奴隸の如く爲されし者はあらざるべし。此事は凡て余も彼もポチダヤ戦争に出陣するの前なりき。此戦争中、余は彼と共に食事せり。其時余は、彼れがよく疲勞饑渴に堪ゆる非常なる力あるを観るの機會を得たり。軍中時に輻重の杜絶することある場合の如き、彼れの耐忍力は實に驚くべきものにして、吾等は爲めに食物なくして外出せざるを得ざらしめらるゝことあり。而して其耐忍力は、單に余に優れるのみに非ずして能く一切の人に勝り、一人としてソークラテースに比較すべきものなし。されども祭日等に於ては、眞に歡喜の力を有せる者は實に彼れ一人にして、素より酒を好まずと雖、若し其の強ゐらるゝに於ては飲酒量なく吾等一切を後へに墜若たらしむ。其最も驚くべきは、一人としてソークラテースの酔ひたるを見し者なきこととなす。若し余の言にして誤らずとせば、此は直に試験するを得るなり。彼れの寒氣に堪ゆるの力は又た驚くべきこととなす。彼の地の寒氣は實に嚴酷なるものにして、降霜凜烈、人皆戸内にありて外出せざるか、若し或は外出する時は、衣服

ソークラテース
終日終夜佇立し
て沈思冥想す

を重ぬること限なく、靴は善く之れを穿ち、足は毛皮或は羊毛を以つて之れを纏へり。人々の此くの如きの間に於いて、ソークラテースは一人、素足以て嚴氷を踏み、通常の衣服にて、靴を穿てる他の兵士等の何れよりも善く進軍せり。之れを以て人々皆な彼れを嫉視せり。何となれば此點に於てソークラテースは彼等を輕蔑せる如く見へたればなり。

余は諸君に一話を話したり、又た他の一話を語らざる可からず。之れ「耐忍なる人物の行爲と耐忍とに關すること」

にして、亦た聽くべきの價值あるべし。彼れの軍中に在る時或日の朝、彼れ一事解し得ざる事ありしより、其事を考へ始めたるが、決して其思考を中止することなく、拂曉より正午まで考へ續づけ、彼れ其所に佇立して思考せり。正午の頃、人々ソークラテースの思考せるに注目し、此風評人々に傳はり、皆驚きて、ソークラテースは拂曉より、今に至るまで何事をか考へつゝ立てりと言ひ騒げり。終に夕景に至り、食事の後、或イオニア人等、好奇心より彼等の薦ハレロを持ち來り、此は冬に非ず、夏の事なりて之れを敷き、蒼天の下に臥して、ソークラテースは終夜此處に立ちて思考するや否

ソークラテース
アルキビデース
其功ソークラテ
ースにあり賞譽
はソークラテ
ースに與へらるべ
きなり

やを見んとせり。此くて彼れ終日終夜此處に立ちて翌朝に至り、祈禱を
朝日に捧げて此處を去れり。諸君若し好まば余は戦争に於ける彼れの
勇氣に就いて語るべし、余は實に之れを語らざるを得ざるなり。何とな
れば余の生命を助けたるは彼なればなり。此戦争は實に余が勇氣の褒
賞を得たる所のものなり。余は此戦争に負傷せしも、彼れ余を放棄する
ことなく、能く余を救ひ、又た余の武器をも完うせり。故に將官が、一部は
余の階級に對して、余に與へんとする所の褒賞は、寧ろ之れをソークラテ
ースに與ふべきものなり。因つて余は此れを將官に語れり、此事に就い
てはソークラテース余を譴責せざるべく、又た否まざるべし、されどもソ
ークラテースは將官等よりも一層熱心に、彼に非ず余に褒賞すべきこと
を上申せり。尙ほ注意すべき一話あり、之れデリオン戦争の後、軍隊敗
北して退軍する時の事なり。此時余は馬上にありしを以つて、比較せば
危険少く、ポチダヤ戦争の時よりも能くソークラテースを見得るの機會
ありき。軍隊敗走する時、ソークラテース及びラッヘースは共に退き居た
り。時に余彼等に遭ひて、失望すること勿れと告げ、又た彼等と共に在る

べきことを約せり。アリストフ、アテースよ、君の口吻を以て云はゞ、彼れの
其場の態度たるや、宛もアテースの街上にあると毫も異なる所なく、従容
として塘鷺の如き歩調を以てし、眼を廻轉して、自若として敵を計り、朋友
を注意し、其沈着なる態度は何人も之れを認むべく、遠くよりするも之れ
を知るを得べく、何人たりとも彼れを襲ふ者あらんには、強硬なる抵抗を
試みんとするの風姿凜然たり。此くて彼れ及び其仲間の人々は遁るゝ
を得たり。何となれば其仲間の人々は、皆な戦争の経験なく、たゞ先づ遁
ぐる者を逐ふの類なればなり。殊に余の注意したる所は、其精神の確固
なることは、彼れ遙かにラッヘースに優れることとなす。余若しソークワ
テースに就いて驚くべきとを讚美せんと欲せば、此他尙ほ少なからざる
なり。素より其平常の事に於ては、大抵常人の如しと雖、其異なる點に至つ
ては、現在生ける人間の中、或は古人の中、全く似たる所なきは實に驚くに
堪わたり。諸君は、ブラシダス及び其他の人々は、アヒレウスの如く、チス
トール及びアンテール等★はベリクレースの如きを想像することを得
べく、其他の有名なる人物大抵此くの如きなり。然りと雖此怪物に就

ソークラテース
は外面セイレー
ノスにして内部
は神なり

いては、如何に時代を隔つとも、現在生ける人の中、或は史上の人物中なりとも、たゞ余が前に言ひし所のセイレーノスと、サテュロスとを除くの外、決して其似たる者を發見すること能はざるべし。之れたゞ彼れ自身に關してのみの譬喩に非ずして、又た彼れの言語に就ても然るなり。余は前に此事を謂ふことを忘れたるが、始めて彼れの言語を聴く時は甚だ滑稽に感せらるゝなり。彼れは遊興を好めるサテュルスの皮の如く、其言語を以つて衣となせり——何となれば彼れ常に荷物驢馬、鍛冶、靴直し、柔革者の事を口にし、又た常に同一の言語を以つて、同一の事を反復せるより、未だ彼を知らざる無知の人等は彼を笑ふと雖、其の半身像を開きて、内部に何物の存せるやを見る者は、是等は實に無雙の言語にして、其内深き意味あり、又た最も神聖にして、徳義の好模範及び大議論を含蓄し、寧ろ善良にして尊敬すべき人物の義務とすべき所の全體は此内に存せることを知るべし。

友人諸君、之れ余の、ソークラテースの讚美たるなり。余は又た彼れが余を惡待したるに付き、彼に對する余の譴責をも附加したり。彼れの惡

ソークラテース
彼の演説はア
ガトーンとソ
ークラテースとを
離間せんとする
ものに外ならず
と戯言す

待たるや、たゞに余のみに非ずして、グラウコーンの子ハルミデース、デオ
クレースの子エウチデモス、其他の多くの青年亦同じく惡待されたり
——彼れ、始めは彼等の愛者として始むと雖、終りは其位置を轉倒して、却つ
て彼等をして彼れに媚を呈せしむるに至るなり。アガトーンよ、故に余
は君に忠告す、彼れに欺かるゝと勿れ、余の先例に鑑みて警戒せよ、而して
格言にも云へるが如く、愚人たるとなく、經驗に由つて學ぶべし」と。

アルキピアデース語り終へし時、人々其飾りなく、尙ほソークラテース
を戀愛せる如きを一笑せり。ソークラテース曰く、アルキピアデースよ、
君は素面なり、然らずんば、決して君のサチュロス流の讚美の目的を隠蔽す
ることを爲さざりしなるべし。何となれば君の爲したる長き演説は、た
だ之れ精巧なる迂餘曲折循環の議論にして、其目的とする所は最終の點
に來れるものゝ如し。而して君は離間を試みて、余とアガトーンとの間
に不和を引き起し、余をしてたゞ君のみを愛し、其他何人をも愛すること
勿らしめ、而して君は、たゞ自己一人アガトーンを愛せんとするものゝ如
し。然りと雖此サチュロス或はセイレーノス流の劇曲の計畧は看破せら

アガトーン席を
轉じてソークラ
テースの傍に至
らんと云ふ

れたり。而して、アガトーンよ、君は彼をして吾等の間を不和離間せしむること勿れ。

アガトーン曰く、君の言ふ所真に然り、思ふに彼れが其身を余と君との間に置きしは、全く吾等の間を割かんとするものなり。然りと雖彼れ、之れに由つて何の得る所もあらざるべく、余は君の次床に席を轉すべければなり。

ソークラテース曰く、然り、然り、是非共此方に來り、余の次席に横臥すべし。

アルキビアデース曰く、あゝ余の、此人の爲めに愚弄されたるは如何にぞや。彼れは順次に余よりも好き者を得んと決心せるなり。余は君に願ふ、アガトーンをして吾等の間に來つて横臥せしめよ。

ソークラテース曰く、其は出來ざるなり、君が余を讚美したるが如く、余も亦余の右側の人を讚美せざる可からずとせば彼れ余に由つて讚美さるべき時に當つて、再び余を讚美して其順序を亂すなるべし。故に余は君に此事の同意を要求し、又た嫉妬せざることを希ふ。何となれば余は

青年を讚美する大なる熱心を有するものなればなり。

アガトーン叫びて曰く、然り、然り、余は直に起つて坐を移し、ソークラテースに讚美せられんことを欲す。

アルキピアデース曰く、例に由つて、ソークラテースの在る時は、其他の人は美少年に接近するの機會あるなし、且つアガトーンを彼れ、自身の近くに引き寄するの特殊の理由を發見するに如何に巧妙なるかな。

アガトーン、ソークラテースの傍の床に其席を取らんとして起立せし時、突然宴飲者の一團入り來つて宴席の順序を亂し了れり。一人戸を開放して出て去りし者ありしより、彼等宴飲者等、此所より宴席に闖入し、之れより大混雜起りて、人々皆多量の酒を飲むことを強ひられたり。アリストデューモスの云ふ所に由ればエリュキシマッホス、フアイドロス及び其他の人々は立去り、彼れ自身は寝りたるが、夜は長かりしを以つて十分に寝ねたるが、其目さめし時、或者は寝り、或者は去り、たゞソークラテース、アリストファネース及びアガトーンの三人のみは寝ねずして大杯を廻はして飲み、ソークラテースは、尙ほ彼等と談話し居たり。されどもアリストデー

他の宴飲者の一團入り來り大混雜大酒となり或人々は歸宅す

ソークラテース尙ほ大杯を廻はして終夜飲み廻はし居たり

翌朝に至リソ
クラテイス辭し
テリュケイオン
にて水浴して夕
景に至つて家に
歸りて休む

モスは之れ半ば目ざめたる時にして、談話の始めは聴かざりしと雖、其の記憶せる主要なる所は、ソークラテイスが他の二人に向つて、喜劇の天才は悲劇の天才と同一にして、悲劇を作する所の人は、又た喜劇を作し得る人たるべきを主張し居たることとなす。而して兩人其言を承認せざるを得ざるが如くなりしが、尙ほ寢むかりしを以て、十分ソークラテイスの意味を解すること能はざりき。而して第一にアリストファチイス寢り、夜漸く明けんとする頃アガトーン寢れり。ソークラテイスは彼等の寢りし後辭してアガトーンの家を出で、アリストデーモスは例に由つてソークラテイスに従つて歸へれり。リュケイオンに至りて、例の如く水浴して終日其所に暮し、夕景に至りてソークラテイスは家に休まんとして歸へりたり。

注

釋



ハルミデース

○ポチダヤの軍隊(九頁)——ソークラテース兵役に服しポチダヤ戦争に赴きて歸へり來りしなり。此の戦争は『中島戦争』の原因を爲せる者にしてスバルス側の同盟諸邦の反抗を引き起こしたるものなり。ポチダヤはグレシアの北方マケドニアの地名なり。

○クリチアス(一〇)——クリチアスは後年アテナイ没落の時に敵に内通して降り、遂に民政を轉覆し、三十人寡頭政府(三十暴政家)なるものを組織し、自ら其首要なる人物となりしなり。而して後年ソークラテースに反對し、其論辯を禁じたることあり。人物を以つて云へば不買なりと雖、又た有力の敵腕、宋たるなり。プラトーンの書中には其非行を告むる所の記事なし。

○ヘーラクレースの神かけて(二三)——ヘーラクレースは大神ゼウスと、アンフィトリオン(Amphitryon)の妻なるアルクメーデー(Alkmene)との間の子にして、勇力の化身とも云ふべく中神、半人の大英雄なり。種々の勞苦と艱難とを経て人間を猛惡動物の害より救ひたる人なり。グレシア人此英雄に神かけて誓ひの言葉に使用するなり。

○ソローン(二四)——アテナイ古代の有名なる立法者なり。七賢人の一なり。

○符呪(一六以下)——我國等にて爲す所とは勝か速を具にし、心地よき言語もて人心に觸れし、信仰心を起こさしめて人心に作用するやうのものゝ如し。

○ヘラス(Hellas)(一八)——今日所謂グレンシアとは、グレンシア人自ら稱するに非ざるなり、グレンシア人は其人種をヘレーン(Hellen)ト稱し、ヘレーンの住する地は、何れの遠隔の地にもあり、雖(本國も諸島も殖民地も)盡く之れをヘラスと稱せり。即ち廣き意味のグレンシアなり。支那字に「希臘」と書き、グレンシアと讀ますは誤りにして、「希臘」は實は「ヘラス」と發音し、振り假名するを正當となす、希臘と書き支那音「グレンシア」或は「グライキ」の發音は出でざるなり。

○アナクレオン(二二)——サモス島のテオスに生る。紀元前六世紀頃の人。戀愛、宴飲、美の詩人にしてテオスの聖人と稱せらる。

○ヒュペルボレオス人アパリス(二二)——ヒュメルボレオスとは神話上の地名にして、極北寒風の吹く彼方にありて、常に春に、不斷に平和に、又た永久の若きことの樂しみある國なりと云ふ。此國の人民はアポロンの神の愛を被れるものとなす。(列子に所謂極北國に似たり)アパリスは此ヒュメルボレオスの人にして、聖人たり詩人たり又た豫言者たり。而してアポロンの輿へたる矢に乗りて海陸を旅行し、又た全地上の疫病を絶滅せし人なりと云ふ。紀元前五百七十頃頃グレンシアに來れり。多くの詩ありてアパリスの作なりと云ふものありと雖、今も存せるものなし。又たピタゴラスの友人なりしとも云ふ。恐らくは英國のドルイド(Druid)の宗教の人ならんとも云ふ。傳説種々ありと雖信す可からず。

○「爲す」「作す」(三七)——「爲す」は英語の *make* を譯したるものにして、グレンシア語の *poiein* なり。「作すこと」(爲すこと)(*poiein*)は *poiein* なり。「作す」は英語 *make* にしてグレンシア語の *poiein* なり。「作すこと」

(「量數」)は(*κοινηται*)なり。而してギリシア語に在りては *κοινηται* (「作す」英の *make*)は又た *παραται* (「爲す」英の *do*)を含むものとす。而して此くの如き區別は日本語に於て譯し別くるは甚だ困難なるのみに非ずして、又た日本に取つては殆ど無益なりとす。

○ヘシオドス(三七)——ホメーロスよりも殆ど百年後の詩人なり。諸神のことを歌ふの外、又た種々教訓的、實業獎勵的の詩を作れる大詩人なり。

○デルフォイ神社(四一)——アポローンの神社にして、其神託を以つて有名なり。(ピュチオスは其舊名なり。)

○「宛も之れ、より大」なるものは或物よりも、より大なるべき性質のものなるが如きか(五二)——之れソークラテースが、學術は其學術の對象或は目的物とは異なること、關係なるものは關係する所の物と異なる如きを示めさんとするものなり。自己及び其他物に於ける關係は、大小の比較の場合に於ては全く衝突にして、其他の場合即ち感覺の場合の如きは、殆ど思想すべからざるなり。(英譯者の言に由れば此部分のギリシア語法は、十分明確なる語法を以つて英譯すること能はず、聊か不明瞭なるは避くべからずと)

○エジプトの犬(六六)——エジプトにアヌビス(*Anubis*)なる神あり、死人を他界に導く神にして、頭は大の頭の形の神なり、故にプラトーン之れを「エジプトの犬」と稱せしなるべし。エジプトにては此神をアチブ(*Achub*)と謂ふ。

○角の門。象牙の門(六六)——ギリシアの傳説に、盧妄に終るべき夢は象牙の門より來り、

眞實となるべき夢は角の門より來ると云へり。

リュシス

○アカデーモス園(八五)——之れアテーナイ市に近き公園にして又た體操場あり。アカデーモスとは有名なる人物の名なり。之れに由つて此公園に名づく。此後プラトーン此公園にて門弟子を教へたるよりプラトーン學派を稱してアカデミヤ(Akadēmeia-Academia-Academy)派と云ふ、又た高等教育或は文學美術等の學院をアカデミーと稱するも此に基づくものなり。

○リュケイオン(八五)——之れ亦公園にして運動場ある所なり。此處にアポローンの神社あり、リュケイオンとは、アポローンが狼(Lykos)を殺したるとあるより、狼殺しをリュケイオス(Lykeios)と稱ひ、之れよりリュケイオンとなれるなり。此公園は此後プラトーンの高弟アリストテレース(Aristoteles)が諸弟子に哲學を授けたる所にして、プラトーンのアカデーモス園に於けるが如き所なり。

○ピュチオス祭(九一)——グレシアには大祭四あり、(一)ピュチオス祭(二)地祇祭(三)子メア祭(四)オリュンピア祭之れなり。ピュチオスとはピュトーン(Pythōn)より來りし名稱にして、ピュトーンはデルフォイの舊名なり。昔しペルナッソス(Parnassos)山の巖窟中一犬蛇ピュトーン(Pythōn)住せしをアポローンの神、デルフォイの近くにて之れを殺したるより、ピュトーンは地名となり、デルフォ

イに祭れるアポローンをピュチオス(Pythios)のアポローンと稱するに至れるなり。而して此祭禮をピュチオス祭と稱し、毎四年に之れを施行せり。オリュンピア祭に次ぐグレシア全土の大祭なり。

○地峡祭(九二)——オリュンピア祭に次ぐ全グレシアの大祭にして、コリントス(Korinthos)地峡のポセイドーンの神を祭れるものなり。二年毎に一祭す。祭禮中には種々の遊戯競走あり、演説あり、音樂等あり、其優勝者は早芹菜オランゲセリの花冠を得。

○子メア祭(九一)——子メアはアルゴリス(Argolis)の市の名にして、昔しヘーラクレース此地に獅子を殺したる(ヘーラクレースの十二功業の一)ことあり。此祭は此の功業を記念せるものなり。

(○オリュンピア祭——オリュンピアは、ロポンチーロス半島のエリスのオリュンピアの谷なり。此祭禮はグレシアの最大神ゼウスを祭るものにして、四年毎に五日間の祭禮を施行す。此日には體操及び競走を行ひ、優勝者は月桂冠を戴くものとす。之れ四大祭中の最も盛大なるものなり。)

○大神ゼウス(九二)——グレシアの多神中、其大なる諸神をオリュンボスの十二神と云ふ。

十二神の名は左の如し——ゼウス(Zeus)、ポセイドーン(Poseidon)、アポローン(Apollo)、アールス(Ares)、ヘーファイストス(Hephaistos)、ヘルメース(Hermes)、ヘーラー(Hera)、アターチーネー(Athene)、マルテニス(Artemis)、アフロジターー(Aphrodite)、ヘスチア(Hestia)、デーモターー(Demeter)と云れなり。其中ゼウ

スは最大一の神にして、クロノス及びレアの間の子なり。ヘーレーは其妻なり。斯くてゼウスはナツサリアなるオリュンポスの神山最第一の神にして、其主要なる神社はオリュンピア(Olympia)ドナ(Dodona)及びリュピア(Lydia)の漢中にあり。其徽標は、鷲、雷筈及び君笏なり。彫刻家フェイダアスの象牙と黄金とを以つて製作せるゼウスの像のオリュンピアにあるものは最も有名なるものにして、四十フィートの高さあり。

○ヘルメース(九四)——はゼウス及びマイアの間の子にして、諸神の使の神たり又た報道の神たり。而して商業、發明、體育等の神にして、又た盜賊、牧羊、及び旅行を保護す。「リラ」琴及び笛の發明者なり。又た死人の魂魄を他界に導くことをなす神なり。此神は小兒青年等にとつては教師たる神なるを以つて、ヘルメースの祭禮は、大抵體育場等に於て小兒等之れを施行するなり。

○衣裝室(Apodysarion)(九五)——體操運動等を行ふに當り、運動場にて衣服を脱し、或は着する室なり。

○ダレイオス王(一〇九)——ペルシアの大王にして、紀元前五世紀ペルシア帝國を統一し、擴張し富強を以つて天下を壓したる英雄なり。

ラッヘース

○ラッヘース(一五三)中島戦争の時アナーナイ軍の大將の一人なり。紀元前四百十四年マ

ンチチア(Mantineae)の戦争に死す。

○ニキアス(一五三)——アテナイ、軍シユラクサイを征する時指令したる大將なり。(此戦争に死す)

○ツキユヂデース(一五四)——メラクレースの反對に立ちしアテナイの政治家なり(史家ツキユヂデースとは別人)

○アリスタイデース(一五四)——メルレア軍アテナイに襲來せんとするの豫想に基づき、アテナイ人は其準備を爲さんとする時、二人の有力なる政治家あり、一はアリスタイデース(正直者の稱あり)と云ひ、他はテミストクレースと云ふ。アリスタイデースは純粹の愛國者にして陸軍擴張を主張し、他は海軍擴張を主張し、兩政黨の軋轢其極に達せり。茲に於て普通投票に由つて其事を決することとなり、アリスタイデースは遂に敗を取り、十年の追放の辱を受くることとなれり。之れに就いて逸話あり—アリスタイデース投票場にありし時、一人の無文字者來りてアリスタイデースなることを知らずして代筆を依頼す。アリスタイデース何人を書くべきやを問ふや、彼れ曰く「アリスタイデース」なりと。アリスタイデース聞うて曰く「彼れ何の甚しきことを君に行ひたるや」と。彼の人曰く「余は常に彼れの正直者々々々と稱せらるゝを聽くに疲れたり」と。

○ソフロニコス(一五八)——ソークラテースの父、彫刻を業とせり。

○ラケダイモーン人(一六二)——大神ゼウスとタイゲター(Taygete)との間の子の名にして、

スバルタはラケダイモーンの妻なり。故に其後裔の地を稱してラケダイモーン人咸はスバルタ人と云ふ。尙武を以つて有名なり。

○カリアの奴隸(一七四)——カリアは小亞細亞の西南の一國なり。此地にダレシア人の播種する前に住したる人種なり、ダレシア人に劣れる所ありて、ダレシア人の榮ゆるに及びて壓観され、又た奴隸となれるもの少なからざりしものと如し。

○リラ琴(一七七)——手に持ちて彈く小き琴。ダレシア人の多く用ゆる所なり。

○イオニア式、フリュギア式、リュディア式、ドリリア式——(一七七、一七八)——是等皆美術上の階式なり。其内ドリリア式はダレシア美術に於て、最も實素にして而も力ある趣味にて眞のダレシア的のものと稱せらる。ラッヘースがソークラテースの言行一致せるを稱してドリリア式と稱したるは其純然たるダレシア的即ちヘラス的の趣あるを美とし、其他のイオニア式、フリュギア式、リュディア式等の簡趣味を下としたるなり。

○スキュチア人(一八四)——は古代黒海の北部より亞細亞に廣がりし地に住せし遊牧民族にしてアールヤ人種にモンゴル人種を混合せるものなり。此人種紀元前百年頃より歴史上に消失せり。遁走して勝つを以つて有名なり。

○ホメーロス(一八四)——ダレシア第一等の大詩人にして、史家ヘーロドトスの説に由る時はホメーロス及び其詩は紀元前九世紀頃なるべしと云ひ、グラッドストーンの説に由る時は、トロヤの没落は紀元前一千二百五十年頃にして、ホメーロスは其れより大約五十年後の

人なるべしと云ふ。ホメーロスの詩は『イリアス』(Iliad)及び『オデュッセウス』(Odyssey)なり。『イリアス』の詩は——小亞細亞なるトロヤ (Troja-Ilium) の王プリアモスの子パリスなるもの、グレシアに^参難び、スパルタ王メネラオスに優遇されしに、太子は密かにスパルタの王妃ヘレンを監みて國に歸りしより、スパルタ王グレシア全國の兵を以てトロヤを征し、弟アガメムノーンを以つて總督となす。勇將にアヒレウスあり。而してトロヤにあつては殆ど小亞細亞全體を結合してグレシア軍に對し、ヘクトールを以つて大將となし。十年間の戦争の後、トロヤ城遂に没落し、國滅ぶの事を叙したるものなり。『オデュッセウス』はオデュッセウス(或はウリキセース)の冒險談とも云ふべきものにして——トロヤ戦争の時、グレシア軍の一將にオデュッセウス(イタカ王)なるものあり、トロヤ陥り、全軍歸國したるも、オデュッセウスは歸國の途次、諸國にさまよひ、種々奇怪の境に到り、或は小人國、或は大人國、或は死人世界等に到り、千辛萬苦を嘗めて漸くにして家に歸る。殆ど二十年間の不在中、其妻メーネロメー(Penelope)貞操を守り、夫の歸國を待ち居り、此ににめで度、局を詰ぶことを詩にせるものなり。近來此兩詩はホメーロスの作に非ずして、多くの人の手に由つて成れりと言ふ説もあり。

○アイチアス(一八七)——はダールダヌス王アンヒセス (Dardanus-Anchises) のアフロダター (Aphrodite) との間の子にして、トロヤ軍中の一王なり。トロヤ没落してプリアモス (Priamos) 家の滅びたる後、トロヤを支配したりと云ひ、又たイタリアに落ちのびてローマ人の祖先となりしとも云ひ、傳説種々ありて一定せず。

○ラマツホス(二〇三)——アテーナイ軍、シュラクサイを征する時(時の指令官は、アルキビアデ
ース、ニキアス、ラマツホスなり)戦死したる將軍なり。

プロロータゴラス

○「ソフィスト」(二三四)——「ソフィスト」のグレシア原語はソフィステース(Sophistes)にして、「ソフォ
ス(Sophos)＝知慧」より來る。即ち知者の謂ひなり。始めは種々の學問を教ふる教師と云ふべき
人物の稱なりしと雖、ソークラテース及びプラトーンの時代に至つては、其末派の輩大に腐
敗し、哲學、修辭學、雄辯學其他種々の事を教ふると稱し、淺薄なる學問を以つて、下等なる品性
の人物等、自ら「教師」なりと稱し、多くの報酬を貪り、思想界を擾亂し、青年を腐敗せしめ居たり。
而して其言論、多くは詭辯なりしより、「ソフィスト」と詭辯派の人々と同意義となりたり。プ
ラトーンが「ソフィスト」を攻撃するは素より其末派の者に對しては當れりと雖、「ソフィスト」
全體盡く下等なる人物、淺薄なる學者なりとは云ふ可からざるものと如し。而して「ソフィ
スト」の學說等を知らんとするには、たゞプラトーンの書に據るあるのみにして、其他「ソフィ
スト」の學說を記るせる書物存せざるなり。故に吾等の「ソフィスト」を知るは、反對家の手に成
れる書物に由るものなるを豫め心に置きて之れに對せざる可からずと謂ふべし。又たプ
ロータゴラス、ゴルギアス、ロツピアス、プロローダコス等は「ソフィスト」中の至大なるものとなす。
○ヒツボクラテース(二三三)——はグレシアの醫師の鼻祖にして、紀元前五世紀頃の人なり。

醫書の著あり。其主義たるや、醫術はたゞ自然を補ふものに過ぎずとなす。

○ポリュクレイトス(二三三)——コリントスに近きシキュオーン(Sikyon)の人なり、フェイダアスの門弟子にして彫刻(専ら機操家の)を以つて有名なり。

○フェイヂアス(二三三)——アテーナイ人、美術、彫刻を以て鳴れり。ペルテノーン(Parthenon)(アテーナイ市の聖丘アタロポリスなる、處女アテーネーの神殿)及びオリュンピアなる大神ゼウスの神殿を意匠し、アテーネー及びゼウスの神像及びペルテノーンの大理石(エルジン氏大理石と稱す)の彫刻者なり。(紀元前四八八生れ四三二死す)

○オルフェウス(二四三)——はアポローン神と一ミューズとの間の子にして、半神中人の傳説上の人物なり。甚だ音楽に長ぜり。其妻エウリュディケ(Eurydike)を基ひて黄泉に降りしも、後方を回顧したるが爲めに其妻を見失ひ、身は粉塵せられたり云ふ。(『宴會』篇中ファイドロスの演説參照)

○『吾れ眼を上げて視たるに』(二四三)——の句はホメーロスの『オデュッセウス』十一章六〇一行にして、『吾眼はタンタロスを見たり』(二四四)の句は同上五八二行なり。之れオデュッセウスがトロヤ戦争後諸所に遍歴して黄泉よみに降りし時、已に死したる人々の群を見渡したる時の形容にして、ソークラテースが、ブロータゴラス、ロツピアス、ブローザコス、其他多々の、『ソフィスト』の集合せるを見渡したる時、宛もオデュッセウスが黄泉にて死人の靈魂の影の如きものを見たと同様の感ありし趣を記したるものにして、又た多少、『ソフィスト』等を嘲笑せる意

も存せるが如し(死人界の状況に比して)。タンタロスは大神ゼウスと女神プルトーとの間の子なるが、ゼウスの秘密を漏洩したる罰として水中に投ぜらる、而して其水櫃の所に至り、又た其櫃上及び四周には美麗なる果實は枝に垂れ下れり。彼れ氷を飲まんとするや、水退きて其波打つ海中にありながら飲むこと能はず、彼れ果實を食せんとするや、果實風に吹かれて振り動き、口、達すること能はざるなり。之れタンタロスの苦しみと稱するものなり。

○ヘシオドス(二四七)——『ハルミデース』の注釋を見よ。

○シモーニデース(二四七)——ケオス人にして善真なる家族の人なり、音楽及び詩歌の教育を受け、叙情詩に長じ、殊にメルレア戦争に關したる詩を以つて有名なり。

○ムサイオス(二四七)——中ば神話のクレシアの詩人にして、紀元前五世紀頃の人なり。

○プリュタニス議官 Prytanis(二五三)——Prytanos はアテーナイ市に於ける五百人元老議會中の行政及び議長に當れる順番の議員なり。元老院議員は之れを十部に分つ、其一部は各々一年の十分の一の時日間議長の順番に當るものにして、プリュタニスは各番五十人づつ當順の議長となるものを謂ふ。

○プロメーテウス、エピメーテウス(二五六)——プロメーテウスはヤペトスとクリメテとの間の子なり。人間に知識を與へ文明を作りたる神なりと謂ふ。アイヌロロスの記せる所に由れば、大神ゼウス、人間を滅ぼさんとする時、プロメーテウス、ヘーファイストスより火を盜み來り、人間に力を與へたるより、ゼウス怒りて之れをカウカッス山に鐵鎖を以つて

得し、鷹の來つて其肉を食ふに任かす。然るにプロメーテウスの堅忍なる、遂にヘーラクレ
ースの救ふ所となれりと謂ふ。エピメーテウスは其弟なり。

○ヘーファイストス(二五八)——大神ゼウス及びヘーレーの間の子なり、生れて跛足なり。
火及び冶金術の神なり。(ローマにてはマルカンと云ふ)

○アテーチー(二五八)——大神ゼウスの女なり。オリュンポスの諸神中にも甚だ主要なる
神にして、智慧の神なり。アテーナと謂ひ、又たペラス(Perseus)とも謂ふ。

○ヘルメース(二五九)——『オリュシス』中の注釋を見よ。

○レーナイア祭(二六九)——アテーナイ市中のレーナイオンに酒神ディオニッソス(Dionysos)の
神社あり。此の祭禮をレーナイア祭と云ふ。

○ピフダコス(三〇〇)——グレンシアの悲哀詩人として、七賢人中の一人なり。

○スカマンデル河(三〇一)——ホメーロス、『イリアス』の詩篇中に此河を人に擬して記さ
るなり、トロヤ近くにあり、『愛する兄弟』の詩は、『イリアス』二十一章三〇八行なり。

○アヒレウス(三〇一)——トロヤ戦争のグレンシア軍第一の勇將にして、トロヤ第一の勇將
ヘクトールを殺せし人なり。

○ヘシオドスの詩『一方には、人は善となることは難し……』(三〇三)——ヘシオドス
の『業務』と曰ふ二六四より以下にあり。

○打撃環(三〇八)——金屬にて製したる重量ある環にして、之れを手に握り、胸に結び付け、

打撃を興ふるに力あらしむるものなり。

○アポローン(三〇九)——大神ゼウス及びレートー(Letoe)との間の子にして、太陽、占察、惡疫、醫藥、弓術、音樂、詩歌の神なり。現今「ベルゼデーレ(Belvedere)」のアポローンと稱してローマのヴァチカノ(Vaticano)なる博物館にある彫刻は人體の最も完全なる美を表はせるものなりと云ふ。

○廣き胸なる土地の結果を分得せる者(三一四)——廣き胸なる土地、即ち之れ「土地或は地球」と云ふこととなり、地球の結果を分得せる者即ち土地より生ひたるものたる「人間」と云ふ意義にして、要するに人間と云ふことなり。

○「兩人與に行く時は……」(三二二)——ホメーロス『イリアス』十卷二二四行。

エウチュデーモス

○コルユパンテス教(三八八)——昔シフリユギアにキユベレー(Kybele-Cybele)なる女神あり、其れに事ふる祭同等をコリユパンテスと稱す。此神の祭禮たるや、一極狂せる如き、音樂及び舞踏を以つて行ふものなり。故に又た騒々しき快樂者をコリユパンテスに比することあり。

○カリア人(四二〇)——「ラッヘース」の注釋中、「カリアの奴隸」を見よ。

○コルヒスのメイデイア(四二〇)——コルヒスはコーカソス山とアルメニアとの間にありて、裏海の東にある古昔の國なり、今のタメイス(Kutais)にして露國領なり。メーデーアと

は冤女なり。

○マルシヤスの皮(四一一)——マルシヤスはフリギアの「サチコロス」(牛身人、牛身獸の神)にして、
首に長ぜり。音樂の競争にてアポローンに敗を取り、生きながら皮剥がれたるものなり。

○意思を有せる言語(四一七、四一八)——此「意思」は「意味」とも云ふ言語にして英語の *idea* な
り、意思、感覺等の義と、意味の意との兩義なり而してソフィスト之れを亂用して意味を混同せ
しめて議論せるなり。

○プロローテウス(四一九)——は海神ポセイドーンに附屬せる神にして、ポセイドーンの妻
アンフィトリター(Amphitrite)の海豹及び羊群を保管せり。而して身は如何なる形状なりと
も、其欲するまゝに變形變態するを得るの能力を有せり。故に又た人たれ物たれ數と變化
するものをプロローテウスに比す。

○ヂカステース(四二三)——昔のアテーナイ市にて一箇年間の任期を以つて選挙したる、
近時の陪審官様のものにして、法庭に裁判官の職掌を行ふものなり。其數、事件の大小に由
つて多少あり。

○エックレーシア(四二三)——人民一般投票するを得る普通投票の議會なり。

○カストール及びポリュデウゲース(四三二)——大神ゼウスとスバルタ王デュンダレウス
(Tyndareus)の妻レーメ(Leda)と通じて生じたる双子なり。之れをデオスクロイ(Dioskouroi)と稱
す即ちゼウスの子の義なり。舟人等航海の神として崇敬す。故にこゝにノータラテース

難船沈没の状態にありと云ひ、エウチユデーモス兄弟をカストール及びポリュテウクトスと見立て、之れに向つて救を求むと云ふの滑稽を突へたるなり。

○ヒュドラ(四四六)——嘗しダレシアのアルゴリスの一沼中に住したる七或は九つの頭ある水蛇にして、ヘーラクレス之れを退治せり(日本の須佐乃男尊の八股の大蛇に比すべきか)。(其十二功績の一)此蛇若し其一頭を切斷する時は、其切り口より直に二頭を發生す、之れを禦ぐには其の切り口を焼くにあり。其無限に頭を發芽するより、之れを、一雄を除けば數利益と發生することに比す。『エウチユデーモス』中には兩兄弟を此のヒュドラに比じ、其難辯運辭の無限なるを諷せるなり。

○ヘレポロス(四五三)——(Hylliporos—Heliopolis)鬚草なり。

○デルフォイの神像(四五三)——アポロンの大なる像を謂ふ。

○ゲトリュオン(四五三)——神話上の一身三體の怪物

○ブリアレオス(四五三)——神話上の百手を有せる怪物。

○タレント(四五四)——殆ど千二百弗(Talent—Talent)

○スタテール(四五四)——殆ど四弗。(Stater)

○祖宗の神アポロリン(四六三)——アテナイ人はイオーニア人種にして、其祖イオーンの父はアポロリンなり、故に之れを祖宗の神と云ふ。之れを『家族のゼウス』と云ふは、此所にゼウスは『最大の神』と云ふと同じく、イオーニア族の大神なりと云ふが如し。『民族保護のアター』

ネー』とは、アテーネー女神はアテーナイ市の保護神なるが如く、アポローンはイオローニア民族の大保護神に當ると云ふことなり。

○豪勢なり、ヘーラクレーヌ(四六五)——こゝにヘーラクレーヌを呼ぶは深き意味あるに非ず、感歎辭を發する時、神の名を呼ぶは彼等人民の習慣たるなり。

イオローン

○アスクレービオス祭(四八五)——アスクレービオスはアポローンの子にして、醫藥の神なり、神社エビダウロスにあり。(『ファイドーン』の注釋參照)

○パンアテーナイアの祭禮(四八六)——アテーナイ市の大祭にして、アテーナイ市の守護神たる女神アテーネーを祭るものなり、祭禮は毎年施行す。五年毎に大祭あり。

○ポリュグノートス(四九四)——グレシアの畫工にして、ホメーロスの詩中に題を取りて畫くことを爲せり。紀元前五世紀頃の人なり。

○コリュパントス宗(四九六)——『エウチデーモス』中の注釋を見よ。

○デオニュソス(四九六)——酒及び「ドラマ」の神にして、ローマ人は之れをバッタス(Bacchus)神と稱して傳へり。

○ミューズ(四九七)——は詩歌、美術、學術の女神の稱なり。ミューズは本と感興ある泉水の女神なり。詩人ヘシオドスの言ふ所に據れば、ミューズは大神ゼウスとムネモシネー(Mnemosyne)

との間の九女にしてピエリア(Pieria)に生れ、アポローンの侍女としてオリュンポスに住せり。後に至りて九人のミューズは其名及び技能に分化を生ずるに至れり。カリオペー(Calliope)は叙事詩、クレイオー(Klio=Clio)は歴史、エウテルムエー(Euterpe)は叙情詩、タレイマ(Thalia=Thalia)は喜劇、宴會及び農牧歌、メルポメネー(Melpomene)は悲劇、テルプシホレー(Terpsichore)は舞踏、エラト(Erato)は戀愛歌、ポリュムニア、或はポリュヒュムニア(Polyumnia=Polymnia)は聖歌、ウラニア(Urania)は天文學——のミューズなり。而して是等ミューズの好みて遊ぶ所はパルナッソス(Parnassos)山の麓なるカスターリア(Kastalia)の泉、及びヘリコーン(Helikon)山なるアガニッペー(Aganippe)及びヒッポクレエー(Hippokrene)の泉等なり。

○オデュッセウス(ウリキセース)の幻影——戀愛者(四九九)——『ラッヘース』中、ホメーロスの『オデュッセウス』の説明を見よ。オデュッセウス、トロヤ戦争後、十年間諸方を遍歴して歸國せし時のことなり。「戀愛者」とはオデュッセウスの不在中、其妻美なるメーネロペーを戀ひて集り來る不義の戀愛者なり。妻メーネロペーは固く貞操を守りて彼等の意に従はず。ヘクトール、アヒレウス、プリアモス等に就いては『ラッヘース』中「ホメーロス」に関する注釋を見るべし。アンドロマッヘーはトロヤの大將ヘクトールの妻。ヘカペーはトロヤ王プリアモスの第二の妻にしてヘクトール、ペリス、カッサンドラ及びヘレノスの母なり。

○『光澤ある戦車に乗じ……』(五〇四)——『イリアス』二十三卷三三五行

○『ブラムニアの酒……』(五〇七)——『イリアス』十卷六三〇、六三八行

○「宛も野邊に遊べる……」(五〇八)——「イリアス」二十四卷八十行。

○「不幸なる人々よ……」(五〇九)——「オデュッセウス」二十卷三五一行にある句なり。「ラッヘー」中ホメーロスに關する注釋中オデュッセウス(ウリキセース)に關する所を見よ。即ちウリキセースの妻を戀ふる戀人等の身の上に起りしことなり。

○エレボス(五〇九)——は地上と陰府との間の暗黒なる土地なり。死人の行くべき所、ハイデース即ち死神の居る所なり。

○彼等壘を越わんとする時……」(五〇九)——「イリアス」十二卷二〇〇行。

○ブローテウス(五一六)——「エウチュデーモス」注釋中にあり。

メノーン

○ゴルギアス(五三二)——「ソフィスト」中の有名なる者なり。

○エンペドクレース(五四八)——シシリアに生れたる詩人、醫師、哲學者なり。靈魂輪廻の說を信じ、エトナの火山口に投じて死せしと謂ふ。

○ピンダロス(五四九)——クレシアの有名なる叙情詩人にして紀元前五百二十三年生れ、四百四十三年死す。

○大王の世襲の友(五五五)——之れメノーンの門閥家にして大王と友たるを云へるなり。

○ペルセフォネー(五六三)——陰府、及び死の神ハイデースの妻にして、同じく死事を司る女

神なり。

○新に書き加へたる所の平面形の云々(五八一)——注釋者の或者の云ふ所に由れば、
レシアの原本に缺字あるべく、爲めに意味不明瞭なるべしと云ふ。余の此所に釋したるは
ジロウエット英譯第一版の文に由れり。第三版に比すれば意味明かなるに近きを以つて
なり。

○テミストクレース(五九八)——アテーナイ市の治者にしてサウミス海戦に於てキセル
キセルを破りし人なり。紀元前五百十四年生れ四百四十九年死す。(「ラッヘース」注釋中
「アリスアイデース」の部を見よ)。

○ダイダロス(六一〇)——アテーナイ及びクレター島の傳説上の彫刻家にして、其作の巧
妙なる、作品爲めに生動し逸し去ると云ふ。又た彫刻家の祖先とする所なり。

○黄泉に在つて理解力を……(六一七)——ホメーロス「オデュッセウス」十卷四九五にあり。

エウチユフローレン

○クロノスーウラノスーゼウス(六三九)——ウラノスは天の意味なり、始め最大一の神
なりしが專恣にして其の子等之れに反き、子等の内タロノスを立て、第一の神位に即かし
む。クロノス第一神となりて又た專恣なり。此に於てタロノスの子等又た父に反きて最
子ゼウスを立て、第一神の位に即かしむ。此くて子神は順次に父神に反きて第一神の位

に即きたり。

○ヘーファイストス——ヘーラ(六四六)——ヘーラは大神ゼウスの妹たり妻たる神なり。ヘファイストスはヘーラの子にして鍛冶の神なり。

○吾が先祖ダイダロス(六五六)——ダイダロスの説明は『メノーロン』中の注釋を見るべし。ソークラテースがダイダロスを以つて吾先祖と謂ひしは、ソークラテースの父はソフロニスコスとて彫刻を業とせし人なりしを以て、ダイダロスを以つて吾先祖と云ひしものなるべし。

辯證

○アリストファテースの滑稽劇(六九四)——アリストファテース、其脚本『雲』に於てソークラテースなるものを主人公とし、種々自然科学等に関して無意味の事を言行せしむる仕組みなり。之れソークラテースを嘲笑せんが爲めのものにして、當時數々興行され、ソークラテースの譯告人等は、此演劇上のソークラテースを以つて眞のソークラテースと混同し、以て膏藥の材料となせしなり。(而して此アリストファテースは『宴會』篇中の滑稽家アリストファテース其人なり)。

○「ミナ(六九六)——「ミナ」は大約米貨十九弗七十仙に當る(「ドラフマ」は百分の「ミナ」なり)。

○ピュチオスの女豫言者(六九八)——ピュチオスとはデルフォイの舊名なり。古此所にアポローン神、プュトーン(Pythia)と稱する大蛇を退治たるより、此地をプュチオスと云ひしなり。此地にアポローンの神社ありて其神に仕ふる女豫言者は、ソークラテースを以つて世上至賢の人なりとの神託を宣へたり。故にピュチオスの女豫言者の言と云ふも、デルフォイの神託と云ふも、同一事を云ふものなり。

○犬なる神かけて(七〇一)——「ハルミデース」の注釋中「エジプトの犬」を見よ。

○ヘーラクレース的勞苦(七〇二)——ヘーラクレースに關しては「ハルミデース」中の注釋を見よ。此神辛苦艱難を嘗めたる勇力の神なるより、辛苦艱難を形容するに「ヘーラクレースの如き」との形容を用ゆるなり。

○テーチスの子(七一九)——テーチスはグレシアの英雄アロレウスの母にして海の女神なり。アロレウスとパトロクロスとは友として最も親しかりしがパトロクロスのトロヤ軍の爲めに殺さるゝや、其友情よりしてパトロクロスの爲めに復讐せんと決心せしなり。

○ブルユタ子ス(七二八)——「プロータゴラス」注釋中にあり。

○死者の屍骸を所理せざりし將軍(七二八)——當時の信仰に由れば、死者の屍骸は之れを埋葬せざる時は、靈魂は百年間地獄のメチユギオス河邊(「フィドーン」參照)にさまよふとの迷信あるより、屍骸の所理は神聖なる義務たりしなり。然るにアルギヌサイ海戦の後大暴風ありし爲め屍骸を得ること能はざりしを以つて番人を置き之れを守衛せしめたりと

難、之れ亦暴風の爲めに行ふ能はざりき。故に其等將軍は其盡くし得る所は盡くしたるを以つて罪なく、船の運轉手を監人として此事明瞭なり。然るに是等將軍に反對せる者は死者の親戚を連れ來り、其他泣啼者を儲ひ來りて人々の感情を動かし多衆を煽動して、彼等を跟せんとしたるも、ソークラテースは其無罪を主張せしなり。

○圓形堂(七二九)——之れブリュタチス第の集會所なり。

○サラミス人レオオン(七二九)——レオオンはアテーナイ市民の權利を有せる人なり。

然るに三十暴政官の亂行を避けてサラミスに在り。暴政官等ソークラテースに命ずるにレオオンをアテーナイに連れ來ることを以つてせり。然るにソークラテース其不正の命令に従はざりしなり。

○ブルユタチイオンの公會堂(七三九)——ゲレレアの都市の公會堂にして、公共の廳ありて、其廣間には公用の食事を備へ、ブリユタチス議員、有功或は名譽の人、及び外國使節等を饗應給養する所なり。

○ミノース(七四九)——古代クレター島の王にして其島の立法者なり、死して、死者の裁判者となれり。

○ラダマントス—アエアコス(七四九)——ミノースの兄弟にして、ミノース及びアエアコスと共に未來界の裁判者なり。アエアコスはアヒレウスの祖父なり。

○トリプトレモス(七四九)——農業及び土地の女神デーメター(Demeter)に愛されたる

人にして、農業上の發明を爲せし人なり。デーメーテールは土地に關せるより、又た他界の女神ヘルセフォネーと混同さるゝことありて、之れに關連してトリプトレモスも亦他界の意味ある神祕の神とせらる。

○パラメーデース(七四九)——トロヤ征伐の時のグレシア軍の勇將なり。オデュッセウスの謀略に由つて殺されたり。

○アイアス——トロヤ征伐の時、アロレウスに次ぐ所のグレシア軍の勇將にして身長、強力、美を以つて有名なり。グレシア軍の總大將アガメムノーンの所置宜しからざるを憤りて、發狂し、或時羊群を見て敵軍なりとなし、之れを殺したることあるより、自ら其狂行を耻ぢて自殺したりと云ひ、又た他の傳説に由れば、人の爲めに殺されたりとも云ふ。死にも角にも不幸の人たりしなり。

○オデュッセウス(七五〇)——前出。

○シシュフォス(七五〇)——コラントスの創始者にして、最も巧智に富める人なり。或理由によりて、下なる他界に於て罰せられて、間斷なく一大石を丘陵上に轉じ上ぐることを命ぜらる。彼れ辛くも其石を山上に轉じ揚ぐるや、忽ちにして谷底に轉下するなり。而して彼れは永久に之れを轉し揚げざる可からざるなり。

○デーロスよりの船(七六三)——『ファイドーン』の初めの部に説明あり。

○今より三日にして……フチア……(七六四)——『イリアス』九卷三六三行

○法庭にて言ひし如く若し脱走せば云々(七六八)——『辯證』中の語。

ファイドーン

○テーセウス(八一七)——古傳説に由れば、昔クレター島にミノース(Minos)なる王あり、其息肩をパレファエー(Pariphae)と云ふ、アリアドネー(Ariadne)なる女と、ミノータウロス(Minotaurus)なる子あり。ミノータウロスは牛頭人身の怪物にして、ポセイドーンの神が、ミノス王に贈りし牡牛、鼻肩パシファエーに戀慕して通じて生みたる子にして、人と牛との雜種の怪物なり。ミノース迷路殿を構築して、ミノータウロスを其内に住せしむ。此の怪物人肉を食とし、七人の男子と七人の女子とを食ふこととなす。ミノース王、アテーナイ人に命じて定期に此男女の數を貢獻せしむ。時にアテーナイにテーセウスなる英雄あり、其男女の數を貢獻せんとしてクレター島に至りしに、ミノース王の女、アリアドネー(ミノータウロスの姉妹)テーセウスに戀愛し、テーセウスに劍を與へ、又た自ら糸を以て迷路殿の道しるべを爲し、以つてテーセウスをして迷路殿内に入ることを得しめ、以つてミノータウロスを殺さしむ。此くテミノータウロス殺されしより、貢獻の爲めに伴ひ行きし男女は助かることを得たり。其テーセウスがクレター島に至るの前デーロス島のアポローン神に祈願するに、若し彼等の

生命を救ひ玉は、毎歲船をデーロス島に派して、感謝の意を表せんと。此くて其祈願の如きを得て、海島デーロス島に船を造る習慣となりしなり。テーセウス、アリアド子ーを連れて共にクレター島を脱走せしが、彼れアリアド子ーをナキソス(Naxos)島に遺棄し去れり。テーセウス尙ほ此他種々の冒險少なからず。

○酒神笏(八四六)——原名 *Thiarsos* 酒神ディオニッソスの所持する所の棒なり。棒の頭は常春藤の葉或は松傘を着け、常春藤或は松葉を以つて飾れるものなり。酒神の祭司或は其信奉者之れを携帯す。酒神の關係より、此棒の携帯者とは常人を意味し、寧ろ快樂に意を用ゆる人を意味す。

○エンヂュミオーン(八五四)——美少年なり。傳説種々ありて一定せず。此少年大神ゼウスに願ふに不死と、永久の眠りと、永久に青年たることを以つてし、ラトモス(Latmos)山の洞窟中に眠れる時、月の女神セレーチー(Selene)彼れを接吻せりと云ふ。

○アナキサゴラス(八五五)——イオーニアのクラゾメナイ人にして紀元前殆ど五百年に生れ四百二十八年に死す。グレシアの哲學者にして來つてアターナイに住し、ペリクレース、ソクレス、デース、エウリピデース等の朋友となり又た師となれり。後不敬神罪を以つて追放せらる。

○ヘラスは廣し(八七二)——ヘラスとはグレシア人の居る所一般を云ふ(殖民地をも含む)。

○ハイデース(八七九)——原名 Hades(Hades)にして地下の世界の主神、ゼウスの弟にして、ヘルセフォチーの夫なり。故にハイデースの居所に囚みて又た陰府と稱し、黄泉と稱し、地獄とも云ふ。

○ペー子ロペーの衣織るは實は織らざらんが爲めなり(八八八)——イタカ王オヂュッセウス、従軍して家に歸らざること二十年、他の將士は歸國せりと雖オヂュッセウス獨り歸らず。(『イオーン』中の、オヂュッセウスの幻影云々の注釋參照)其妻ペー子ロペー美にして家に貞操を守れり。多くの戀愛者オヂュッセウスを以つて死せりとなし、強ひて己等と結婚すべしと迫ると雖、ペー子ロペー固く貞操を守りて彼等の請求を拒絶し、尙ほ心長く夫の歸國を待つこと二十年。されども戀愛者の言、むげに拒絶すること能はず一計を案じて戀愛者等に言うて曰く、夫オヂュッセウス假令死せりとするも、後を弔ひ、其死を飾る所の衣を彼れの爲めに織らん、其衣織り終らば諸君等の意に従ふべしと。此くて機を建て織り始む。然りと雖實は之れ織らざらんが爲めに織るものにして、晝は織り、夜は之れを解きて織らざる始めの如くし、以つて成らん限り戀愛者の追り強ふるの年月を延引せり。ソークラテース此故事を引き來り、哲學に由つて身を淨め、又た之れを忘りて前功を没することなからんことを云ふなり。

○アトラス(九二六)——ゲレシアの神話にては、地球の支持者なり。

○反對は其反對を容受せざるのみに止まらず云々(九四二)——此文餘りに出處にして

意味を解するに困難なり。實に之れプラトーンの思想及び文章の抽象的なるを見るに足る。今ま之れを解し易からしめんが爲めに此く爲さば可ならんか「反對は其反對を容受せざるのみに止まらず、(例へば奇數と偶數との如きもの)又た反對を生ずる所のもの(三の如きもの)は、其生ずる所のもの(奇數の如きもの)に於て反對(偶數)を生ずるを以つて、此く生ずる所のもの(奇數)に反對なるもの(偶數)を容受せざるなり」。

○前に言ひたる所の陳腐なる安全なる答(九四三)——之れ、前の美の原因は色彩或は形状なりと云ふが如きことを云ふ。

○グラウコスの術(九五二)——困難なることを意味す。

○ファシス河よりヘーラクレス柱に至る(九五三)——ファシス河は黒海の極東岸にあり。ヘーラクレス柱とは現今のイスパニアのジブラルタルなり。

○エーテル(Aether, Ether)(九五四)——空氣よりも一層輕き、微なるものにして、空氣よりも上層に存すと信じたるものなり。

○タルタロス(九五九)——此詩ホメーロスの「イリアス」八卷十四行にあり。

○余は一雄鷄をアスクレーピオスに負へり(九七二)——アスクレーピオスは醫術の神なり。死の神ハイデース、醫術の爲めに死人少くして死界繁昌せざるをゼウスに訴ふ。ゼウス電霆を以つて彼れを殺す。されども死後アポローン神の願に由つて群星中に置かるることとなれり。其奉納物は通例雄鷄なり。ソークラテスの此遺言は果して何事を意

味せるや、古來學者皆解釋に迷ひ、今に未解として存せり。恐くは何事か新顧したる事ありしか、或は疾病平癒の禮意ならんか。

宴會

○フアレーロン(二〇〇四)——フアレーロンはアテーナイより二「マイル」距つる港なり。フアレーロンなる名稱は、グレシアにフアレーリス(Phaliris)なる島ありて禿頭の狀を爲せり。アポロドーロスの禿頭にかけて、音の似たる言語を弄したるものなるべし。

○招かれずしてアガメムノーンの云々(二〇〇九)——「イリアス」十七卷五八八行にあり。

○途々其辭柄を發明す(二〇〇九)——「イリアス」十卷二二四行。

○食臺の端に身を横へ(二〇二二)——斜面なる寢床様のものゝ上に身を横へて宴會するはグレシアの風なり。尙ほ後の「同一臥床の三人中の一人」の注を見るべし。

○テオニュソスの神(二〇二七)——戯曲及び酒の神なり。「イオオン」の注釋を見よ。

○アルケースチス(二〇二〇)——「アツサリア」のフェライの王アドメートス(Admetos)の妻なり。夫殆ど死せんとするの重病にかゝれり。妻アルケースチス、アポローン神の告げに由つて身を犠牲に供し以つて夫を助けんとして死せり。一説に由れば、黄泉の女神其貞操を稱して、下なる他界より再び人生に生き歸ることを許るしたりと。又た他の一説に由ればヘーラクレスに救はれたりと云ふ。(エウリピデース、之れを戯曲に仕組めり)。

○オルフェウス(の黄泉行き)(二〇二二)——「アロータゴラス」の注釋を見よ。

○アヒレウスとパトロクロス(二〇二二)——無二の眞友にしてパトロクロスはヘクトールの爲めに殺されたりしかば、アヒレウス、朋友の爲めに復讐せしなり。

○「愛」——アフロヂテー(二〇二三)——「愛」(エロース)なる神はヘシオドスの説に由れば混沌の子にして最も年長の神たり、又たアフロヂテーの友なりとせりと雖、後世に至つては、アフロヂテーの子にして、最も若き神なりとなす。アフロヂテーは愛及び結婚の女神なり。一説に由ればゼウスとデオーチーとの間の子なりと云ひ、又た一説に由ればキニプロス(Kypros)の海の泡沫より生れたりとも云ふ。

○アリストゲイトーンと、ハルモヂオス(二〇二七)——アテーナイの二青年なり。兩人互に相愛せり。然るに専制政長ヒッパルホス(Hipparchos)、かの年若き美少年を戀愛し、兩人を離間して之れを我物となさんとせしも其意を遂ぐることを能はざりしより、ヒッパルホス怒りて或宗教の祭禮の時、ハルモヂオスの妹は、其祭禮の儀式に携はるの資格を有せざるものなりとなし、公然と之れを辱かしめたり。此に於て兩人大に怒り黨を結びてヒッパルホス及び其弟ロビピアスを除かんとし、パンアテーナイアの大祭日にヒッパルホスを殺す。然るに其性急なりし爲め不幸にして其の徒黨の援助を得ずして、ハルモヂオスは饑餓の爲めに斬られ、アリストゲイトーンは捕へられたり。彼れ捕へられて拷問さるとや、其徒黨の眞を言はずして、ロビピアスの主要なる朋友を以つて盡く同犯者なりと云ひなせしより、彼等皆な死刑に處

せられたり。(兩人の彫像今マイタリアのナボリの博物館にありと云ふ。)

○パウサニアス語り終へし時(一〇三三)——グレンシア原語ことに「アルリテレーシオン」(と「春は花」と云ふ如く字の始めの音を同じくして面白くする修辭法なり)あり。英譯にては“On Pausanias Pausing”或は“Pausanias Came to a Pause”とありと雖、此くの如きは他國語に移して存することは不能の事となす。

○ポリュムニア(一〇三八)——ミューズの一にして高尚なる歌、學問及び記憶を司る。

○Androgynos(一〇三二)——男女兩性を兼有せるもの、グレンシア語の「男」と「女」との合語なり。

○オーテュス及びエフィアルテース(一〇四三)——「オデュッセウス」十一卷三〇七行

○法律の命に遵ふのみ(一〇四六)——之れスパルタのことなるべし、アゲーナイには此くの如く、人は或る事情の下に在つては必ず結婚せざる可からずとの法律あらざればなり。

○ヘーフェイストス(一〇四七)——鍛冶の神。ローマにては之れをヴルカンと稱す。

○ゴルギアス或はゴルゴンの頭をふりかざし(一〇六〇)——ゴルギアスはソフィストの大修辭家なり。ゴルゴンは容貌極めて醜惡にして恐るべき女性怪物なり。ホメーロスの「オデッセウス」十一卷六三二行に「恐るべき容貌なるメルセフォチ」(地獄の女神)が、地獄より恐ろしきゴルゴンの頭を送り出し云々なる句あるを参照して、ゴルギアスと、ゴルゴンの音相似たるより、之れを関連せしめ、其演說を以つて、恐ろしきまで見事なりしと譽め戯れし言なり。

○エウリビデーヌの云はんが如く(一〇六二)——エウリビデーヌの Hippolytus なる篇の一ノ六一二にある語

○デオチマ(一〇六九)——アルカデアなるゼウス神社の女祭司、豫言者なりしなるべしと云ふ。一説に由れば虚構上の人物なりと云ふ。

○メーチス(一〇七三)——慮知を神としたる者にして、ゼウスの初めの配偶なり。

○アドメートス(一〇八四)——アルケースチスの夫(アルケースチスの注を見よ)

○コッドロス(一〇八四)——アテーナイの最終の王にして、紀元前千〇六十八年頃の人なり。傳説の云ふ所に由れば、古しスバルタ、全グレシアに覇を稱し、アテーナイを併呑せんとする時、スバルタは先づアポロンに占ひしに、アテーナイ王を殺さずして戦はゞ戦利あるべしとの神託を得たり。アテーナイ王コッドロス、之れを採知し、竊かに身を以つて敵陣に討ち入りて、神託の意に従つて敵手に死し、以つて自國の獨立を完うしたる愛國の王なり。

○同一臥床の三人中の人(一〇九三)——グレシアにては斜面を有せる臥床に横はりて宴飲するを習慣となす。其臥床の大いさは三人並び横はり得るものにして、客人多数なる時は此臥床を多く並べ用ゆるなり。

○冷酒器(一〇九五)——グレシアは温熱の國なり。酒を用ゆるに當つて之れを冷やす爲めに、酒壺を容ると器なり。

○セイレーノス(一〇九八)——酒神デオニユッスの養ひ親にして、「サチュロス」(後出)等の主導

者なる神なり。極めて健康にして密生せる醜聲を有し、又た毛深き尖りたる耳ありて多くは酷罰の状態にあり、獸と驢馬に乗りて酒器を携帯せり。

○サチュロス—マルシヤス(一〇九八)——サチュロスは半身は人にして半身は獸、森林等の神なり。性快活にして歡樂と酒と女とを好む。マルシヤスは「サチュロス」の一にして、音樂の競技に於てアポローンに敗を取りしものなり(『エウチュデーモス』の注釋を見よ。)

○内部には神の^ミ本符(一〇九八)——彫刻したる像は、内部を空洞にし、扉を作りて閉閉するやう爲し、其像の腹中に神の本尊を祭り置くなり。

○オリュン波斯(一〇九九)——トロヤ戦争以前の吹笛の名人にして、マルシヤスの弟子なり。

○セイレーン(一一〇〇)——グレシア古傳説に由れば、地中海の或一島に住せる數名の妖怪女にして、半身は美人にして足は鷲の如し、音樂を善くし、其島の近くを航行する者は、必ず其美音の爲めに誘はれてセイレーン島に立寄りざるを得ざるなり。されども其島に立寄る時はセイレーン等は之れを殺す。(故に快樂に溺るゝ者の比喩となす)。オヂテセウスのトロヤ戦争の歸途諸方に遭遇してセイレーン島近く来るや、如何にもして其美音の厄難を免れんとして、水夫等に命じて自己を帆船に縛さしめ、又た水夫等は蠟を以つて其耳を塞ぎ、自己は音樂の美を聞くも身は縛しあるを以つて如何とも爲すこと能はず、水夫等は耳に蠟しあるを以つて美音を離さて、爲めに島の方に引き寄せらるゝことなく、此くして辛くも此島を通過したりと謂ふ。

○真鍮に交換して黄金を得(二一〇七)——『イリアス』六卷二三六行。

○君の口吻を以つて云はど(二一二三)——『書』卷三六二。

○ブラシダス(二一二三)——メロポンチーソス戦争に有名なるスバルタの將軍なり紀元前四百二十二年マケドニアなるアンフィポリスにて殺さる。

○アンテーノール——子ストール(二一二三)——ホメーロスの書に従へば、アンテーノールはトロヤの最も智ある人なり。子ストールはダレレアの最も智ある人なり。

固有名詞原字對照



THE UNIVERSITY OF CHICAGO

第一卷 固有名詞原字對照

ア の 部

アヤノキ Aias (Ajax).
 アイアノキ Aialos (Æacus).
 アイノミトユーク Aiantodoros
 (Æantodoros).
 アイキハナチー Aixone (Æxone).
 アイギナ Aigina (Ægina).
 アイスキロチー Aischinos (Æschines).
 アイチトク Aineas (Æneas).
 アイスキロチク Aischylos (Æschylus).
 アイカチー Akademos (Akademeia—
 Academy).
 アカマナガチ Akarmania.
 アガトーン Agathon.
 アガタキーク Agathokles.
 アガメメノーン Agamemnon.
 アキナオロク Axiokos.
 アクシラオク Akusilaos.
 アクメノク Akamenos (Acumenus).
 アカロポリス Akropolis (Acropolis).

アタラシホフキーン Atylophos.
 アスカノールカチク Asklepios (Æsculapius).
 アチー Atē.
 アヂイフキチク Adimantos (Adimantos).
 アチーチヤ Athenai (Athene—Athens).
 アチーチー Athēnē (Athens).
 アヂメートク Admetos.
 アナクノキオン }
 アナクノキオン (II) } Anakrothō.
 アニユトク Anytos (Anytus).
 アビチク Abaris.
 アキロフク Achilles (Achilles).
 アフロヂチー Aphrodite.
 アケラオト Acherousia.
 アブチーク Abdela.
 アケラチク Achelous (Achelous).
 アケローン Acheron.
 アポローン Apollon.
 アポロヂーロク Apollodoros.
 アリスタイチーク Aristides (Aristides).
 アチキターア Ariatōn.

アリスタイチーア Aristogeiton.
 アリスチアチク Aristippos.
 アリスチーキーク Aristodemos.
 アリスチンキチーク Aristophanes.
 アリフロン Ariphton.
 アリキヨチキーク Alkibiades (Alcibiades).
 アルギキキヤ Arginusai (Arginoseae).
 アルケースチク Alkestis (Alceste).
 アルゴス Argos.
 アラチメク Artemis.
 アロコロキク Archilochos.
 アラキーン Archon.
 アラウチキヤ Alcuadai.
 アローク Ars.
 アロキメヂーキーク Alexidemos.
 アンチスチキーク Anisibenza.
 アンチンキーン Antiphon.
 アンチキヤク Animoiros (Antimoeus).
 アンチローキク Antiochos.
 アンチチク Antiochis.
 アンチローキーク Antenor.

アンテムキオン Anthemion.
 アンデローム Andra.
 アンデロキオン Androion.
 アンデロマンデー Andromache.
 アンデロン Andron.
 アンモム Ammon.

イの部

イオニーイ Ionia.
 イオーン Ion.
 イオラオム Iolaos (Iolaus).
 イスメニウム Ismenias.
 イソクラテース Isokrates.
 イッコム Ikkos.
 イブナム Ibykos (Ibycus).
 イブス Ibis.
 イフィタューイ Iphikles.
 「イリアス」 Ilias (Iliad).
 イリシオン Iiisios (Iiisus).

ウの部

ウラニオン Urania.
 ウラノム Uranos (Uranus—Ouranos).

ウリキキース Odysseus (Ulysses—
 Ulysses).
 ウヂニキウス (UJ)

エの部

エウクレイデース Eukleides (Euclid).
 エウチユデーモス Euthydemos.
 エウチユフロン Euthyphron.
 エウデロス Eudoros.
 エウリピデース Euripides.
 エウリュピテース Eurybates.
 エーペイオム Epeios.
 エソップ Aesop (アソップの本名は「アイ
 ナーキ」 Aisopos).
 エククレーニア Ekklisia (Ecclesia).
 エピクラテース Epikrates.
 エピゲネース Epigenes.
 エピダウロス Epidauros.
 エピメーテウス Epimetheus.
 エフィアルテース Ephialtes.
 エフェソス Ephesos.
 エヘタラテース Echekrates.
 エラトール Eratos.
 エリユキメオンキム Eryximachos.
 エリス Elis.

エラボス Erebor.
 エローム Erda.
 エヴノム Evnos.
 エンダリメキオン Endymion.

オの部

オイノイ Oinoi (Oenoe).
 オークレオニス Okeanos (Oceanus).
 オーチニス Orys.
 オヂニツセウス Odysseus
 (ウリキキースウリウ)

オリイヂヤ Oreithyia (Orithyia).
 オリオンキム Olympus (Olympus).
 オルタゴラム Orthagoras.
 オルフェウス Orpheus.

カの部

カストーラ Kastor (Castor).
 ガニメーテーク Ganymedes.
 カライメナム Kallaischros (Callaechrus).
 カリア Karia (Caria).
 カリアス Kallias (Callias).
 カリオペー Kalliope (Calliope).

キの部

- キキナンチアス Kianthias.
- キキナンチアス Kianthippe.
- キキナンチアス Kianthippus.
- キキナンチアス Kuidathenaion
(Cydathenaeum).
- キキナンチアス Kydias (Cydias).
- キキナンチアス Kyzikos (Gyzicos).
- キキナンチアス Kypselos.

クの部

- ククナンチアス Kresippus (Ctesippus).
- ククナンチアス Glaukos.
- ククナンチアス Glaukon
} Gloukon.
- ククナンチアス Klazomenai (Clazomenae).
- ククナンチアス Kritias (Critias).
- ククナンチアス Kriion.
- ククナンチアス Kriobulos.
- ククナンチアス Kleinias (Cleiniias).
- ククナンチアス Kreon (Creon).
- ククナンチアス Krete (Crete—Crete—Candia).

ククナンチアス Kleophantos.

ククナンチアス Kleoblos.

ククナンチアス Kleonbrotos.

ククナンチアス Kronos (Kronus).

ククナンチアス Krommyon (Crommyon).

ケの部

- ケケス Kebes (Cebes).
- ケケス ケーリオン Geryon.
- ケケス ケオス
} Keos (Ceos).
- ケケス Kepis (Cepis).
- ケケス Kephisos.
- ケケス Kephalos (Cephalos).
- ケケス Kerameis (Cerameis).

クの部

- ククナンチアス Kükuros (Cocytus).
- ククナンチアス Kos.
- ククナンチアス Kodros.
- ククナンチアス Korybantos (Corybant).
- ククナンチアス Gorgias.
- ククナンチアス Gorgon.

ククナンチアス Kolchis.

ククナンチアス Korunos (Cornus).

サの部

- サササス Satyros (Satirus—Satyr).
- サササス Sappha.
- サササス Samos.
- サササス Salamia.
- サササス Zamolxis.

シの部

- シシシス Sisyphos
- シシシス Sivylla (Sibyll).
- シシシス Simois (Simois).
- シシシス Simoines.
- シシシス Simoines.
- シシシス Simias.

スキの部

- スキシシス Skander.
- スキシシス Sicythia (Sicythia).

スキローキス (Skopas) } Skopas (Scopas).

スタシノス Sasinus.

ステリギネキス Strygion (Strygium—Stryx).

ステシホロス Stesichoros.

ステシムドトロキ Stesimbroton.

ステシラネキス Stesilas (Stesilau).

ステファノス Stephanos.

スニオノン Sunion. (Sunium)

スフハントス Sphantos.

ゼの部

ゼイレーノス Seilenos (Silenus).

ゼウキジヤネキス Zeuxippus.

ゼウス Zeus.

ゼーノーン Zenon (Zeno).

ゼリギダブロン Selymbria.

ソの部

ソークラテース Sokrates (Socrates).

ソフィスト Sophist.

ソフォクラーキス Sophokles (Sophocles).

ソポクロイコス (Sophroneikos).

ソローソ Solon

タの部

タタロキス Daidalos (Dedalo—Dedalus).

タウラネキス Taureas.

タンス Thasos.

タミリネキス Thamyras.

タマス Thamus.

タモーソ Damos.

タスタロキス Tartaros (Tartarus).

タタネキス Dareios (Darius).

タラーキス Thaläs.

タラントナ Tarentum.

タナクロキス Tantalos (Tantalus).

チの部

チオーネー Diognä.

チオクローキス Dioklas.

チオニマ Dioima.

チオニオンキス Dionysos.

チオニオンゾーロキス Dionysodotos.

チカステキス Dikastes (Dikast).

チシヤキス Tisias.

チリフキー Typhü.

チリニキス Tynnichos.

チリヤネキス Tiresias.

ツの部

チキヂキキス Thukydides (Thucydides).

ツリイ Thuri.

テの部

テウツ Theuth (Theuth—Teuth).

テアゲキス Tēages.

テセウス Thesus.

テチキス Thētis.

テビイ Thebai (Thebe—Thebes).

デーモクラテース Demokrates (Democrates).

デーモドローキス Demodōkos.

デーモフキス

デーモフキーン (H) } Demophōn.

テリヤネキス Telchōn.

デーロス Delos.

テオクリュメノン Theoklymenos.
 テオドロティス Theodorotides.
 テオドローテス Theodorōtos.
 テオドローロス Theodoros (Theodoros).
 テッサリオン Thessalia (Thessaly).
 テミストクラーテス Themistokles.
 テラモーン Telamōn.
 テリオン } Delion (Delium).
 デーリオン(註)
 テルプネオン Tersion.
 テルプネアターテス Tersiphora.

エの部

エドナ Dodona.
 エシマクテマキス Thrasymachos
 (Thrasymachus).
 エシマ Doria.
 エシマエラプク Triptolemos.
 エシマエー Threke (Thrace—Thracia).
 エシマキス Dripidas.
 ナウクラティス Naucratis (Naxeratis).
 ナクソス Naxos.

ナの部

ニの部

ニキアス Nikias.
 ニケラトス Nikelatos (Nicalatos).
 ニクストラトス Nikostratos.
 ニフアン Nymph.

ネの部

ネステューラ Nestur.
 ネメア Nemea.

パの部

パイニオン Paiania—Paiōnia (Paiania).
 パイデーテス Paidēs (Hades).
 チャイレデーモス Chairēdēmos (Chairedemos).
 ハイアンファン } Chairēphōn
 (ハイアンファン(註)) (Cherephon).
 パッサニアス Passanias
 パトクレス Patrokles.
 パトクレス Patroklos.
 パノプス Panops.
 パノペオス Panopēos.
 パラミデーテス Palamedēs.

パラス Paulos (Pararus).

ハルキディケー Chalkidike (Chalcidice).

ハルモヂオス Harmodios.

ハルモヂューク Charmides.

パロス Paros.

パンアテーナイア Panathēnaia.

ピの部

ピアス Bias.
 ヒエロギモス Hierogymos.
 チオス Chios.
 ピタコス Pitakos (Pitacos).
 ピチアス Pichia.
 ヒッピアス Hippias.
 ヒッポクラテス Hippokratēs (Hippocrates).
 ヒッポケンタウロス Hippokentaurus
 (H.-centaurus).
 ヒッポトハレス Hippothales.
 ヒッポニクス Hipponikos (Hipponicus).
 ヒマエラ Chimaira (Chimera).
 ヒマラ Himera.
 ビザンチオン Byzantion (Byzantium).
 ピリキオス Pythios.
 ピリクレーテス Pythokleidas.

ハイペリオン Phaulon.

ハイペリオン Hyperboreae.

ハイプリオン Phryphlegethon.

ハイラム Pylampes.

ピンドロス Pindaros (Pindar).

レの部

ポドルス Podrus.

ファイドン Phaidon. (Phaedo).

パイドンテース Phaidontes (Paeontes).

ファシス Phasis.

ファッソン Phasson.

ファノステネース Phanoestenes.

ファルマキオン Pharmakia (Pharmacia).

ファラロン Phaleron (Phalerum).

フィリッピデース Philippiades.

フィリッポス Philippios (Philips).

フィロメロス Philomelos

フィロメロン (世) } (Philomelos).

フィロラオス Philolaos.

フィディアス Pheidias (Phidias).

フェミウス Phemius.

フェンクラテース Pherekrates.

フェニクス Phoinix (Phoenix).

Hercules).

ブラシダス Brasidas.

プラタヤ Plataia (Plataea).

プラトーン Platon.

プリアニオン Pramnion.

プリアモス Priamos (Priam).

ブリアニオス Briareos.

フリウス Phius.

プリエチ } Priene.

プリエチー (世) } Priene.

フリッギア Phrygia.

プリタネース Prytanes.

フリッポーンテース Phrynodas.

プロタゴラス Protagoras.

プロディコス Prodikos (Prodicus).

プロテウス Protheus.

プロメテウス Prometheus.

レの部

ケイローン Cheilon (Chilon—Chilo).

ヘンペテラス Hephaistos.

ヘーラ Hera (Hera).

ヘラクレス Herakles.

ヘラクレイア Herakleia.

ヘラクレス Herakleides.

ヘロドトス Herodikos.

ヘカベー Hekabe (Hecuba).

ヘカメテース Hekametes.

ヘクトール Hektor.

ヘシオドス Hesiodos (Hesiod).

ケニア Chenia.

ペニア Penia.

ヘッラ Helias.

ペリアス Pelias.

ペリクレス Perikles.

ペルシア Persia.

ペルセポネー Persephone.

ヘルメース Hermes.

ヘルモゲネース Hermogenes.

ホの部

ボイオチア Boiotia (Bocotia).

ポチデア Potidia (Potidea).

ポリクラテース Polykrates.

ポリクレイトス Polykleitos (Polykleitos).

ポリポノース Polypnos.

ポリュデウケース Pollydeukes (Polux).

ホメーロス Homēros (Homer).

ポリヒミニア Polymnia (Polyhymnia).

ポレマρχος Polemarchos (Polemarchus).

ポロス Polos (Polus).

マの部

マハカーン Machaōn.

マサラス Marsyas.

マンチネア Mantinea.

ミの部

ミッコス Mikkos (Mikkus).

ミダス Midas.

ミナ Mina (Minae).

ミンア Minā.

ミソーン Mysōn.

ミチコチ

ミチユーチー(註) } Mytilene,

ミラキヌアト Myrrhinusa.

ミジトス Mijitos.

ム

ムサオス Musaios (Musaeus).

メの部

メーテス Metis.

メデーア Medeia (Medea).

メガラ Megara.

メチオン Metion.

メトロドロース Metrodōros.

メトロビウス Metrobius.

メネキオニス Menexenos (Menexenus).

メネラオス Menelaos.

メノーア Menōn (Meno).

メラニッペー Melanippē.

メランボス Melampōs.

メレートス Melētos (Melētos—Melitus).

メレスアス

メソニアス(註) } Melasias.

メンダ Mendē.

モの部

モリコチス Morychos.

ラク

ラクダイモーン Lakadaimōn (Lacedaemon).

ラダマントス Rhadamantos.

ラクデーラ Lachēra.

ラムアキス Lamachos.

ラムパカス Lampakos.

ラリッサ Larissa.

リ

リキリダリキス Likyrimios.

リギア Ligya.

リクουργス Lykourgos (Lycurgus).

リケイオン Lykeion (Lycæum).

リクーン Lykōn.

リシサニアス Lysanias.

リシアス Lysias.

リシス Lysis.

リシマコチス Lysimachos.

リシア Lydia.

ル

ルコロフヘーラ Leukolophides.

ルーオン Leōn.

ルーオンチオン Leontion (Leontium).

レスボス Lesbos.

ルーナイア Lenaia (Lenean).

Date	Description
1901	Jan 15 - Received from Mr. Smith \$100.00
1902	Feb 20 - Paid to Mrs. Jones for rent \$50.00
1903	Mar 10 - Received from Mr. Brown \$200.00
1904	Apr 5 - Paid to Mr. Green for services \$75.00
1905	May 1 - Received from Mr. White \$150.00

第一卷詳細目次

第一卷 第一册

ハルミデース

○解題

本篇の論題(三)——筋制のゲレレア語の意義(三)——本篇の筋(三)——本篇中に存せる種々の學術上の問題(七)

○ハルミデース

對話人物——場所——ガチダヤ戦争後ソークラテース運動場に至る——ハイレフォーン——タリチアス——ソークラテース戦役不在中本國の哲學及青年の狀況を問ふ(一一)——現代の最大美——美なるハルミデース(一一)——ハルミデース入り来る——ソークラテース其美に驚く——容貌のみに非ず身體も美なり——高尚なる精神を之れに加へば完全の美なるべし(二三)——精神の裸體美(二四)——タリチアス、ハルミデースを此方に呼ぶ(二四)——ハルミデースの頭痛——ハルミデース來りて演説の大騒動——ハルミデース、ソークラテースに談話せし時の美——ソークラテース肉情——美少年の戀愛の戒め——頭痛治療と符呪(一六)——ソークラテースの名聲——符呪の説明——治療は全身より爲さる可からず(一七)——眼の治療と頭部全體——頭部の治療と

全身の治療——大體の治療法——トリーケー王ザモルギシスの前(一八)——
部と全身、身體と精神——グレシアの醫師の不完全——精神は原因となる——
先づ精神より治療せよ——符呪に由つて精神の治療されざる以上は身體
或は局部を治療せず——符呪使用の宣誓——頭痛に由つて精神の進歩を致
す——ハルミデースは人間中最も節制の者——ハルミデースの祖先は人に
優りし人なりしこと(二二)——ハルミデースの外貌の美——内心の美——ハル
ミデースは節制を有せるか——ハルミデースの微笑の美——ハルミデース
の恭謙——ハルミデースは節制を有せるや否やを共に研究せん(二三)——研
究の方法——節制とは如何なるものぞ——定解第一、節制とは靜穩なり(二四)
——遲鈍と敏捷——靜穩に非ず輕快も善なり——節制は敏捷よりも靜穩な
ることに非ず——定解の第二、節制は恭謙なり(二九)——恭謙必しも善に非ず
——第三の定解、節制とは自己の業務を爲すこと(三〇)——之れクリチアス
の入れ智慧なり——此言は諛語なり他に意味あるべし——書記の例——善真
なる國民は自ら織り自ら自己の器物等を作らざる可からざるか——節制
とは自己の業務のみを爲すことにはあらず——自己の業務を爲すとは何
を意味す(三四)——聊かクリチアスを刺す——クリチアスの不安の態度——ハ
ルミデース議論に破る——クリチアス、ハルミデースを怒る——クリチアス

との議論となる——職人等は自己の事のみを爲すか他人のものをも爲すか——「作す」と「爲す」との區別(三七)——ヘシオドスの言——クリチアスの自己の業務と云ふことの説明——ソークラテース用語を區別することを好む人なるプローデコスを想起す——定解の第四節制とは善行を爲すこと(三九)——節制なる人は自己の節制なるを知らざるか——自ら節制にして其節制たるを知らざることを得るか(四一)——クリチアス前書を撤回す——クリチアス自知を責ぶ(四二)——デルフォイ神社の額書なる「己を知れ」との語のクリチアスの解釋——「己を知れ」とは節制なれと云ふを意味す——クリチアス人々の此の格言の解釋を以て誤解となす——定解第五節制は自知なり(四三)——ソークラテース節制は何物かの學術なりやを問ふ——節制は其物自身の學術(四四)——其物自身の學術は如何なる事を爲すものなるか——智慧と其他の學術——他の諸學術は目的物あり内容あり(四五)——學術と智慧との相違——クリチアス、ソークラテースは人を論破せんことを目的とせりと語る——ソークラテースはたゞ研究の意志あるのみと答ふ——議論の勝負は目的に非ず——智慧は其物自身の學術にして又た諸他の學術の學術なり(四七)——又た無學術の學術——其意味(四八)——此智慧の性質及び効用(四八)——クリチアスの位置の困難——ソークラテース學術の學術なる

ものあるやを問ふ(四九)——視覚の視覚——聽覚の聽覚——感覺と其の對象——
—欲望の欲望なるもの——愛の愛——恐懼の恐懼——意見の意見——内容なき
學術ありや否や(五一)——大小の相關なること——倍數の例——種々の例——感
覺と對象——聽覺と音聲——視覺と色——此問題の解釋は大人物の出づる
を待つ——ソークラテース學術の學術なるものゝ存在を信じ能はず——此
學術の効用を疑ふ(五五)——ソークラテース學術の學術なるものゝ成立の
可能及び其の利益ありとこのことの證明を要求す——ソークラテース、クリ
テアスに一條の活路を與へ話頭を一轉す——其物自身の知識を有せる者
は己を知る——ソークラテース知れる所知らざる所を知る自識なるもの
の効用を問ふ——内空の知識——踏穩の知識は節制或は智慧の教へたるも
のに非ず(五八)——學術の學術は衛生も何をも教へ能はず(五八)——學術の學
術なるものは、知る、或は知らず、と云ふことを知るのみ——學術の學術の實
用の試験——智愚判別の用を爲さず——醫師の用を爲さず——學術の區別あ
るは對象を異にせるに由る——知識の實質——學術の學術の効益なきを言
ふ——此くの如くんば節制或は智慧は無用のものゝみ——他の解釋に新意
義を發見す(六三)——節制或は智慧を新意義よりせば大効益あり——學ぶ所
を容易に學ぶことを得——他人の知識を欺す——不測の結果擬起せん——尙

は智慧の有益なりや否やを疑ふ(六五)——ソークラテースの夢(六六)——此智慧は絶對の制治權を有せりとするも尙ほ其幸福を興ふるは疑ふべし——此智慧とは何の知識ぞ——幸福を興ふる知識は智慧の他にあり(六八)——善悪判断の知識(七〇)——タリチアスの循環論法——學術の學術を取り去るとも尙ほ有益なる知識の學は存留せり(七〇)——善、利の學術なり學術の學術に非ず(七一)——學術の學術の無用なること——善を興ふるは他の學術一般の知識に非ず各科の知識なり(七一)——タリチアスは智慧に就いて明瞭なる觀念を有せず——ソークラテース從來の議論の結果皆無なりしを語る(七二)——許容も假定も一切無用に終れり——議論の無結果は悲しまずと雖ハルミデースの爲めに氣の毒に感ず——トレケーの醫師の教へたる符呪を用ゆる所なきを悲しむ——研究法或は誤りしか——ハルミデース自ら研究せよ——ハルミデース自ら節制或は智慧を有せるを知らずと云ふ——ハルミデース符呪を受けんことを求む——ソークラテースに従はむことを約す

リ
ユ
シ
ス

.....七七

○解題

.....七九

本篇の論題——本篇の筋——本篇と他の諸篇との關係(八三)——本篇議論の順序——「ドラマ」上の興味(八四)——人物描寫の技量

○リュシス……………八五

對話の人物——場所——ロツポタレース及びクテシッポス——會合所——愛者愛人——ロツポタレースの戀愛(八七)——クテシッポスの嘲弄(八八)——愛人リュシス——ロツポタレースの愛人を頌美する方法——ソークラテース曰く愛人を頌美するは自己の名譽を欺ふなり——愛を得ざるまでは愛人を頌美すべきものに非ざるを教ふ——何となれば愛人の自貢と傲慢とを長ぜしむるが故に(九二)——故に愛人を得るは困難となる——駭かしたる獸の如く——自己の詩に由つて損す——ロツポタレース愛人を得るの方法をソークラテースに問ふ——試に君の愛人と談話せよ——ヘルメース神社の祭禮(九四)——メキセノス——運動場に入る——祭禮將に終らんとせる時——種々の遊戲——美と善とのリュシス(九五)——リュシス來りてソークラテースの側に坐す——二少年と語る——朋友と富の共通(九六)——メキセノス彼方に至る——リュシスと父母の愛を問答す——父母は其子を制限する所少なからず——父母の其子を制限するは相當の年齢に達せざる故——年齢に非ず知識の不足にあり——知識あらば人々の依頼する所とならむ——國家の事も然り——

王の信用の例——王子疾病の例——知識と信用(一〇四)——信用と自由と利益
——無知と不信用——吾等無用の人たる時、人吾等を友とするか——知識の必
要を感じしむ——自ら知識なき者なるを憐らしむ——懐心すべからざるを
憐らしむ——意中の人を高めずして之れを低くし之れを下し自負心を起
こすこと勿らしむ(一〇六)——メチキセノス歸り來る(一〇七)——ソークラテ
ス戯れにメチキセノスを恐れ、リュレスの援を請ふ——メチキセノスと聞
答す——金銀犬馬よりも朋友を得むことを熱望す(一〇九)——ダレイオス大
王たらんよりも朋友を得むことを欲す——メチキセノスを挑撥して朋友
とは如何なるものなるやを問ふ——二人中一人のみ愛せば人朋友なるか
(一一〇)——愛し返へさざる時は如何ん——一方は愛するも一方は之れを嫌
ふ時は如何——孰れか孰れの友なる——愛し返へさぬは朋友に非ず——馬、鶴、
酒、犬等の愛——吾が愛するものは愛し返へさずとも可愛(一一二)——小兒と
剛親——吾が愛するもの可愛く吾れを愛するものは必ずしも可愛からず
——其不合理——愛する者は愛されたる者の朋友なるか——朋友及び敵人
に對して愛惡の轉倒することあり——然らば朋友とは如何なるものぞ——
——其間何等か誤謬ありしなるべし——リュレスとの問答に移る——同は同に
親しむ(一一五)——半ば正しく或は全く正しからんか——「同は同を好む」どの

善は一半は眞理に非ず——善人と善人とは一一致す——悪人と悪人とは一一致す——善人は善人の友、悪人は友なし——尙ほ疑念存す——同は他の同に何の善をか爲す——善は自己の善に満足す、他の善を求むるの要なし——吾等の誤謬——同は同の敵、善は善の敵(二二〇)——商賈敵——異る者の友情(二二〇)——貧と富、病者と醫師、知者と未知者——討論家批評せん——敵は朋友なるか——正直は不正直の友なるか——善にも非ず、悪にも非ざるものゝ間の友情は如何ん(二二三)——美は朋友、善は美なり——善、悪、非善、非悪の三原理——非善、非悪の友(二二三)——善と非善、非悪は友——健康人と醫師との例——身體は非善、非悪——疾病は悪——之れ悪に腐敗されざるの前——同化と混合——毛髮の白染め——老齡白髮——善分子尙ほ存して善を求む——智慧を求むる者は賢者、非賢者の仲間者なり——友情とは非善、非悪が悪の存在よりして善を求むることなり(二二八)——又た疑念起りて緒論陰影の如し——議論又々誤謬なりき——朋友たるの精神目的(二二九)——病者、醫師と友たるの目的——身體は悪あるに由つて善を要す——醫術を貴重するは健康の爲めなり——目的と方便——友情の第一原理(二三三)——最大貴重物と其物の爲めの貴重物——目的と方法——金銀は他の目的の爲めに貴重なるのみ——友情の終局する所のもの——惡なければ善の要なし(二三五)——友情の最終原理の説明——

惡の滅却の場合——惡ならざるものも滅却するか——欲認は存留す——愛も
 存す——惡滅却せりとも友情は存す——若し惡は友情の原因なりとせば惡
 滅却せば友情なし——他の原因を要せざるか——願認は友情の原因（二三九）
 ——友情は同好性或は自然なり（二四〇）——同好性なければ眞の愛なし——同
 好性は愛さるべきもの——『同好性』と『同』との區別（二四一）——善、惡、非善、非惡、何
 れか同好性なる——前の誤謬に再歸す——余は結論を得ず、たゞ前論を再説
 總括するを得るのみ——リュシス及びメネキセノスを迎ひに来る——朋友は
 如何なるものなるか遂に結論に達せず

ラッヘース……………一四五

○解題……………一四七

本篇の論題——本篇の筋——本篇の學理上の價值——プラトーンの事實に重
 を置かずして理想を主とせしこと

○ラッヘース……………一五三

對話人物——劍術師の見物——其目的——兩將軍の助言を乞ふ——子の教育の
 爲め（一五四）——祖先の功業を念す——子を戒戒す——少年に教ゆるに最も善

其の科目は何ぞ(一五六)——擊劍術——兩人共に助力を奮ふ——子を教育するの義務——ラッヘース、ソークラテースを推薦す——ニキアスの子の師匠とソークラテース——リュシマッホス老人とソークラテースの父との親しき交際(一五八)——リュシマッホスの子尋常にソークラテースの事を言へり——ソークラテースの父は秀出せる人物なりき——ソークラテースは父の名譽のみに非ず國家の名譽をも維持す——デーリオン戦争の時ソークラテースの勇氣(一五九)——リュシマッホス今後ソークラテースと親密に交はるとを求む——劍術の意見を問ふ——ソークラテース年少を以て兩將軍に先づ賞はしむ——ニキアスは劍術修練を有用となす(一六〇)——高尚なる着眼を養ふ——自信の念を生ぜしむ——威風を作る——ラッヘースは有用ならずとす(一六一)——若し有用ならばラケダイモーン人は必ず先づ此の術を發明せしならむ——有用ならばラケダイモーンにて此擊劍師尊敬せられしならむ——此劍術師ラケダイモーンには入り込み能はず——戦争中劍術師の無用なるを實知せり——此劍術師ステシラオス失敗の滑稽實話(一六四)——此術無用なるか然らざれば欺騙に過ぎず——ソークラテース多數決を排す(一六七)——教育ある人の意見に従へ——知識なり、數に非ざるなり——此事に關する知識を有せる者のみ眞の判定者たるべし(一六七)——其術に達し修養な

る師に就きし人の意見に由つて決すべし——先づ技術の性質を知るを要す——先づ目的を論ぜよ(一六九)——青年の精神を目的とす——誰か此術に達し、真教師に就きしか——師を云ふか事業上の功績を示めすか何れかなかる可からず(一七二)——人の子を護らしむる勿れ——ソークラテース兩將軍に向つて言ふべきことをリュシマッホスに教ゆ(一七三)——兩將軍は此術を發見したるか、學びたるか、師は何人ぞ——友人の子等を試験に供するは危険なり(一七四)——兩將軍も子あり又た教育に心を用ゆるの人なるべし——ニキアス、ソークラテースの議論に秀出の人なるをリュシマッホスに語る(一七五)——ソークラテースの知力上の大引力——其議論力(一七五)——ソークラテースと談話するの利益——議論と其人物の價值——言行一致の人は琴の音よりも美なり——ソークラテースの言行にはドリリア式の美あり(一七八)——ラッヘース、ソークラテースの勇氣ある人なるを認む——先づ其扱ふものの性質を知るを要す(一八〇)——精神に徳義を與ふるを目的とす——先づ徳義の性質を知るを要す——徳義の一部を考察せん——勇氣——勇氣とは何ぞや——自己の立場を守る人(一八三)——遁走して勇氣なるあり、アイチアスの馬の例(一八四)——一部の勇氣を問ひしに非ず勇氣全般を問ひしなり(一八五)——勇氣の通有性——迅速の定解を以て例す——迅速の定解——勇氣は忍耐力

(一八七)——一切の忍耐盡く勇氣に非ざる如し——勇氣は高尚なるもの——思慮ある忍耐——知識の分子(一八八)——戦争の例——愚なる忍耐(一八九)——知識なきことに耐ゆるは勇氣なるか——愚昧なる耐忍は下等なり——ラッヘース論理の矛盾——言行一致せず——ドリュヤ式に非ず——耐忍を以て此問題を研究せん——ラッヘース自己の思想の混亂を自白す——ニキアスも議論に加はる——知識と勇氣(一九四)——其の知識とは何の知識ぞ——恐懼及び自信の知識なり(一九五)——ニキアスとラッヘースと争ふ——恐懼及び自信の知識は必しも人を勇氣ならしめず——醫師は恐懼及び自信の知識を與へ得ず——恐懼は人に由て異なる——ト策者は勇氣なるか——ニキアスは選辭を爲せりとラッヘース云ふ——専門の知識以外恐懼希望の基礎の知識を要す(二〇〇)——冢の例——猛獣にも勇氣なきか——思慮ある勇氣——ダモーンとプローダコス——ニキアスの言討論の價あるが如し(二〇四)——恐懼及び希望の説明——將來の善惡——學術は過去、現在、將來を一貫して一たり(二〇六)——大將とト策者——ニキアスの議論の矛盾——勇氣は單に將來のみのものに非ず——ニキアスは勇氣全體に非ずして三分の一を云へり——新定義に由れば勇氣は徳義の一部に非ず全體なるが如し——ニキアスの矛盾——ニキアス、ラッヘース共に勇氣の何たるを知らず(二一二)——少年の教育は之れ

をソークラテースに依頼せん——ソークラテースも亦勇氣の何たるやを
知らず——真教師の發見を力めん——老人小兒打ち連れて學校に行きて學
ばん(二二三)

プロークラテース……………二二五

○解題……………二二七

本書の筋——ソフィスト諸大家の一家に會合するは事實に非ず——ソーク
ラテース及びプロークラテースの性質は歴史的のものに非ずとするの理
由もなし——本篇中の學理——シモーニデースの詩に就いて——雄大なる「ド
クマ」——人物の描寫——純ソークラテースの説——本篇と他諸篇との關係
○プロークラテース……………二二七

對話者——場所——美なるアルキピアデース——アルキピアデース鬚毛を生
ず(二二八)——ソークラテース今日もアルキピアデースに會ひて來れりと云
ふ——一層美しき人——大賢は大賢(二二九)——至賢の人プロークラテース——プ
ロークラテース、アテーナイ市に來る(二二九)——プロークラテースと會見の順
序を語る(二三〇)——今朝未明ヒッポクラテース來る——ヒッポクラテース、プロ
ークラテースのアテーナイに來りしを聞き込みしことを語る——ヒッポクラ

一夜の明くるを待つ——プロータゴラスに由つて何者とせられんとして
金銀を拂はんとするが(二三三)——醫師ヒポクラテース——彫刻師フェイデア
ス——プロータゴラスは何者が——「ソフィスト」なり(二三四)——プロータゴラス
は人をして「ソフィスト」たらしむるもの——「ソフィスト」たるを恥ぢざるか——
「精神を「ソフィスト」に托さんとするか(二三六)——「ソフィスト」の智慧は如何
なるものぞ——人をして雄辯ならしむ——何事に雄辯ならしむるぞ(二三七)
——「ソフィスト」の知れる所は何ぞ——一身及び精神を未だ知らざる者に托
するは大危険なり——「ソフィスト」は精神の食物の卸賣り小賣り商人(二三九)——
知識は精神の食物——先づ食物の有害無害を明かにせよ——精神上の醫師の
試験判断——行きて教を受くるは食物を購買するよりも危険——年長者に議
するの必要——カリアスの家に滞在せる大「ソフィスト」(二四一)——カリアスの家
の前に至る——ソークラテース等支那番に「ソフィスト」なりと疑はる——プロ
ータゴラス及び其門弟子——プロータゴラスの言語動作と門弟子の動作(二
四三)——ヒッピアス——プロータゴラス(二四四)——ソークラテース、プロータゴラ
スに言葉を交ふ——プロータゴラス、ソークラテース等の來りし目的を問
ふ——プロータゴラス「ソフィスト」の由來を語る(二四六)——古來多くの名人は

「ソフィスト」にして其技術に隠れしもの——プロータゴラスは公然と「ソフィスト」たることを名乗る——衆人の前にて談話せむ——ヒッピアス、プロータゴラス等も一所に集まる(二四九)——ソークラテース、ヒッピクラテースの志望を違ふ——プロータゴラス能く人を進歩せしむることを語る(二五〇)——ゼウキシッポスは繪畫を教ゆ——オルタゴラスは吹笛術を教ゆ——プロータゴラスは何事に於て人を教へ人を進歩せしむるや——プロータゴラス自ら他の「ソフィスト」と異なるを云ふ——一家一國を治むるの知識を教へむ(二五二)——政治の術は果して傳授さるべきものなりや否や(二五二)——師匠ある藝術——師匠なき藝術(二五二)——大政治家も其子に之を教へ能はざりき(二五四)——メリタレースの例——ソークラテース徳義の教へられ得べき者なるやを疑ふ(二五五)——ソークラテース徳義の教へられ得べき證明を求む——プロータゴラス神話を以て之を語る——神は諸動物を遣る(二五六)——其天性の賦與生命維持及び防禦法を與ふることをプロメーテウス、エピメーテウスに命ず——人間ののみは裸體にして防禦なし——プロメーテウス智慧を盗みて之を人に與ふ——人間の進歩——社會形成(二五九)——社會維持の方法——正義と敬神——正義と敬神とは諸藝術と異にして萬人普通なり(二六〇)——政治は正義と智慧に依るもの故萬人普通の能力なり——人は正義或

——貴劇は教訓の可能を示めず(二六三)——プロロータゴラス徳義教育の可能を謂ふ——徳義は萬人有せざるべからざるもの——徳義の必要——教育に就いて(二五六)——小兒——稍長せば——品行——大詩人の書——善真なる琴歌——優美の品性——體操——國法を教ふ——善真なる父に不真の子ある場合の理由(二六八)——互に相教へ相學ぶ時は其の人は學ばざるものよりは優れり——法律及び人道を教へられたるものと教へられざるものとの差異——フェレクラテースの野蠻人劇——普通初歩教師——プロロータゴラス自ら進歩したるものも教師なりとし人に優れりとなす(二七一)——プロロータゴラスの報酬支拂規則(二七二)——プロロータゴラスの演説の餘響に恍惚す——ソークラテース我に復る——多くの演説家を嘲刺す(二七三)——無言なる事書物の知し——眞雄性の壺と長演説家——ソークラテース短き答語を認む——徳義は一體の者にして諸徳は其の部分なるか或は一物の種々の名稱なるか(二七四)——一物の部分——部分の諸意味——人は同一徳義を有せるか——諸徳の感能皆同一なりや否や(二七五)——諸徳同じからず——正義は正しきものも性質なり——諸徳は異ると雖其多く即ち正義神聖等は殆ど相似たり——プロロータゴラス諸徳の相似たることを許容するも其同一なることば之れ

を否む——プローマゴラス物は唯だ一の反對物を有せるものなることを
許容せしめらる(二八二)——愚味は智慧及び節制の反對——愚味は智慧と節
制との兩者の反對なりとせば節制と智慧とは同一なるべし(二八六)——不
正と節制と兩立するを得るか——不正を行ふ爲めの明斷——善なるもの
——善は有益なるものなるか——善は所に由り人と物とに由つて異なるも
のなり——ソークラテース短かき談話を望む(二八九)——プローマゴラス短言
討論を嫌ふ——ソークラテース短言語を用ゐて問答するを要求す——ソ
ークラテース怒つて歸らんとす(二九二)——カリ阿斯、ソークラテースを引き
止む——ソークラテース、プローマゴラスの言語を短かくすべきを主張す—
—アルキピアデースの行司——プローマゴラスは大演説家——ソークラテ
ースは討論第一の人(二九三)——ソークラテース記憶不長と云ふは眞に非
才(二九四)——不偏不黨の討論傍聴——プローマゴラス君子の争ひたれと云ふ
——ヒッピアス紳士の態度の必要なるを云ふ——言語の長短を中庸にせよ
と云ふ——討論の裁決者を置く可しと云ふ——ソークラテース討論裁決者
を置くの不都合なるを云ふ(二九七)——ソークラテースの調和策——プロ
ーマゴラス問題を變じて詩學を論ぜんとす(二九九)——シモーニデースの詩
——シモーニデースの詩の他の部分——プローマゴラス此の詩人の言に矛

盾なきやを問ふ——ソークラテース言語學者プロテゴスの類を求む——
——スカマンデル河の例——同義語の哲學——「ニテあること」と「トなること」
とは同一なりや如何——シモーニデース矛盾なし——プロテゴスは古學を
研究せる人——ソークラテース、プロテゴスの門弟なりと云ふ——シモー
ニデースの詩の精神——ラケダイモーン人の國民的秘密の哲學(三〇七)——
ラケダイモーン人は武力に非ず哲學にて世界を支配すべし(三〇七)——哲
學上の秘密會議——女子も高尚なる教育を受く——ラケダイモーン人は名
言を出すと多し——七賢人(三〇九)——デルフォイ神社の類——ラケダイモーン
人の簡單主義の哲學——シモーニデースとピタゴラス——シモーニデースの精
神に據りて其詩を解すべし、解釋の方法——永久善にてあることとは不能に
して人の善悪は境遇に出つて變化す——善は時に惡となる——人は永久善
たること能はず——不能の事を求めず——有意無意の善惡に就いて「心より」
の語の用ひ所——人の缺點を發見せんとせず——適度中庸に満足せん(三一
七)——完全無缺の人なし(三一七)——レスボスの方言の解釋法——ソークラテ
ース論題を始めに歸へさんとす——詩人を論ずるが如きは常人凡俗の爲
す所(三一七)——實際には藝妓鳴りものを要せず自己の言語を以て樂しめ
(三一七)——紳士の宴會の理想——アルキピアテース、プロテゴラスに迫る

——ソークラテース、プロータゴラスに談論を纏げんことを求む——自任の「ソフィスト」金錢の報酬を求めし最初の人——前論再記——プロータゴラス論は相近似せりと雖勇氣は趣を異にすとなす(三二三)——勇氣とは如何なるもので(三二四)——勇氣とは勇猛なり——知識と大勝と勇氣——知識なき勇氣——知識は勇氣なりや否や——勇氣は精神身體の自然の結果——善き生活悪しき生活——快樂は善(三二八)——快樂と善とは同一——眞研究に進まん——知識は命令者か奴隷か(三三〇)——「快樂に打ち勝たるとは如何なることを意味するぞ(三三一)——其説明——物の善惡は結果によりて之を判斷す——惡結果を生ずる快樂は惡——苦痛にして善きものありとの意義——結果の善(三三五)——快樂苦痛の結果以外他に善惡の標準なし(三三五)——快樂苦痛の大小比較——快樂苦痛の名稱に代へて善と惡との二名稱を用ひて説明せん——然らば打ち勝たるとは何に由つて——「善に由つて打ち勝たるとは其滑稽——將來の快樂苦痛——尙ほ快樂苦痛のみ——快樂苦痛の大小多少遠近の計量(三四〇)——計量術と人命救助——計量術と外觀——知識と計量——知識は最優者なり——快樂に打ち勝たるとは無知のことなり——無知と擯擲の誤認(三四二)——快樂に打ち勝たるとの意義の決解——「ソフィスト」は無知を尊すと稱するもの——快樂ならしむる行爲は尊敬す可く又た有益

なり——人は大善をなし得るとき他の事を爲す可きものに非ず——心より
悪を求むるは人性に非ず——前論に歸へり勇氣を論ず(三四七)——勇氣は何
に向つて直進するか——盲進は無知——戰場に直進す——善と愉快——懦者は
愉快なることを嫌ふか——怯懦と無知——無知にして勇氣ある人あるか——
——無知と勇氣とは兩立せず——ソークラテースの此の長談話の精神——プ
ロータゴラスは徳義は教へらるべきものとなし、ソークラテースは之れ
を否む(三五四)——徳義は教へられずとするソークラテースは徳義を以て
知識となし——徳義は教へられ得とせるプロータゴラスは徳義を以て知
識以外のものとなす——議論の目的と論證の進行とは兩人互に行き違へ
り(三五四)

エウチュデーモス……………三五七

○解題……………三五九

本篇の性質——本篇の筋(三五九)——當時哲學界の状況と本篇の精神——本篇
人物の描寫——戯曲仕組

○エウチュデーモス……………三七一

對話者——場所——タリトーン——クレイニアスとクリトプロス——エウチュデ

—モス及びデオニソンドーロス—知らざる所なき人—劍術家—法律上の劍術—議論必勝家(三七三)—ソークラテース、クリトーンを勸誘して共に兩兄弟の門弟ならんとす—ソークラテース此兩兄弟に會合したる時のことを物語る—クレイニアスとクテレッポス—ソークラテース此兩兄弟の格闘名人なるを謂ふ—エウチデモス格闘術は第二段の事となす—エウチデモス徳義の教育は自己の第一の専門となす(三七七)—ソークラテース彼等の學の達成を疑ふ—ソークラテース、兩兄弟に學びんとす—集まれる人々—ソークラテース、兩兄弟は最適當の教育者なるやを問ふ—クレイニアスの教育—エウチデモス、クレイニアスと問答を始む(三八二)—兩兄弟の門弟子クレイニアスを大笑す(三八四)—再び笑を轟かす—尙もクレイニアスを困らす—デオニソンドーロス、又ヤクレイニアスを困らす—少年大に窮す—ソークラテース、少年を慰藉して勵ます(三八八)—コリネバンテス宗の奉教式—學問と云へることの意義—言語の小股取り(三八九)—ソークラテース問答の方法の見本を示めす(三九〇)—ソークラテース、クレイニアスと問答す—人は幸福を欲するか—如何にせば幸福なるべきか—幸福と善—善とは如何—諸善—正義、節制、勇氣—智慧と善—幸運—智慧は幸運なり(三九四)—
物物の所有と其使用(三九六)—使用せざれば益なし—正しき使用—惡用

—知識と善物の正用—知識の示導と善物—無知の示導の害悪—智慧は
眞の善、無知は眞の惡(四〇〇)—知識は教へられ得べきものなるか(四〇一)
—知識を愛せざるべからず—ソークラテース兩兄弟に頼ふにクレイニ
アスの教育を以てす—兄デオニッドーロス發言す—曰く青年を知者と
なさんことを欲するは其滅亡を欲するなり(四〇五)—クレイニアスの愛
者クテロッパス怒る—以會論—虚言なるものあることなし(四〇七)—「ノン
センス」の言—ソークラテース滑稽を以て兩人を和解す—兩兄弟の術は
悪人を變じて善人となすもの—ソークラテース身を以て實驗に供せん
と云ふ(四六〇)—コルヒスのメーダイアークテシッポスも亦—マルシヤスの
皮—無禮と反對—言談に反對なるものなし(四一二)—世上虚欺誤謬なる
ものなし(四一四)—無知なるものもなし(四一四)—論破することもあり能
はず(四一五)—巧妙なる知識の發明—誤謬の行爲もなし(四一五)—誤謬も
なしとせば善とは何ぞや(四一五)—ソークラテースを愚昧なる老人なり
と罵る—デオニッドーロス自ら賢者なりと云ふ—「意味」と「意思」の兩義
ある語の亂用(四一七)—生ける會話—兩兄弟の智慧は人を倒すも亦自己
も倒さるゝもの(四一八)—兩兄弟はブローケウスの如く數々變態す(四一
九)—ソークラテースとクレイニアスと再び前論を繼續す(四一九)—哲學

と知識——善の知識——物の正用と善——不死も之れを正用せずば何の益もなし——使用の知識——製造者と使用者との幸不幸——演説家を嘲る(四二三)——将官の術と幸福——大将の術は幸福を興へず——帝王の術は人を幸福ならしむるか——政治の術——帝王術は何を爲すものぞ——知識は唯一の善なりとの結論(四二九)——政治は知識を興ふるものなるか(四二九)——帝王術は人を賢ならしむるか(四三〇)——一切の技術を教ふるか——帝王術の知識とは知識の知識に過ぎず(四三〇)——内空の知識(四三〇)——ソークラテースの職位——ソークラテース知識を興へんことをエウチデューモスに乞ふ——エウチデューモス、ソークラテース自ら知識を有せることを云ふ——或物を知らば一切を知れりとのエウチデューモスの臆辯(四三二)——言語の音響のみ——一切のもの知らざるなしと言ふ(四三五)——デオニユッドーロス一切知らざる所なきか工藝も、製造も、耕直しも、星の數も(四三六)——クテシッポス證明を求め、兩兄弟の齒數を言ひ當てしむ——舞踏も、刀劍の間に踰躍することも、車輪の上に回轉することも能くすと云ふ——生れぬ先にも知り居たりと云ふ——或るものを知れるか——何にて知れるか——善は不正なりとのことはソークラテース知らずとなす(四四四)——デオニユッドーロス議論に破る——不正の善なることを争ふを得しめよ——ヘーラクレーースのヒュ

ドヲ退治ヒソフイスト退治(四四六)——父母兄弟と云ふことに就いての鹿辯
(四四六)——石と人と同じさかど云ふ——ソークラテースは父なし子なりと
の鹿辯——父は一切の人の父なりと云ふ——エウチユデーモスの父は又た馬
其他の動物の父なり——母も亦海獣等の母なり——魚も小犬も豕も皆エウ
チユデーモスの兄弟——君の父は犬なり(四五〇)——親犬はクテシッポスの父な
り——其犬を打つは父を打つなり(四五二)——藥劑は成るべく多量に用ゆべ
さか——出陣の時は成るべく、數多の武器を携帯すべさか——ゲーリュオーン
及びプリアレオスの武装(四五三)——黄金を有すること多きは益々よし——
——スキチア人の黄金の頭蓋——視ることに就いて——有言と同時に無言、無
言と同時に有言(四五五)——鐵條大聲に言語す——エウチユデーモス窮す——美
なるもの——美其の物と俱存のもの(四五八)——牛と俱在せば牛なるか——善
真なる職工、鍛冶、陶工、料理人——右に就いての鹿辯(四六一)——ソークラテ
ース彼れの知に驚く——ソークラテース嘲弄的に頌美す——自己の所有と云
へる觀念——動物は生けるもの——祖宗のゼウスの神——ゼウスは祖宗の神
に非ず——アポローンは祖宗の神——神は君の有——神は動物——神はソーク
ラテース所有の動物なり故に賣ることを得と云ふ——流石のクテシッポス
も閉口す——豕勢とへ——ラクレース——無敵の兄弟(四六五)——會集一同の大

拍手大喝采——リユケイオンの建築も振動す——ソークラテース一編の演説を爲す(四六五)——兩兄弟を頌賛す——皮肉の頌賛——ソークラテース兩兄弟の門弟子たらんと云ふ——ソークラテース、クリトーンを勸誘して兩兄弟に學ばしめんとす——兩兄弟の論法を以つて人を破らんより人に破らるるは却て名譽なり(四六八)——人ありソークラテースが兩兄弟と談論せしを笑ふ——哲學を嘲る——ホ隆兩棲動物的人種(四七二)——哲學者と政治家との中間者——彼れ嫉妬より哲學者を惡言せるなり——兩面美人主義——中間事物の性質(四七二)——中間折中主義の人物は第一流に非ずして第三流の人なり(四七三)——クリトーンの二子の教育と哲學——哲學教師不真なりとも哲學其物は之れを研究せよ

イオーン……………四七七

○解題……………五七九

プラトーンの眞著——本篇の筋——本篇の學術上の思想——知識とインスピレーション——詩人・哲學と詩人との紛争

○イオーン……………四八五

對話人物——イオーン、エピダウロスよりアテーナイに来る——競技一等賞
——ソークラテース史詩吟詠家を獎やむ(四八六)——イオーンはホメーロス
張の吟詠家(四八六)——ホメーロスの修飾——ホメーロスとヘシオドスとの
解釋——卜筮に關しての解釋は吟詠家が預言者か何れ優れる——何故にホ
メーロスのみに限りしか——ホメーロス優れり——善を判知する者は又た
惡をも判知するを得べき筈なり(四九〇)——善惡の判定人は一人兼ぬ可し
——イオーンはホメーロスにのみ興味を有し其他の詩人に對しては睡眠
を催す(四九二)——技術知識は詩全體に通じて一たり(四九二)——藝術の全
體なること(四九三)——善及び惡の研究は一なり(四九三)——偏狹家——排他詩
人——イオーンはホメーロスに精進せることのみを誇る——インスピレ—
ションと技術との相違(四九五)——インスピレ—ションと磁石の例(四九六)——ミュ
ーズのインスピレ—ション(四九六)——インスピレ—ションは正氣の沙汰に非
ず(四九六)——神憑り——デオニユスの神女の寛力——ミューズの花園——自己の
心を失喪せる者(四九七)——技術の法則に由るに非ず——神力なり——預言者
等は神の使役する器械なり故に自ら云ひし所の意味は之を知らず(四九
八)——詩人は神の通辯人、吟詠家は詩人の通辯人にして通辯人の通辯人な
り(四九九)——詩を吟詠するときには詩人の光景人物と合體し我を失ふ(四九

九)——涙流れ心動悸す——正氣の沙汰に非ず——聴衆の感動と吟誦家の熱情——聴衆、吟誦家、俳優、音楽者、詩人、ミュージズ等のインスピレーションの磁石の如き迷環(五〇一)——ホメーロスの遷移リ——イオーンのホメーロスと善くするは神遷りのときのみならずと云ふ——ホメーロス自慢——ホメーロスに關して知らざるなしと云ふ——ホメーロス中の種々の技術に關して兩人の問答(五〇三)——取者の術——藝術には知識を要す——知識の對象の相違に由つて技術の相違を生ず——特殊の技術の知識なき者は其れに關する判断力なき筈なり——取術に關して取者と吟誦家の優劣(五〇六)——衛生に關して醫師と吟誦家との優劣(五〇七)——海事に關して漁夫と吟誦家の優劣(五〇八)——神秘異徴に關して豫言者と吟誦家の優劣(五〇九)——ホメーロス中吟誦術に關したる句あるか——運轉手と吟誦家——醫師と吟誦家——牧牛者と吟誦家——紡績工女と吟誦家——大將と吟誦家(五一二)——吟誦家は大將の事を知ると云ふ——吟誦家の術は大將と同一と云ふ、吟誦家は大將なりと云ふ——イオーンは最第一の吟誦家なるを以つて又た最第一の大將なるか(五一四)——何故に運歴せるや——ソークラテース、イオーンを擲論駁弁し遂に叱責す——實力技量と信任——イオーンはプロテウスの如く屢々變態せり(五一六)——インスピレーションを冷視す

○解題……………五三一

本篇の問題——本篇の筋——本篇の學理——知識を貴びインスピレーション天才等を敬遠す——靈魂不死前世記虛說——原因の知識——啓蒙主義の教育——人物描寫——議論の發展

○メノーン……………五三二

對話人物——德義は教へらるべきものなるか、或は自然に人に來るものなるや(五三二)——アッサリア人メノーン——知識の國——ゴルギアス先生——アテーナイ市の貧窮と知識の貧窮——ソークラテース德義は如何なるものなりやを知らずと云ふ——一人として德義の何たるやを知るものなし——ゴルギアスは如何ん——德義に關するゴルギアスの說(五三五)——一の德義を問ひて蜂群の如く德義を教へらる(五三五)——定解法を教ふ(五三六)——共通同一の點——德義を德義として云ふときは同一なり——節制正義——メノーン曰く德義は人を支配すること(五三九)——小兒及び奴隸は大人及び主人を支配するか——「正しく」支配す——一の德義と德義全體の説明——種々の德義——形像を定義する方法(五四三)——色を定義する方法——多數に通じて同一

點を求むること(五四四)——形像の定義——終止、終結、極端等の語——ソークラテ
ース形像の定義を下す——色とは何——メノーンの美少年なることを云ふ
(五四七)——ゴルギアス及びエンペドクレースの「存在の流出」(五四八)——色の
定義を下す——メノーンの徳義の定解を求む(五五〇)——破碎に非ず完全に
——徳義は名譽に違すること(五五〇)——名譽と善——惡を願望するものある
か(五五二)——惡を惡と知りて之を願ふ者あるか(五五二)——惡を善と誤解す
要するに善を求むるなり(五五二)——惡と不幸——人は不幸不運を願望する
か——人は惡を願望するものなし——善を願望するは人間一般の事のみ——
——然らば徳義とは善を得るの力なるか(五五四)——善き物(五五五)——徳義は
金錢を得るの力なるか(五五五)——正、不正其方法は擇びざるか(五五五)——正
義節制等は徳義の一部分——メノーン未知を定解するに未知の一部を混
用す(五五七)——徳義を定解するに其徳義の一部を以てするの誤り——許容
されざる言語の使用は無益(五五八)——ソークラテースは麻痺顛なり(五五
九)——メノーン自己の能力麻痺を自白す——ソークラテースは妖術者とせら
れん——麻痺顛の比喻に就いて——知らざる事は討窮すること能はずどの
ソフィスト流の言(五六一)——ソークラテース之に反す——神聖光榮の眞理(五
六二)——靈魂不死前世の記慮説(五六二)——輪廻説(五六三)——前世の知識(五六

三)——一切のものを一の記號より引き出す(五六三)——一切の討論之れ實は記號なるのみ(五六三)——故にソフィスト流の研究は不能なりとの言は誤り——記號説は人をして勉強せしむるもソフィスト流の説は人をして自棄せしむ(五六四)——「學ぶ」とは「記號」すと云ふこと——前世記號説を證明す(五六五)——ソークラテース、メノーンの從者たる小兒と幾何學を論じ前世記號説を證明す(五六五)——正方形——四等邊——二尺の平方——四平方——二倍大の平方——八方尺——小兒答へに誤れりと雖猶ほ内心知れりと思へり——正當の順序にて回想す——八方尺の正方形の邊を求む——十六方尺なり八方尺を得ず——小兒三尺の邊を以て答ふ——九方尺を得八方尺を得ず——小兒の記號の進歩——無智を知れる一段の進歩(五七二)——「麻痺顔の激動」と人の進歩(五七二)——自から無知を醫せんとす——教へずたと引き出したるのみ(五七四)——ソークラテース又々畫きて小兒に問ふ——對角線——對角線の作りたる平方面積——八方尺を得たり——二倍の面積は對角線の二乗(五七六)——小兒の頭腦中より出づ——彼れ知識を自有せしなり——自有せる觀念の覺醒は記號なり(五七七)——奴隸の小兒幾何學を知る、されども彼れ現世に此の知識を得たるに非ず——前世の知なるべし(五七九)——ソークラテース靈魂不死を云ふ(五七九)——ソークラテース(プラトーン)の確信斷言するは此

の説なるを云ふ(五七九)——此の問題の爲めには全心全力を盡くすの決心
(五八〇)——知らざる所をも研究することを得——徳義教養に立ち歸り先づ
徳義の何たるやを明にせよとなす(五八〇)——假定説に出つて説明せん(五
八一)——徳義は教へられ得べきやの間に對して第一の假定説即ち徳義は
知識なりや知識は教へられ得べきや(五八二)——知識ならば教へらる(五八
二)——徳義は知識なるか(五八三)——善と徳義——善と知識——善と有益——徳義
と有益(五八四)——善き諸物——正用と不正用——精神上の諸善物——知識と諸
善物——知識ありて善なり(五八五)——徳義は智慧の一種なるか——智慧の指
導(五八六)——萬事懸つて智慧にあり(五八七)——善は自然に來るに非ず——自
然に非ずば教訓——ソークラテース徳義は智慧たるを疑ふ(五八九)——其理
由——教師と子弟——徳義の教師を樂めて得ず(五八九)——アニュトスの人物(五
九〇)——専門學者と弟子——メノーンの教育と専門の教師——専門自稱教師
「ソフィスト」——アニュトス大々的に「ソフィスト」を排斥す(五九三)——「ソフィスト」は人
を腐敗せしむる者なるか——「ソフィスト」の大先生プロタゴラスの大名望
は如何ん——若し悪なれば何故に看破されざりしぞ——「ソフィスト」を尊敬す
る者は精神失業者(五九五)——たゞ徳義を教ふる人を求む(五九六)——何人か
善教師(五九六)——何人と雖「ソフィスト」に優れり——先輩の指教——徳義は教へ

らるべきものなるかは議論の問題——アミストクレース其子に徳義を教ふる能はず(五九八)——徳義の教へらる可きものなるかを疑ふ(五九九)——過去の善真なる人物の子に就いて(五九九)——アリステイデースの子リュンマツホスの平凡——ペリクレーースの二子の平凡——ソクユデテース其の子に徳義を教へ能はざりき——アニュトス、ソークラテースに怒る所あり(六〇二)——アニュトスの誤解——徳義は教へらるゝや否やに就いては人々の意見一ならず(六〇三)——彼等紳士先輩を教師と見ること能はず——「ソフィスト」は教師に非ず——ゴルギアスは徳義を人に教へんと約せしことなしと云ふ——徳義は教へらるゝと云ふ詩人あり——其矛盾の詩——自から徳義の教師なりと云ふものは無學なるか惡教師なり——紳士なるものは自ら教師と云はず意見も一ならず——然らば他に徳義の教師なし(六〇六)——教師なくば門弟子なし(六〇六)——然らば物教ふ可きやうなし(六〇六)——徳義の教師なくば徳義は教へられず(六〇七)——吾等指導者を求めん——知識は指導者(六〇七)——正しき意見も知識の如き指導者となる(六〇八)——知識が正しき意見より貴き理由を説明するにマイダロスの比喻を以てす(六一〇)——真正の意見とマイダロスの作品——原因の結核に由つて意見を知識に變ず(六一一)——ソークラテース此事のみは知れりと断言す(六一一)——正しき

意見を有せる人も有用なり——此等は自然に人に興へられしに非ざるか
 ——教育に依つて得らるるものなるか——徳義は智慧なるか(六一三)——教師
 なきときは如何ん——徳義は教へられ得べきものに非ず又智慧にも非ざ
 るか(六一四)——正しき指導者は知識と真正の意見(六一四)——徳義は知識に
 非ざるか(六一四)——政治の指導は知識に非ずして正しき意見の指導(六一
 五)——政治家等は自己の實行の意味を知らざるもの(六一五)——政治家等は
 ト匿者詩人等の如くインスピレーションのみ(六一六)——政治家を輕視す(六一
 一六)——政治家等は神聖なる人として敬して遠ざく——徳義はインスピレ
 ーションに由つて人に來る(六一七)——政治家に道理を有するものなし(六一
 七)——徳義はインスピレーションにて來る——實は先づ徳義の性質を知る
 を要す

エウチュフローン……………六一九

○解題……………六二一

本篇の主旨——本篇の筋——エウチュフローンの人物——プラトーンの眞作

○エウチュフローン……………六二九

對話者——場——アルホーン王宮の前庭にソークラテースとエウチュフローン

ンと會合す——彈劾——原告メレートス(六三〇)——事件——昔年の腐敗者——原告の意志——ソークラテース新神を唱道するものとせらる(六三一)——ソークラテースの異徴——人々の嫉妬——エウチユフローンの事件(六三四)——父を殺ふ——殺人罪——エウチユフローンの理由——敬神不敬神に就いて——エウチユフローン敬神に就いて知れる所を語る——ソークラテース、エウチユフローンの門弟子とならんと云ふ(六三七)——メレートスに對する辯解とエウチユフローンの後斯——ソークラテース、エウチユフローンに請ふに敬神不敬神を教へんことを以つてす(六三八)——敬神とは殺人罪を以つて父を訴ふること——クロノス神、ゼウス神父子の關係とエウチユフローン(六三九)——ソークラテース神話を好まず(六四〇)——神話は眞の事實なるやを問ふ——諸神間の戦争(六四〇)——敬神の定義を得んと欲す——定義と標準——敬神とは諸神の好むもの(六四二)——意見の相違と怨恨及び怨恨消散法(六四三)——正不正、善不善等の意見の相違と怨恨敬視(六四四)——諸神間にも正義不正義の意見の相違あるか(六四五)——同一物に對して諸神に好惡ありとせば同一物にして敬神不敬神あり(六四六)——殺人の惡なるは諸神一致す——諸神はエウチユフローンの行爲を嘉みするに一致せりとの證を求む——エウチユフローンの説明は無用たるのみ——敬神の定義の改正(六五〇)——神聖なるを

以て神之れを喜ぶか、神之れを喜ぶに由つて神聖なるか(六五二)——敬神とは神に愛さるゝことなるか——神聖なるが故に愛さるゝか——神聖なることと、神に愛さるゝこととは別物なり(六五四)——神聖なる故神之れを受す——諸神の好む者は諸神之れを受する故——神聖なるもの、神の好むもの、及び、神の愛するもの——エウチテフローン自己の議論は歩み去るを歎す——エウチテフローンの言はマイダロスの作品の如し(六五六)——ソークラテースをマイダロスに比す——議論の緊留——正しきことと敬神(六五八)——恐懼と崇敬(六五八)——敬神は正義の部分——敬神とは諸神に注意すること(六六一)——「注意」の意義——犬馬に注意す——諸神に注意す——注意とは其物を利益し進歩せしめんことを意とす——敬神とは諸神を利益進歩せしむることなるか(六六三)——敬神とは神に奉事すること(六六四)——或目的を爲さんとする盡力——神に事ふるとは神の如何なる事業に助力することなるか——吾等の助力に由つて成したる神の事業は何ぞや——敬神とは祈禱、供饗及び神を悦ばす言行——敬神とは神に與ふることと願ふこととなり——祈願は求め——供物は與ふ——敬神とは人と神と有無を通ずる商賈なるか(六六八)——吾等何物をも神に與へ得ず——尊敬の供物のみ、之れ神の悦ぶ所——議論相環して本に歸へる——マイダロスはソークラテースに非ずして、寧ろ爾

議論を爲すエウチュフローン(六七〇)——エウチュフローンをフエーラヤシ
比す——敬神迷に答解を得ずソークラテース失語す

辯證

.....六七三

○解題

.....六七五

本篇の事實と理想——理想上の事實——キセノフォーンのソークラテースと
プラトーンのソークラテース——本篇の筋——ソークラテースの人物の偉
大にして權威を有せること(六八五)——ソークラテースの宗教に関する自
由思想——ソークラテースの此の場合の諷刺——悲莊なる偉觀

○辯證

.....六八九

告發人は眞理を語らず——余は辯者に非ず——雄辯の力に非ず眞理の力な
り——眞理は雄辯なりとせば余は雄辯なり——美辭麗句を用おす——平常の
言語を用おん——余七十歳を超ゆ法庭は初経験(六九一)——告發人の種々——
アニユトス——其他——ソークラテースは不思議の人、一種の投機者となす
——ソークラテース滑稽詩人——是種の誣告者と戦ふは影と戦ふが如し——
——二種の反對者(六九三)——余は辯解せん——誣告の起原——メレイトスの口
供——アリストファチースの滑稽劇とソークラテースの奇蹟(六九四)——ソーク

クラテースも自然哲學に關せず——余は金錢を食りしとのことは基礎な
 き言——多くのソフィスト等は報酬の多額を要む——パロス島の哲學者エズ
 ノス——巨額の報酬——ソークラテース告發されたる原因(六九六)——ソーク
 ラテース賢人の名聞の原因——ソークラテース一種の智慧——ソークラテ
 ースの言の證人はデルフォイの神(六九八)——ハイレフォーンとデルフォイ神託
 ——ソークラテース世上至賢の人との神託——ソークラテース至賢の意味
 (六九九)——神託の眞偽を試驗するの一方方法(六九九)——政治家を訪問す——其
 人 際智者に非ず——ソークラテースが其人に優れるは自己の無智を知
 るにあり(七〇〇)——他數人を訪問して皆恐懼を買へり——ソークラテース
 神の使命(七〇二)——最も有名なるものは最も愚昧のもの——ヘーラクレ
 ス的勞苦(七〇三)——政治家、詩人、悲劇家、宴樂詩家及び其他を訪問す——詩に
 ついて問答す——詩人は自から自己の作を説明し得ず——工藝家も然り——
 神託はソークラテースのみに非ずして自己の無知を知るもの凡てに
 應用さるゝものなり(七〇四)——余の摸倣者人を論破し怨は余に歸せり——
 敗北者の證據——メレートス、アニクトス、リニコーン——第二の告發人等(七
 〇六)——告發人の偽善——ソークラテースを除きては他一切は青年を進歩
 せしむるもの——却ても教育者の鏡多なることよ——ソークラテース一人

自己に害をなすものなり故に余は故意に人を害せず——告發の前何故に
忠告せざる、法庭は教育の場所に非ず刑罰の場所なり(七二二)——新神を唱
導すとの證據を求む——余を無神論者と爲すか——メレートのスはソークラ
テースとアナキサゴラスとの説を混同す(七二四)——メレートのスの矛盾——
神の事業を信する者にして神を信ぜざるを得るか——神—人を信するもの
は其父たる神あるを信ぜざるを得ず(七二七)——嫉妬と讒構とは多くの善
人を殺したり(七二八)——死何ぞ恐れんたゞ不名譽を恐る——アロレウス死
を擇ぶ(七一九)——戰場に死を恐れざりしソークラテース焉んが其他の死
を恐れん(七二〇)——死は最大善たるやも知れず——人命よりも神命に従ひ
力のかぎり哲學を實行せん(七二二)——金錢は貴ぶに足らず(七二三)——悪人
は善人を害し得るものに非ず(七二四)——余は神が國家に與へし一種の疵
にして諸君を刺撃せしめんためのもものなり(七二五)——余の如き者を他に得
ること難し——神の遣はしたるものなるの證——ソークラテース金錢を求
めず——政治に關係せず(七二六)——神之を制止す——政治に關係せしならん
には久しき前に殺されしなるべし——ソークラテース死を恐れず正を續
みし實歴(七二七)——ソークラテース元老院議員——ソークラテース不潔に

反對す——死を決して正義に立つ(七二八)——ソークラテース人と談話すと
雖人を教へしとなし——報酬も受けず秘密もなし——ソークラテースが腐
敗せしめたりと稱せらるゝ青年の父兄ソークラテースに反對の證明を
なさず(七三一)——木人及び父兄——フワトーン(七三二)——余も肉あり血あり
と雖裁判官の憐憫に訴ふことは之を爲さず(七三三)——死を免れんとして
法庭にて耻づべき行爲を爲すことを耻づ——有名なる人物の死に臨みて
卑怯なる態度を笑ふ——生死の感念の翻譯(七三五)——裁判官は感情に動か
さる可らず道理に従つて判せよ(七三六)——裁判官は法律に従つて判決す
るあるのみ——一層高尚なる意味にて神を信ず(七三七)——ソークラテース
多数決にて死刑に決す(七三七)——彼れ人に善をなせり——彼れはブリュタチ
イオン公會堂に公給さる可きなり(七三九)——ソークラテース無罪の自信
——死は恐しきものなるや否やは未知なり(七四〇)——禁獄さる可きに非ず
——罰金を科せよと云はんか余は錢なし(七四一)——國外放逐をも擇ばず——
何處に至るも青年は余に來らん——余は舌を制して徳義を語らざると
能はず(七四二)——余は科料とすべき金錢を有せず——友人等三十ミナの金
を科料として申し出でよと云ひ隨人たらんと云ふ(七四三)——アテーナイ
人は賢人を殺したるものなりと非難さる可し——彼等暫く待たば余は老

て嗚も悔ゆるなし——困難なるは死を避くるに非ず不正を避くることなり(七四五)——彼等眞理より刑に宣告せらる——彼等がソークラテースを殺したるは彼等の告發人を除くの意なり——彼等に對する一層多くの激烈なる告發人起らん——彼等の告發を避ると最良法は智徳を修するにあり(七四六)——今回の死はソークラテースに取つては善なり故に神託之れに反對するなし(七四七)——死は無意識か他界に移轉することかなるべし——死は深き安眠なりとせば之れ大なる幸なり(七四八)——永遠とはたゞ一夜なり——死は他界に旅行することとせんか——正義の裁判官其所にあり——ホメーロス、ヘシオドス等に會はん(七四九)——トロヤ戦争の勇將に會ふことを得ん(七四九)——未來世界に於ても眞偽の知識の討究を繼續せん——生前死後善人には懇來ることなし(七五〇)——余が諸君になせし如く諸君は又た余が子にも之を爲せ

クリトーン……………七五三

○解題……………七五五

本篇の目的——本篇の筋——ソークラテースは善真なる國民なり——脚本仕

組の抄——注意すべき本篇中の思想

○クリトーン……………七六一

對話人物——場——クリトーン早朝獄を訪問す——ソークラテースの安眠、精神の靜平——死を悲しむの要なし——デーロス島よりの船の歸航の報道(七六三)——ソークラテースの幻夢死の日を知る(七六四)——クリトーン脱獄を勸む(七六四)——一、友を失ふ故——二、人々自己を吝嗇と評せんことを恐るゝ故——三、之れ不名譽故——ソークラテース世間多數の評は意に介するの要なしとなす(七六五)——世間多數の意見に従ふの要ありとす——吾等の後嗣を憂ふる勿れ——如何なる危難も恐るゝを要せず——獄人及び密告せんとするものに賄賂せん——多くの金錢準備しあり——他國人も亦君を愛せん——生き得る時に死するは不可——死せば千女の教養は如何にせんとす(七六八)——千女の不幸——吾等勇氣なきを耻づ——吾等の怠慢と怯懦との結果——熟考の時は過ぎたり——脱獄は爲すべきことなりや否やを熟考せんとは(七六九)——道理の指導を要す(七七〇)——主義を變じて可ならんや——多數の意見採るに足らず(七七二)——多數に非ず善と智との人の意見に従はん(七七二)——善惡正邪の判断は多數か智者か何れに従はん(七七三)——愚衆に従ふの損害——正義と生命——たゞ正義と眞理と——單に生きるのみに非ず

——脱獄すべき理由ありや余に答へ余を脱き伏せよ——主義は一朝にして
腐つべきか——惡を以つて惡に報ふべからず(七七八)——復讐すべからず——
惡を以つて惡に報ゆるは正理に非ず、之れ第一原理(七七九)——脱獄は人を
害するもの——ソークラテース國法及び政府を擬人す(七八二)——國法を破
りて尙ほ國家の存在を認め得るか——國法と個人と對等の約束を爲さず
(七八二)——國法國家の保護——生産及び結婚——國家國法と教育——汝等は國
家の子なり(七八二)——子は父に反抗するを得ず——國家の生殺權——國家は
至貴至重(七八三)——國家に對するは父母に對するが如し——國家の命に惟
れ従ふべし——個人は絶對的に精神及び主義の自由も無し(七八四)——脱獄
を企つるは國家を害せんとするものなり——國家は汝にあらゆる善を興
へ自由を許るせり——我國家を嫌はば他國に移住するを得たりしなり——
——汝は國家に従ふことを黙知せり——國家に不従順なるの三惡(七八五)——
ソークラテースの脱獄は他人よりも一層惡行なり(七八五)——ソークラテ
ースは最も常に自國を愛したり——ソークラテース外國に行きしこと稀
なり(七八六)——外國の美を羨やむことなく自國に満足せり(七八六)——ソ
ークラテース國外放逐よりも死刑を擇べり——國法に支配さるゝことに同

意せしに非ずや——之れ自由の約束なりき——七十年間思考の時日ありき
 ——去就の自由ありき——汝は心よりアナーナイを愛したり——今に至つて
 約に背かんとするか——脱獄と後繼——アーバイに至らんか——有罪人、青年
 の腐敗者と云はれん——此くても生存の價値あるか——恥づるなく尙ほ正
 義法律等を語らんとするか——アッサリアに至らんか——墮落のみ——子女の
 爲めに生さんとするか——却つて不利なり——友人あるに非ずや——生命は
 第一義に非ず正義之れ第一義（七九一）——正義と未來界の幸福——脱獄は惡
 を以て惡に報ふることなり——クリトーンの言に聽くこと勿れ——此の言
 耳に鳴りひびけり——神意に従はんのみ

ファイドーン……………七九三

○解題……………七九五

本篇の筋——靈魂不死論——臨終時のソークラテース——本篇中の人物——靈
 魂不死論はソークラテースの説きし所なるか——本篇と他の關係諸篇——
 「ドラマ」として本篇の統一せること——プラトーンの筆力

○ファイドーン……………八一五

對話人物——場——ファイドーンとソークラテース——ソークラテースの死は

ラ、エ、オ、の、と、は、運、命、す、(ア、二、三)——ラ、マ、リ、オ、に、對、す、る、傳、言、——エ、ハ、
ラ、テ、ア、ス、フ、ア、イ、ド、ー、ン、に、ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、の、臨、終、の、狀、況、を、語、ら、ん、こ、と、を、求、
む、——フ、ア、イ、ド、ー、ン、語、り、始、む、(八、一、八)——時、の、感、情、——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、の、門、人、及、
び、知、人、——此、日、プ、ラ、ト、ー、ン、は、疾、病、な、り、き、——諸、弟、子、日、々、獄、中、に、會、合、す、——ソ、
ー、ク、ラ、テ、ア、ス、の、死、の、當、日、は、人、々、平、常、よ、り、早、く、會、合、す、——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、
の、妻、キ、サ、ン、ナ、ッ、ペ、ー、——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、鐵、鎖、を、解、か、れ、て、快、樂、を、感、じ、快、樂、と、
苦、痛、と、の、相、關、な、る、を、説、く、(八、二、一)——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、夢、の、告、に、由、り、て、獄、中、
に、詩、を、作、り、始、む、(八、二、三)——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、エ、エ、ノ、ス、に、己、に、從、ひ、來、る、こ、と、
を、傳、言、す、即、ち、死、す、る、こ、と、な、り、——哲、學、者、は、死、を、喜、ぶ、も、の、な、り、と、雖、自、殺、は、
之、れ、を、爲、す、可、ら、ず、(八、二、四)——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、自、殺、の、不、法、な、る、を、論、ず、——人、
は、一、種、の、囚、人、に、し、て、遁、走、の、權、利、な、く、且、神、々、の、有、な、り、自、由、に、す、べ、か、ら、ず、
——ケ、ー、ペ、ス、ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、の、言、に、矛、盾、あ、り、と、評、す、(八、二、七)——シ、ン、ミ、ア、ス、
ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、を、謂、ふ、て、容易、に、遁、走、す、る、の、人、な、り、と、な、し、て、彼、の、死、の、決、
心、を、咎、む、——ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、自、己、は、今、他、の、善、と、智、と、の、神、の、前、に、至、る、者、な、
り、と、答、ふ、(八、二、九)——故、に、死、を、悲、ま、ず、——シ、ン、ミ、ア、ス、其、理、由、の、説、明、を、求、む、——
——ク、リ、ト、ー、ン、ソ、ー、ク、ラ、テ、ア、ス、に、告、ぐ、る、に、多、言、せ、ば、發、熱、す、る、こ、と、あ、り、て、
毒、藥、の、効、力、を、減、ず、る、こ、と、を、以、つ、て、す、——哲、學、者、は、死、を、求、む、る、も、の、な、れ、ば、

死時の到達せるに及びて何故に悲しむべき(八三一)——レンミアス曰く世
間此の言を聞かば必ず笑はんと——世人は死の性質を知らざるなり然ら
ずんば哲學者如何で死を求めん(八三二)——死は肉體と靈魂との分離なり
(八三三)——靈魂が最もよく肉體の關係を離れて單獨なるは生活の最上の
ものなり——感覺は眞の知識に達するに不確實の指導者なり(八三四)——眞
理は思想に由つて達す(八三五)——肉體に告別して心意を統一せるとき思
想は最もよし——故に哲學者は肉體を脱せんことを求む——他の議論あり
即ち絶對正義絶對美及び其他の觀念は感覺を以つて知る可からず(八三
六)——心意のみにして研究すべし——感覺は知識に益なく却つて靈魂を亂
るものなり(八三七)——食慾色慾其他の慾は靈魂を亂るものなり——一切の
慾は肉體あるに由つて生ず戰爭も金錢の慾も——肉體の最も恐しきこと
は思想を亂して眞理を認得するを得せしめざることなり——靈魂獨立せ
ば自ら物の真相を認め得べし——靈魂を純潔にすとは肉體と靈魂との分
離なり(八四〇)——他界に於て始めて純粹の知識を楽しむを得べし——哲學
者の所謂勇氣及び節制は常人のと異なれり——哲學者のみ眞正の徳義を
知ると雖俗人は善の大小の比較に基づくのみ(八四四)——常人の徳義は交
換主義なり——情慾の穢ひ淨め(八四六)——酒神筭の提帶者と哲學者(八四六)

—靈魂肉體を脱せば風に吹かれて分散せざるか(八四七)—反對を有する者は反對より生ず(八四八)—反對より反對を生ずる中間の二作用(八五〇)—生は死より生ずること覺醒の睡眠より生ずる如し—若し反歸の作用なきときは萬物死の状態とならん—睡眠せるエンヂュミオンは睡眠世界に於て無意味とならん—再生及び善靈魂は善の報あるとを信ず(八五五)—回想説は靈魂の前世存在を含蓄す(八五六)—回想説の眞なるを知らんとせば人に疑問を提出せよ彼れ自己の心より答ふべし即ち幾何學の例の如し—人は自己の見たる所の物と共に未だ見ざる所の物を想起するは何故ぞ—聯想の例—木石等の不完全なる同等は絶對の同等の念を喚起す—物質上の比較の同等は理想上の同等の如きを得ず、然らば理想上の同等なることは前在せざる可からず(八六二)—同等の知識は生前に得たるものならざる可からず—學得とは前世に有したる觀念の回想なり(八六五)—然らば靈魂は人と生るとの前存在せしものならざる可からず、若し靈魂なかりしならんには觀念もなき筈なり(八六七)—ケーベス及びシミアス謂うて曰く、靈魂の存在は證明されたりと雖、未だ死後の存在は證明されず—靈魂の未來存在の證明なければ一半の論證不足なり(八七〇)—此證明と、生は死より來るとの二證明とを合併せば完全なる

べし——靈魂は空氣中に消散すとの恐懼心は破ひ去るを要す——離散するものは結成のものにして、靈魂は單一物なれば離散せず(八七三)——靈魂及び觀念は不變にして不可視の階級に屬す——靈魂肉體を使用する時は變化の境界に引き込まれる——靈魂自己に歸り沈思すれば永遠不死清淨の世に到らん(八七七)——靈魂は支配し肉體は服役し靈魂は神の如く肉體は人の如し——肉體の如きすら尙ほ或時日存し得るを見て靈魂に歸して學ぶ所あるを得べし——靈魂は風に吹き去らるゝ如きものに非ず——靈魂の肉體の脱離と自己集中——靈魂肉體の不淨より脱せば却つて幸福の座に到らん——悪人の靈魂は肉體分子に由つて引き摺らる——幽霊となるの理由(八八二)——輪廻(八八二)——不淨の靈魂は其性質に似たる禽獸の肉體に入る——哲學に由つて覺醒されし新意識——哲學者に取つての最大惡は激烈なる感覺が眞知を錯亂することなり(八八六)——快樂苦痛を脱却せし靈魂は死して風に吹き去らるゝ如きことなし——レンミアス及びケーベス尙ほ疑ふ——ソークラテース遠慮なく質問すべきをすゝむ——ソークラテース人を確信せしむるの困難なるを歎ず——白鳥の豫言力ヒソークラテース(八九〇)——白鳥は死時却つて愉快に歌ふ之れ其事ふる神の座に行くを知ればなり——ソークラテースは白鳥と共にアポローン神の僕として友

なり、故に楽しく此世を去らん——シンミアス此問題を最終底迄論ぜざる可からざるを主張す——シンミアス曰く靈魂は一種の調和なり、調和は「リ」^ラ琴より後に殘留すること能はず、之れと同じく靈魂は肉體より後に殘るとの證如何ん（八九二）——ケーベス曰く人は數多の衣服よりは永生なりと雖最後の衣服は人間よりも後に殘る（八九五）——之れと同じく靈魂は數個の肉體を経たりと雖最後には衰耗す——ソークラテースの議論は破れたりとして人々皆不快の感を爲せり（八九八）——ソークラテース泰然自若として尙ほ議論を續づく（八九九）——愛するファイドーンの美しくしき髮——厭理家となるは厭人家となるよりも危険なり（九〇二）——厭人家となるの理由は人を過信するに由る——不健康の思想は之れを容受すること勿れ——人を脱服せんとするに非ず眞理を見んとするにあり——ソークラテースを眼中に置かずして眞理を目的とし公平に思考せよ——シンミアス及びケーベス「回想説」は尙ほ之れを信ずと雖靈魂は肉體より前に消滅せんことを恐る——調和の諸分子は調和より前にありと雖、肉體は靈魂より前にあらず（九〇七）——シンミアスは自己の議論は、かの知識は回想なりとの主義と調和せざるを認む——調和には程度ありと雖靈魂には程度なし（九一〇）——故に靈魂は調和に存するに非ず、又た調和は靈魂中に存せず——若

し靈魂は調和なりとせば一切の靈魂は皆な一樣に善なるべし——靈魂は導く者にして隨行する者に非ず——靈魂は肉體に反抗す(九一五)——調和の女神ハルモニアは屈服し玉へり——ハルモニア女神の夫なるカドモスの神もやがて屈服し玉ふ可し——ケーベスの議論を再記す——自然學に關する思辨はソークラテースをして最も普通の事を忘れしめたり——相關の觀念を説明するの困難(九二〇)——ソークラテースはアナキサゴラスの萬物皆「心意」なりとの説に認を屬したり(九二二)——大失望(九二三)——靈魂の眼——觀念若し獨立して存在すとせば靈魂は不死なり——萬物概念と分有することによつて存在す——物の美なるは「美」なる觀念を得有せるに由る——此くて吾等相關の矛盾を避くることを得(九三〇)——尙ほ同一人にして同時に大たり小たるの矛盾はこれ有りと雖こは彼れ他に對して「大なること」「小なること」なるものを有せるに由るなり——「大」の觀念は決して「小」となることなく「小」の觀念は決して「大」となることなし——觀念の衝突競争(九三五)——之れは反對は反對より來るとの説に合せざるに非ずやとの疑問——具體事物の反對と、實體即ち觀念との反對とは之れを區別するを要す(九三六)——雪に熱を加ふれば水に變ずと雖寒は熱に變ぜざるなり——單に實體上の反對のみに非ずして其實體を含有せる所の具體物をも互に

排斥す——即ち反對物は反對物に自家の自身を與へんとすなり(九四〇)——
——相反せるに非ずと雖而も反對を許容せざる所の性質例へば三と偶數
との如し(九四一)——身體を生かすものは生命に非ず靈魂なり、靈魂は生命
を與ふる力を有し死を許容せず故に不死なり(九四四)——不死は不滅なり
故に靈魂は不滅なり——死せば靈魂他界に至る——靈魂眞に不死なりとせ
ば吾等如何に靈魂に注意すべきぞ(九四九)——生前其人に屬せし精靈其人
を審問の場所に導く——純潔なる靈魂と不純の靈魂との行くべき所の差
異——地球の種々の驚くべき場所(九五二)——地球は球形のものにして四周
の物の平均に由つて其位置に存す——地球は甚だ大にして人は其表面よ
り或距離に於て他の一小部分に住せるに過ぎず(九五三)——眞の純潔なる
地は天に位せり——吾等の住せる所の地は重濁なる沈澱のみ——魚が水の
表面に頭を擧ぐる如く吾等も又た大空の表面に頭を擧ぐる時は上なる
眞世界を見ることを得べし——上なる世界は凡ての點に於て下界より眞
にして金色金光紫色紫光あり樹木も花も吾等の地上のものよりも美に
して一切の砂石も吾等の寶石よりも美なり(九五五)——神々は眞に實在し
住民等は直接に神と談話す——地球内部及び地下の河海の記事——タルタ
ロスの大地獄——地下の四大河、オーケアノス、アヘローン、ビュリフレグート

ーン、スチユギオス(九六〇)——死者の審判——以上の紀事は文字通に正確に非ずと雖、稍此くの如きものならんと云ふのみ(九六四)——クリトーン、ソークラテースに遺言することなきやを聞ふ——屍體はソークラテースに非ず——ソークラテース家族と訣別す(九六七)——獄吏ソークラテースの死を悲しみ別れを告ぐ——クリトーン暫時なりともソークラテースを止めんとす——ソークラテース時間の遷延者も益なしとす——毒藥を持ち來る——毒杯を仰ぐ(九七一)——人々悲歎を制し能はず——ソークラテース曰く人は靜靜に死すべきものとす——「アスタレーピオス」に雄雞を貢へり

宴會

.....九七五

○解題

.....九七七

本篇の美と價值——本篇の筋——本篇はプラトーン自身なり。：プラトーン
の愛——愛の諸説、男性間の愛に就いて(九九七)——本篇中の人物「ドラマ」構成
の巧なること——著作の年月(一〇〇〇)——キセノフォーンの宴會篇

○宴會

.....一〇〇三

對話人物——アポロドーロスと宴會當時のはなし——宴會のありしは數年
前アガトーンが其競技一等賞を得たる時なり——アリストデーモス此時

の事情を記憶して傳へたるなり——アガトーン、アリスとデーモスの滑稽——此則の對を
話したるアリストデーモスはソークラテースの勸めに由りてアガト
ーンの宴會に至りしなり(二〇〇八)——ホメーロス自ら自己の規則を破る——
アガトーン、アリストデーモスを歓迎し、ソークラテースは如何にせしや
を問ふ——ソークラテースの精神上の發作(二〇一一)——アガトーンの鄭重
なる款待——ソークラテース入り來りアガトーンと挨拶す——ソークラテ
ース、アガトーンを稱賛す(二〇一二)——パウザニアス今日の宴會は大飲する
ことなからんことを欲する旨を述べ(二〇一三)——醫師エリキシマッホス大
酒の害を語る——ソークラテースは大酒小酒何れも之れを能くす(二〇一四)
——今日の宴會は酒は隨意となし飲まんとするものは飲むこととなす(一
〇一五)——藝妓も之れを不用となす(二〇一五)——エリキシマッホス詩人等が愛
の神の讚美歌を作らざることを慨歎す(二〇一六)——愛の神の讚美の演説を
爲すこととなす(二〇一七)——人々賛成す——ファイドロスの演説(二〇一八)——愛
は諸神中の最年長者なり(二〇一八)——愛は最大利益の原因なり——愛はよ
く人に徳義の念を扶植す(二〇一九)——愛者及び愛人を以て組織せる國家
及び軍隊の有力なること(二〇一九)——愛と名譽——愛はよく其愛する者の
爲めに人を死せしむ——アルケイステスの貞操(二〇二〇)——オルフェウスの

誠心なき爵——アロレウスとパトリクロスとの愛(一〇二二)——アロレウス
生命よりも名を惜しむ——パウサニアスの演説(一〇二三)——愛に二種あり
一は精神的、他は普通のものなり(一〇二三)——普通の愛は下等なり——高尙
なる愛は男性のみにして神性の「インスピレーション」ありと雖又た濫用さ
るゝことあり(一〇二五)——男子間の戀、愛はグレシア諸州に於て其趣きを
異にす——アリストゲートンとハルモデオスの愛(一〇二七)——習慣は戀
愛者が異様の事を爲すを許す——高尙なる愛は靈魂の愛にして肉體の
美金錢權勢等に非ず(一〇三〇)——不名譽の愛——名譽なる愛情の一方法——
愛は互に盡くすことなり而して哲學の實行は之れに合して一たるべ
し(一〇三二)——アリストファテース嘆逆を發しエリユキシマツホス代つて
演説することとなす(一〇三三)——エリユキシマツホスの演説(一〇三四)——醫術は
身體の二種の慾望の知識なり(一〇三四)——調和論及び音樂論(一〇三六)——眞
正の愛と虚偽の愛とは人間動物及び氣候にも存す——アリストファテース、
エリユキシマツホスを擲論す(一〇四〇)——アリストファテース愛について他の
趣のものを語ることを約す——原始人間は男女及び兼性の三性なり(一
〇四二)——原始の人體は球形にして四手四足其他之れに準じたり——諸神
に反抗す——ゼウス人間を懲罰にするの方法を考案す——人間の兩斷(一〇

四三)——中々互に相求む——愛は原始の全人に戻へんとすの事
 も女子も其性質の異なるは原始に裁断されたる所の人間の性質如何より
 生ず——青年を愛するものは高尚なる人物にして之れ原始の男子の分れ
 たるものなり——戀愛者等最も強く愛するも其何故に然るを知らず——若
 し神に不柔順なる時は又々二分さるべし(即ち初めよりせば四分さるも
 なり)——愛は人を原始の全人に回復するものなり(一〇四九)——アリストファ
 ーテス終る——ソークラテース、アガトーンを挑撥す——愚者の多數と知者
 の少數——ソークラテース人と談話することを許可されず——アガトーン
 前の人々の爲したる説は愛の讚美の性質を誤るとなし演説を始む(一〇五
 三)——先づ愛を讚美し次に神思を述べん——愛は年長者に非ずして若く且
 つ柔和なり(一〇五四)——愛は軟柔なり——愛は優美なり——愛は正義なり——愛
 は節制なり——愛は勇氣なり——愛は智なり——愛は詩人なり——愛は秩序の
 創造者なり(一〇五八)——愛は平和を作るものなり——愛は救護者なり——愛は
 最上にして最も光輝あるものなり(一〇五九)——ソークラテース、アガト
 ーンの演説を稱揚す——ソークラテース人々の讚美は讚美に非ず、單に讚美
 の外觀のみとなし自己は此くの如き讚美の約束を爲すの意なかりしを
 以て約束の解除を要むとなす(一〇六一)——自己の流儀を以つて愛を讚美

せん——愛とは或ものと愛にして自己に有せざる所の者の慾望なり(二〇六三)——故に愛は善或は大なるものに非ずして之れを慾望するものなり——除外例の如き趣きあるもの(然りと雖實は除外例に非ず)——已に有せる所を將來に有し續けんと慾すと云ふは尙ほ將來に有せざる所を求むるなり——前曾再述——討論せば愛は美に非ずして美の愛なり而して美は善なり(二〇六八)——アオチマのフークラアースに歸へたる愛の哲理(二〇六九)——愛は美に非ず善に非ざればとて醜なり惡なりと云ふ可らず——然りと雖又た一方に於て善と美とを有せざる所の彼れ(愛)は神に非ず——愛は神と人との中間に立つ所の精靈なり(二〇七二)——愛は豊富と貧乏との子なり——愛は純なく家なく諸方を遍歴し強力敏健にして常に美と善とを得んとの野心を包蔵す——彼れ智ならずされども智慧を受するものなり——愛は美の愛なり然りと雖之れに由つて何を求むるか(二〇七五)——美を有することは又た善を有することなり又た之れ幸福なり——然るに愛は普通に此の一般の意味に解されず——善なる故愛す——愛は生産なり創造なり妊娠の神聖なる力なり(二〇七九)——美醜と生殖力の關係——愛は卑に美のみに非ずして又た美に於て生殖するとの愛なり(二〇八〇)——人間及び動物に於ける愛の大勢力は何處より來るか——人間の精神も身體も同

方則に由つて不死たるを得(二〇八三)——人の艱難苦痛を堪へ種々の事を爲すは不死を得んが爲めなり(二〇八三)——智慧、徳義、詩人の作、大立法家等凡て精神上の創作は人間身體上の子孫よりも遙かに美なり——具體美より抽象美に、個物美より一般美に、一般美より眞理及び美の宇宙に達すべし(二〇八六)——美に進むの順序(二〇八七)——形態の美——形態一般の美——制度法律の美——美の大海即ち學術の美——美を觀るや相關に非ずして絶對に觀、地球より天に上るべし——絶對美(二〇八九)——美の肖像に非ず實の美——ソークラテース語り終る(二〇九二)——戶外宴飲者及アルキピアデースの聲囁ゆ——大酩酊のアルキピアデース花冠及びリボンを戴き來りアガトーンを祝賀せん(二〇九二)——會衆一同アルキピアデースを歓迎す——アルキピアデース花冠をアガトーンに冠せしめんとす——アルキピアデース、ソークラテースの此席にあるを知りて驚く——アガトーンはソークラテースの愛人なりと云ふ——ソークラテース戯れてアガトーンと愛者愛人の關係なるを云ひアルキピアデースの嫉妬を恐る眞似す——アルキピアデース、アガトーンの花冠の一部を取りてソークラテースに冠せしむ——アルキピアデース飲酒をすむ——ソークラテースの大酒量(二〇九五)——

—アルキピアデース、エリユキシマッホスを擲擄す—アルキピアデースの所謂眞理—アルキピアデース、ソークラテースの讚美演説を始む—ソークラテースはセイレーノスの半身像の如し(二〇九八)—笛吹けるマルシヤスの如し—ソークラテースは笛を用ゐずたゞ言語を以つて人を感ぜしむ—雄辯の大家と雖ソークラテースに比する時は人を感動せしむるの力なし—ソークラテースの引力はセイレーンの如し—アルキピアデースの功名心はソークラテースの爲めに内心に苦しむ—ソークラテース美少年を好む(二一〇二)—ソークラテースの外面はセイレーノスの半身の像の如し内部には人を感^下ぜすばかりの美麗なる神體存す—アルキピアデース以爲らくソークラテースは自己の青年美に戀着せるものなりと—ソークラテースを招待す—ソークラテース戀愛に就いて一言も爲すなし—アルキピアデース如何にもしてソークラテースを口説き落さんと決心す(二一〇三)—再び招待す—ソークラテース、アルキピアデースの家に宿泊す—燈火は消されたりソークラテースとアルキピアデースとは寢室に二人のみ—アルキピアデース、ソークラテースを口説く—ソークラテース冷然として他を言ふ—ソークラテース自己の美はアルキピアデースの美よりも高尙なりとす—アルキピアデース成功せず—美も

ソークラテースを重んずるは月らう(二一〇九)——ソークラテースは戦時の耐忍力と宴席第一の
ヲテースの表はしたる驚くべき耐忍力——戦時の耐忍力と宴席第一の
歡喜力を有せる人(二一〇九)——ソークラテース終日終夜佇立して沈思冥
想す——ソークラテース、アルキビアデースの眞傷を助く其功ソークラテ
ースにあり賞譽はソークラテースに與へらるべきなり——ソークラテ
ース戦場の冷靜他に比すべきなし——ソークラテースは外面セイレーノス
にして内部は神なり(二一一三)——ソークラテース彼れの演説はアガト
ンとソークラテースとを離間せんとするものに外ならずと戯言す——ア
ガトーン席を轉じてソークラテースの傍に至らんと云ふ——他の宴飲者
の一團入り來り大混雜大酒となり或人々は歸宅す——ソークラテース尙
ほ大杯を廻はして終夜飲み續け劇に就いて論じ居たり——翌朝に至リソ
ークラテース辭してリムケイオンにて水浴して夕景に至つて家に歸りて
休む

明治三十六年十月廿一日印刷
 明治三十六年十月廿四日發行
 明治三十六年十一月廿六日第一回增刷
 明治三十七年一月十五日第二回增刷



發兌元

書肆

合資會社

富

山

房

長距離（電話本局）
 加入（一〇三六）

電報（ヤマフ）
 略號

譯述者
 發行所
 發行所
 印刷者
 印刷所

ブクトー全集第一卷奥付

定價金貳圓五拾錢

松本亦太郎

木村鷹太郎

東京市神田區喜神保町九番地

合資會社 富山房

同社長

坂本嘉治馬

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

仁科衛

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

厚信舍

プラトーン全集 第二卷

第二卷は第一卷に續出す

第二卷には「フアイドロス」篇及び「理想國」(十卷)「チマイオス」「クリチアス」の三段戯曲等を收む(紙數大約第一卷に同じ)

中は人間及び諸動物、下は地球に關する思想の記述にして、研究上最も愉快なるものなり。

●「クリチアス」篇は又た「チマイオス」篇に續づくものにのして、又た是れ一種の理想國論なりのクリチアスなる者古昔存したりとの傳説上の「アトラ

●「ク」島國の事を述べ、其國土の美麗なる記事、帝王及び人民等の事を云ひ、今は此島海底に沈落して存在せすと雖、古昔のアテーナイ人の時には尙ほ其島も其人もありしと云ふの愉快なる篇なり。

▲プラトーン全集第二卷は右の諸篇を收め、プラトーン中の最も研究に價值ある中心と云ふべきなり。若し紙數にして許るすならんには

●「ゴルギアス」篇をも第二卷中に入れんと欲す。是れソクラテースが「ソフィス

し、知識の實質内容の必要を云へるものなり。

第二卷は第一巻に續出

第一巻には「フアイドロス」篇及び「理想國」十卷「チャマイオス」クリチアアンの二篇戯曲等を收む。紅數大約第一巻に同じ。

● フアイドロス

「フアイドロス」はプラトーン著書中の不規則の美を有するものにして、イソップの「ソス」河邊の縁に於て蟬の聲を聴きつゝ、草上に横はりて、ソソクとして單に文字言語を弄するを以て、イソップの「ソス」哲學者曰く、天才、狂等を論じ、眞面目と滑稽との混せるものなり。靈魂が理想の美を仰ぎて天上に飛揚するの比喩、即ち所謂「プラトーン」の愛に對は實に本篇に有し、全集第一巻中の「宴會」篇及び「フアイドロン」篇等と姉妹篇たり。

● 理想國

「理想國」はプラトーン著書中最も有名にして、又た最も深く研究さるゝものなり。此篇はプラトーンの最も成熟し最も活動せる時期の思想を代表せるものにして十卷より成り、プラトーン中の最も滑稽なる書なり。是れプラトーン其理想を以つて國家を組織せんとする考案にして、國家と個人との關係、國家の爲すべき所、個人が如何に國家に従ふべきかを云ひ、飲食物の注意より、體操の必要、音樂教育の必要、新音樂に對する用心、衣服に對する意見、其他奢侈、節制論、快樂の適度、諸科の學問教育、社會貧富の關係等を論じ、第五卷の如きは男女同權を論じ、同一教育を云ひ、裸體主義を唱へ、男女同様に體育を爲し、國家の防衛を爲し、兵役に服すべしと云ひ、進みて女子共有説を爲し、國家の首長其配合を司どり、智にして勇ある男子は美女を得しめ、又は多く女子に接するを得しめ、愚にして怯懦の輩は其特權なしとし。又た政體を謂ひて第一は王政、次に寡頭政治、次は平民政治及び壓制政治にして最下等の政體となし、平民政治の如きは、愚と野蠻とを以つて國家を支記せしむるものなりと云ふ。理想國

に於て王たる者は哲學者即ち眞善美を眞知せる者たるべしとなし。又た詩人は眞理を亂すものなるを以つて理想國より放逐すべしとなす。實にプラトーンの「理想國」は後代の諸理想國論者の嚆矢にして、聖アウグスティヌスも、トーマス・モーアも皆なプラトーンを眞似せしものに過ぎずして、其思想の人類にして、其見域の廣大なるは、到底後代の理想國或は「新社會論者等の及ぶ能はざる所なりとす。

● チマイオス

篇は「理想國」の續篇様のものにして、天地萬物の創造の歴史、人間心身の構造及び諸動物の創生等を論ず。要するに上は天而より中は人間及び諸動物、下は地球に關する思想の記述にして、研究上最も愉快なるものなり。

● クリチアス

篇は又た「チマイオス」篇に續つくものにして、又た是れ一種の理想國論なり。クリチアスなる者古昔存したりとの傳説上の「アトラシチ・ク」島國の事を述べ、其國土の美處なる記事、帝王及び人民等の事を云ひ、今は此島海底に沈落して存在せすと雖、古昔のアテーナイ人の時には尙ほ其島も其人もありしと云ふの愉快なる篇なり。

▲プラトーン全集第二卷は右の諸篇を收め、プラトーン中の最も研究に價値ある中心と云ふべきなり。若し紙數にして許すならんには

● ゴルギアス

篇をも第二卷中に入れんと欲す。是れソクラテースが「ソフィスト」の大先生ゴルギアスと正義及び修辭術を論じ、修辭家を嘲笑し、知識の實質内容の必要を云へるものなり。

文科大學長 文學博士 井上哲次郎先生著

日本古學派之哲學

洋裝菊版總クロース製
全一冊紙數七百五十餘頁
定價金壹圓六拾錢
郵稅金貳圓拾錢

要目

叙論○第一編山鹿素行○第二編伊藤仁齋及仁壽學派○伊藤仁齋中江岷山伊藤東涯○結論
並河天民一原双桂一原東岳○第三篇物徂徠及徂徠學派一物徂徠一太宰春臺○結論
工鏡さ日本陽明學派の哲學を著はし今又本書を公にせらる。記事精到、行文謹嚴、古學派の面目及
精神躍々紙上に飛動せんとす、前に近來快心の大著たるのみならず、又實に經世の大文字なり。其世
入心に裨益を與ふる固より尋常著書の比にあらざるを知るべし。世の教育に従事する者は勿論、凡
世教に志ある者、就中倫理の研究に志ある者は本書に山りて大に得る所あり。

日本陽明學派之哲學

洋裝菊版
全一冊紙數六百三十頁
定價金壹圓四拾錢
郵稅金拾六錢

要目

一篇中江藤樹及藤樹學派○二篇藤樹藩山以後の陽明學、子小、一齋、星嚴等○三篇
大鹽中齋及中齋學派○四篇中齋以後の陽明學派小楠、象山、南湖、松蔭、閑叟等

文學博士 中島力造先生著

洋裝菊版總クロース

列傳體 西洋哲學小史

哲學者肖像 數十入
全二册
●定價參閱郵稅不要

本書は西洋諸國に於ける古來有名の哲學者に哲學思想の變遷と其進路とを明確に指
就て其性行と學說とを平易に叙述し之に由て哲學思想の變遷と其進路とを明確に指
ものは、哲學專攷者たると教育家宗教家たるとを問はず、苟も西洋哲
學思想變遷の如何を究めんと欲するもの、讀まざるべからざる
ものなり

三版 通俗倫理談

全一册

●洋裝美本紙數五百頁定價金壹圓貳拾錢 小包料拾五錢

●本書は、即内文學博士が、最上四年間、就いて、中井も度、少年の爲めに物せらるる倫理談を、輯めて一
冊となせしもの也。自序に「一世の少年に於て、其の最も切なる所は、倫理の事なり」とあり。其の
これと世の倫理教育の事に従ふ人々、はた必ずや此一冊を讀み、其の時勢に適切なる所説によりて、裨益する所多
かるべきなり。

文藝學博士 坪内雄藏先生

目) 一 上篇 大いさの辯論 孔子とソクラテス 二 中篇 隨時少年訓 三 下篇 隨時少年訓 四 隨時少年訓 五 隨時少年訓 六 隨時少年訓 七 隨時少年訓 八 隨時少年訓 九 隨時少年訓 十 隨時少年訓 十一 隨時少年訓 十二 隨時少年訓 十三 隨時少年訓 十四 隨時少年訓 十五 隨時少年訓 十六 隨時少年訓 十七 隨時少年訓 十八 隨時少年訓 十九 隨時少年訓 二十 隨時少年訓 二十一 隨時少年訓 二十二 隨時少年訓 二十三 隨時少年訓 二十四 隨時少年訓 二十五 隨時少年訓 二十六 隨時少年訓 二十七 隨時少年訓 二十八 隨時少年訓 二十九 隨時少年訓 三十 隨時少年訓 三十一 隨時少年訓 三十二 隨時少年訓 三十三 隨時少年訓 三十四 隨時少年訓 三十五 隨時少年訓 三十六 隨時少年訓 三十七 隨時少年訓 三十八 隨時少年訓 三十九 隨時少年訓 四十 隨時少年訓 四十一 隨時少年訓 四十二 隨時少年訓 四十三 隨時少年訓 四十四 隨時少年訓 四十五 隨時少年訓 四十六 隨時少年訓 四十七 隨時少年訓 四十八 隨時少年訓 四十九 隨時少年訓 五十 隨時少年訓 五十一 隨時少年訓 五十二 隨時少年訓 五十三 隨時少年訓 五十四 隨時少年訓 五十五 隨時少年訓 五十六 隨時少年訓 五十七 隨時少年訓 五十八 隨時少年訓 五十九 隨時少年訓 六十 隨時少年訓 六十一 隨時少年訓 六十二 隨時少年訓 六十三 隨時少年訓 六十四 隨時少年訓 六十五 隨時少年訓 六十六 隨時少年訓 六十七 隨時少年訓 六十八 隨時少年訓 六十九 隨時少年訓 七十 隨時少年訓 七十一 隨時少年訓 七十二 隨時少年訓 七十三 隨時少年訓 七十四 隨時少年訓 七十五 隨時少年訓 七十六 隨時少年訓 七十七 隨時少年訓 七十八 隨時少年訓 七十九 隨時少年訓 八十 隨時少年訓 八十一 隨時少年訓 八十二 隨時少年訓 八十三 隨時少年訓 八十四 隨時少年訓 八十五 隨時少年訓 八十六 隨時少年訓 八十七 隨時少年訓 八十八 隨時少年訓 八十九 隨時少年訓 九十 隨時少年訓 九十一 隨時少年訓 九十二 隨時少年訓 九十三 隨時少年訓 九十四 隨時少年訓 九十五 隨時少年訓 九十六 隨時少年訓 九十七 隨時少年訓 九十八 隨時少年訓 九十九 隨時少年訓 一百 隨時少年訓

學思想變遷の如何を究めんと欲するもの、讀まざるべからざるものなり

三版

通俗倫理談

全一册

文學博士 坪内逍雄藏先生著

(次目)

●洋裝美本紙數五百頁定價金壹圓貳拾錢 小包料拾五錢

●本書は、坪内文學博士が、最近四年間に就いて、中學程度の少年の爲めに書かれたる倫理談を、編みて一冊となせるものなり。自序に曰く「世の少年が、倫理の事の上は何等かの益を得んが、著者の本懐なり」と。これこそ世の倫理教育の事に従ふ人々、はた必ずこれに採らるべきものなり。

上 加 大 通 倫 理 論 孔子と「クワテ」の理想と云ふ所の意義を解す ▲東京專門學校の學風 ▲武藝文藝

中 篇 隨 時 少 年 訓 導 第一回 人の三つの道具 ▲其の五、自主獨立の解 ▲其の三、男の三大別 ▲其の四、

倫 理 入 門 講 話 第一回 道の根は何 ▲第二回、善惡の標準 ▲第三回、善行の分析 ▲第四回、善の

條件と社交性 ▲第八回、正業 ▲修身奉公訓の表 下 加 馬 骨 人 言 に 序 ▲匿名の動機を

性的作用に基く善徳と惡徳 ▲修身奉公訓の表 下 加 馬 骨 人 言 に 序 ▲匿名の動機を

合を以てす ▲鳴鳳の是認せらるべき場合を以てす ▲馬骨人言 ▲帝國文學記者に與へて再びニクニエを論ずる書

文科大學長 文學博士井上哲次郎先生著

日本陽明學派之哲學

日本古學派之哲學

井上博士著。東洋大哲學史の礎を起されてより茲に年あり今や日本陽明學派及古學派の哲學を公にせらるる肥事精到、行文謹嚴、陽明學派並に古學派の面目及び精神躍々紙上に飛動せんとす。洵に近來快心の大著たるのみならず、又實に經世の大字なり。其世道人心に裨益を興ふる固より尋常著書の比にあらざるを知るべし。世の教育に従事する者は勿論、凡そ世教に志ある者、就中倫理の研究に志ある者は本書に由りて大に得る所あり。

文科大學長 井上哲次郎先生著

倫理と宗教との關係

菊判 全一冊

三版

世界的社會に於ける倫理と宗教との進

化發展上に一轉機を促さんとして本書出づ。
文學博士 坪内雄藏先生著

通俗倫理談

高評

菊判紙數五百餘頁全一冊
定價金壹圓貳拾錢郵税金十四錢

四版

何人にも行ひ易き何人も修養せざるべからざる倫理談を詳叙せるもの。

第四版

菊判紙數六百廿頁全一冊定價金壹圓四拾錢小包料拾五錢寫眞版數葉挿入
要目 一篇中江藤樹及藤樹學派○二篇藤樹藩山以後の陽明學、子平一齋、星嚴等○三篇大鹽中齋及中齋學派○四篇中齋以後の陽明學派小楠、象山、南洲、松蔭、閑叟等

第三版

菊判紙數七百五拾頁全一冊
定價金壹圓六拾錢小包料十五錢
要目 叙論○第一編山鹿素行○第二編伊藤仁齋及仁齋學派○伊藤仁齋中江岷山○伊藤東涯○並河天民○原双柱○原東房○第三編物徂徠及徂徠學派○物徂徠○大宰春臺○結論

文學博士 中島力造先生編述

西洋哲學小史

再版 菊判全二冊紙數一千頁西洋哲學者肖像四
十有餘寫眞版挿入定價金壹圓郵稅二十錢
本書は西洋諸國に於ける古來有名の哲學者に就て、其性行と學說とを平易に叙述し之に由りて哲學思想の變遷と其進路とを明確に指示せられたるもの也。

文學博士 元良勇次郎先生著

倫理學

增補 訂正 紙數六百餘頁 菊判全一冊定價金壹圓廿五錢小包料十五錢

博士が専心研究せられたる心理學を基本とし、傍ら東西諸大家の説を參照して從來の誤謬を正し、科學的に原理を説述せられ引例は博士直接の經驗に出づ立論詳密事實精嚴一も開然する所なきもの也

プラトーン全集

全五册(每册讀切)總紙數六千頁
 定價 金貳圓五拾錢
 第一卷發行部限特價金貳圓

▲偉大なる説、プラトーンの思想!! ▲プラトーンの思想は世界思想史の源泉也。▲プラトーンの思想は眞善美を綱羅したる大理想を以て天地萬象及び人事の秘奥を解釋せんとしたるものにして、プラトーンは宛然一個の小世界也。耶蘇の思想、佛敎の思想、文學科學の精神、殆ど世界に於ける凡ての思想を包有せざるはなし。▲歐米諸國に於ける所謂政治學も文學論も美術論も愛情論も教育法も皆殆どプラトーンに出でざるものなく、又かの所謂國家主義、社會主義、詩文學、論理學、言語學、修辭學、神祕學、實體學、倫理學、實驗主義、心理學等の發展を討ねれば、皆遠くプラトーンの思想を典據とせざるものなし。▲本書の性質斯の如し、是を以てプラトーン全集は殆んど世界の文明諸國に翻譯されざるはなし。然るに我が國今日に至るまで未だ此の書の翻譯あらざりしは、文明國としての大耻辱なりといはざるべからず。今や兩大家の手に依つて成りたる譯文を公刊するに至る。亦以て世界に對して國家の光榮と謂ふべし。譯文は不明簡潔、而も眞摯實實を旨とし、原著の一字一句をも苟もせず。實に木邦に於ける空前の大翻譯也。

文學博士 中島力造先生著 (再版)

輓近の倫理學書

菊判全一册
 定價 六拾五錢
 郵稅 八錢

同

倫理學說十回講義

菊判全一册
 定價 九拾錢
 郵稅 拾錢

文學博士 桑木嚴翼先生譯 (七版)

ヘツド倫理學

菊版全一册
 定價 八拾錢
 郵稅 八錢

哲學館講師中島德藏先生講述 (四版)

倫理學講義

菊版全一册
 定價 九拾錢
 郵稅 十二錢

山本良吉先生著 (三版)

倫理學史

菊判全一册
 定價 壹圓
 郵稅 拾錢

文學博士 中島力造先生譯 (再版)

ラツド氏認識論

菊判全一册
 定價 七拾錢
 郵稅 八錢

文學士 有馬祐政先生著 (再版)

日本倫理要論

菊判全一册
 定價 卅五錢
 郵稅 六錢

文學博士 蟹江義丸先生著

倫理叢話

菊判全一册
 定價 卅五錢
 郵稅 六錢

英國哲學博士 マツケンジ一氏原著
兵庫縣第二師範學校長野口援太郎先生譯述

倫理學精義

全一冊

三版 菊判洋裝紙數七百餘頁
定價金壹圓四拾錢 小包料十五錢

本書は高尚なる學說を平易親切に解明し、倫理學書として完全に近きもの此書の右に出づるものなしとて歐米の學界を擧げて無比の高評を得せり。譯文明暢、難解の字句には註解を施しあれば獨修用受験用並に師範中學教員の參考書として適切也。

文部省總務局御藏版 正價金拾圓

日本教育史資料

全九冊

附圖縱二尺六寸横一尺七寸石版刷十七葉
四六判二倍五號活字
二十四行五十三字詰紙數六千二百餘頁

購求申込期限十月三十一日限り

豫約金七圓九拾錢 小包料金九拾錢
期限後は一切發賣不仕候

日本教育史資料は、本邦教育史の資料として最も精確なる唯一絶好の參考書たるのみならず、各藩の歴史と關聯し、一般文學と關係する所多きを以て、史學家、文學者等にとりて、亦無二の珍籍たり。加之各地方に於ける從來の教育方針及氣質好尚の關係する所を察知すべき點に於いて、各府縣の小中學校、師範學校、實業諸學校等亦必ず一木を備へざるべからざる本邦最大の教育書也

文學博士 井上哲次郎先生著

巽軒論文集

初集四拾五錢
二集五拾五錢
郵稅各六錢

前群馬縣師範學校長 矢島錦藏先生著

倫理學講義

定價六拾錢
郵稅六錢

京都府師範學校教諭 原安馬先生著

校堂訓話

全一冊
定價廿五錢
郵稅四錢

文學博士 故西村茂樹先生著

再自識錄 全一冊正價
卅錢郵稅四錢

文學士 澤柳政太郎先生著

教育者の精神

菊判全一冊正價金廿錢 郵稅金四錢

文學博士 芳賀矢一先生著

國民性十論

近刊
本書は、國文學史上の事實を根據とし、國民の風俗、習慣、嗜好の變遷に着目して、日本國民の特質を平易明快に叙述せられたるもの也。

實驗新心理學

全二册

文學博士 元良勇次郎先生校閱 文學士 塚原政次先生譯述

文學博士 元良勇次郎先生講述

心理學十回講義

全一册 定價金七十五錢 郵税金六錢

文學博士 元良勇次郎先生合譯
ドクトル 中島 泰藏先生

トウシ **心理學概論**

全三册 定價各册五拾五錢 郵税金六錢

文學士 塚原政次先生抄譯

心理學講演

全一册 定價金五拾錢 郵税金六錢

文學士 尾田信忠先生譯 (四版)

初等心理學

全一册 定價金八十錢 郵税金八錢

文學博士 元良勇次郎先生校閱

兒童心理學

全一册 定價金廿五錢 郵税金六錢

山本 信行 先生著

倫理論 語抄

全二册 定價廿六錢 郵税金拾錢

關逸キルヒネル先生著
文學士 塚原政次先生譯

幾氏教育學

全一册 定價金九拾錢 郵税金拾錢

兒童研究

教育家も父母も必ず本誌を讀まざるべからず
心理倫理教育哲學を研究するもの亦本誌を讀ざるべからず

定價一部金拾錢六册前金五十七錢十二册前金一圓十錢郵稅一册一錢つゝ

法學士 有吉忠一先生著

小教育制度

全一册 定價金五拾錢 郵税金六錢

桑野 禮治先生譯述

習慣教育法

全一册 定價金廿五錢 郵税金十錢

文學博士 井上哲次郎先生著

巽軒論文三集

近日常發行
笹倉 新治先生著

興味論

全一册 定價廿錢 郵税金四錢

本書は現時教育の進運に資し品質修養の指針に供せむと企圖せられたるもの、教育並に修養に關して興味の眞價を攻究せむと欲する人士乞ふ一讀あれ。



終